一般国道159号鹿島バイパス改築工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

羽咋市

四柳白山下遺跡Ⅰ

2005

石川県教育委員会
㈶石川県埋蔵文化財センター

四柳白山下遺跡Ⅰ

2005

石川県教育委員会
㈶石川県埋蔵文化財センター

調査区遠景（南西から）

調査区全景（南から）

A・B地区全景（南東から）

C・D地区第0・I面全景（北西から）

D地区 2 次SE 1 内墨書板出土状況

D地区 2 次SE 1 出土 墨書板

A地区SD 4 出土 木履

B地区SB 1 ―P 2 出土 漆器

B地区整地土出土 鉄斧

D地区出土 漆器

D地区北端落ち込み出土 人形

例　言

1　本書は四柳白山下遺跡の発掘調査報告書である。

2　遺跡の所在地は羽咋市四柳町地内である。

3　調査原因は一般国道159号鹿島バイパス改築工事であり、同事業を所管する国土交通省北陸地方整備局金沢河川国道事務所（旧建設省金沢工事事務所）が、石川県教育委員会に発掘調査を依頼したものである。

4　調査は、平成６(1994)年度に社団法人石川県埋蔵文化財保存協会が石川県教育委員会から委託を受けて実施した。業務内容は現地調査、出土品整理である。また平成10(1998)年度～平成16(2004)年度に財団法人石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会から委託を受けて、出土品整理、報告書刊行を実施した。

5　調査に係る費用は、国土交通省が負担した。

6　現地調査は、平成６年度に実施した。期間・面積・担当課・担当者は、以下のとおりである。

期　間　平成６(1994)年４月12日～８月17日、同年10月５日～12月20日

面　積　5,800㎡

担当課　調査課調査第２係

担当者　川畑　誠（主任）、澤辺利明（調査員）

7　出土品整理は、平成10(1998)年度から平成12(2000)年度に企画部整理課が担当した。

8　木製品の樹種同定は株式会社パレオ・ラボに委託して行った。

9　報告書の刊行は、平成16(2004)年度に実施し、調査部調査第１課が担当した。執筆分担は下記のとおりである。編集は布尾和史が行った。

第１～４章	川畑　誠（石川県教育委員会文化財課文化財管理専門員）
第５章 第１節	澤辺利明（調査部調査第３課調査専門員）
第５章 第２節 3.第Ⅰ面 掘立柱建物跡	岩瀬由美（調査部調査第１課主任主事）
第５章 第２節 上記以外	川畑　誠
第６章 第１節	川畑　誠
第６章 第２節	布尾和史（調査部調査第１課主任主事）
第６章 第３節	岩瀬由美

10　調査には下記の機関・個人の協力を得た。

押水町教育委員会、国土交通省（旧建設省）、鳥屋町教育委員会、羽咋市教育委員会、今井淳一、牧山直樹、村井伸行、望月精司、谷内碩央、山口　勝（五十音順、敬称略）

11　調査に関する記録と出土品は石川県埋蔵文化財センターで保管している。

12　本書についての凡例は下記のとおりである。

(1) 方位は座標北であり、座標は国土交通省告示の旧平面直角座標第Ⅶ系に準拠した。

(2) 水平基準は海抜高（単位　m）であり、T.P.(東京湾平均海面標高）による。

(3) 出土遺物番号は挿図と写真で対応する。

(4) 遺物実測図については、観察表の表記を参照されたい。

(5) 引用参考文献は、本文末に一括して掲載した。

13　第５章第２節Ｄ地区には、平成７年度に実施した第２次調査の成果を一部使用している。第２次調査の経過等については次巻の『四柳白山下遺跡Ⅱ』に掲載予定である。

目　次

第１章　調査の経緯と経過 …… 1
第１節　調査に至る経緯と経過 …… 1
１．調査に至る経緯 …… 1
２．調査の経過 …… 2
第２節　出土品整理、報告書刊行の経過 …… 3

第２章　遺跡の位置と環境 …… 4
第１節　地理的環境 …… 4
第２節　歴史的環境 …… 5

第３章　調査の概要 …… 12
第１節　調査区割り …… 12
第２節　土層層序 …… 12

第４章　Ａ・Ｂ地区 …… 19
第１節　調査の概要 …… 19
第２節　Ｂ地区上層 …… 19
１．遺　構 …… 19
２．遺　物 …… 22
第３節　Ｂ地区中層 …… 28
１．遺　構 …… 28
２．遺　物 …… 33
第４節　Ａ・Ｂ地区下層 …… 42
１．掘立柱建物、整地土など …… 42
２．竪穴建物 …… 80
３．井　戸 …… 83
４．土　坑 …… 85
５．溝 …… 88
６．包含層出土遺物 …… 127

第５章　Ｃ・Ｄ地区 …… 179
第１節　Ｃ地区 …… 179
１．調査の概要 …… 179
２．第０面 …… 179
３．第Ⅰ面 …… 181
第２節　Ｄ地区 …… 213
１．調査の概要 …… 213
２．第０面 …… 213
３．第Ⅰ面 …… 217

第６章　まとめ …… 267
第１節　古代の土器について …… 267
第２節　Ａ・Ｂ地区の古代集落について …… 268
第３節　中　世 …… 274

引用参考文献 …… 277

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 4
第２図　周辺の地勢 …… 5
第３図　調査地区割り図(1/2,500) …… 7
第４図　周辺の遺跡(1/25,000) …… 8
第５図　第１次調査区割り図(1/750) …… 13
第６図　第１～７次調査の主な生活面の高さ …… 14
第７図　A・B地区西壁土層図(1/60) …… 15
第８図　B地区北東壁、南東壁土層図(1/60) …… 17
第９図　C・D地区調査区壁土層図(1/60) …… 18
第10図　B地区上層平面図１(1/80) …… 20
第11図　B地区上層平面図２(1/80) …… 21
第12図　B地区上層遺構図(1/60) …… 22
第13図　B地区上層包含層出土遺物実測図１(1/3) …… 23
第14図　B地区上層包含層出土遺物実測図２(1/3) …… 24
第15図　B地区上層包含層出土遺物実測図３(1/3) …… 25
第16図　B地区中層遺構配置図(1/150) …… 29
第17図　B地区中層平面図１(1/80) …… 30
第18図　B地区中層平面図２(1/80) …… 31
第19図　B地区中層平・断面図(1/60) …… 32
第20図　B地区中層出土遺物実測図１(1/3) …… 34
第21図　B地区中層出土遺物実測図２(1/3) …… 35
第22図　B地区中層出土遺物実測図３(1/3) …… 36
第23図　B地区中層出土遺物実測図４(1/3) …… 37
第24図　B地区上・中層出土木製品実測図(1/3・1/6) …… 38
第25図　B地区中層出土木製品実測図(1/3) …… 39
第26図　A・B地区平面図(1/400) …… 43
第27図　A・B地区主要遺構配置図１
(掘立・竪穴)(1/300) …… 44
第28図　A・B地区主要遺構配置図２
(溝・土坑)(1/300) …… 45
第29図　A地区整地土層辺実測図１(1/60) …… 47
第30図　A地区整地土層辺実測図２(1/60・1/160) …… 48
第31図　A・B地区掘立柱建物実測図１(1/80) …… 51
第32図　A・B地区掘立柱建物実測図２(1/80) …… 52
第33図　A・B地区掘立柱建物実測図３(1/80) …… 53
第34図　A・B地区掘立柱建物実測図４(1/80) …… 55
第35図　A・B地区掘立柱建物実測図５(1/80) …… 56
第36図　A・B地区掘立柱建物実測図６(1/80) …… 57
第37図　B地区K区以北整地土実測図(1/200・1/40) …… 59
第38図　A・B地区掘立柱建物実測図７(1/80) …… 62
第39図　A・B地区掘立柱建物実測図８(1/80) …… 63
第40図　A・B地区掘立柱建物実測図９(1/80) …… 64
第41図　A・B地区掘立柱建物実測図10(1/80) …… 65
第42図　A・B地区掘立柱建物実測図11(1/80) …… 66
第43図　A・B地区掘立柱建物実測図12(1/80) …… 67
第44図　A・B地区掘立柱建物実測図13(1/80) …… 68
第45図　A・B地区ピット出土遺物実測図１(1/3) …… 69
第46図　A・B地区ピット出土遺物実測図２(1/3) …… 70
第47図　B地区整地土出土遺物実測図(1/3) …… 71
第48図　A・B地区ピット出土遺物実測図３(1/3) …… 72
第49図　A・B地区ピット出土遺物実測図４(1/3) …… 73
第50図　A・B地区ピット出土遺物実測図５(1/3) …… 75
第51図　A・B地区ピット出土遺物実測図６(1/3) …… 76
第52図　A・B地区ピット出土木製品実測図１(1/3) …… 77
第53図　A・B地区ピット出土木製品実測図２(1/3) …… 78
第54図　A・B地区ピット出土木製品実測図３(1/6) …… 79
第55図　B地区SBT１実測図(1/40) …… 81
第56図　B地区SBT２・３実測図(1/40) …… 82
第57図　B地区SE１実測図(1/20) …… 84
第58図　B地区土坑実測図(1/60) …… 86
第59図　B地区竪穴建物他遺構出土遺物実測図(1/3) …… 87
第60図　B地区土坑出土遺物実測図(1/3) …… 88
第61図　B地区SE１側材実測図１(1/3・1/6) …… 89
第62図　B地区SE１側材実測図２(1/6) …… 90
第63図　B地区SE１側材実測図３(1/6) …… 91
第64図　A地区溝実測図(1/150・1/60) …… 93
第65図　A・B地区溝出土遺物実測図１(1/2) …… 94
第66図　A・B地区下層溝実測図１(1/60) …… 96
第67図　A・B地区下層溝実測図２(1/60) …… 97
第68図　A・B地区下層溝実測図３(1/60) …… 99
第69図　B地区溝実測図１(1/300・1/60) …… 106
第70図　B地区溝実測図２(1/60) …… 107
第71図　B地区溝実測図３(1/60) …… 108
第72図　A・B地区溝出土遺物実測図２(1/3) …… 109
第73図　A・B地区溝出土遺物実測図３(1/3) …… 110
第74図　A・B地区溝出土遺物実測図４(1/3・1/4) …… 111
第75図　A・B地区溝出土遺物実測図５(1/3) …… 112
第76図　A・B地区溝出土遺物実測図６(1/4・1/5) …… 113
第77図　A・B地区溝出土遺物実測図７(1/3) …… 114
第78図　A・B地区溝出土遺物実測図８(1/3) …… 115
第79図　A・B地区溝出土遺物実測図９(1/5) …… 116
第80図　A・B地区溝出土遺物実測図10(1/3) …… 117
第81図　A・B地区溝出土遺物実測図11(1/3) …… 118
第82図　A・B地区溝出土遺物実測図12(1/3) …… 119
第83図　A・B地区溝出土遺物実測図13(1/3) …… 120
第84図　A・B地区溝出土遺物実測図14(1/3) …… 121
第85図　A・B地区溝出土遺物実測図15(1/3) …… 122
第86図　A・B地区溝出土木製品実測図１(1/3・1/4) …… 123
第87図　A・B地区溝出土木製品実測図２(1/3・1/4) …… 124
第88図　A・B地区溝出土木製品実測図３(1/3・1/6) …… 125
第89図　A・B地区溝出土木製品実測図４(1/4) …… 126
第90図　A・B地区包含層出土遺物実測図１(1/3) …… 129
第91図　A・B地区包含層出土遺物実測図２(1/3) …… 130
第92図　A・B地区包含層出土遺物実測図３(1/3) …… 131
第93図　A・B地区包含層出土遺物実測図４(1/3) …… 133
第94図　A・B地区包含層出土遺物実測図５(1/3) …… 134
第95図　A・B地区包含層出土遺物実測図６(1/3) …… 136
第96図　A・B地区包含層出土遺物実測図７(1/3) …… 137
第97図　A・B地区包含層出土遺物実測図８(1/3) …… 140
第98図　A・B地区包含層出土遺物実測図９(1/3) …… 141
第99図　A・B地区包含層出土遺物実測図10(1/3) …… 143
第100図　A・B地区包含層出土遺物実測図11(1/3) …… 144
第101図　A・B地区包含層出土遺物実測図12(1/3) …… 145
第102図　A・B地区包含層出土遺物実測図13(1/3) …… 146
第103図　A・B地区包含層出土遺物実測図14(1/3) …… 147
第104図　A・B地区包含層出土遺物実測図15(1/3) …… 148

第105図 A・B地区包含層出土遺物実測図16(1/3) ……149
第106図 A・B地区包含層出土木製品実測図１(1/3) …150
第107図 重ね焼き、叩き目文の分類……162
第108図 A・B地区遺構平面図１(1/80)……166
第109図 A・B地区遺構平面図２(1/80)……167
第110図 A・B地区遺構平面図３(1/80)……168
第111図 A・B地区遺構平面図４(1/80)……169
第112図 A・B地区遺構平面図５(1/80)……170
第113図 A・B地区遺構平面図６(1/80)……171
第114図 A・B地区遺構平面図７(1/80)……172
第115図 A・B地区遺構平面図８(1/80)……173
第116図 A・B地区遺構平面図９(1/80)……174
第117図 A・B地区遺構平面図10(1/80)……175
第118図 A・B地区遺構平面図11(1/80)……176
第119図 A・B地区遺構平面図12(1/80)……177
第120図 A・B地区遺構平面図13(1/80)……178
第121図 C・D地区第０・Ⅰ面平面図(1/400)……180
第122図 C地区第Ⅰ面主要遺構配置図(1/200)……182
第123図 C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図１(1/80) ……184
第124図 C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図２(1/80) ……185
第125図 C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図３(1/80) ……186
第126図 C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図４(1/80) ……187
第127図 C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図５(1/80) ……188
第128図 C地区第Ⅰ面SE１・４実測図(1/20) ……189
第129図 C地区第Ⅰ面SE２実測図(1/20)……190
第130図 C地区第Ⅰ面SE３実測図(1/20)……191
第131図 C地区第Ⅰ面SK実測図(1/60) ……194
第132図 C地区第Ⅰ面SD２・３・５実測図(1/80)……196
第133図 C地区第０面西隅溝群、
第Ⅰ面SD４・６・７実測図(1/80)……197
第134図 C地区第Ⅰ面ピット実測図(1/60・1/30)……198
第135図 C地区第Ⅰ面ピット・SE出土遺物
実測図(1/3・1/1)……199
第136図 C地区第Ⅰ面SK・SD・
北側落ち込み出土遺物実測図(1/3)……200
第137図 C地区第Ⅰ面包含層・
暗渠排水出土遺物実測図(1/3)……201
第138図 C地区第Ⅰ面ピット・
井戸出土木製品実測図(1/6)……202
第139図 C地区遺構平面図１(1/80) ……205
第140図 C地区遺構平面図２(1/80) ……206
第141図 C地区遺構平面図３(1/80) ……207
第142図 C地区遺構平面図４(1/80) ……208
第143図 C地区遺構平面図５(1/80) ……209
第144図 C地区遺構平面図６(1/80) ……210
第145図 C地区遺構平面図７(1/80) ……211
第146図 C地区遺構平面図８(1/80) ……212
第147図 D地区第０面遺構配置図(1/250)……214
第148図 D地区第０面遺構図(1/60) ……214
第149図 D地区第１面遺構配置図(1/200)……215
第150図 D地区第１面掘立柱建物配置図(1/200)……216
第151図 D地区第１面掘立柱建物実測図１(1/80) ……219
第152図 D地区第１面掘立柱建物実測図２(1/80) ……220
第153図 D地区第１面掘立柱建物実測図３(1/80) ……221
第154図 D地区第１面掘立柱建物実測図４(1/80) ……222
第155図 D地区第１面掘立柱建物実測図５(1/80) ……223
第156図 D地区第１面掘立柱建物実測図６(1/80) ……224
第157図 D地区第１面掘立柱建物実測図７(1/80) ……225
第158図 D地区第１面ピット土層断面図１(1/60) ……226
第159図 D地区第１面ピット土層断面図２(1/60) ……227
第160図 D地区第１面井戸実測図１(1/20) ……231
第161図 D地区第１面井戸実測図２(1/20) ……232
第162図 D地区第１面井戸実測図３(1/20) ……233
第163図 D地区第１面２次竪穴状遺構
実測図(1/40) ……234
第164図 D地区第Ⅰ面土坑実測図(1/60) ……235
第165図 D地区第Ⅰ面溝・落ち込み実測図(1/60)……237
第166図 D地区第０面溝・第Ⅰ面掘立柱建物・ピット
出土遺物実測図(1/3)……239
第167図 D地区第Ⅰ面ピット出土遺物
実測図１(1/3)……240
第168図 D地区第Ⅰ面ピット出土遺物
実測図２(1/3)……241
第169図 D地区第０面溝・第Ⅰ面掘立柱建物出土
木製品実測図(1/3・1/6・1/12) ……242
第170図 D地区第Ⅰ面ピット出土木製品
実測図１(1/3・1/6)……243
第171図 D地区第Ⅰ面ピット出土木製品
実測図２(1/6・1/12) ……244
第172図 D地区第Ⅰ面ピット出土木製品
実測図３(1/6)……245
第173図 D地区第Ⅰ面井戸・土坑・溝出土遺物
実測図(1/3)……246
第174図 D地区第Ⅰ面北端落ち込み・包含層出土遺物
実測図(1/3)……247
第175図 D地区第０・Ⅰ面包含層出土遺物
実測図１(1/3)……248
第176図 D地区第０・Ⅰ面包含層出土遺物
実測図２(1/3)……249
第177図 D地区第０・Ⅰ面包含層出土遺物
実測図３(1/3・1/2)……250
第178図 D地区第Ⅰ面井戸・溝出土木製品
実測図(1/3・1/4・1/6)……251
第179図 D地区第Ⅰ面溝・北端落ち込み・包含層
出土木製品実測図(1/3・1/6)……252
第180図 第１次調査D地区遺構平面図１(1/80) ……256
第181図 第１次調査D地区遺構平面図２(1/80) ……257
第182図 第１次調査D地区遺構平面図３(1/80) ……258
第183図 第１次調査D地区遺構平面図４(1/80) ……259
第184図 第１次調査D地区遺構平面図５(1/80) ……260
第185図 第１次調査D地区遺構平面図６(1/80) ……261
第186図 第１次調査D地区遺構平面図７(1/80) ……262
第187図 第２次調査D地区遺構平面図１(1/80) ……263
第188図 第２次調査D地区遺構平面図２(1/80) ……264
第189図 第２次調査D地区遺構平面図３(1/80) ……265
第190図 第２次調査D地区遺構平面図４(1/80) ……266
第191図 集落の変遷案(1/600)……273
第192図 C・D地区第Ⅰ面掘立柱建物・井戸
配置図(1/600)……274

表 目 次

第１表　各年度の調査概要 …… 2
第２表　四柳白山下遺跡周辺の主な発掘調査 …… 7
第３表　周辺の遺跡一覧表 …… 9
第４表　主な調査面との対応関係 …… 12
第５表　第１次調査Ｂ地区上層包含層出土遺物観察表 …… 27
第６表　第１次調査Ｂ地区上層出土木製品観察表…… 40
第７表　第１次調査Ｂ地区中層出土遺物観察表…… 40
第８表　第１次調査Ｂ地区中層出土木製品観察表…… 41
第９表　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物規模一覧 …… 46
第10表　Ａ地区区画溝群規模一覧 …… 95
第11表　土器胎土の分類 ……151
第12表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表１…152
第13表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表２…153
第14表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表３…154
第15表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表４…155
第16表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表５…156
第17表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表６…157
第18表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表７…158
第19表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表８…159
第20表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表９…160
第21表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表10…161
第22表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表11…162
第23表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層掘立柱建物・柱穴出土木製品観察表 ……163
第24表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層井戸側材他観察表…164
第25表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層包含層出土木製品観察表 ……164
第26表　第１次調査Ａ・Ｂ地区下層溝出土木製品観察表 ……165
第27表　第１次調査Ｃ地区第Ⅰ面出土遺物観察表 ……203
第28表　第１次調査Ｃ地区第Ⅰ面出土木製品観察表 …204
第29表　第１次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面ピット一覧表１…228
第30表　第１次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面ピット一覧表２…229
第31表　第２次調査Ｄ地区第Ⅰ面ピット一覧表１ ……229
第32表　第２次調査Ｄ地区第Ⅰ面ピット一覧表２ ……230
第33表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面出土遺物観察表１ ……252
第34表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面出土遺物観察表２ ……253
第35表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面出土遺物観察表３ ……254
第36表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ⅰ面出土木製品観察表 ……255
第37表　Ａ・Ｂ地区出土文字資料一覧……268
第38表　掘立柱建物跡の面積と主軸方向 ……270
第39表　Ａ・Ｂ地区古代集落跡遺構群の重複関係と変遷案 ……271
第40表　Ｃ・Ｄ地区中世陶磁器集計表……275
第41表　主要遺跡陶磁器組成 ……275

図 版 目 次

図版１　Ａ・Ｂ地区完掘状況、Ａ地区完掘状況
図版２　Ｂ地区完掘状況、Ａ地区拡張区完掘状況
図版３　Ｂ地区上層完掘状況、Ａ・Ｂ地区調査前風景、Ａ・Ｂ地区表土除去終了風景、発掘調査作業風景、Ｂ地区上層遺構掘り下げ作業風景
図版４　Ｂ地区中層完掘状況、Ｂ地区上層ＳＫ１・２完掘状況、Ｂ地区上層ＳＫ２完掘状況、Ｂ地区中層遺構検出状況、Ｂ地区中層遺構検出状況
図版５　Ｂ地区中層確認作業風景（南から）、Ｂ地区中層ＳＤ１、ＳＫ３完掘状況（南から）、Ｂ地区中層ＳＤ１完掘状況（北から）、Ｂ地区中層ＳＤ１、ＳＫ４完掘状況（西から）、Ｂ地区中層ＳＤ５完掘状況（西から）、Ｂ地区中層ＳＤ５掘り下げ作業風景（北東から）、Ｂ地区中層ＳＤ５墨書土器「榎野一」出土状況（南から）、Ｂ地区中層ＳＤ10～13周辺完掘状況（東から）
図版６　Ａ地区完掘状況（北から）、Ａ地区遺構検出状況（南から）、Ｂ地区遺構検出状況（北から）、Ａ地区拡張区遺構検出作業風景（南東から）、Ａ地区拡張区遺構検出状況（南から）
図版７　Ｂ地区完掘状況（南から）、Ｂ地区北東側完掘状況（北西から）
図版８　Ａ地区ＳＢ１完掘状況（南東から）、Ａ地区ＳＢ１・４完掘状況（北西から）、Ａ地区整地土除去後ＳＢ１検出状況（南東から）、Ａ地区ＳＢ１柱穴Ｐ１土器出土状況（東から）、Ａ地区ＳＢ１柱穴Ｐ２円礫出土状況（東から）、Ａ地区ＳＢ１柱穴Ｐ２漆器椀出土状況（東から）、Ａ地区ＳＢ３柱穴Ｐ11柱根出土状況（東から）、Ａ地区ＳＢ３完掘状況（北西から）
図版９　Ａ地区ＳＢ４・５、ＳＤ１・４完掘状況（北東から）、Ａ地区ＳＢ５・６、ＳＤ36周辺完掘状況（北西から）、Ａ地区ＳＢ９、ＳＤ２・36完掘状況（南東から）、Ａ地区拡張区ＳＢ10周辺完掘状況（北から）、Ｂ地区ＳＢ12完掘状況（南東から）
図版10　Ｂ地区ＳＢ14完掘状況（北西から）、Ｂ地区ＳＢ16、ＳＤ25完掘状況（南東から）
図版11　Ｂ地区ＳＢ20・21、ＳＢＴ２完掘状況（東から）、Ｂ地区ＳＢ22～24完掘状況（北西から）
図版12　Ｂ地区ＳＥ１掘り下げ状況（南から）、Ａ地区整地土掘り下げ状況（東から）、Ｂ地区整地土掘り下げ作業風景（北西から）、Ｂ地区整地土中鉄斧出土状況（北から）、Ｂ地区ＳＥ１遺物出土状況（西から）
図版13　Ｂ地区ＳＢＴ１床面検出状況（北西から）、Ｂ地区ＳＢＴ１床面取りはずし後状況（東から）、Ｂ地区ＳＢＴ１完掘状況（東から）、Ｂ地区ＳＢＴ２床面検出状況（北東から）、Ｂ地区ＳＢＴ２・３完掘状況（北東から）、Ｂ地区ＳＫ１遺物出土状況（西から）、Ｂ地区ＳＫ１完掘状況（東から）、Ｂ地区ＳＫ８完掘状況（北から）

図版14　A地区SD１・４・36周辺完掘状況（南東から）、A地区SD１完掘状況（西から）、A地区SD１和同開珎出土状況（東から）、A地区SD１墨書土器「小庭」出土状況（南から）、A地区SD４木履出土状況（西から）

図版15　A地区SD５・９～20完掘状況（西から）、B地区SD16・21・23検出状況（南東から）、B地区SD16・21・23掘り下げ作業（L-７区。南東から）、B地区SD16・21・23完掘状況（北から）、B地区SD16・21・23北半部完掘状況（南東から）

図版16　B地区SD20・23完掘状況（南東から）、B地区SD21土層、B地区SD23土層、B地区SD20・23完掘状況（南西から）、B地区SD27・28周辺完掘状況（南から）

図版17　B地区SD15・18・28周辺完掘状況（東から）、B地区SD15遺物出土状況（北東から）、B地区SD28土層断面（北から）、A地区拡張区SD54～56完掘状況（北西から）、A地区拡張区SD54・55土層断面（北から）

図版18　A・B地区出土遺物１

図版19　A・B地区出土遺物２

図版20　A・B地区出土遺物３

図版21　A・B地区出土遺物４

図版22　A・B地区出土遺物５

図版23　A・B地区出土遺物６

図版24　A・B地区出土遺物７

図版25　A・B地区出土遺物８

図版26　A・B地区出土遺物９

図版27　A・B地区出土遺物10

図版28　A・B地区出土遺物11

図版29　A・B地区出土遺物12

図版30　A・B地区出土遺物13

図版31　A・B地区出土墨書土器１

図版32　A・B地区出土墨書土器２

図版33　A・B地区出土墨書土器３

図版34　A・B地区出土墨書土器４

図版35　C・D地区遠景（北から）、C・D地区遠景（南西から）

図版36　C・D地区全景（北東から）、C・D地区全景（北西から）

図版37　C・D地区完掘状況（俯瞰）

図版38　C地区西半完掘状況（南東から）、C地区東半完掘状況（南から）

図版39　C地区SB２・４周辺完掘状況（北から）、C・D地区調査前風景、C地区西隅遺構検出作業、C地区SK１・P９完掘状況（北東から）、C地区SK８完掘状況（南東から）

図版40　C地区SE１検出状況（北西から）、C地区SE１完掘状況（北東から）

図版41　C地区SE２検出、SK６完掘状況（北西から）、C地区SE２完掘状況（北西から）

図版42　C地区SE３完掘状況（北東から）、C地区SE３検出状況（南東から）、C地区SE３土層断面（東から）、C地区SE４検出状況（北から）、C地区SE４底曲物検出状況

図版43　C地区SE４完掘状況（北西から）、C地区SD２完掘状況（北西から）

図版44　C地区SD４・６完掘状況（北から）、C地区西隅溝群完掘状況（西から）

図版45　C地区SD３土層P断面（東から）、C地区SD４土層Q断面（南西から）、C地区SD６土層A A断面（南から）、C地区P１土師皿出土状況（北東から）、C地区P２土層断面（北から）、C地区P９柱根出土状況（南東から）、C地区P17柱根・礫検出状況（南から）、C地区P26完掘状況（北西から）

図版46　C地区P21礫検出状況（南東から）、C地区P21礫除去後（南東から）、C地区P39土師皿出土状況（北から）、C地区P41土層断面（東から）、C地区P49柱根検出状況（東から）、C地区P50柱根検出状況（東から）、C地区調査区北東壁西端土層断面（西から）、C地区調査区北東壁中央土層断面（西から）

図版47　C地区出土遺物１

図版48　C地区出土遺物２

図版49　D地区第０・Ⅰ面H・I-15・16区完掘状況（南から）、D地区第０・Ⅰ面H・I-15・16区完掘状況（西から）

図版50　D地区第０・Ⅰ面H・I-16区完掘状況（東から）、D地区第０・Ⅰ面H-15区周辺完掘状況（北から）

図版51　D地区第Ⅰ面完掘状況（北から）、D地区第Ⅰ面遺構検出状況（北から）

図版52　D地区第０面完掘状況（北から）、D地区第０面完掘状況（北から）、D地区第０・Ⅰ面遺構検出状況（東から）、D地区SB３-１次P８周辺完掘状況（北から）、D地区SB４-１次P70柱根検出状況（南西から）、D地区SB４-１次P41・35柱根検出状況（西から）、D地区SB４-１次P14断面（北から）、D地区SB６-１次P67断面（南から）

図版53　D地区SB８・９・11周辺完掘状況（北から）、D地区SB８・９・11周辺完掘状況（東から）

図版54　D地区SB11周辺完掘状況（北から）、D地区１次P59断面（北西から）、D地区発掘作業風景、D地区発掘作業風景、D地区１次SE１断面（東から）

図版55　D地区１次SE1（西から）、D地区２次SE１（東から）

図版56　D地区２次SE１（西から）、D地区２次SE１墨書板出土状況（南西から）

図版57　D地区２次SE１（東から）、D地区２次SE２・竪穴状遺構２断面（東から）、D地区２次SE２（南から）、D地区２次SE２（北から）、D地区２次SE２・竪穴状遺構２（東から）

図版58　D地区１次SK１周辺完掘状況（北から）、D地区２次竪穴状遺構１（南から）、D地区１次SK２（南東から）、D地区発掘作業風景、D地区２次SK３漆器皿出土状況

図版59　D地区１次SD１周辺完掘状況（東から）、D地区１次SD１漆器椀出土状況、D地区１次SD１遺物出土状況、D地区1次SD２（北から）、D地区２次北端落ち込み人形出土状況

図版60　D地区出土遺物１

図版61　D地区出土遺物２

図版62　D地区出土遺物３

図版63　D地区出土遺物４

図版64　D地区出土遺物５

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯と経過

１．調査に至る経緯

四柳白山下遺跡に係る発掘調査は、一般国道159号鹿島バイパス改築工事に伴う緊急発掘調査である。一般国道159号線は、七尾市を起点とし羽咋市、津幡町などを経て金沢市に至る延長約70㎞の主要幹線道路で、県都と中能登を結ぶ大動脈の役割を担っている。そのうち鹿島バイパスは、昭和48(1973)年度に七尾市八幡町から羽咋市四柳町（延長約13.3㎞）の慢性的な交通渋滞の解消を目指して事業化された。それに伴い、昭和48年度に建設省（現、国土交通省）から石川県教育委員会文化室に埋蔵文化財の所在について照会に始まり、中能登町地内の10ケ所の遺跡で発掘調査が実施されている。

本遺跡は、昭和23(1948)年の耕地整理の際に地元住民の手により古代の須恵器などが採集されていたものの、遺跡としては周知されていなかった。遺跡の認定は、平成元(1989)年度に羽咋市教育委員会が同市四柳地内で鹿島バイパスに伴う個人住宅などの移転計画に対して埋蔵文化財の確認調査を実施、奈良時代を中心とする遺跡の広がりを確認したことにはじまる。鹿島バイパス用地内については、昭和62年10月26日付け建北金二調第864号で建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長（当時）より石川県立埋蔵文化財センターに分布調査依頼があった。それを受けて、平成元(1989年)年３月８～11日に石川県立埋蔵文化財センターが、事業区域内延長約800ｍに対して重機による分布調査を実施し、大町Ａ遺跡など４遺跡の存在を確認した。うち四柳白山下遺跡については、延長約350ｍを測る区間で中世および奈良～平安時代の遺物包含層を２層確認し、仮称遺跡名「四柳宮の越遺跡・四柳やちだ遺跡」として約12,000㎡が調査対象となる旨、　平成元年３月24日付け埋文第205号で回答をおこなっている。なお、この仮称遺跡名「四柳宮の腰遺跡・四柳やちだ遺跡」は、隣接する既存の集落遺跡名を仮名称として回答したものである。

分布調査の結果を受けて、発掘調査は平成６(1994)年度以降の２ケ年で終了する計画が策定された。発掘調査は平成６(1994)年４月11日付け建北金二調第297号で建設省北陸地方建設局金沢工事事務所長より石川県教育委員会教育長宛に対象面積6,000㎡の発掘調査依頼が、それを受けて同日付け埋文第132号で石川県教育委員会教育長より社団法人石川県埋蔵文化財保存協会理事長宛に対象面積6,000㎡の発掘調査依頼が、それぞれなされている。また遺跡の名称は、羽咋市教育委員会より教示を受けた調査区周辺の小字名「白山下」を参考とし、「四柳やちだ遺跡（県遺跡番号07112）」「四柳宮の腰古銭遺跡（同07118）」とは異なる、新規の集落遺跡「四柳白山下遺跡（県遺跡番号07117）」とした。

発掘調査は、平成６(1994)年４月12日より着手している。その後、９月末までに一般国道159号荻市歩道設置工事に係る宝達志水町荻市地内に所在する荻市遺跡（対象面積約200㎡）の発掘調査が必要となり、協議の結果、本遺跡の発掘調査を約１ケ月間中断することとなった。また当初同一面に存在すると考えられた古代の生活面が部分的に数面存在することが判明した。そのため発掘調査面積は延べ5,800㎡に減少するとともに、調査範囲を縮小し、その部分は次年度以降に調査することとなった。

なお平成７(1995)年度以降の発掘調査では、石動山系から流出する小河川の度重なる氾濫に埋まる縄文時代～近世に至る集落・耕作地が良好に残存することが明らかとなり、結果として平成12(2000)年までの足かけ７年間、延べ発掘調査面積45,900㎡におよぶ調査となった。

各調査年度の調査箇所・面積などは、第１・２表、第３図を参照されたい。

調査次数	調査年度	調査地区	調査面積(㎡)	調査主体	主な時代
第１次	平成６(1994)	Ａ～Ｄ地区	5,800	㈶石川県埋蔵文化財保存協会	奈良～平安前期、中世
第２次	平成７(1995)	Ｃ～Ｅ地区	8,400		弥生～古墳、奈良～平安前期、中世
第３次	平成８(1996)	Ｄ、Ｆ地区	6,200		縄文、弥生～古墳、飛鳥～平安前期、平安中期、中世
第４次	平成９(1997)	Ｆ、Ｇ地区	5,200		縄文、弥生～古墳、平安、中世～近世
第５次	平成10(1998)	Ｇ、Ｈ地区	7,900	㈶石川県埋蔵文化財センター	縄文、弥生、古墳、奈良～平安前期、平安中期、中世～近世
第６次	平成11(1999)	Ｉ、Ｊ地区	7,400		弥生～古墳、飛鳥・奈良、平安、中世～近世
第７次	平成12(2000)	Ｊ、Ｋ地区	5,000		弥生～古墳、飛鳥～奈良、平安、中世～近世

第１表　各年度の調査概要

２．調 査 の 経 過

第１次調査（現地調査）は、平成６(1994)年４月12日～同年８月17日および同年10月５日～12月20日に実施した。以下、調査日誌抄を記す。

４月12日～５月６日　プレハブ・電気設備設営、作業員募集等発掘調査準備作業。
５月９日～５月17日　重機による表土除去・搬出作業。５月16日より作業員による作業開始。
５月18日～５月26日　Ａ・Ｂ地区上・中層包含層・遺構掘削作業。
５月27日～６月１日　Ａ・Ｂ地区上・中層遺構図面作成作業。Ａ・Ｂ地区下層包含層掘削・遺構検出作業。
６月２日～６月15日　Ａ・Ｂ地区下層遺構検出作業。６月３日羽咋市内小学校社会科部会遺跡見学。
６月16日　ラジコン・ヘリによる遺構検出状況の航空写真撮影を実施。
６月17日～７月５日　Ａ地区下層遺構掘削作業を一時中断、図面作成作業を実施。Ｂ地区下層の遺構掘削作業、図面作成作業は継続。
７月６日～７月20日　Ａ地区下層遺構掘削作業を再開。Ｂ地区下層遺構掘削作業、図面作成作業は継続する。大量に出土する木製品に対応するため、７月15日より木製品の洗浄・パッキング作業を開始する。
７月21日～７月25日　Ａ・Ｂ地区下層に対し第１回ヘリコプターによる航空測量作業を実施。
７月26日～７月28日　Ｂ地区Ｊ・Ｋ-９・10区掘立柱建物周辺遺構掘削作業を継続。
７月31日　現地説明会開催。109名が参加。
８月１日～８月３日　図面作成作業を実施。
８月４日～８月17日　図面作成作業を継続するとともに重機によりＡ・Ｂ地区埋め戻し作業とＣ・Ｄ地区表土除去作業を実施。また作業員により出土遺物洗浄作業および調査区周辺の安全管理措置をおこなう。宝達志水町荻市遺跡発掘調査のため、一時本遺跡発掘調査作業を中断。
10月５日～10月11日　予定よりかなり遅れて、調査を再開する。Ｃ・Ｄ地区包含層掘削、遺構検出作業。予想より中・近世遺構の密度が高い。
10月12日～10月14日　Ｃ・Ｄ地区の遺構検出作業終了。Ｃ地区遺構掘削作業とともに、Ａ・Ｂ地区間の排水路部分（Ａ地区拡張区）の遺構検出作業をはじめる。
10月17日～10月27日　Ａ地区拡張区、Ｃ地区の遺構掘削作業。
10月28日　Ａ地区拡張区を完掘。写真撮影。
10月29日～11月２日　Ｃ地区完掘の後に図面作成作業。Ｄ地区遺構掘削開始。
11月４日～11月17日　Ｃ地区井戸など図面作成作業。Ｄ地区遺構掘削、図面作成作業。
11月18日～11月24日　Ｃ地区井戸など図面作成作業。Ｄ地区遺構掘削作業。
11月25日～11月29日　Ａ地区拡張区、Ｃ・Ｄ地区航空測量準備作業、29日に第２回航空測量作業を実施。

11月30日～12月９日	Ｃ・Ｄ地区図面作成作業、柱・井戸材など遺物取り上げ作業を続ける。
12月10日	第２回現地説明会開催。参加者37名。
12月11日～12月20日	発掘機材撤収作業。調査区埋め戻し作業などを実施し、12月20日に終了。出土遺物は、古代～近世の土器がパンケース84箱、木製品が同86箱となる。

第２節　出土品整理、報告書刊行の経過

出土品の整理作業は、㈶石川県埋蔵文化財センターが石川県教育委員会の委託を受けて、平成10(1998)年度より平成12(2000)年度に、また報告書の執筆、刊行については平成14・15・16年度に、調査部調査第１課が所管して実施した。

平成10(1998)年度

平成11年１月18日～３月31日に、出土土器84箱に対して記名・分類・接合作業を実施した。

平成11(1999)年度

平成11年４月１日～10月18日に、出土土器870点の実測および実測図トレース作業、出土土器30点の復元作業、金属・木・石製遺物の実測および実測図トレース作業120点を実施した。

平成12(2000)年度

平成12年11月10日～平成13年３月30日に、土器の実測・トレース129点、木製品の実測・トレース91点、遺構図のトレース200枚に加え、第２次発掘調査出土土器の記名・分類・接合を実施した。

平成14(2002)年度

報告書作成を行った。内容は原稿執筆、遺物の写真撮影、挿図、図版作成などである。

平成15(2003)年度

報告書作成を行った。内容は原稿執筆、遺物の写真撮影、挿図、図版作成などである。

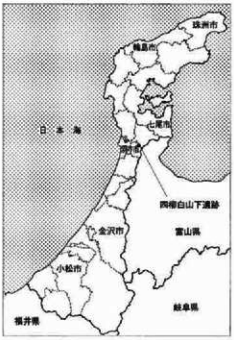
平成16(2004)年度

報告書を編集し、刊行した。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

四柳白山下遺跡は、石川県羽咋市四柳町地内に所在する。石川県は、北陸３県の中程に位置し、東は富山県、南東は岐阜県、南西は福井県にそれぞれ接し、北および北西は日本海に面する。県内は、平安時代前期に成立した能登・加賀二国の領域をほぼ踏襲した加賀・能登の２地域に分かれ、うち能登地域は県北西部にある日本海に大きく突出した能登半島を含んで、古くから日本海交流の重要な一つの拠点と考えられている。



第１図　遺跡の位置

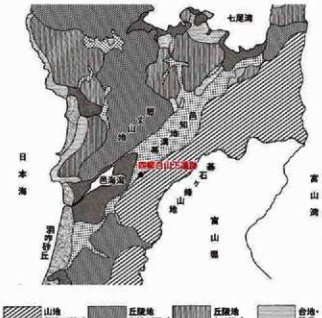
羽咋市は、この能登半島の基部西側に位置し、東西約10㎞、南北約12㎞、面積約77㎢を測る。人口は約３万人を数え、産業として農業、繊維産業の他、観光業、鉄鋼、金属製品、電子部品産業などが盛んである。

遺跡の所在する四柳町は市域北東端に位置し、北側で同市大町および鹿島郡中能登町小金森に接する。丘陵部にあたる東側から邑知潟へ向かうにつれ、標高を減じ、山林および畑地、旧内浦街道に沿って街村をなす集落域、水田と移行する。

次に、羽咋周辺の地形を概観する。第２図のように、東から碁石ヶ峰山地、邑知地溝帯、眉丈山地、羽咋砂丘が北東－南西方向に展行し、西側で日本海に接する。東側で富山県に接する碁石ヶ峰山地は、市域では標高400ｍ以下を測る丘陵性低山に分類でき、その山腹は急傾斜をなす。山地を形づくる土質が花崗岩・片麻岩などの粗い粒子の礫岩層（高畠礫岩層）であることにも起因し、県内でも有数の地滑り多発地帯となっている。

邑知地溝帯は、平行する２条の断層によって切断された土地が沈降してできた低地帯で、羽咋市－七尾市間をほぼ直線的に走る。幅約２～４㎞、長さ約30㎞を測る能登地域最大の帯状平野であり、豊かな穀倉地帯を形成している。地溝帯の北東部は、碁石ヶ峰山地を開析して流れる二ノ宮川、長曽川、久江川などの中小河川が運んだ土砂が堆積した小規模な複合扇状地であるのに対し、南西部は小規模な複合扇状地に加え、邑知潟を起因とする三角洲性低地が発達している。邑知潟は、縄文時代前期の縄文海進で入江状に入り込んだ海が海岸砂丘の発達により外海から隔絶された海跡湖で、周囲約14.5㎞、水面面積4.65㎢、最深部約1.4ｍを測る沼に近い様相を呈する。現在は、昭和23年(1948)～43年(1968)におこなわれた国営干拓事業により、放水路部分を除いて水田と化している。

このような地理的環境にある邑知地溝帯の集落遺跡には、共通するいくつかの特徴がみいだせる。まず集落遺跡は、碁石ヶ峰・眉丈山両山地の前縁に張り出した微高地と、それより続く複合小扇状地上の極めて狭い集落適地に、等高線に沿うように帯状に分布する点があげられる。すなわち、現在の集落域とほぼ重複する集落適地に、複数の時代の集落遺跡が継起的に営まれる特徴をもつ。本遺跡も、東側の急峻な山地より西側へ向けて舌状にのびる小規模な複合扇状地の扇端部（標高15～18ｍ）に、



第２図　周辺の地勢（「土地分類図17(石川県)」より作成）

縄文時代中期から近世初頭にいたる集落が継起的に形成される。また集落域を形成しない時代も、扇状地扇端部を中心に耕作地に利用されることが明らかとなった。同様な事例は、発掘調査が実施された四柳ミッコ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡、徳丸遺跡などで確認されている。これらの集落を支える基盤として、邑知潟が内水面漁業の場を、邑知潟より続く三角洲性低地が良好な耕作地を、また背後の山地が林業資源を提供したことは想像に難くない。

二つ目の特徴に、崩壊しやすい山地の土質と扇状地形を起因として、山地からの大規模な土石流災害を含む土砂の断続的な流入が、集落および耕作地の盛衰に大きく影響していたことがあげられる。本遺跡の７次にわたる発掘調査では、各時代の生活面間に土砂の急速な堆積を想定しえる無遺物層および河川跡を確認しており、堆積した土砂は、第３次調査の縄文時代中期の生活面と現在の生活面間で厚さ約４ｍに達する。

なお集落遺跡の存続に、古来より能登地域の中核である羽咋、七尾（鹿島）を最短距離で結ぶ陸上交通路や、邑知潟と中小河川を利用した水上交通のあり方も重要な視点といえる。本遺跡の場合、邑知潟を眼前に控えた水陸交通の結節点に近い微高地上に位置しており、長期にわたる遺跡の営みを支えた一因と考える。

第２節　歴史的環境

本遺跡の所在する邑知地溝帯は、県内でも有数の遺跡稠密地帯として知られる（第４図、第３表）。ただし、各時代の集落遺跡は、前節のとおり現在の集落域と重複し、かつ地中深く埋まっている場合が多く、資料の採集は断片的で、実態の解明は必ずしも進んでいない。

縄　文　時　代

遺跡は、両山地より続く丘陵緩斜面から扇状地上に点在する。前期では杉谷チャノバタケ遺跡（42 前期初頭）、高畠カンジダ遺跡（76 前期前葉）で断片的資料が確認されている。中期に入ると、碁石ヶ峰山地側で四柳貝塚（98）・四柳中の堂遺跡（99）、本遺跡Ｄ・Ｆ地区、藤井Ａ遺跡（70）、小田中寺屋敷遺跡（65）が、また邑知潟をはさんだ眉丈山地側で徳丸遺跡（22）、中大門川遺跡（７）などが確認できる。そのうち四柳貝塚、四柳中の堂遺跡、本遺跡Ｄ・Ｆ地区は、微妙な時期差を示しながら同一小河川流域に近接して立地する。うち四柳貝塚は、本遺跡の北東側約100ｍの舌状台地上（標高30～40ｍ）の四柳神社境内に立地、県立羽咋高等学校地歴部により東西約100ｍ、南北約50ｍの範囲に最大厚さ約20㎝を測るシジミの淡水貝塚の形成が明らかとなった。本貝塚は、土器片、磨製石斧、石鏃などが表面採集された四柳中の堂遺跡と密接な関係が指摘されており、石組炉をもつ竪穴建物２棟を検出した本遺跡Ｄ・Ｆ地区との関係も注目される。晩期では、洪水砂で埋没した河川を検出した

本遺跡Ｆ・Ｇ地区、石鏃、多量の輝石安山岩剥片の出土から作業場と考えられる曽祢Ｃ遺跡（81）、土器棺が出土した小金森ヘイナイメＢ遺跡（89）などを確認している。

弥　生　時　代

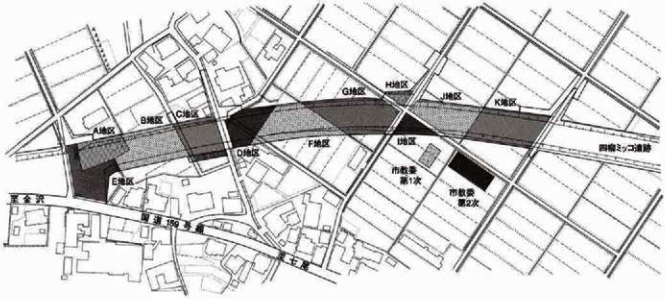
弥生文化は、県内でも早い段階に、邑知潟に面した地域へ波及・定着をみる。邑知潟南岸に位置する国指定史跡吉崎・次場遺跡で前期新段階に集落が成立し、その後も広域流通の一翼を担う中核的集落として存続していく。その要因としては、邑知潟に面した豊かな生活基盤と、海上交通の要衝という地理的側面が考えられている。中期後半には吉崎・次場遺跡に加え、断片的だが本遺跡Ｇ地区、曽祢Ｃ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡（45）など確認例が増加傾向を示す。続く弥生時代後期後半～末は、県内では湖沼や中小河川の流域を中心に短期存続型の集落数が急増する時期であり、その背後の水田経営の一画期ともなる。本遺跡は、調査区内の集落密度は低調に推移するものの、調査区東側の広範な範囲に集落が形成される。また近辺地域では四柳貝塚、小金森ヘイナイメＢ遺跡、平地式建物を確認した藤井サンジョガリ遺跡（74）・高畠カンジダ遺跡、谷内ブンガヤチ遺跡が存在する他、杉谷チャノバタケ遺跡で大規模な空堀をもつ後期後半の高地性集落が営まれる。

古　墳　時　代

碁石ヶ峰山地、眉丈山地でおびただしい数の古墳が築かれる。特に４世紀後半～５世紀前半には、対峙するように雨の宮１・２号墳（５　前方後方墳／前方後円墳、全長約70ｍ）、小田中親王塚古墳（63）・亀塚古墳（62　前方後方墳、全長約61ｍ）、杉谷ガメ塚古墳（43　前方後円墳、全長約60ｍ）、中能登町水白鍋山古墳などの大型の古墳が相次いで築造、これらは能登全域に影響力をもつ広域支配者の奥津城とされる。この政治的中心を反映する主要古墳群の築造は、５世紀後半以降に地溝帯両端の七尾市域と羽咋市域の臨海部に分岐して移動、６世紀以降は前者が優位性を保持すると考えられている。この２大勢力は国造本紀にある「能等国造」能登臣、「羽咋国造」羽咋公に対応し、阿倍引田臣比羅夫の率いる東北遠征に加わり斉明天皇６（660）年に戦死した能登臣馬身龍を経て、律令期につながる。

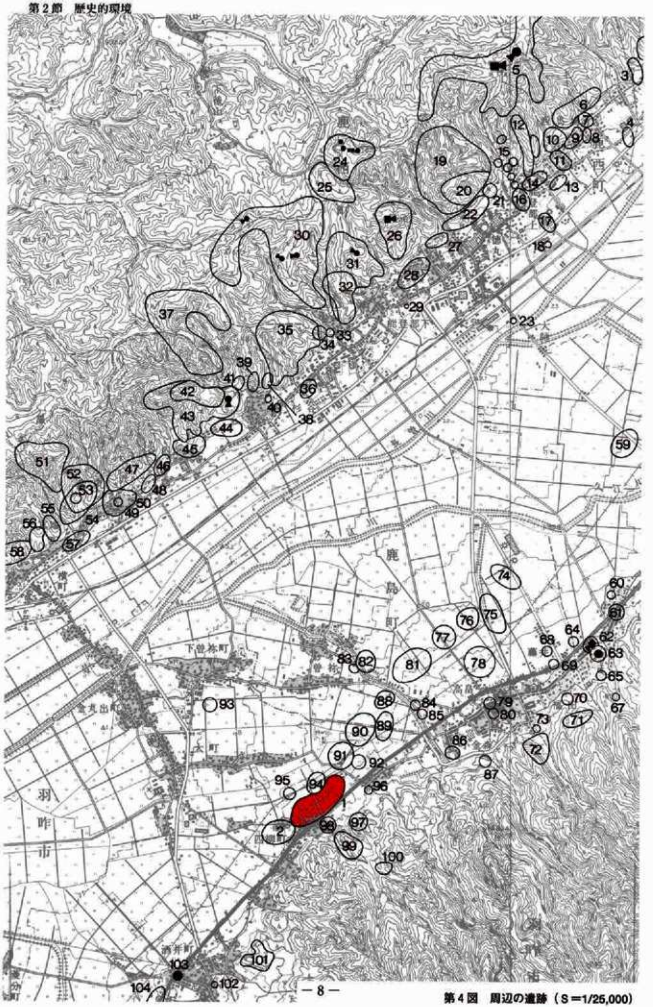
さて本遺跡近辺での古墳の築造は比較的低調といえる。曽禰１～３号墳（86）、高畠経塚古墳（80）の他、酒井古墳（103　円墳・横穴式石室）、酒井東古墳群（101）、大町横穴群（96　２基以上）、四柳横穴群（97　７基）など後期に属する古墳が点在するのみである。うち７世紀前葉の円墳である曽禰１号墳には金銅製双竜式環頭太刀・耳環などが、７世紀前後の径約10ｍの円墳である高畠経塚古墳には金銅製圭頭太刀・銅椀などが、それぞれ副葬されている。また本遺跡Ｆ地区で一辺約8.4ｍの「コの字」状にめぐる溝が存在、その評価に注目したい。

集落遺跡は、前期の高畠カタタ・スギモト遺跡（77）、大町ゴンジョガリ遺跡（90）、中期の四柳ミッコ遺跡（94）、７世紀前半代の曽祢Ｃ遺跡の他、高畠遺跡（78）などが知られている。発掘調査が実施された高畠カタタ・スギモト遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡では竪穴建物群を、四柳ミッコ遺跡では５世紀中葉頃の小鍛冶作業をおこなった竪穴建物群などを確認している。また曽祢Ｃ遺跡では計画的に配された掘立柱建物群を検出、曽禰古墳群と関連をもつ比較的上位の階層の居住地と考えられている。さらに本遺跡を含む鹿島バイパス改築工事に係る一連の発掘調査は、洪水土砂に覆われた小規模水田などの耕作地を多数検出している他、大町ゴンジョガリ遺跡で古墳時代後期に属する堅果類の水さらし場・祭祀痕跡など、集落域の縁辺部にある生産域の姿を明らかにしつつあり、大いに注目される事例となろう。なお、５世紀末以降に眉丈山地からのびる段丘・丘陵に羽咋窯跡群・鳥屋窯跡群が須恵器生産を開始しており、本遺跡もその供給を受ける。



第３図　調査地区割り図（Ｓ＝1/2,500）

第２表　四柳白山下遺跡周辺の主な発掘調査



第4図　周辺の遺跡（S＝1/25,000）

No.	北部録番号	遺跡名	所在地	時代	備考
1	07117	四柳石山下ノ遺跡	郡山市四柳町	奈良・平安	1990・91年市教委発掘調査。
2	07112	四柳中ちだ遺跡	郡山市四柳町	古墳	1958年耕地整理時収集。
3	32005	城跡ケセガ古墳群	中能登町城跡	古墳	円墳、６基確認。
4	36971	西馬場遺跡	中能登町西馬場	縄文	
5	36952	鹿の宮１号墳	中能登町能登部上	古墳	前方後方墳（全長70ｍ）２段築成、葺石。国指定史跡。
5	36952	鹿の宮２号墳	中能登町能登部上	古墳	前方後円墳（全長75ｍ）３段築成、葺石。国指定史跡。
5	36952	鹿の宮３～39号墳	中能登町能登部上	古墳	円墳33、方墳１、不明３。国指定史跡。
6	36976	西馬場１～５号墳	中能登町西馬場	古墳	円墳
7	36969	中入門山遺跡	中能登町西馬場	縄文～平安	
8	36968	泉前田遺跡	中能登町西馬場	平安	
9	36967	中入門遺跡	中能登町西馬場	古墳～中世	土師器採集。
10	36966	阿弥陀鉄遺跡	中能登町西馬場	中世	1989～90年金沢大学考古学研究室発掘調査。
11	36965	宮谷川遺跡	中能登町西馬場	古墳～平安	
12	36960	鹿の宮１～６号墳	中能登町能登部上	古墳	円墳
13	36964	西馬場散田遺跡	中能登町西馬場	古墳	
14	36962	宝ノ上北遺跡	中能登町能登部上	弥生～古墳	
15	36951	能登部上横穴墓	中能登町能登部上	古墳	
16	36956	能登部神社前遺跡	中能登町能登部上	弥生・古墳	
17	36955	能登部児童館前遺跡	中能登町能登部上	不詳	
18	36954	能登部北刀塚古墳	中能登町能登部上	古墳	鎧定地のみを残す。
19	36950	能丸城跡	中能登町能丸島	鎌倉	
20	36949	能丸古墳群	中能登町能丸	古墳	円墳６基以上。
21	36948	蓮光寺跡	中能登町能丸	鎌倉	
22	36947	能丸遺跡	中能登町能丸	縄文～中世	
23	36953	能登部冠塚古墳	中能登町能登部上	古墳	田仁親の一部を残す。
24	36945	ケンジガイ３号墳	中能登町能登部上	古墳	円墳５、方墳２。国指定史跡。
25	36944	柳谷内１～４号墳	中能登町能登部下	古墳	円墳
26	36943	蓮王山１～７号墳	中能登町能登部下	古墳	前方後方墳１、円墳３、方墳３。
27	36946	上出遺跡	中能登町能登部下	不詳	
28	36942	能登部小学校遺跡	中能登町能登部下	縄文～古墳	1989、90年市教委発掘調査。
29	36941	ウ入門東中屋	中能登町能登部下	不詳	
30	36938	天神１号墳	中能登町能登部下	古墳	１号墳・前方後円墳（全長68ｍ）、11号墳・帆立貝形前方後円墳（全長30ｍ）、12号墳・前方後円墳（全長30ｍ）、他13円墳。
31	36940	鷲山・丸山１～12号墳	中能登町能登部下	古墳	10号墳・前方後円墳（全長30ｍ）を除き、円墳。
32	36939	能登部城跡	中能登町能登部下	鎌倉	
33	36937	能登部上宮川遺跡	中能登町能登部下	縄文	
34	36935	能登部下遺跡	中能登町能登部下	縄文～古墳	
35	36934	能登部船場１～25号墳	中能登町能登部下	古墳	円墳（１号墳・径27ｍ、２号墳・径18ｍ、３号墳・径22ｍ）
36	36933	杉谷ヤサカ遺跡	中能登町金丸杉谷	不詳	
37	36929	杉谷谷古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	前方後方墳１基、円墳８基。
38	36932	杉谷遺跡	中能登町金丸杉谷	不詳	
39	36930	杉谷ＣＤ古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	円墳２基。
40	36931	杉谷ヒボン遺跡	中能登町金丸杉谷	不詳	
41	36927	金丸杉谷川遺跡	中能登町金丸杉谷	弥生	杉谷川より採集。
42	36928	杉谷チャノバタケ遺跡	中能登町金丸杉谷	縄文～近世	1987、88年県埋文センター発掘調査。
43	36928	杉谷Ａ古墳群	中能登町金丸杉谷	古墳	前方後円墳１基（杉谷オノ塚古墳、全長60ｍ）、円墳13基、方墳４基。1986～88年県埋文センター発掘調査。
44	36925	金丸杉谷遺跡	中能登町金丸杉谷	弥生～中世	1989年県埋文センター発掘調査。
45	36924	杉内ブンボヤチ遺跡	中能登町金丸古内	縄文～近世	1985～89、県埋文センター発掘調査。
46	36923	杉内ジンジョウ遺跡	中能登町金丸古内	奈良・平安	
47	36921	古内古墳群	中能登町金丸古内	古墳	円墳３基。
48	36922	武蔵砦	中能登町金丸武蔵	奈良・平安	
49	36919	巻脇合砦	中能登町金丸武蔵	鎌倉・室町	
50	36920	金丸地頭館跡	中能登町金丸武蔵	鎌倉	
51	36917	武入古墳群	中能登町金丸武蔵	古墳	円墳５基。

No.	北部録番号	遺跡名	所在地	時代	備考
52	36916	金丸城跡	中能登町金丸武蔵	鎌倉	
53	36915	仏性山六平寺跡	中能登町金丸武蔵	鎌倉	
54	36918	武田古墳群	中能登町金丸武蔵	古墳	円墳３基、方墳１基。
55	36913	金丸宮地１～３号墳	中能登町金丸宮地	古墳	円墳、町指定史跡。
56	36912	信部谷神像石横遺跡	中能登町金丸宮地	中世	
57	36914	金丸宮地遺跡	中能登町金丸宮地	古墳～奈良	
58	36911	正部谷Ｂ古墳群	中能登町金丸正部谷	古墳	円墳９基。
59	34042	久江ヤザミヤシャ遺跡	中能登町久江	平安・中世	1987年県埋文センター発掘調査。
60	34031	小田中領家遺跡	中能登町小田中	古墳	領家庄三郷宅地
61	34030	小田中国道３遺跡	中能登町小田中	弥生	耕地整理により発見。
62	34026	小田中亀塚古墳	中能登町小田中	古墳	前方後方墳（全長61ｍ、高８ｍ）、葺石あり。
63	34027	小田中展王塚古墳	中能登町小田中	古墳	円墳（横穴式形前方後円墳とする説あり）（径67ｍ、高15ｍ）、竪穴式石室、葺石、二段築成。
64	34025	小田中部田遺跡	中能登町小田中	縄文	国道建設により一部調査。旧「小田中国道Ａ遺跡」を改称。
65	34028	小田中寺屋敷遺跡	中能登町小田中	縄文中期	
66	34029	藤井古墳	中能登町藤井	古墳	円墳、横穴式石室、石室開墾。
68	34024	藤井Ｃ遺跡	中能登町藤井	古墳	耕地整理により発見。
69	34023	藤井Ｂ遺跡	中能登町藤井	弥生	
70	34022	藤井Ａ遺跡	中能登町藤井	縄文	
71	34021	藤井横穴墓	中能登町藤井	古墳	２基確認
72	34018	高島塚巻古遺跡	中能登町高島	鎌倉・室町	
73	34019	福田忠魂碑白地遺跡	中能登町福田	古墳	
74	34017	藤井サンジョ町遺跡	中能登町田仁藤井	弥生	平地式住居跡、銅立柱建物。1989年県埋文保存協会発掘調査。
75	34016	高島テラヲ遺跡	中能登町藤井高島	弥生～中世	銅立柱建物、土坑、溝。1989年県埋文保存協会発掘調査。
76	34015	高島カンジダ遺跡	中能登町藤井高島	縄文・弥生・中世	銅立柱建物、土坑、溝。1990年県埋文保存協会発掘調査。
77	34014	高島カタタ・スギモト遺跡	中能登町藤井・曽谷	古墳～中世	銅立柱建物、竪穴状遺構、土坑。1990年県埋文保存協会発掘調査。
78	34013	高島遺跡	中能登町高島	古墳	1960年、耕地整理により発見。
79	34012	高島弥生遺跡	中能登町高島	弥生	
80	34010	高島経塚古墳	中能登町高島	古墳	円墳（径10ｍ）横穴式石室。水口家新築の際発見。現広間字。
81	34005	曽谷Ｃ遺跡	中能登町曽谷	古墳	
82	34004	曽谷東切遺跡	中能登町曽谷	弥生	1959年、耕地整理により発見。旧「曽谷弥生遺跡」を改称。
83	34003	曽谷大坪遺跡	中能登町曽谷	弥生	1961年、耕地整理により発見。旧「曽谷遺跡（Ａ）」を改称。
84	34006	小金森広敷遺跡	中能登町小金森	鎌倉	耕地整理により出土。
85	34007	小金森宮田遺跡	中能登町小金森	古墳	耕地整理により発見。旧「曽神遺跡（Ｂ）」を改称。
86	34008	曽神１～３号墳	中能登町曽谷	古墳	円墳。
87	34009	高島ヲカッチ遺跡	中能登町高島	縄文	
88	34001	小金森ベイチイＡ遺跡	中能登町小金森	縄文	
89	07123	小金森ベイチイＢ遺跡	羽咋市大町・中能登町小金森	弥生・平安	中能登町小金森地内にまたがる。
90	07124	大町コンジョウ遺跡	羽咋市大町	古墳	
91	07121	大町ダイジンヅカ遺跡	羽咋市大町	中世	
92	07122	大町なった遺跡	羽咋市大町	不詳	
93	07125	大町ＣＤ遺跡	羽咋市大町	平安	
94	07119	四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町	弥生・古墳	
95	07118	四柳宮の横古墳遺跡	羽咋市四柳町	中世	
96	07120	大町横穴群	羽咋市大町上野	古墳	２基以上ありなる。
97	07116	四柳横穴群	羽咋市四柳町	古墳	7基よりなる。
98	07113	四柳只屋	羽咋市四柳町	縄文	
99	07114	四柳中の堂遺跡	羽咋市四柳町	縄文・古墳	
100	07115	四柳中住基跡	羽咋市四柳町	中世	
101	07111	酒井東古墳群	羽咋市酒井町	古墳	２基以上。
102	07110	酒井中住基跡	羽咋市酒井町	中世	
103	07109	酒井古墳	羽咋市酒井町	古墳	円墳、横穴式石室。
104	07037	酒井国道遺跡	羽咋市酒井町	古墳	道路工事中採集。

第３表　周辺の遺跡一覧表

奈良・平安時代

奈良時代から平安時代前期は、本遺跡がその活動域をもっとも広げるピークの時期となる。四柳町周辺は『和名抄』記載の能登国能登郡与木（または与支、与岐）郷に比定される。能登国は、養老2(718)年に越前国から羽咋・能登・鳳至・珠洲の四郡を分離させ立国するが、国司の任命がないまま天平13(741)年に越中国へ併合、天平勝宝9(757)年に能登国として再立国する経緯をたどる。能登郡は8郷よりなり、うち与木郷は邑知潟の東端と碁石ヶ峰山地にはさまれた低地（現在の羽咋市東端部から中能登町南端部）を郷域とし、南側で羽咋郡邑知郷、北側で能登郡上日郷に接すると考えられている。郷里制施行以前は、平城宮出土木簡に「越前国登レ能郡翼倚‥」とあることから「翼倚里」と呼ばれたようである。

また古代北陸道から分岐して能登国府（七尾市古府町付近に推定）へ向かう支道は、『和名抄』などに加賀郡横山駅、能登国撰木駅、同越蘇駅の駅名がみえることから、邑知地溝帯東側に設置されたと考えられ、延喜式内社能登郡「余喜比古神社」の同名社が大町に鎮座することを理由として、撰木駅を本遺跡から大町周辺に比定する考えが多い。続く10世紀後半～11世紀初めは、従来の郡郷が解体され、国衙により院や保といった行政単位が編成されていく。

さて、集落遺跡の動向は、本遺跡は地区ごとに若干の存続時期の相違をみせながらピークを迎えるとともに、周辺遺跡も奈良時代以降活発な状況を呈する。これらの中には、小金森ヘイナイメA遺跡（88）での奈良時代前半の方形溝に区画された鍛冶関連遺構の検出事例や、本遺跡の「寺」墨書土器や銅椀出土による村落内寺院の存在、護岸工事のおこなわれた河跡の検出など注目すべき知見が多い。これらの集落の大部分は9世紀中頃に確実に衰退の方向に向かう。10世紀代までの存続を確認できる集落域は、蒸籠組井戸や「大町」「前宅」墨書土器が出土した大町C遺跡（93）や本遺跡F地区など数例を数えるのみである。「大町」墨書土器は、本遺跡からも数点出土しており、その関係が注目される。集落廃絶後は、耕作地としての利用が確認されており、畝溝群の方向が一定の規則性を示すことも既に報告されている。

鎌倉・室町時代以降

鎌倉時代初頭の能登国守護には北条一門の名越氏が任じられる。また鎌倉時代後期のいわゆる鎌倉新仏教の教線として正和元(1312)年に瑩山紹瑾により曹洞宗永光寺が創建される。平安時代後期の国衙領を継承したと考えられる承久3(1221)年の能登国田数注文に四柳保の名がみえる。承久元年の立券で、もとは5町5段であったが同3年には2町1段1に減少している。また文明5(1473)年の北野社領諸国所々目録に「四柳庄」の記載や、文明8(1476)年に能登国石動山（天平寺）に来遊した京都聖護院門跡道興が「柳のあまた侍りければ立よりて、里人の鞠の庭にはしめねともいともなつかしよつ柳かな」と詠じている。

鎌倉時代後期～室町時代前期には、邑知地溝帯縁辺の本江・四柳・吉崎など村々に鎮座する産土神勧請伝承が集中し、開発の一つのピークをなすと考えられており、本遺跡や大町ダイジングウ遺跡、大町ゴンジョガリ遺跡でも集落が営まれ始める。うち大町ダイジングウ遺跡では、16世紀に築かれた「ひょうたん」のような平面形をもつ池や計画的に配された掘立柱建物群2グループを検出、多数の金属製品と鋳造道具の出土などから通常の農村的集落とは異なり、隣接する余喜比古神社関連施設との指摘がなされている。宗教関連では他に大町ゴンジョガリ遺跡・本遺跡で呪符木簡が出土している。また本遺跡、四柳ミッコ遺跡などで整然と区画された水田面を多数検出している他、板碑、五輪塔よりなる四柳中世墓群（100）や宋・明銭36貫が入った珠洲焼甕が出土した四柳宮の腰古銭遺跡（95）などが存在する。

近　　世

主に文献記載の交通路と産業について記し、近代以前の周辺地域の様相を考える一助としたい。陸路では能登街道があげられる。能登街道は、北陸道の宿駅でもある河北郡津幡宿を起点とし、さらに羽咋郡今濱宿で子浦村・飯山村・酒井村・高畠村と邑知地溝帯東側を北東に進み所口（七尾）に向かう内浦街道と、海岸沿いに能登半島を北上する外浦街道に分かれる。また内浦街道は酒井村で田鶴浜往来に分岐する。四柳町は内浦街道に、大町村は田鶴浜往来に面する村であった。また水路を用いて、年貢米を大町村、鹿西町金丸村に集め、邑知潟の舟便で羽咋川を経て、鹿浜へ輸送、さらに金沢市宮腰へ運んでいたことがわかっている。

周辺の産業は、山地での山菜・タケノコ採取、四柳村・大町村を含む縁辺15村の入会であった邑知潟では、鯉・鮒・小エビ・ナマズや肥料用の潟藻が採取されている。その捕獲方法には、安永７(1778)年羽咋鹿島両郡産物書上帳（岡部家文書）に船の他、おかい・たも・つかみなどがみえる。

第3章　調査の概要

第1節　調査区割り

本遺跡発掘調査に係る調査区割りは、調査グリッドと調査地区を併用しており、第１次～第７次調査まで統一したものとなっている。

まず調査グリッドは、バイパス路線が直線を保つ部分における道路中心線の延長線を基準とした。その延長線上にある国土交通省が設定した地点（IR12）で、延長線と直交するラインを配し、調査予定区全体に対して10×10ｍを一単位とする方眼のグリッドを設定した。そしてグリッドを画する杭に、北西から南東に向けてアルファベットＡ、Ｂ、Ｃ・・を、また南西から北東に向けてアラビア数字１、２、３・・を付し、各杭は例えばK-4杭といったような呼称をした。結果として、IR12地点はE-25杭、その南西方向の延長線上にE-１杭、E-１杭の北西にA-１杭を設定したことになる。そして各グリッドの呼称は、その南西方向にある杭名と定めた。さらに調査開始とともに遺物出土量が多いことが判明、各グリッドを５×５ｍの小区画で四等分し、南西よりアラビア数字１～４の番号を加えた。例えば、K-４杭、K-４区およびK-４区-１～４の関係は、第５図のとおりとなる。

次に調査地区は、調査時も機能を保った既存の道路・農道や農業用水路により区切られる範囲を単位に設定した。第１次調査に係る部分では南より順にＡ～Ｄ地区と呼称、さらにＡ・Ｂ地区間に、Ａ地区拡張区を設定している（第５図）。これは、Ａ地区拡張区にあたる部分が機能中の農業用水路であったため、農業用水路迂回の後に調査したことによる。なお本遺跡に係る調査全体における調査地区はＡ～Ｋ地区に分かれ、Ｋ地区は農道を挟んで北側で四柳ミッコ遺跡と接する（第３図）。

また第１章に記したように、本遺跡は小扇状地の微高地上に立地し、縄文時代中期～近世初頭にいたる生活面が土石流を含む砂層を挟んで累積する。第１次調査時は、その認識がなくＢ地区南側の一部とＡ地区北半の範囲、調査グリッドでいえばK～N-５～８区で便宜的に上・中・下層の３層と呼称した。各生活面の様相が次第に判明した第２次調査以降は、新しい時代から順次ローマ数字０、Ⅰ、Ⅱ・・・Ⅶ面といった呼称に変更している。各面の主な時代と第１次調査Ａ・Ｂ地区で呼称した上・中・下層の対応関係は第４表のとおりとなる。

第2節　土層層序

本遺跡は、前記のとおり小扇状地上に立地する。第６図は、第１～７次調査の路線センター付近での、主要な時代の生活ベース面の標高を概記したものである。標高12ｍ台を測る扇状地中央付近（Ｄ～Ｇ地区）に形成された縄文時代中・後期の生活面を皮切りに、各時代の生活面が度重なる小河川の氾濫で埋没しながら、継起的に形成された状況がわかる。

さてＡ・Ｂ地区（３～11区）は扇状地裾部に位置し、地勢が急激に下がる地点にあたり、西側および東側に向けて低くなっていく。下層生活面の標高は、Ｂ地区北西で14ｍ弱、Ａ地区南東で約11.8ｍと、約２ｍ強もの標高差をもち、扇状地

調査面	第１次呼称	推定する時代
第０面	上層	近世以降
第Ⅰ面		中世後半
第Ⅱ面		14世紀中頃
第Ⅲ面		平安中期～中世前半
第Ⅳ面	中・下層	飛鳥～平安前期
第Ⅴ面		弥生後半～古墳前期
第Ⅵ面		弥生中期
第Ⅶ面		縄文中期～晩期

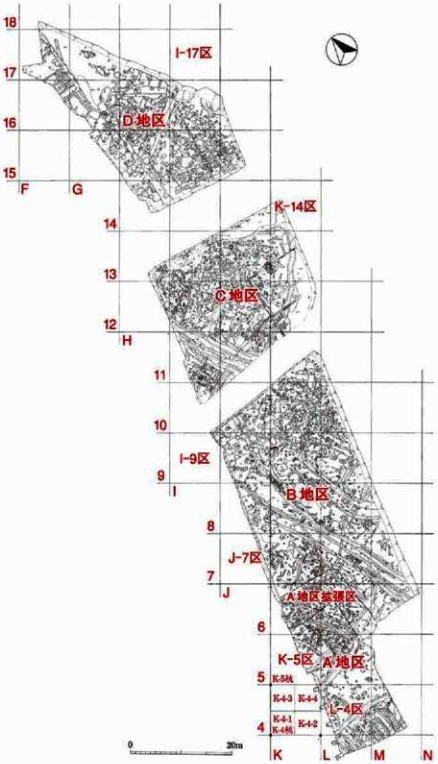
第４表　主な調査面との対応関係

形成時の土砂堆積の影響を大きく受けやすい地勢にある。そのため、9世紀中頃のある短時期にB地区7区以南の約200㎡の範囲で土砂の堆積をみたと考えられる。同様の様相は、扇状地の反対側の裾部にあたり、地勢が大きく下がるJ地区にも認められ、平安時代前期の調査面は数面に及んだ。なお同時期に洪水を発生したと考えられる河川本流は、第4次調査G地区で検出した。

A・B地区

主体をなす下層遺構群の検出面での標高は、A地区南西端で約11.50m、B地区南東端で約13.20m、またB地区北東端で約14.40m、B地区北西端で約13.50mと、かなりの比高をもちながら西側および南側に緩やかに傾斜する。

基本的な土層層序を西側壁（第7図）で概観すれば、上層より①現在の耕作土（第7図土層1）、②床土（同土層35）、③耕地整理前の旧耕作土（同土層36）、④旧床土（同土層2）、⑤遺物包含層1（同土層5・7）、⑥遺物包含層2（同土層6・8）、⑦遺物包含層3（同土層10）、⑧遺構検出土（ベース土）となり、後世の削平等に起因してA地区で②・③が、B地区北半で⑤・⑥を欠落する。

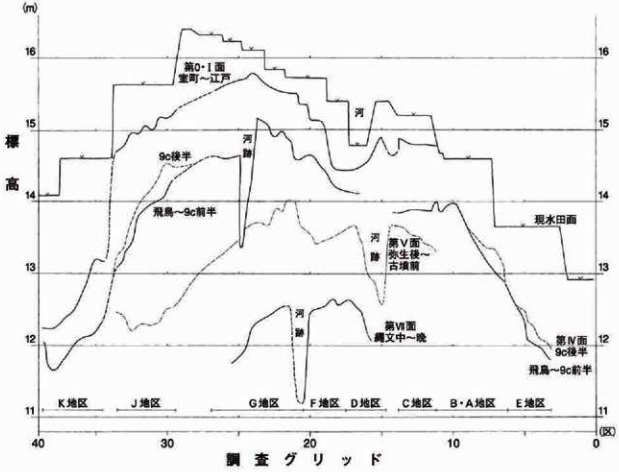


第5図　第1次調査区区割り図（S＝1/750）

またA地区では④と⑤の間に洪水砂などの水流により形成された土層3・4・14・23が複雑な堆積をみせる。遺物包含層⑤～⑦は、⑤が比較的長い期間をかけて二次的に堆積したと考えられる土層であり、南側に向かうにつれ、次第にしまりがなくなり植物遺体が混ざる。

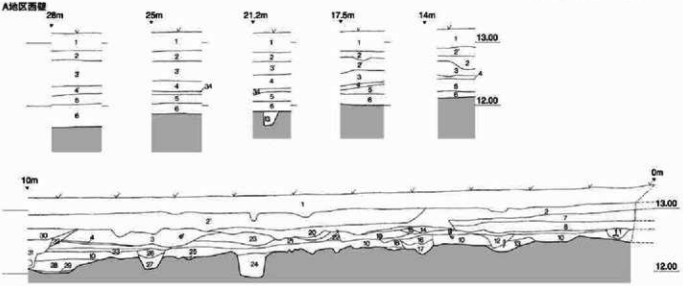
検出した遺構は、遺物包含層⑥に被覆され、⑦を切り込む中層遺構群と、遺物包含層⑦に被覆される下層遺構群に大別できる。また部分的ではあるが⑥・⑦間（中層遺構形成時）に濁黄灰色～濁黄白色を呈する粘土を数cm敷き固めた整地面が認められる。ベース土⑧は、短期間のうちに水流に起因して形成された土層で、摩耗の著しい小土師器片を数点含む。その際に運ばれた土砂である淡灰色～淡黄色～黄茶色の砂質土～粗砂が複雑に分布、A地区が植物遺体が混ざりシルト土の質感を持つ砂質土を主体とするのに対して、B地区は淡灰色粗砂を主体とする。

次に6・7区周辺で確認した上・中・下層の土層層序を調査区南東側壁（第8図下段）で概観する。まず上層には現耕作土①（第8図土層1、1′）、③耕地整理前の旧耕作土（同土層1‴）、④旧床土（同土層2・38）が厚さ100～120cm堆積する。上層遺構群は、ごく少量の遺物を含む砂質土層29・38を包含層とし、土層35～41をベース土とする。土層29は南側に向かうにつれ厚さを増す一方、北側に向かうと厚さを減じていく。このベース土は短期間のうちに河川の氾濫等に起因して形成された土層で、北側から南側に向けて粗砂と細砂が斜傾しながら複雑に堆積する。遺構検出面の標高は、南東端で約14m、南西端で約13.4m、北東端で14.10m弱、北西端で約13.60mを測る。中層遺構群は、上層遺構群ベース土を遺物包含層、やはり河川の氾濫等に起因して形成された褐色砂質土層44をベース土と

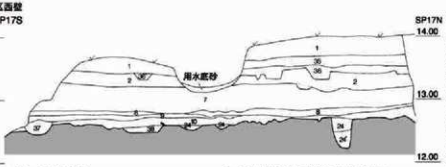


第6図　第1～7次調査の主な生活面の高さ

A地区西壁

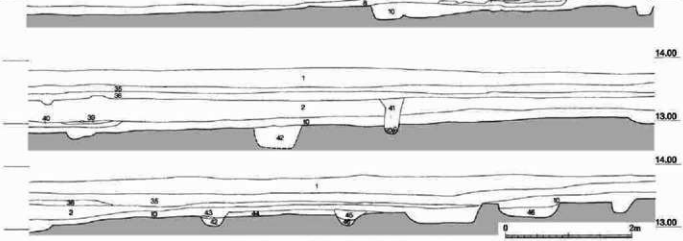


A地区西壁
SP17S



1　耕土　灰色弱粘質土
2　床土　灰黄色弱粘質土
2'　2に粗砂が混ざる
3　明灰～黄白色粗砂（水の流れにより短期に堆積？）
3'　3に砂利が多く入る
4　淡灰褐色シルト（水の流れで形成）
4'　4と同質土（灰白で黄色強くなる）
5　33と同質土
6　10と同質土（小形明～暗砂が多く混ざる）
7　暗灰褐色砂質土（キメが細かく、しまる）
8　灰褐色砂質土
9　海黄白色粘土と10の混合土（整地or船床）
10　暗灰褐色砂質土（炭化物、土器が混ざる）
11　茶褐色砂質土（植物遺体混ざる）
12　暗灰褐色砂質土（キメが細かく、炭化粒が多く混ざる）
13　鞠灰色砂質土
14　2＋淡灰色細砂（水の流れで形成）
15　2と同質土
16　海黄灰～淡灰白色粘土（10がブロック状に混ざる）
17　暗灰褐色砂質土（10より色調薄い。）
18　10とベース土（淡灰色砂質土）と植物遺体の混合土
19　7と同質土
20　暗灰褐色砂質土と２の混合土
21　暗灰褐色砂質土（しまりなく、植物遺体が混ざる）
22　10と同質土（やや暗い）
23　21と３が交互に堆積（水の流れで形成）
24　10とベース土（淡灰色砂質土）の混合土（粗土）
24'　24と同質土ベース土の混ざり少なくなる）
25　ベース土の汚れ。
26　暗灰褐色砂質土（しまりなく、灰褐色土がブロック状に混ざる）
27　褐色砂質土（しまりなく、やや粘質）
28　暗灰褐色砂質土
29　28と地山土の交互層（水の流れで形成）
30　暗灰褐色土
31　灰色砂質土
32　30と31の混合土
33　暗灰褐色砂質土（しまりなく、植物遺体混ざる）
34　4と５の層厚薄
35　床土　灰茶色砂質土（鉄分沈着）
36　旧耕作土　淡灰色砂質土　36'　36より黄色強い。
37　暗鞠灰色砂質土（炭黄灰色粘土ブロック多く混ざる）
38　10と灰黄色細砂の混合土
39　暗灰褐色細砂質土
40　暗黄白色粘土
41　暗褐排水（暗灰色土）
42　10と同質土
43　黄白色層
44　黄褐色概砂（２～３cm大の砂利多く混ざる）
45　暗黄褐色砂質土
46　淡灰褐色砂質土

B地区西壁



第７図　Ａ・Ｂ地区西壁土層図（Ｓ＝1/60）

する。このベース土は調査区西側壁では検出していない。遺構検出面の標高は、南東端で13.70ｍ弱、南西端で約13ｍ、南東端で13.70ｍ強、北西端で約13.50ｍを測る。下層遺構群は、濁褐色シルト土46を包含層、淡灰黄色～淡灰色砂質土を主体とするベース土とし、その間に漸移層48をもつ。下層遺構群の包含層は、調査区西側壁基本土層層序⑦に対応すると考えられる。

またＢ地区Ｊ・Ｋ-９・10区の約150㎡の範囲で整地土を確認した（第８図上段）。整地土は溝SD16を長径50㎝程度を最大とする自然石の混ざる土砂（土層22、22′）で埋め、暗褐色砂質土（土層23）で地ならしした後に、10～20㎝の厚さで濁黄灰白色粘質土（土層19）を硬く突き固めて仕上げる。この整地土は、第４章に記すとおり、大型の掘立柱建物建築に伴う地業である。調査区北東壁（第８図上段）で基本土層層序をみれば、上層より①現在の耕作土（第８図土層１、1′）、②床土（同土層７・８）、③西側で削平を受ける中世後半以降包含層（同土層５・12）、④中世後半以降のベース土（同土層14、14′）、⑤奈良・平安時代の遺物包含層（同土層14・14′）、⑥整地粘土（同土層22、22′）、⑦遺構検出土（ベース土）となる。このうち、③は後世の削平・耕地整理等によりＡ・Ｂ地区では確認できず、④は次年度調査により洪水等により一度に運ばれた土砂堆積であることが判明している。なお、Ｂ地区Ｋ-11区において⑦以下の土層堆積状況の確認調査を重機により実施し、無遺物層が続くことを確認している。

Ｃ　地　区

遺構検出面の標高は、調査区南東端および北東端で約14.90ｍ、南西端で約14.30ｍ、北西端で約14.40ｍを測り、西側に向けて若干傾斜する。基本土層層序を調査区北西壁（第９図）でみれば、上層より①現耕作土（土層１）、②床土（土層16、17）、③暗黄褐色砂質土（土層３）、④河川の氾濫層（土層13、14）、⑤黄褐色砂質土（土層４）、⑥遺物包含層（土層18）、⑦河川の氾濫層（土層５～７、15）、⑧ベース土となる。また断面北半で①と③の間に近代の耕地整理に伴う整地土と考えられる土層（土層２、９～12）が入る一方、断面南半は河川の氾濫の影響が認められず③～⑤および⑦を欠落して、②の直下に薄い遺物包含層⑥が堆積する。

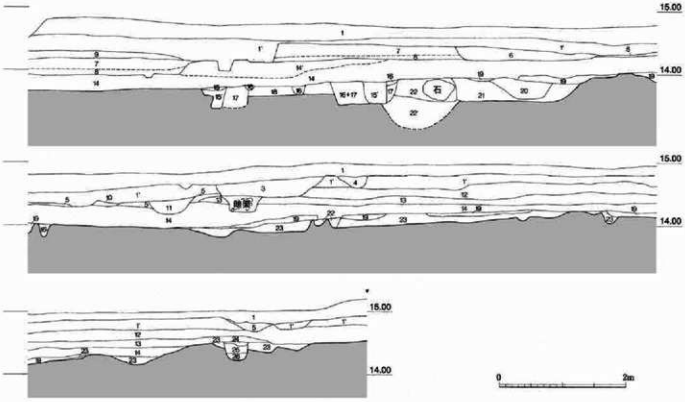
河川の氾濫に伴う土層④・⑦は、１ｍを超える円石を最大に10～30㎝大の円礫が多量に混ざる。この氾濫は、Ｃ・Ｄ地区間を流れる小河川によりもたらされ、間層が存在することから時期差をもって２度におよぶことがわかる。なお土層③・⑤については水平を意識した堆積をもち、氾濫後の道路や耕作に係る整地の可能性をもつが、判然としなかった。ベース土⑧は10㎝未満の円礫が混ざる淡灰黄色粗砂で、河川氾濫層④・⑦付近では集落形成以前の河川の氾濫に伴う大型の円石～円礫を多く含む。この河川氾濫層は14世紀中葉に堆積したことが、第２次調査により判明している。

Ｄ　地　区

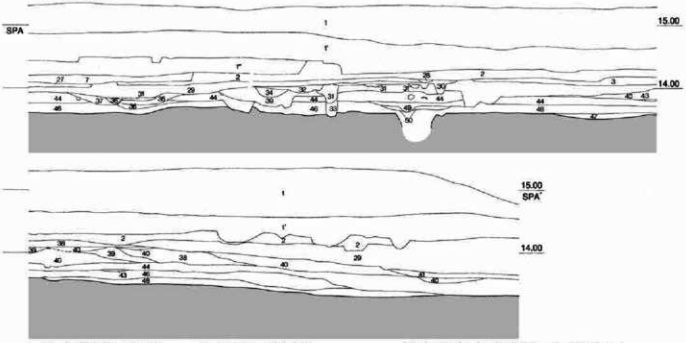
遺構検出面の標高は、調査区南東端で約14.90ｍ、南西端で約14.60ｍ、北端で約13.80ｍを測り、北側および西側に傾斜する。基本土層層序を調査区北西壁（第９図）でみれば、上層より①現耕作土（土層１）、②旧耕作土（土層３）、③遺物包含層（土層17、22）、④ベース土（淡黄茶色粗砂と古代包含層）となり、他地区に比して堆積土は厚くない。遺物包含層③は、汚れた褐灰色砂質土に古代の包含層とベース土が複雑に混ざる。

第１次調査時では、調査区北半に関して遺構検出面を誤認、中世後半以降の生活面の調査は第２次調査で実施した。その詳細は第５章で記す。

B地区北東壁

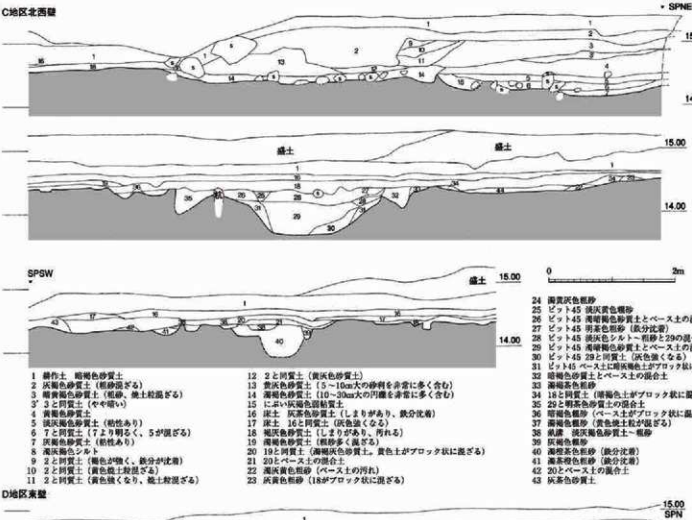


B地区南東壁（南半）

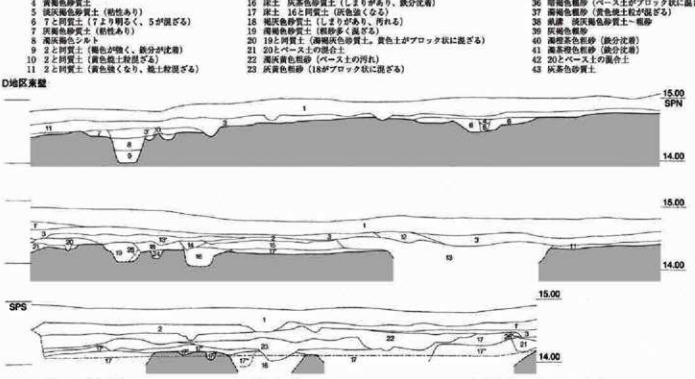


1　耕土　黄灰色砂質土（水田畦土）
1'　耕土　灰褐色粘質土
1''　耕土　1と同質土（砂質強くなる）
1'''　耕土　淡褐色砂質土
2　床土　淡灰褐色粘質土
3　暗褐色水田土　2と同質土（よくしまる）
4　灰色砂質土
5　明黄白色粗砂
6　明黄褐色砂質土
7　床土　黄褐色粗砂
8　床土　黄褐色細砂
9　褐色砂質土（粘性あり）
10　1'と14の混合土
11　灰褐色粘質土
12　中世包含層　暗褐色砂質土
13　中世ベース土　灰白色粗砂
14　古代包含層　黒灰褐色砂質土
14'　古代包含層　黒灰褐色砂質土（鉄分含む）
15　黄褐色粘質土（鉄分含む）
15'　黄褐色粘質土
16　褐色砂質土（粘性あり）
17　暗黄褐色砂質土
18　黄褐色粗砂
19　整地土　灰黄灰白色粘質土
20　58号溝　黄褐色粗砂（21がブロック状に混ざる）
21　58号溝　灰褐色粗砂（粘性あり）
22　16号溝　褐色砂質土（砂が多く混ざる）
22'　16号溝　褐色砂質土
23　暗褐色砂質土（砂が多く混ざる）
24　淡緑色粘質土
25　淡灰色粗砂（23が混ざる）
26　褐色粘質土（24が混ざる）
27　褐色粘質土
28　暗黄白色粗砂
29　上層包含層　黒灰褐色砂質土
30　淡黄褐色粗砂
31　褐色シルト
32　淡黄褐色粗砂
33　12と31の混合土
34　31と39の混合土
35　黄白色粗砂
36　褐色シルト＋白色砂
37　淡緑灰色シルト
38　淡黄褐色粗砂
39　暗黄灰色粗砂
40　暗黄灰色粗砂
41　40と褐色シルトの混合土
42　40と同質土
43　緑黄色粘土
44　褐色砂質土（粘性あり）
45　褐色シルト＋白色砂
46　古代包含層　褐褐色シルト
47　緑褐色砂質土
48　14とベース土の混合土
49　褐色粘質土
50　38と同質土

第８図　Ｂ地区北東壁、南東壁土層図（Ｓ＝1/60）



1　耕作土　暗褐色砂質土
2　灰褐色砂質土（粗砂混ざる）
3　暗黄褐色砂質土（粘砂、微土粒混ざる）
3'　3と同質土（やや暗い）
4　黄褐色砂質土
5　淡灰褐色砂質土（粘性あり）
6　7と同質土（7より明るく、5が混ざる）
7　灰褐色砂質土（粘性あり）
8　淡灰褐色シルト
9　2と同質土（褐色が強く、鉄分が沈着）
10　2と同質土（黄色粘土粒混ざる）
11　2と同質土（黄色強くなり、粘土粒混ざる）
12　2と同質土（黄灰色砂質土）
13　黄灰色砂質土（5～10cm大の砂利を非常に多く含む）
14　褐褐色砂質土（10～20cm大の円礫を非常に多く含む）
15　にぶい灰褐色粘質土
16　床土　灰茶色砂質土（しまりがあり、鉄分沈着）
17　床土　16と同質土（灰色強くなる）
18　褐灰色砂質土（しまりがあり、汚れる）
19　褐褐色砂質土（粘砂多く混ざる）
20　19と同質土（海褐灰色砂質土。黄色土がブロック状に混ざる）
21　20とベース土の混合土
22　褐灰黄色粘砂（ベース土の汚れ）
23　灰黄色粘砂（18がブロック状に混ざる）
24　黄黄灰色粘砂
25　ピット45　淡灰黄色粘砂
26　ピット45　褐暗褐色砂質土とベース土の混合土
27　ピット45　明茶色粘砂（鉄分沈着）
28　ピット45　淡灰色シルト～粘砂と29の混合土
29　ピット45　褐暗褐色砂質土とベース土の混合土
30　ピット45　29と同質土（灰色強くなる）
31　ピット45　ベース土に暗灰褐色土がブロック状に混ざる
32　暗褐色砂質土とベース土の混合土
33　褐褐茶色粘砂
34　18と同質土（暗褐色土がブロック状に混ざる）
35　29と明茶色砂質土の混合土
36　暗褐色粘砂（ベース土がブロック状に混ざる）
37　褐褐色粘砂（黄色土粒が混ざる）
38　疑礫　淡灰褐色砂質土～粘砂
39　灰褐色粘砂
40　褐茶茶色粘砂（鉄分沈着）
41　褐茶褐色粘砂（鉄分沈着）
42　20とベース土の混合土
43　灰茶色砂質土



1　耕作土　灰褐色砂質土
1'　耕作土　褐灰色砂質土
2　凝固灰色～茶色粘砂～シルト
3　旧耕作土　灰褐色砂質土（硬く締まる）
3'　3と同質土（暗灰褐色土がブロック状に混ざる）
4　灰褐色土
5　灰色土
6　褐褐色土＋淡灰色細砂＋黒褐色土
7　暗黒排水　暗灰黒色土とベース土の混合土
8　暗黒排水　にぶい褐色砂質土（硬く締まる）
9　暗黒排水　粘殻
10　暗灰褐色砂質土
11　凝茶色粘砂（ベース土の汚れ）
12　褐灰褐色砂質土（暗褐色砂質土がブロック状に混ざる）
13　暗黒排水　にぶい褐色砂質土と黄灰色土の混合土
14　褐褐色砂質土
15　褐暗褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
16　褐灰褐色土
17　遺物包含層　灰褐色砂質土
17'　遺物包含層　〃　（褐色強くなる）
17''　遺物包含層　17にベース土が混ざる
17'''　遺物包含層　17にベース土が混ざる
18　暗茶白～灰色粘砂（黄色粘土が顕状に混ざる）
19　褐色砂質土（黄色粘土混ざる）
20　暗灰色砂質土
21　17と同質土（褐褐色砂質土）
22　17と同質土（褐灰色砂質土）
23　にぶい灰色砂質土（17がブロック状に混ざる）
24　暗褐色砂質土
25　褐色砂質土

第9図　C・D地区調査区壁土層図（S＝1/60）

第4章　A・B 地 区

第1節　調 査 の 概 要

調査区は、現況の農業用水路により分断される２つの調査区（南からＡ地区、Ｂ地区）、およびＡ・Ｂ地区の調査終了後に発掘調査が可能となったＡ・Ｂ地区間の農業用水路部分（Ａ地区拡張区）の、計３調査区よりなる。この３つの調査区は、奈良時代～平安時代前期に営まれた連続する生活面である。Ｌ・Ｍ-６～８区に限っては調査区外東側から短期のうちに流入した大量の土砂堆積により、３つの調査面（上層、中層、下層）に分かれる。

上層は、９世紀中葉以降で中・近世に至る間の、ある時期に営まれた生活面である。遺構は、不定形な土坑２基などを確認したにとどまり、集落域縁辺部の様相を呈する。

中層は、９世紀中頃を下限とする時期に発生した土砂流入により一度に埋没した生活面である。畝溝約10条と、それに直交する位置関係をもつ基幹用水的な溝１条を検出、耕作地に利用される。畝溝は切り合い関係および主軸方位により２群に大別できる。

下層は、７世紀後半～９世紀前葉に営まれた遺構群の調査面で、２グループに分かれる掘立柱建物25棟、竪穴建物３棟、井戸１基、道路状遺構、区画溝、耕作に伴う素掘溝多数を検出した。特にＢ地区北東辺（Ｊ・Ｋ-９・10区）約150㎡の範囲で、既存の掘立柱建物や溝を廃して黄白色粘土を用いた整地の後に、大型の掘立柱建物を建てる。出土遺物は、墨書土器を含む大量の土器・木製品に加え、帯金具、和同開珎、製塩土器、鉄滓などがあり、その量はコンテナケースで土器約80箱、木製品約20箱を数える。

なお、３つの調査面を明瞭に確認できた範囲を除けば、鍵層となる流入土砂堆積層が次第に薄くなること、また調査当初に３つの調査面として把握できなかったことにより、調査・整理時に各遺構を厳密に区分できていない。そのため、以下では不明瞭な遺構は下層に属する遺構・遺物として便宜的に扱い、その変遷は第６章で記したい。

第2節　B 地 区 上 層

1．遺　　構（第10～12図）

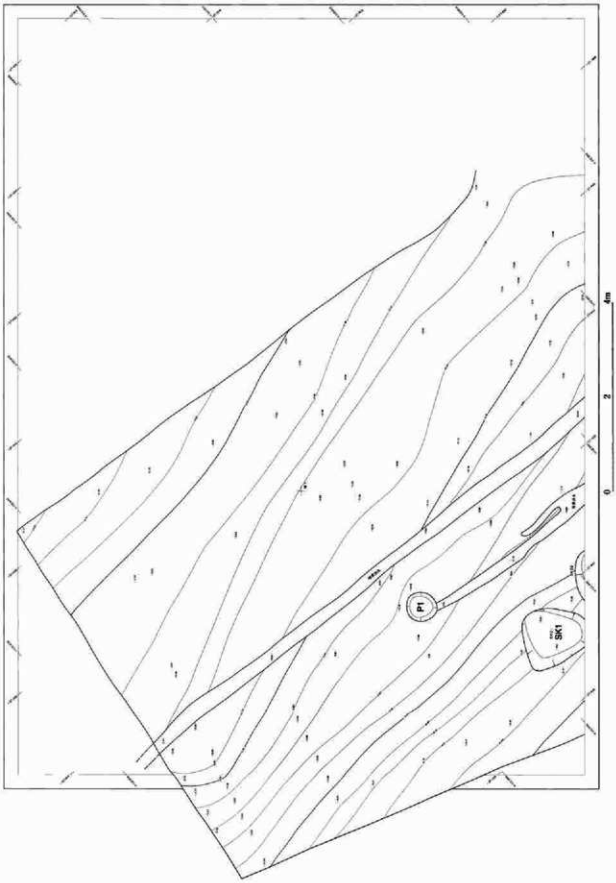
Ｌ・Ｍ-６～８区で検出した。地勢は東から西側に向けて緩やかに傾斜、もっとも高い地点で標高14.27ｍ、もっとも低い地点で同13.34ｍと、比高約１ｍを測る。不定形な土坑２基、溝１条などを検出したが、各遺構とも共伴する遺物はなく、存続年代は特定できなかった。

上層 SK１

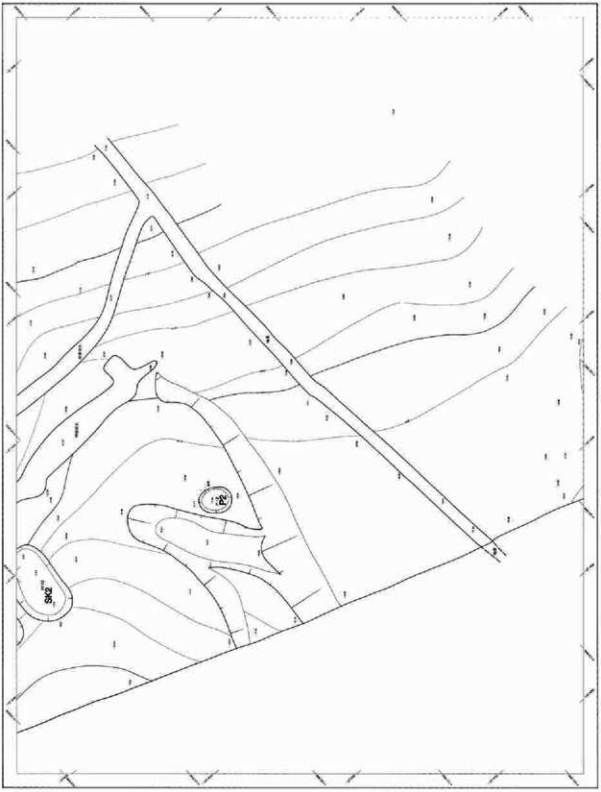
平面略台形を呈し、長軸180㎝、短軸165㎝、深さ18㎝を測る。底面は平坦で、覆土は暗灰褐色弱粘質土の単層である。

上層 SK２

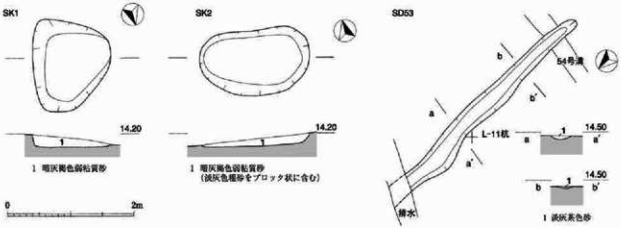
平面楕円形を呈し、長軸175㎝、短軸100㎝、深さ16㎝を測る。底面は平坦で、覆土は淡灰色粗砂がブロック状に混ざる暗灰褐色弱粘質土である。



第10図　B地区上層平面図1（S＝1/80）



第11図　B地区上層平面図2（S＝1/80）



第12図　Ｂ地区上層遺構図（Ｓ＝1/60）

上層 SD 53

L-10・11区で検出した。幅約20cm、深さ約４cmを測り、覆土は淡灰茶色砂となる。耕作に伴う溝と考えられる。

上層Ｐ１・Ｐ２

略円形を呈する２基のピットを確認した。覆土は濁灰色シルトで、調査区を横断する昭和15～17年に敷設された耕地整理実施時の暗渠排水に伴うものと考えられる。

２．遺　　物（第13～15・24図、第５・６表）

上層 SK２

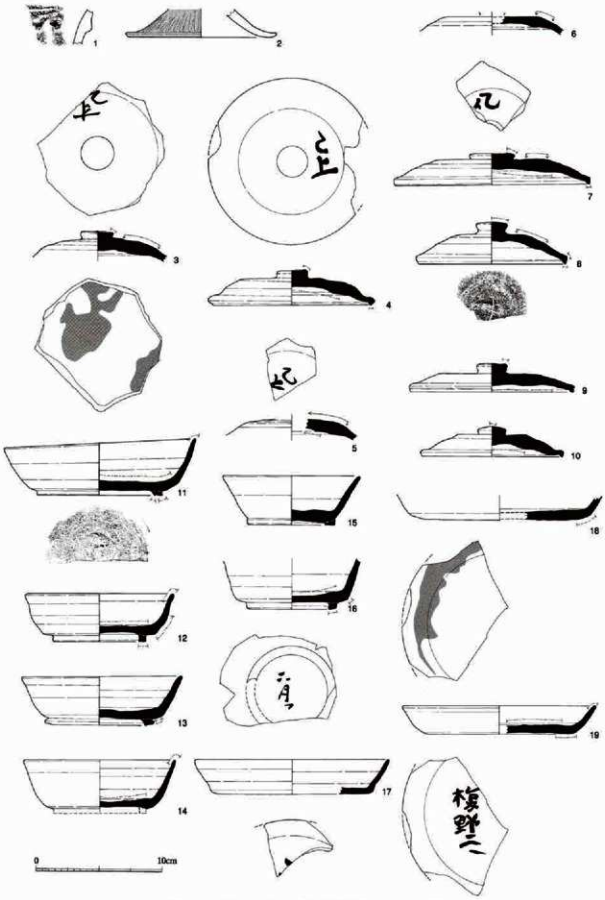
第24図108、109の木製品が出土した。杭108は、節を切り落とした細い幹を半截した後、先端を尖らせる。先端部がつぶれることから、地中に打ち込まれたと考えられ、その後、本土坑に廃棄される。109はアカマツの辺材を用い、側面を斜方向に加工する。

包含層出土遺物

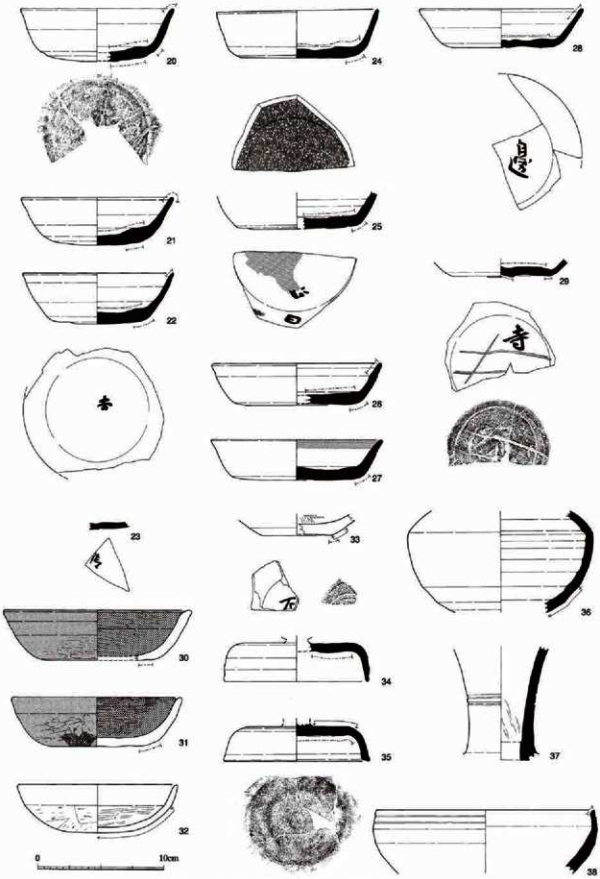
土器は、全て暗灰色弱粘質土の色調をもつ包含層より出土した。第13図１は縄文時代中期後葉の深鉢小片で、外面に貼り付け隆帯をもつ。２は弥生時代終末頃の高坏または鉢脚部で、外面は赤彩の後にミガキ調整を施す。胎土中に海綿骨片が多く混ざる。

３～29は須恵器である。坏蓋３～10のうち、同法量の３～５は厚手で、天井部外面にやや乱れた文字で「乙上」と墨書する。３の内面は、黒色墨の付着や器面の摩耗(1) が顕著なことから硯に転用したことがわかる。また文字に摩耗がなく、硯の機能を喪失した後に墨書したと考えられる。完形に近い４は、口径13.2cm、器高2.8cmを測る。天井部内面および鈕周縁部は、摩耗が顕著である。５も天井部内面に同様の摩耗が認められる。薄手の小破片６は天井部外面周縁まで回転ケズリ調整を施す。天井部内面は摩耗し、「乙上」と墨書する。５と同様に２文字目は左下に書かれる。７は口径15.4cm、器高2.6cmを測り、大型で扁平な鈕をつける。口縁端部を直下に小さく折り曲げ、降灰よりⅠ類重ね焼き(2) と考えられる。また底部内面の摩耗より、倒位での使用が認められる。山笠形を呈する８は、口径11.7cm、器高3.3cmを測り、天井部内面にヘラ記号「×」を焼成前に刻む。扁平な９は口径12.8cm、器高2.3cmを、平笠形の10は口径11.2cm、器高2.4cmを測る。ともに天井部内面に摩耗が認められ、うち10はかすかな墨痕の遺存より硯に転用したと考える。

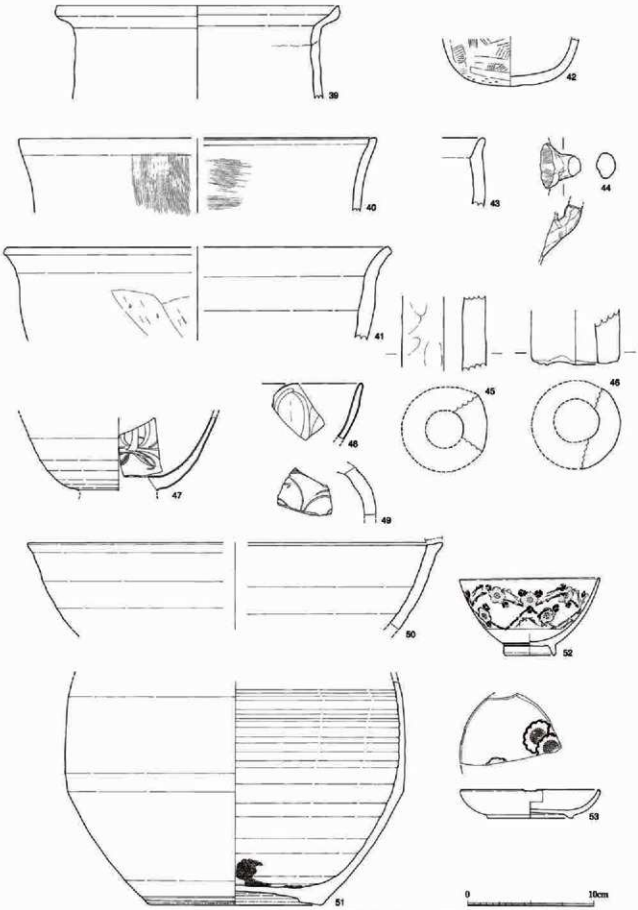
11～16は有台坏である。焼きゆがみをもつ11は、口径15.2cm、器高4.5cmを測り、低い台部が外展する。底部内面は摩耗が顕著である。12は口径11.6cm、器高3.8cmを測る。腰部は張り気味で、口縁部は



第13図　B地区上層包含層出土遺物実測図1（S＝1/3）



第14図　B地区上層包含層出土遺物実測図2（S＝1/3）



第15図　B地区上層包含層出土遺物実測図3（S＝1/3）

小さく外反する。底部外面に黒色煤が付着する。断面赤紫色を呈した13は、口径12.9㎝、器高3.9㎝を測り、体部は直線的にのびる。底部内面にヘラ状工具を用いてナデ調整を施す。深身・薄手の14は口径12.0㎝を測り、底部内面が摩耗する。焼成堅緻である。有蓋の15は、口径10.8㎝、器高3.9㎝を測り、自然釉と降灰の溶着が著しい。体部は外反気味に立ち上がり、断面方形の台部を直下に貼る。16は体部と底部の境で明瞭に屈曲、内展気味の台部をつける。底部内面は摩耗が顕著で、底部外面には墨書が認められる。ちょうど割れ口にあたり、判読は難しいが本遺跡他事例より「青」と考えられる。17～19は無台盤である。薄手の17は口径15.3㎝、器高2.8㎝を測り、体部下半で屈曲する。底部外面に判読不能の墨書が認められる。18、19は、底部内面の摩耗具合や墨の付着から硯への転用が認められる。うち19は口径15.2㎝、器高2.2㎝を測り、底部外面に墨で「榎野二」「一」と別筆で記す。

第14図無台坏20～29は、深身で外傾する体部が長くのびるタイプ（20～22）、扁平で底部の広いタイプ（24～27）、薄手で体部と底部の境を明瞭につくるタイプ（23・28・29）に大別でき、27以外は底部内面に摩耗が認められる。20は口径12.0㎝、器高4.2㎝を、還元の弱い21は口径11.0㎝、器高3.8㎝を測り、底部外面は丁寧なナデ調整を加えた後に、ヘラ記号を刻む。20は使用に伴う摩耗が著しく、21は体部外面に二次被熱痕をもつ。22は口径11.9㎝、器高4.0㎝を測り、体部は外傾して長くのびる。使用に伴う摩耗が顕著である。底部外面中央付近に、かすれて「吉」と考えられる墨書が認められる。底部小破片23は、回転ヘラ切り後、無調整の底部外面に墨書を記す。24は口径12.8㎝、器高3.9㎝を測る。内面は、ナデ調整により底部と体部の境を明瞭につくりだす。やや厚手の25の底部内面には黒色の漆が付着する。一定期間使用した後に漆容器（パレット？）に転用、さらに廃棄後に被熱する。また体部外面下半に「日」の、底部外面に判読不能の墨書が認められる。扁平な26は、口径13.2㎝、器高3.3㎝を測り、使用に伴う摩耗が著しい。27は口径13.5㎝、器高3.2㎝を測る。底部外面の一部と体部内面に薄く煤が付着すること、また口縁部内面に暗褐色の変色帯が存在することから、煮沸容器に転用されたと考えられる。薄手の28は、口径12.8㎝、器高3.1㎝を測り、著しく摩耗する。底部外面に墨書が明瞭に残るが、判読できなかった。29の底部外面には、ヘラ記号「＋」および「寺」の墨書が認められる。この文字は、食器として一定期間使用した後に記される。

30、31は内黒外赤土師器無台埦で、黒色処理が口縁部外面におよぶ。30は口径14.8㎝、器高4.0㎝を測り、肥厚した体部は口縁部で内傾した平坦面をつくる。外面の手持ちケズリ調整はかなり密な印象を受ける。31は口径13.3㎝、器高3.9㎝を測り、外面の調整は30に近似する。また外面は二次被熱によりタール状の煤が付着する。32は器肉の薄い土師器無台埦で、口径12.6㎝、器高3.9㎝を測る。体部上半にヨコナデ調整、外面体部下半～底部に手持ちケズリ調整、内面体部下半～底部にミガキ調整を施す。ロクロ土師器無台埦33は明赤褐色の色調をもつ。底部外面は回転糸切り痕をそのまま残し、墨書が記されるが判読できない。

34～38は須恵器である。壺類の蓋34、35は、ともに天井部内面に摩耗痕をもち、倒位の使用が想定される。35は同11.4㎝を測り、ヘラ記号「／」を刻む。長頸瓶36、37は、内外面とも降灰が顕著で、37には接合時のシボリ痕が明瞭に残る。鉄鉢38は口径17.2㎝を測り、器肉は厚い。端部を丸く仕上げる口縁部は、外面に２条の浅い沈線状のナデ調整を施す。

第15図39～44は土師器で、39以外は胎土中に海綿骨片を含む。ロクロ長甕39は口径22.4㎝を測り、肥厚する口縁端部は三角形状を呈する。無頸に近い40は小破片のため、傾きに不安をもつ。内外面とも細かい単位のハケ調整を施し、復元口径28㎝程度を測る。厚手のロクロ埴41は摩滅が顕著で、口径は約31㎝に復元できる。外面に煤が付着する。非ロクロの小甕42は球胴形を呈し、外面は手持ちケズリ調整を雑に施す。非ロクロ小甕と考えられる43は外面にハケ調整を施す。44はハケ調整が残る。把手、

（　）は残存法量を示す。また遺存度は口縁部12分割で計算。

図版番号	実測番号	グリッド	種　類	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	遺存度	色　調 (外面)	色　調 (外面)	胎　土	備　考
13-1	D320	I-9-2	縄文土器	深鉢	－	(2.3)	－	小片	明赤褐色	にぶい褐色	微砂含む	
2	D376	K-8-1	弥生土器	(脚部)	－	(2.3)	12.0	台-2	にぶい赤褐色～浅黄橙色	褐灰色～浅黄橙色	赤色粒、海綿骨片含む	
3	特32	L-8-1	須恵器	坏蓋	－	(2.5)	縁径2.7		灰色	浅黄色	e	墨書「乙上」、硯に転用、C期
4	特41	K-8-4	須恵器	坏蓋	13.2	2.8	縁径2.4	8	灰色	淡灰色	a	Ⅰ類重ね焼き、墨書「乙上」、C期
5	特86	K-8-1	須恵器	坏蓋	－	(1.3)	－		灰色	灰白色	e	墨書「乙上」、B期
6	特92	L-8-3	須恵器	坏蓋	－	(1.5)	－		灰色	灰色	h	墨書「乙上」、B期
7	D592	K-7-4	須恵器	坏蓋	15.4	2.6	縁径3.6	2	灰色	灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、B期
8	D543	J-7-4	須恵器	坏蓋	11.7	3.3	縁径2.4	5	緑灰色	灰色	h	Ⅰ類重ね焼き、ヘラ記号「X」、C期
9	D780	K-8-1	須恵器	坏蓋	12.8	2.3	縁径2.4	1	灰色	灰色	e	C期
10	D538	L-8-9	須恵器	坏蓋	11.2	2.4	縁径2.2	小片	淡白色	灰色	e	硯に転用、Ⅰ類重ね焼き、C期
11	D506	K-8-4	須恵器	有台坏	15.2	4.5	10.2	3	オリーブ灰色	灰色	i	
12	D507	K-7-2	須恵器	有台坏	11.6	3.8	7.4	3	灰色	灰色	d	底部外面煤付着
13	D476	J-K-9-2	須恵器	有台坏	12.9	3.9	8.7	9	灰～にぶい褐色	灰褐色	i	内面ヘラ状工具によるナデ、B期
14	D502	K-8-2	須恵器	有台坏	12	(3.9)	(7.4)	4	暗青灰色	灰色	e	C期
15	D770	I-9-2	須恵器	有台坏	10.8	3.9	6.8	1	灰色	灰色	c	
16	特77	L-M-8	須恵器	有台坏	－	(3.8)	7.2		灰色	灰色	h	墨書「□（青か）」、C期
17	特80	J-9-4	須恵器	無台盤	15.3	2.8	13.0	小片	灰色	灰色	i	墨書、文字不明、B期
18	D405	K-7-4	須恵器	無台盤	－	(1.9)	12.3		灰色	灰色	d	硯に転用、D期
19	特50	K-7-4	須恵器	無台盤	15.2	2.2	12.2	底-4	灰色	灰色	h	墨書「梅野二」「一」、硯に転用、D期
14-20	D413	L-8	須恵器	無台坏	12.0	4.2	8	2	灰黄色	灰黄色	a	ヘラ記号「ノ」
21	D420	L-7-3	須恵器	無台坏	11.0	3.8	7.2	3	灰黄色	灰黄色	e	二次被熱痕
22	特88	L-M-8	須恵器	無台坏	11.9	4	8.3	1	灰色	灰色	f	墨書「□（古か）」、D期
23	特64	L-8	須恵器	無台坏	－	－	－		灰色	灰色	e	墨書「□」
24	D283	K-8-2	須恵器	無台坏	12.8	3.9	9.9	6	灰色	灰白色	e	C期
25	特71	K-7-4	須恵器	無台坏	－	(2.6)	10	底-6	灰色	灰色	e	墨書体部「日」、内面漆付着、D期
26	D756	K-7-4	須恵器	無台坏	13.2	3.3	10	1	灰色	灰色	f	底部外面墨痕、B期
27	D760	－	須恵器	無台坏	13.5	3.2	10.4	4	灰黄褐色	灰黄褐色	f	内面二次被熱痕、B期
28	特74	J-7-2	須恵器	無台坏	12.8	3.1	9.2	3	灰色	灰色	e	墨書、D期
29	特35	L-8	須恵器	無台坏	－	(1.4)	7.9	底-7	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	h	ヘラ記号、墨書「寺」、D期
30	D222	K-8-2	外赤内黒土師器	無台椀	14.8	4	9.2	1	橙色	黒色	エ	
31	D221	K-8-2	外赤内黒土師器	無台椀	13.3	3.9	9.8	2	にぶい橙色	黒色	ク	二次被熱痕
32	D734	L-7-3	非ロクロ土師器	無台椀	12.6	3.9	－	5	浅黄色	浅黄色	ア	
33	特84	L-8-1	土師器	無台椀	－	(1.7)	5.6	底-2	明赤褐色	明赤褐色	エ	墨書、文字不明
34	D404	L-7,L-M-8,L-8-4	須恵器	壺蓋	11.3	(3.3)	－	3	灰色	灰色	c	皿に転用
35	D274	K-7-4	須恵器	壺蓋	11.4	(3.0)	－	5	灰白色	灰白色	e	ヘラ記号「ノ」、皿に転用
36	D333	K-8-2	須恵器	長頸瓶	－	(8.1)	－		灰色	灰色	e	
37	D762	K-7-4	須恵器	長頸瓶	－	(10.0)	－		灰白色	灰色	e	沈線２条
38	D363	L-8	須恵器	鉢体	17.2	(5.0)	－	1	褐灰色	青灰色	a	
15-39	D200	L-7	土師器（ロクロ）	長甕	22.4	(7.4)	－	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ウ	
40	D644	J-9-3	土師器	甕？	約28	(5.9)	－	小片	橙色	橙色	ケ	
41	D740	K-7-4	土師器（ロクロ）	鍋	約31	(7.4)	－	1	浅黄橙色	浅黄橙色	ケ	傾き不安あり
42	D653	K-7-3	土師器（非ロクロ）	小甕	－	(3.7)	－	底-9	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ア	
43	D730	L-8-1	土師器	甕	－	(5.4)	－	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ケ	煤付着
44	D731	K-8-1	土師器	（肥手一部？）	－	－	－		灰色	灰色	ケ	
45	D314	L-8-1	土製品	フイゴ部口	－	(5.6)	－		にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
46	D312	L-9-1	土製品	フイゴ部口	6.8	(4.4)	－	4	灰オリーブ色	にぶい黄橙色	礫、粗砂	口縁部自然釉付着
47	D123	K-10-3	青磁	椀	－	(5.8)	－		素地－灰白色	釉－オリーブ黄色	堅緻	
48	D121	K-10-1	青磁	椀	－	－	－	小片	素地－灰色	釉－オリーブ灰色	緻密で気泡なし	灰釉
49	D127	K-11-2	瀬戸	瓶子	－	(3.8)	－		素地－淡黄色	釉－オリーブ黄色	緻密	灰釉
50	D357	K-8-1	珠洲焼	片口鉢	32.8	(6.9)	－	1	灰色	灰色	粗砂、気泡含む	
51	D118	－	陶器	甕	－	(17.7)	13.6	底-6	素地－浅黄色	釉－灰オリーブ色	堅緻	
52	D126	－	染付	椀	11.0	6.1	3.9	7	素地－乳白色	釉－黄白色	堅緻	文様は印刷
53	D125	－	磁器	皿	11.0	2.3	6.8	2	素地－灰白色	釉－乳白色	堅緻	〃

第５表　第１次調査Ｂ地区上層包含層出土遺物観察表

脚などが想定でき、図では把手として復元した。土師質のフイゴ羽口45、46の内径は、45で約3㎝、46で3.8㎝を測る。46の外面および口縁部は木炭燃焼に伴う自然釉の溶着が顕著である。

47～50は数少ない中世の遺物である。龍泉窯系の青磁碗47は内面に片切り彫りの劃花文を、48は外面に蓮弁文を施す。瀬戸灰釉瓶子胴部49は外面に細い工具で文様を刻む。珠洲焼片口鉢50は口径約33㎝を測る。外側に肥厚する口縁端部は摩耗が顕著である。

51～53は近世以降の遺物である。陶器甕51の台部は釉が掻き取られ、内面には黒色タール状付着物が残る。染付碗52は口径11.0㎝、器高6.1㎝を測る。高台畳付の釉は掻き取られ、離れ砂が付着する。3本の圏線を描いた後に松竹梅文様を印刷する。磁器皿53は口径11.0㎝、器高2.3㎝を測り、畳付に離れ砂が付着する。型紙を濃青色と緑着色する。

第3節　B地区中層

1．遺　　構（第16～19図）

中層は、L・M－6～8区の約200㎡の範囲で検出した。地勢は東から西および南側に向けて緩やかに傾斜、もっとも高い地点で標高13.80m弱、もっとも低い地点で同13m強と、比高差約80㎝を測る。上層のベース土である淡灰色粗砂～砂質土を遺構覆土に、また下層包含層の暗灰褐色土をベース土とする遺構群である。

畝溝約10条、それに直交する位置関係をもつ基幹用水的な溝2条（SD5）の他、土坑2基、ピットなどを検出した。畝溝は、切り合い関係および主軸方位より主軸方位N－3°－Eを示すA群（SD6～8、10、11）と、主軸方位N－20°－Wを示すB群（SD2～4、12）に大別でき、後者の群が前出する。またA群は幅15～20㎝、深さ約5㎝と細長く浅いのに対して、B群は幅30～40㎝、深さ約15㎝と幅広で比較的深い。遺構の切り合いより、SD1・B群→SK4→SD5→A群→SK3の順に新しくなる。

中層SK3

現代の攪乱または分布調査時の試掘坑で、青灰色砂質土と暗灰褐色土が混合する。長径235㎝、短径160㎝、深さ15㎝を測る。

中層SK4

SD5に切られる不定形な浅いくぼみである。160×90㎝、深さ17㎝を測り、覆土上層の褐色砂質土より著状木製品などが出土した。

中層SD1

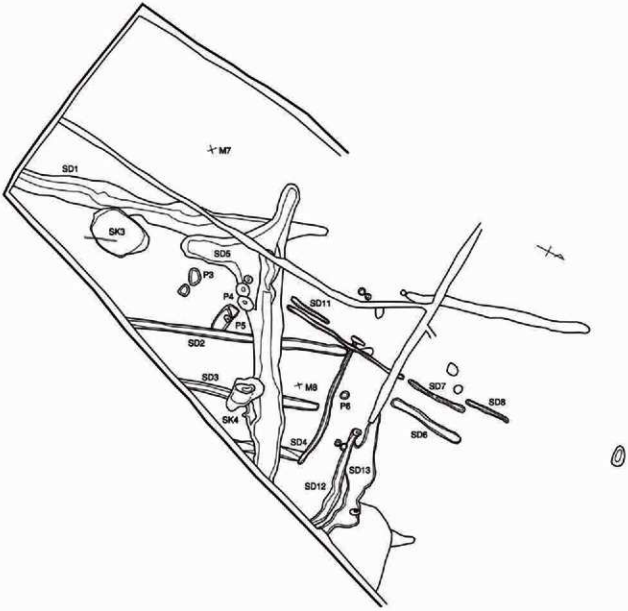
SD2～4と平行・併存し、南から北に流下する。幅70～120㎝、深さ10～30㎝を測り、底面は起伏が顕著である。また東側肩部は緩やかな傾斜であるのに対して、西側肩部は立ち上がりは急である。10～40㎝大の円石が混ざるシルト～粗砂で一時に埋まる。SD5に前出し、SD2～4を含む一耕作単位を西側で区画する溝と考えられる。SD2まで約4.6mの距離を測る。

中層SD2～4

SD1と平行・併存し、幅30～40㎝、深さ約15㎝、各溝間距離約2.2～2.4mを測る畝溝である。覆土は暗灰褐色粗砂で、底面は若干の起伏をもつ。またSD2東側肩部には約1m間隔で杭を打ち込む。

中層SD5

SD1～4に後出し、直交する位置関係にある。新旧2時期があり、当初は幅0.9～1.4m、深さ約25



第16図　Ｂ地区中層遺構配置図（Ｓ＝1/150）

cmの規模をもって直線的に掘られる。溝内に土砂が堆積した後に、南肩部を板材で土留めしながら幅40～50cm、深さ12～18cmを測る断面Ｖ字状の溝に規模を縮小してつくりかえる。その後もしばらく機能するが、円石を含む土砂（第19図土層９）の流入により一時に埋没する。墨書土器や木製品を含む多量の遺物が出土した。

中層 SD６～８、10、11

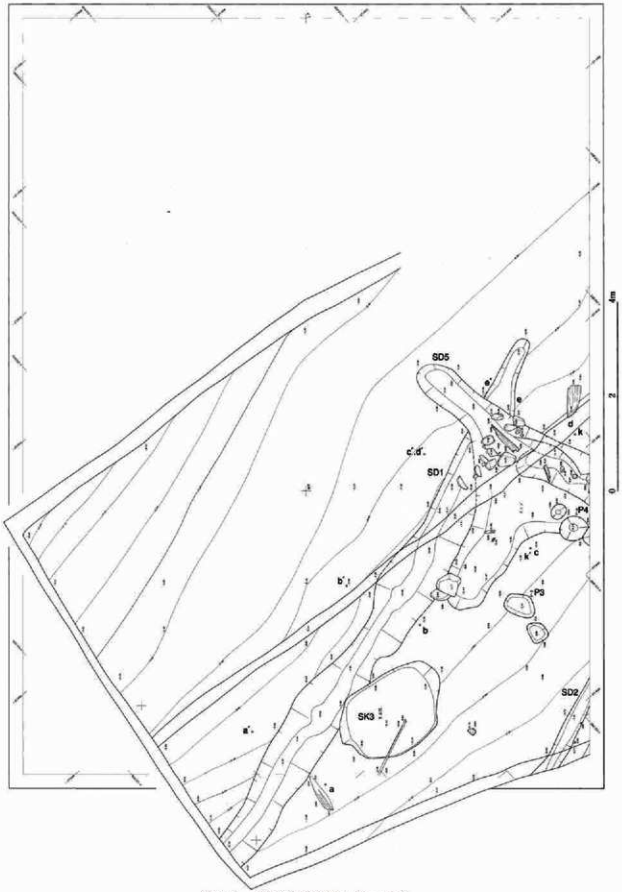
ほぼ同時期に掘られた直線的な畝溝で、SD10がもっとも古い。幅15～20cm、深さ約５cmを測り、しまった濁淡灰褐色砂質土を主体とする覆土をもつ。

中層 SD12、13

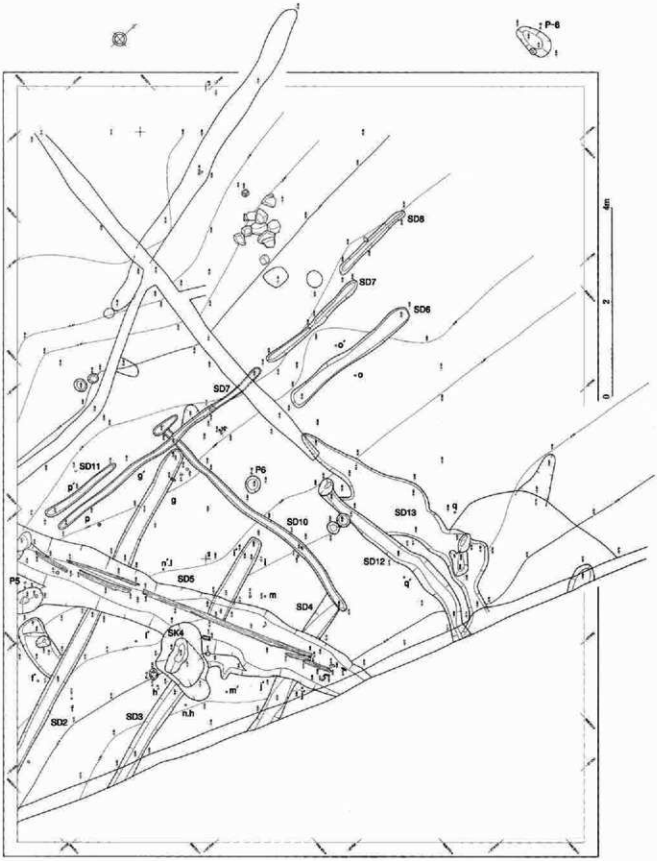
屈曲しながら東西方向に主軸方位をもつ畝溝で、SD12が後出する。覆土はSD12が暗灰褐色粗砂、SD13が淡灰色粗砂で、Ｂ群の北側を画する性格をもつ可能性がある。

中層ピット３～８

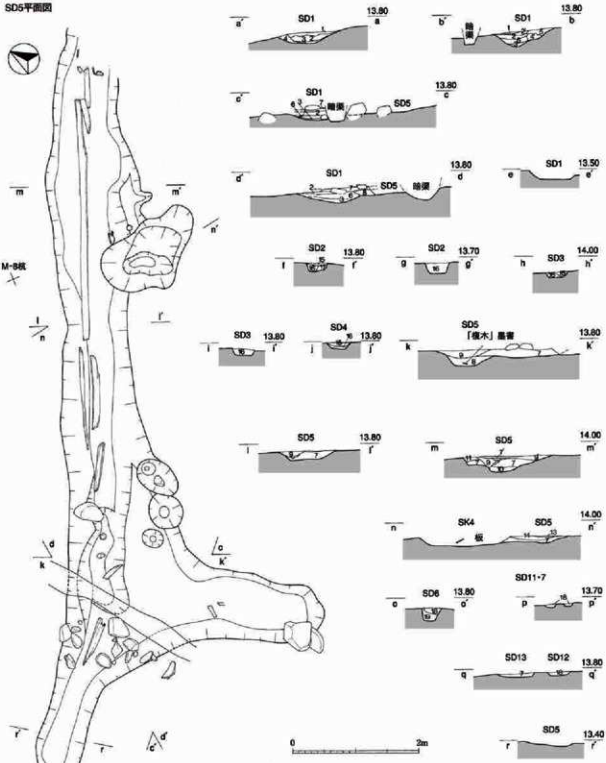
ピット３は淡茶灰色粗砂の覆土をもつ。ピット４・５はSD５に前出し、茶灰色粗砂の覆土をもつ。



第17図　B地区中層平面図1（S＝1/80）



第18図　B地区中層平面図2（S＝1/80）



1　淡灰色粘砂（やや汚れる）
2　淡緑灰色シルト～粘砂（レンズ状堆積）
2′ 2と同質土。やや褐色がかる。
3　淡褐色シルト（植物遺体混ざる）
4　濃部褐色粘砂
4′ 4と同質土。6がブロック状に混ざる。
5　淡灰色砂（暗褐色土が斑状に混ざる）
6　淡緑灰色砂（暗褐色土がブロック状に混ざる）
7　淡灰色粘砂（　〃　）
7′ 7と同質土（7より粒子細い）
8　濃部灰褐色砂質土（炭粒多く混ざる）
9　濃部灰色砂質土（植物遺体多く混ざる）
9′ 9と同質土（褐色強くなり、植物遺体が主体となる）
10　黒灰色粘砂
11　黒褐色腐植土＋緑灰色粘砂
12　黒褐色腐植土
13　茶灰色粘砂
14　褐色砂質土
15　淡緑灰色砂質土（暗灰褐色土がブロック状に混ざる）
16　暗灰褐色粘砂（淡緑灰色砂がブロック状に混ざる）
17　淡灰色砂質土
18　濃淡灰褐色砂質土（淡灰色砂がブロック状に混ざる）
19　濃淡灰褐色砂質土＋暗灰褐色砂質土（焼土）

第19図　Ｂ地区中層平・断面図（Ｓ＝1/60）

ピット６は淡青灰色シルト、中心に杭をもつピット７は淡灰色粗砂、ピット８は明茶色粗砂の覆土をもつ。Ｂ群とほぼ同時期で、建物の柱穴と考えられるものはない。

２．遺　　物（第20～25図、第７・８表）

中層 SD１

第20図54は縄文土器深鉢小破片で、口縁部に摩滅が著しく判然としないが、貝殻腹縁または櫛歯で文様をつける。

中層 SD２

須恵器有台坏55は肉厚で、使用に伴う摩耗が顕著である。第24図113、114は東側肩部に打ち込まれた杭である。径５～６㎝を測る丸材の先端を３方向より加工し、断面方形に尖らせる。地中に打ち込まれたため、先端はつぶれる。

中層 SD３・４

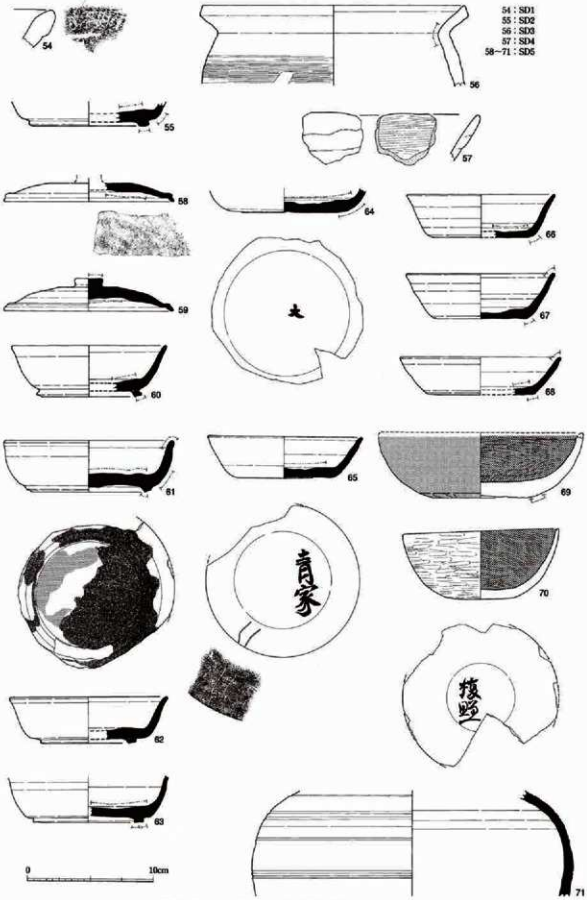
SD３出土のロクロ土師器長甕第20図56は厚手で、口径20.8㎝を測る。胴部外面に煤が付着する。SD４出土の57は棒状尖底の製塩土器と考えられ、にぶい黄橙色を呈する。内面にハケ調整が残る。

中層 SD５

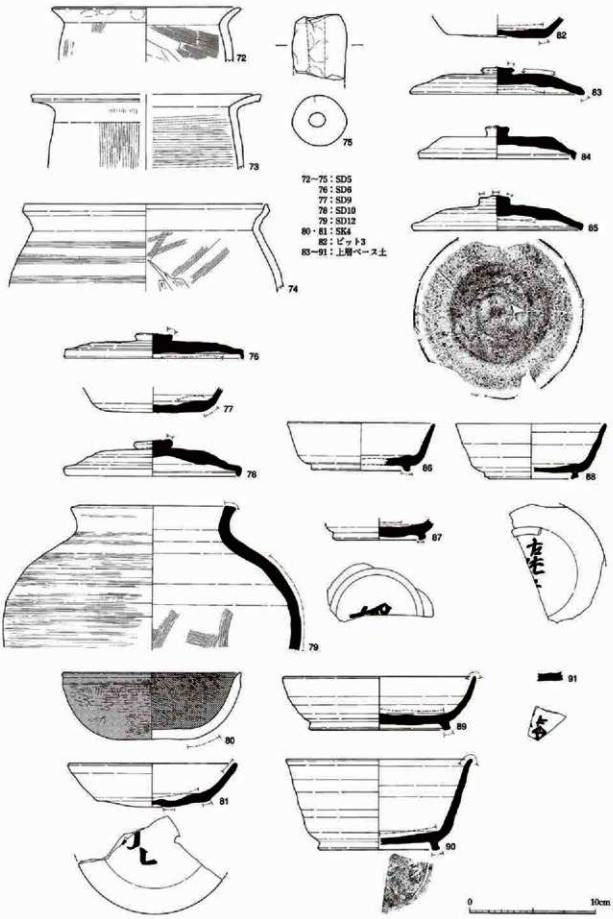
比較的多量の遺物が出土し、うち第20図58～第21図75、第24図115～第25図124を図化した。58～68は須恵器である。背の低い坏蓋58、59は口径13.3㎝を測る。58はヘラ記号を刻み、口縁部は焼きゆがむ。内面全体の摩耗と墨付着から硯へ転用したと考えられる。Ⅰ類重ね焼き痕の残る59は、天井部内面の摩耗が顕著である。有台坏60～63は、62を除き底部内面が摩耗する。深身の60は口径12.2㎝、器高4.1㎝を測り、体部は緩やかに外反する。肉厚で扁平な61は、口径13.3㎝、器高4.1㎝を測る。外面底部から体部下半にかけて黒褐色のタール状煤が吹きこぼれるように付着することから、倒位に据え置いて灯明皿に転用したと考えられる。扁平な62は焼き歪みが著しい。口径12.4㎝、器高3.7㎝を測り、口縁部は小さく外反する。底部内面に窯土が付着、窯跡出土の焼き台のような印象を受ける。63は降灰が著しく、体部は内湾気味に立ち上がる。

無台坏64～68は、底径の大きい64と、縮小した底部より体部が直線的に外傾する65～68に大別でき、いずれも摩耗痕をもつ。64は、底部外面中央に小さな文字で「大」と墨書を記す。65は口径12.2㎝、器高3.3㎝を測り、体部外面にヘラ記号「＝」を刻む。また底部外面に記された「青家」の文字は摩耗していない。薄手の66は口径11.7㎝、器高3.4㎝を測り、底部外面の一部にタール状の煤が付着する。67は口径11.7㎝、器高3.6㎝を、薄手の68は口径12.6㎝、器高3.0㎝を測り、後者の体部は内湾気味に立ち上がる。

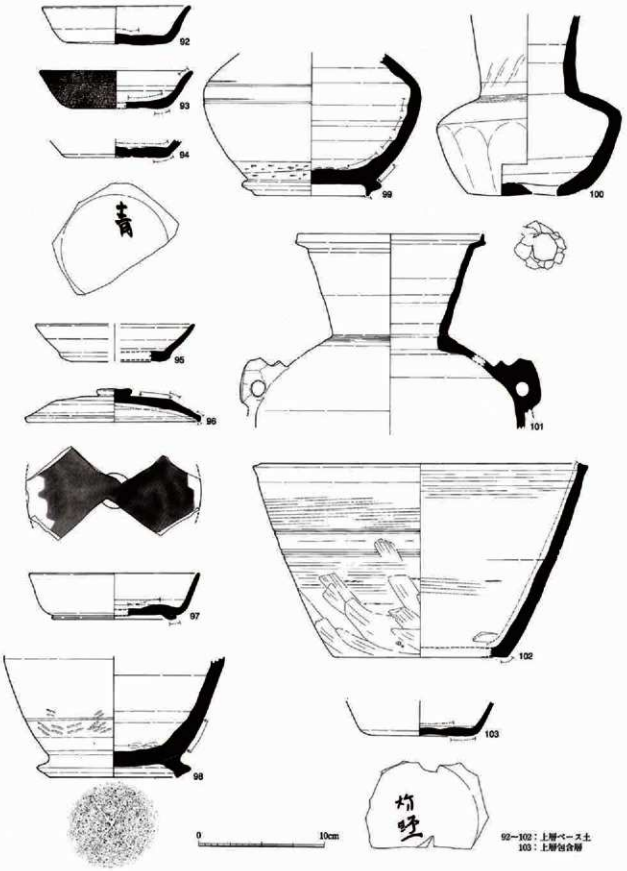
外赤内黒ロクロ土師器無台埦69は肉厚で、口径約16㎝、器高4.9㎝を測る。内面をミガキ調整、外面底部と体部の境を手持ちケズリ調整する。胎土は他のロクロ土師器供膳具と大きく異なり、砂粒が多く混ざる。内黒土師器無台埦70は、口径12.2㎝、器高5.6㎝を測り、黒色処理は体部外面上半まではみ出す。内外面ともミガキ調整を施すが、外面のそれは比較的粗い。また底部外面に記された「榎野一」の墨書文字はほとんど摩滅していない。69、70とも胎土中に海綿骨片を含む。須恵器瓶肩部71は、１本一単位と２本一単位の沈線を交互に入れて加飾する。土師器長甕72～74のうち、72・73は非ロクロ成形で、いずれも内面および口縁部外面に薄い褐色のヨゴレが付着し、外面の煤は消失して器面の赤色化が著しい。口径は72で14.8㎝、73で18.0㎝、74で19.2㎝を測る。口縁部が大きく外傾する73は、体部外面に縦方向のハケ調整を、内面にカキメ様の調整を施す。球胴形の74は外面にカキメ調整を、内面上半にハケ調整、下半にケズリ調整を施す。胎土は、他の土師器煮炊具とは異なり、金雲母、角張っ



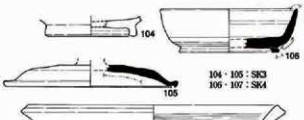
第20図　B地区中層出土遺物実測図1（S＝1/3）



第21図　B地区中層出土遺物実測図2（S＝1/3）



第22図　B地区中層出土遺物実測図3（S＝1/3）



第23図　Ｂ地区中層遺構出土遺物実測図４（Ｓ＝1/3）

た２～５㎜大の砂礫が多く混ざる。土師質の土錘75は、１枚の粘土版を丸棒に巻き付けてねじりながら成形し、一部に焼成に伴う黒斑が形成される。

第24図115～117は他の遺物とともに流れ込んだ状態で出土した。円形板115は径約17㎝を測り、側面は斜方向に加工する。116は薄い方形の板材で、長さ17.3㎝、幅3.4㎝、厚さ３㎜を測る。材はスギ。117は先端を不規則に尖らした棒で、断面は方形を呈する。一部は被熱により黒化する。118～121は、つくりかえた溝の北側肩部および底に据えた割り板材で、全て転用材と考えられる。もっとも長い120で、長さ383.6㎝、幅13.8㎝、厚さ2.6㎝を測り、一端に一辺約1.5㎝の方形孔を穿つ。長さより建物の側板の可能性をもつ。121は乾燥のため痩せているが、裏面に断面三角形の抉りが明瞭に残る。123は長さ81㎝、124は長さ73.5㎝を測る。

中層 SD６～12

第21図76～79は須恵器である。SD６出土の坏蓋76は口径14.1㎝、器高2.0㎝を測り、口縁端部を直下に折り曲げる。内面に摩耗が認められる。SD９からは無台坏77が、SD10からは口径13.6㎝、器高2.9㎝を測る坏蓋78が出土した。SD12出土の短頸壺79は、口径11.6㎝を測り、無蓋正位で焼成される。胴部外面に入念なカキメ調整を施す。

中層 SK３

第23図ロクロ土師器有台埦104は内屈気味の台部をつける。軟質のため全体が摩滅する。平笠形の須恵器坏蓋105は口径13.4㎝を測り、口縁端部を内側に折り曲げる。Ⅱ類重ね焼き痕が認められる。第24図110の横櫛は幅9.1㎝、高さ4.1㎝を測り、茶褐色の皮膜をもつ。近世以降の所産。

中層 SK４

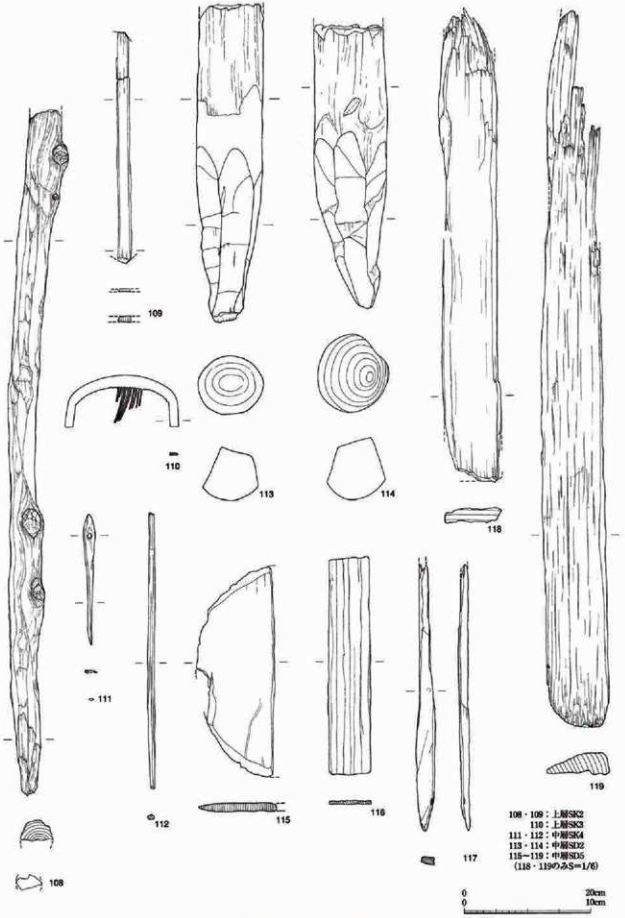
第21図80は深身の外赤内黒非ロクロ土師器で口径14.0㎝、器高5.3㎝を測り、ナデ調整により口縁端部の器肉を急激に減ずる。内面にミガキ調整、外面にハケ調整の後にミガキ調整、底部外面に手持ちケズリ調整をそれぞれ施す。還元の弱い須恵器無台坏81は口径13.2㎝、器高3.4㎝を測り、台状の底部から大きく外傾する体部が立ち上がる。全体に摩耗が著しく、底部外面の２文字の墨書の文字は判読が難しい。第24図須恵器有台坏106は口径10.7㎝、器高3.5㎝を測り、小さい台部が外展する。ロクロ土師器長甕107は口径19.7㎝を測り、胴部にカキメ調整を加える。外面に煤や粘土が、内面には黒褐色のヨゴレが付着する。第24図111は長さ10.3㎝を測り、肥厚した頭部に径３㎜の孔を穿つ。紐通し用の木針の可能性をもつ。112は断面略円形の箸状木製品で、長さ21.9㎝を測る。

中層ピット

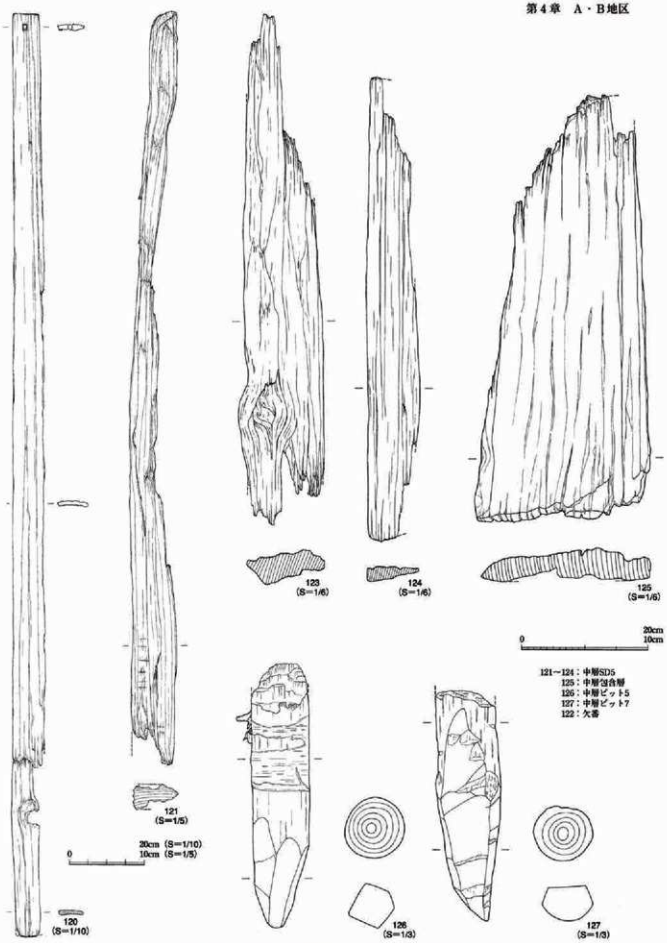
ピット３より第21図82の須恵器無台坏が出土した。器肉は薄く、体部は外傾する。ピット５より第25図126の径4.7㎝を測る杭が、またピット７より第25図127の径5.2㎝を測る杭がそれぞれ打ち込まれる。ともに先端を粗く加工する。

包含層出土遺物

第21図83～第22図103の須恵器を図化した。坏蓋83は口径13.5㎝、器高2.2㎝を測り、口縁端部の折り返しはないに等しい。天井部内面は摩耗が顕著である。平笠形を呈する84は、口径12.3㎝、器高2.6㎝を測り、使用に伴う摩耗は認められない。強い還元を受けた85は、口径13.2㎝、器高2.8㎝を測り、天



第24図　B地区上・中層出土木製品実測図（S＝1/3・1/6）



第25図　B地区中層出土木製品実測図（S＝1/3・1/5・1/6・1/10）

井部内面は不整方向ナデ調整を加えた後にヘラ記号「／」を細く刻む。天井部内面は摩耗が著しい。また84・85にⅠ類重ね焼き痕が残る。

86～90は有台坏である。箱形を呈する86は、口径11.6㎝、器高3.8㎝を測り、内外面とも降灰が溶着する。無蓋焼成と考えられる。肉厚の87は底部外面に墨書を記すが、文字の摩滅のため判読は難しい。薄手の88は口径11.9㎝、器高4.4㎝を測り、つくりの丁寧な台部を内屈して貼る。底部外面中央に墨書「左□□」が明瞭に残る。扁平な89は口径15.2㎝、器高4.2㎝を測り、体部は内湾気味に立ち上がる。ロクロ目が目立ち、底部外面は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。深身の90は口径14.6㎝、器高7.2㎝を測り、底部外面にヘラ記号「／」を刻む。

91～95は無台坏で、95を除き使用に伴う摩耗が認められる。91は、底部外面に小さく墨書を記すが、その文字は判読できない。扁平な92は口径11.5㎝、器高3.2㎝を測り、底部外面には煤が付着する。93は口径11.9㎝、器高3.0㎝を測り、口縁部は緩やかに外反する。外面に薄い煤が、また口縁部内面に幅約5㎜程度の帯状のヨゴレが付着することから、正位で二次被熱を受けたことがわかる。94の体部は大きく外傾し、底部外面に若干崩れた文字で墨書「青」を記す。95の底部は台状を呈し、体部は屈曲しながらたちあがる。山笠形の坏蓋96は口径13.7㎝、器高2.6㎝を測り、口縁端部は断面三角形を呈する。硯に転用したため、底部内面に墨が付着する他、内面全体が滑らかとなる。扁平な有台坏97は、口径13.4㎝、器高3.7㎝を測り、扁平な台部が外展する。瓶98は、胴部外面下端を平行叩きで成形した後にケズリ調整を加える。また底部外面にヘラ記号「×」を刻む。長頸瓶99は、台部先端が嘴状にのびる。胴部内面に摩耗痕が残ることより、胴部上部を欠損後、貯蔵以外の用途に転用した可能性をもつ。瓶100は、堅緻に焼成した後で、底部に径約2㎝の孔を外側より穿つ。また口縁部には、ほぼ水平な欠損が連続し、意図的に割り揃えた可能性が高い。双耳瓶101は口径14.6㎝を測り、口縁端部を上方に嘴突させる。還元の弱い鉢102は口径25.2㎝、器高15.3㎝を測り、体部外面を回転ナデ調整の後に板状工具でなで上げる。使用に伴い内面全体が摩耗する。還元の弱い無台坏103は薄手で、底部外面に「榎野一」と墨書するが、摩滅のため文字はかすれ気味である。第25図125は、石や礫に混ざり出土した割り板材で、長さ67.7㎝、幅27.9㎝、厚さ6.3㎝を測る。

図版番号	実測番号	遺構名	器種	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	木取り	同定番号	備考
24-108	247(№70)	上層 SK2-①	棒状木製品	108.5	5.2	3.4	辺材		
109	131	上層 SK2	棒状木製品	18.5	1.1	0.5		44	アカマツ

第6表　B地区上層出土木製品観察表

（　）は残存法量を示す。

図版番号	実測番号	遺構名	器種	長さ(㎝)	幅(㎝)	厚さ(㎝)	木取り	同定番号	備考
24-110	81	SK3	横櫛	幅9.1	高4.1	厚0.3			全面茶褐色。漆塗りか。
111	42-1	SK4	有孔針状木製品	10.3	1.0	0.3	辺材	22	スギ、頭部肥厚。孔1ヶ所径0.3。
112	42-2	SK4	著状木製品	21.9	4.5	0.5	辺材		断面楕円形。
113	131	SD2 №2③	杭	(25.2)	径4.6～5.2	—	芯持ち材	44	アカマツ、先端1/4未加工。つぶれる。
114	132	SD2 №②④	杭	(22.6)	径5.8～6.2	—	芯持ち材	45	アカマツ、先端1/4未加工。
115	51	SD5 №12	円形板	16.6	—	0.7	柾目どり	27	ケヤキ、縁辺部片面薄く削る。
116	50	SD5 №8下	板状木製品	17.3	3.4	0.3	辺材	26	スギ
117	61	SD5	棒状木製品	(21.2)	1.6	0.9	辺材	31	アカマツ、先端肥厚、一部炭化。
118	234(№68)	SD5 №8	板状木製品	74.1	9.3	2.4	辺材	179	クリ
119	232(№85)	SD5-№10	部材	(113.7)	9.9	3.5	辺材	177	クリ、割材。
25-120	278(特5)	SD1	建築部材	383.6	13.8	2.6	辺材		方形孔1ケ所。
121	230(№87)	SD5-№9	部材	157.1	9.3	5.2	辺材	175	クリ、幅・深さ約1.5cmの断面三角形のえぐり。
123	231(№91)	SD5 №3	部材	81.1	13.6	5.5	辺材	176	スダジイ、断面略方形、割材。
124	233(№89)	SD5 №15	板状木製品	73.5	8.2	2.4	辺材	178	スギ
125	237(№116)	レキ群集中ベース・包含層	部材	67.7	27.9	6.3	辺材	182	スダジイ
126	133	P5	杭	(21.0)	径4.7	—	芯持ち材	46	サクラ属、樹皮付き。先端つぶれる。
127	134	P7	杭	(18.2)	径5.2～4.3	—	芯持ち材	47	アカマツ、平円部のみ先端加工。

第7表　B地区中層出土木製品観察表

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(/12)	色調(外面)	色調(内面)	胎土	備考
20- 54	D319	L-M-7	SD1	縄文土器	深鉢	—	(3.1)	—	小片	灰黄褐色	灰黄褐色	微砂	中期
55	D434	L-M-7	SD2	須恵器	有台坏	—	(1.9)	9.6	底-3	淡黄色	明青灰色	f	Ｂ期
56	D645	M-7·8	SD3	土師器(ロクロ)	長甕	20.8	(6.4)	—	1	淡黄色	淡黄色	ク	
57	D300	L-9-1	SD4	製塩土器	尖底	—	(4.1)	—	小片	に赤い黄橙色	に赤い褐色	微砂が多く混ざる	
58	D582	M-8	SD5	須恵器	坏蓋	13.3	(1.5)	—	1	青灰色	青灰色	f	転用硯。ヘラ記号「＝」か
59	D539	M-8	SD5	須恵器	坏蓋	13.3	2.6	縁径2.2	2	青灰色	青灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、C期
60	D462	M-8	SD5	須恵器	有台坏	12.2	4.1	8.5	1	灰色	灰色	c	
61	D455	M-8	SD5	須恵器	有台坏	13.3	4.1	10	1	灰色	灰色	f	底部外面タール状付着物
62	D499	M-8	SD5	須恵器	有台坏	12.4	3.7	7.6	3	灰色	灰色	f	Ｂ期
63	D496	M-8	SD5	須恵器	有台坏	—	(3.7)	8.8		灰色	灰色	e	Ｃ期
64	特75	L-7,M-7·8	SD5、東埋排水溝	須恵器	無台坏	—	(1.7)	9.4		灰色	灰色	c	墨書「大」、Ｂ期
65	特28	L-7,M-7·8	SD5吸り上げ No.13	須恵器	無台坏	12.2	3.3	7.8	9	灰色	灰オリーブ色	e	ヘラ記号「＝」、墨書「背家」、Ｄ期
66	D279	L-7,M-7·8	SD5	須恵器	無台坏	11.7	3.4	7.6	3	灰色	灰色	a	底部外面煤付着、Ｃ期
67	D275	L-7,M-7·8	SD5	須恵器	無台坏	11.7	3.6	7.7	3	灰色	灰色	e	Ｃ期
68	D416	L-M-7	SD5	須恵器	無台坏	12.6	3	8.8	小片	明灰黄色	明灰黄色	a	Ｂ期
69	D226	M-8-1	SD5、上層ベース土	外面内黒土師器	無台碗	約16	9.9	7.8	底-10	に赤い赤褐色	黒色	イ	
70	特83	L-7,M-7·8	SD5	内面黒色土師器	無台碗	12.2	5.6	5.4	3	に赤い黄橙色	黒色	イ	墨書「榎野一」、Ｄ期
71	D335	L-7·8	SD5、包	須恵器	瓶	—	(8.4)	—		灰色	灰色	f	
21- 72	D651	M-8	SD5	土師器(赤ロクロ)	長甕	14.8	(4.3)	—	3	に赤い黄橙色	に赤い赤褐色	ケ	
73	D647	M-8	SD5	土師器(赤ロクロ)	長甕	約18	(6.0)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	ケ	
74	D648	M-8	SD5	土師器(ロクロ)	長甕	19.2	(7.0)	—	1	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	礫、粗砂	
75	D294	L-7,M-7·8	SD5	土製品	土錘	長3(5.2)	径4.3		2	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	ウ	残重量91.0ｇ
76	D573	L-8	SD6	須恵器	坏蓋	14.1	2.0	縁径2.9	1	青灰色	青灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、Ｃ期
77	D752	M-7	SD9	須恵器	無台坏	—	(2.1)	8.2	小片	灰色	灰色	e	Ｃ期
78	D591	L-7·8,M-8	SD10	須恵器	坏蓋	13.6	2.9	縁径3.1	2	灰色	灰色	e	Ｃ期
79	D349	M-8-1	SD12-包	須恵器	壺	11.6	(11.3)	—	小片	灰色	灰色	e	無蓋
80	D218	M-8-1	SK4	外面内黒土師器	無台碗	14.0	5.3	6.5	1	明赤褐色	黒色	エ	
81	特33	K-10	SK4	須恵器	無台坏	13.2	3.4	9.2	3	に赤い黄色	に赤い黄色	h	墨書「□□」、Ｄ期
82	D418	M-7	P3	須恵器	無台坏	—	(1.7)	7.8		灰色	灰色	e	Ｃ期
83	D768	L-8-1	上層ベース土	須恵器	坏蓋	13.5	2.2	縁径2.6	6	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、Ｃ期
84	D777	M-8-1	上層ベース土-包	須恵器	坏蓋	12.3	2.6	縁径1.9	1	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、Ｃ期
85	D559	L-8-1·2、M-8-1	上層ベース土	須恵器	坏蓋	13.2	2.8	縁径2.4	9	灰色	灰色	f	ヘラ記号「／」
86	D782	M-8-1	上層ベース土-包	須恵器	有台坏	11.6	3.8	7.8	1	灰色	灰色	e	
87	特81	L-8-2	上層ベース土	須恵器	有台坏	—	(1.3)	—		灰色	灰色	e	墨書
88	特91	L-7·3-4	上層ベース土	須恵器	有台坏	11.9	4.4	7.8	2	灰色	灰色	e	墨書「A(□□」、Ｄ期
89	D494	L-7	包含層吸り上げ№2	須恵器	有台坏	15.2	4.2	11.3	1	灰色	灰白色	i	墨書
90	D501	L-7·3-4	上層ベース土	須恵器	有台坏	14.6	7.2	9.6	1	灰色	灰色	e	ヘラ記号「／」、Ｄ期
91	特78	L-7·3-4	上層ベース土	須恵器	無台坏	—	—	—		黄灰色	黄灰色	e	墨書
22- 92	D427	M-7·1-3、M-8-2	上層ベース土-包	須恵器	無台坏	11.5	3.2	8.6	4	灰色	灰色	e	外面煤付着
93	D406	L-7·3-4	上層ベース土	須恵器	無台坏	11.9	3	8.4	1	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	a	二次被熱痕、Ｃ期
94	特79	L-8-1	上層ベース土	須恵器	無台坏	—	(1.3)	—		灰色	灰色	h	墨書「青」、Ｄ期
95	D408	L-7·3	上層ベース土	須恵器	無台坏	約13	3.0	約9	小片	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	e	Ｄ期
96	D537	L-8-1	上層ベース土	須恵器	坏蓋	13.7	2.6	縁径2.7	1	灰色	灰色	e	硯に転用、Ｃ期
97	D485	L-8-1	上層ベース土	須恵器	有台坏	13.4	3.7	10.0	小片	灰色	灰色	f	Ｂ期
98	D337	L-8-2	包含層吸り上げ№1	須恵器	瓶	—	(9.6)	12.2	底-12	灰色	灰色	f	ヘラ記号「×」
99	D354	L-7-3	上層ベース土	須恵器	長頸瓶	—	(11.3)	11.0	底-9	明オリーブ灰色	灰色	e	
100	D360	L-8-1~3	包(遺構群検出面)	須恵器	壺	—	(14.3)	9.4	8	暗青灰色	暗青灰色	e	底部穿孔
101	D366	L-7·4、L-8·2、L-11·3	上層ベース土	須恵器	双耳瓶	14.6	(16.0)	—	4	青灰色	青灰色	e	
102	D659	L-7·2·3、L-8·2	上層ベース土	須恵器	鉢	25.2	15.3	13.9	4	灰黄色	淡黄色	e	内面摩耗
103	特72	L-7,L-8-4	包含層	須恵器	無台坏	—	(2.6)	9.4	底-4	灰色	灰色	d	墨書「榎野一」、Ｃ期
24-104	D737	M-7-1	SK3	土師器(ロクロ)	有台碗	—	(1.6)	7.5		浅黄橙色	浅黄橙色	エ	
105	D582	M-7-1	SK3	須恵器	坏蓋	13.4	(1.8)	—	2	青灰色	青灰色	h	Ⅱｂ類重ね焼き、Ｄ期
106	D473	M-7-3	SK4	須恵器	有台坏	10.7	3.5	7.9	4	灰色	灰色	d	Ｃ期
107	D649	M-7-3	SK4	土師器(ロクロ)	長甕	19.7	(5.6)	—	3	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	コ	

第８表　Ｂ地区中面出土遺物観察表

第４節　Ａ・Ｂ地区下層

Ａ・Ｂ地区で奈良時代～平安時代前期の良好な集落・耕作域を確認した。集落域は南方向を除き調査区外にのびる。集落域では掘立柱建物25棟、竪穴建物３棟、井戸１基、溝・柱穴多数を検出、その分布は調査区中央をほぼ南東一北西方向に縦断する溝群（Ｂ地区 SD21、23）を挟んで大きく２グループに分けられる。またＡ地区南半分（L-３～５区）は、扇状地形扇端部の地形変換点にあたり、溝と空閑地（幅約10ｍ）を経て耕作域に転じ、耕作に係る溝多数を確認した。以下、建物より順に記す。

１．掘立柱建物、整地土など

Ａ、Ｂ地区で25棟の掘立柱建物を復元した（第27図）が、調査区外へ柱穴がのびる等、未確定な建物を含む。前述の溝群（Ｂ地区 SD21、23）を挟み、西側建物群と東側建物群の２グループに大別でき、各グループとも新しい段階で中心的建物の建築に先立ち、粘土混じりの土砂を盛る整地作業を実施する。西側建物群にはＳＢ１～13が属し、K･L-５～７区の同一エリアで複数回建て替えをおこなう。建物の主軸方位はＮ-14～35°-Ｗを示し、前述の溝群に規制された感が強い。柱掘方は、比較的小径（50～70㎝程度）で、略方形を基調とするものが多い。一方、東側建物群はSB14～25が属し、主軸方位は西側建物群とは異なり、Ｎ-14～45°-ＷとＮ-43～64°-Ｅに分布する。大型で円形・楕円形を呈する柱掘方が目立ち、もっとも大きなものでは長径約1.7ｍを測る。各掘立柱建物の規模は第９表のとおりである。なお倉庫などの高床構造をもつ総柱建物は明確に検出していない。

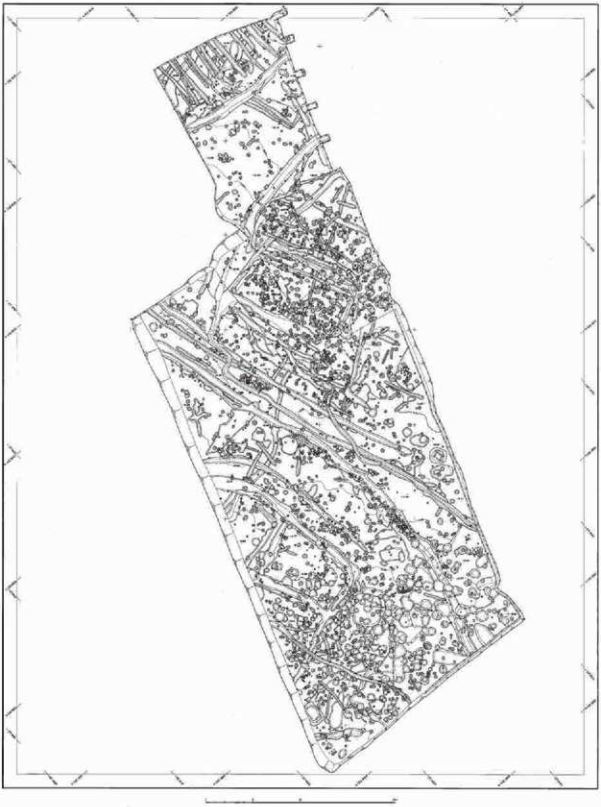
Ａ地区整地土（第29、30図）

L･K-５・６区の南北約８ｍ×東西約７ｍの範囲で行われた粘土を多用した整地作業である。ＳＢ１内の作業範囲はＰ87とＰ３を結んだラインより南側、またＳＢ１外部の作業範囲は南側梁行幅約２ｍ、東側桁行南半幅約２ｍとなる。整地作業は、下層包含層上面に、他所より持ち込んだ暗黄色～淡緑色粘土と黒褐色砂質土（10㎝程度の小石混ざる）の混合土を厚さ20～30㎝で敷き詰め、最終段階に厚さ約５㎝の黄褐色～暗黄色粘土で床面を貼る。

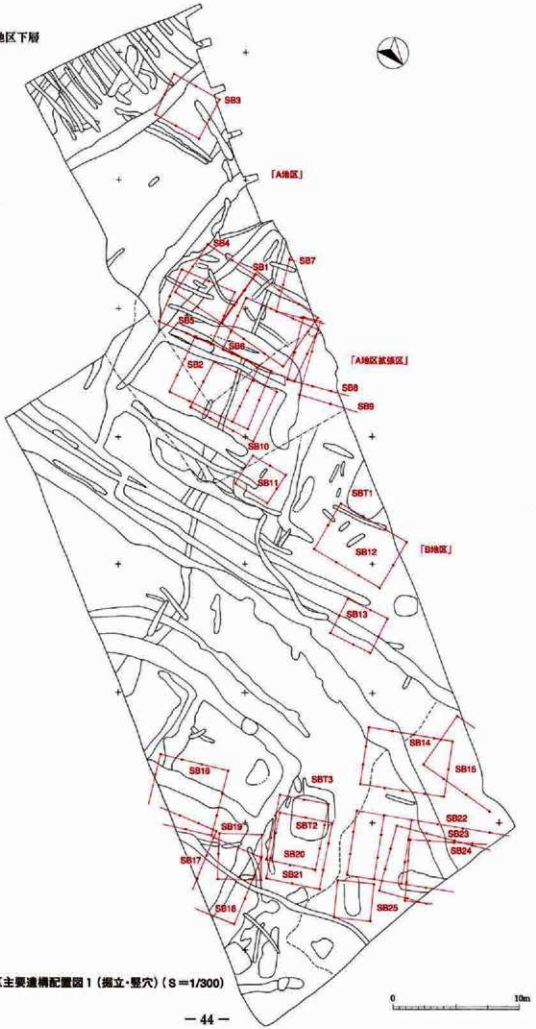
またＳＢ１の南側梁行に添った箇所に「火処」痕跡を確認している（第29図）。「火処」は、南側梁行より約1.3ｍ北側、東側桁行より約1.6ｍの地点に炉中心部分をもつ。炉中心部分は径約30㎝、深さ12㎝を測り、硬くしまった灰・炭混ざりの黄褐色粘土が充填される。それを取り囲むように、幅40～70㎝を測る半環状の強い被熱痕を残す粘土床が分布、北東側に開口部をもつようだ。粘土床の色調は橙色～淡橙色を呈する。また被熱痕の外側には、北側に長軸をもつ床面の汚れ部分（南北約1.5ｍ×東西約３ｍ、灰･焼土粒･炭粒の混ざる褐色粘質土）を確認している。以上の炉中心部分を含めた範囲は、床面下の造作をもち、炉中心部分を島状に残して幅約50㎝、深さ約５㎝の環状の溝を掘削する。この溝は長さ約80㎝×幅約70㎝×深さ数㎝の規模で舌状に北側へのび、排煙施設に係る基礎作業とも考えられる。さらに、「火処」の北西側には炭粒が多く混ざる褐色粘質土が、ＳＢ１外部西側および南東側には硬くしまった暗黄色粘土が分布する。この「火処」痕跡は、整地作業を含めて小鍛治などの生産に係る痕跡の可能性を考えている。その場合、第30図のＳＢ１外部の粘土床のうち、硬くしまった暗黄色粘土の範囲に何らかの施設が存在したといえよう。

この整地作業は、Ａ地区区画溝群（後述）を廃絶、また中層遺構群ＳＢ１・４、Ａ地区（およびＡ地区 SD３）の基盤作業と位置づけられる。

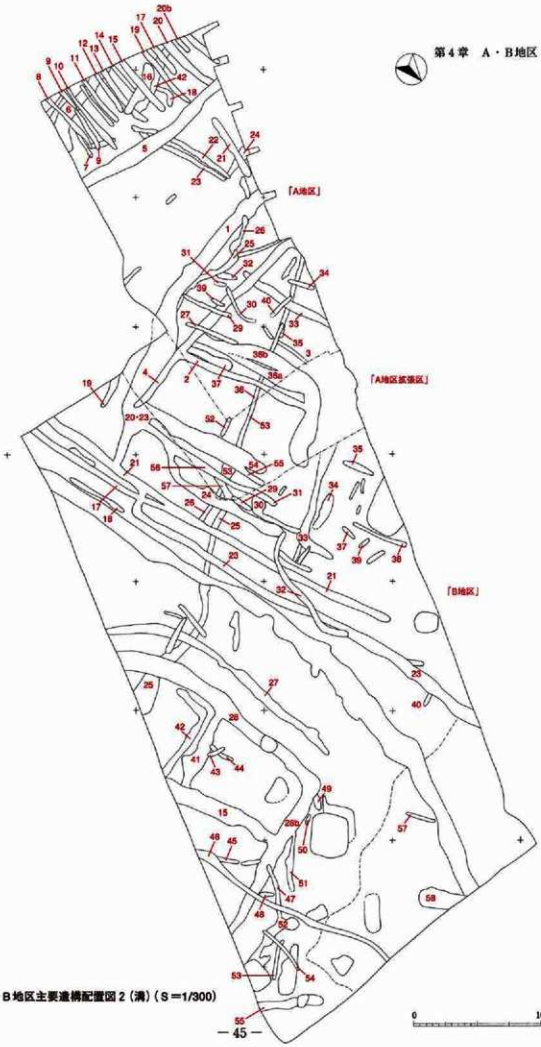
整地土より若干の土器破片、鉄滓が出土した。ロクロ土師器長甕第45図128は口径20.4㎝を測り、摩



第26図　Ａ・Ｂ地区平面図（Ｓ＝1/400）



第27図　Ａ・Ｂ地区主要遺構配置図１（掘立・竪穴）（Ｓ＝1/300）



第28図　Ａ・Ｂ地区主要遺構配置図２（溝）（Ｓ＝1/300）

西側建物群

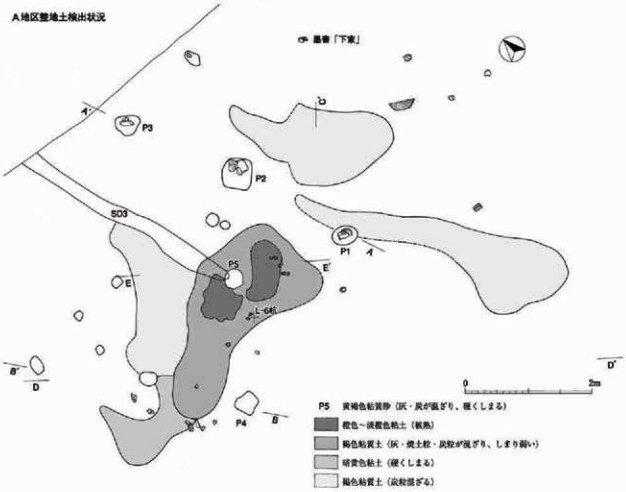
掘立柱建物番号	グリッド名	規模（間）	桁行寸法（m）	桁行柱間寸法（m）	梁行寸法（m）	梁行柱間寸法（m）	面積（㎡）	掘方形状	掘方大きさ（cm）	主軸方位
SB1（A1掘立）	K-5・6	側3×3	東 6.10	2.20+2.00+1.90	北 4.80 南 4.80	1.30+1.80+1.70 1.55+1.55+1.70	29.3	略方	50～70	N-14°-W
SB4	L-5	側2×2・3	東 4.30 西 4.60	2.15+2.15 2.20+2.40	北 4.80 南 4.50	1.55+1.55+1.70 2.10+2.40	19.4	円、略方	50～60	N-14°-W
SB1・4同一建物の場合		側5×2・3	東 10.40		北 9.60 南 9.30		48.7			N-14°-W
SB2	L・K-6	側4×3	5.60	1.55+1.60+1.35+1.10	北 4.80 南 4.80	2.00+1.50+1.30 2.00+1.30+1.50	26.9	円、略方	30～70	N-24°-W
SB3	L-4	側2×2	東 4.00 西 4.20	1.85+2.15 1.90+2.30	北 3.50 南 3.55	1.80+1.70 1.78+1.77	14.4	円	30～60	N-20°-E
SB5	L-5・6	側2×2	東 4.60	2.20+2.40	4.50	2.25+2.25	20.7	略円	30～55	N-23°-W
SB6	K-6	側3×3・2	東 6.20	2.10+2.10+2.00	北 4.50 南 4.50	2.20+2.30 1.50+1.50+1.50	27.9	円、略方	50～90	N-25°-W
SB7	K-5	側1～×2～	南 4.00～	2.00+2.00+	東 2.00～	2.00+	8 ～	略方	50～70	N-34°-W
SB8	K-6	側2～×2	東 4.00～	2.00+2.00+	南 5.20	2.80+2.40	20.8～	円、略方	60～90	N-35°-W
SB9（A2掘立）	K-6	側1～×1	南 3.50	3.50	東 2.50～	2.50+	8.8～	略方	60～110	N-32°-W
SB10	K-6	側2×2か	東 3.90 西 3.50	1.80+2.10 3.50	北 4.10 南 3.90	1.90+2.20 1.60+2.30	15.2	略方	35～70	N-21°-W
SB11	K-7	側2×1？	東 2.90 西 3.00	2.90 1.50+1.50	北 2.60 南 2.70	2.60 2.70	8.1	略方	40～70	N-20°-W
SB12（B2掘立）	J-K-7	側3×2	6.00	2.00+2.00+2.00	4.10	1.90+2.20	24.6	円、略方	70～90	N-18°-W
SB13	K-8	側2？×2？	3.60	2.10+1.50	3.20	1.60+1.60	11.5	円	30～60	N-24°-W

東側建物群

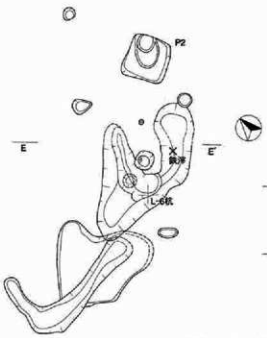
掘立柱建物番号	グリッド名	規模（間）	桁行寸法（m）	桁行柱間寸法（m）	梁行寸法（m）	梁行柱間寸法（m）	面積（㎡）	掘方形状	掘方大きさ（cm）	主軸方位
SB14（B3掘立）	J-K-9	側4×3・2	6.70	1.60+1.60+1.60+1.90	南 4.50 北 4.50	1.50+1.50+1.50 2.25+2.25	30.2	円、略方	70～130	N-42°-W
SB15	J-9	側3～×2？	東 6.40～	2.00+2.20+2.20+	南 2.30～	2.30+	14.7～	円	50～80	N-14°-W
SB16（B1掘立）	L-9	側3×3・4	北 － 南 5.55	1.85+1.85+1.85	北 5.40 南 －	1.80+1.80+1.80	30.5	長方、略方	60～110	N-37°-W
SB17	L-10	側2～×2～	4.00～	2.00+2.00+	3.10	1.55+1.55+ (1.55？)	12.4～	円	60～80	N-64°-E
SB18	K・L-10	側3×1	5.60	1.80+1.80+2.00	4.10	4.10	23.0	円、略方	50～90	N-64°-E
SB19	K・L-10	側2×1	東 3.50	1.50+2.00	3.50	3.50	12.3	方、略方	40～70	N-43°-E
SB20	K-9・10	側3×2	5.25	1.75+1.75+1.75	3.80	1.90+1.90	20.0	円、略方	40～110	N-50°-E
SB21	K-10	側3×2	5.20	1.75+1.80+1.65	4.20	2.10+2.10	21.9	方、略方	70～100	N-52°-E
SB22（B4掘立）	J-K-10	5～×3	10.30～	2.15+2.15+2.00+2.00 +2.00+	5.10	1.70+1.70+1.70	52.3～	円	100～170	N-39°-W
SB23（B5掘立）	J-10	側2×3	4.80	2.40+2.40	5.10	1.70+1.70+1.70	24.5	円	60～140	N-35°-W
SB24	J-10	側3～×3	4.95～	1.65+1.65+1.65+	4.80	1.60+1.60+1.60	23.8～	円	60～80	N-45°-W
SB25	K-10	1×1	3.00	3.00	3.00	3.00	9.00	円	60～80	N-45°-W

第9表　A・B地区掘立柱建物規模一覧

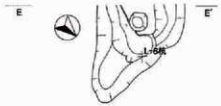
A地区整地土検出状況

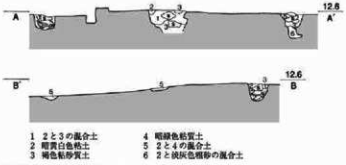


A地区整地土完掘状況1



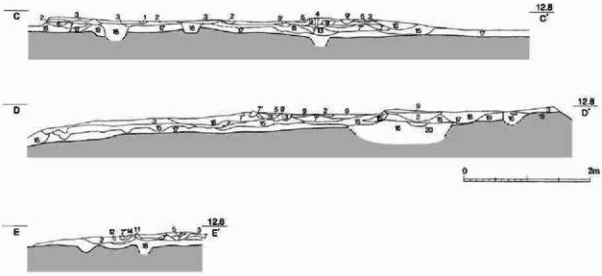
A地区整地土完掘状況2





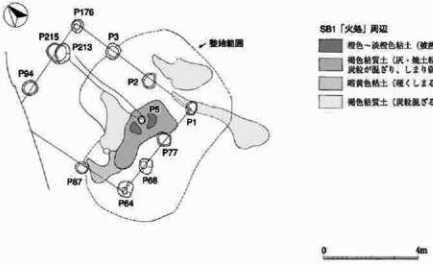
第29図　A地区整地土周辺実測図1（S＝1/60）

Ａ地区整地土層



1　黒色炭灰層
2　暗黄色粘土
3　褐色粘砂質土
4　赤褐色粘質土（炭粒が混ざる）
5　黄褐色粘質土（炭粒、焼土粒が混ざる）
5'　黄褐色粘質土（褐色粘質土が混ざる）
6　２と下の混合土
7　黒褐色砂質土
7'　黒褐色砂質土（淡緑色粘質土、炭粒、焼土粒が混ざる）
7''　黒褐色砂質土（淡緑色粘質土、炭粒、焼土粒が多く混ざる）
8　３と暗黄白色砂の混合土
9　褐色粘質土と淡緑色粘質土の混合土（炭粒、焼土粒が多く混ざる）
9'　褐色粘質土と淡緑色粘質土の混合土（後者主体。炭粒、焼土粒が多く混ざる）
10　褐色粘質土と淡緑色粘質土の混合土（後者主体。炭粒、焼土粒が多く混ざる）
11　５と同質土
12　黒色粘質土（炭が多く混ざる）
13　２と同質土
14　２と同質土
15　褐色砂質土
15'　褐色砂質土（粒子荒い）
16　黒褐色砂質土
17　黄白色砂
18　16と同質土
19　暗黄白色砂
20　灰黄色砂

Ａ地区整地土層、SB1配置図



第30図　Ａ地区整地土周辺実測図２（Ｓ＝1/60・1/160）

滅が著しい。胎土中に１～２㎜大の赤色粒が多く混ざる。

SB１、SB４（第31・32図）

梁行柱穴の共有、主軸方位・柱間寸法の近似性から間仕切りをもつ１棟の側柱建物（５×２・３間、床面積約48.7㎡）の可能性をもつが、柱根遺存の有無・柱抜き取り穴の埋土の相違性を重視し、別個の建物として報告する。SB１は大規模な整地作業（Ａ地区整地土）を伴う３×３間の側柱建物で、主軸方位Ｎ－14°－W、桁行6.10ｍ×梁行4.80ｍ、床面積約29.3㎡を測る。柱間寸法は、桁行が約200㎝を測るのに対して、梁行は130～180ｍと不均等となる。いずれの柱穴とも柱根は遺存せず、底面のいくつかには径約15㎝の柱の沈降痕跡が認められる。柱抜き取り後に、20㎝程度の自然石１～数個と黄色粘土を用いて、硬く丁寧に埋め戻す点が特筆される。Ｐ１柱抜き取り穴は、完形の須恵器短頸壺（第45図135）を打ち割った後に埋納、その上面にほぼ水平に据え置いた１個の自然石を置いている（写真図版８）。またＰ２では柱抜き取り後に、底面に上半部を欠損した黒色漆器椀（第45図136）を傾けて据え置き、その上に長軸約35㎝を測る平面三角形の自然石を水平に配する。そして、その上面を自然石４個と粘土で埋め込む（写真図版８）。両者とも建物廃棄に伴う祭祀行為と考える。なお建物内での「火処」痕跡を確認しており、その状況はＡ地区整地土の項で述べた。中層遺構群に属し、下層遺構群のＡ地区SD33、Ａ地区SD36bより後出する。

柱穴から第45図129～136が出土した。129、130は須恵器坏蓋である。山笠形を呈する129は、口径15.4㎝を測り、扁平で大型の鍵をつける。平笠形を呈する130は口径12.0㎝を測り、天井部外面はナデ調整で済ませる。天井部内面は倒位の使用により円滑となる。131、132は須恵器有台坏で、131は扁平な台部を外展して貼り付ける。外面の降灰が著しい。132は口径12.4㎝を測る。133、134は非ロクロ外赤内黒土師器無台椀である。133の外面は、手持ちケズリ調整を施した後に、口縁部にナデ調整を加える。内面のミガキ調整は、非常に細かい単位である。134は体部よりなだらかに湾曲しながら口縁部にいたる。内外面とも小剥離が目立つ。須恵器短頸壺135は口径11.6㎝、器高24.8㎝を測る。体下半部外面に丁寧なケズリ調整を施した後に、外展する台部を貼り付ける。136は黒色漆器椀で、底径14.0㎝、体部最大径17.6㎝、残存高5.5㎝を測る。上げ底の底部から、体部中程で稜をなし、直立気味にたちあがる。漆は外面に塗布されている。底部外面には、外側に向けたケズリ痕が認められる。ロクロ爪状を想起させる凹部が４ケ所に認められるが、判然としなかった。横木取りで、樹種はケヤキである。

次に、SB４は桁行２間、梁行が北側３間、南側２間の側柱建物で、主軸方位Ｎ－14°－W、床面積約19.4㎡を測る。柱間寸法は、桁行がSB１より若干乱れ215～240㎝を測るのに対し、梁行は不均等である。柱掘方はSB１と同様に略方形を基調とし、一辺50～60㎝を測る。SB１と共通する特徴的な埋め戻し方法はP72、P33で確認でき、他の柱穴はベース土の混ざる暗灰褐色砂質土を用いる。柱根はP29、72で遺存、またいくつかの柱穴底面に径約20㎝の柱の沈降痕跡を残す。中層遺構群に属し、遺構の切り合いはP33がSB５を構成するP32より古い。

第46図142、144、第53図261を図化した。深身の須恵器有台坏142は口径12.0㎝、器高4.7㎝を測り、身部と台部で胎土が異なる。使用後に被熱したため、底部内外面とも多数の剥離を伴う。無台坏144も深身で口径14.5㎝、器高4.3㎝を測る。内外面とも使用に伴う摩耗が顕著である。第53図柱根261はP72より出土した。断面方形に割った辺材で、一辺14～17㎝、残存高約47㎝を測る。底面は平滑に加工を行う。

SB２（第31図）

一部の柱穴を検出できないものの、可能性として図上復元した４×３間の側柱建物で、Ａ地区区画

溝群に後出する。主軸方位N-24°-W、桁行5.60m×梁行4.80m、床面積約26.9㎡を測る。柱間寸法は桁行が110～160㎝、梁行が130～200㎝と、ともに不均等となる。柱掘方は円形を基本とし、梁行を中心に6つの柱穴で柱根が遺存する。柱穴覆土は、ベース土がブロック状に混ざる暗灰褐色～灰褐色砂質土である。また梁行の北側約1～1.4mに柱列（P129、179など）が位置し、庇または目隠し塀とも考えられる。

柱穴より出土した遺物のうち第45図137～139、柱根第52図252～258を図化した。137・138は土師器甕である。非ロクロの137は口径23.2㎝を測り、口縁部は大きく外反する。体部外面下半にケズリ調整、内面には工具による粗いナデ調整を施す。口縁部内外面とも使用により煤が付着する。ロクロ成形の138は底部叩き出しに伴う工具痕が明瞭に残る。風船技法(5)でつくられた須恵器広口瓶139の破片はP55、P59、A地区SD22、SD55～57より出土した。胎土は海綿骨片が多く混ざり、肩部をつまみ上げて稜をつくる。底部が剥離した後に被熱し、器面の劣化が著しい。柱根第52図252～258は、257を除いて径9～13㎝を測る芯持ち材で、側面を加工しない。底面は、平坦に加工するもの（252、254）と、2方向からの加工により断面V字状を呈するもの（253、255、256、258）に分かれる。252は荷重のために、底面に硬くベース土が密着する。断面方形を指向する257は、約11㎝×約19㎝を測り、底面を平滑に加工する。

SB3（第32図）

平成7年度調査区（D地区）を含めても、集落域の最も南側に位置する2×2間の小規模な側柱建物（約14.4㎡）で、調査区外北側に主屋となる建物が存在する可能性をもつ。主軸方位N-20°-Eを示し、他の西側建物群と相違する。柱間寸法は梁行180㎝弱に対し、桁行は1.85～2.30mと不均等となる。円形を呈する柱掘方は径30～60㎝と比較的小さく、暗灰褐色～灰褐色砂質土で埋められる。土層の切り合いからA地区SD5、A地区SD21より古くなる。土器は小片が出土したのみで、遺存した柱根第52図259、260を図化した。259は径約9㎝を測る芯持ち材で、側面は未加工である。底面は2方向より加工し、断面V字状を呈する。260は断面方形を指向して3面に加工を行う。底面は平坦に仕上げる。

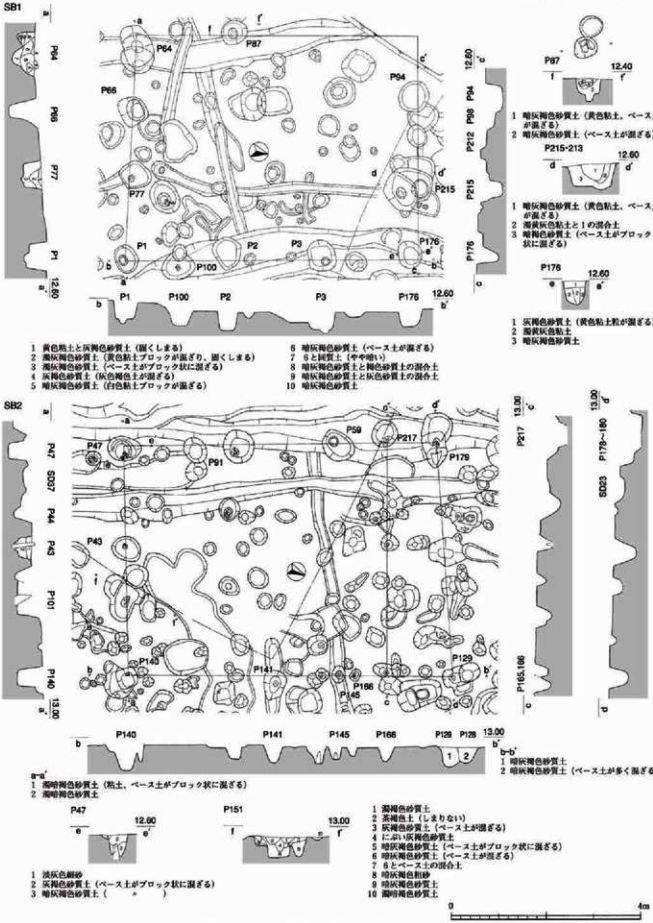
SB5（第33図）

略正方形の平面プランをもつ2×2間の側柱建物である。主軸方位N-23°-W、桁行4.60×梁行4.50m、床面積約20.7㎡、柱間寸法220～240㎝を測る。略円形を呈する柱掘方は径30～55㎝を測り、ベース土がブロック状に混ざる暗灰褐色～灰褐色砂質土で埋められる。P32、P41で径約10㎝の柱根が遺存する他、底面に径10㎝程度の柱の沈降痕跡が認められる柱穴も存在する。土層の切り合いからA地区SD36bより古く位置づけられる。有台坏第46図143は低くつぶれた台部を中央寄りに貼る。底部外面に黒褐色の液体で「乙」に近い文字を記す。

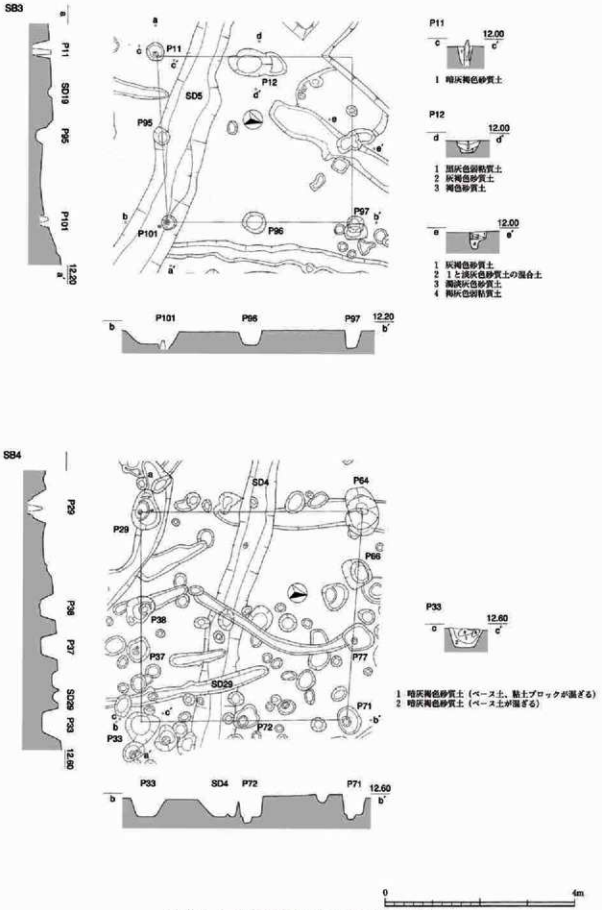
SB6（第33図）

SB5と柱筋を合わせる3×3・2間の側柱建物で、主軸方位N-25°-W、桁行6.20m×梁行4.50m、床面積約27.9㎡を測る。柱間寸法は桁行が200～210㎝、梁行が北側で220㎝、南側で150㎝の等間隔となる。円形もしくは略方形を呈する柱掘方は長軸で50～90㎝を測り、西側建物群では大きい部類に属する。P82、86、202は柱抜き取り後に粘土と数個の自然石を用いて埋め戻す点で、SB1・4と共通要素をもつ。P78、86、100で柱根が遺存する他、底面に径20㎝程度の柱の沈降痕跡が認められる柱穴も存在する。土層の切り合いから下層遺構群に属し、A地区SD36aより新しく、A地区SD36b、SB1より古くなる。

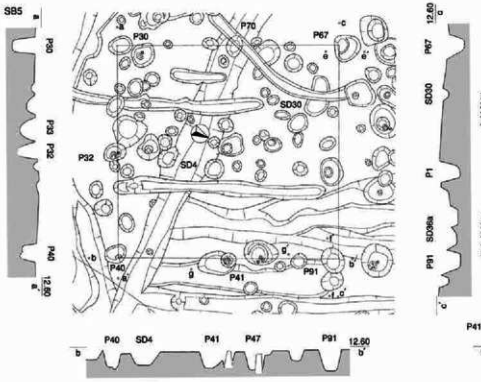
第46図140、141、145、第52図251、第53図262、264を図化した。須恵器坏蓋140は口径14.4㎝を測り、

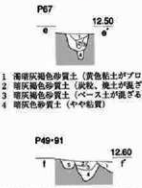


第31図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図１（Ｓ＝1/80）

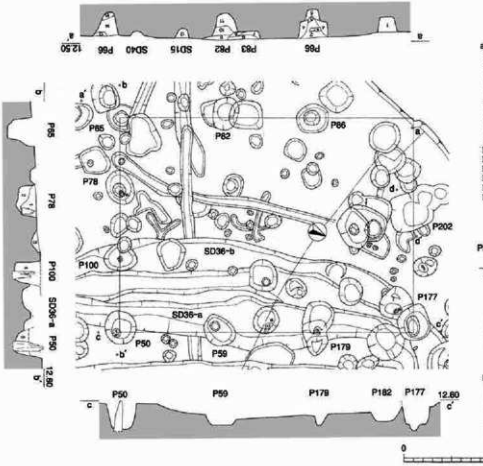


第32図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図２（Ｓ＝1/80）

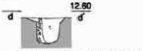




1 暗灰褐色砂質土と淡茶色粗砂の混合土
2 暗灰褐色砂質土（ベース土が混ざる）
3 暗灰褐色砂質土（やや粘質）
4 灰褐色砂質土（ＳＤ２類土）
5 淡灰色粗砂
6 灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
7 暗灰褐色砂質土（ベース土が混ざる）



a-a'
1 濃暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
2 濃暗灰褐色砂質土（黄灰色～緑灰色粘土がブロック状に混ざる）
3 緑灰色粘土
4 暗灰褐色砂質土
5 暗灰褐色砂質土（やや粘質）
6 灰褐色砂質土
7 灰褐色砂質土と灰色砂質土の混合土
8 灰褐色砂質土（灰色砂質土がブロック状に混ざる）
9 濃暗灰褐色砂質土
10 暗灰褐色砂質土（緑灰色粘土がブロック状に混ざる）
11 暗灰褐色砂質土（やや粘質）
12 灰褐色粗砂
13 暗灰色粘土と灰褐色土の混合土（固くしまる）
14 濃暗灰褐色砂質土（黄灰色粘土が多く混ざる）
15 暗灰褐色砂質土



1 濃暗灰褐色砂質土（黄白色粘土がブロック状に混ざる）
2 暗灰褐色砂質土
3 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
4 ３と同質土（３より暗い）

b-b'
1 濃暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる。炭粒多い。）
2 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
3 褐灰色砂質土
4 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
5 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）

0　4m

第33図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図３（Ｓ＝1/80）

口縁端部は長く下方にのびる。硯に転用され、内面全体に顕著な摩耗の蓄積と黒色墨の付着が認められる。薄手で扁平な有台坏141は口径13.6㎝、器高3.5㎝を測り、腰部は張った印象を受ける。丁寧な造作の台部は外展し、底部外面に楕円状に爪状圧痕が遺存する。長頸瓶145は底部外面に丁寧な回転ケズリ調整を施した後に、外側に強く踏ん張る台部をつける。台端部は使用に伴う摩耗が顕著である。木製品は第52図251、第53図262、264が出土した。251は、略円形の孔を穿った板状木製品で、一端は厚みをもつ。柱根262は断面方形を呈するが、木痩せが顕著である。柱根264は一辺18×16㎝を測り、断面は略方形を呈する。底面を平坦に仕上げる。

SB７～９（第34図）

西側調査区外に柱穴がのびる側柱建物である。廃絶後に柱を抜き取る点、主軸方位がN-33～35°-Wを示す点、柱間寸法が２ｍを越える点で共通する要素をもつ一群である。特に主軸方位は東側建物群に近い様相といえる。

SB７は梁行２間（柱間寸法200㎝）で、略方形を呈する柱掘方は一辺50～70㎝を測り、灰褐色～暗褐色砂質土で埋められる。下層遺構群に属し、土層の切り合いからA地区SD33より後出、A地区整地土に前出する。遺物は小片の出土にとどまる。

SB８の柱穴の一部はSB７と重複する。桁行２間以上（柱間寸法200㎝）、梁行２間（240㎝＋280㎝）を測り、梁行をかなり長くとる。柱掘方は略方形を呈し、柱抜き取り後を黄色粘土の混ざる灰褐色～暗灰褐色砂質土で埋める。土層の切り合いから下層遺構群に属し、A地区SD36より古くなる。柱穴より第46図須恵器146、147が出土した。有台坏146は口径11.1㎝、器高3.9㎝を測り、体部は直線的に立ち上がる。断面方形の小さい台部が外展する。扁平な坏蓋147は口径17.9㎝と大きく、天井部外面は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を施す。天井部外面に「青」と判読できる墨書を記す。

SB９は可能性をもつことから図上復元した梁行１間（柱間寸法350㎝）の建物である。略方形を主体とする柱掘方は、付近で湧水が特に顕著なために柱穴掘削時の崩落に起因して長軸100㎝を超えるものもある。柱穴をベース土の混ざる灰褐色～暗灰褐色砂質土で埋める。須恵器無台盤第46図149は柱穴P174に正位で埋納された完形品である。口径15.9㎝、器高2.2㎝を測り、一定の使用期間の後に墨書「満」を小さく記す。文字に摩耗は認められない。

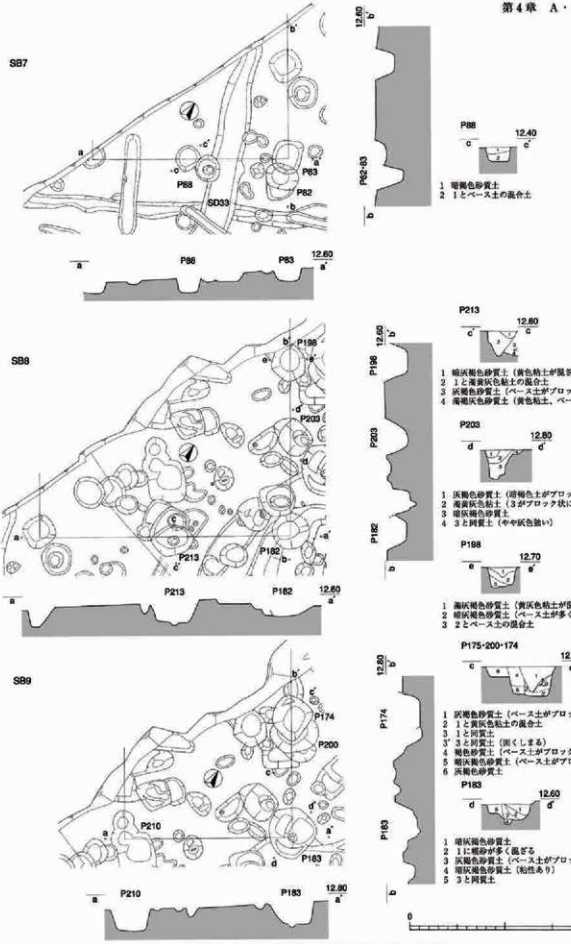
SB10（第35図）

SB６の東側に位置し、SB６と柱筋を合わせる２×１・２間の側柱建物を図上復元したもので、梁行北側約２ｍに関連をもちそうな柱穴が位置する。主軸方位N-21°-W、床面積約15.2㎡を測る。平面プランは崩れ、柱間寸法は不揃いである。略方形を呈する柱穴をベース土混ざりの暗灰褐色～暗褐色砂質土で埋める。土層の切り合いからA地区SD２より新しい。

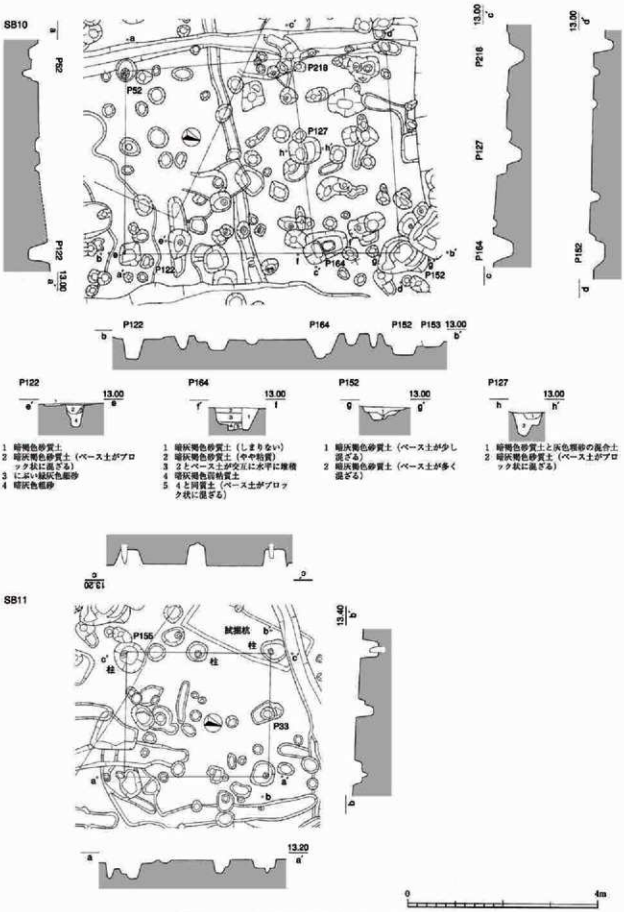
第46図148は非ロクロ土師器甕で、口径14.8㎝を測る。外傾する口縁部は端部面取りを行う。また第53図263、265、266は芯持ちの柱根で、径約９㎝を測る。側面はほとんど加工を行わなず、底面は平坦である。

SB11（第35図）

一部の柱穴を検出していないものの、図上復元した２×１または２間の小規模な側柱建物である。主軸方位N-20°-W、床面積約8.1㎡を測り、柱間寸法は桁行150㎝、梁行260～270㎝を測る。柱掘方は略方形を基本とし、西側桁行と北東端の４柱穴に柱根が遺存する。柱穴覆土は、ベース土がブロック状に混ざる暗灰褐色～灰褐色砂質土である。土器小片の他、第53図柱根273が出土した。273は径約14㎝を測る太い材を用い、側面はほとんど加工を行わない。平坦な底面は、荷重のため硬くベース土が密着する。

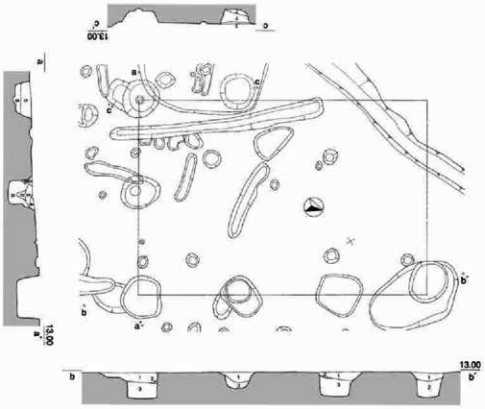


第34図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図４（Ｓ＝1/80）



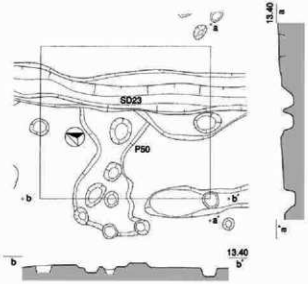
第35図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図５（Ｓ＝1/80）

SB12（旧B2掘立）



1　暗灰褐色砂質土（弱粘質で、粗砂が混ざる）
2　黄褐色粗砂
3　暗灰色砂質土（しまりなく、炭化物が混ざる）
4　淡黄褐色砂質土（ベース土と同じ）
5　3と同質土（褐色強い）
6　5と緑灰色粗砂の混合土
7　1とベース土（緑灰色砂質土）の混合土（1が主体）
7'　1とベース土（緑灰色砂質土）の混合土（ベース土が主体）
8　暗灰褐色砂質土

SB13



第36図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図６（Ｓ＝1/80）

SB12（第36図）

西側建物群稠密地の北側に少し離れて位置する3×2間の側柱建物で、主軸方位N-18°-W、桁行6.00m×梁行4.10m、床面積約24.6㎡を測る。柱間寸法は、桁行200㎝に対して、梁行は190㎝＋220㎝と不均等となる。いずれの柱穴も柱根は遺存せず、南西端の柱穴底面に径約15㎝の柱の沈降痕跡が認められる。柱穴覆土は暗灰褐色～灰褐色砂質土を基調とする。土層の切り合いから下層遺構群に属し、B地区SBT1より古く位置づけられる。遺物は出土していない。

SB13（第36図）

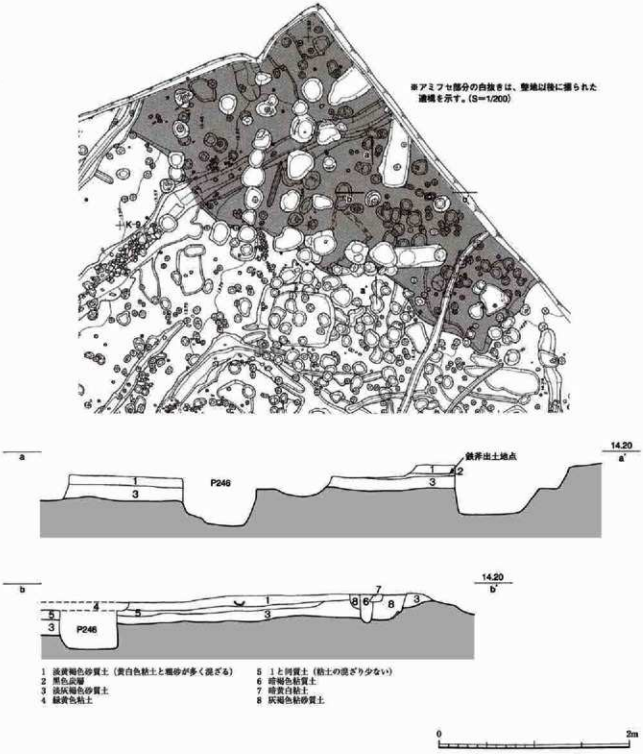
航空測量時の写真中の土色の変化（写真図版2参照）を検討に加え、図上復元した小規模な2×2間の掘立柱建物で、SD21、23（40）と重複する位置にある。確定できないがP50（深さ20㎝）を柱穴に加えれば、総柱建物の可能性をもつ。主軸方位N-24°-W、床面積約11.5㎡を測る。柱間寸法は、桁行が210㎝＋150㎝と不均等となるのに対して、梁行160㎝の等間隔である。円形を呈する柱掘方は径30～60㎝と小さく、柱根は遺存しなかった。覆土はSD23以東が灰褐色砂質土であるのに対し、以西はベース土と同質の砂質土である。土層の切り合いよりB地区SD21より新しくなる。土器小片が出土したにとどまる。

B地区整地土（第37図）

B地区西北端J・K-9・10区で認められた整地作業である。南北最大約10m×東西約18mの範囲（面積約150㎡）で行われ、粘土を多用する。位置関係よりSB14・22などに伴う作業と考えられるが、その施行範囲にずれをもつ。整地作業は、生活面のみならずベース土を含めて深さ10～30㎝とかなり掘り下げ、その結果として整地作業未施行箇所と明瞭な段差を生じている。埋土は、下層より整地①：淡灰褐色砂質土、整地②：白色粘土と粗砂を多量に混ぜた淡黄褐色砂質土、整地③：緑黄色粘土で、それぞれ硬く固めている。各整地の厚さは10～20㎝、10～15㎝、約5㎝を測る。また部分的に、①・②層の間に厚さ約4㎝の黒色灰層を挟む部分も存在する。整地③の緑黄色粘土を取り除いた時点でSB14・22の柱穴が検出できたことから、整地①・②の後に掘立柱建物を建て、さらに仕上げとも いえる整地作業を実施したと考えられる。なお第1回航空測量日までに整地面上の検出遺構を整地作業以降の所産と考えており、その状況を第37図上段に示す。

整地土中には比較的多くの遺物が出土、第47図150～165を図化した。150、151は縄文土器深鉢である。波状口縁の可能性をもつ151は、口縁端部が内湾気味なことより後期的様相をもつが、中期後葉串田新式と考えたい。152は古墳時代中期の土師器高坏で体部の接合部より剥離する。153～159は須恵器である。坏蓋153は口径14.2㎝、器高2.8㎝を測り、小さい端部は外側に折れる。顕著な使用痕は認められない。154は口径16.3㎝、器高3.2㎝を測り、丁寧に面取りをした鈕を付す。Ⅰ類重ね焼き痕を残し、倒位の使用のため天井部内面は摩耗する。深身の有台坏155は口径13.0㎝、器高4.9㎝を測り、体部はゆるやかに外展する。台部外端には使用に伴うと考えられる欠けが連続する。有台坏156は口径10.9㎝、器高4.4㎝を測り、体部は外反気味に立ち上がる。厚手の台部を貼り付け、外面には自然釉が溶着する。157、158は無台坏である。有蓋の157は口径14.0㎝、器高4.3㎝と大振りで、底部は台状を呈する。また焼き膨れが著しい。158は口径11.5㎝、器高3.4㎝を測り、使用に伴う摩耗が著しい。長頸瓶底部159の外側に強く踏ん張る台部は、使用に伴う摩耗が著しい。非ロクロ土師器無台埦160は口径12.4㎝を測り、口縁部中程で屈曲する。古墳時代中期の土師器小甕161は肉厚で口径11.8㎝、器高14.5㎝を測る。内外面に粗いハケ調整を施し、外面には煮沸に伴う煤が厚く付着する。ロクロ土師器長甕162は口径17.7㎝を測り、口縁端部は嘴状に上方にのびる。体部外面にかすかにカキメ調整が遺存する。乳白色の色調をもつ砥石163は、側面全てを研ぎに使用する。凝灰岩質安山岩で、鎌等の仕

上げ砥と考えられる。鉄斧164は第37図２層黒色炭層より出土した。長さ11.2㎝、幅6.8㎝、残重量124ｇを測る。残存状況はよくないものの、刃先は使用に伴い丸くなる。円筒状を呈する土師質の土錘165は重さ93.5ｇを量る。



第37図　Ｂ地区Ｋ区以北整地土実測図（Ｓ＝1/200・1/40）

SB14（第38図）

SB22と柱筋を合わせて大規模な整地作業（B地区整地土）を伴い建てられた4×3・2間の側柱建物で、主軸方位N-42°-W、桁行6.70m×梁行4.50m、床面積約30.2㎡を測る。柱間寸法は、桁行が160・190cm、梁行は南側が150cm等間隔、北側が225cm等間隔となる。円形・略円形を呈する柱掘方は、長軸70～130cmと大きい点に特徴をもつ。南側梁行P206・P207（深さ20cm弱）以外は、深さ40～60cmを測り、底面に径約20～30cmの柱の沈降痕跡が認められるものもある。また南側梁行を除き、柱抜き取り作業はほとんど掘削を伴わないように必要最小限の穴を掘ったと考えられ、その穴を黄褐色～黄緑色の粘土で硬く丁寧に埋める。中層遺構群に属し、B地区SD16より新しい。比較的多くの遺物が柱穴より出土し、第48図166～177を図化した。166は弥生土器壺口縁部で内外面とも丁寧なナデ調整の後に赤彩を施す。摩滅が著しい。167～173は須恵器である。坏蓋167～169は口径14～15cm、器高2.5cm強を測る。天井部外面に回転ケズリ調整を加え、小さい断面三角形の端部となる点で共通する。167はⅡb類、168・169はⅠ類重ね焼き痕が認められ、天井部内面は使用のため摩耗する。深身の有台坏170は口径13.4cm、器高4.4cmを測り、体部は直線的に外側にのびる。焼成は甘く、使用に伴う摩耗が著しい。青灰色の171は口径12.6cm、器高3.5cmを測り、二次被熱を受ける。無台坏172、173は扁平で、口径13.4cm、器高3cm前後を測る。焼きゆがみの著しい173は、口縁部内面に帯状のヨゴレが付着する。174～176は非ロクロ土師器長甕である。薄手の174は、口径20.3cmを測り、摩滅が著しい。175・176は同一個体の可能性が高く、内外面ともハケ調整で仕上げる。口径20.7cmを測り、口縁部は外傾しながら長くのびる。須恵器甕177は口縁部を折り曲げてつくり、その端部を横方向に引きのばす。胴部は外面平行叩きa類、内面は同心円c類となる。

SB15（第38図）

西側調査区外に一部の柱穴がのびる側柱建物で、3間以上×2間と考えた。主軸方位N-14°-W、床面積15㎡以上、柱間寸法は桁行が200～220cm、梁行が230cm程度となる。円形を呈する柱掘方は径50～80cmを測る。機能停止時に柱は抜き取られ、暗灰褐色～灰褐色砂質土で埋められる。検出状況からSB14、B地区整地土より古くなる。第48図178は須恵器坏蓋で口径18.9cmを測る。口縁端部を含めて、成形時のロクロひだが目立つ。

SB16（第39図）

東側調査区外に一部の柱穴がのびる側柱建物で、ほぼ正方形を呈する3×3間と考えた。その場合、主軸方位N-37°-W、床面積約30.5㎡、柱間寸法は桁行が185cm等間隔、梁行が180cm等間隔となる。略方形を呈する柱掘方は一辺60～110cmを測り、底面に径約20cmの柱の沈降痕跡が認められるものもある。柱を抜き取った後に、黄白色粘土混ざりの土を用いるP88以外は暗灰褐色～灰褐色砂質土で埋める。遺構の切り合い状況からB地区SD41、B地区SD15より新しく、SB17より古い。

柱穴より第48図179～182、第49図183～191が出土した。179～182は須恵器坏蓋である。179は薄手で、背の低い鈕を付す。180・181は肩部で明瞭に屈曲、ボタン状の鈕を付ける。180の天井部内面は使用に伴う摩耗が著しく、転用硯と考える。181の天井部外面は回転ヘラ切り後にロクロナデ調整を加える。また天井部内面に鋭利な工具でヘラ記号を記す。山笠形を呈する182は口径13.8cmを測る。天井部内面を硯面に転用したため、摩耗と墨痕が遺存する。183～185は須恵器有台坏である。183は口径13.6cm、器高3.7cmを測り、扁平な印象を受ける。184とともに使用に伴う摩耗が著しく、台端部は接触に伴う小破損が連続する。184は台部を外展気味につけ、底部内面に自然釉が溶着する。深身の185は体部が直線的にたちあがる。底部外縁に貼った台端部は内端で接地する。底部肉厚の無台坏186は口径12.2cm、器高3.1cmを測り、体部は大きく外側に開く。無台坏187は底部外面に墨書を記す。文字

が摩耗しているため判読は難しいが、「刀自」の可能性をもつ。無台坏188の底部外面は摩耗が著しい。厚手の横瓶189は口径11.0㎝を測り、口縁端部を上方に嘴状にのばす。胴部内面に同心円ｂ類、外面に平行ｂまたはｃ類叩きを行う。190はロクロ土師器小甕で、底部外面に静止糸切り痕が残る。191は淡灰色を呈した軽石製の砥石で、全面を研ぎに使用する。重さ10.8ｇを量る。

SB17・18（第39・40図）

建物の一辺が重複する２棟の建物を復元したが、SB17西側梁行（P85、89）をSB18に伴う柵（塀）列、もしくはSB18北側桁行をSB17に伴う柵（塀）列と考えることもできる。SB17を建物とした場合、梁行は他の建物例より３間と考えられる。主軸方位Ｎ-64°-E、桁行4.00ｍ～×梁行3.10ｍ、床面積12.4㎡以上、柱間寸法は桁行が200㎝等間隔、梁行が155㎝等間隔となる。柱掘方は径60～80㎝を測り、柱を抜き取った後にベース土の多く混ざる暗灰褐色砂質土で埋められる。またSB18を３×１間の側柱建物とした場合、主軸方位Ｎ-64°-E、桁行5.60ｍ×梁行4.10ｍ、床面積23.0㎡、柱間寸法は桁行が180㎝または200㎝、梁行がかなり長く410㎝となる。略方形の目立つ柱掘方は長軸50～90㎝を測り、柱を抜き取った後、ベース土や粘土が混ざる汚れた暗灰褐色砂質土で埋められる。遺構の切り合い状況からSB19より新しく、SB21より古い。

両建物とも柱根は遺存せず、SB17柱穴より須恵器第49図192、193が出土した。有台坏192は焼成堅緻で、台部内端で接地する。無台坏193の体部は、屈曲しながら外側に開く。

SB19（第40図）

ほぼ正方形を呈する２×１間の側柱建物である。主軸方位Ｎ-43°-E、桁行・梁行3.50ｍ、床面積約12.3㎡、柱間寸法は桁行が150㎝＋200㎝、梁行が350㎝となる。方形を基調とする柱掘方は一辺40～70㎝を測り、底面には径約20㎝の柱の沈降痕跡が認められるものもある。柱を抜き取った後を暗灰褐色砂質土で埋める。遺構の切り合い状況はSB16、Ｂ地区SD28ｂより古い。遺物は土器小片が出土したにとどまる。

SB20（第41図）

SB21、SBT２・３と重複する位置にある３×２間の側柱建物で、SB21の建て替え建物と考えられる。主軸方位Ｎ-50°-E、桁行5.25ｍ×梁行3.80ｍ、床面積約20.0㎡、柱間寸法は桁行が175㎝等間隔、梁行が190㎝等間隔となる。円形・略方形を呈する柱掘方は西側および北側が本来の大きさを反映すると考えられる。柱を抜き取った後を黄白色～黄灰色粘土を多く混ぜた暗灰褐色砂質土で硬く埋め固める。遺構の切り合いから、周辺の主要遺構の変遷はSBT３→SBT２→SB21→SB20の順に整理できる。

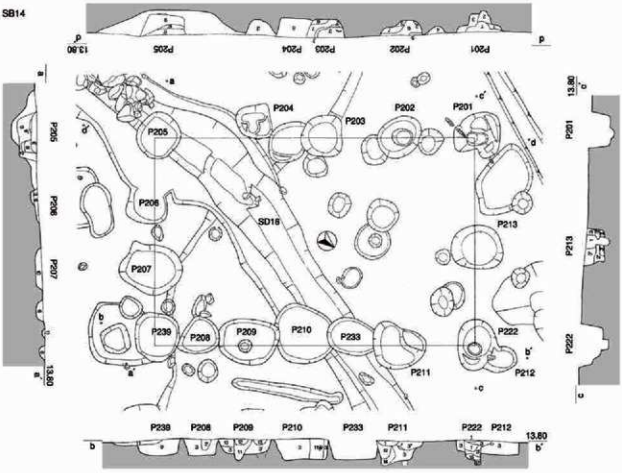
遺物は比較的少なく、外赤内黒ロクロ土師器無台埦第49図194を図化した。底部の器肉は薄く、糸切り底と考えられる。胎土中に海綿骨片が目立つ。

SB21（第41図）

SBT２・３と重複する位置にある３×２間の側柱建物で、主軸方位Ｎ-52°-E、桁行5.20ｍ×梁行4.20ｍ、床面積約21.9㎡と、SB20より若干規模は大きい。柱間寸法は桁行が165～180㎝、梁行が210㎝等間隔を測る。また北側桁行の柱穴間に赤褐色の焼土面を確認しており、建物と関連する可能性をもつ。方形を基本とする柱掘方は一辺70～100㎝と比較的大きく、SB20と同様に柱を抜き取った後を黄白色～黄灰色粘土混ざりの暗灰褐色砂質土で硬く埋め固める。遺物は土器小片が出土したにとどまる。

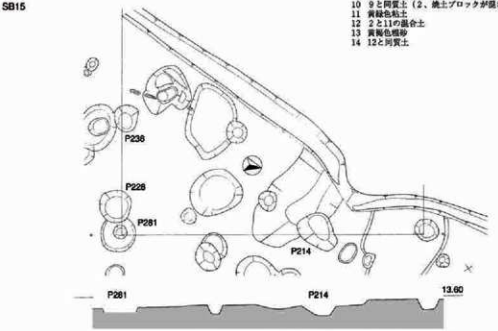
SB22（第42図）

SB14と柱筋を合わせて、大規模な整地作業（Ｂ地区整地土）を伴い建てられたＡ・Ｂ地区中最大

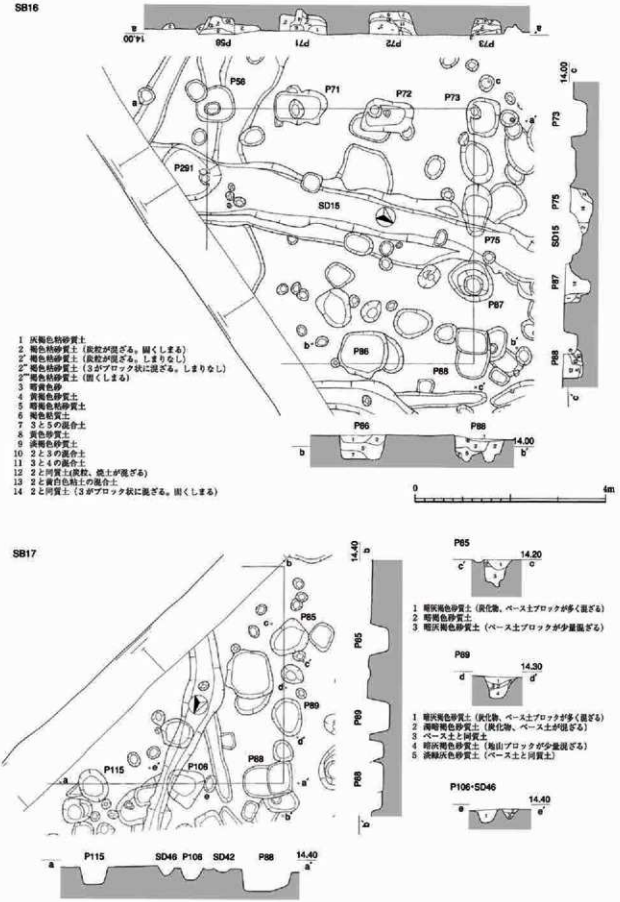


1　黄褐色粘土
1'　黄褐色粘土（褐色砂質土、黄白色粘土ブロックが混ざる）
2　黄白色粘砂質土
2'　２と同質土（炭粒が混ざる）
2"　２と同質土（３ブロック、炭粒が混ざる）
3　灰褐色砂質土（１ブロックが少量混ざる）
3'　灰褐色砂質土（２ブロックが少量混ざる）
3"　灰褐色砂質土（１ブロック、炭粒が混ざる）
4　淡黄褐色砂質土
5　１と６の混合土
6　褐色砂質土
6'　褐色砂質土（１ブロックが混ざる）
6"　褐色砂質土（２ブロックが混ざる）
7　３と６の混合土
8　暗褐色粘砂質土
9　暗褐色粘砂質土（１ブロックが混ざる）
9'　暗褐色粘砂質土（１ブロックが混ざる）
10　９と同質土（２、焼土ブロックが混ざる）
11　黄緑色粘土
12　２と11の混合土
13　黄褐色粘砂
14　12と同質土

0　2m

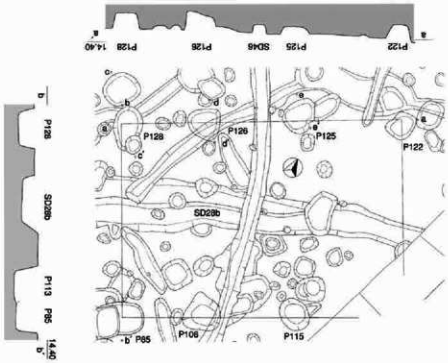


第38図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図７（Ｓ＝1/80）

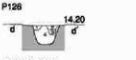


第39図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図８（Ｓ＝1/80）

SB18



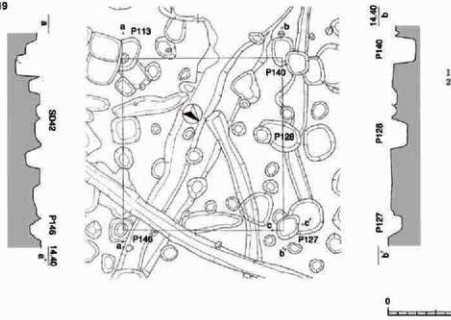
1 薄茶灰色砂質土（しまりあり）
2 薄褐色砂質土（焼土粒が混ざる）
3 暗褐色砂質土
4 暗灰褐色砂質土
5 薄暗灰褐色砂質土（ベース土、粘土がブロック状に混ざる）
6 薄黄茶色粘土と灰褐色土の混合土（しまりあり）
7 暗灰褐色砂質土（粘土粒が多く混ざる）



1 薄茶灰色砂質土
2 薄暗褐色砂質土
3 薄緑灰色砂質土
4 暗灰色砂質土（炭粒が多く混ざる）

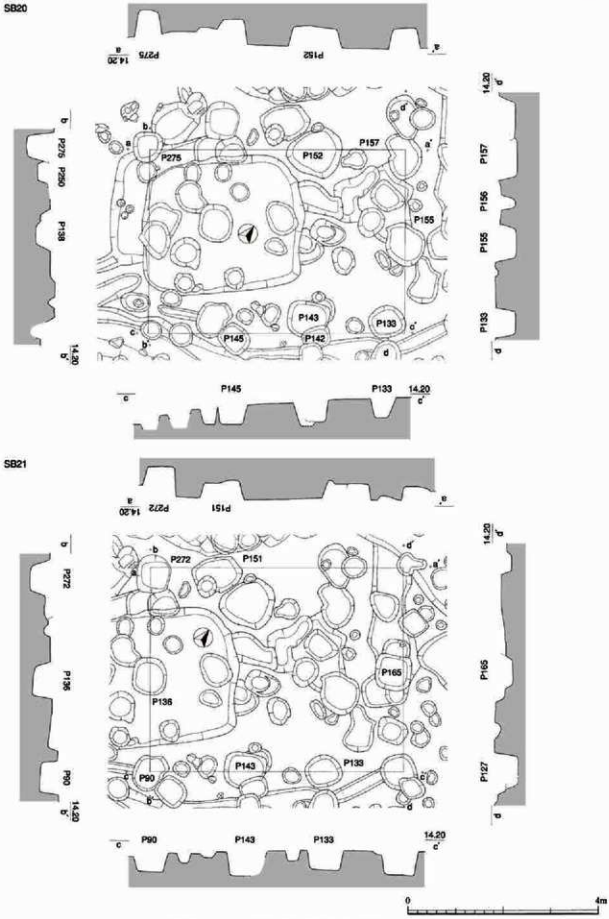
1 薄暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）

SB19

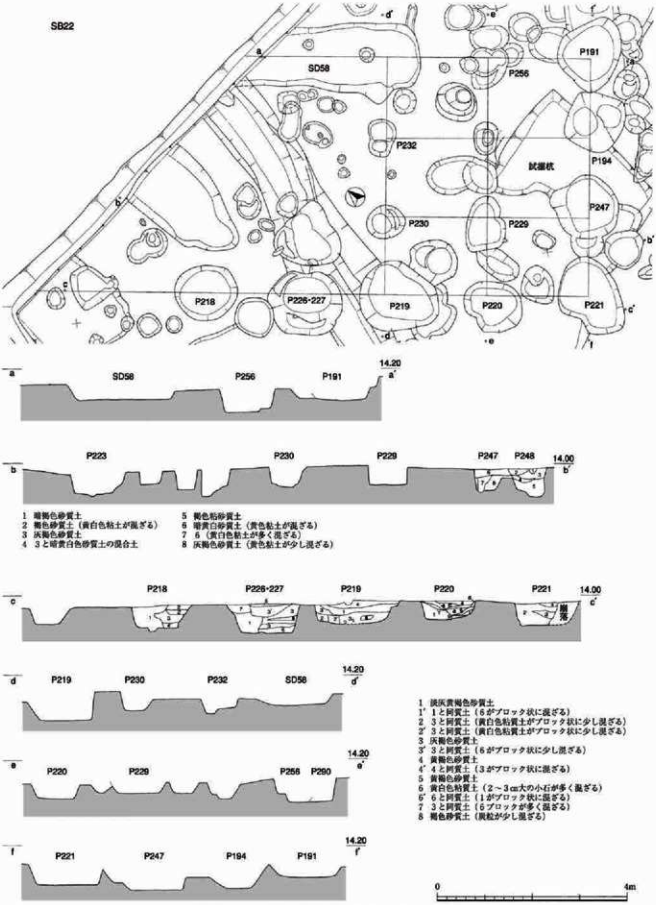


1 暗灰褐色砂質土（炭化物が混ざる）
2 褐灰色砂質土

第40図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図９（Ｓ＝1/80）

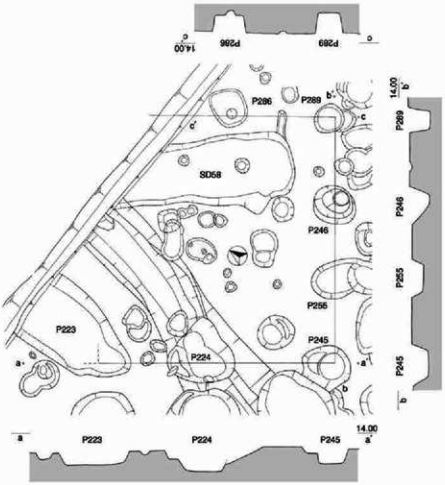


第41図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図10（Ｓ＝1/80）

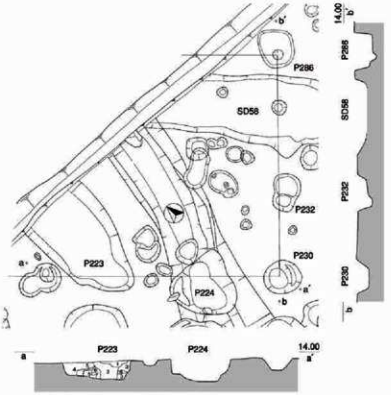


第42図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図11（Ｓ＝1/80）

SB23



SB24

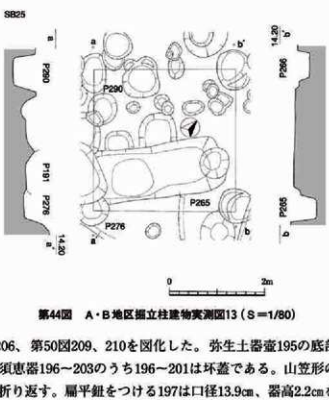


1　淡黄褐色粘質土
2　淡灰黄褐色砂質土
3　褐色砂質土（炭粒が少し混ざる）
4　黄褐色砂質土
5　黄白色粘質土
6　２と４の混合土
7　暗褐色粘質土

0　4m

第43図　Ａ・Ｂ地区掘立柱建物実測図12（Ｓ＝1/80）

の建物である。桁行5間以上×梁行3間の側柱建物で、南東側2間に束柱をもつと考えた。主軸方位N-39°-W、桁行10.30m以上×梁行5.10m、床面積52㎡以上を測る。桁行柱間寸法は束柱が伴う部分が215cm等間隔、それ以外は200cm等間隔を、また梁行柱間寸法は170cm等間隔となる。柱掘方は円形を基本とし、長径100～140cm、深さ40～50cmと極めて大きい点に特徴をもつ。東側桁行の柱掘方の一部は、隅丸長方形の布掘り状を呈する。布掘り状掘方の規模は幅120～130cm、長さ380cm以上、深さ約20cmを測る。柱抜き取り穴を黄白色粘土を多量に用いて硬く埋め固める。



第44図　A・B地区掘立柱建物実測図13（S＝1/80）

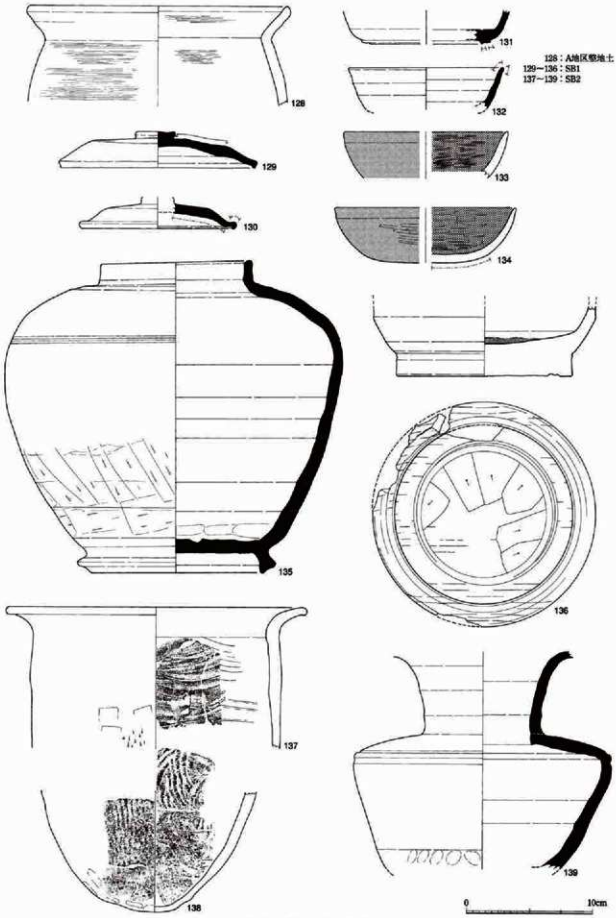
比較的多くの遺物があり、第49図195～206、第50図209、210を図化した。弥生土器壺195の底部には、平面三角形状を呈した凹みを穿つ。須恵器196～203のうち196～201は坏蓋である。山笠形の196は口径16.0cmを測り、口縁端部を小さく折り返す。扁平鉦をつける197は口径13.9cm、器高2.2cmを測り、倒位の使用に伴う摩耗が著しい。198は口径14.6cmを測り、Ⅰ類重ね焼き痕が残る。199は肩部で明瞭に屈曲、Ⅱa類重ね焼き痕が残る。扁平な200は口径14.5cmを測り、下方にのばす口縁端部は目立たない。薄手の201は口径15.4cmを測り、肩部で明瞭に屈曲する。有台坏202は、背の低い台部をかなり中央寄りにつける。底部内面の摩耗が著しい。厚手の無台坏203は口径15.8cm、器高3.7cmを測り、体部は外側に開きながら緩やかにたちあがる。ロクロ土師器204は摩滅が著しい。非ロクロ土師器205は肉厚で口径13.5cmを測り、短く外側に開く口縁部は端部を丸く仕上げる。内外面とも煮沸に伴う煤・ヨゴレが付着する。フイゴ羽口206は浅黄橙色を呈し、胎土中に角張った砂礫が多く混ざる。209・210はロクロ土師器長甕で、別個体となる。209は口径20.7cmを測り、口縁端部を小さくつまみ上げる。内外面ともカキメ調整を施す。厚手の210は外面平行叩きと内面ハケ調整で底部を叩き出す。

SB23（第43図）

SB22と重複する位置にある2間以上×3間の側柱建物で、柱穴の一部はC地区にのびる。主軸方位N-35°-W、桁行5.10m以上×梁行4.80m、床面積24.5㎡以上を測る。柱間寸法は、桁行が240cm等間隔、梁行が170cm等間隔となる。円形を指向する柱掘方は長径60～140cmを測り、柱抜き取り穴を黄白色粘土混ざりの暗灰褐色砂質土で硬く埋め固める。遺構の切り合い状況よりSB22同様にB地区SD16、B地区整地土より新しくなる。須恵器坏蓋第49図207は口径18.4cmを測る大型品で、成形時のロクロひだが目立つ。降灰よりⅠ類重ね焼きと考えられる。

SB24（第43図）

SB22と重複する位置にある3間以上×3間の側柱建物で、柱穴の一部はC地区にのびる。主軸方位N-45°-W、桁行4.95m以上×梁行4.80m、床面積23.8㎡以上を測る。柱間寸法は、桁行が165cm等間隔、梁行が160cm等間隔となる。円形を指向する柱掘方は長径60～80cmを測り、柱抜き取り穴を黄白色粘土混ざりの暗灰褐色砂質土で硬く埋め固める。遺物は土器小片が出土したにとどまる。



第45図　Ａ・Ｂ地区ピット出土遺物実測図１（Ｓ＝1/3）

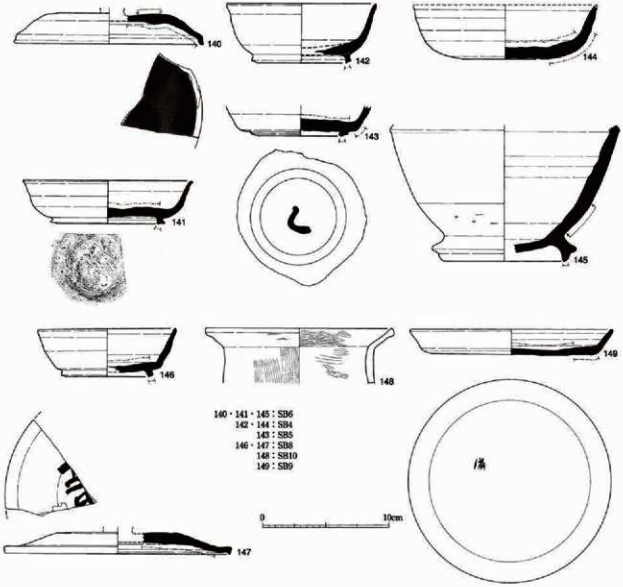
SB25（第44図）

1×1間の小規模な正方形の建物で、主軸方位N-45°-W、柱間寸法3.00m、床面積9.0㎡を測る。柱穴の切り合い状況からSB22より古いと考えられる。第49図208はロクロ土師器小甕で口径約14cmを測る。口縁部は緩やかに屈曲し、体部内外面ともカキメ調整を施す。

その他のピット出土遺物

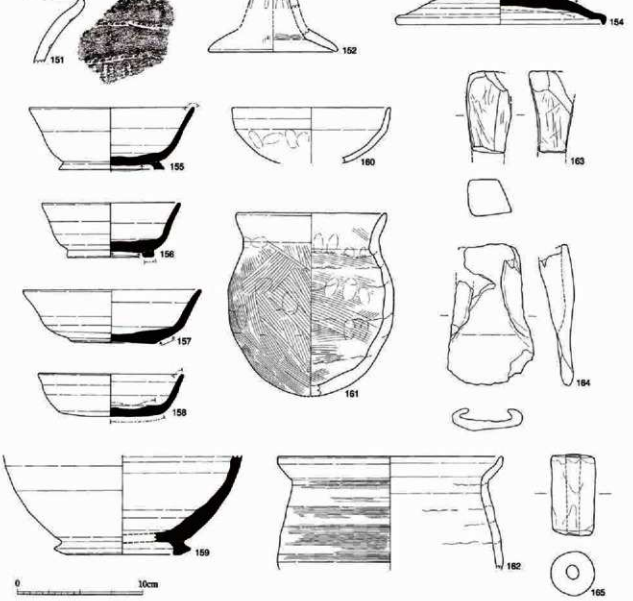
建物として復元できなかったものの、土器や柱根の出土をみたピットは多数にのぼる。特にA地区拡張区付近で柱根の遺存するピットが集中しており、認識できない建物や柵（板）列が存在すると考える。ここでは第50図211～第51図250、また木製品第53図267～272、第54図274～285について記する。

須恵器坏蓋211は薄手で、端正なつくりの鍔を付す。口径15.4cm、器高2.2cmを測り、天井部外面はナデ調整にとどめる。倒位で転用され、破片はB地区SD1よりも出土をみる。内面に黒褐色の煤状付着物が認められる。ロクロ土師器長甕212は口径18.2cmを測り、体部は内外面ともカキメ調整を施す。213はロクロ土師器小甕で、口径14.6cmを測る。胴部内面を除いて煮沸に伴い厚い煤が付着、外

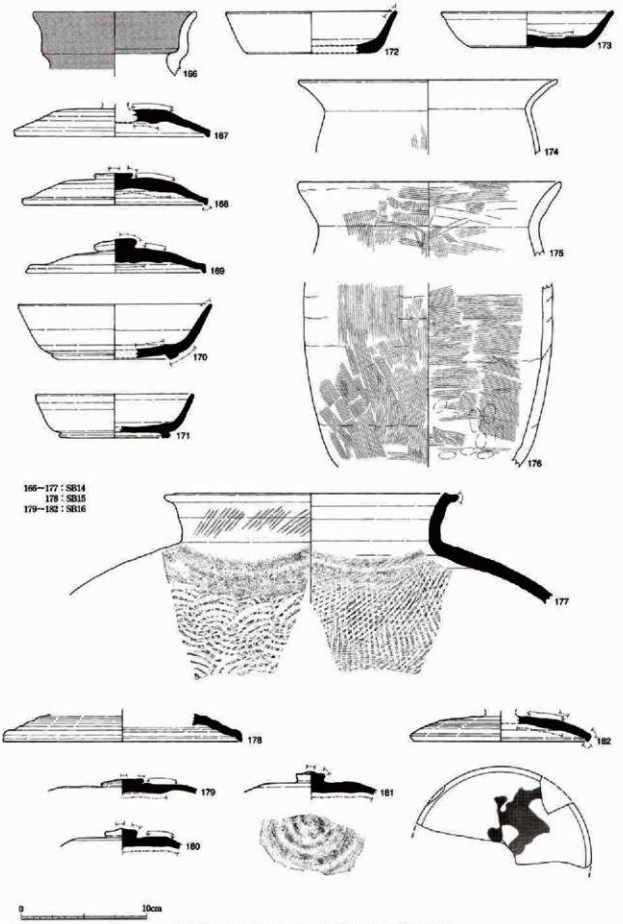


第46図　A・B地区ピット出土遺物実測図2（S＝1/3）

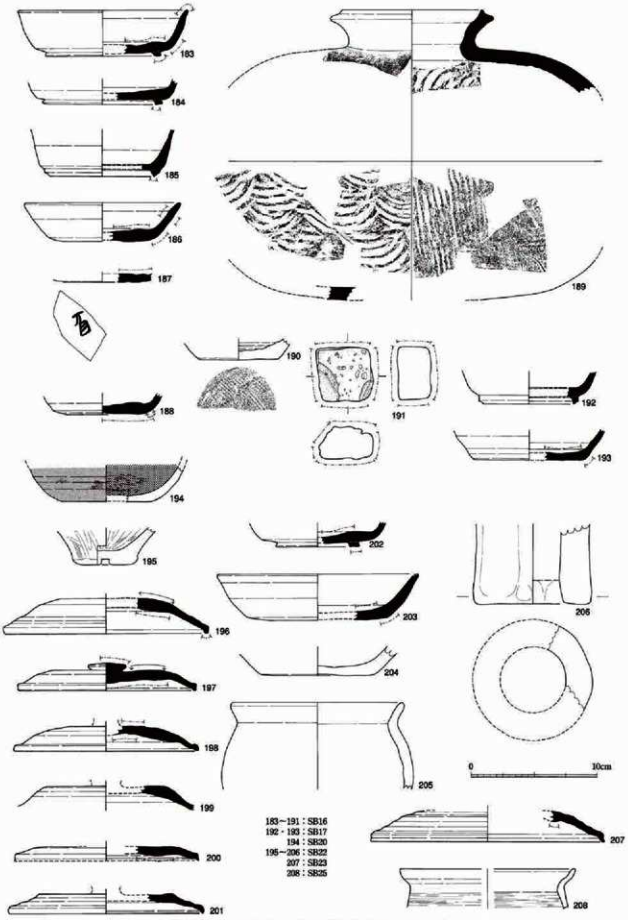
面には剥離を生ずる。須恵器坏蓋214は口径13.0cm、器高2.4cmを測り、ボタン状の鈕を付ける。Ⅱb類重ね焼き痕と天井部内面にヘラ記号「／」が認められる。須恵器有台坏215は口径11.2cm、器高4.2cmを測り、体部は直線的に立ち上がる。216、217は須恵器無台坏である。216の底部は摩耗が著しい。深身の217は口径12.8cm、器高4.0cmを測る。底部は突出気味で、底部と体部の境はゆるやかに移行する。破片はP143よりも出土した。坏蓋218はつくりの丁寧な鈕を付け、口径16.4cm、器高3.2cmを測る。天井部は広く、口縁端部を明瞭に屈曲させる。破片はA地区SD36よりも出土した。坏蓋219・220は天井部内面を硯面に転用したため、摩耗と墨痕が遺存する。219で口径13.0cm、220で口径14.0cmを測



第47図　B地区整地土出土遺物実測図（S＝1/3）



第48図　A・B地区ピット出土遺物実測図3（S＝1/3）

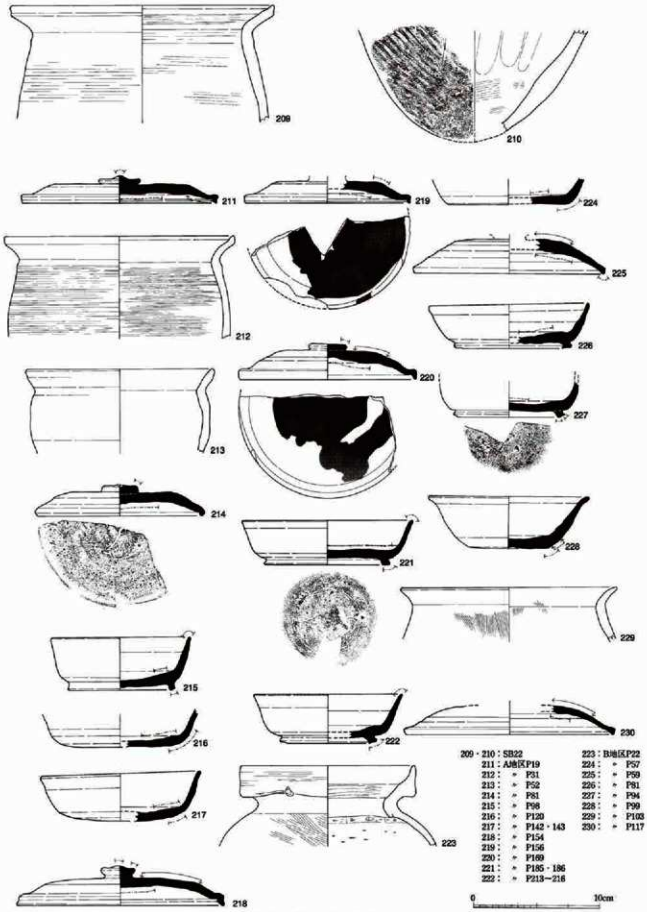


第49図　A・B地区ピット出土遺物実測図4（S＝1/3）

る。天井部外面の調整は、219が丁寧なナデ調整、220が回転ケズリ調整となる。有台坏221は口径13.6㎝、器高3.6㎝を測り、外展する台部をつける。底部外面には爪状圧痕が認められる。有台坏222はP213～216より出土した。口径11.9㎝、器高3.9㎝を測り、体部は直線的にのびる。外展する台部は内端で接地する。土師器223は古墳時代前期の球胴形の壺で、口径13.8㎝を測る。内傾する口縁帯は一部に成形の乱れが生じる。須恵器無台坏224は体部が外反しない。山笠形を呈する須恵器坏蓋225は口径14.9㎝を測り、口縁端部は断面三角形を呈する。還元は弱く、天井部内面は使用に伴う摩耗が著しい。226・227は須恵器有台坏である。焼成堅緻な226は口径12.8㎝、器高3.6㎝を測り、つくりの丁寧な台部を外展気味に付ける。227は身の深いタイプで、体部は外傾せずにたちあがる。須恵器無台坏228の破片はB地区SD28からも出土した。口径12.6㎝、器高4.1㎝を測り、口縁端部は外反する。有蓋で、焼きぶくれが著しい。非ロクロ土師器甕229は口径17.0㎝を測り、口縁部は短く外反する。薄手の須恵器坏蓋230は口径16.4㎝を測り、天井部内面に使用に伴う摩耗が認められる。須恵器坏蓋231は本調査区の中で最も古相を呈し、破片はSBT2よりも出土した。口径10.6㎝を測り、口縁部の返りは断面三角形状を呈する。また天井部内面は使用に伴う摩耗が認められる。須恵器有台坏232は台部がはずれる。233は非ロクロ土師器甕で内外面とも煮沸に伴う煤・ヨゴレが付着する。234は縄文土器深鉢と考えられ、破片化後に煤が付着する。235は古墳時代前期の壺で、台状を呈した底部には黒斑が認められる。外面にミガキ調整、内面に粗いハケ調整を施す。236～245は須恵器である。有台坏236は底部外面ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を施し、扁平な台部を貼り付ける。無台坏237は口径13.2㎝、器高3.6㎝を測り、底部外面にはヘラ起こし痕が明瞭に残る。使用に伴う摩耗が著しく、外面に被熱痕をもつ。還元の弱い坏蓋238の破片はB地区SD28からも出土する。口径14.4㎝、器高3.2㎝を測り、口縁端部は長くのびる。天井部内面は使用に伴う摩耗が著しい。有台坏239は口径14.8㎝、器高4.4㎝を測り、底部と体部の境を明瞭に屈曲させる。低い幅広の台部を外展してつける。坏蓋240の破片はB地区SD16からも出土する。薄手で口縁端部は鋭く下方にのびる。完形の坏蓋241は口径14.4㎝、器高2.5㎝を測り、背の低い鈕を付す。外面全てに自然釉が付着するⅠ類重ね焼きで焼成される。坏蓋242は口径11.4㎝を測り、口縁部内面の返りは長くのびる。無台坏243は、口径13.5㎝、器高3.9㎝を測り、深身で箱形を呈する。底部と体部の内面の境は不明瞭となる。扁平鈕を付す坏蓋244は、天井部外面を不整方向のナデ調整にとどめる。有台坏245は身が深く、無蓋・正位で焼成される。土師器高坏247は口径18.0㎝を測り、摩滅が顕著なため、調整は判然としない。非ロクロ土師器甕248は口径24.8㎝を測り、口縁部はくの字に大きく外傾する。249は能登産瓮器系陶器甕胴部片で、外面に格子と斜線で構成された装飾文を押印する。非ロクロ土師器甕250は下半部に最大径をもつ。内外面とも粗いハケ調整を密に施し、煮沸に伴う煤・ヨゴレ・煤の消失が明瞭に認められる。

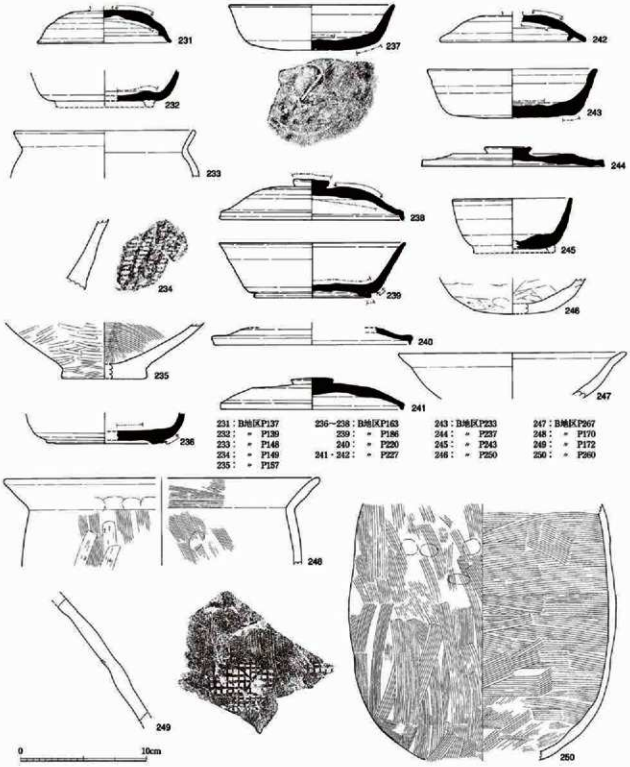
柱根第53図267は径約15㎝を測る芯持ち材で、側面は加工しない。棒状木製品268は、側面を加工し、断面多角形状を呈する。柱抜き取り後の埋め土に混ざった可能性をもつ。269は一端が先細りしており、杭の可能性をもつ。断面方形に加工され、一辺5㎝強を測る。270～272は柱根である。270は、径10～13㎝を測る芯持ち材で、底面は2方向より加工する。271は断面略方形に加工した辺材で、一辺8～11㎝を測る。272の側面は加工を施さない。底面は1方向より平滑に仕上げる。

柱根第54図274は、断面長方形を呈する辺材である。柱根275は、木痩せが顕著なものの、断面方形の加工を行ったと考える。柱根276は、径約13㎝を測る芯持ち材である。底面を2方向より加工し、断面V字状を呈する。柱根277は側面未加工の芯持ち材であるのに対して、柱根278は断面方形に側面を加工した辺材である。柱根279、280は径約9㎝を測る芯持ち材で、底面を断面V字状に2方向より加工する。遺存状態の悪い281は、杭に転用された可能性が高い。断面方形を呈する。板状木製品282は、



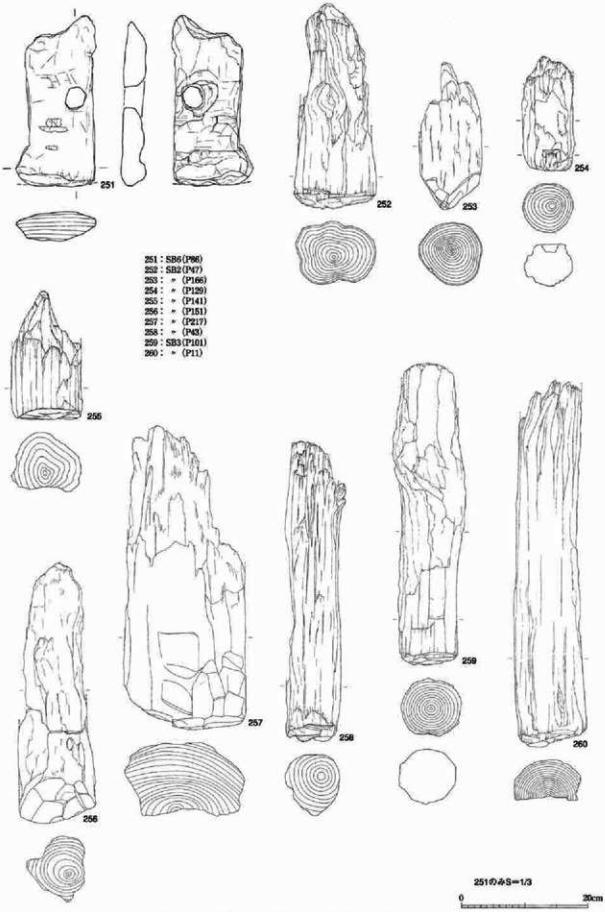
第50図　A・B地区ピット出土遺物実測図5（S＝1/3）

長さ31.5㎝、幅6.7㎝、厚さ2.0㎝を測り、側面は被熱により煤が付着する。柱根283は径約12㎝を測る芯持ち材で、底面を2方向より加工する。柱根284は側面3方向を加工し、断面方形を呈する。柱根285は出土地点不明の径7～9㎝を測る芯持ち材である。なお図化できなかったがP100より漆器椀破片が出土した。

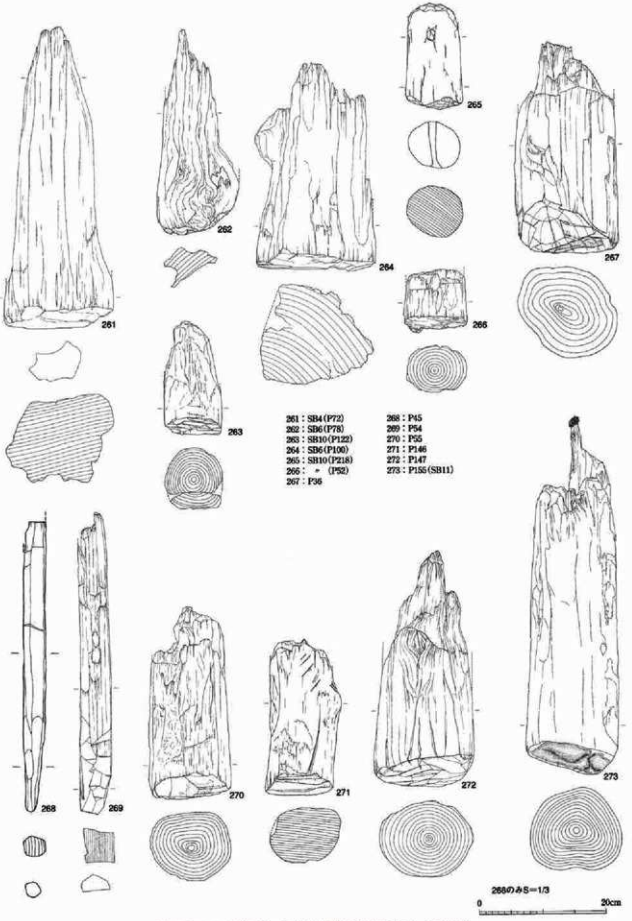


231：B地区P137
232：〃　P139
233：〃　P148
234：〃　P149
235：〃　P157
236～238：B地区P163
239：〃　P186
240：〃　P220
241・242：〃　P227
243：B地区P233
244：〃　P237
245：〃　P243
246：〃　P250
247：B地区P267
248：〃　P170
249：〃　P172
250：〃　P260

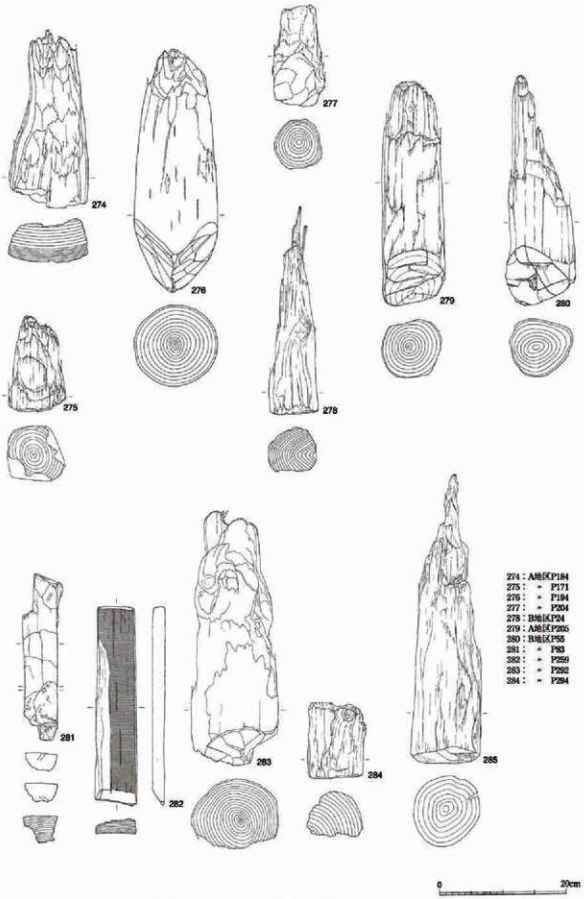
第51図　A・B地区ピット出土遺物実測図6（S＝1/3）



第52図　Ａ・Ｂ地区ピット出土木製品実測図１（Ｓ＝1/3・1/6）



第53図　A・B地区ピット出土木製品実測図2（S＝1/3・1/6）



第54図　Ａ・Ｂ地区ピット出土木製品実測図３（Ｓ＝1/6）

2．竪　穴　建　物

B地区 SBT 1（第55図）

K－7区に位置し、その一部は西側調査区外へのびる。遺構検出面直下で粘土を貼った床面を確認した。南北約280cm×東西約300cm以上、床面積8㎡強を測り、やや胴の張った隅丸長方形を呈すると考えられる。床面構築は、まず地面を若干西側が開く台形状に深さ10cm以上掘り下げている。その際の工具の掘削痕が長さ10cm程度の不定形な起伏として南東部で検出できる。その後、掘方を暗灰褐色砂質土で埋めて平坦面をつくり、さらに4～8cmの厚さで淡灰黄色粘土を壁面を含めて硬く敷き詰めて床面を形成する。わずかに残存する壁は高さ約5cmを測り、ゆるやかに外傾しながら立ち上がる。また床面の2ケ所で小穴を確認したが、建物の柱穴と確定することはできなかった。東側の小穴で径25～30cm、深さ約30cmを、西側の小穴で径約30cm、深さ約20cmを測り、覆土はともに黄色粘土ブロックが混ざる暗灰褐色砂質土である。南側壁中央付近の貼床・壁面の起伏がカマド袖部分の可能性をもつものの、床面上で煮沸・暖房行為に伴う被熱痕は確認できなかった。以上のことより、日常的に煮炊きを伴い居住する建物の可能性は低く、「納屋」的な用途を想定したい。中層遺構群に属し、遺構の切り合いからSB12より新しく、B地区SD38より古い。遺物は土器小片が出土したにとどまり、時期を特定できなかった。

なお調査区西壁（第7図）で、SBT 1の北側約1.5mに幅約160cm、最大厚さ約8cmの粘土層が存在、地下面を掘削しない建物の床面の可能性をもつ。

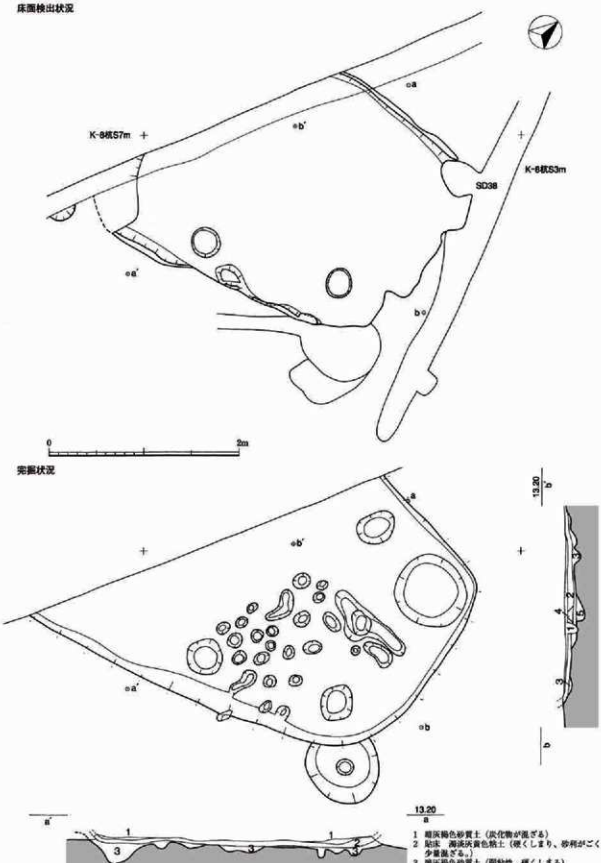
B地区 SBT 2（第56図）

K－9・10区に位置し、南西側へ下がる緩やかな斜面に主軸方向をあわせてつくられる。やや崩れた隅丸長方形を呈し、検出面で南西－北東方向約340cm×南東－北西方向約280cm、床面で同約320cm×240cm、床面積約7.6㎡を測る。床面の構築は、SBT 1と同様な造作が行われるが、遺存状況はあまりよくない。まず地面を平均約10cm程度掘り下げ、その際の工具の掘削痕が長さ10cm程度の不定形な起伏として確認できる。その後、掘方を淡灰褐色砂質土で埋めて平坦面をつくり、さらに2～3cmの厚さで暗黄白色粘土を硬く敷き詰めて床面を形成する。貼床の厚さは、SBT 1より薄く、部分的に粘土ブロックの混ざる暗褐色砂質土があらわれる箇所も存在する。ゆるやかに外傾しながら立ち上がる壁は、SBT 1と同様に、床面から連続した粘土が貼られる。また粘土貼床面上で検出できたA～Dの4小穴はやや崩れた方形を形成し、深さをもたないものの位置的に建物の柱穴の可能性をもつ。これらは略方形を呈し、一辺20～35cm、深さ約12～14cmを測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。カマドや地床炉、また貼り床面に灰層の広がり・被熱痕などを確認できず、SBT 1と同様の用途が想定できる。遺構の切り合いから、SBT 3より新しく、SB20・21より古い。

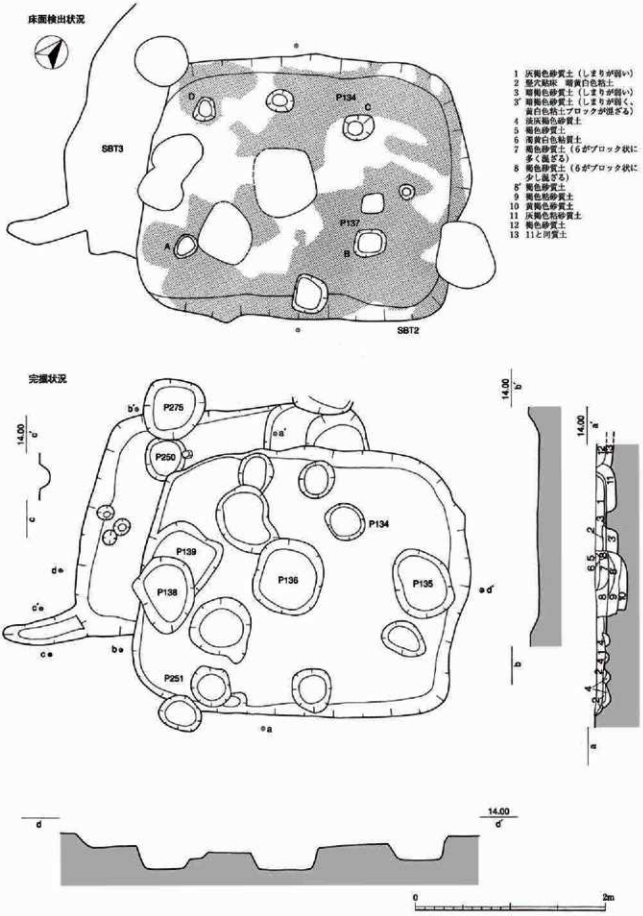
第59図286、287を図化した。286は棒状尖底の製塩土器口縁部で砂粒が多く混ざる。復元口径約29cmを測り、内外面ともナデ調整で仕上げる。須恵器有台坏287は口径12.5cm、器高3.6cmを測り、肉厚の底部外縁に断面方形の台部を外展気味につける。

B地区 SBT 3（第56図）

SBT 2と主軸方位をあわせて重複する位置にある。掘方は、やや崩れた隅丸長方形を呈すると考えられる。規模は、検出面で南西－北東方向約300cm×南東－北西方向約240cm、床面で同約260cm×210cm、床面積約5.5㎡に復元でき、SBT 2より小振りである。掘り込みは深さ約10cmが残存、一部に工具の深い掘削痕も認められた。覆土はベース土がブロック状に混ざる褐色砂質土で硬くしまる。また南隅に煙道と考えられる長さ約70cm、幅25～30cm、深さ約8cmの溝が伴うが、被熱痕はない。カマド



第55図　Ｂ地区SBT１実測図（Ｓ＝1/40）



第56図　B地区SBT2・3実測図（S＝1/40）

の構築痕や粘土貼床面、柱穴がないことから、竪穴建物の平面プランを掘り下げたものの、何らかの理由で放棄、埋め戻されたと考えられる。そして若干東側にSBT２を作るようだ。遺構の切り合い状況はSBT２、SB20・21より古く、土器小片が出土したにとどまる。

３．井　　戸

Ｂ地区 SE１（第57図）

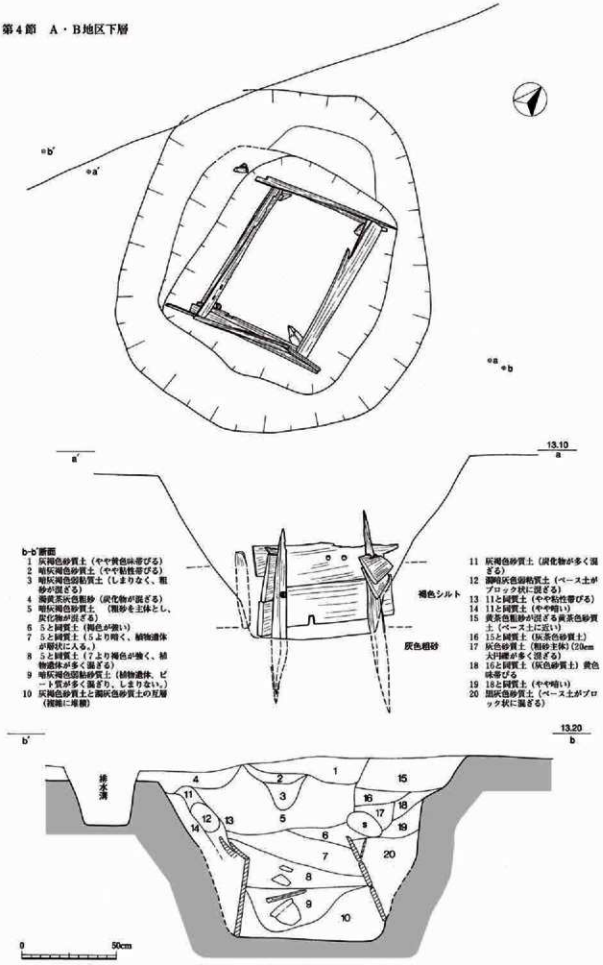
J-８区 SB12北側約２ｍで、ほぼ南北に主軸方向をとる井戸を確認した。井戸の掘方はやや崩れた隅丸方形を呈し、検出面で約185㎝×165㎝、一段狭くなる検出面より約35㎝下がったレベルで約115㎝正方を測り、北側に足場と考えられる幅約20㎝の平坦面が認められる。井戸の深さは約100㎝を測り、マナコなどは確認できない。

２～３枚を残して上方が抜き取られた井戸側は、内法で南北約80㎝×東西約55㎝を測り、打ち込んだ四方の隅柱と裏込め土の間に横板を挟んで支持する横板組隅柱留め井戸に属する。東西側横板は土圧のため隅柱を含めて内傾が著しい。遺存する範囲での井戸側の組み上げ順序は、①掘方に近接して四隅に隅柱を打ち込む（深さ35～45㎝）。②隅柱の外側に南北の横板を順次下方より据え付け、横板と掘方の隙間に５～10㎝大の自然石を挟み安定させる。③同様に下方より東西の横板を据え付ける。⑤裏込め土の充填と復元可能である。東側２ケ所の隅柱の据え付けが掘方に近接しすぎたため、工程③の時点で東側横板を底面に設置できず、底面より約10㎝高いレベルより据え始める。なお井戸側外部の北西方向で、北側横板の延長線上約10㎝の地点に径約６㎝、長さ約40㎝の杭が打ち込まれている。井戸側据え付けに係る痕跡であり、①工程の隅柱打ち込み、または②工程の北側横板据え付けの基準杭的用途をもつと考えられる。

井戸側（第62図313～第63図322）は、すべて転用材で、上方ほど木痩せする。横板はホゾ、孔が穿たれたものが多く、幅70㎝弱～90㎝、幅17～23㎝、厚さ２㎝強とばらつきが目立つ。隅柱は長さ78～86㎝を測り、南西端隅柱のみ断面円形を呈する。杭状の材の他方を新たに加工・転用したため、両端とも鋭利に先細る。

井戸裏込め土は灰褐色砂質土を基本とし、井戸側の内傾に伴い内側に張り出す。井戸側内覆土は、使用時に堆積した砂質土の上に、植物遺体、廃棄した部材などが混ざるしまりのない土壌が自然堆積する。なおベース土は検出面より約55㎝下までが粗い明茶色砂質土、同約55～90㎝下が青灰色ピート～シルト層（滞水層）、同約90㎝以下が灰色粗砂となり、現在でも豊富な湧水が認められた。また、後述するSK８も井戸の可能性が高い。

遺物は、裏込め土より第59図288～291が、覆土より同図292～295が出土した。須恵器坏蓋288は肉厚の天井部はナデ調整にとどめる。口径12.7㎝を測り、外面全てに降灰が認められる。天井部内面は使用に伴う摩耗が著しい。須恵器有台坏289は口径10.6㎝を測り、底部と体部の境は明瞭に屈曲する。290、291はロクロ土師器小甕である。290は体部外面下半にケズリ調整、底部外面に糸切り痕が遺存する。291は口径17.9㎝を測り、口縁部は屈曲しながら上方に小さくつまみ出す。内外面ともナデ調整で、胴部内面には茶褐色の付着物が斑点状に付着する。292、293は須恵器である。無台坏292は口径12.7㎝、器高3.3㎝を測り、体部は大きく外傾する。使用に伴う摩耗が著しい。有台坏293は二次被熱を受け、煤の付着や円形小剥離を生ずる。土師器小甕294は井戸底より約10㎝上位に南側に傾いた状態で出土した。口径18.1㎝、器高12.0㎝を測り、底部が比較的大きい。底部外面に回転糸切り痕、胴部内面にカキメ調整が認められる。底部付近を破損した状態で井戸に廃棄されたと考えられる。須恵器無台坏295は第57図土層５より出土した。口径12.4㎝、器高3.1㎝を測り、底部台状を呈する。一



第57図　B地区SE1実測図（S＝1/20）

定期間の使用に伴い摩耗が蓄積した後に、正位で煮沸容器に転用したと考えられる。外面に煤・黒色タール状付着物が、また口縁部内面に帯状のヨゴレが付着する。

また第61図309～312は、井戸側を支えた枕で、上記のとおり両端を尖らせた転用材である。309は長さ約89㎝を測り、２ケ所に方形の孔が穿たれている。310は長さ約80㎝を測る芯持ち材で、先端は打ち込んだ際につぶれる。311は長さ89㎝を測り、１ケ所に方形の孔が認められる。312は他の枕と異なり、一辺約10㎝の断面台形を呈する。井戸側材313～322は２孔一対の円孔や切れ込み、また他の材との接触痕が明瞭に残る。建物などの側板を転用した可能性を想定したい。

４．土　　坑（第58図）

Ｂ地区 SK１

K－８区のＢ地区 SD28が埋まりかけた段階で、その直上に掘られた隅丸方形の土坑で、一辺約135㎝×約115㎝、深さ約30㎝を測る。覆土はしまりのない粘質の暗灰褐色砂質土で、土器片や多量の５～15㎝大の自然石が一時に投棄される（写真図版13）。

第59図296～299、第60図308を図化した。296～298は須恵器である。肉厚の坏蓋296は口径13.8㎝を測り、口縁端部は断面三角形を呈する。還元の強い有台坏297は口径13.4㎝、器高3.8㎝を測り、底部中心寄りに扁平な台部を外展気味につける。無台坏298は口径12.4㎝、器高3.0㎝を測り、扁平な箱形を呈する。回転ヘラ切り痕をそのまま残す。ロクロ土師器小甕299の破片は SK４、Ｂ地区 SD28・29よりも出土した。口径18.2㎝、復元高約18㎝を測り、平底風に仕上げる。底部外面を含めてカキメ調整を主体に仕上げ、煮沸に伴う黒褐色の煤・ヨゴレが付着する。ロクロ土師器長甕第60図308の破片は SK４よりも出土する。口径22.6㎝、器高36.7㎝を測り、口縁端部は明瞭な面取りを行う。底部を叩き出した下半部は内面をハケ調整で仕上げる。

Ｂ地区 SK２

L－10区 SD28・SD15に挟まれて位置する不定形な浅い落ち込みである。長軸約210㎝×短軸約120㎝、深さ約10㎝を測り、覆土は暗灰褐色砂質土である。土器小片が出土した。

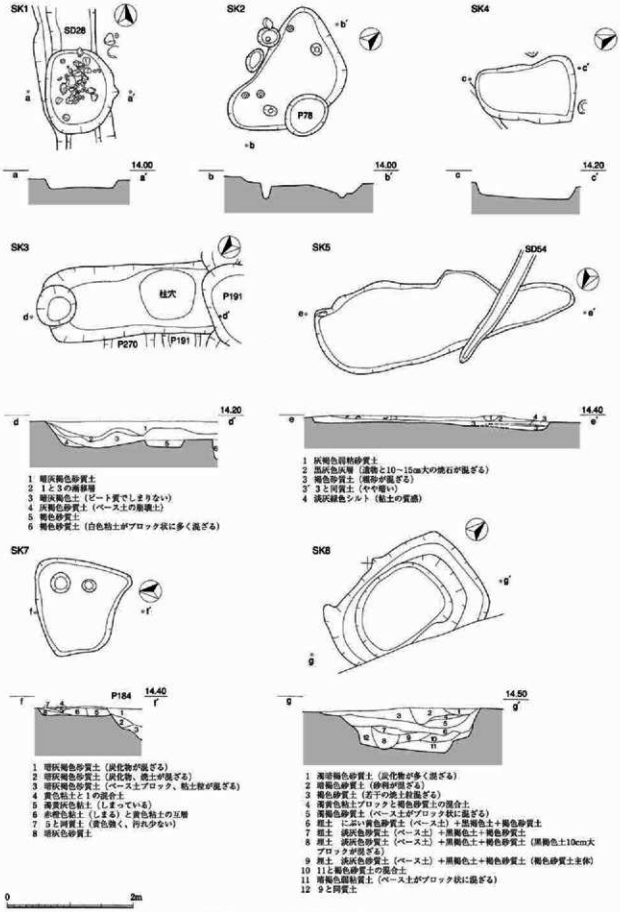
Ｂ地区 SK３・４

K－10区に位置する。SK３は隅丸長方形を呈する。長辺420㎝以上、短辺約110㎝、深さ約40㎝を測り、壁は緩やかにたちあがる。覆土は上層より暗灰褐色の色調をもつ土がほぼ水平に堆積、底面は平坦である。SB22を構成するＢ地区 P191、P194に後出する。SK４は、やや崩れた長方形を呈し、一辺150㎝×100㎝、深さ約20㎝を測る。底面は平坦で、10㎝大の自然石が多く混ざる暗灰褐色砂質土を覆土とする。第59図須恵器坏蓋300は両土坑より破片が出土する。300は扁平なボタン状の鈕を付け、天井部内面にはヘラ記号を記す。

Ｂ地区 SK５

K－10・11区に位置する大型の落ち込みで、本来は隅丸長方形を呈したと考えられる。長辺約400㎝×短辺約130㎝、深さ約20～30㎝を測る。覆土は、まず掘り込んだ地面を褐色砂質土で埋め、その上位を北側壁面に沿うように２～３㎝の厚さで緑灰色粘土～淡灰緑色シルトを貼る。さらに褐色砂質土を入れた後に、なんらかの持続的な焼成を行う。結果として堆積した黒灰色灰層は厚さ約10～15㎝を測り、10～15㎝大の焼けた自然石、土師器煮沸具細片と須恵器供膳具が混ざる。切り合い状況はＢ地区 SD54より古い。

第59図301～303の須恵器を図化した。扁平な坏蓋301は口径14.6㎝を測り、Ⅰ類重ね焼きで堅緻に焼きあげる。無台坏302・303は口径約12.5㎝、器高3.5前後㎝を測り、体下部は丸味をもちながら外傾



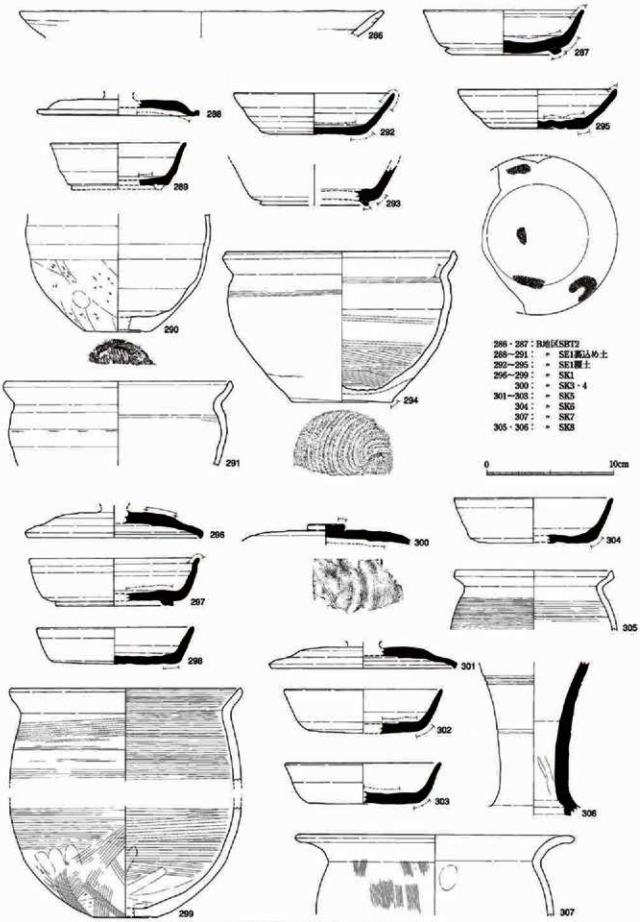
1　暗灰褐色砂質土
2　1と3の漸移層
3　暗灰褐色土（ビート質でしまりない）
4　灰褐色砂質土（ベース土の崩壊土）
5　褐色砂質土
6　褐色砂質土（白色粘土がブロック状に多く混ざる）

1　灰褐色弱粘砂質土
2　黒灰色灰層（遺物と10～15cm大の焼石が混ざる）
3　褐色砂質土（褐砂が混ざる）
3'　3と同質土（やや暗い）
4　淡灰緑色シルト（粘土の質感）

1　暗灰褐色砂質土（炭化物が混ざる）
2　暗褐色砂質土（炭化物、焼土が混ざる）
3　暗灰褐色砂質土（ベース土ブロック、粘土粒が混ざる）
4　黄色粘土と1の混合土
5　淡黄灰色粘土（しまっている）
6　赤橙色粘土（しまる）と黄色粘土の互層
7　5と同質土（黄色強く、汚れ少ない）
8　暗灰色砂質土

1　淡褐色砂質土（炭化物が多く混ざる）
2　暗褐色砂質土（砂利が混ざる）
3　褐色砂質土（炭子の焼土粒混ざる）
4　淡黄色粘土ブロックと褐色砂質土の混合土
5　淡褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
6　粗土　にぶい黄色砂質土（ベース土）＋黒褐色土＋褐色砂質土
7　粗土　淡灰色砂質土（ベース土）＋黒褐色土＋褐色砂質土
8　粗土　淡灰色砂質土（ベース土）＋黒褐色土＋褐色砂質土（黒褐色土10cm大ブロックが混ざる）
9　粗土　淡灰色砂質土（ベース土）＋黒褐色土＋褐色砂質土（褐色砂質土主体）
10　11と褐色砂質土の混合土
11　褐色弱粘質土（ベース土がブロック状に混ざる）
12　9と同質土

第58図　B地区土坑実測図（S＝1/60）



第59図　B地区竪穴建物他遺構出土遺物実測図（Ｓ＝1/3）

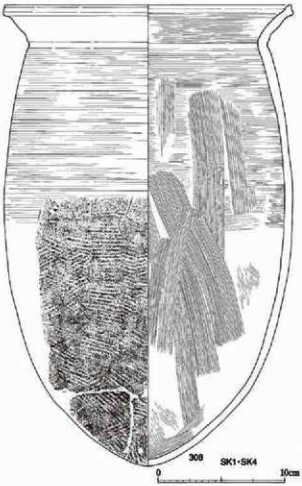
せずたちあがる。302は外面を主体に煤が付着する。

B地区 SK6

K-11区調査区北東端に位置する楕円形の穴で、建物の柱穴の可能性が高い。径約100㎝×60㎝、深さ約60㎝を測り、底面は平坦である。覆土は暗褐色砂質土を基調とし、部分的に炭粒や青灰色粘土ブロックが混ざる。第59図304は箱形を呈した須恵器無台坏で、口径12.4㎝、器高3.6㎝を測る。底部外面周縁部は棒状の工具を用いてナデ調整を施す。体部外面に二次被熱痕が認められる。

B地区 SK7

K-10区に位置する崩れた略方形の落ち込みである。覆土は、掘方を暗灰色砂質土（第58図土層8）で埋めた後に、硬くしまった粘土を充填する。特に土層6は厚さ約3㎝を測る赤橙色粘土と黄色粘土を交互に入れ、都合5層をなす。また底面の小ピット南側は炭化物が多く混ざる暗灰色砂質土となる。B地区P184に切られる。第59図307の非ロクロ土師器甕を図化した。口径21.5㎝を測り、大きく外反する口縁部は若干肥厚する。



第60図　B地区土坑出土遺物実測図（S＝1/3）

B地区 SK8

L-11区に位置し、東側調査区外にのびる。隅丸長方形を呈し、検出面で南北方向約240㎝×東西方向150㎝以上、また中途より一回り小振りの同約130×100㎝の掘方となる。深さ60～70㎝を測る。底面は平坦で、しまりのない暗褐色弱粘質土などを用いて意図的に埋める。規模や顕著な湧水から、側材を取り外した井戸と考える。切り合い状況からB地区SD52より古い。第59図305・306を図化した。ロクロ土師器小甕305は口径12.4㎝を測り、口縁端部を嘴状に上方につまみあげる。煮沸に伴い外面に薄い煤が、また内面に黒褐色のヨゴレが付着する。須恵器長頸瓶306は2ケ所に沈線を施す。

5．溝

溝は約100条を確認、一定エリアを区画するための溝、排水を主目的とする溝、耕作に係る溝、道路状遺構の側溝となるものに大別できる。以下、A地区より順に主要な溝群ごとに記す。

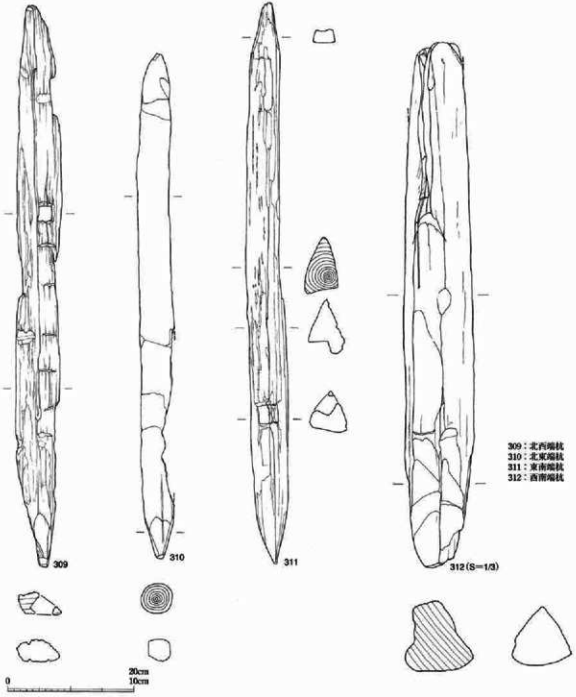
A地区 SD1（B地区 SD20）（第66図）

L-5・6区に位置し、調査区により異なる遺構番号を付した1条の基幹的排水溝である。北側でA地区区画溝群に、また東側でB地区 SD23とつながり北北西方向に流下する。西端で幅約100㎝、深さ20㎝強、中央付近（第66図断面b）で幅約110㎝、深さ約30㎝、東側（同図断面e）で幅約180㎝、深さ約40㎝を測り、東側ほど幅広く、また底面に起伏をもつ。遺構覆土は、植物遺体や砂利の混ざる淡灰色粗砂、暗灰褐色土、灰褐色砂質土、緑灰色～灰色細砂が水流により複雑に堆積する。下層遺構

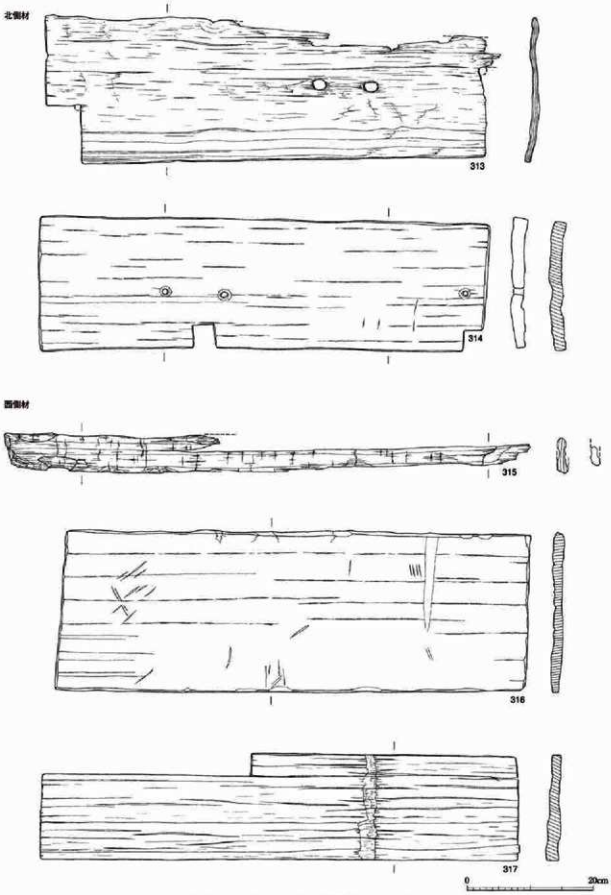
群に属し、Ａ地区 SD25に後出、Ａ地区 SD４に前出する。

各層より比較的多くの遺物が出土、うちＡ地区 SD１の第72図323～第74図362、第65図374、375、第86図539～547、Ｂ地区 SD20の第77図421～第78図431、第88図557、558を図化した。須恵器323～346のうち、323～337は坏蓋、338～341は有台坏、342～346は無台坏である。

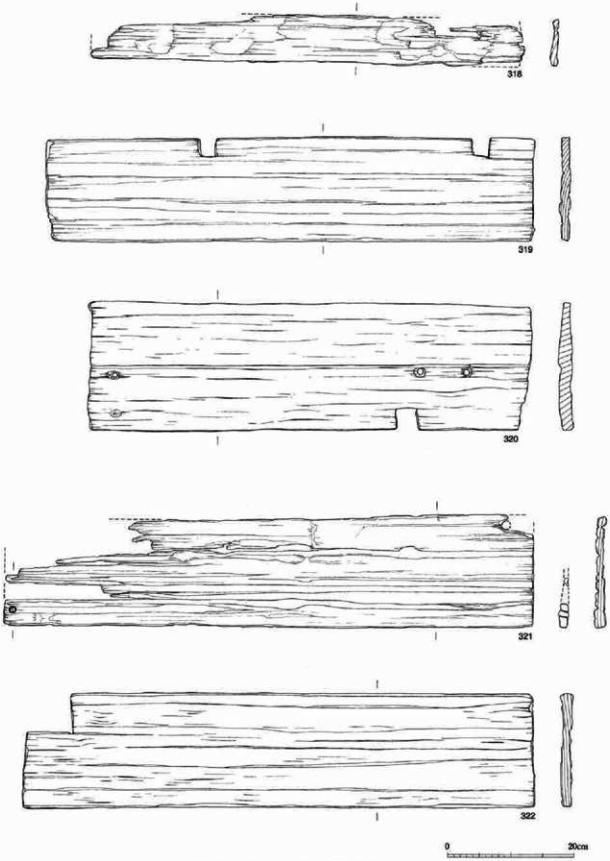
坏蓋323～325は山笠状を呈し、硯に転用される。323で口径14.5cm、325で口径12.4cmを測る。323の天井部内面はヘラ記号の他、天井部内面を硯面に転用したため、摩耗と墨痕が遺存する。324は口縁端部を小さくつくる。325は肩部に「×」の墨書が記され、天井部内面を硯面に転用したため、摩耗とわずかな墨痕が遺存する。326～329は天井部外面が平坦なため平笠形を呈し、天井部～肩部には回



第61図　Ｂ地区 SE1側材実測図１（Ｓ＝1/3・1/6）



第62図　B地区SE1側材実測図2（S＝1/6）

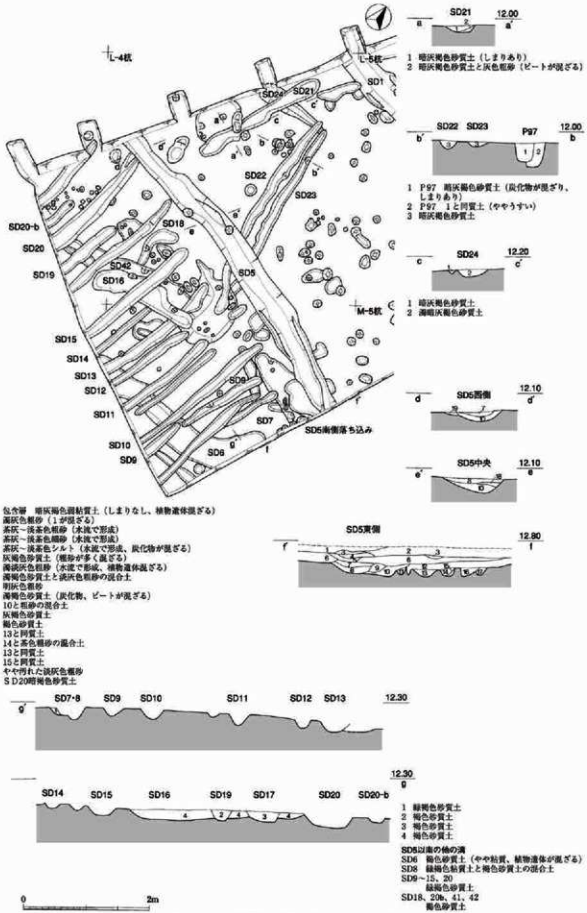


第63図　B地区SE1側材実測図3（S＝1/6）

転ヘラ切り後に回転ケズリ調整を行う。326で口径12.2㎝、器高2.1㎝、329で口径12.6㎝、器高2.8㎝を測る。326の天井部内面は使用に伴う摩耗が著しい。327は天井部内面に人名と考えられる「足女」と墨書が記される。328の文字は、小片のため判読は難しいが「知」の可能性をもつ。ヘラ記号「×」を刻む329は、降灰状況よりⅠ類重ね焼きと考えられる。転用硯で、天井部内面の周縁は筆を揃えたため濃淡をもつ墨痕が残る。330は山笠形を呈する。口径12.4㎝、器高3.0㎝を測り、焼成は堅緻である。331～336は口縁基部の平坦面が明瞭な平笠を呈し、天井部外面をナデ調整で仕上げる。Ⅰ類重ね焼き痕をもつ331は口径11.8㎝、器高2.3㎝を測り、ボタン状の鈕をつける。内面全体が摩耗し、天井部外面に２文字の墨書を記すが判読できない。332は口径13.2㎝を測り、口縁端部を内湾させる。天井部外面に「上」の文字が明瞭に残る。ボタン状の鈕を付ける333は口径14.3㎝、器高2.8㎝を測り、Ⅰ類重ね焼きと考えられる。算盤玉状の鈕をもつ334は摩耗した器面に２文字の墨書を記す。還元の弱い335は口径11.8㎝、器高2.8㎝を測り、口縁端部は下方にのびる。倒位での使用が認められる。平笠形の336は口径12.3㎝、器高2.9㎝を測り、口縁端部の面取りを明瞭に行う。また鈕上面に「の」とヘラ記号を記す。337は天井が高く、口径12.4㎝、器高4.2㎝を測る。焼き膨れと降灰が顕著である。

箱形を呈する338は口径15.5㎝、器高6.0㎝を測り、底部外面には台部貼り付けに伴う爪状圧痕が明瞭に残る。使用に伴う摩耗が著しい。扁平な339は口径13.0㎝、器高3.6㎝を測り、小さい断面方形の台部を中心寄りに外展して貼る。また鋭利な工具でヘラ記号「／」を刻む。深身の340は口径11.5㎝、器高4.3㎝を測り、体部は緩やかに外反する。底部外面に摩耗はないものの、かすかに黒色付着物があり、転用硯の可能性をもつ。341は正位・無蓋で焼成を行い、底部と体部の境は緩やかに移行する。薄手の342は口径12.2㎝、器高3.3㎝を測り、使用に伴う摩耗が著しい。箱形を呈する343は口径11.8㎝、器高3.5㎝を測り、底部外面にヘラ記号「‖」と墨書「小足」が認められる。墨書の文字はほとんど摩滅していない。また使用に伴う摩耗が著しく、口縁端部に薄い黒色タール状付着物がある。344・345は体部の外傾が目立つ。344は口径12.0㎝、器高3.2㎝を測り、底部外面に「田地一」と墨書を行う。345は口径10.8㎝、器高3.2㎝を測り、底部外面は回転ヘラ切り未調整である。346は口径11.3㎝、器高2.7㎝を測り、体部は直線的にたちあがる。底部外面にヘラ記号を刻む。

内黒外赤土師器無台埦347は口径13.2㎝を測り、口縁端部は小さく外反する。内外面とも粗いミガキ調整を加える。赤彩土師器高坏348は口径19.1㎝を測り、ミガキ調整を密に加える。胎土は須恵器ｊ類に類似する。349・350は同一個体と考えられる土師質土管状土製品で、富山県小杉町小杉流団No.16遺跡２号窯に類例が認められる。口径11.6㎝を測り、外面はカキメ、内面はナデを主体に調整を加える。顕著な使用痕は確認できない。須恵器広口瓶351は口径16.3㎝を測り、降灰・自然釉および窯壁片の溶着が著しい。口縁端部は上方に嘴突し、外面に１条の沈線で装飾する。352は内面に粗いハケ調整を施した土師器盤底部破片で、第99図752と同形態と考えられる。仏器と考えられ、底部外面にタール状の煤が付着する。胎土は第99図752と共通する。須恵器甕353は胴部外面に平行叩きｅ類、内面に同心円叩きａ類を行う。口頸部は折り曲げてつくる。ロクロ土師器小甕354は口径14.8㎝を測る。薄手で内外面ともロクロ目が目立つ。355はロクロ土師器甕か。底部と胴部の境は不明瞭で底部外面をナデ調整、胴部をカキメ調整で仕上げる。354とともに煮沸に伴うヨゴレ・煤が付着する。須恵器甕356は口径36.6㎝を測り、口縁外面を１条の突帯・４条１単位の波状文・１条の沈線で加飾する。357～360は煮沸に用いたロクロ土師器甕で、357、358は同一個体の可能性をもつ。357は口径12.4㎝を測り、口縁端部をつまみあげる。358は煮沸による煤・ヨゴレの付着が認められる。359は口径19.2㎝を測り、口縁端部を嘴状につまみあげる。360は口径20.9㎝を測り、頸部は明確に屈曲する。にぶい黄橙色を呈する土師器小型壺361は口径7.6㎝を測り、外面は粘土紐輪積み痕を残す。古墳時代中期の所



第64図　Ａ地区溝実測図（Ｓ＝1/150・1/60）

産である。362はにぶい乳白色を呈した鎌などの仕上げ砥石である。シルト岩で、残存する全ての面を研ぎに使用する。

和同開珎銅銭第65図374は溝底より15cm浮いた状況で出土した。径2.4cm、重さ1.7ｇを測る。加藤克郎氏によれば「鋳上がりが良好」の「隷書風の破字体」に属する(4)。375は銅製の丸鞆裏金具で縦3.4cm、横2.1cm、厚さ0.1cm、重量4.6ｇを測る。４ケ所で認められる受け穴は、径1.5～2.0mmを測る。表面に擦痕が残る他、漆の可能性をもつ黒褐色の付着物がわずかに認められる。

第65図　A・B地区溝出土遺物実測図１（S＝1/2）

またB地区 SD20で取り上げた遺物のうち第77図421～第78図431を図化した。421～424、431は須恵器、425～430はロクロ土師器である。肉厚の坏蓋421は口径14.2cmを測り、広い天井部外面をナデ調整で仕上げる。平笠形の坏蓋422は口径11.3cm、器高2.9cmを測り、端正なつくりの鉦をつける。Ⅱａ類重ね焼きで焼成され、天井部外面に土偏を含む墨書が記されるが、文字の摩滅が著しいため判読できない。有台坏423は口径13.0cm、器高3.9cmを測り、箱形の身に外展する台部をつける。無台坏424は口径11.2cm、器高2.8cmを測り、厚みをもつ底部より外反しながら体部がたちあがる。長甕425・426は口径17.4cm・19.2cmを測り、口縁端部は上方に長くのびる。内外面とも回転ナデ調整またはカキメ調整で仕上げ、426は内外面でカキメ原体が異なる。427、428は口径約22cmを測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。429は口径36.8cmを測る鍋と考えられる。把手をもつ平底の鉢430は口径31.8cm、器高14.3cmを測る。胴部はカキメ調整を主体とし、外面下半はケズリの後に平行叩きを加えて成形を行う。外面にヘラ記号「×」が刻まれ、煮沸に伴う煤の付着や小剥離が認められる。なお破片はA地区 SD２、B地区 SD20～22、24より出土した。口縁部別づくりの須恵器瓶431は無蓋で焼成される。

第86図539・540は円形板で径約17cmを測り、540には２ケ所に目釘が遺存する。541は蒲鉾状の断面をもつ木製品である。幅4.3cm、厚さ3.0cmを測り、遺存する一端は先細りとなる。板状木製品542は長さ48.3cm、厚さ0.9cmを測り、一部が被熱する。板状木製品543は長さ51cm以上を測る。板状木製品544は、両側面方向よりの粗い切断面をみせる。長さ30.1cm、幅16cm、厚さ2.5cmを測る。棒状木製品545は一端を尖らせる。棒状木製品546は径1.6cmを測り、一端に溝を彫って頭部をつくりだす。板状木製品547は両端を尖らせ、方形の孔を中央付近に穿つ。第88図557は円形板で、径約16cmを測る。木錘558は高さ7.4cm、幅12.8cm、厚さ3.5cmを測り、断面方形の紐孔を穿つ。

A地区 SD３・30（第66・67図）

SD３は、K－６区の「火処」痕跡と重複する位置にある。A地区整地土に後出し、「火処」痕跡に前出する。ちょうど炉中心部直下より屈曲しながら西側にのび、A地区拡張区で確認できなくなる（第66図）ことから、「火処」痕跡に係る施設の一部とも考えられる。断面は箱形を呈し、幅約20cm、深さ約15cm、覆土は黒褐色砂質土である。出土した第74図363の須恵器坏蓋は、平笠形を呈し、口径12.6cm、器高2.8cmを測る。内面は倒位の使用に伴う著しい摩耗の後に「吉継」と判読できる墨書が記される。文字は摩耗し、かすれ気味である。

SD30は幅約20cm、深さ約15cmを測り、ピート質の混ざる濁褐色砂質土を覆土とする。同様な性格を想定できよう。

A地区区画溝群（第66～68図）

K・L－５・６区に位置し、南北方向に掘られ、東西方向を区画する溝群である。西側の区画として

Ａ地区 SD２（Ａ地区拡張区 SD23）、Ａ地区 SD37およびＬ字状に屈曲するＡ地区 SD36ａ・ｂが、また東側の区画としてＡ地区 SD54・55、Ａ地区 SD56（30）、Ｂ地区 SD24がある。この区画内には、区画に伴うか否かは検討を要するが、SB２や SB10が入る。中層遺構群に属する西側建物群は区画溝埋め戻し後に、ほぼ区割を踏襲すると考える。

	遺構名	幅(cm)	深さ(cm)	備　考		遺構名	幅(cm)	深さ(cm)	備　考
西側区画	Ａ地区 SD36a	60～120	30～45	箱形・深・直線	東側区画	Ａ地区 SD54	80	25～35	幅広・深・屈曲
	Ａ地区 SD36b	100～110	25～35	幅広・深・屈曲		Ａ地区 SD55	30～70	20～30	箱形・深・直線
	Ａ地区 SD37	40～80	5～10	幅広・浅・直線		Ａ地区 SD56	40～70	15～20	箱形・浅・直線
	Ａ地区 SD2	40～60	10～20	箱形・浅・直線		Ｂ地区 SD24	40～80	5～15	幅広・浅・屈曲

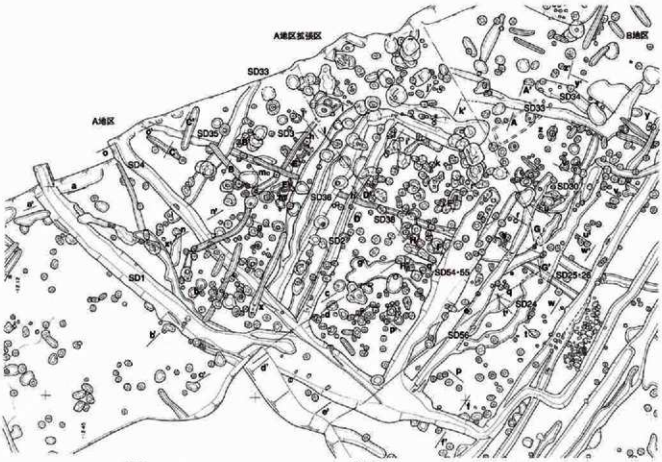
第10表　Ａ地区区画溝群規模一覧

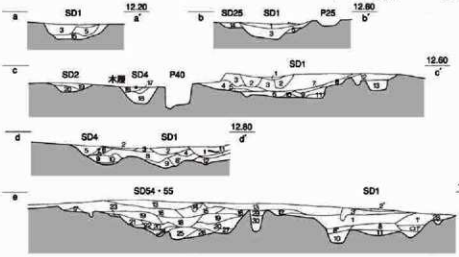
西側の区画はＡ地区 SD36ａ・ｂ、SD37が他の溝と接続しないのに対し、Ａ地区 SD２は西側に流下するＡ地区 SD４と接続する。形状は幅広で屈曲するＡ地区 SD36ｂと、直線的にのびるＡ地区 SD36ａ、Ａ地区 SD２に分けられる。Ａ地区 SD36ｂ→ SD36ａ→ SD２の順（SD37は不明）に移行、それぞれ灰褐色～暗灰褐色砂質土を主体にした土砂で埋められる。東側区画では幅広で屈曲気味のＡ地区 SD54、Ｂ地区 SD24と直線的に細くのびるＡ地区 SD55・56に分かれ、Ｂ地区 SD24は、他と接続しない。灰褐色～暗灰褐色砂質土を主体とした土で順次埋め戻される他、Ａ地区 SD56北端では水流で形成された土層（淡灰色シルトを層状に挟む暗灰褐色砂質土）が確認できる。Ａ地区 SD55→ SD54の順に新しくなる。

西側区画のＡ地区 SD２より第74図須恵器こね鉢364が出土した。口径34.6㎝、器高19.5㎝を測り、焼成は堅緻である。叩き技法を用いて丸底風に成形する。内外面とも使用に伴う摩耗が著しく、特に底部外面は小剥離を生じる。また木製品第86図548、第87図549、552を図化した。548は残存する端部の側面を肥厚させる。断面は略方形を呈し、厚さ1.9㎝を測る。大型の円形曲物容器蓋549は２ケ所に把手を作り出し、略方形の孔（おそらく各把手に２ケ所）を穿つ。側板と蓋を固定するための目釘痕が不規則に残る。円形板552は径17.6㎝を測り、一面に刺突した痕跡が認められる。

Ａ地区 SD36より第84図504～507が出土した。須恵器坏蓋504は口径12.9㎝を測り、口縁端部は小さく下方につまみ出す。灯明容器に転用したため、外面に煤、内面中央に薄い煤、内面周縁部にタール状の煤が付着する。須恵器無台坏505は口径12.6㎝、器高3.6㎝を測り、口縁端部で小さく外反する。使用に伴う摩耗が蓄積した後に「乙上」と墨書する。内黒ロクロ土師器無台埦506は口径14.1㎝、器高4.5㎝を測り、底部外面に回転糸切り痕が残る。内面に横方向のミガキ調整を、体部下半にケズリ調整を施す。ロクロ土師器長甕507は口径22.5㎝を測り、摩滅が著しい。Ａ地区 SD37から出土した第84図須恵器有台坏509は底部外面は被熱し、煤が付着する。

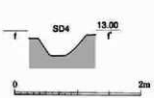
東側区画のＢ地区 SD24より第81図458、459、461、462、第88図568が出土した。須恵器無台坏458は薄手・深身で、口径12.0㎝、器高4.0㎝を測る。底部外面に雑なナデ調整を施した後に、ヘラ記号「／」を刻む。須恵器瓶類蓋459は鈕を失った後に、逆位での煮沸容器に転用されたために、焼成による軟質化・酸化、煤の付着が明瞭に認められる。461は大型の土師器盤底部破片で、第99図752と同形態を呈すると考えられるが、器肉は薄い。内面は指で押さえて平滑にした後、周縁部のみ粗いハケ調整を加える。内外面とも摩耗が目立ち、外面にはタール状の暗褐色煤が付着する。胎土は752と共通する。須恵器長頸瓶462は、強く外側に踏ん張る台部に板状圧痕が明瞭に認められる。棒状木製品568は断面方形を呈し、端部を斜方向に切断する。残存長約110㎝を測る。



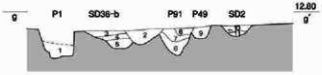


a～c
1 褐色砂質土（炭化物が混ざる）
2 褐色砂質土と明茶～淡灰色砂の混合土
3 灰褐色砂質土（灰赤色細砂～砂利、ピートが混ざる）
4 暗灰褐色砂質土
5 緑灰～灰色細砂と4の互層（水の流れで形成）
6 淡灰～極灰色粗砂（水の流れで形成）
7 3と同質土（やや色うすい）
8 3と同質土（灰色強い）
9 3と同質土（ベース土がブロック状に混ざる）
10 9とベース土の互層
11 9とベース土の混合土
12 暗灰褐色砂質土（砂利を多く含む）
13 灰色砂質土
14 暗灰褐色砂質土と茶灰色粗砂の互層
15 褐色粗砂（ピートが混ざる）
16 暗灰褐色土（ピートが混ざる）
17 金一淡灰色細砂（水の流れで形成）
18 灰褐色砂質土（黒色灰色土がブロック状に混ざる）
19 薄暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
20 灰色細砂と褐色砂質土の互層（水の流れで形成）

d・e
1 暗灰褐色砂質土（木質遺物が多く混ざる）
1' 〃 （小石が多く混ざる）
2 暗灰色砂質土と灰色粗砂の互層（木質遺物が多く混ざる）
2' 2と同質土
3 淡灰色粗砂（暗灰色土がブロック状に混ざる）
3' 〃 （色調薄い）
4 灰褐色砂質土（木質遺物が多く混ざる）
5 灰褐色砂質土
6 灰褐色砂質土（灰色粗砂が多く混ざる）
7 褐色砂質土
8 灰褐色砂質土、灰色粗砂、木質遺物の互層
8' 〃
8'' 〃 （淡灰色粗砂主体）
9 灰褐色土（木質遺物、小石が多く混ざる）
10 暗灰褐色土（木質遺物、小石が多く混ざる）
11 淡灰色粗砂（1が混ざる）
12 9と同質土
13 暗褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
13' 暗褐色砂質土（炭化物が多く混ざる）
14 灰色粗砂
15 茶褐色ピート
16 暗灰褐色砂質土（木質遺物混ざる）
17 暗淡色シルト
18 16と同質土（灰色粗砂、木質遺物が多く混ざる）
19 灰褐色砂質土（灰色粗砂が帯状に入る）
20 褐灰色砂質土（しまりない）
21 20と灰色粗砂の混合土
22 17と同質土
23 褐灰色粗砂
24 暗灰褐色ピート
25 24とベース土の混合土
26 24と同質土
27 25と同質土
28 暗灰色粗砂
29 灰褐色砂質土
30 灰褐色砂質土とベース土の混合土

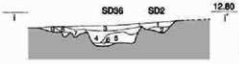


第66図　A・B地区下層溝実測図1（S＝1/60）



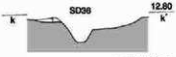
1 灰褐色砂質土（灰色砂質土がブロック状に混ざる）
2 灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
3 灰褐色砂質土
4 暗灰褐色砂質土
5 4と茶色砂の混合土
6 灰色砂質土とベース土の混合土
7 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
8 暗灰褐色砂質土（ややしまりない）
9 褐色砂質土
10 暗灰色粘質土（ピートが混ざる。しまりない）
11 10と同質土（砂が混ざる）

1 灰褐色砂質土（炭化物が混ざる）
2 暗灰褐色砂質土と淡灰色砂質土の混合土
3 褐灰色砂質土
4 褐灰色砂質土と灰色粘砂の互層（あで形成）
5 暗褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
6 淡灰黄色細砂と灰色土の混合土
7 褐色砂質土と暗灰褐色砂質土の混合土
8 暗灰褐色砂質土（やや粘質で、ベース土がブロック状に混ざる）
9 3と同質土
10 4と同質土
11 暗褐色砂質土（粘性をもち、ピートが混ざる）
12 灰褐色砂質土（ベース土の小ブロックが混ざる）
13 灰褐色砂質土とベース土の混合土

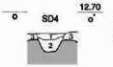


1 暗褐色砂質土
2 1とベース土の混合土
3 1と同質土（ベース土がブロック状に混ざる）
4 灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
5 暗灰褐色砂質土
6 5とベース土の漸移層
7 淡灰色粗砂
8 淡灰色粗砂
9 暗灰褐色細砂

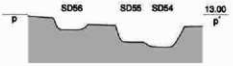
1 灰褐色砂質土
2 暗灰褐色砂質土
3 にぶい褐暗灰褐色砂質土
4 3に灰色粗砂が多く混ざる
5 3と同質土（灰色が強い）
6 4と同質土



1 暗褐色砂質土

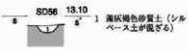


1 暗灰褐色砂質土（しまりなく、灰緑色土がブロック状に混ざる）
2 褐色砂質土（しまりなく、やや粘質）
3 色合層　暗灰褐色砂質土



1 暗灰褐色砂質土
2 暗灰褐色砂質土（灰色細砂がブロック状に混ざる）
3 暗褐色ピート（しまりない）
4 1と同質土（灰色細砂～粗砂が多く混ざる）
5 淡灰灰色細砂（4が混ざる）
6 暗褐色砂質土（木質遺物が混ざる）
7 5と同質土
8 灰褐色砂質土（灰色細砂～粗砂が層状に入る）
9 暗褐色砂質土と褐色ピートの混合土
10 3と同質土

1 暗灰褐色砂質土（ピートが混ざる）
2 暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
3 暗褐灰色砂質土（ピートが混ざる）



1 淡灰褐色砂質土（シルトに近く、ベース土が混ざる）

第67図　Ａ・Ｂ地区下層溝実測図２（Ｓ＝1/60）

Ａ地区 SD４（第66・67図）

Ｌ－５・６区に位置する基幹的排水路で、東側でＢ地区SD23、北側でＡ地区 SD２に接続すると考えられる。直線的にほぼ西方向（N－80～90°－W）へ流れ下り、断面は逆台形を呈する。西端で幅約60cm、深さ20cm強、中央付近（第66図土層断面ｃ）で幅約60cm、深さ約25cm、東側（同図土層断面ｅ）で幅約70cm、深さ約35cmを測る。木質遺物や砂利が多く混ざる暗灰褐色土、灰褐色砂質土、茶～淡灰色細砂が、水流により逐次堆積する。下層遺構群に属し、Ａ地区 SD１より後出し、Ａ地区整地土、Ａ地区 SD35に前出する。

各層より比較的多くの遺物が出土、うち木履第87図555は遺構検出面に近い溝上層（第66図断面ｃ）の暗灰褐色土より出土した。第74図365、366、368～371、373、第87図550、551、553、555、556を図化した。

365・366、368・369は須恵器坏蓋である。365は口径12.0cm、 器高2.6cmを測る。365はⅡａ類、369はⅡｂ類重ね焼きが認められる。366は口径12.3cm、器高2.6cmを測り、Ⅰ類重ね焼きで焼成され、内面を硯に転用する。368は口径13.0cmを測り、外面の降灰・自然釉が顕著である。厚手の369は口径12.2cmを測り、肩部を緩やかに仕上げる。須恵器有台坏370の体部は外反度合いが弱い。底部外面の墨書「万呂」はかすれ気味である。ロクロ土師器甕371は口径19.6cmを測り、胴部外面をハケ調整、内面をカキメ調整で仕上げる。外面は煮沸に伴い厚い煤が付着する。深身の有台坏373は口径11.3cm、器高4.1cmを測り、張りが強い体部は口縁部で外反する。底部外面に墨書を行う。

第87図550・551は、大型の楕円形曲物容器底板と考えられる。550は、有段となった部分に側板を綴じる目釘を比較的多く使用する。551は、550よりも内側に側板を綴じる段をもつ。長径約39cmを測る。553は曲物容器側板である。屈曲させるための密な刀子痕が認められる。木履555は、排水溝掘削時に出土したため、後部を欠損する。残存長26.7cm、最大幅14.2cm、高さ6.4cmを測る短履で、爪先はほとんど反りあがらない。底面内部２ケ所が指頭状にすり減ってくぼむ。この窪みを指痕とすると、左右の別がないと考えられる。また底面外部も使用に伴いすり減る。棒状木製品556は断面方形を呈し、残存長約46cmを測る。側面に段をもち、端部は一方向より切断する。

Ａ地区 SD５（第64図）

東側から西側に流下する溝で、幅70～120cm、深さ20～40cmを測る。覆土は、下層より炭化物・ピートの混ざる濁褐色砂質土→濁褐色砂質土と淡灰色粗砂の混合土→濁淡灰色粗砂が水の流れでレンズ状に堆積する。上記の耕作に伴う溝群より後出して掘削され、集落域と耕作域を画する溝の一つに位置づけられる。またＡ地区 SD１との間（幅約７～10ｍ）は、遺構の希薄域となる。

出土遺物のうち第74図367、372を図化した。須恵器坏蓋367は口径12.2cmを測り、口縁部に至り急激に器厚を減ずる。硯に転用した時の筆擦えの痕跡が明瞭に残る。ロクロ土師器372は底径が大きい印象を受ける。外面は下端を回転ケズリ調整とカキメ調整で仕上げる。煮沸に伴う煤・ヨゴレが付着する。

Ａ地区 SD６・16・42、SD５南側落ち込み（第64図）

SD５南側に位置する不定形な溝状の落ち込みで、後述の溝群に先行する。地勢に直交した主軸をもち、底面は掘削に伴う起伏が著しい。深さ10cm弱～20cmを測り、覆土は植物遺体・炭粒が多く混ざる褐色砂質土～弱粘質土を基本とする。少量の遺物が出土、うち SD５南側落ち込みより出土した第85図須恵器無台坏538は口径9.2cm、器高2.6cmを測り、正位・無蓋で焼成を行う。

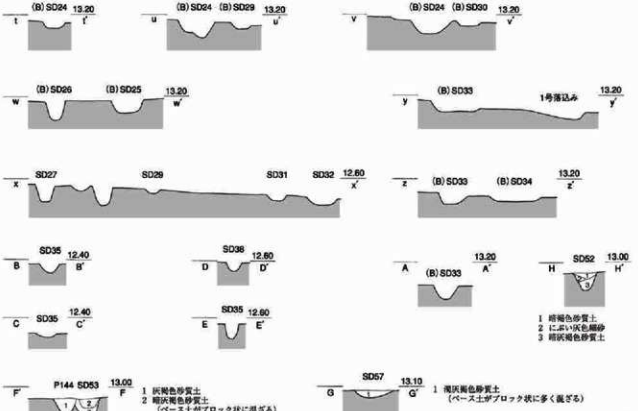
Ａ地区 SD７～15、17、19～23（第64図）

Ｌ・Ｍ－３・４区で検出した耕作に係る溝群で、第２次調査Ｅ地区で延びを確認している。地勢の

等高線に平行して掘られ、底面は掘削に伴う起伏をもつ。覆土は炭粒、植物遺体が混ざる褐色～緑褐色砂質土で、規模などから３グループに分けられる。SD８・10・13・15・19・20、SD20ｂの西側に位置する溝は、長さ５ｍ以上、幅20～75㎝（平均約40㎝）、深さ約10～20㎝を測る一群で、SD11も属しよう。最も規模の大きいSD20が基軸線となると考えられ、各溝芯々距離は東側で約1.3ｍ、西側で約1.9ｍを測る。主軸方位は、ほぼ北を指向、西側に向かうにつれ、地勢の張り出しの影響を受けて西側へ屈曲する。次にSD７・９・11・12・14・17・20ｂの一群は幅20～40㎝、深さ10㎝未満を測り、上記の一群より規模が小さい。また上記の一群より前出し、各溝芯々距離は約1.5ｍを測る。次にＡ地区SD５北側に位置する一群（SD22・23）は長さ８ｍ以上、幅30～40㎝、深さ５～15㎝を測り、北側ほど浅くなる。覆土は暗灰褐色砂質土で、主軸方位は地勢の張り出しの影響を強く受けるため西へ約20度振る。遺構の切り合い状況はＡ地区SD６・16・42より新しく、Ａ地区SD５より古く位置づけられる。SD19より円形板第87図554の他に、少量の遺物が出土した。554は径11.0㎝、厚さ0.9㎝を測り、やや崩れた円形を呈する。

Ａ地区 SD33（第66・68図）

Ｋ－５区に位置し、直線的に延びる溝である。Ａ地区SD36と約3.5～５ｍ隔てて平行することから、前述の区画溝の一部を構成した可能性が高い。幅40～80㎝、深さ約10㎝を測り、肩部は緩やかにたちあがる。調査区西側壁面（第７図）でベース土がブロック状に混ざる灰褐色砂質土を覆土とし、遺構の切り合い状況から下層遺構群に属し、SB８・９より古いと考えられる。第84図無台坏502は身の深い印象を受け、体下部は丸みをもちながらたちあがる。



第68図　Ａ・Ｂ地区下層溝実測図３（Ｓ＝1/60）

A地区 SD35（第66・68図）

B地区SD26と同じ主軸方位をとり西側に流下する。調査区西側壁土層断面（第7図）で下層包含層を切ることから、B地区整地土と同様に中層遺構群に属する。西側壁で幅約40cm、深さ約30cmを測り、断面逆台形を呈する。覆土は下層よりしまりのない褐色砂質土、暗灰褐色砂質土で、少量の遺物が出土した。

A地区L・K－5区小溝群（第28図）

A地区L・K－5区に位置するSD27・29・31・32・34・39で、直交する位置関係にあるA地区拡張区SD52も属しよう。耕作に伴う溝と考えられ、主軸方位はN－22～25°－Wを測り、地勢の等高線とほぼ平行する。溝の規模などからSD27・29（長さ4～4.5m、幅20～40cm弱、深さ15～20cm、）と、SD31・32・34・39（長さ1.2～2.2m、幅20～40cm弱、深さ5～10cm）に分けられる。覆土は、前者の一群が茶色のピート層を挟む暗褐色砂質土、後者の一群はピートの混ざる褐色砂質土である。またSD27とSD29の芯々距離は約1.8mを測る。遺構の切り合い状況からA地区SD4、SD35より新しく位置づけられる。SD34・35より出土した第84図須恵器有台坏503は口径12.8cm、器高3.8cmを測り、使用に伴う摩耗が著しい。腰の張った身部に、扁平な台部を雑に貼る。底部外面に墨書「下家」を記す。

B地区区画溝群（第69～71図）

K・L－8～10区に位置する区画溝群で、B地区SD28を基幹にSD15、27、41、42を配する。またB地区SD16北半部も区画の一部を構成しよう。

南端で東側へ湾曲するSD28はL字状を呈し、200㎡以上の範囲を取り囲む。便宜上、西辺をSD28a、北辺をSD28bと呼称する。SD28aは延長18m以上、幅90～140cm、深さ10～40cmを、SD28bは延長13m以上、主軸方位N－110°－W、幅50～110cm、深さ25～35cmを測る。ともに肩部のたちあがりは緩やかで、底面は比較的起伏をもつ。SD28a南端で標高13.47m、SD28b東端で同14.18m、屈曲部分で同13.46mを測る。覆土はSD28aが灰褐色～暗灰褐色砂質土を、SD28bが粘性を帯びた淡灰褐色～褐色砂質土を基調とし、各層とも炭粒・炭化物の混ざりが目立つ。切り合い状況からSD28aはSK1より前出、SD28bがSB19に後出する。なお溝芯々距離は、SD28aとSD27で約2.5m、またSD28aとSD16で約8mを測る。

SD15は、SD28に囲まれた範囲を南北方向に2分する溝である。幅100～150cm、深さ約20cmを測り、南側に流下する。覆土は淡黄褐色砂質土で、遺構検出レベルで幅約3mにわたり多量の土器が投棄されていた。SB16より前出する。SD27はSD28aに平行して掘られ、幅1.3～1.8mの通路状の区画をつくりだす。幅50～80cm、深さ15～25cmを測り、肩部が明瞭にたちあがる。覆土は褐色～灰褐色砂質土を基調とし、一部埋め戻しの痕跡が認められる。

SD41・42は、SD28に囲まれた範囲を東西方向に小分割する溝で、SD15に先行する。SD41は直線的にのび、幅50～120cm、深さ10～15cmを測る。覆土は粘性を帯びた灰褐色～褐色砂質土を基調とする。SD42は若干開いたL字状を呈し、幅40～60m、深さ10～15cmを測り、覆土はSD41と同質土である。

遺物はSD15より第75図376～第76図404が出土した。須恵器376～393のうち、376～383は坏蓋、384～389は有台坏、390～393は無台坏である。376は口径17.3cm、器高2.8cmを測り、口縁端部は製作時の粘土による補修痕が残る。Ⅰ類重ね焼きで、顕著な使用痕は認められない。ボタン状の鈕をつける377・378は口径約14cm、器高2.8cm前後を測り、口縁端部をシャープに仕上げる。共にⅠ類重ね焼き痕が遺存し、倒位の使用に伴う摩耗が蓄積する。379は径3.7cmを測る大きめの鈕をつける。口径14.9cm、器高2.4cmを測り、天井部外面はナデ調整で済ませる。倒位の使用に伴う摩耗が著しい。380・381は口径約13.5cm、器高2.5cm前後を測る。天井部がひろい380は、焼き歪みが大きく、Ⅰ類重ね焼き痕

が遺存する。381は山笠形を呈する。焼成の甘い382は口径13.0㎝、器高2.5㎝を測り、口縁端部を肉厚のまま折り返す。扁平な383は口径12.6㎝を測り、口縁端部を丸くおさめる。倒位の使用に伴う摩耗が認められる。

有台坏384・385は口径約14㎝、器高約４㎝を測り、膨らみを有する体下部直下に背の低い台部を貼り付ける。385は自然釉の溶着が著しい。深身の386は口径14.3㎝、器高4.9㎝を測り、肉厚の体部は直線的に外傾する。使用に伴う摩耗が著しく、口縁端部では欠けが目立つ。387は口径12.4㎝、器高4.1㎝を測り、底部外面にヘラ記号「／」を刻む。使用に伴う摩耗が著しい。焼成の甘い388は口径11.8㎝、器高4.1㎝を測り、断面方形の台部が中央寄りにつく。389は口径10.9㎝、器高4.2㎝を測る。小振りな断面方形の台部は内端で接地し、体下部は張りをもつ。

無台坏390は口径13.8㎝、器高3.1㎝を測り、体部は大きく外傾する。深身の391は口径13.5㎝、器高3.8㎝を測り、体部は直線的にたちあがる。還元の弱い392は口径12.4㎝、器高3.6㎝を測り、体下部は張り気味である。箱形の393は口径11.1㎝、器高3.1㎝を測り、成形時の粘土ヌタが目立つ。

赤彩土師器394の底部外面には糸切り痕が残る。赤彩土師器高坏395は内外面ともハケ調整で仕上げる。ナデ肩の須恵器短頸壺396は口径9.0㎝を測り、口縁部は使用に伴う摩耗が蓄積する。破片化した後に被熱する。肉厚の397はロクロ土師器小甕と考えられる。口径16.0㎝を測り、口縁部はくの字状に折れ曲がる。土師質のフイゴ羽口398は赤橙色を呈する。外面に釉が溶着する。非ロクロ土師器甕399は肉厚で、内外面でハケ調整に使用する原体が異なる。400～402には煮沸に伴う煤・ヨゴレが付着する。非ロクロの長甕400は口径22.4㎝を測り、口縁端部は外反気味となる。胴部内面がカキメ様の調整であるのに対して、外面は縦方向のハケ調整で仕上げる。長甕401は口径22.2㎝を測り、口縁端部を丸くおさめる。外面は縦方向のハケで成形した後にカキメ調整を加える。塙402は口径37.0㎝を測り、頸部は明瞭に屈曲する。胴部は、内面がハケ調整の後にカキメ調整を、外面がカキメ調整、ハケ調整、ケズリ調整の順にそれぞれ加える。

須恵器横瓶403は自然釉の状況より斜位での焼成が復元できる。閉塞数は不明で、外面に平行叩きｂまたはｃ類が、内面に同心円ｃ類が認められる。須恵器甕404は口径19.5㎝、器高49.8㎝、胴部最大径40.4㎝を測り、口縁端部を斜め下に引きのばす。外面は底部を含めてｂまたはｃ類の平行叩きを施した後に上半部にカキメ調整を加える。内面は同心円叩きａ類を基本とし、底部叩き出しには異なる原体を用いる。

SD27より第81図464、SD28より同図460、465～第83図500が出土した。製塩土器口縁部464は棒状尖底と考えられる。薄手の須恵器坏蓋460は口径14.2㎝を測り、Ⅰ類重ね焼き痕が遺存する。465～471は須恵器有台坏である。扁平な台部を貼る465～467は、口径13.6～13.8㎝、器高3.6～3.9㎝を測る。底部外面のヘラ記号は465が「三」、466が「×」となる。また467の台部は使用に伴う摩耗が著しい。468・469は口径13.0㎝、器高4.0㎝を測る。断面方形の台部は外展し、体部は直線的に外傾する。470は暗灰色を呈し、口径11.7㎝、器高3.5㎝を測る。底部外面は回転ヘラ切り後、丁寧な回転ナデ調整を加える。471は腰の張った印象を受け、底部内面は使用に伴う摩耗が著しい。無台坏472は口径12.6㎝、器高3.5㎝を測り、口縁部は大きく外反する。底部外面にヘラ起こし時の工具の跳ねた痕跡が遺存する。薄手の赤彩土師器無台埦473は口径13.8㎝を測る。外赤内黒土師器高坏474は、外面に縦方向ミガキを施し、断面多角形状を呈する。底部内面のハケ調整は丁寧で、焼成時に吸着した黒斑が明瞭に遺存する。短頸壺475は、胎土より土師器と考えた。口径10.3㎝を測り、胴部肉厚となる。内外面とも回転ナデ調整を施し、破片化した後に強く被熱する。須恵器甑476は口径27.2㎝、底径17.6㎝、器高25.4㎝を測り、２ケ所に把手がつく。カキメ調整とケズリ調整を多用し、下半部は煮沸時の被熱で酸化し

たため色調は薄い。477は縄文土器深鉢底部である。ロクロ土師器小甕478は、底部外面に手持ちケズリを加え、切り離し痕を消す。非ロクロ土師器甕479は口径21.6㎝を測り、口縁部は大きく外傾する。椀形滓480には粘土が付着する。

須恵器481～490のうち、481～484は坏蓋、485～489は有台坏である。山笠形を呈する481は口径14.6㎝、器高3.8㎝を測り、口縁端部は嘴状に下方にのびる。降灰よりⅡb類重ね焼きの可能性をもつ。Ⅰ類重ね焼きの482は口径16.3㎝、器高2.6㎝を測る。扁平な鈕はつくりが丁寧で、天井部内面にヘラ記号「‖」を刻む。483は口径11.9㎝、器高2.7㎝を測り、宝珠形の鈕を付ける。天井部外面は回転ヘラ切り痕を残し、Ⅰ類重ね焼き痕が明瞭に認められる。484は口径16.4㎝を測り、口縁端部は下方に長くのびる。外面は自然釉・降灰が溶着するため調整は判然としない。485は口径14.4㎝、器高4.3㎝を測る。腰の張る体部は口縁端部で小さく外反する。486は口径14.1㎝、器高4.6㎝を測り、体部は外傾しながら長くのびる。薄手の487は口径13.6㎝、器高4.3㎝を測り、口縁端部は小さく外反する。底部外面にヘラ記号「×」を刻む。無蓋・正位焼成の488は、486と同形態と考えられ、底部外面にヘラ記号「×」を刻む。深身の489は口径12.8㎝、器高4.4㎝を測る。焼成堅緻で、断面は赤紫色を呈する。底部外面は丁寧な回転ナデ調整を施した後に、ヘラ記号「‖」を記す。無台坏490は口径10.8㎝、器高3.6㎝を測り、内湾する体部は口縁部で小さく外反する。赤彩土師器盤491は丁寧なミガキ調整を施し、内面には使用後に黒色煤・漆が付着する。外赤内黒土師器無台椀492は口径15.9㎝、器高4.0㎝を測り、扁平な印象を受ける。口縁端部に明瞭な面をもち、内面に密なミガキ調整を、外面に手持ちケズリ調整を施す。須恵器短頸壺493は口径約16㎝を測り、口縁端部を丸く仕上げる。胴部外面に密な単位のカキメ調整を施す。土師器494は断面方形の厚い小破片で、壺を想定した図を作成した。土師器小甕495は口径14.0㎝を測り、口縁部は若干内屈気味になる。非ロクロ土師器甕496・497は口径約20㎝を測り、外傾口縁部は大きくのびる。496の胴部内面はハケ調整の後に工具を用いたナデ調整を施す。497の胴部外面には粘土が付着、カマドに設置した痕跡の可能性をもつ。ロクロ土師器甕498は口径19.2㎝を測り、内外面で異なる原体を用いてカキメ調整を密に施す。須恵器甕499は口径29.6㎝を測る。口縁端部を肥厚させ、3本一単位の波状文で加飾する。胎土中に海綿骨片が混ざる。焼成堅緻な横瓶500は、両面閉塞と考えられる。胴部外面は平行叩きe類の後にカキメ調整、また内面は同心円叩きa類で成形する。

B地区SD41より第84図514～518が出土した。514～516は須恵器である。坏蓋514は口径14.2㎝、器高2.4㎝を測り、幅広のボタン状鈕を付ける。天井部内面にヘラ記号「／」を刻み、Ⅰ類重ね焼きで焼成する。無台坏515は口径13.4㎝、器高4.1㎝を、516は同11.5㎝、3.8㎝を測り、身の深い印象を受ける。ともに底部外面にナデ調整を加える。515は使用に伴う摩耗が著しい。棒状尖底の製塩土器517は外面に粗いナデ調整、内面にハケ調整が認められる。ロクロ土師器甕518は口径23.0㎝を測り、くの字に折れた口縁部は、端部を丸く仕上げる。SD42出土の非ロクロの外赤内黒土師器椀521は口径15.9㎝、器高5.2㎝を測る。内外面ともハケ調整を施し、内面にはミガキを加える。黒色処理は外面にはみ出す。

B地区 SD16（第69・70図）

延長約50mにわたり調査区を縦断する基幹的溝である。直線的にのびる南半部（約20m）と緩やかに湾曲する北半部（約30m）に分かれ、第69図土層断面e付近を境に重複する2条の溝を1条の溝と誤認した可能性をもつ。南半部は主軸方位N-16°-W、幅100～160㎝、深さ20～40㎝を測り、肩部はしっかりとたちあがる。同図土層断面dライン以南で底面中程の盛り上がりから、溝の切り替えしを想定できるが、その順序は判然としない。覆土は褐色～暗灰褐色の色調をもつ粘性を帯びたシルト～

細砂質土が堆積、底近くでは植物遺体や木製遺物が混ざる。

次に北半部は、Ｂ地区区画溝群と同じカーブで湾曲し、北側はＣ地区にのびる。覆土は下層より褐色～褐灰色砂質土、暗灰褐色～黄褐色砂質土が堆積する。この後者の土層は、Ｋ－９区以北で最大60㎝を越える多量の自然石が混ざった中層遺構群ベース土でもある。Ｋ－８・９区は最も幅が広く、肩部も緩やかにたちあがるのに対し、Ｊ－９区以北は狭深で肩部の勾配はかなり強い。Ｋ－８・９区付近で幅150～200㎝、深さ30～40㎝を、Ｊ－９区以北で幅110～130㎝、深さ50～60㎝を測る。遺構の切り合い状況から南半部はＡ地区 SD25より新しく、北半部は SD23に後出、Ｂ地区整地土に前出する。

北半部より古相を示す第77図405～419が出土、うち405～412は須恵器である。坏蓋405～407は口径11.2～12.5㎝を測り、内面の返りは退化する。天井部外面は回転ヘラ切り後、丁寧な回転ケズリ調整を加える。外面は降灰を受け、407は焼き歪みが著しい。いずれも顕著な使用痕が認められない。無台坏408、409は、体下部より内湾しながら口縁部にいたる。法量は408で口径10.8㎝、器高3.5㎝、409で11.9㎝、器高4.2㎝を測る。408は無蓋・正位で焼成し、焼き膨れをもつ。埦形を呈する409は、底部外面に丁寧なナデ調整を加える。有台坏410は口径13.0㎝、器高4.0㎝を測る。底部外面は丁寧なナデ調整を加えた後に、扁平な台部を外展気味に付ける。金属器写しの無台の鉢と考えられる411は、口径15.6㎝を測り、口縁端部を平坦に仕上げる。体部下半～底部外面に回転ケズリ調整を加える。無蓋・正位で焼成し、還元が強いために断面赤紫色を呈する。高坏412の脚端部は下方にのび、倒位で焼成される。棒状尖底の製塩土器413は小片のため、傾きに不安をもつ。胎土中に海綿骨片が混ざる。非ロクロ土師器小甕414は口径13.3㎝を測り、口縁部は短く外反する。球胴形のロクロ土師器小甕415は口径12.2㎝、器高12.2㎝を測る。底部は外面をケズリ調整、内面をハケ調整で丸底とする。煮沸に伴うような痕跡は目立たない。非ロクロ土師器甕416～418は口径20～22㎝を測り、煮沸に供される。416は胴部外面をハケ調整の後にケズリを用いて成形する。417は、口縁部が外傾しながら長くのび、胴部は細かい単位のハケ調整を施す。球胴形を呈する418は、外面にハケ調整、内面にナデ調整を施す。ロクロ土師器埴419は口径31.4㎝を測り、ナデ調整を主体に成形、一部にケズリ調整を加える。

Ｂ地区 SD17、18、21、23(40)（第69・70図）

標高13.25ｍの等高線とほぼ平行しながら、Ｂ地区を縦断する溝群で、北側に向かうと地勢の張り出しの影響を受けて若干西側に振れる。

Ｂ地区 SD17は延長約16ｍを検出、北側でＢ地区 SD21と合流する。主軸方位はＮ－15～23°－Ｗである。調査区南端で幅約50㎝×深さ約20㎝、底面の標高13.03ｍ、Ｂ地区 SD23と直交する地点で同約70㎝×約15㎝、13.01ｍ、Ｂ地区 SD21と合流する地点で約30㎝×約20㎝、標高は SD21とほぼ同じく12.98ｍを測る。底面は掘削に伴う起伏が認められ、自然石が混ざる暗褐色細砂質土、灰褐色粘砂質土を覆土とする。少量の土器、木製品が出土、他の遺構との切り合いは不明である。Ｂ地区 SD18は長さ約５ｍ、幅30～40㎝、深さ７～15㎝を測る。主軸方位はＮ－16°－Ｗを示し、覆土は SD17と同質の暗褐色砂質土である。少量の遺物が出土した。

Ｂ地区 SD21は延長約30ｍを測り、北側は後世の開削を受けるため検出できなくなる。主軸方位はＮ－12～21°－Ｗを測り、Ｌ－７区以北で若干西に振れる。調査区南端で幅60～80㎝×深さ約20㎝、底面の標高13.03ｍ、Ｂ地区 SD17と合流する地点で同40～50㎝×約25㎝、12.95ｍ、Ｂ地区 SD32と交差する地点で同約60㎝×約20㎝、13.05ｍ、北端で同約60㎝×深さ約８㎝、13.18ｍを測る。東側肩部はしっかりとたちあがり、粘性を帯びた暗灰褐色～褐色の砂質土～細砂質土を覆土とする。Ｂ地区 SD23との切り合いは不明である。

須恵器第79図432～第80図435、木製品第88図559を図化した。中型の甕432は口径25.7㎝を測り、頸

部より折り曲げた口縁は、端部を外側に肥厚させる。胴部外面を平行叩きｂまたはｃ類、内面を同心円叩きａ類で叩き成形し、使用に伴う顕著な摩耗は認められない。両面閉塞の横瓶433は口径13.5㎝、器高27.5㎝、胴部最大幅41.8㎝を測る。胴部外面を平行叩きｂまたはｃ類、内面を同心円叩きｂ類で成形し、外面にカキメ調整を加える。側面を上にして焼成、口縁端部内面は使用に伴う摩耗をもつ。破片はＢ地区SD20よりも出土した。434、435は坏蓋である。扁平な434は口径14.8㎝、器高2.3㎝を測り、大きめの鈕を付ける。焼成堅緻で、Ⅰ類重ね焼き痕が残る。435は口径14.1㎝を測り、口縁端部は明瞭に屈曲する。内面にヘラ記号が刻まれる他、硯に転用したため全面に墨が付着する。

Ｂ地区SD23（40）は延長約40ｍを検出、主軸方位をＮ－13～23°－Ｗにとる。緩やかに湾曲する北半と、直線的にのびる南半に分かれ、南端は鍵状に折れてＢ地区SD20およびＡ地区SD１・４に流下する。幅40～60㎝、深さ20～40㎝を測り、肩部はしっかりとたちあがる。底面の標高は、第69図土層ｃで12.88ｍ、同図土層ｄで12.96ｍ、同図土層ｅで12.98ｍ、第70図土層ｋで13.06ｍを測る。粘性を帯びた暗灰褐色～褐色の砂質土を基本覆土とし、Ｌ－７区付近では第69図ｃ断面土層３中に多量の木製遺物・自然木が溝主軸に長軸を合わせるように廃棄される（写真図版15）。土層の切り合い状況よりＢ地区SD16に前出する。

以上の溝群とＢ地区SD16南半部は、遺跡の存続期全般にわたり遺構分布の希薄域を形成することなどから、道路状遺構の一部（側溝）と考える。ただし、路盤と推定する箇所で顕著な整地や路盤改良などの痕跡は確認できず、復元される道路幅も小規模なものである。この継続的に営まれた道路状遺構は、方位の近似より下層遺構群に属するＡ地区区画溝群および中層遺構群に属する西側建物群の土地割りを規制したと考える。側溝の廃絶期は、各溝内に中層遺構群ベース土を構成する自然石が全く流入しないことから、自然石を大量に押し出した土石流発生時以前と考える。ただし、その後も道路としての機能は維持されたようで、掘立柱建物などの分布は希薄のままである。なおＢ地区SD21西側約１ｍには平行するような小穴が連続、等間隔でなく復元できなかったものの、柵または板塀の存在を考えたい。

遺物は、第80図438～459、831・832（440～449は欠番）、木製品第88図560～567、第89図569・570、またＢ地区SD40とした部分より第84図511～513が出土した。

438、439、450、451は須恵器坏蓋である。438は山笠形を呈し、口径15.2㎝、器高2.9㎝を測る。倒位での使用に伴う摩耗が著しい。扁平な439は口径15.9㎝を測り、口縁端部は断面三角形状を呈する。ともにⅠ類重ね焼き痕が遺存する。平笠形の450は天井部肉厚で、口径14.3㎝を測る。幅広の天井部外面は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。451は口径15.2㎝、器高2.6㎝を測り、ボタン状の鈕を付ける。硯に転用したため、天井部内面に墨が付着する。有台坏452は口径13.3㎝、器高3.2㎝と背が低く、小さい台部を内屈気味に貼る。破片化後の二次被熱痕を残す。深身・厚手の無台坏453は口径12.7㎝、器高3.9㎝を測り、底部外面にヘラ記号「／」を刻む。煮沸容器に転用され、外面下半に薄い煤、口縁部内面に黒褐色のヨゴレが帯状に付着する。その後、容器に再使用したため底部外面外端や口縁端部が摩耗し、煤・ヨゴレを消す。内黒外赤土師器無台埦454は口径15.0㎝、器高4.4㎝を測る。内面は細かい単位のミガキ調整であるのに対して、外面はハケ調整の後に手持ちケズリに近い粗いミガキ調整を加え、平底風につくる。大型・深身の有台坏455は口径19.2㎝、器高9.9㎝を測り、外面は黒化する。口縁端部は内傾して面をもち、底部外面は回転ヘラ切り後にナデ調整を加えた後に外展する台部を貼る。鉄滓456には炉の粘土が厚く溶着、457は木炭片が多量に混入する。ロクロ土師器831は口径約23㎝を測り、口縁端部を上方につまみあげたために、下端が肥厚する。須恵器甕832は口径26.2㎝を測り、頸部で折り曲げて口縁部をつくる。胴部は外面に平行叩きｂまたはｃ類の後にカキ

メ調整を、また内面に同心円叩きａ類を施す。また口縁端部は摩耗と細かい欠けが連続し、使用に伴う可能性が高い。

須恵器有台坏511は口径13.7㎝、器高3.8㎝を測り、内端で接地する逆台形の台部を中心部寄りに付ける。底部外面に墨で「乙上」と記す。須恵器有台坏512は底径10.3㎝を測り、体部は内湾しながらたちあがる。台部は摩耗が顕著である。須恵器無台坏513は肉厚で、口径13.0㎝、器高3.9㎝を測る。使用に伴う摩耗が著しい。

円形板第88図560・561は、560で径17.6㎝、561で径約15㎝を測る。561は一面に黒褐色の皮膜が認められる。杭状木製品562は、屈曲する小枝を斜方向より鋭利に切断する。563は弓弭と考えられる。曲線を描く芯持ち材端部を、両方向より加工する。棒状木製品564は一部が被熱し、炭化する。566は径0.6㎝を測り、芯部分は空洞となる。横斧の斧柄567は、長さ約30㎝、柄部径2.2㎝を測り、装着部と握り部の一部を欠損する。斧台上面は平坦で、基端は先細る。握り部は、反りが弱く、把手部分に表皮をそのまま残す。第89図569は部材と考えられ、一面のみ段状に加工する。板状木製品570は幅5.2㎝、厚さ1.3㎝を測る。

Ｂ地区 SD19（第111図）

Ｍ－６区に位置し、西側へ屈曲してのびる。幅40～60㎝、深さ約２㎝を測り、覆土はベース土の混ざる暗灰褐色砂質土である。第77図420の椀形滓が出土した。

Ｂ地区 SD22（第66・111図）

Ｌ－７区に位置する不定形な落ち込みで、Ｂ地区 SD24に先行する。深さ約10㎝を測り、しまりのない暗灰褐色砂質土を覆土とする。第80図須恵器有台坏436、437が出土した。口径10.3～10.8㎝、器高約４㎝と身が深く、断面方形の台部は直下に降りる。436は焼成堅緻で、断面は赤紫色を呈する。

Ｂ地区 SD25、Ｂ地区 SD26（Ａ地区拡張区 SD53、Ａ地区 SD38）（第66・68・69・71図）

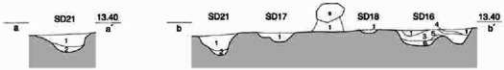
調査区をほぼ同位置で、等高線に直交して南南西方向に流下する溝群で、何らかの土地規制を反映したものと考える。屈曲の著しいＢ地区 SD25は幅50～100㎝、深さ10～30㎝を測り、次第に浅くなってＢ地区 SD24と交差する付近でとぎれる。覆土は灰褐色砂質土で、Ｂ地区区画溝群・道路状遺構に先行する。Ｂ地区 SD26（Ａ拡張区 SD53、Ａ地区 SD38）は、Ｂ地区 SD21に接する地点に始まり、主軸方位Ｎ－120°－Ｗで直線的にのびる。長さ16ｍ、幅30～40㎝、深さ10～25㎝を測り、覆土はベース土の混ざる暗褐色砂質土を主体とする。切り合い状況からＡ地区区画溝群・道路状遺構・Ａ地区 SD３に前出する。Ｂ地区 SD26より出土した第81図須恵器坏蓋463は、平笠形を呈し、口縁端部を明瞭に屈曲させる。成形時のロクロひだが目立つ。

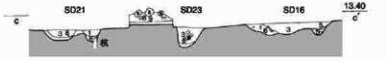
Ｂ地区 SD30・34（第66・68図）

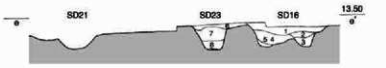
Ｋ－７区に位置する。隣接するＢ地区 SD33・35同様に、コの字状を呈した区画溝と考えられる。方形に区画される範囲は南北約４ｍ×東西3.5ｍ以上を測る。SD30で幅40～100㎝、深さ約10㎝、SD34で幅50～70㎝、深さ約10㎝を測り、ともに底面は起伏をもつ。前者は炭化物の混ざる濁暗灰褐色砂質土、また後者は暗灰褐色砂質土と緑灰色砂質土の混合土や暗灰色砂質土を覆土とし、少量の遺物が出土した。SD30は西側区画溝群を構成するＡ地区 SD56に先行する。

Ｂ地区 SD32（第114図）

Ｋ－８区に位置する中層遺構群である。湾曲が著しく、幅40～50㎝、深さ５㎝前後を測る。覆土は暗灰褐色砂質土で、道路状遺構に後出する。第84図501、第85図519・520・522・523を図化した。須恵器坏蓋501は口径14.8㎝を測り、天井部外面は回転ヘラ切り後を雑なナデ調整で済ませる。平笠形を呈する須恵器坏蓋519は、口径11.9㎝、器高2.6㎝を測る。天井部内面を硯面に転用し、顕著な摩耗







a～d
1　灰褐色粘砂質土
2　褐色粘砂質土
3　褐色シルト
3'　褐色シルト（やや粘質）
4　暗黄白色粗砂
5　褐色粗砂
6　暗褐色細砂質土
7　灰褐色シルト
8　暗黄白色粗砂
9　褐色細砂
10　暗灰色シルト
11　暗灰褐色シルト

e
1　濃暗灰褐色砂質土（炭化物、粗砂が多く混ざる）
2　灰褐色粘質土（ピートが混ざる）
3　灰褐色弱粘質土（ややしまりなく、粗砂が混ざる）
4　2と同質土（やや土ぶく、粗砂が混ざる）
5　濃黒灰色砂質土と黒土との混合土
6　1と同質土（炭化物、粗砂が多く混ざる）
7　暗灰褐色砂質土（やや粘質）
8　7と緑灰色砂質土の混合土（自然木が混ざる）

0　2m

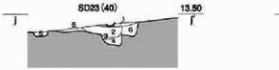
第69図　B地区溝実測図1（S＝1/300・1/60）

1　暗灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に多く混ざる）
2　暗灰褐色砂質土（円礫が混ざり、かたくしまる）
3　ベース土と暗灰色砂質土の混合土
4　３と同質土（ややしまりない）

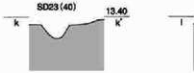
1　灰褐色砂質土（やや粘性あり）
2　暗灰褐色砂質土

1　灰褐色砂質土（粗砂、炭化物が混ざり、しまる）
2　暗灰褐色砂質土（粗砂が混ざり、ややしまりない）
3　灰褐色砂質土
4　黄茶灰色砂質土（やや汚れる。粗砂～砂利が混ざる）
5　４と同質土（やや暗い）

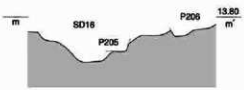
1　灰褐色砂質土（粗砂、炭化物が混ざり、かたくしまる）
2　１と同質土（より明るい）
3　暗灰褐色砂質土（炭化物、粗砂が混ざり、ややしまりない）
4　黒灰茶色粗砂（ベース土と同質土）

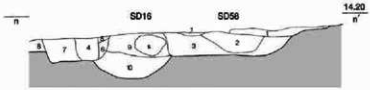


1　暗灰色砂質土（褐色が強い）
2　灰褐色砂質土（茶色がかり、炭粒が多く混ざる。部分的に緑黄色粘土が混ざる）
3　黒灰色粗砂
4　暗灰褐色砂質土
5　茶黄灰色砂質土（粗砂が多く混ざる）
6　２と同質土（しまりあり）

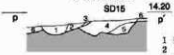


1　黄褐色砂質土
1'　〃　（炭粒が混ざる）
2　灰褐色砂質土
3　褐色砂質土
4　褐色砂質土（３より暗い）





1　鹿地土　褐黄白色粘質土（褐色粒が少し混ざる）
2　黄褐色粗砂
3　灰褐色粘砂質土
4　黄褐色粘質土
5　褐色砂質土
6　暗黄褐色砂質土
7　褐色粘砂質土と暗黄褐色砂質土の混合土
8　黄褐色粗砂
9　褐色砂質土（粗砂が多く混ざる）
10　褐色砂質土



1　褐色砂質土（炭粒が混ざる）
2　１と黄白色砂の混合土
3　淡灰褐色砂質土
4　淡灰褐色砂質土（炭粒が少量混ざる）
5　淡黄褐色砂質土
6　淡黄褐色砂質土

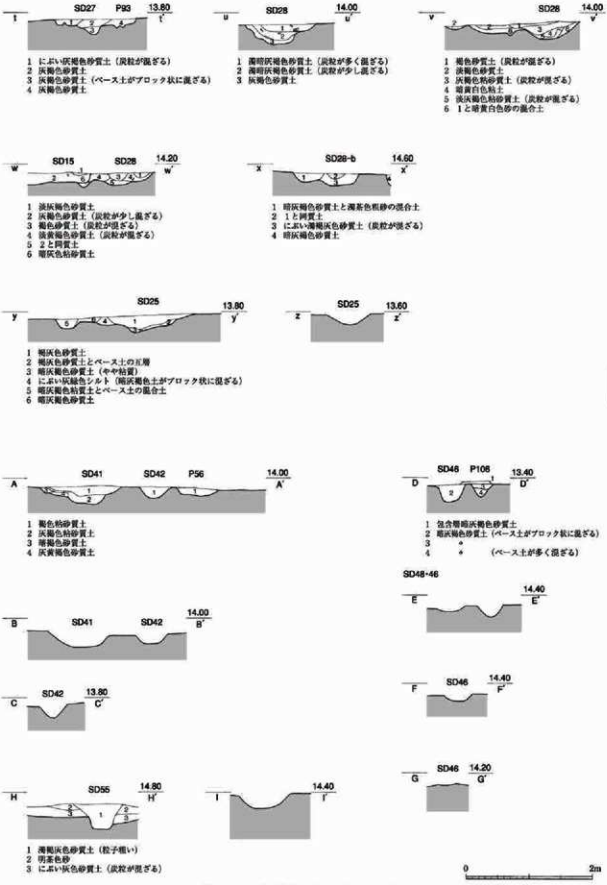
1　褐色シルト
2　灰褐色砂質土

1　灰黄色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
2　暗灰褐色砂質土（やや粘質）
3　青灰色砂質土２の混合土
4　にぶい灰褐色砂質土
5　褐灰褐色砂質土（ベース土が混ざる）
6　褐灰褐色砂質土（粗砂が混ざる）
7　１と同質土（やや暗い）

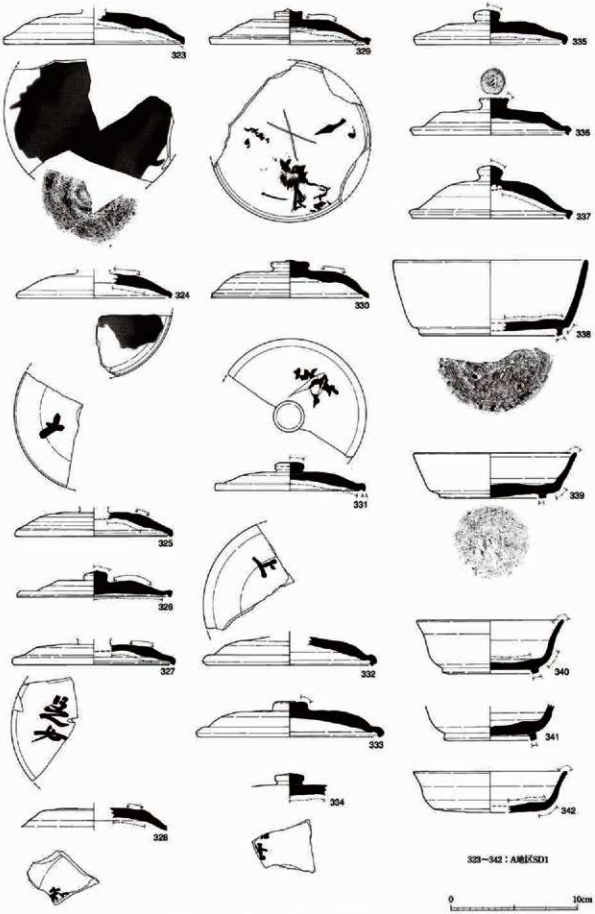
1　灰褐色砂質土（ベース土がブロック状に混ざる）
2　暗灰褐色砂質土
3　褐灰茶色砂質土（炭粒が混ざる）
4　灰褐色砂質土
5　にぶい灰色砂質土
6　灰褐色砂質土と淡灰茶色砂質土

0　2m

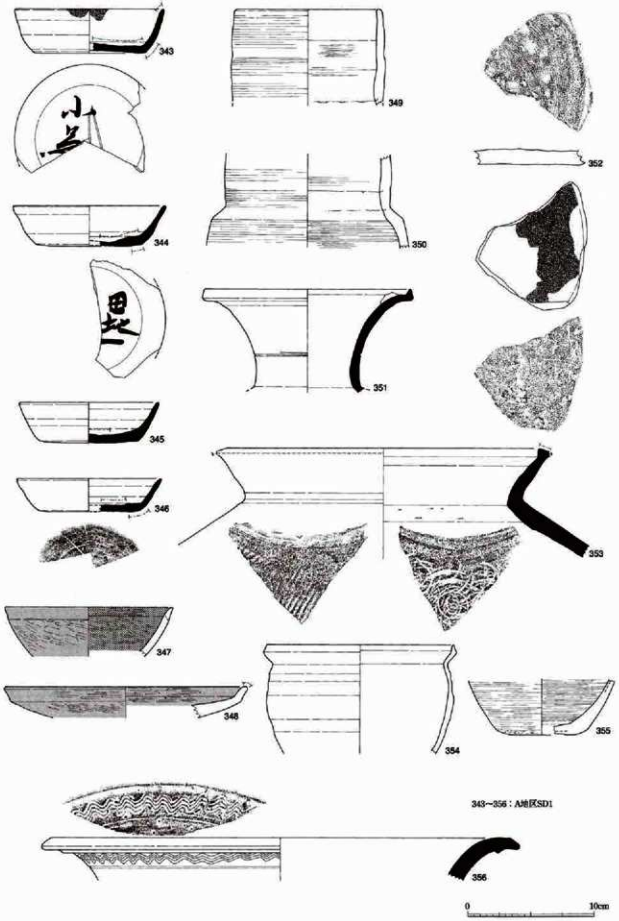
第70図　Ｂ地区溝実測図２（Ｓ＝1/60）



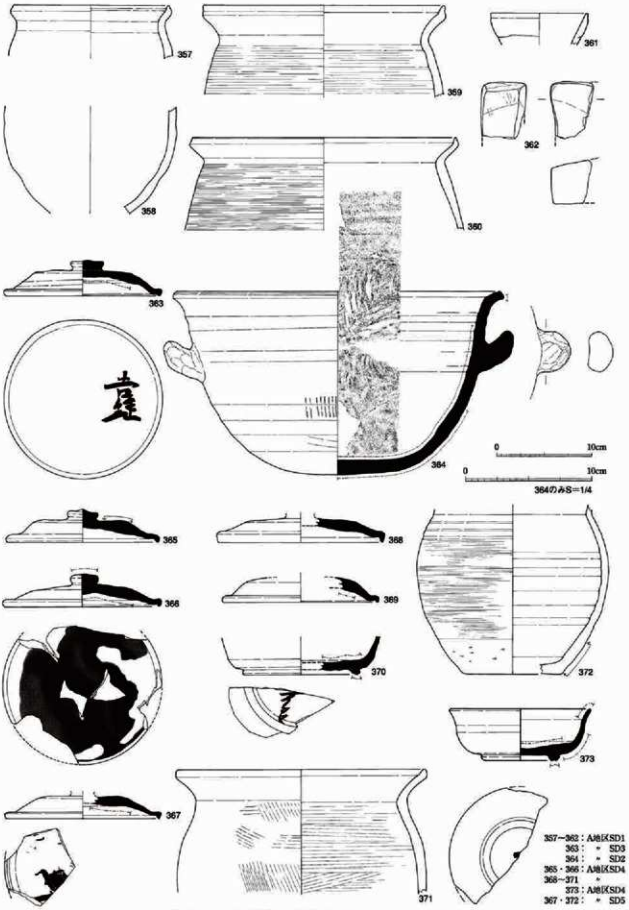
第71図　B地区溝実測図3（S＝1/60）



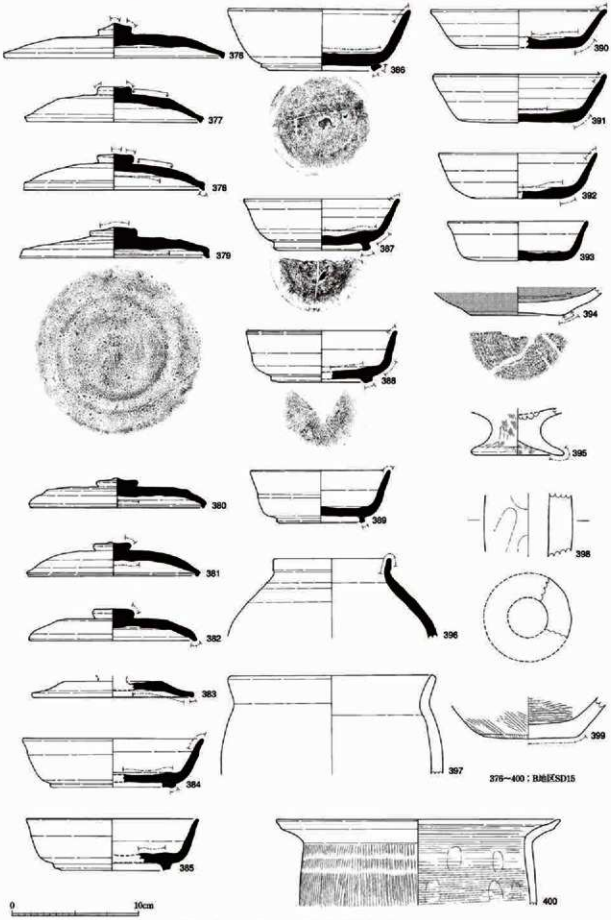
第72図　Ａ・Ｂ地区溝出土遺物実測図２（Ｓ＝1/3）



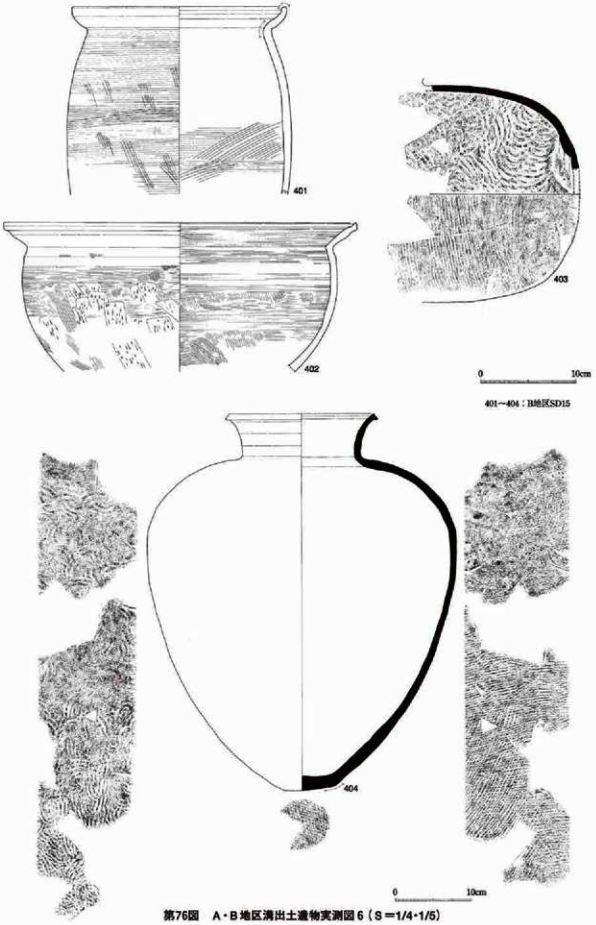
第73図　A・B地区溝出土遺物実測図3（S＝1/3）



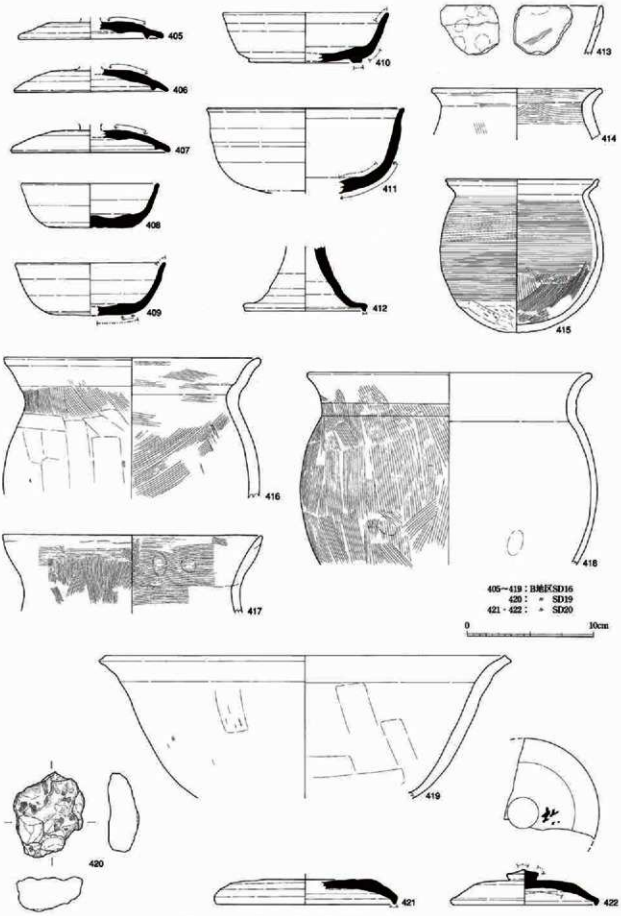
第74図　A・B地区溝出土遺物実測図4（S＝1/3・1/4）



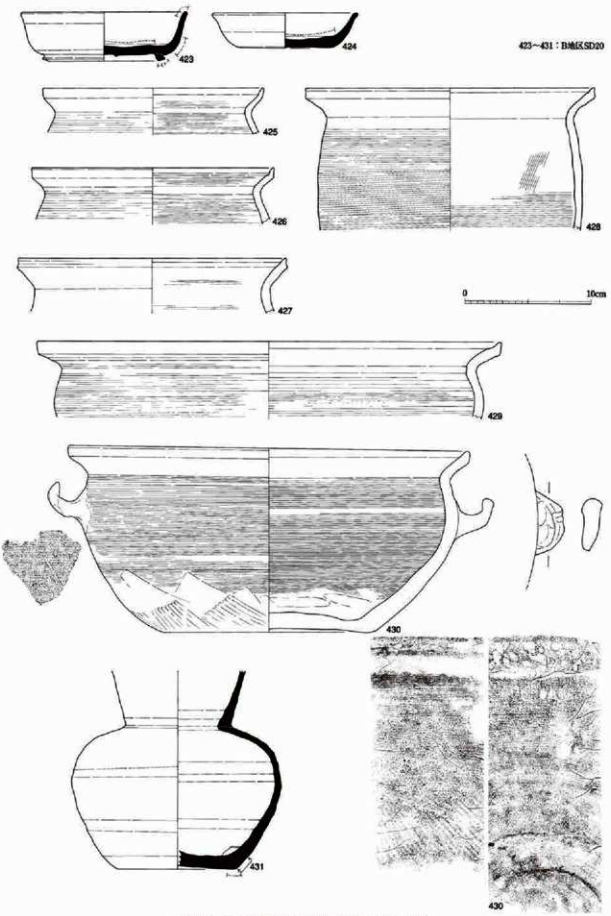
第75図　A・B地区溝出土遺物実測図5（S＝1/3）



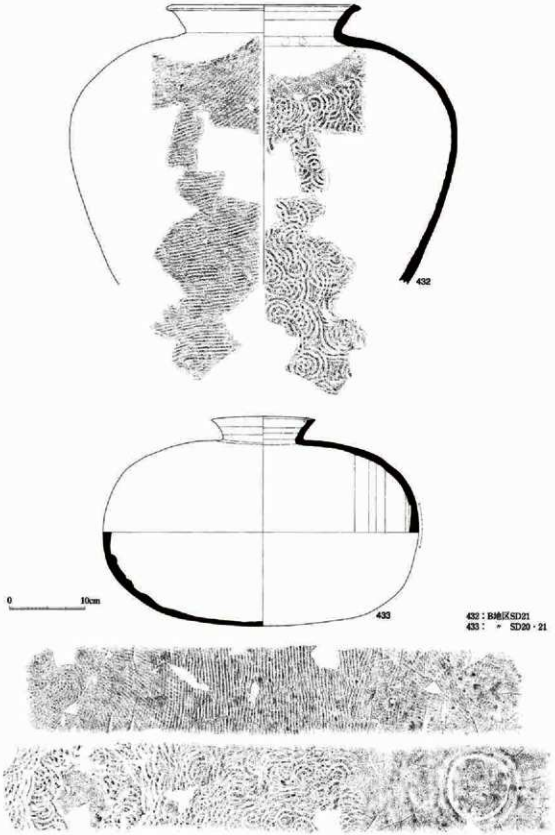
第76図　Ａ・Ｂ地区溝出土遺物実測図６（Ｓ＝1/4・1/5）



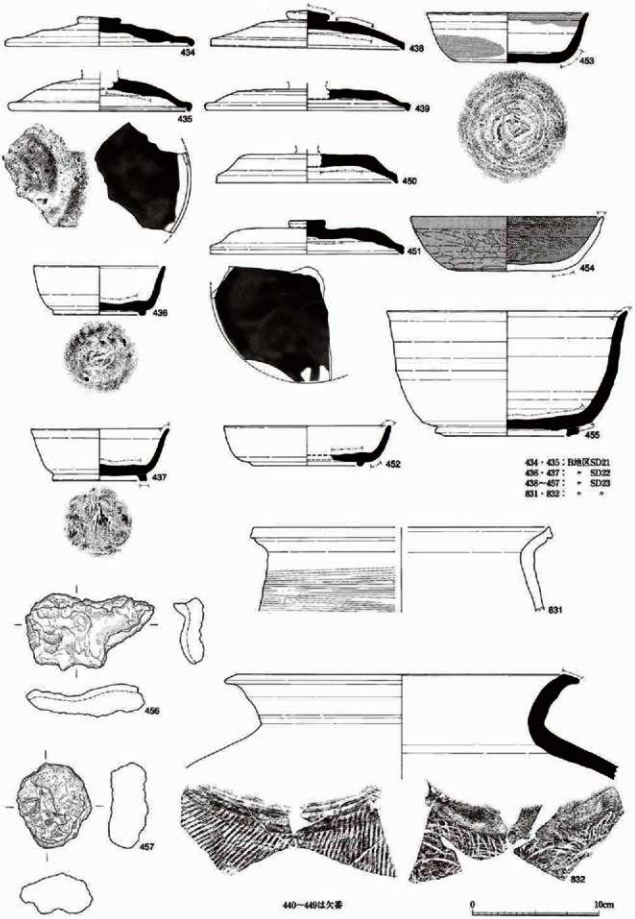
第77図　A・B地区溝出土遺物実測図7（S＝1/3）



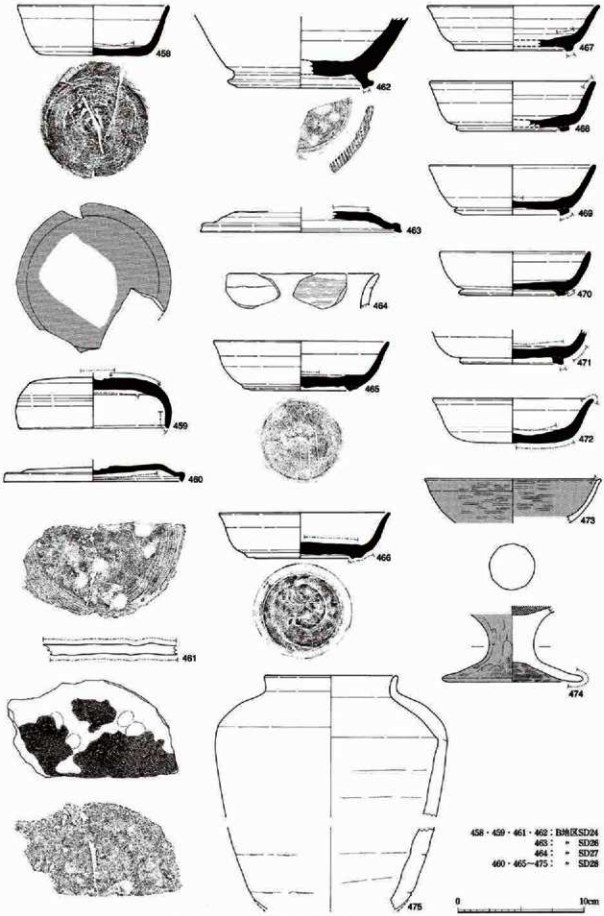
第78図　A・B地区溝出土遺物実測図8（S＝1/3）



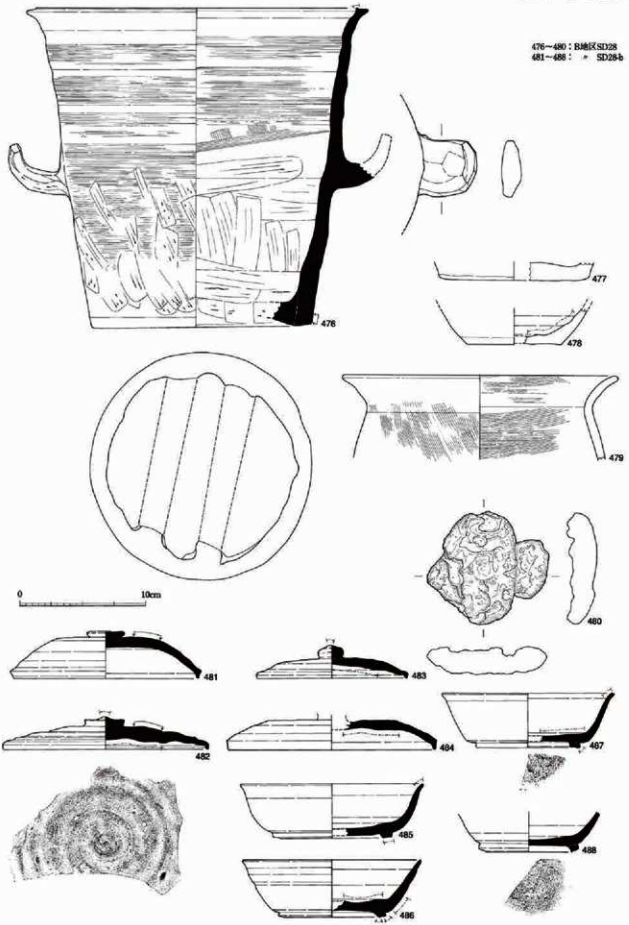
第79図　A・B地区溝出土遺物実測図9（S＝1/5）



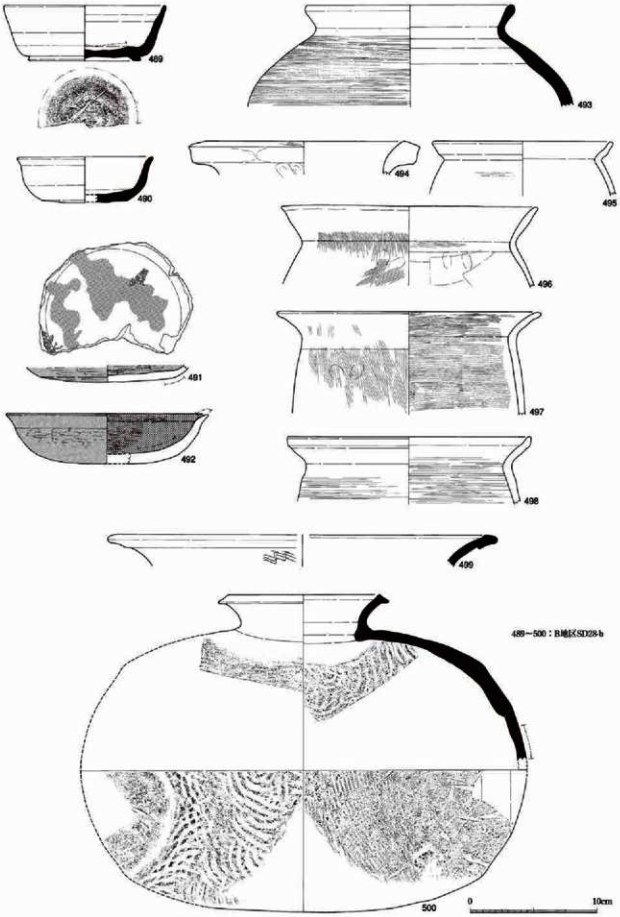
第80図　A・B地区溝出土遺物実測図10（S＝1/3）



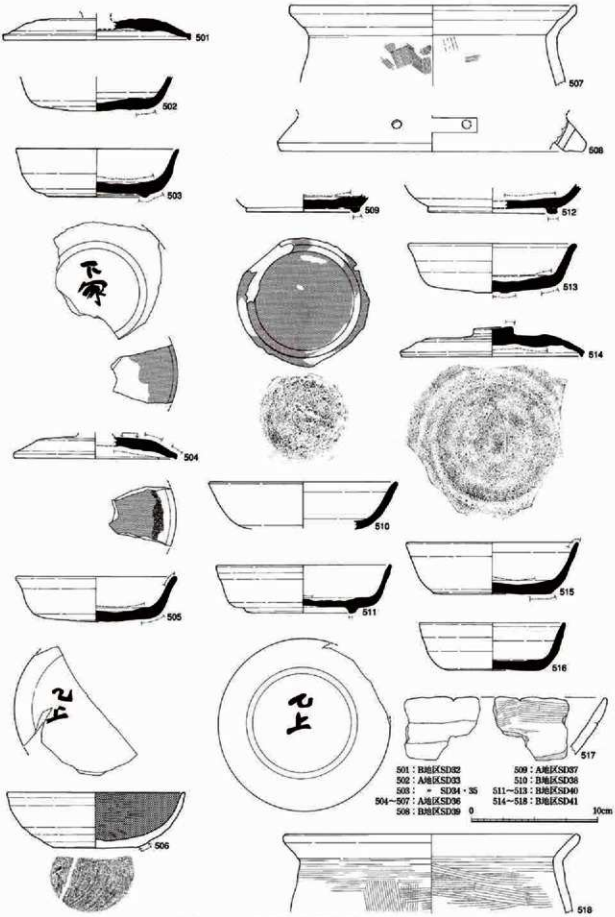
第81図　A・B地区溝出土遺物実測図11（S＝1/3）



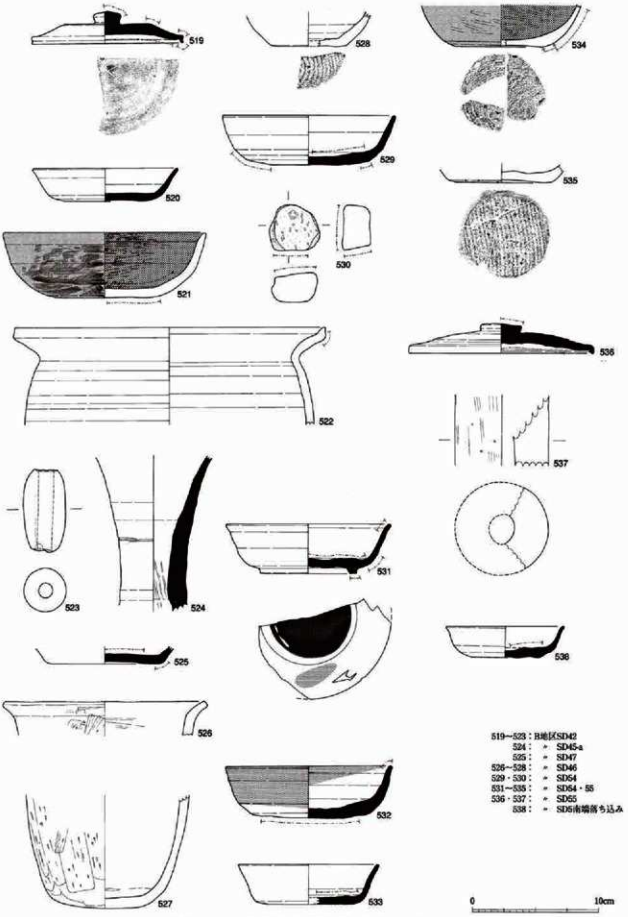
第82図　Ａ・Ｂ地区溝出土遺物実測図12（Ｓ＝1/3）



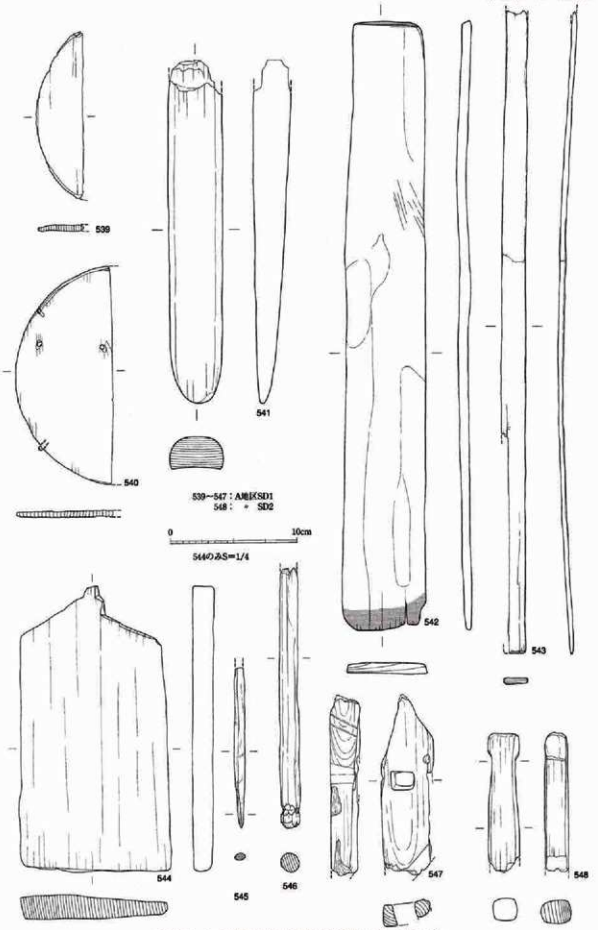
第83図　A・B地区溝出土遺物実測図13（S＝1/3）



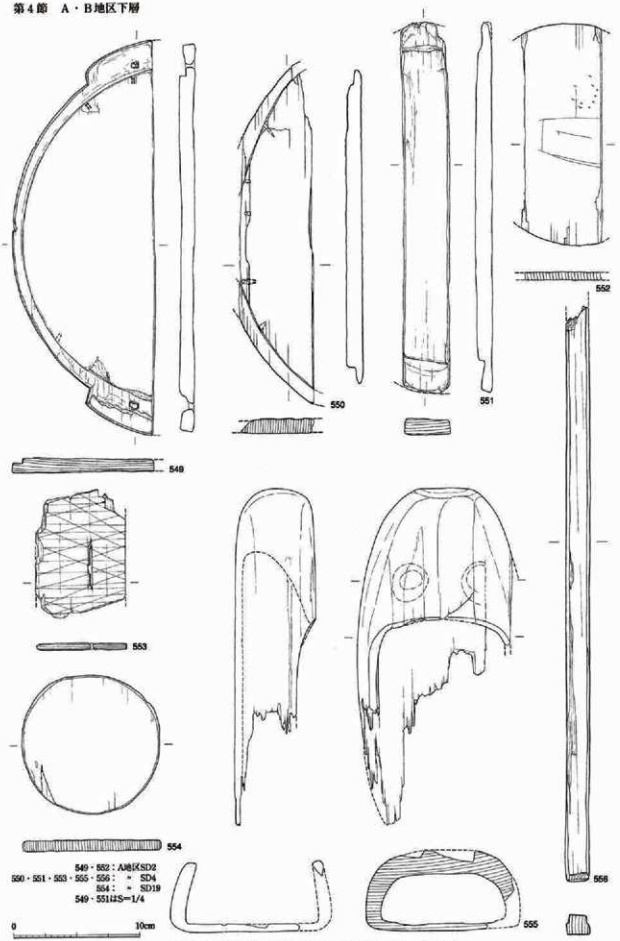
第84図　A・B地区溝出土遺物実測図14（S＝1/3）



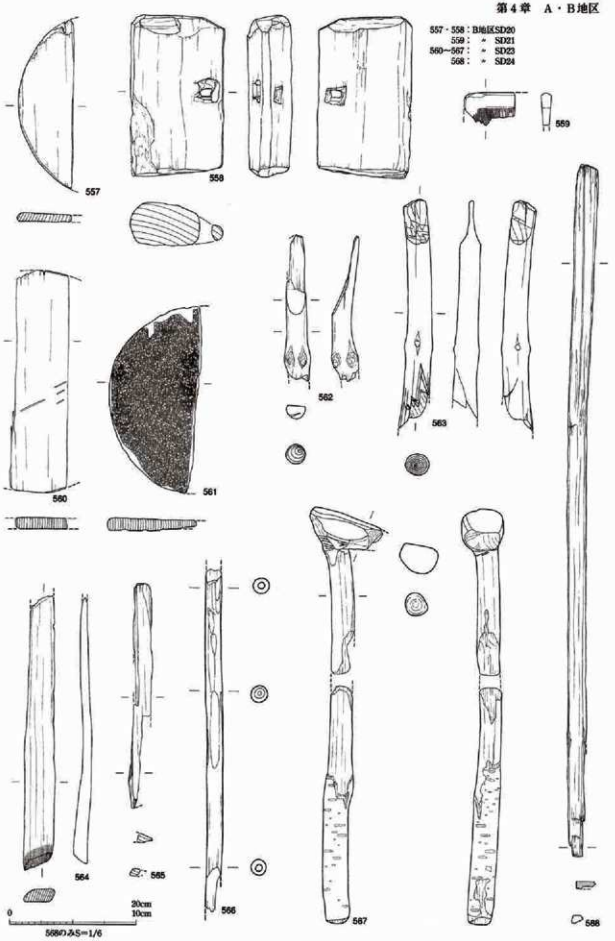
第85図　A・B地区溝出土遺物実測図15（S＝1/3）



第86図　A・B地区溝出土木製品実測図1（S＝1/3・1/4）



第87図　A・B地区溝出土木製品実測図2（S＝1/3・1/4）



第88図　Ａ・Ｂ地区溝出土木製品実測図３（Ｓ＝1/3・1/6）

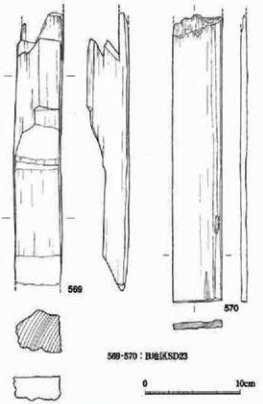
と墨の付着が認められる。扁平な須恵器無台坏520は口径11.5cm、器高2.6cmを測る精品で、底部外面は丁寧なナデ調整を加える。ロクロ土師器長甕522は口径24.6cmを測り、口縁端部を上方につまみ上げる。破片後に被熱する。土師質の土錘523は、残存重量72.4gを量る。

B地区 SD33・35（第66・68図）

K-7区に位置する。コの字状を呈し、B地区SD30・34と同様な性格をもつ区画溝と考える。区画される範囲は東西約6.5m×南北3m以上を測る。SD33で幅30～100cm、深さ10～20cm、SD35で幅約50cm、深さ5cm未満を測り、覆土は暗灰色砂質土である。少量の遺物が出土した。

B地区 SD36～39（第112図）

K-7区に位置する溝群で、周辺の遺物未出土の溝を含めて耕作に係る溝と考えられる。方位はばらつきが目立ち、幅約20cm、深さ10cm未満、覆土は暗灰褐色砂質土である。長さはSD38を除いて1m前後を測る。B地区SD38より出土した第84図須恵器有台坏510は口径14.8cmを測り、体部は緩やかに立ち上がる。SD39出土の第84図土師器508は羽釜または甑の一部の可能性をもつ。径5～7mmの孔が穿たれ、底面には煤が付着する。



第89図　A・B地区溝出土木製品実測図4（S＝1/4）

B地区 SD43～45・48（第115・116図）

L-9・10区に位置する浅い溝で、主軸方位は北を指向する。幅約30cm、深さ5～10cmを測り、覆土はベース土が混ざる暗灰褐色砂質土である。B地区SD45より第85図須恵器長頸瓶524が出土した。口縁部の欠損はほぼ水平を維持することから、意図的に打ち欠いた可能性が高い。

B地区 SD46（第69・71図）

耕作土直下より掘り込まれた近代以降の暗渠排水である。排水機能を高めるため、石や小枝を入れる。第85図土師器小甕526～528が出土した。同一個体の526、527は口径15.8cmを測り、外面はケズリ調整を主体に成形する。ロクロ成形の528は底部に回転糸切り痕を残す。

B地区 SD52（第69図）

K・L-10区にある幅が一定しない浅い溝で、深さ約10cmを測る。覆土は暗灰褐色砂質土で、SK8（井戸）に後出する。少量の遺物が出土した。

B地区 SD47、SD53、SD54（第118・120図）

K-10区に位置し、長さ3～4m、幅20～30cm、深さ約5cmを測る。覆土はSD47、SD54が暗灰褐色砂質土、SD53が灰～淡茶色砂質土である。SD47出土の第85図525の須恵器無台坏は薄手で、摩耗が著しい。SD54より第85図529～535が出土、うち531～535の破片はSD55からも出土をみる。529・531～533は須恵器、534、535はロクロ土師器である。深身の無台坏529は口径13.6cm、器高3.9cmを測り、体部は外側に開きながら長くのびる。底部内面の摩耗が顕著である。軽石を利用した砥石530は、平面的な研ぎに使う。重さ5.7gを量る。有台坏531は口径13.1cm、器高4.0cmを測り、倒位で墨溜めに

使用する。また体部外面に黒褐色の煤が付着する。深身・肉厚の無台坏532は口径13.3㎝、器高4.2㎝を測る。口縁部を若干損した後に煮沸容器に転用したため、割れ口を含めて黒褐色の煤が付着する。その後に正位での再利用により底部外面に摩耗が蓄積する。還元の強い無台坏533は口径11.2㎝、器高3.2㎝を測り、箱形を呈する。外赤内黒ロクロ土師器無台埦534は底部外面に回転糸切り痕をそのまま残す。ロクロ土師器小甕535底部外面は、一定方向のハケ調整の後に外縁部のみに回転ケズリを施す。

Ｂ地区 SD 55（第69・71図）

Ｋ-10区に位置し、北西方向に主軸をもつ。幅50～90㎝、深さ５～25㎝を測り、東側が浅い。覆土は濁褐灰色砂質土で、柱穴 P169に前出する。第85図536、537が出土した。須恵器坏蓋536は口径14.7㎝、器高2.4㎝を測り、扁平なボタン状の鈕を付ける。倒位での使用に伴う摩耗が著しい。土師質のフイゴ羽口537外面は板状工具により器面を仕上げる。

６．包含層出土遺物

包含層より多量の遺物が出土した。平安時代前期以降の度重なる大規模な土砂の流入により、生活面が保存されたことが理由として考えられる（第90～106図、第18～22、25表）。

古　墳　以　前

第90図土師器甕571は、焼成前に底部に径約１㎝の穿孔を行う。焼成時の黒斑が明瞭に残る。土師器高坏脚部572は、外面が粗い単位のミガキ調整、内面が未調整に近い。ともに胎土中に多量の海綿骨片を含む。第97図718は古墳時代中期の高坏脚部で、内面にシボリ痕が認められる。土師器甕第103図783は口径16.8㎝を測り、球胴形を呈する。ハケ調整を施した後、胴部内面下半にケズリ調整を加える。第103図785は土師器埦で、口径8.9～9.7㎝、器高約４㎝を測る。外面の一部にハケ調整を加えるが、指ナデ成形を基本とする。

須 恵 器 坏 蓋

第90図573～第92図626を図化し、口径14㎝以上を測る573～596・598と、口径11～13㎝を測る599～626に大別できる。

573・574は口径約16㎝、器高約2.5㎝を測り、口縁端部は直下に降りる。天井部外面は回転ヘラ切り痕をそのまま残し、端正なつくりの鈕を付ける。ともに倒位での使用痕をもち、574は転用硯となる。Ⅱｂ類重ね焼き痕をもつ575は、口径17.2㎝、器高2.2㎝を測り、口縁端部を丸くおさめる。天井部外面は回転ナデ調整を施した後にボタン状の鈕をつける。Ⅰ類重ね焼き痕の残る576は、天井部外面に黒漆で「十」を記す。Ⅰ類重ね焼き痕の残る577は倒位で硯に転用する。山笠形の578は口径14.2㎝を測る。

579～584は山笠形を呈し、口径13.9～14.8㎝、器高３㎝強を測る。重ね焼きは580・583～585がⅠ類、579・581がⅡｂ類となる。また天井部内面に579・580で「／」、583で「カ」のヘラ記号を焼成前に刻む。倒位での使用例が目立ち、特に580・581は摩耗が顕著である。585～587は口径14.7～15.3㎝、器高2.5㎝強を測る。585は断面三角形の口縁端部をもつ。径約13㎝の有台坏とⅠ類重ね焼きで焼成する。586はⅡｂ類重ね焼き痕を明瞭に残す。587の鈕の形態は586と共通する。588は口径14.2㎝を測り、口縁端部は断面三角形を呈する。硯に転用したため、天井部内面に著しい摩耗と墨の付着が遺存する。589は口径14.2㎝、器高2.2㎝を測り、口縁端部を内屈させる。Ⅰ類重ね焼き痕を残し、天井部内面にヘラ記号「//」を刻む。590の天井部外面には２文字の墨書を記した後に、倒位で硯に使用する。扁平な器形をもつ591は、口径14.7㎝、器高2.1㎝を測り、径3.7㎝の大型の鈕を付ける。天井部外面の回

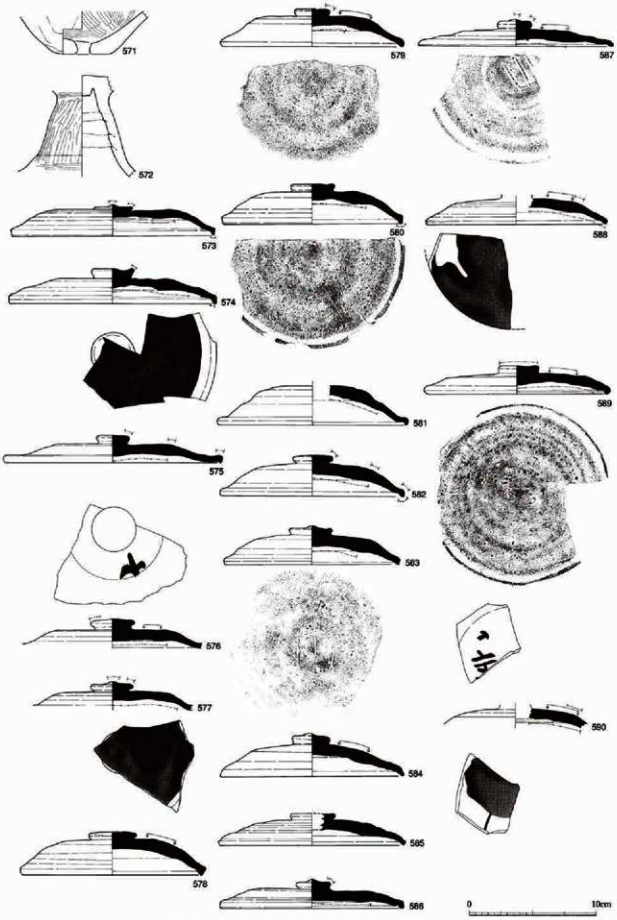
転ケズリ調整の幅は広く、内面中央にヘラ記号「キ」を刻む。また倒位での使用により摩耗と口縁部の欠けが蓄積する。口径約14cmを測る592、593は、天井部から口縁部へなだらかに移行、口縁端部を小さくつまみ出す。ともに天井部外面に墨書し、592は摩滅のため判然としないが、2文字目は「乙」の可能性をもつ。593は摩滅しない「大成」の文字が明瞭にみえる。594は口径14.3cmを測り、口縁基部に平坦面をもつ。天井部外面に墨書するが、その文字は判読できない。595は口径15.4cm、器高2.0cmを測り、径4cmの大型の扁平鈕を付ける。天井部は幅広で、Ⅰ類重ね焼き痕が遺存する。平笠形をする596は口径14.2cm、器高2.7cmを測り、天井部は回転ヘラ切り後にナデ調整を施す。598は口径約15cmを測り、天井部外面に「乙上」の文字、また内面は墨痕が残る。

肉厚の597は口径14cm程度と考えられ、鈕はボタン状を呈する。599は口径12.6cm、器高2.8cmを測り、口縁端部は内屈する。底径約10cmの別個体を載せて、Ⅰ類重ね焼きを行う。ボタン状の鈕をもつ600は、倒位で硯に使用されたため顕著な摩耗と黒色墨の付着が認められる。その後、天井部外面に墨書し、その文字は「庄」の可能性が高い。601は口径13.2cm、器高2.9cmを測り、口縁基部に平坦面をもつ。Ⅰ類重ね焼き痕が残り、天井部内面の摩耗が著しい。602は口径12.7cmを測り、回転ケズリ調整を広い範囲に施す。天井部外面に墨書を行うが判読できない。603は口径13.2cm、器高3.0cmを測り、602と同様にⅡb類重ね焼き痕が残る。山笠形を呈する604は口径11.7cm、器高3.1cmを測り、外面に自然釉が溶着する。鈕側部を意図的に打ち欠き、倒位で硯に転用する。転用硯605は口径12.9cm、器高2.7cmを測り、口縁端部は肥厚したまま直下に降りる。606は口径13.0cm、器高2.4cmを測り、幅広で扁平な鈕をつける。山笠形の607は口径11.3cm、器高2.4cmを測り、幅広の回転ケズリ調整を施した後に端正なつくりの鈕を貼る。天井部外面に3文字の墨書を記し、「乙上□」の可能性をもつ。608は口径11.6cm、器高2.7cmを測り、内面に大きく墨書された「大海」の文字は摩耗を伴わない。609は口径12.0cm、器高2.8cmを測り、口縁端部は外側で面取りを行うため、上方にも肥厚する。倒位で一定期間使用の後に「大海」と墨書する。610は口径12.3cm、器高3.1cmを測り、なだらかに肩部から口縁部に移行する。外面は降灰・自然釉の溶着が著しく調整は不明である。天井部内面中央にヘラ記号「‖」を刻む。平坦な天井部をもつ611は、口径12.8cm、器高3.0cmを測り、ボタン状の鈕をつける。倒位で硯に転用した後に、天井部外面に墨書「乙上」を記す。

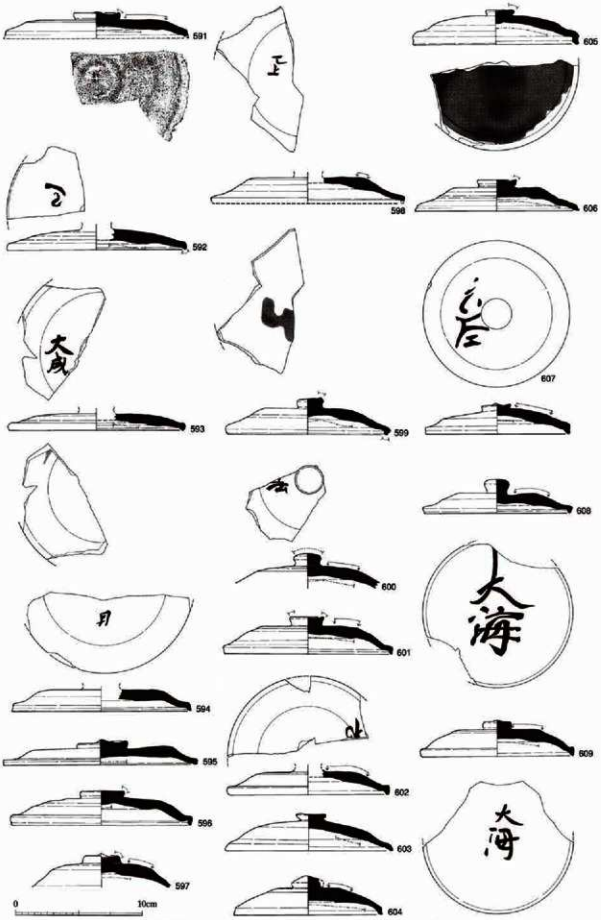
平笠形を呈する612～616・618は、口径11.7～12.6cm、器高約3cmを測り、口縁基部に明瞭な平坦面をもつ。612の外面は降灰の溶着が著しい。615はⅠ類重ね焼き痕が、613・616はⅡb類重ね焼き痕が残る。616は鈕を取り除いて硯に転用、廃棄に近い段階で天井部外面に「若枝」と墨書する。618はⅡb類重ね焼き痕をもつ。倒位で灯明容器に転用したため、口縁部2ケ所に黒褐色のタール状油煙が付着する。山笠形を呈する617は肉厚で、口径12.2cm、器高3.0cmを測る。乾燥の進んだ段階にヘラ記号「×」を記したため、その彫りは非常に浅い。619は口径12.2cmを測り、608と同形態・調整をもつ。硯に転用した際の筆揃えの痕跡が明瞭に残る。扁平な620～626は口径11.5～12.7cm、器高2cm前後を測り、回転ヘラ切り後に回転ケズリ調整を施さない。620はⅡb類重ね焼き痕をもち、口縁端部を小さくおさめる。621は硯に転用したため、内面全体に摩耗と墨痕が遺存する。622は正位で、底径約6.4cmの別個体を上に、また口径約11cmの別個体を下に重ねて焼成する。内面の薄い墨痕より硯に転用したと考える。624・625は外面全体に降灰が溶着する。624は内面にヘラ記号「×」を刻み、625は硯に転用したため、天井部内面の摩耗が著しい。

須恵器有台坏

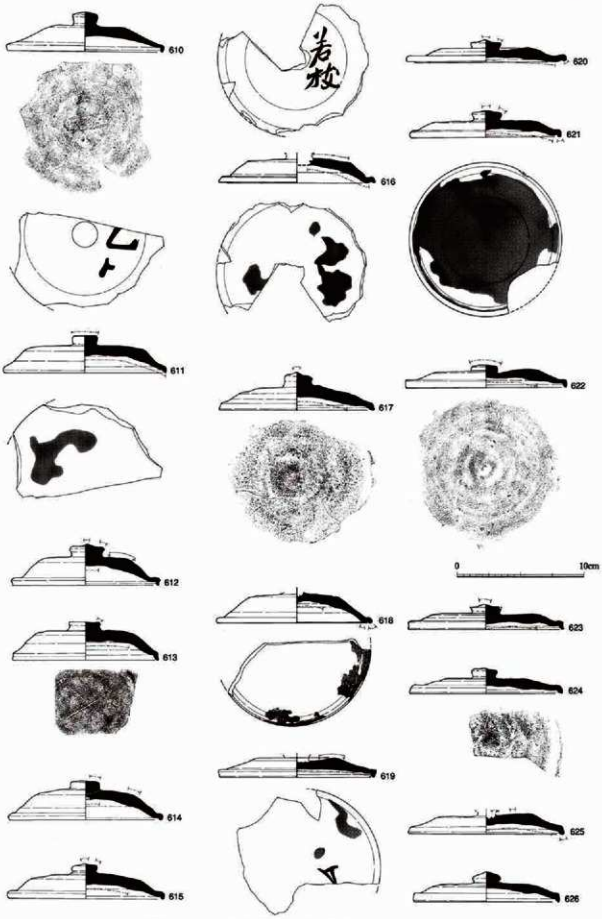
第93図627～第95図670を図化した。扁平な627は口径13.2cm、器高3.8cmを測る。底部内面を硯面に使用し、顕著な摩耗と墨痕が遺存する。また底部外面に「□（乙ヵ）上」と墨書する。628～631、



第90図　A・B地区包含層出土遺物実測図1（S＝1/3）



第91図　A・B地区包含層出土遺物実測図2（S＝1/3）



第92図　A・B地区包含層出土遺物実測図3（S＝1/3）

633～636は口径13.5～14㎝、器高3.5～4.4㎝を測る一群で、比較的肉厚である。張りをもつ体部下半は口縁部へ至り緩やかに外反、扁平な台部を付ける。628の底部外面にはヘラ記号「丨」と、墨書1文字が認められる。629は底部円盤づくりに伴う粘土の流れが明瞭に識別できる。焼成は堅緻で、内面に焼土が溶着する。630は中央寄りに台部を貼り、底部外面のヘラ記号は深く、「し」のようにみえる。633・634は煮沸容器への転用により、器面は脆く、酸化する。体部が直線的にのびる633は、一定期間の使用で摩耗が著しい。636は底部外面に墨書を記すが、判読できない。焼成の甘い632は口径13.3㎝、器高4.0㎝を測り、外展する台部を含めて摩耗が著しい。薄手の637は口径13.5㎝、器高3.6㎝を測り、体部はゆるやかに外反する。

638～641は口径12.5～13.0㎝、器高3.5㎝を測る。体部は直線的にのび、台部は中央寄りに付く。638の底部外面に大きくヘラ記号を刻む。台部に4㎝大の窯壁が溶着する。639の底部内面には乾燥時に他個体を重ねた痕跡が認められる。640は焼成堅緻で、扁平な台部を中央寄りに付ける。641は底部外面に大きく墨書するが、文字は判読できない。642・643は口径約11.2㎝、器高3.7㎝を測り、体部は直立気味である。642の台部は真円でない。643は一定期間の使用の後に「屋□（東ヵ）」と墨書を行う。

644～649、653～655、658、659、661は口径11～12㎝、器高4㎝前後を測り、外展する台部は断面方形を基本とする。644～649、653の口縁部は外反するのに対し、658、659、661の体部は直線的にのびる。644の台部外縁は使用に伴う細かい欠けが連続する。646は焼成堅緻で、体部下半は張りをもつ。647は一定期間使用した後に、底部外面に「忍人」を小さく墨書する。648は正位で硯に転用した際に、外面にも墨がこぼれて付着する。649の底部外面には1文字以上の墨書が記される。薄手の653は倒位で硯に転用した際の墨痕が認められる。654は身の深い印象を受け、小さい台部を貼り付ける。底部肉厚の655は、小振りの台部を外展気味に付ける。薄手の658は底部外面に墨書を記し、その文字は「大海」の可能性が高い。箱形を呈する659は、回転ヘラ切り後にナデ調整を加える。

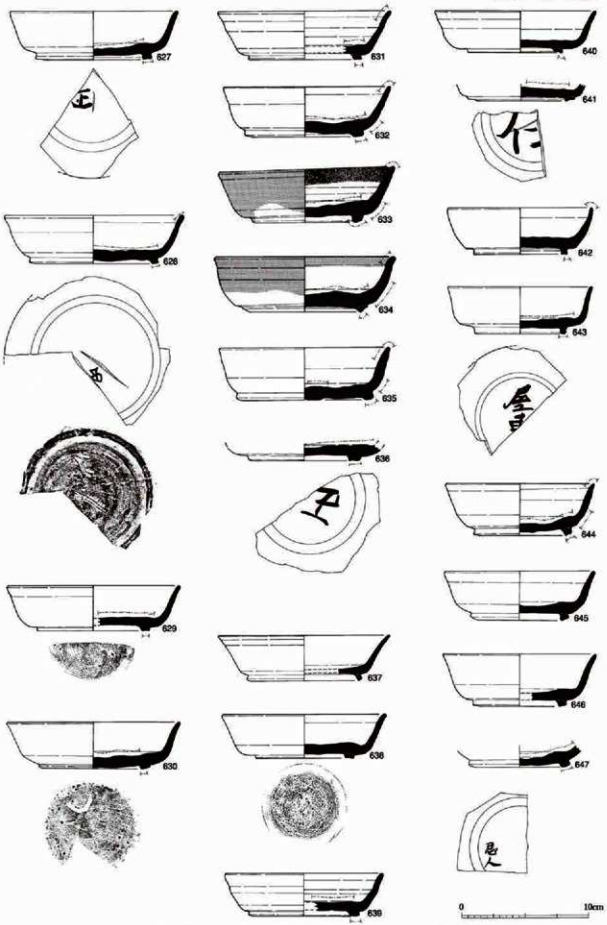
650は断面方形の台部を内屈気味に付け、内外面とも硯に転用する。651は口径12.0㎝、器高4.9㎝を測り、底部は肉厚である。内外面とも降灰が著しく、正位無蓋焼成と考えられる。底部外面にヘラ記号「／」を刻む。652は口径10.9㎝、器高4.5㎝を測り、別胎土の外展する低い台部を外縁に貼る。また底部外面に「乙上」と墨書する。深身の656は口径10.1㎝、器高4.6㎝を測り、強く外展する台部は長くのびる。657は使用に伴う摩耗が著しい。倒位で煮沸容器に転用した際に黒色煤が付着する。

660、662～663は口径11㎝弱、器高4㎝弱を測り、体部は直線的にのびる。箱形を呈する663は、各部のつくりが丁寧である。体部内面には破片化後に付着したタール状煤が遺存する。664は体部と底部の境に強いナデ調整を加え、体部は直立気味にたちあがる。665は焼成が甘く、底部外面に記された墨書の一部は「土」と判読できる。

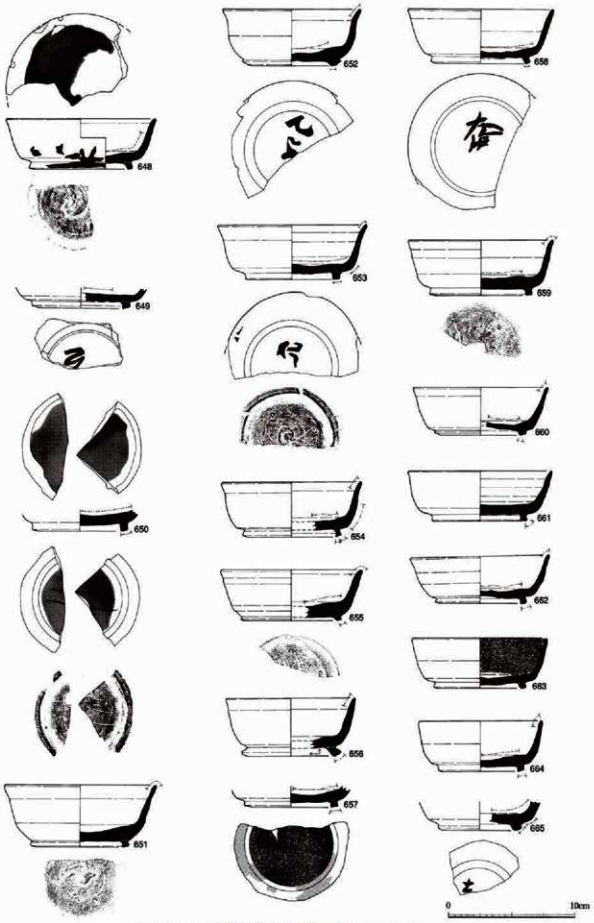
666は口径19.8㎝を測る大型・深身の有台坏で、口縁部はゆるやかに外反する。667は口径15.4㎝、器高6.8㎝を測り、体部は外側へ直線的に開く。焼成は甘く、使用に伴う摩耗が著しい。668は深身で、内面に降灰は認められない。薄手の669は、直線的に体部が開く。台部を取り外した後も容器として使用する。還元の弱い670も同様である。

須恵器無台坏

第95図671～第96図714を図化した。厚手の671は口径9.8㎝、器高3.3㎝を測り、底部内面は使用に伴い摩耗する。胎土中に海綿骨片を含む。672は口径10.7㎝、器高3.1㎝を測り、台状を呈した底部外面



第93図　A・B地区包含層出土遺物実測図4（S＝1/3）



第94図　A・B地区包含層出土遺物実測図5（S＝1/3）

に墨書「□（寺ヵ）」を記す。673は口径11.3㎝、器高3.9㎝を測り、体部は外反気味にたちあがる。底部外面は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。

674～679は口径13.5～14㎝強、器高3.5～４㎝を測り、底部から体部へゆるやかに移行する。薄手の674は、底部外面ヘラ切り痕をそのまま残す。675は使用に伴う摩耗が著しく、外面のみに煤が付着する。676は一定期間の使用（口縁部に欠けが蓄積）の後に煮沸容器に転用する。煮沸に伴い、外面に黒色煤が、また内面口縁部に褐色のヨゴレが付着する。焼成の甘い677の体部外面は、強い回転ナデにより段差を生じる。肉厚の678の内面は、底部と体部の境が不明瞭である。680～683は口径13～13.5㎝、器高約3.5㎝を測り、体部は直線的に外側にのびるものが多い。箱形を呈する680は使用に伴う摩耗が顕著である。681は底部外面を回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加え、ヘラ記号を刻む。682の口縁部は、使用に伴う摩耗が著しい。

684～686、689～692、695は、口径12～12.5㎝、器高４㎝前後を測り、身の深い印象を受ける。還元の弱い684は、乾燥時の板状圧痕が明瞭に残る。685は煮沸容器に転用され、外面に煤が付着する。また内面は底部～体部下半に薄い茶褐色のヨゴレが、体部上半～口縁部に濃い灰褐色のヨゴレが同時に付着する。686の底部外面は回転ヘラ切り痕をそのまま残す。厚手の689底部外面にはヘラ記号「／」と墨書「下家」が認められる。墨書の文字はほとんど摩滅しない。690の底部外面は全面に丁寧なナデ調整を加えるのに対し、691は周縁部のみに加える。底部肉厚の692は、外面に「□（乙ヵ）上」と墨書し、その文字は若干の摩滅を伴う。695は、底部外面は回転ヘラ切り後に丁寧なナデ調整を加える。一定期間の使用の後に２文字の墨書が記す。１文字目は「上」となる。

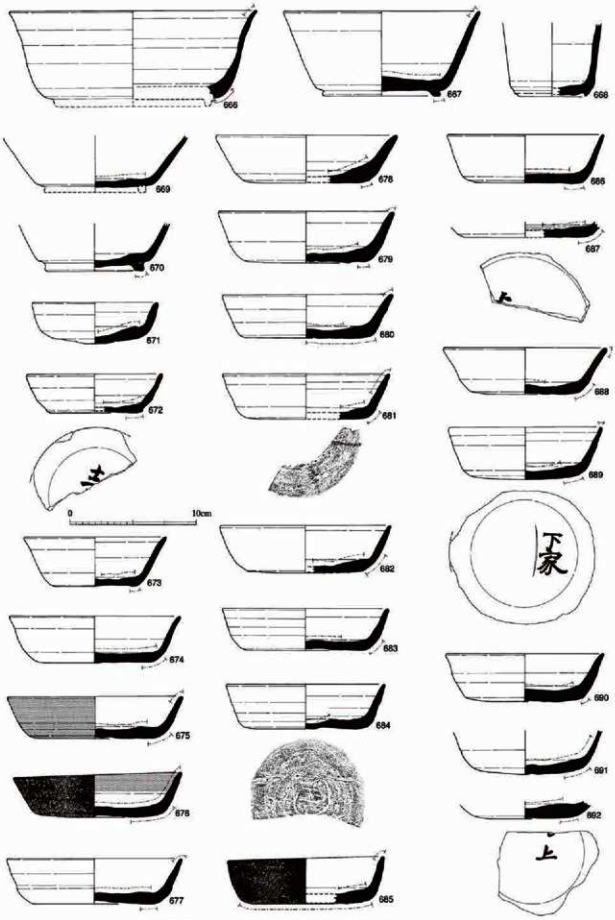
687の底部外面は墨書を記し、その文字は「上」の可能性をもつ。688は口径12.6㎝、器高3.7㎝を測る。体部は下半で張りをもち、外反しながら外側へ開く。693は底径が大きく、ヘラ記号と墨書「小庭」が認められる。

694、696～699、701～703は、口径12.5～13.0㎝、器高３～3.5㎝を測り、扁平な印象を受ける。底部と体部は緩やかに屈曲し、口縁部は外側へ開き気味である。薄手の694は一定期間の使用の後に底部内面に「十」と墨書する。墨書後はあまり使用していない。696は体部外面に墨書し、その文字は「足人」の可能性をもつ。697～699の底部内面には摩耗が蓄積する。701の体部は内湾気味にながくのびる。702・703の底部外面は回転ヘラ切り痕をそのまま残す。700、704～710は口径11.5～12㎝、器高３㎝強を測る。700は使用に伴う摩耗が著しい。704は底部外面に大きく「上家」と墨書する。文字には摩滅がほとんど認められない。705底部外面の墨書は判読できない。706は体部が外傾しないため箱形を呈する。707は底部と体部の境はなだらかに移行し、使用に伴う摩耗が著しい。708・709の底部外面に墨書を記し、文字は摩滅がほとんど認められない。708は「上」の可能性をもち、709は「屋東」と判読できる。薄手の710底部外面に記された墨書は、薄いために判読できない。

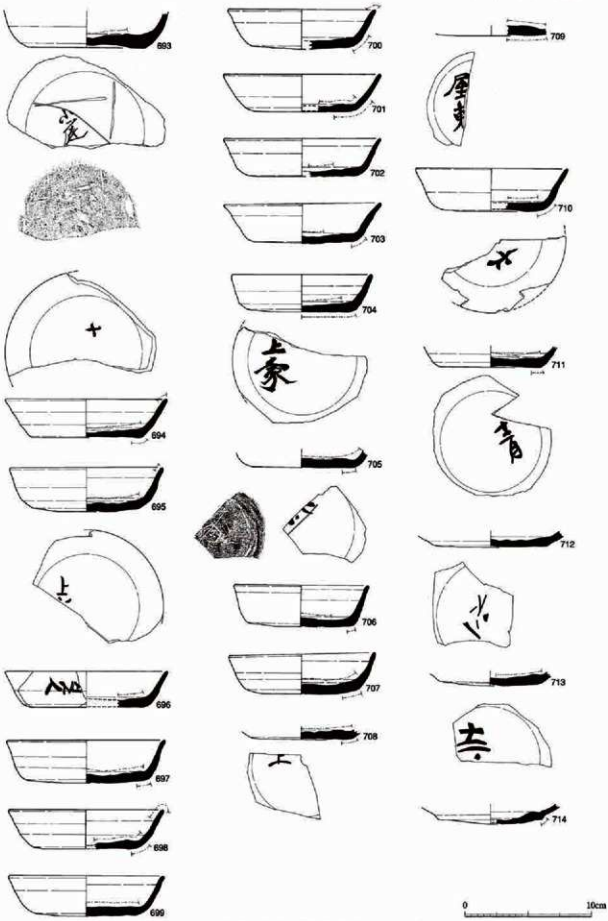
711の墨書は「青」と考えられる。712～714は底部円盤状を呈する。712の底部外面に墨書が記されるが、文字の摩滅が著しく判読できない。713の底部外面の墨書は薄いものの、「寺」の可能性が高い。薄手の714は、焼成が甘く、ロクロひだが目立つ。

須恵器高坏・盤

第97図715は有台の盤と考えられ、口径22.6㎝を測る。内外面とも回転ナデ調整で仕上げ、平坦に仕上げた口縁端部は、やや肥厚する。高坏716は身部外面に回転ケズリ調整を施す。正位で、身部内面に別個体を置いた後に、焼成を行う。低脚端部は欠けが目立つ。717は軟質なため摩滅が顕著である。体部は外傾せず立ち上がる。短脚高坏719は脚部中程を２条の沈線で加飾する。内面に黒褐色漆が帯状に付着する。



第95図　A・B地区包含層出土遺物実測図6（S＝1/3）



第96図　A・B地区包含層出土遺物実測図7（S＝1/3）

土師器供膳具他

第97図720～735を図化した。720～724は土師器高坏である。外赤内黒で加飾する720の外面はハケ調整の後に粗いミガキを加える。

721～728は全面を赤彩する。721は724と同形態と考えられる。722は内面全てに被熱痕をもち、煮沸容器の蓋に転用された可能性が高い。723は口径13.9㎝を測り、身部は皿状を呈する。内外面ともナデ調整で成形し、底部外面に回転ケズリ調整を加えた後に脚を付す。低脚の724は、廃棄後に斜位で被熱する。坏蓋725は口径11.8㎝、器高3.5㎝を測り、天井部に回転ケズリ調整を施した後に、端正な宝珠形の鈕をつける。ミガキ調整を加えた内面は、倒位で容器に転用されたために口縁部の一部に煤が付着する。有台坏726は口径11.2㎝、器高4.5㎝を測り、口縁部は直線的にのびる。内面にミガキ調整が遺存する。727も有台坏と考えられ、接地面は摩耗する。無台埦728は全面にミガキ調整を施す。

729～733は外赤内黒の無台埦である。729は口径15.1㎝を測り、底部からなだらかに口縁部へ移行、口縁部は外反しない。730は口径14.4㎝、器高4.5㎝を測り、731と同様に外面はハケ調整の後に粗い手持ちケズリ調整で仕上げる。731は口径14.7㎝、器高4.1㎝を測り、口縁部は直線的に外傾する。ロクロ成形の732は口径12.9㎝、器高5.0㎝を測り、体部は内湾しながら立ち上がる。外面体部下端～底部を手持ちケズリで成形する。733は口径16.8㎝を測り、内面のみ赤彩とミガキ調整を施す。直立気味の口縁部は肥厚する。身の浅い無台埦734は口径17.0㎝、器高4.1㎝を測り、底部外面を回転ケズリ調整で仕上げる。

735は第99図753と同形態の有台盤底部で、貼り付けた脚は接合部より剥離する。内面はハケ調整の後に半截竹管で刺突する。仏器としての使用に伴い、内面にタール状煤が付着する。胎土は第99図752と共通する。

第99図752、753は大型の土師器盤である。身部中程まで灰などを充填しての仏具的使用が復元できる。752は口径41㎝、器高3.9㎝を測り、無台と考えられる。底部外面にナデ調整、内面に竹管文が残る他、体部内面を2条の沈線で加飾する。体部～口縁部内面に黒色タール状煤が、また口縁部外面に煤が付着するが、底部内面の被熱痕はわずかである。胎土は753と異なり、1～3㎜大の角張った砂礫が多く混ざる。753は口径35.0㎝を測り、4ケ所に断面台形と逆台形の透かしを入れた長くのびる脚を貼り付ける。底部外面は下半を平行叩きで成形した後に、一部にケズリ調整を、また内面には粗いハケ調整を施す。口縁部を中心に厚い暗褐色のタール状煤が、底部内面に薄い褐色のヨゴレが付着する。

須恵器貯蔵具他

第97図736は大型の盤または鉢底部と考えられ、外面にケズリ調整、内面にハケ調整を施す。軟質のため、使用に伴う摩耗が著しい。第98図長頸瓶737は叩き成形の後に、外面にカキメ調整と板状工具による列点文を施す。長頸瓶738、739は同一個体で、風船技法でつくられる。740は風船技法の工程で生じる円盤状の切り離し部分と考えられる。中央に円盤を取り外す時に工具を突き刺した痕が、径0.7㎝の円孔として残る。長頸瓶741の台部は外展し、嘴状にのびる端部は、摩滅が著しい。742、743、747は壺・瓶類底部と考えられ、内屈する台部を雑に貼る点で共通する。742の底部外面は、成形時に付着した離れ砂の上にヘラ記号「／」を刻む。内面全体に自然釉が溶着する。743の台部は断面方形を保つのに対し、747は断面三角形に退化する。ともに台端部は使用に伴う摩耗が著しい。壺・瓶類744・745は別個体である。746は胴部と口縁部の接合部を突帯で補強する。口縁部中程の2条の沈線は、接合した口頸部が中心を外れたために乱れる。瓶748の口縁部は、平面楕円形に近いまでに焼き歪む。胴部との接合に伴うシボリ痕が明瞭に残る。横瓶口縁部749は口径11.8㎝を測り、厚い自

然釉が溶着する。750は第73図349・350と同形態を呈する土師質の土管状土製品である。口径14.8㎝を測り、内外面ともカキメ調整を施す。還元の弱い751は底径20.4㎝を測り、盤または鉢の底部と考えられる。底部内面に摩耗が認められる。

754～758は甕である。短頸の754は口径45.6㎝を測り、口縁端部を平坦に仕上げる。胴部は外面を平行叩きａ類の後にカキメ調整を、内面を同心円叩きａ類の後にナデ調整をそれぞれ加える。頸部内面は、使用に伴い摩耗する。755は口径39㎝を測り、別づくりの口縁部を接合する。胴部外面は厚い自然釉が溶着するために叩きが判然としない一方、内面には同心円叩きａ類が認められる。756は折り曲げて口頸部を成形する。口縁部外面を３本一単位の乱れた波状文と、１条の沈線で加飾する。胴部外面は平行叩きａ類の後にカキメ調整を、また内面は同心円叩きｃ類を施す。757は口径27.4㎝を測り、胴部は横方向に張る形態をもつ。口頸部は屈曲しながらたちあがり、端部に平坦面をつくる。胴部外面を平行叩きの後にカキメ調整で、また内面を同心円叩きで仕上げる。758は口径26.3㎝を測る。口縁部は叩き技法で折り曲げてつくり、最後にナデ調整を施す。胴部外面は格子文叩きの後にカキメ調整を、また内面は同心円叩きｃ類を施す。

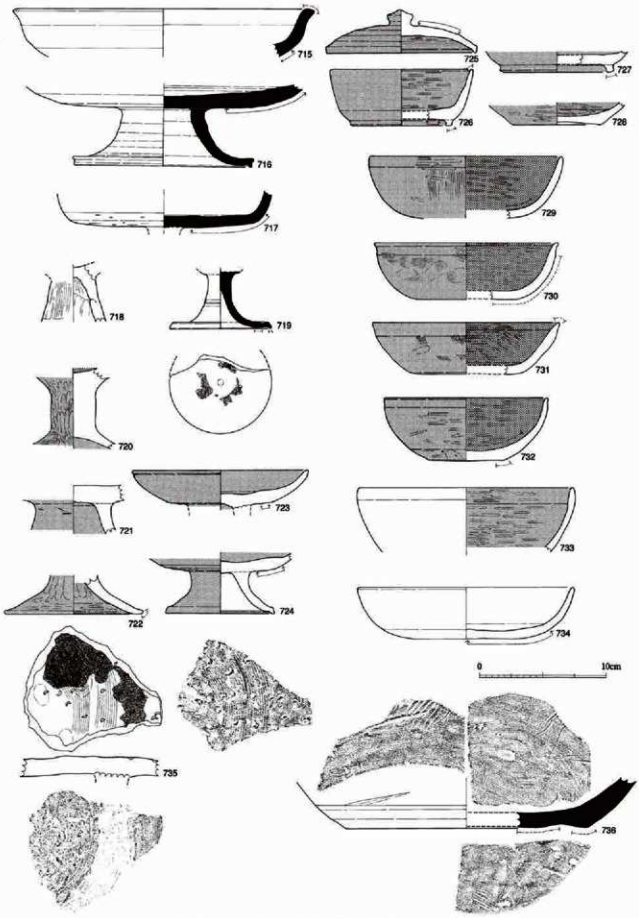
土師器煮炊具

第101図759～第103図784を図化した。非ロクロ土師器小甕759は口径18.7㎝、器高21.5㎝を測る。円筒形の胴部より口縁部は緩やかに外反する。外面は縦方向の粗いハケ調整、内面はハケ調整の後に板状工具を用いた横方向のナデ調整を施す。煮沸に伴う痕跡は、外面でカマドなどに設置した際に生じたと考えられる斜方向の煤付着が、また内面には底部で黒色のヨゴレと口縁部で黒褐色のヨゴレの帯状付着がそれぞれ確認できる。非ロクロ土師器小甕760は口径14.7㎝を測り、胎土中に砂礫が多く混ざる。球形を呈する胴部は、内外面ともハケ調整で仕上げる。ロクロ土師器761は口径18.0㎝を測り、頸部でくの字状に折れ曲がる。胴部は回転ナデ調整を基本とし、煮沸に伴い外面には厚い煤が付着する。

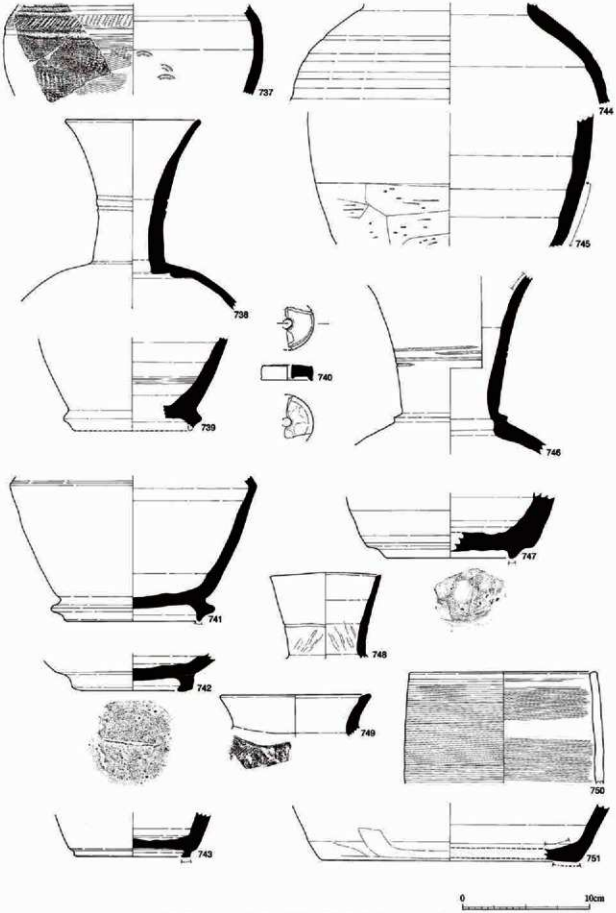
762～764は非ロクロ土師器である。肉厚の762は口径19.6㎝を測り、内外面とも粗いハケ調整で仕上げる。古墳時代中期の所産と考えられ、胎土中に砂礫が多く混ざる。薄手の763は口径約21㎝を測り、頸部でくの字に折れ曲がる。外面には縦方向のハケ調整の後にケズリ調整を、内面には縦方向のナデ調整を施す。764は口径23.5㎝を測り、口縁部は外反しながら長くのびる。内外面ともハケ調整を基本とし、煮沸に伴う痕跡が明瞭に残る。肉厚のロクロ土師器甕765は口径約26㎝を測り、短くのびる口縁端部に平坦面をつくる。胴部内外面ともハケ調整を施し、外面に装飾的なカキメ調整を加える。

766～772はロクロ土師器長甕で、胴部上半はカキメ調整を施すことを基本とする。766は口径21.2㎝を測り、口縁端部は内側に肥厚する。外面の斜方向の煤付着が認められ、カマドなどへの設置に伴う可能性が高い。767は口径16.9㎝を測り、カキメの単位は細かい印象を受ける。768は口径19.6㎝を測り、口縁端部を嘴状につまみあげる。769は胴部中程に最大径をもち、外面にはカマドなどへの設置に伴う黄色粘土が付着する。770は口径23.4㎝を測り、内外面でカキメ調整の原体が異なる。頸部内面の摩耗は、使用に伴う可能性をもつ。771は口径24.5㎝を測り、胴部に最大径をもつ。外面に平行叩き痕跡がかすかにみえる。772は口径約22㎝を測り、外面に平行叩き痕がわずかに遺存する。小片のため傾きに不安をもつ。

第102図773～776は小甕である。非ロクロ土師器の773は口径11.4㎝を測り、胴部内面を粗いハケ調整で仕上げる。774～776はロクロ土師器である。薄手の774は口径11.8㎝を測り、口縁端部を上方に小さくつまみあげる。煮沸に伴う痕跡が明瞭に残る。775は口径11.4㎝を測り、口縁端部を丸くおさめる。776は口径12.8㎝を測る。



第97図　A・B地区包含層出土遺物実測図8（S＝1/3）



第98図　A・B地区包含層出土遺物実測図9（S＝1/3）

第102図777～第103図779はロクロ土師器塙で、煮沸に伴う煤・ヨゴレの付着が認められる。777は口径34.9㎝を測り、口縁端部を嘴状につまみあげる。778は口径38.4㎝を測り、内外面とも回転ナデ調整を施し、外面下半にケズリ調整を加える。779は口径約32㎝を測り、外反する口縁部は端部を平坦に仕上げる。780はロクロ土師器鉢把手で、把手中央を上方から刺突して径約0.6㎝の円孔を穿つ。ロクロ土師器781は口径約45㎝の大型の鉢・盤に復元したが、小片のため復元径に不安があり、より小径の甑の可能性をもつ。782は甑底部で、外面に平行叩き痕が、内面に指ナデ痕が残る。外面に薄い煤が付着する。ロクロ土師器784も甑と考えられる。

そ　の　他（第103～105図）

土師器786は一部に煤が付着する。土馬、把手、脚などの一部と考えられるが判然としない。

製塩土器787～792は棒状尖底と考えられる。小型・薄手の787の口縁端部は内屈し、胎土中に海綿骨片が多く混ざる。788は頸部径8.5㎝を測り、胎土中に海綿骨片が多く混ざる。790～792は小片のため、傾きは判然としない。790は胎土中に若干の海綿骨片が混ざり、赤褐色の色調をもつ。791、792は外面を粗い指ナデ、内面をハケ調整で仕上げ、浅黄橙色の色調をもつ。

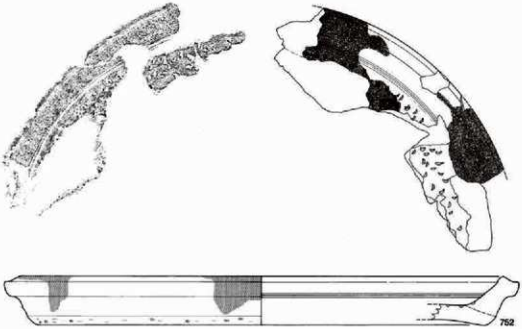
第104図793～796は砥石である。793・794は軽石を用い、793で重量13.3ｇ、794で残重量27.6ｇを量る。795は側面全てを研ぎに使用し、長辺は凹状にゆるやかにくぼむ。石材は灰色を呈した砂岩である。796は残存する５面を鎌などの研ぎに使用する。石材は凝灰岩質安山岩で、非常に硬い。797～800は土師質のフイゴ羽口で、797に黒褐色の自然釉が溶着する。銅製品801は、刀の鞘口金具（責金具）であり、長さ4.4㎝、幅2.0㎝、厚さ1.2㎝、重さ5.8ｇを測り、若干歪みをもつ。刀身を装着する孔は、長さ3.2㎝、幅1.0㎝と小振りであることから、短刀の可能性が高い。802は短冊状を呈した薄い鉄板で、腐食が著しい。

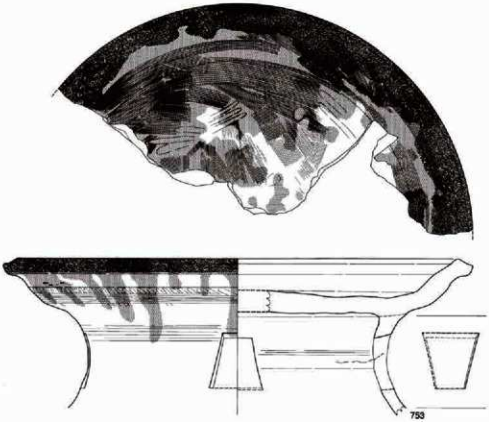
803～806は鉄滓で、図化していないものを含めて椀形滓が目立つ。椀形滓803には粗い砂粒や粘土が溶着する。805は他の個体より比重をもち、重さ221ｇを量る。806は木炭片が目立つ。土師質の土錘807～809は、807で重さ94.3ｇ、808で同54.5ｇ、809で同61.0ｇを量る。円孔付近に使用に伴う摩耗が認められる個体も存在する。810は古墳時代中期のてづくね土器または中世後半の非ロクロ成形の土師器皿と考えられる。口径10.0㎝、器高2.7㎝を測り、つくりは雑で歪みが著しい。石鏃811は重さ3.7ｇを測り、石質は玉髄質珪質頁岩である。812は輝石安山岩の剥片である。第105図珠洲焼壺813は口径16.3㎝を測り、珠洲Ⅱ期（吉岡1994）に位置づけられる。

第105図814～817は近世以降に位置づけられる。陶器鉢814は底部内面６ケ所に目痕をもつ。染付磁器815は徳利と考えられる。灰釉陶器碗816は「寿」の文字をもつ。波佐見焼蛇ノ目釉剥ぎ皿817は口径13.4㎝、器高2.9㎝を測り、呉須の色調は黒褐色とオリーブ黄色である。台部に離れ砂が溶着する。19世紀代の所産と考えられる。

木　製　品（第106図）

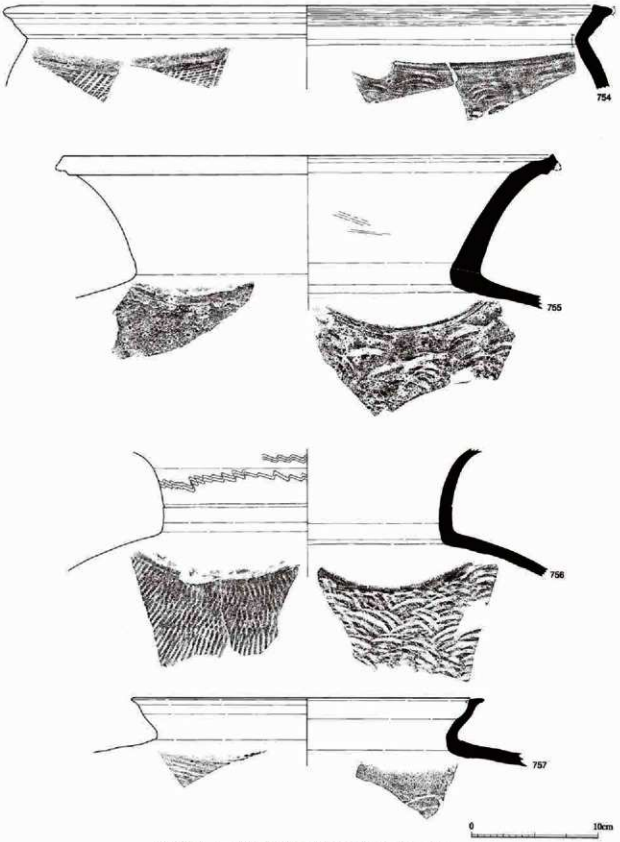
第106図818～822は円形板で、818は径約10㎝、819～822は径15～17㎝を測る。目釘はなく、822のみに刀子痕が認められる。大型楕円形曲物底板823は有段で、一部が被熱により炭化する。824～826は板状木製品である。小型の824は平面長方形を呈し、長さ10.7㎝、幅2.7㎝、厚さ0.9㎝を測る。825の一辺はゆるやかな曲線を描く。杭状木製品827は先端がつぶれる。板状木製品828は一端を２側面より加工する。829・830は長さ約100㎝を測り、部材と考えられる。



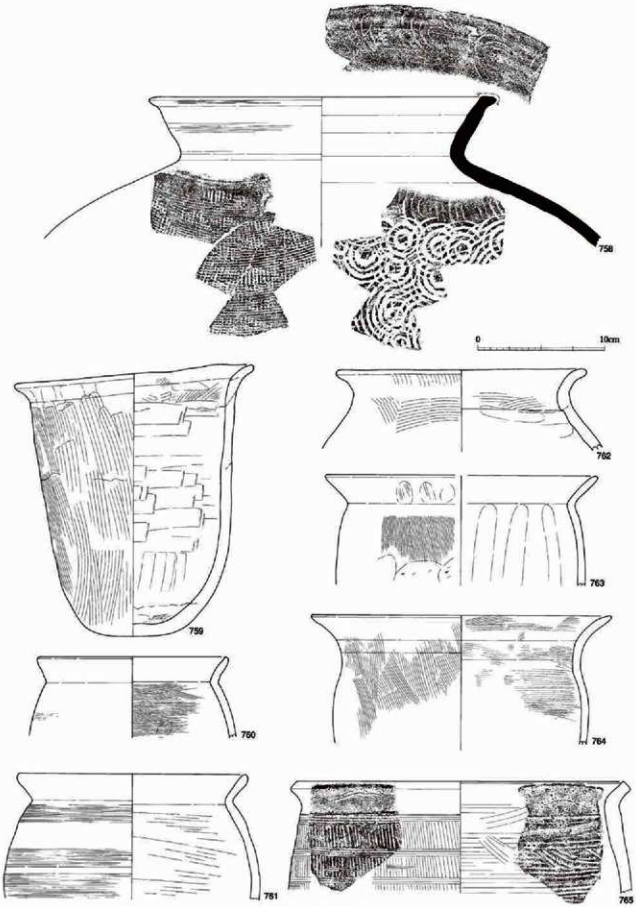


0　10cm

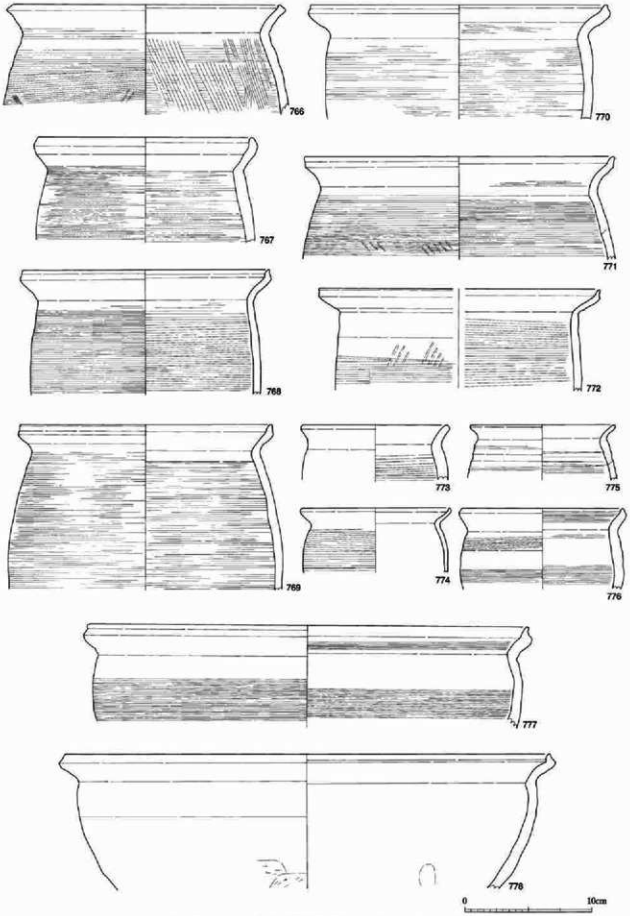
第99図　A・B地区包含層出土遺物実測図10（S＝1/3）



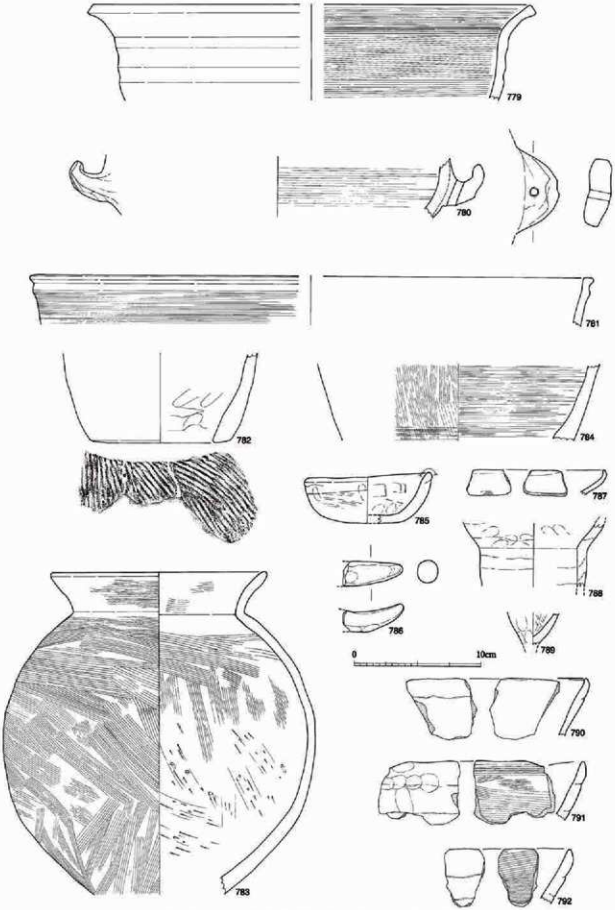
第100図　A・B地区包含層出土遺物実測図11（S＝1/3）



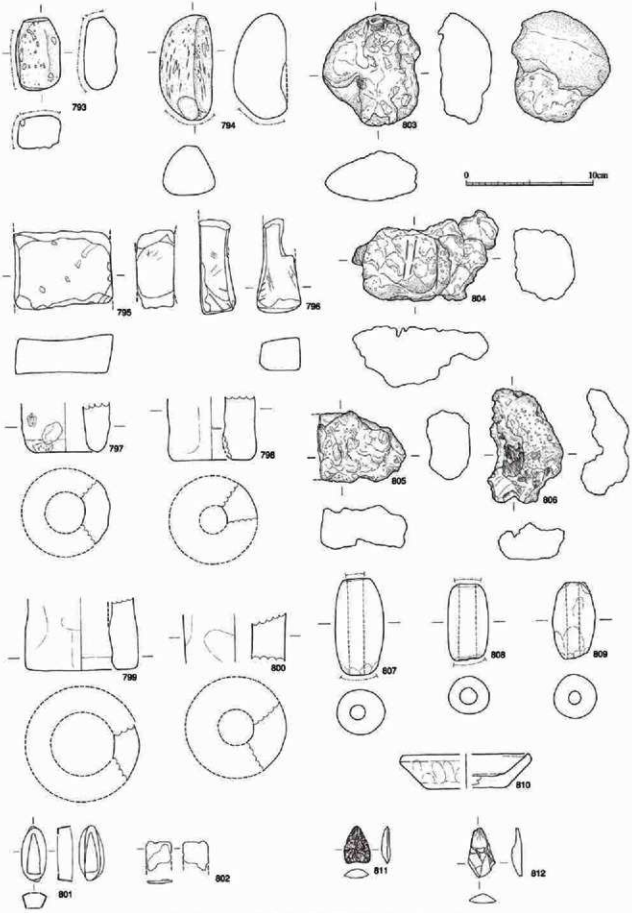
第101図　A・B地区包含層出土遺物実測図12（S＝1/3）



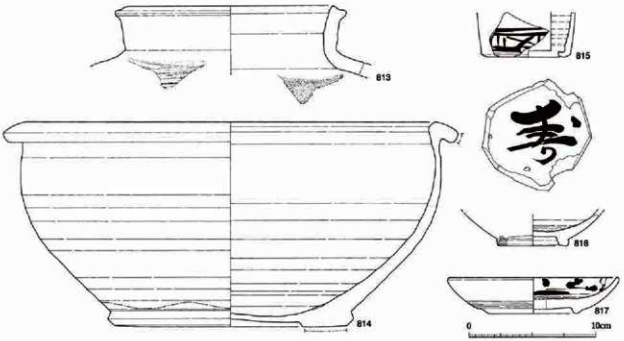
第102図　A・B地区包含層出土遺物実測図13（S＝1/3）



第103図　A・B地区包含層出土遺物実測図14（S＝1/3）



第104図　A・B地区包含層出土遺物実測図15（S＝1/3）



第105図　Ａ・Ｂ地区包含層出土遺物実測図16（Ｓ＝1/3）

註

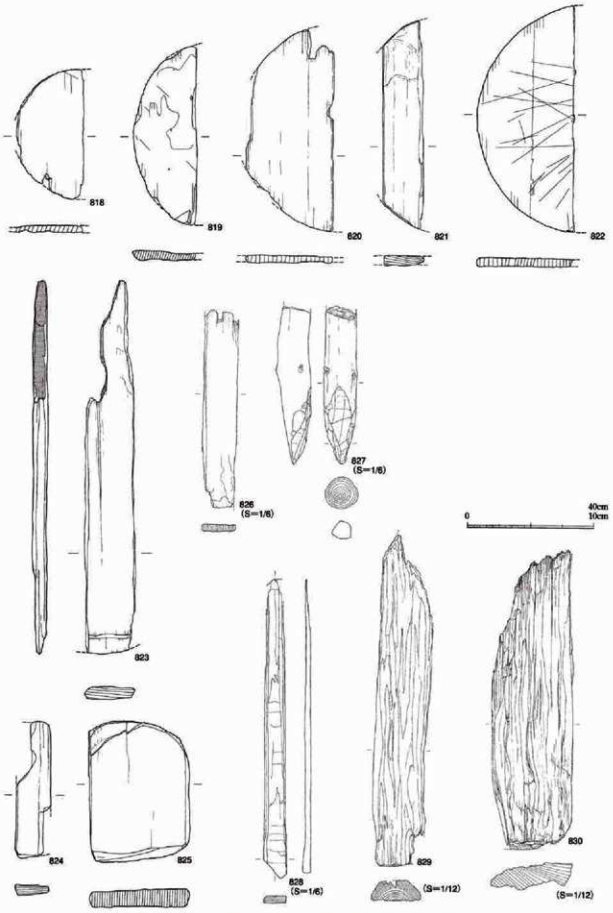
(1) 以下の本章での遺物の記述は、使用に起因する器面の減耗を「摩耗」と、土器廃棄後に起因する器面の減耗を「摩滅」と区別する。遺物の時期については、第６章第１節にもとづき、Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄの４期に区分し、観察表に記載した。

(2) 北野博司1988「第３節　古代」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センターでの分類に準じる（第107図参照）。

(3) 内堀信雄1988「須恵器甕にみられる叩き目文について」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題　報告編』石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

(4) 加藤克郎2001「羽咋市四柳白山下遺跡出土の古代銭貨」『石川県埋蔵文化財情報』第５号　㈶石川県埋蔵文化財センター

(5) 北野博司2001「須恵器の風船技法」『北陸古代土器研究会』第９号　北陸古代土器研究会



第106図　A・B地区包含層出土木製品実測図1（S＝1/3・1/12）

須恵器

胎土分類	特　　徴	推定産地
a	・素地は粘性に乏しく、海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒と１～３㎜大の角張った石英・長石などの砂礫が混ざる。 ・割れ口ははさつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋窯跡群・ 中能登町北部
b	・素地は粘性に富み、海綿骨片が混ざる。 ・赤紫色粒（シャモットか）が多く混ざる。 ・気泡をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽咋窯跡群
c	・素地は粘質で緻密な印象を受ける。海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒の他、２㎜程度の崩れた長石・石英・赤色粒が若干混ざる。	能登（高松窯跡群か。）
d	・素地は粘質で、海綿骨片が混ざる。 ・多量の微砂粒の他、１～２㎜大の長石が混ざる。 ・割れ口ははさつき、コンクリートの質感をもつ。	鳥屋窯跡群か。
e	・素地は粘質で、しっとりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 ・微砂粒は少なく、１～３㎜大の角張った石英・長石が混ざる。	鳥屋窯跡群・ 中能登町北部
f	・素地は粘質で、しっとりとした質感をもつ。 ・微砂粒、１～４㎜大の角張った石英・長石が多量に混ざる。	鳥屋窯跡群・ 中能登町北部
g	・ｂと類似。素地は粘性に富み、海綿骨片が多く混ざる。 ・微砂粒、石英粒がほとんど混ざらない。 ・気泡をもち、淡灰色の色調をもつことが多い。	羽咋窯跡群
h	・素地は粘質で、海綿骨片が混ざらない。 ・多量の微砂粒の他、１～２㎜大の長石が若干混ざる。 ・割れ口はざらつく。	鳥屋窯跡群・ 中能登町西部
i	・素地は粘質に富み、しっとりとした質感をもつ。海綿骨片は混ざらない。 ・微砂粒のほか、１～５㎜大の崩れた長石を主体に砂礫が混ざる。	能登（高松窯跡群か。）
j	・素地は粘質に乏しく、砂っぽい質感をもつ。海綿骨片が混ざる。 ・１～３㎜大の角張った石英・長石が多く混ざる。 ・割れ口はざらつく。土師器分類オに類似。	鳥屋窯跡群
k	・素地は粘性に富み、海綿骨片が多く混ざる。 ・石英質の微砂粒、２㎜大の石英粒が若干混ざる。 ・気泡が目立つ。	羽咋窯跡群
l	・素地は粘質で、キメが細かい。海綿骨片は混ざらない。 ・白色微砂粒、１㎜大石英がごく少量混ざる。	鳥屋窯跡群か。

土師器

胎土分類	特　　徴	備　　考
ア	・素地は粒子が粗く、砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が多く混ざる。 ・１～３㎜大の角張った石英・長石・金雲母などの砂礫が多く混ざる。	主に供膳具
イ	・素地は粒子がやや粗い。海綿骨片が混ざる。 ・１㎜以下の長石細砂粒を主体に、角張った１～３㎜大の石英・長石などの砂礫が混ざる。	
ウ	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・比較的粒径が揃った（約１㎜大の）石英・長石に加え赤色粒が混ざる。	
エ	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・0.5㎜程度の赤色粒を主体とする細砂粒が混ざる。	
オ	・素地は砂っぽく、海綿骨片は混ざらない。 ・１～２㎜大の石英・長石が多く混ざる。 ・気泡があり、割れ口ははさついたコンクリートの質感をもつ。	主に煮炊具
カ	・素地は粒子が粗く、砂っぽい印象を受ける。海綿骨片が混ざる。 ・微砂粒に加え、１～３㎜大の角張った石英・長石・赤色粒などが混ざる。	
ク	・素地は粘質で、海綿骨片が若干混ざる。 ・石英・赤色粒などの微砂粒が混ざる。 ・細かい気泡が目立つ。	
ケ	・素地は粘質で、海綿骨片が多く混ざる。 ・１～３㎜大の角張った石英・長石・赤色粒などが混ざる。	
コ	・素地は粒子が粗く、海綿骨片が混ざらない。 ・微砂粒に加え、金雲母、１～３㎜大の角張った石英・長石などが混ざる。	

第11表　土器胎土の分類

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
45-128	D687	1次A地区	L-6-1	A地区整地土・焼土面	土師器(ロクロ)	長甕	20.4	(7.6)	—	3	橙色	橙色	粗砂多く含む	
129	D234	1次A地区	K-6-2	SB1(A1掘立)P291	須恵器	坏蓋	15.4	(2.9)	—	12	灰色	灰色	e	Ⅰ型重ね焼き
130	D614	1次A地区	K-6-2	SB1(A1掘立)	須恵器	坏蓋	12.0	(2.1)	—	小片	褐灰色	褐灰色	e	Ⅱ型重ね焼き、D期
131	D378	1次A地区	K-5-4	SB1(A1掘立)P64	須恵器	有台坏	—	(2.7)	約10	底-2	青灰色	暗青灰色	e	B期
132	D254	1次A地区	K-5-4	SB1(A1掘立)P66	須恵器	有台坏	12.4	(3.3)	—	2	明青灰色	青灰色	a	B・C期
133	D237	1次A地区	K-6-2	SB1(A1掘立)	外赤内黒土師器	無台椀	約13	(3.6)	—	1	黒色	にぶい黄橙色	粗砂粒含む	
134	D235	1次A地区	K-6-2	SB1(A1掘立)、Sj	外赤内黒土師器	無台椀	約14	4.4	—	小片	黒色	にぶい黄橙色	海綿骨片含む	画期期著
135	D233	1次A地区	L-6-1	SB1(A1掘立)P1	須恵器	短頸壺	11.6	24.8	13.6	7	灰色	灰色		
137	D682	1次A地区	L-6-7	土師器(赤ロクロ)	甕		23.2	—	—	1	浅黄色	にぶい黄橙色	微砂含む	
138	D682	1次A地区	L-6-7	SB2P141、Sj	土師器(ロクロ)	甕	—	—	—	1	浅黄色	にぶい黄橙色	微砂含む	
139	D209	1次A地区	L-5-7,K-6-2	SB2P55-59、SD22-55-57、	須恵器	広口瓶	—	(17.3)	—	—	暗青灰色	灰色	d	二次被熱
46-140	D757	1次A地区	K-6-2	SB6P86	須恵器	坏蓋	14.4	(2.4)	—	1	灰色	灰色	a	硬に転用
141	D385	1次A地区	K-5-4	SB6P65	須恵器	有台坏	13.6	3.5	9.2	3	明青灰色	明青灰色	c	B期
142	D382	1次A地区	L-5-3-4	SB4P29、Sj	須恵器	有台坏	12.0	4.7	7.9	1	青灰色	青灰色	e	二次被熱痕、C期
143	D395	1次A地区	L-6-1	SB5P41	須恵器	有台坏	—	(2.4)	7.7	底-12	青灰色	青灰色	e	B期
144	D249	1次A地区	L-5-1	SB4P29	須恵器	無台坏	約14.5	約4.3	11.5	底-6	明青灰色	明青灰色	a	
145	D340	1次A地区	K-5-4,L-6-1	SB6P68-78、SD40、焼土面	須恵器	長頸瓶	—	(10.7)	9.6	底-3	灰色	灰色	e	
146	D388	1次A地区	K-L-M-6,K-7	SB8P213、Sj	須恵器	有台坏	11.1	3.9	7.3	8	青灰色	青灰色	e	C期
147	特14	1次A地区	L-6-1	SB8P203	須恵器	坏蓋	17.9	(1.7)	—	2	灰黄色	灰色	c	墨書「青」、575と同一、B期
148	D702	1次A地区	K-7-2	SB10P152	土師器(赤ロクロ)	甕	14.8	(4.4)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂、海綿骨片含む	
149	特7	1次A地区	K-6-3	SB9(A2掘立)P174	須恵器	無台椀	15.9	2.2	12.9	12	灰白色	灰白色	c	埋納、墨書「奥」、C期
47-150	D322	1次B地区	K-10	B地区整地土(黄褐色粘土)	縄文土器	深鉢	—	(4.2)	—	—	褐色	褐色	微砂含む	
151	D318	1次B地区	K-9	B地区整地土(黄褐色粘土)	縄文土器	深鉢	—	(5.2)	—	小片	にぶい黄橙色	褐灰色	粗砂含む	波状口縁か
152	D741	1次B地区	K-9	B地区整地土(黄褐色粘土)	土師器	高坏	15.4	約12	10.2	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	イ	
153	D542	1次B地区	J-10-2	B地区整地土(黄褐色粘土)、Sj	須恵器	坏蓋	14.2	2.8	縁径3.1	2	灰色	灰色	e	B期
154	D531	1次B地区	K-10-3	B地区整地土(黄褐色粘土)	須恵器	坏蓋	16.3	3.2	縁径3.1	3	灰色	灰色	f	Ⅰ型重ね焼き、転用、B期
155	D405	1次B地区	K-8-3	B地区整地土(黄褐色粘土)、Sj	須恵器	有台坏	13.0	4.9	8.6	2	灰色	灰色	m	A期
156	D477	1次B地区	J-10,J-10-2	B地区整地土(黄褐色粘土)、Sj	須恵器	有台坏	10.9	4.4	6.9	10	灰色	越灰色	c	C期
157	D500	1次B地区	J-10,J-10-2	B地区整地土(黄褐色粘土)、Sj	須恵器	無台坏	14.0	4.3	7.2	5	灰色	灰色	e	
158	D278	1次B地区	K-10-3	B地区整地土(黄褐色粘土)	須恵器	無台坏	11.5	3.4	8.4	2	灰色	灰色	a	
159	D368	1次B地区	K-8-3,K-9-4	B地区整地土(黄褐色粘土)、Sj	須恵器	長頸瓶	—	(7.6)	(10.8)	底-5	灰色	明紫灰色	e	
160	D747	1次B地区	J-9	B地区整地土(黄褐色粘土)	土師器(赤ロクロ)	無台椀	12.4	(4.4)	—	3	浅黄橙色	浅黄橙色	ウ	
161	D55	1次B地区	J-9	B地区整地土(黄褐色粘土)	土師器	小甕	11.8	14.5	—	6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多量含む	
162	D710	1次B地区	K-10-1	B地区整地土(黄褐色粘土)	土師器(ロクロ)	小甕	17.7	(9.6)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、礫含む	
163	石62	1次A地区	L-6-1	B地区整地土(黄褐色粘土)	石製品	紡石	長さ(6.5)	幅3.5	厚3.6		黒白色	凝灰岩質安山岩	残重量91.4ｇ、４面使用	
164	金6-単	1次B地区	K-10-3	B地区整地土(黄褐色粘土)	鉄製品	鍬先	最大長11.2	最大幅6.8	最大厚1.0				重量124.6ｇ	
165	D293	1次B地区	K-10-1	B地区整地土(黄褐色粘土)	土製品	土鍋	長さ6.5	径3.5	—	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多量含む	重量93.5ｇ
48-166	D668	1次B地区	J-9-4	SB14(B3掘立)P211	弥生土器	壺	12.8	(4.5)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂含む	
167	D555	1次B地区	K-9-3	SB14(B3掘立)P223	須恵器	坏蓋	14.8	(2.2)	—	1	青灰色	青灰色	f	Ⅱｂ類重ね焼き、B期
168	D516	1次B地区	J-9-2,K-8-1	SB14(B3掘立)P204	須恵器	坏蓋	14.6	2.6	縁径3.0	6	灰色	灰色	f	Ⅰ型重ね焼き、B期
169	D526	1次B地区	J-9-4	SB14(B3掘立)P203	須恵器	坏蓋	14.1	2.7	縁径3.4	9	灰色	灰色	e	Ⅰ型重ね焼き、B期
170	D482	1次B地区	J-9-1	SB14(B3掘立)P201	須恵器	有台坏	13.4	4.4	10.1	1	灰白色	灰白色	c	B・C期
171	D440	1次B地区	J-9-2,L-9-1	SB14(B3掘立)P202、Sj	須恵器	有台坏	12.6	3.5	8.8	4	暗青灰色	暗青灰色	i	二次被熱痕、B期
172	D260	1次B地区	K-9-3	SB14(B3掘立)P207	須恵器	無台坏	13.4	3.3	10.4	1	灰白色	灰白色	f	B期

第12表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表１

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
48-173	D270	1次B地区	J-9-1	SB14(B3拡2) P213	縄意器	無台坏	13.6	2.9	9.4	3	灰色	灰色	c	内面被熱痕、B期
174	D667	1次B地区	J-9-2	SB14(B3拡2) P202	土師器 (赤ロクロ)	長甕	20.3	(5.7)	—	1	橙色	橙色	微砂、海綿骨片含む	
175	D738	1次B地区	J-9-3	SB14(B3拡2) P201,SD16	土師器 (赤ロクロ)	長甕	20.7	(14.6)	—	1	にぶい橙色	にぶい橙色	礫、粗砂含む	
176	D738	1次B地区	J-9-3	SB14(B3拡2) P201,SD16	土師器 (赤ロクロ)	長甕	—	—	—	1	にぶい橙色	にぶい橙色	礫、粗砂含む	
177	D336	1次B地区	J-9-1	SB14(B3拡2) P213(埋土)	縄意器	甕	23.4	(6.7)	—	1	オリーブ灰色	オリーブ灰色	c	無遺正位焼成
178	D540	1次B地区	J-9-3	SB15P214	縄意器	坏蓋	18.9	(2.1)	—	2	灰色	灰色	c	Ⅰ類重ね焼き、C期
179	D535	1次B地区	L-10	SB16(B1拡2) P86	縄意器	坏蓋	—	(0.9)	鍵径3.3	—	灰色	灰色	b	Ⅰ類重ね焼き、A期
180	D583	1次B地区	L-9	SB16(B1拡2) P75	縄意器	坏蓋	—	(1.8)	鍵径2.6	—	青灰色	青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、 横に転用、C期
181	D577	1次B地区	L-9-1	SB16(B1拡2) P71	縄意器	坏蓋	—	(1.9)	—	—	青灰色	青灰色	e	ヘラ記号「ノ」、C期
182	D588	1次B地区	L-9,L-9-2	SB16(B1拡2) P72,鉄手-88,Q1	縄意器	坏蓋	13.8	(2.0)	—	4	明青灰色	青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、 横に転用、C期
49-183	D433	1次B地区	L-9-1	SB16(B1拡2) P75	縄意器	有台坏	13.6	3.7	9.2	2	明青灰色	灰色	f	
184	D439	1次B地区	L-9	SB16(B1拡2) P72	縄意器	有台坏	—	(2.1)	9.6	底-3	青灰色	青灰色	f	C期
185	D509	1次B地区	L-10	SB16(B1拡2) P86	縄意器	有台坏	—	(3.7)	9.1	—	灰色	灰色	e	C期
186	D409	1次B地区	L-9	SB16(B1拡2) P75	縄意器	無台坏	12.2	3.1	8.6	3	灰色	灰色	a	C期
187	特68	1次B地区	L-9-1	SB16(B1拡2) P71	縄意器	無台坏	—	(0.2)	—	—	灰色	灰色	h	器面「□□(刀自か)」
188	D403	1次B地区	L-9	SB16(B1拡2) P58	縄意器	無台坏	—	(1.7)	8.2	底-5	灰色	にぶい黄橙色	a	B・C期?
189	D347	1次B地区	L-9-1-2,N-8-1	SB16(B1拡2) P71,Q1	縄意器	横瓶	11.0	約23	—	9	灰色	黄灰色	f	口縁部ヨケ連続
190	D637	1次B地区	L-9-1	SB16(B1拡2) P73	土師器(ロクロ)	小甕	—	(1.7)	6.2	底-6	にぶい黄橙色	にぶい橙色	礫、粗砂、桃土混合む	
191	石80	1次B地区	L-10	SB16(B1拡2) P86-ノ	石製品	紡石	長軸4.3	短軸4.3	最大厚2.6			滑灰色	軟石	重量10.8g、全面使用、 紡方形
192	D498	1次B地区	L-10	SB17P88	縄意器	有台坏	—	(2.6)	7.9	—	灰色	灰色	e	C期
193	D291	1次B地区	L-10	SB17P89	縄意器	無台坏	—	(2.5)	8.9	—	灰色	灰白色	c	
194	D225	1次B地区	K-10-1	SB20P157	外赤内黒土師器	無台椀	—	(3.6)	7.0	底-2	黒色	橙色	キ	
195	D746	1次B地区	J-9-4	SB22(B4拡2) P219	弥生土器	壺	—	(2.9)	4.2	底-8	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
196	D515	1次B地区	K-10-1	SB22(B4拡2) P247	縄意器	坏蓋	16.0	(2.0)	—	2	灰色	灰色	f	B期
197	D571	1次B地区	J-9-2,K-9-3, L-9-1	SB22(B4拡2) P231,SD16,Q1	縄意器	坏蓋	13.9	2.2	鍵径3.0	4	青灰色	青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、B期
198	D585	1次B地区	J-9-4	SB22(B4拡2) P220	縄意器	坏蓋	14.6	(2.0)	—	3	明青灰色	明青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、B期
199	D554	1次B地区	J-9-4	SB22(B4拡2) P219	縄意器	坏蓋	—	(2.0)	—	—	青灰色	明青灰色	d	Ⅱa類重ね焼き、D期
200	D567	1次B地区	J-9-4	SB22(B4拡2) P220	縄意器	坏蓋	約14.5	(1.2)	—	3	青灰色	青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、B期
201	D561	1次B地区	J-10-1	SB22(B4拡2) P256	縄意器	坏蓋	15.4	(1.6)	—	2	青灰色	明青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、C期
202	D491	1次B地区	J-9-4	SB22(B4拡2) P220	縄意器	有台坏	—	(2.1)	6.7	—	灰色	灰色	e	A期
203	D415	1次B地区	J-9-3-4	SB22(B4拡2) P226	縄意器	無台坏	15.8	3.7	11.2	底-2	灰黄色	灰黄色	f	A期
204	D713	1次B地区	J-10-1	SB22(B4拡2) P226	土師器(ロクロ)	甕	—	(2.3)	9.0	—	にぶい橙色	にぶい黄橙色	粗砂多量含む	
205	D742	1次B地区	K-9-3	SB22(B4拡2) P221	土師器 (赤ロクロ)	小甕	13.5	(6.0)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片 多量含む	
206	D309	1次B地区	J-10-1	SB22(B4拡2) P218	土製品	フイゴ羽口	約9.5	(6.4)	—	3	浅黄橙色	浅黄橙色	礫、粗砂多量に含む	
207	D556	1次B地区	J-10-1	SB23(B5拡2) P225	縄意器	坏蓋	18.4	(2.5)	—	1	明青灰色	青灰色	d	Ⅰ類重ね焼き、C期
208	D680	1次B地区	J-10-4	SB25P290	土師器(ロクロ)	小甕	約14	(3.1)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂含む	
50-209	D199	1次B地区	K-9-3	SB22(B4拡2) P221(埋土)	土師器(ロクロ)	長甕	20.7	—	—	小片	にぶい橙色	浅黄橙色	礫、粗砂含む	
210	D199	1次B地区	K-9-3	SB22(B4拡2) P221(埋土)	土師器(ロクロ)	長甕	—	—	—	小片	にぶい橙色	浅黄橙色	礫、粗砂含む	
211	D602	1次A地区	L-4-4,L-5-1, L-6-4,M-4-1	SB1P19,SD1,Q1	縄意器	坏蓋	15.4	2.2	鍵径3.3	1	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き
212	D690	1次A地区	L-5	P31	土師器(ロクロ)	長甕	18.2	(7.0)	—	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂多く含む	
213	D700	1次A地区	L-6-1	P52	土師器(ロクロ)	小甕	14.6	(6.7)	—	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
214	D617	1次A地区	L-5-4	P61	縄意器	坏蓋	13.0	2.4	鍵径3.0	5	灰色	灰色	e	Ⅱb類重ね焼き、 ヘラ記号、C期
215	D387	1次A地区	K-6-2	P96	縄意器	有台坏	11.2	4.2	8.0	2	明青灰色	明青灰色	f	C期
216	D252	1次A地区	L-6-4	P120	縄意器	無台坏	—	(2.0)	9.6	—	青灰色	青灰色	e	遺跡付着物、C期
217	D206	1次A地区	L-6-3	P142-143,Q1	縄意器	無台坏	12.8	4.0	10.1	4	淡黄色	淡黄色	e	
218	D611	1次A地区	K-6-2-4, L-5-3,L-7-1	P154,SD36-c, Q1	縄意器	坏蓋	16.2	3.2	鍵径2.7	3	黄灰色	灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、A期
219	D601	1次A地区	L-6-3	P156	縄意器	坏蓋	13.0	(1.0)	—	4	灰色	灰色	d	横に転用、D期

第13表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表２

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
50-223	D609	1次A地区	K-6-4	P169	須恵器	坏蓋	14.0	2.8	最径3.0	5	やや不良	褐灰色	e	縄に転用、C期
221	D789	1次A地区	K-6-1・2-4	P185・186、SI	須恵器	有台坏	13.6	3.6	10.1	3	青灰色	青灰色	a	B期
222	D380	1次A地区	K-6	P213～216	須恵器	有台坏	11.9	3.9	7.8	2	青灰色	青灰色	e	C期
223	D666	1次B地区	L-8	P22	土師器	壺	13.8	(6.6)	—	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
224	D263	1次B地区	L-9-2	P57	須恵器	無台坏	—	—	9.6	—	灰白色	灰白色	e	C期
225	D553	1次B地区	L-9-2	P59	須恵器	坏蓋	14.9	(2.8)	—	3	灰黄色	淡黄色	a	『閉塞ね焼き』、縄に転用、B期
226	D442	1次B地区	L-9-2-3	P81(SD15上)	須恵器	有台坏	12.8	3.6	10.0	3	明青灰色	青灰色	e	B期
227	D459	1次B地区	K-8-2,L-8-4	P94、SI	須恵器	有台坏	—	(2.9)	8.8	—	灰色	灰色	f	B期
228	D410	1次B地区	K-8-4,K-10-2	P98、SD28-b	須恵器	無台坏	12.6	4.1	6.3	1	灰色	灰色	e	A期
229	D708	1次B地区	L-10-1	P103	土師器(赤ロクロ)	甕	17.0	(4.4)	—	2	にぶい黄橙色	橙、粗砂、海綿骨片多量含む		
230	D574	1次B地区	L-10-4	P117	須恵器	坏蓋	16.4	(2.3)	—	3	明青灰色	青灰色	e	A期
51-231	D529	1次B地区	K-10-2	P137、竪穴2	須恵器	坏蓋	10.6	(2.6)	—	10	灰色	灰白色	e	A期
232	D292	1次B地区	K-9-3	P139(竪穴2上)	須恵器	有台坏	—	(2.5)	—	—	灰白色	灰白色	f	C期
233	D680	1次B地区	L-6-3	P148	土師器(赤ロクロ)	小壺	約14	(3.7)	—	小片	灰褐色	淡橙色	微砂含む	
234	D325	1次B地区	K-9-3	P149	縄文土器	深鉢	—	(5.7)	—	—	浅黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
235	D632	1次B地区	K-10-2-4	P175、SI	土師器	壺	—	(4.4)	(6.4)	既-4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫少量、粗砂含む	
236	D495	1次B地区	K-10-1	P183	須恵器	有台坏	—	(2.5)	9.4	—	灰色	灰色	f	B期
237	D244	1次B地区	K-10-1	P183	須恵器	無台坏	13.2	3.6	10.7	既-6	明青灰色～明褐灰色		a	
238	D546	1次B地区	K-9-4,K-10-1	P183、SD28-b	須恵器	坏蓋	14.4	3.2	最径3.8	小片	にぶい褐色	灰黄褐色	c	縄に転用、B期
239	D444	1次B地区	L-10-3	P186	須恵器	有台坏	14.8	4.4	9.6	3	青灰色	青灰色	f	A期
240	D508	1次B地区	J-9-4	P200-SD16	須恵器	坏蓋	15.5	(1.3)	—	—	明青灰色	明青灰色	e	『閉塞ね焼き』、A期
241	D509	1次B地区	J-10-1	P207	須恵器	坏蓋	14.4	2.5	最径3.3	11	灰色	灰色	f	『閉塞ね焼き
242	D547	1次B地区	J-10-1・2	P227、SI	須恵器	坏蓋	11.4	(2.1)	—	4	灰色	灰色	b	A期
243	D426	1次B地区	J-10-2	P233	須恵器	無台坏	13.2	3.9	10.3	1	灰白色	灰白色	f	
244	D578	1次B地区	J-9-4	P237、SD40	須恵器	坏蓋	14.5	1.6	最径3.8	1	青灰色	青灰色	e	『閉塞ね焼き』、B期
245	D402	1次B地区	J-10-4	P243	須恵器	有台坏	9.2	(5.0)	約6.6	1	灰色	灰色	e	無蓋正位焼成、B～C期？
246	D749	1次B地区	K-9-3	P250	土師器(赤ロクロ)	小壺	—	(2.8)	—	既-7	淡黄色	にぶい黄色	礫、粗砂多量含む	
247	D707	1次B地区	J-10-4	P267	土師器	高坏	18.0	(3.6)	—	1	橙色	橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
248	D726	1次B地区	K-11-2	P170	土師器(赤ロクロ)	長甕	約24	(6.9)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、桃土塊含む	
249	D663	1次B地区	K-11-2	P172	赤彩系陶器	甕	—	(5.9)	—	—	褐灰色	褐灰色	微砂含む	櫛状痕
250	D774	1次B地区	K-10-1-4	P280、SI	土師器(赤ロクロ)	長甕	—	(20.3)	—	—	褐灰色	にぶい黄橙色	微砂、赤色粒、海綿骨片含む	
59-286	D303	1次B地区	K-10-1	竪穴2	製塩土器	尖底	約29	(2.1)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂多く含む	
287	D471	1次B地区	K-9-3	竪穴2	須恵器	有台坏	12.5	3.6	9.2	3	灰色	灰色	a	B期
288	D503	1次B地区	J-8	SE1掘り方	須恵器	坏蓋	12.7	(1.3)	—	1	明青灰色	明青灰色	c	『閉塞ね焼き』、縄に転用か、D期
289	D290	1次B地区	J-8	SE1掘り方	須恵器	有台坏	10.6	(3.4)	(7.5)	小片	灰色	灰色	e	B期
290	D753	1次B地区	J-8	SE1掘り方	土師器(ロクロ)	小壺	—	(9.3)	5.4	既-4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂少量含む	底部外面赤切り痕
291	D605	1次B地区	J-8	SE1掘り方	土師器(ロクロ)	小壺	17.9	(4.7)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	内面漆付着物
292	D287	1次B地区	J-8	SE1覆土1	須恵器	無台坏	12.7	3.3	8.4	6	灰色	灰色	d	D期
293	D433	1次B地区	J-8	SE1覆土No.19,20	須恵器	有台坏	—	(2.9)	—	—	褐灰色	褐灰色	e	C期
294	D674	1次B地区	J-8	SE1	土師器(ロクロ)	小壺	18.1	12.0	7.9	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	底部外面赤切り痕
295	D284	1次B地区	J-8	SE1覆土5	須恵器	無台坏	12.4	3.1	7.6	6	灰白色	灰白色	e	外面被熱痕、D期
296	D566	1次B地区	K-9-2	SK1(SD28外)	須恵器	坏蓋	13.8	(2.2)	—	2	青灰色	明青灰色	f	『閉塞ね焼き、B期
297	D469	1次B地区	K-9-2	SK1No.2	須恵器	有台坏	13.4	3.8	9.4	4	灰色	暗灰色	f	B期
298	D411	1次B地区	K-9-2	SK1	須恵器	無台坏	12.4	3.0	10.4	3	灰色	灰色	f	C期
299	D629	1次B地区	K-9-2	SK1-4、SD28-29	土師器(ロクロ)	小壺	18.2	約18	5.0	4	褐灰色	浅黄色	礫、粗砂含む	
300	D579	1次B地区	K-10-3	SK3-4	須恵器	坏蓋	—	(2.6)	最径3.0	—	青灰色	暗青灰色	c	ヘラ記号「／」、C期
301	D586	1次B地区	L-10-2	SK3	須恵器	坏蓋	14.6	(1.7)	—	5	灰色	青灰色	e	『閉塞ね焼き、C期
302	D265	1次B地区	L-10-2	SK5	須恵器	無台坏	12.5	3.5	9.0	3	灰色	灰色	f	C期
303	D432	1次B地区	L-10-2	SK5	須恵器	無台坏	12.2	3.3	8.8	1	灰色	灰色	f	C期
304	D425	1次B地区	K-11-2	SK6	須恵器	無台坏	12.4	3.6	8.8	1	灰黄色	灰黄色	d	C期
305	D652	1次B地区	L-11-1	SK8	土師器(ロクロ)	小壺	12.4	(4.7)	—	1	浅黄橙色	黄灰色	礫、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
306	D364	1次B地区	L-10-3,L-11-1	SK8	須恵器	長頸瓶	—	(12.1)	—	—	灰色	灰色	e	
307	D641	1次B地区	K-10-3	SK7	土師器(赤ロクロ)	小壺	21.5	(6.4)	—	3	浅黄橙色	浅黄橙色	粗砂、赤色粒含む	
60-308	D198	1次B地区	L-9-2,K-9-2	SK1No.1,6,SK4	土師器(ロクロ)	長甕	22.6	36.7	—	—	橙色	橙色	微砂多く含む	内面付着物
72-323	D544	1次B地区	L-6-3・4	SD1、SI	須恵器	坏蓋	14.5	(2.4)	—	3	黒灰色	灰色	e	『閉塞ね焼き、ヘラ記号、C期
324	D596	1次A地区	K-5-2	SD1	須恵器	坏蓋	12.2	(1.9)	—	2	灰黄色	黄灰色	d	縄に転用、C期
325	特02	1次A地区	L-5-4	SD1	須恵器	坏蓋	12.4	(1.9)	—	3	灰黄色	黄灰色	e	墨書「×」、縄に転用
326	D628	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	坏蓋	12.2	2.1	最径1.8	6	灰色	灰色	e	『閉塞ね焼き、C期
327	特17	1次A地区	L-5-4	SD1、SI	須恵器	坏蓋	12.8	(2.0)	—	3	青灰色	青灰色	e	墨書「起ヵ」、C期
328	特01	1次A地区	L-6-2	SD1	須恵器	坏蓋	—	(1.7)	—	—	灰色	灰色	b	墨書「知」
329	D384	1次A地区	L-5-4	SD1	須恵器	坏蓋	12.6	2.8	最径2.3	6	青灰色	灰色	e	ヘラ記号「×」、縄に転用
330	D600	1次A地区	L-6-1・3	SD1、SI	須恵器	坏蓋	12.4	3.0	最径3.0	1	灰色	灰色	c	『閉塞ね焼き、C期

第14表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表３

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
72-331	D613	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	坏蓋	11.8	2.3	最径2.3	6	褐灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、 器面「工」、C期
332	特2	1次A地区	L-5-4	SD1	須恵器	坏蓋	13.2	(2.2)	—	3	灰黄色	灰色	f	Ⅱ b 類重ね焼き、 器面「上」、C期
333	D603	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	坏蓋	14.3	2.6	最径2.8	2	灰黄色	黄灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、C期
334	特20	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	坏蓋	—	(2.3)	最径2.3	—	青灰色	灰色	e	器面「工」、D期
335	D618	1次A地区	L-6-2-4	SD1, SD4	須恵器	坏蓋	11.8	2.8	最径2.1	6	灰色	灰色	f	C期
336	D623	1次A地区	L-5-1	SD1	須恵器	坏蓋	12.3	2.9	最径2.4	10	にぶい褐色	にぶい褐灰色	d	D期
337	D621	1次A地区	L-5-1	SD1	須恵器	坏蓋	12.4	4.2	最径2.0	1	灰色	灰褐、 にぶい黄色	e	焼き歪み、 Ⅰ類重ね焼き、C期
338	D436	1次A地区	L-5-1, K-4-5, L-6-2-4	SD1, 包	須恵器	有台坏	15.5	6.0	(11.4)	4	青灰色	青灰色	e	C期
339	D394	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	有台坏	13.4	3.6	8.8	1	浅黄色	浅黄色	f	ヘラ記号「ノ」、B期
340	D385	1次A地区	K-5-4, L-5-1-4	SD1, 包	須恵器	有台坏	11.5	4.3	7.7	4	青灰色	明青灰色	e	横に転用
341	D393	1次A地区	L-5-4	SD1	須恵器	有台坏	—	(2.7)	7.4	底-7	青灰色	青灰色	e	C期
342	D248	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	無台坏	12.2	3.3	8.9	4	明青灰色	明青灰色	e	
73-343	特12	1次A地区	K-5-2, L-6-3, L-5-1	SD1, 包	須恵器	無台坏	11.8	3.5	8.8	5	灰色	にぶい黄橙色	e	ヘラ記号「=」、 器面「小足」、C期
344	特3	1次A地区	L-5-2	SD1	須恵器	無台坏	12.0	3.2	8.5	2	灰色	灰色	e	器面「田地一」、C期
345	D255	1次A地区	L-5-4	SD1	須恵器	無台坏	10.8	3.2	7.9	5	青灰色	青灰色	e	C期
346	D245	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	無台坏	11.3	2.7	8.0	3	灰色	灰色	f	
347	D236	1次A地区	L-6-4	SD1	外赤内黒土師器	無台坏	13.2	(3.9)	—	2	黒色	にぶい赤褐色	粗砂・海綿骨片含む	
348	D242	1次A地区	L-6-4	SD1	赤彩土師器	高坏	19.1	(2.5)	—	1	にぶい赤褐色	明赤褐色	オ	
349	D08-1	1次A地区	L-6-4	SD1, 包	土師器	土管状土製品	(11.6)	(7.3)	—	3	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微砂含む	
350	D761	1次A地区	L-6-2-4	SD1, 包	土師器	土管状土製品	—	(7.3)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微砂含む	カキメ調整
351	D372	1次A地区	L-6-2-4, L-7-1-2, K-5-4	SD1, 包	須恵器	甕	16.3	(7.9)	—	4	オリーブ灰色	灰色	e	
352	D679	1次A地区	L-5-1, L-15-1	SD1, 包	土師器	甕	—	厚3.1.2	—	—	浅黄色	浅黄橙色	礫、粗砂多量含む	タール状付着物
353	D371	1次A地区	L-6-4	SD1	須恵器	甕	24.8	(7.7)	—	2	灰色	青灰色	f	
354	D718	1次A地区	L-6-4	SD1	土師器(ロクロ)	小甕	14.8	(6.6)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、微砂含む	
355	D695	1次A地区	L-6-1	SD1	土師器(ロクロ)	小甕	—	(4.2)	7.2	底-6	にぶい黄色	にぶい黄色	微砂、粗砂含む	
356	D374	1次A地区	K-5	SD1	須恵器	甕	36.6	(3.4)	—	2	灰色	灰色	f	4本1単位の波状文
74-357	D69-1	1次A地区	L-5-1	SD1	土師器(ロクロ)	小甕	12.4	(4.1)	—	2	黒褐色	黒褐色	微砂含む	
358	D689-2	1次A地区	L-5-1	SD1	土師器(ロクロ)	小甕	12.4	(4.1)	—	2	黒褐色	黒褐色	微砂含む	
359	D694	1次A地区	K-5-4	SD1	土師器(ロクロ)	長甕	19.2	(7.1)	—	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂少量含む	
360	D697	1次A地区	L-6-1	SD1	土師器(ロクロ)	長甕	30.9	(7.3)	—	4	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂含む	
361	D299	1次A地区	L-5-1	SD1	土師器	小型甕	7.6	(2.5)	—	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
362	石85	1次A地区	L-6-1	SD1	石製品	砥石	長さ(4.5)	幅3.4	厚3.5			乳灰色	シルト岩	残重量70.7g、4面使用
363	特16	1次A地区	K-5-2	SD3	須恵器	坏蓋	12.6	2.8	最径2.6	12	黄灰色	黄灰色	h	Ⅰ類重ね焼き、 器面「内蔵」、D期
364	D375	1次A地区	L-5-7	SD2, 包	須恵器	鉢	34.6	19.5	—	2	青灰色	青灰色	f	内面擦縁調整
365	D622	1次A地区	L-6-1	SD4(P302上)	須恵器	坏蓋	12.0	2.6	最径2.5	2	灰色	灰色	e	Ⅱ a 類重ね焼き、C期
366	D695	1次A地区	L-6-2	SD4, SD37	須恵器	坏蓋	12.3	2.6	最径2.2	7	灰色	灰色	c	Ⅰ類重ね焼き、 横に転用、C期
367	特76	1次A地区	L-4-2	SD5	須恵器	坏蓋	12.2	(1.8)	—	1	灰色	灰色	a	横に転用
368	D616	1次A地区	K-5-3	SD4	須恵器	坏蓋	13.2	(1.8)	—	1	灰色	黄灰色	e	C期
369	D398	1次A地区	K-5-3	SD4	須恵器	坏蓋	12.2	(2.0)	—	小片	灰色	灰色	e	Ⅱ b 類重ね焼き、D期
370	特15	1次A地区	M-4-3	SD4	須恵器	有台坏	—	(3.0)	9.4	底-2	青灰色	青灰色	a	器面「万5」、B期
371	D602	1次A地区	L-5-3	SD4	土師器(ロクロ)	甕	19.6	(9.7)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
372	D681	1次A地区	L-4-2-4	SD5, 包	土師器(ロクロ)	小甕	—	(13.1)	7.8	底-4	灰黄褐色	暗褐色	微砂含む	
373	特90	1次A地区	L-6-1	SD4	須恵器	有台坏	11.3	4.1	6.3	4	褐灰色	青灰色	f	器面、文字不明、C期
65-374	金版9	1次A地区	L-5	SD1	金属製品	銅鈴	径2.40							重量1.7g、側面開孔
375	金版97	1次A地区	L-5-4	SD1	金属製品	丸棒	長さ3.4	幅2.1	厚0.1					重量4.6g、 黒色磨石使、側面
75-376	D520	1次B地区	L-9-3-4	SD15, 包	須恵器	坏蓋	17.3	2.8	最径2.6	3	灰色	灰色	f	成形時に補修、C期
377	D540	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	坏蓋	13.8	2.8	最径2.7	3	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、C期
378	D510	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	坏蓋	14.2	2.9	最径2.9	8	灰色	緑灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、B期
379	D508	1次B地区	L-9-2	SD15 No6	須恵器	坏蓋	14.9	2.4	最径3.7	11	灰色	灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、 ヘラ記号「ノ」
380	D533	1次B地区	L-9-3	SD15 No3	須恵器	坏蓋	13.6	2.3	最径3.3	6	灰色	緑灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、B期？
381	D522	1次B地区	L-9-2	SD15	須恵器	坏蓋	13.4	2.7	最径3.0	3	灰色	灰色	f	C期
382	D512	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	坏蓋	13.0	2.5	最径3.2	1	黄灰色	黄灰色	f	生焼け、C期
383	D537	1次B地区	L-9-1	SD15	須恵器	坏蓋	12.6	1.3	—	1	青灰色	青灰色	e	D期
384	D479	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	有台坏	14.2	3.9	10.0	2	灰白色	灰白色	e	B期
385	D446	1次B地区	L-9, L-9-3	SD15, 排水溝	須恵器	有台坏	13.8	4.2	9.2	1	青灰色	青灰色	f	B期
386	D468	1次B地区	L-9-4	SD15	須恵器	有台坏	14.3	4.9	9.5	1	灰色	灰色	f	ヘラ記号「ノ」
387	D438	1次B地区	L-9-2	SD15	須恵器	有台坏	12.4	4.1	7.8	4	暗青灰色	暗青灰色	f	ヘラ記号「ノ」か
388	D485	1次B地区	L-9-1-3	SD15, 包	須恵器	有台坏	11.8	4.1	8.0	小片	灰白色	灰白色	f	ヘラ記号「ノ」、B期
389	D472	1次B地区	L-9-2-4	SD15, 包	須恵器	有台坏	10.9	4.2	7.0	4	灰色	灰色	f	C期
390	D271	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	無台坏	13.8	3.1	9.8	2	灰色	灰色	j	B期
391	D431	1次B地区	L-9-3-4	SD15, 包	須恵器	無台坏	13.6	3.8	9.6	2	灰色	灰色	k	B期
392	D262	1次B地区	L-9-2	SD15	須恵器	無台坏	12.4	3.6	7.6	1	灰白色	灰白色	e	摩耗調整、C期
393	D266	1次B地区	L-9-3	SD15	須恵器	無台坏	11.1	3.1	8.4	8	灰色	灰色	c（粘質感強い）	
394	D654	1次B地区	L-9-3-4	SD15, 包	赤彩土師器	無台椀	—	(2.2)	7.2	底-6	浅黄橙色	浅黄橙色	カ	
395	D703	1次B地区	L-9-3	SD15	赤彩土師器	高坏	—	(3.7)	7.4	7	にぶい黄橙色	にぶい橙色	ウ	

第15表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表４

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
75-396	D365	1次B地区	L-9-2	SD15	須恵器	短頸壺	9.0	(6.3)	－	－	灰白色	灰白色	c	二次被熱痕
397	D669	1次B地区	L-9	SD15	土師器(ロクロ)	小甕	約16	(7.6)	－	小片	灰黄褐色	にぶい黄橙色	微砂含む	
398	D316	1次B地区	L-9-3	SD15	土製品	ツイズ部品?	－	(3.4)	－	－	にぶい赤褐色	にぶい黄橙色	微砂含む	外面白然釉溶着
399	D704	1次B地区	L-9-3	SD15	土師器(非ロクロ)	長甕	－	(3.3)	8.0	－	にぶい橙色	にぶい橙色	礫、焼土塊、海綿骨片含む	
400	D646	1次B地区	L-9-3	SD15	土師器(ロクロ)	長甕	22.4	(6.6)	－	3	浅黄橙色	浅黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
76-401	D706	1次B地区	L-9-3	SD15	土師器(ロクロ)	甕	22.2	(19.7)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
402	D714	1次B地区	L-9-1	SD15 No4	土師器(ロクロ)	鉢	37.0	(15.6)	－	3	浅黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
403	D324	1次B地区	L-9-2	SD15 No2	須恵器	横瓶	－	－	－	－	灰色	灰色	e	胴位焼成
404	D205	1次B地区	L-9-8-9	SD15 No5,16,包	須恵器	甕	19.5	49.8	6.5	7	灰色	灰色	e	頸部溶着痕
77-405	D545	1次B地区	J-9-2,L-8,L-7-3	SD16,包	須恵器	坏蓋	11.5	(1.3)	－	6	灰白色	オリーブ灰色	k	A期
406	D552	1次B地区	J-9-2	SD16,包,内型排水溝	須恵器	坏蓋	12.3	(1.7)	－	9	褐灰色	灰色	f	Ⅰ類底ね焼き、A期
407	D576	1次B地区	K-9-1	SD16敷石下	須恵器	坏蓋	12.6	(1.6)	－	1	青灰色	明青灰色	e	A期
408	D407	1次B地区	K-9	SD16下層	須恵器	無台坏	10.8	3.5	7.0	1	灰色	灰色	k	
409	D285	1次B地区	J-9-4	SD16(P233下)	須恵器	無台坏	11.9	4.2	6.6	6	灰色	灰色	b	B期
410	D461	1次B地区	L-8-2	SD16	須恵器	有台坏	13.0	4.0	8.9	5	灰色	灰色	f	B期
411	D397	1次B地区	J-9-4	SD16(P233下)	須恵器	無台鉢	15.6	(6.7)	－	3	灰色	灰色	e	無蓋、A期
412	D350	1次B地区	K-8-4	SD16	須恵器	高坏	－	(5.1)	9.5	底-6	灰色	灰色	e	側位焼成
413	D744	1次B地区	J-9-4	SD16	製塩土器	尖底	－	(3.9)	－	小片	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂・海綿骨片多量含む	
414	D671	1次B地区	J-9-2	SD16	土師器(非ロクロ)	小甕	13.3	(3.7)	－	2	にぶい黄橙色	灰黄褐色	微砂含む	外面粘土付着
415	D202	1次B地区	L-8-2	SD16	土師器(ロクロ)	小甕	13.2	12.2	－	3	浅黄橙色	浅黄橙色	礫多量、粗砂多量含む	
416	D656	1次B地区	J-9-2,L-8-4	SD16,包	土師器(非ロクロ)	長甕	30.3	(11.2)	－	6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多量含む	
417	D636	1次B地区	J-9-1	SD16	土師器	長甕	20.4	(6.2)	－	2	浅黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多量含む	
418	D633	1次B地区	J-10-1-2	SD16	土師器(非ロクロ)	長甕	22.2	(15.2)	－	4	にぶい黄橙色	浅黄色	礫、粗砂、焼土塊含む	
419	D739	1次B地区	L-8-2	SD16	土師器(ロクロ)	鍋	31.4	(11.3)	－	小片	にぶい黄橙色	浅黄橙色	礫、粗砂多量含む	外面厚い煤付着
420	E74	1次B地区	M-6	SD19	金属	鉄滓	長軸6.8	短軸5.7	最大厚2.7			浅黄橙色		重量70.7ｇ、未炭多量付着、楕円滓
421	D595	1次B地区	L-6-4,M-6,M-7-3	SD20,排水溝,包	須恵器	坏蓋	14.2	(1.9)	－	12	灰色	灰色	f	焼き歪み、B期
422	D580	1次B地区	M-6	SD20 セクション	須恵器	坏蓋	11.3	2.9	鋸径2.5	3	明青灰色	明青灰色	h	Ⅱ a類底ね焼き、脚唇あり、C期
78-423	D464	1次A地区	K-6-4,M-6,L-6-3	SD20,包	須恵器	有台坏	13.0	3.9	9.8	2	褐灰色	褐灰色	e	
424	D400	1次B地区	M-6	SD20 セクション	須恵器	無台坏	11.2	2.8	7.6	4	灰色	灰色	e	C期
425	D661	1次B地区	M-6	SD20	土師器(ロクロ)	長甕	17.4	(3.5)	－	小片	黒褐色	灰黄褐色	微砂含む	
426	D670	1次B地区	M-6	SD20	土師器(ロクロ)	長甕	19.2	(4.1)	－	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
427	D682	1次B地区	M-6	SD20	土師器(ロクロ)	長甕	21.2	(4.2)	－	小片	灰黄褐色	にぶい黄褐色	微砂少量含む	
428	D725	1次B地区	L-6-4,M-6-4	SD20～22,包	土師器(ロクロ)	長甕	22.8	(11.3)	－	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、赤色粒含む	
429	D664	1次B地区	M-6	SD20	土師器(ロクロ)	鍋	36.8	(6.1)	－	小片	灰黄褐色	灰黄褐色	微砂含む	口縁部内外面ヨコナデ付着
430	D194	1次B地区	L-6-4,M-6-4	SD20～22,24,包	土師器(ロクロ)	鉢	31.8	14.3	16.9	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多量含む	外面ヘラ記号「×」
431	D361	1次A地区	L-6-3-4,M-7-3	SD20,包	須恵器	瓶	－	(15.7)	9.4	底-6	青灰色	青灰色	e	無蓋
79-432	D203	1次B地区	L-6-3	SD21	須恵器	甕	25.7	－	－	4	灰色	灰色	e	
433	D207	1次B地区	M-6-7	SD20-21,包	須恵器	横瓶	13.5	27.5	幅41.8	9	青灰色	灰色	e	無調整位焼成、両面閉塞
80-434	D500	1次B地区	M-7	SD21	須恵器	坏蓋	14.8	2.3	鋸径3.4	4	赤灰色	灰オリーブ色	f	Ⅰ類底ね焼き、B期
435	D581	1次B地区	N-7-1	SD21	須恵器	坏蓋	14.1	2.8	－	2	明青灰色	明青灰色	e	ヘラ記号、胴に転用、B期
436	D487	1次B地区	L-7-2	SD22	須恵器	有台坏	10.3	3.9	7.3	3	灰色	青灰色	f	C期
437	D488	1次B地区	L-6-4,L-7-2	SD22,包	須恵器	有台坏	10.8	4.2	7.5	4	灰色	灰色	a	C期
438	D514	1次B地区	K-7-3-4,K-8-2	SD23,包	須恵器	坏蓋	15.2	2.9	鋸径3.4	4	灰色	灰色	e	Ⅰ類底ね焼き、胴に転用、B期
439	D587	1次B地区	J-7-4,K-8-1-2	SD23	須恵器	坏蓋	15.9	(1.6)	－	3	青灰色	青灰色	f	Ⅰ類底ね焼き、C期
440	D259	1次B地区	L-7-4	SD23	須恵器	坏蓋	14.3	2.3	－	1	灰色	灰色	f	胴に転用、B・C期
451	D589	1次B地区	M-7-3	SD23	須恵器	坏蓋	15.2	2.6	鋸径2.6	3	褐灰色	灰色	a	Ⅰ類底ね焼き、胴に転用、C期
452	D445	1次B地区	L-8-4	SD23	須恵器	有台坏	13.3	3.2	8.7	2	浅黄色	浅黄色	f	B期
453	D277	1次B地区	M-7-3	SD23	須恵器	無台坏	12.7	3.9	8.0	12	灰色	オリーブ黒色	f	ヘラ記号「/」、二次被熱痕、C期
454	D71	1次B地区	K-8-1	SD23	外面内黒土師器	無台椀	15.1	4.4	9.1	12	黒色	オリーブ黒色	海綿骨片含む	
455	D437	1次B地区	J-9-2,K-8-1,L-8,L-9-2	SD23-23,包	須恵器	有台坏	19.2	9.9	11.4	小片	青灰色	青灰色	e	A期？
831	D643	1次B地区	L-8-4	SD23	土師器(ロクロ)	長甕	約23	(6.7)	－	1	にぶい黄橙色	にぶい褐色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
832	D348	1次B地区	L-7,L-10-1	SD23 西第石,包	須恵器	甕	35.2	(7.4)	－	3	灰黄色	灰黄色	e	口縁端部ナケ連続
456	E179	1次B地区	J-8-8,L-7-8,M-6-7,	SD23 金属	鉄滓	長軸6.1	短軸10.2	厚2.6				灰黄色		重量103.5ｇ、粘土付着

第16表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表５

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
80-457	E70	1次B地区	M-7-1-3	SD23	金属	鉄浮	長軸5.9	短軸0.7	最大厚3.2		灰黄色	灰黄色		重量122.5ｇ。本況不足付着
81-458	D269	1次B地区	L-7-2	SD24, 31	須恵器	無台坏	12.0	4.0	8.4	2	灰白色	灰白色	e	ヘラ記号「ノ」
459	D289	1次B地区	L-7-2	SD24, 31	須恵器	壺蓋	11.7	(4.0)	—	1	灰黄色	灰白色	e	蓋に転用、炭焼成、C期
460	D518	1次B地区	K-9-2,L-9-1	SD28, 31	須恵器	坏蓋	14.2	(1.2)	—	1	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、C期
461	D699	1次B地区	L-6-4	SD24	土師器	甕	—	—	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	雲、粗砂多量含む	二次被熱
462	D327	1次B地区	L-7-2	SD24, 31	須恵器	長頸瓶	—	(5.6)	11.6	横-3	灰色	オリーブ灰色	e	骨粉仕損
463	D612	1次A地区	L-7-1,M-6-3	SD26, 31	須恵器	坏蓋	15.6	(1.7)	—	1	黄灰色	灰色	e	C期
81-464	D307	1次B地区	L-8-3	SD27	製塩土器	尖底	—	(2.5)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂多含む	
465	D484	1次B地区	L-8,L-8-3,4	SD28, 31	須恵器	有台坏	13.8	3.9	9.2	1	青灰色	青灰色	f	ヘラ記号「三」、B期
466	D447	1次B地区	K-9-2	SD28	須恵器	有台坏	14.1	3.6	9.8	2	明青灰色	青灰色	e	ヘラ記号「X」、B期
467	D448	1次B地区	K-9-2	SD28	須恵器	有台坏	13.4	3.6	9.5	1	灰白色	青灰色	e	B期
468	D467	1次B地区	K-9-2	SD28	須恵器	有台坏	13	4.0	8.9	1	褐灰色	灰色	f	B期
469	D457	1次B地区	K-8-3,4,K-9-2	SD28, 31	須恵器	有台坏	13.0	4.0	9.1	3	灰褐色	にぶい赤褐色	e	B期
470	D474	1次B地区	K-9-2,4,L-8-2	SD28, 31	須恵器	有台坏	11.7	3.5	8.5	3	黒色	暗灰色	f	B期
471	D483	1次B地区	K-9-2	SD28	須恵器	有台坏	—	(2.6)	8.2	—	灰色	灰色	f	
472	D419	1次B地区	L-8-3-4	SD28	須恵器	無台坏	13.6	3.5	9.6	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	c	C期
473	D233	1次B地区	K-9-2	SD28	赤彩土師器	無台椀	13.8	(3.5)	—	2	橙色	橙色	ヤ	
474	D219	1次B地区	L-10-3	SD28	外赤内黒土師器	高坏	—	(6.0)	11.2	横-2	黒色	明赤褐色	海綿骨片含む	
475	D629	1次B地区	K-9-2-4,L-9-1	SD28, 31	土師器(ロクロ)	短頸壺	10.3	約18	—	1	灰白色	にぶい黄橙色	微砂多く含む	摩耗調査
82-476	D208	1次B地区	K-8-9	SD28, 31	須恵器	甕	27.2	25.4	17.6	2	灰色	灰色	e	調査を使用痕なし
477	D321	1次B地区	K-9-2	SD28	縄文土器	深鉢	—	(1.4)	11.8	横-3	にぶい黄橙色	にぶい橙色	微砂含む	
478	D422	1次B地区	M-8-3	SD28	土師器(ロクロ)	小甕	—	(2.9)	7.5	6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色		胎土赤切りか？
479	D638	1次B地区	K-9-2	SD28	土師器(非ロクロ)	甕	21.6	(6.7)	—	2	褐灰色	浅黄橙色	雲、粗砂含む	
480	E75	1次B地区	K-9-2	SD28	金属	鉄浮	長軸9.0	短軸0.7	最大厚3.4			浅黄橙色		重量148.5ｇ。胎土付着、鞴形浮
481	D525	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	坏蓋	14.6	3.8	縁径3.0	3	灰色	灰色	f	Ⅱ a類重ね焼き、B期
482	D519	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	坏蓋	16.3	2.6	縁径3.1	1	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、ヘラ記号「=」
483	D569	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	坏蓋	11.9	2.7	縁径3.1	1	青灰色	青灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、C期
484	D565	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	坏蓋	(16.4)	2.35	—	1	青灰色	青灰色	c	Ⅰ類重ね焼き、A期
485	D478	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	有台坏	14.4	4.3	9.5	2	灰色	灰色	e	B期
486	D504	1次B地区	L-10-1	SD28-b	須恵器	有台坏	14.1	4.6	8.6	1	灰色	灰色	c	A期
487	D480	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	有台坏	13.6	4.3	8.3	1	灰色	灰色	a	ヘラ記号、C期
488	D505	1次B地区	L-10-1	SD28-b	須恵器	有台坏	—	(3.2)	8.0	—	灰色	青灰色	f	ヘラ記号「X」か、C期
83-489	D458	1次B地区	K-8-3,L-10-1	SD28-b, 整地土, 包	須恵器	有台坏	12.8	4.4	8.9	1	灰色	灰色	c	ヘラ記号、B期
490	D399	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	無台坏	10.8	3.6	7.0	2	灰色	灰色	c	
491	D331	1次B地区	L-10-1-3	SD28-b, SD46, 包	赤彩土師器	無台椀	—	(1.4)	10.6	横-8	にぶい橙色	にぶい橙色	オ	
492	D224	1次B地区	L-10-1	SD28-b	外赤内黒土師器	無台椀	15.9	4.0	—	2	黒色	橙色	海綿骨片含む	
493	D356	1次B地区	K-10-2	SD28-b	須恵器	短頸壺	16.2	(6)	—	1	灰色	灰色	e	
494	D751	1次B地区	K-9-4	SD28-b	土師器	壺	18.4	(2.6)	—	1	浅黄色	浅黄色	雲、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
495	D743	1次B地区	K-9-4	SD28-b	弥生土器	甕	(14.0)	(4.2)	—	3	浅黄色	にぶい黄橙色	雲、粗砂、海綿骨片、桃土塊含む	
496	D745	1次B地区	K-9-4	SD28-b	土師器(非ロクロ)	甕	20.2	(6.3)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、海綿骨片含む	
497	D750	1次B地区	K-9-4	SD28-b	土師器(非ロクロ)	甕	20.7	(8.1)	—	1	浅黄色	にぶい黄橙色	雲、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
498	D723	1次B地区	L-10-1	SD28-b	土師器(ロクロ)	長甕	19.2	(5.1)	—	小片	にぶい橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	
499	D343	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	甕	約30	(2.5)	—	小片	灰色	灰色	g	波状文
500	D353	1次B地区	K-9-4	SD28-b	須恵器	横瓶	12.0	20.2	縁33.6	1	灰色	灰色	c	縄掛問題か
84-501	D564	1次B地区	K-7-4,K-8-2	SD32	須恵器	坏蓋	14.8	(2.2)	—	1	暗青灰色	暗青灰色	f	B期
502	D251	1次A地区	L-5-3	SD33	須恵器	無台坏	—	(2.7)	9.2	横-9	青灰色	青灰色	f	C期
503	特25	1次A地区	K-5	SD34・35	須恵器	有台坏	12.6	3.8	8.0	小片	灰黄褐色	灰黄褐色	f	墨書「下家」、B期
504	D599	1次A地区	K-6-2	SD36	須恵器	杯蓋	12.9	(1.7)	—	1	灰色	灰色	e	内面被熱痕、C期
505	特47	1次A地区	K-7-1,K-8-1	SD36, 38	須恵器	無台坏	12.6	3.6	10.0	2	灰色	灰色	a	墨書「乙上」、C期
506	D238	1次A地区	K-6-4	SD36	内黒土師器	無台椀	14.1	4.5	6.6	1	黒色	にぶい橙色	ヤ	
507	D685	1次A地区	L-6-2	SD36-a	土師器(ロクロ)	長甕	22.5	(6.4)	—	2	橙色	浅黄橙色	微砂、海綿骨片、焼土塊含む	
508	D705	1次B地区	K-9-2,L-9-1	SD39, 包	土師質土器	鍋蓋？	鍋径31.7	(2.7)	—	—	灰褐色	にぶい橙色	雲、粗砂、海綿骨片多量含む	径0.5～0.7cmの円孔
509	D396	1次A地区	L-6	SD37	須恵器	有台坏	—	(1.4)	9.1	横-12	浅黄色	浅黄色	f	外面被熱痕、B期
510	D282	1次B地区	K-7-3	SD38	須恵器	有台坏	14.8	—	—	2	灰色	灰色	e	A期？
511	特43	1次B地区	J-8-3	SD40	須恵器	有台坏	13.7	3.8	8.8	3	灰色	灰色	e	墨書「乙上」、B期
512	D489	1次B地区	K-8-3-4	SD40	須恵器	有台坏	—	(2.3)	10.3	—	灰白色	灰白色	m	
513	D412	1次B地区	J-8	SD40	須恵器	無台坏	13.0	3.9	10.4	1	灰黄色	灰黄色	a	B期
514	D517	1次B地区	L-9-1	SD41	須恵器	坏蓋	14.2	2.4	縁径3.2	2	灰色	灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、ヘラ記号「ノ」、B期
515	D288	1次B地区	L-9-1	SD41	須恵器	無台坏	13.4	4.1	9.5	4	灰色	灰色	c	
516	D272	1次B地区	L-9-1	SD41	須恵器	無台坏	11.5	3.8	8.0	3	灰色	灰色	e	C期
517	D305	1次B地区	L-9-1	SD41	製塩土器	尖底	—	(5)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂多く含む	
518	D721	1次B地区	L-9-1	SD41	土師器(ロクロ)	長甕	23.0	(6.2)	—	1	浅黄橙色	橙色	微砂、海綿骨片含む	
85-519	D570	1次B地区	L-9-1	SD42	須恵器	坏蓋	11.9	2.6	縁径2.2	2	明青灰色	明青灰色	e	ヘラ記号「X」、砥に転用、D期
520	D261	1次B地区	L-9-2	SD42	須恵器	無台坏	11.5	2.6	7.8	2	灰色	灰色	e	B・C期

第17表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表６

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
85-521	D201	1次B地区	L-9-1-2	SD42,包	内黒土師器	無台椀	15.9	5.2	9.0	1	黒色	にぶい赤褐色	海綿骨片含む	B期
522	D650	1次B地区	L-9-2	SD42	土師器(ロクロ)	長甕	34.6	(7.7)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂少量含む	
523	D298	1次B地区	L-9-2	SD42	土製品	土鐘	長さ6.6	径3.4	—	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細少量、粗砂含む	残重量72.4 g
524	D326	1次B地区	L-9-4,L-10-1	SD45-a,包	須恵器	長頸瓶	—	(12.3)	—	—	暗青灰色	暗青灰色		f
525	D429	1次B地区	K-10-3	SD47	須恵器	無台坏	—	(1.9)	9.4	—	灰黄色	灰黄色		d　B期
526	D715	1次B地区	K-10-4,L-10-1-3	SD46,包	土師器(赤ロクロ)	小甕	15.8	—	8.6	小片	にぶい黄橙色	灰黄色	粗砂、礫多く含む	
527	D715	1次B地区	K-10-4,L-10-1-3	SD46,包	土師器(赤ロクロ)	小甕	—	—	8.6	小片	にぶい黄橙色	灰黄色	粗砂、礫多く含む	
528	D712	1次B地区	L-10-2	SD46	土師器(ロクロ)	小甕	—	(2.7)	6.0	4	にぶい黄橙色	海綿骨片、粗砂含む	底部外面赤切り痕	
529	D268	1次A地区	L-6-3,L-7-1	SD54,包	須恵器	無台坏	13.6	3.9	9.6	4	灰色	灰色	細	e　B期
530	石77	1次A地区	L-6-3,L-7-1	SD54	石製品	砥石	長さ3.6	幅4.0	厚2.5		乳灰色	砥石		重量5.7 g
531	D360	1次A地区	L-6-4	SD54-55	須恵器	有台坏	13.1	4.0	7.8	3	青灰色	青灰色		f　細部の痕、B期
532	D195	1次A地区	L-6-7	SD54-55	須恵器	無台坏	13.3	4.2	9.7	12	にぶい黄橙色	淡黄色		e　表面容器に転用
533	D250	1次A地区	L-6-4	SD54-55	須恵器	無台坏	11.2	3.2	8.4	2	青灰色	青灰色		e
534	D230	1次A地区	L-6-2-4	SD54-55,包	外面内黒土師器	無台椀	—	(3.3)	6.8	都-9	黒色	淡赤褐色		e
535	D701	1次A地区	L-6-4	SD54-55	土師器(ロクロ)	小甕	—	(5.0)	8.5	都-12	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂含む	砂止糸切り痕
536	D630	1次A地区	L-7-1	SD55	須恵器	坏蓋	14.7	2.4	縁径3.3	1	灰色	灰色		e　I 類重ね焼き、B期
537	D317	1次A地区	L-6-3,L-7-1	SD55	土師質	フイゴ部口	—	(5.6)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
538	D430	1次B地区	K-11-4	SD5南側張り込み	須恵器	無台坏	9.2	2.6	5.4	6	灰色	灰色		c　A期
90-571	D605	1次A地区	L-5-4	包	土師器	甕	—	(2.9)	4.7	都-12	灰黄褐色	浅黄橙色	微砂、海綿骨片含む	他成品穿孔
572	D898	1次A地区	K-6-4	包	土師器	高坏	—	(6.4)	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	微砂、海綿骨片多く含む	脚底あり
573	D585	1次B地区	L-10-1	包含層(P115脇)	須恵器	坏蓋	16.1	(2.5)	縁径3.0	2	灰色	灰色		b　I 類重ね焼き、A期
574	D759	1次A地区	L-5-2-3	包	須恵器	坏蓋	16.3	2.8	縁径3.4	1	灰色	灰オリーブ色		e　I 類重ね焼き、 細に転用、B期
575	D610	1次A地区	K-6-1,L-6	包,南壁排水溝	須恵器	坏蓋	17.2	2.2	縁径2.6	2	褐灰色	褐灰色		e　II b類重ね焼き、D期
576	特49	1次A地区	M-7	南壁排水溝	須恵器	坏蓋	—	(2.3)	縁径3.4	つまみ-13	灰色	灰色		e　線書「十」、B期
577	D607	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	坏蓋	—	2.3	縁径3.4	つまみ-11	灰色	灰色		e　I 類重ね焼き、 細に転用、B期
578	D534	1次B地区	K-9-2	包	須恵器	坏蓋	14.2	3.4	縁径3.8	7	オリーブ灰色	オリーブ灰色		f　I 類重ね焼き
579	D524	1次B地区	M-8-1	包	須恵器	坏蓋	14.3	3.0	縁径2.8	7	灰色	灰色		f　ヘラ記号「ノ」、B期
580	D527	1次B地区	K-9-2	SD38	須恵器	坏蓋	14.2	2.4	縁径3.6	4	灰色	灰色		e　I 類重ね焼き、 ヘラ記号「ノ」、B期
581	D758	1次K地区	K-10-2	包	須恵器	坏蓋	14.8	(3.1)	—	3	灰白色	灰白色		b　II b類重ね焼き、 内面摩耗
582	D604	1次A地区	K-6-4	包	須恵器	坏蓋	14.5	3.3	縁径3.2	2	灰黄色	灰黄色		e
583	D776	1次A地区	L-6-4,M-6-3	包	須恵器	坏蓋	13.9	3.1	縁径3.4	3	灰色	灰色		f　ヘラ記号、 I 類重ね焼き、B期
584	D511	1次B地区	J-10-2	包	須恵器	坏蓋	14.4	3.4	縁径3.0	12	暗青灰色	灰色		f　I 類重ね焼き、C期
585	D626	1次A地区	L-6-3,L-7-1	包	須恵器	坏蓋	14.7	2.5	縁径3.6	3	褐灰色	灰色		f　I 類重ね焼き、C期
586	D597	1次B地区	L-7-2-4	包	須恵器	坏蓋	14.4	2.3	縁径2.7	12	灰色	灰色		j　II b類重ね焼き、B期
587	D615	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	坏蓋	15.3	2.2	縁径2.7	3	灰色	灰色		f　I 類重ね焼き、 ヘラ記号、C期
588	D548	1次B地区	M-8-1	包	須恵器	坏蓋	14.2	2.0	—	3	灰色	灰色		c　細に転用、C期
589	D540	1次B地区	L-9-1-3-4	包	須恵器	坏蓋	14.2	2.2	縁径3.2	9	灰色	黄灰色		e　ヘラ記号「＝」、B期
590	特70	1次B地区	L-6-4,M-6-3	包	須恵器	坏蓋	—	(1.2)	—	—	淡黄色	淡黄色		線書、文字不明、 細に転用、B期
91-591	D590	1次B地区	K-10-3,L-10-3	包	須恵器	坏蓋	(14.7)	(2.1)	縁径3.7	1	黄灰色	黄灰色		f　ヘラ記号「キ」か、B期
592	特23	1次A地区	K-11-2	包	須恵器	坏蓋	14.2	(1.6)	—	1	灰色	灰色		f　線書、B期
593	特11	1次A地区	L-5-1	包	須恵器	坏蓋	13.8	(1.9)	—	1	灰白色	灰白色		j　I 類重ね焼き、 線書「大成」、B期
594	特44	1次A地区	M-8-1	包	須恵器	坏蓋	14.3	(1.7)	—	4	オリーブ灰色	オリーブ灰色		f　II b類重ね焼き、 線書「工」、B期
595	D776	1次B地区	L-9-4	包	須恵器	坏蓋	15.4	2.0	縁径4.0	4	灰色	灰色		f　I 類重ね焼き、B期
596	D530	1次B地区	M-7-1-3	包	須恵器	坏蓋	14.2	2.7	縁径3.4	11	灰色	灰色		f　内面摩耗顕著、B期
597	D720	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	—	(2.5)	縁径2.4	—	灰黄褐色	にぶい褐色		a　外面赤化、C期
598	特13	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	坏蓋	約15	(2.0)	—	—	灰色	灰色		a　線書「乙」か、 細に転用、B期
599	D625	1次A地区	K-6-4	包	須恵器	坏蓋	12.6	2.8	縁径2.1	8	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色		f　I 類重ね焼き
600	特9	1次A地区	L-6-2	包	須恵器	坏蓋	—	(2.6)	縁径2.1	1	灰白色	灰色		a　線書、文字不明、 細に転用、C期
601	D532	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	13.2	2.9	縁径2.7	7	灰色	灰色		h　I 類重ね焼き、 内面摩耗顕著
602	特16	1次A地区	L-6-3	包	須恵器	坏蓋	12.7	(2.0)	—	5	灰色	灰色		e　線書、II b類重ね焼き、 C期
603	D575	1次B地区	L-8-2	包	須恵器	坏蓋	13.2	3.0	縁径2.3	9	灰色	灰色		e　II b類重ね焼き、C期
604	D521	1次B地区	L-9-4	包	須恵器	坏蓋	11.7	3.1	—	1	灰色	灰オリーブ色		e　内面摩耗顕著(転用痕)、 C期
605	D627	1次A地区	L-6	東壁排水溝	須恵器	坏蓋	12.9	2.7	縁径2.3	5	灰色	灰色		e　細に転用、C期
606	D594	1次A地区	L-11	包	須恵器	坏蓋	13.0	2.4	縁径3.0	3	青灰色	青灰色		e　I 類重ね焼き、 二次被熱痕、C期
607	特66	1次B地区	M-6-3	包	須恵器	坏蓋	11.3	2.4	縁径2.3	12	灰色	灰色		e　線書、文字不明、B期
608	特45	1次B地区	L-7-4	包	須恵器	坏蓋	11.6	2.7	縁径1.9	7	緑灰色	緑灰色		f　I 類重ね焼き、 線書「大海」、C期
609	特37	1次B地区	M-7-3	包	須恵器	坏蓋	12.0	2.8	縁径2.2	5	灰黄色	灰黄色		f　線書「大海」、 II b類重ね焼き、C期

第18表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表７

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
92-610	DS13	1次B地区	L-8-2	包	須恵器	坏蓋	12.3	3.1	最径2.0	3	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、ヘラ記号「＝」、C期
611	特96	1次A地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	12.8	3.0	最径2.0	1	灰色	灰色	e	墨書「□（乙上か）」、明に転用、D期
612	DS19	1次A地区	K-5-3	包	須恵器	坏蓋	11.7	3.3	最径2.8	5	黄灰色	黄灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、D期
613	DS41	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	11.5	3.0	最径2.4	6	灰色	灰色	e	Ⅱ a類重ね焼き、ヘラ記号「X」
614	D608	1次A地区	L-6-1	包	須恵器	坏蓋	12.1	3.1	最径2.3	1	灰色	灰色	e	C期
615	D606	1次A地区	L-6	東壁排水溝	須恵器	坏蓋	12.3	2.7	最径2.0	3	褐灰色	灰色	f	Ⅰ類重ね焼き、D期
616	特6	1次A地区	—	包	須恵器	坏蓋	12.4	(2.0)	—	3	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	e	墨書「丹有」、明に転用、D期
617	D779	1次B地区	M-7-1	包	須恵器	坏蓋	12.2	3.0	最径2.2	小片	灰色	灰色	f	ヘラ記号「X」、C期
618	DS84	1次B地区	K-9-2	包	須恵器	坏蓋	12.2	2.4	—	5	明青灰色	明青灰色	c	Ⅱ b類重ね焼き、石明前に転用、D期
619	特99	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	12.2	(1.6)	—	3	オリーブ灰色	オリーブ灰色	f	墨書、文字不明、明に転用、C期
620	DS36	1次B地区	—	包、東壁排水溝	須恵器	坏蓋	12.5	1.7	最径2.3	3	黄灰色	黄灰色	a	明に転用、C期
621	DS24	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	坏蓋	11.9	2.3	最径2.4	11	黄灰色	黄灰一灰褐色	d	明に転用、D期
622	DS26	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	坏蓋	12.7	1.8	最径2.1	9	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、墨痕、摩滅顕著
623	DS72	1次B地区	K-9-1	包	須恵器	坏蓋	12.2	2.0	最径2.5	2	青灰色	青灰色	e	二次被熱痕、C期
624	D775	1次B地区	L-8-4	包	須恵器	坏蓋	12.0	2.0	最径2.0	1	灰色	灰色	e	Ⅰ類重ね焼き、ヘラ記号「X」、C期
625	D781	1次A地区	M-4-2	包	須恵器	坏蓋	12.2	(1.6)	—	9	灰色	灰色	c	Ⅰ類重ね焼き、明に転用、D期
626	DS25	1次A地区	—	西壁排水溝	須恵器	坏蓋	11.5	2.4	最径2.3	9	灰色	黄灰色	e	
93-627	特38	1次B地区	K-8-4	包	須恵器	有台坏	13.2	3.8	9.2	3	灰オリーブ色	灰オリーブ色	a	ヘラ記号「ノ」、墨書「□（乙か）上」、明に転用、B期
628	特97	1次B地区	L-7-8、M-8-2	包	須恵器	有台坏	14.1	3.8	10.3	1	灰白色	灰色	e	ヘラ記号「ノ」、墨書、文字不明、B期
629	D767	1次A地区	L-5-1	包	須恵器	有台坏	13.8	3.6	8.8	2	青灰色	青灰色	e	ヘラ記号「＝」、B期
630	D481	1次B地区	K-9-4	包	須恵器	有台坏	13.7	3.8	9.2	5	青灰色	暗青灰色	e	ヘラ記号「（」、B期
631	D452	1次B地区	K-8-3	包	須恵器	有台坏	13.8	10.3	9.3	小片	青灰色	青灰色	a	C期
632	D391	1次A地区	K-6-4、L-2	包	須恵器	有台坏	13.3	4.0	9.4	4	明褐色	青灰色	f	B期
633	D466	1次B地区	M-7-3	包	須恵器	有台坏	13.6	4.4	8.7	7	灰黄褐色	灰黄褐色	f	焼成容器に転用
634	D389	1次A地区	L-5-1	包	須恵器	有台坏	14.4	4.4	9.9	2	淡黄色	淡黄色	f	焼成容器に転用、B期
635	D451	1次B地区	M-7-3	包	須恵器	有台坏	13.6	4.2	10.9	1	明青灰色	灰色	f	B期
636	特65	1次B地区	M-8-2	包、東壁排水溝	須恵器	有台坏	—	(0.9)	8.8	底-6	灰色	灰色	f	墨書「乙上」、B期
637	D497	1次B地区	—	包	須恵器	有台坏	13.5	3.6	9.1	1	灰色	オリーブ黒色	c	A期？
638	DS54	1次B地区	M-6-3	包	須恵器	有台坏	11.9	3.5	7.8	3	灰色	灰色	l	ヘラ記号、突帯部著、B期
639	D450	1次B地区	L-9-4	包	須恵器	有台坏	12.6	3.5	8.8	4	青灰色	明青灰色	e	
640	D379	1次A地区	M-4-3、L-5-2	包	須恵器	有台坏	12.9	3.4	7.6	2	暗青灰色	暗青灰色	e	B期
641	特21	1次A地区	L-7-2	包	須恵器	有台坏	—	(1.6)	8.4	底-3	青灰色	青灰色	f	墨書、文字不明、C期
642	D381	1次A地区	L-5-1	包	須恵器	有台坏	11.2	3.7	7.5	1	青灰色	青灰色	f	C期
643	特39	1次B地区	K-10-3	包	須恵器	有台坏	11.3	3.7	7.2	底-5	灰色	灰色	d	墨書「刑□（東か）」、C期
644	D386	1次A地区	L-6-3	包	須恵器	有台坏	11.8	4.2	7.8	6	青灰色	暗青灰色	f	
645	D456	1次B地区	L-8-2	包、東壁排水溝	須恵器	有台坏	11.8	3.9	7.8	5	灰色	灰色	e	
646	D495	1次B地区	L-6-4、M-6-3	包	須恵器	有台坏	12.0	4.2	7.4	2	灰色	青灰色	f	C期
647	特94	1次B地区	L-8-1・2	包	須恵器	有台坏	—	(1.3)	8.0	底-4	灰色	灰色	h	墨書「恵人」、B期
94-648	D449	1次B地区	L-8-1・2	包	須恵器	有台坏	12.0	4.0	8.3	4	青灰色	青灰色	e	ヘラ記号、明に転用
649	特8	1次A地区	L-4-3	包	須恵器	有台坏	—	(1.6)	7.8	底-3	灰色	青灰色	a	墨書、文字不明、C期
650	特73	1次B地区	L-7-3・4	包	須恵器	有台坏	—	(1.3)	7.6	—	灰色	灰白色	e	ヘラ記号「＝」、内外面明に転用、C期
651	D772	1次B地区	L-6-3・4	包	須恵器	有台坏	12.0	4.9	7.8	1	灰色	灰色	e	ヘラ記号「ノ」、C期
652	特29	1次A地区	L-8-2	包	須恵器	有台坏	10.9	4.5	7.2	1	灰色	灰色	f	墨書「乙上」、C期
653	特59	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	有台坏	11.7	4.4	7.8	4	灰黄色	灰色	e	ヘラ記号「ノ」、明に転用、B期？
654	D377	1次A地区	L-5-2	包	須恵器	有台坏	11.2	4.4	7.8	1	青灰色	青灰色	a	C期
655	D475	1次B地区	M-7	南端試掘坑	須恵器	有台坏	11.1	4.0	8.0	3	灰色	灰色	f	ヘラ記号、C期
656	D470	1次B地区	L-9-3・4	包	須恵器	有台坏	10.1	4.6	7.9	1	褐灰色	灰色	e	C期
657	D766	1次A地区	L-5-3	包	須恵器	有台坏	—	(1.7)	7.5	底-7	明青灰色	明青灰色	f	煤付着、C期
658	特30	1次B地区	L-8	包	須恵器	有台坏	11.5	4.3	7.9	4	灰黄色	灰褐色	h	墨書「大海」、C一D期
659	D771	1次B地区	M-6-3	包	須恵器	有台坏	11.4	4.4	7.4	1	灰色	灰色	e	C期
660	D441	1次B地区	L-9-3	包	須恵器	有台坏	10.8	3.8	7.3	3	青灰色	青灰色	f	
661	D765	1次A地区	L-6-2、L-7-1	包	須恵器	有台坏	11.5	5.0	7.3	3	青灰色	青灰色	e	C期
662	D486	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	有台坏	10.9	3.9	7.3	6	灰色	灰色	e	C期
663	D490	1次B地区	M-6-4	包	須恵器	有台坏	10.6	4.0	7.3	1	灰色	オリーブ黒色	a	C期
664	D392	1次A地区	L-5-1・2	包	須恵器	有台坏	9.6	4.1	6.8	2	青灰色	青灰色	e	C期
665	特42	1次B地区	L-9-1	包	須恵器	有台坏	—	(2.6)	6.4	底-1	灰黄色	灰黄色	a	墨書、文字不明
95-666	D435	1次B地区	K-11-2	包	須恵器	有台坏	10.8	(7.0)	—	3	青灰色	暗青灰色	f	C期
667	D402	1次B地区	L-7-1	包	須恵器	有台坏	15.4	6.6	9.4	2	灰黄色	褐黄色	e	B期
668	D443	1次B地区	K-7-3	包	須恵器	有台坏	—	(5.6)	(5.0)	底-6	青灰色	青灰色	m	有蓋、A期？
669	D421	1次B地区	J-9-2	包	須恵器	有台坏	—	(4.1)	—	—	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	m	台部除去後も使用、A期
670	D460	1次B地区	L-10-1	包、古墳（P115墓）	須恵器	有台坏	—	(3.8)	7.8	—	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	m	B期
671	D398	1次B地区	K-7-1・2	包、排水溝	須恵器	無台坏	9.8	3.3	8.6	2	灰色	灰色	d	

第19表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表８

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
95-672	特19	1次A地区	L-6-2	包	須恵器	無台坏	10.7	3.1	7.6	3	灰色	青灰色	d	墨書「寺」か、D期
675	D207	1次B地区	L-7-8	包	須恵器	無台坏	11.3	3.9	6.8	2	灰色	灰色	f	A期
674	D286	1次B地区	L-9-1	包	須恵器	無台坏	13.5	3.8	9.7	5	灰白色	灰白色	e	B期
675	D281	1次B地区	M-7-3	包	須恵器	無台坏	13.8	3.3	10.5	4	灰黄色	灰白色	a	糊付替、B期
676	D216	1次A地区	K-6-4	包	須恵器	無台坏	13.5	3.6	10.2	4	淡黄色	淡黄色	f	炭焼に転用
677	D414	1次B地区	L-9-1	包	須恵器	無台坏	13.9	3.6	9.9	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	e	B期
678	D434	1次B地区	L-8-4	包	須恵器	無台坏	14.2	3.8	10.0	1	灰黄色	灰黄色	j	
679	D417	1次B地区	L-7-4	包	須恵器	無台坏	13.8	4.1	10.5	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	f	B期
680	D273	1次B地区	M-8-1	包	須恵器	無台坏	13.4	3.5	10.7	5	灰白色	灰白色	e	學校調査
681	D425	1次B地区	K-9-3	包	須恵器	無台坏	13.1	3.6	9.6	3	黄灰色	黄灰色	e	ヘラ記号、C期
682	D215	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	無台坏	13.6	3.8	9.3	3	明青灰色	明青灰色	e	
683	D755	1次B地区	L-11	包	須恵器	無台坏	13.0	3.3	9.4	4	灰色	灰色	f	C期
684	D3	1次A地区	L-5-3	包	須恵器	無台坏	12.3	3.6	9.0	7	にぶい黄灰色	にぶい黄灰色	f	
685	D246	1次A地区	L-6-3	包	須恵器	無台坏	12.5	3.8	10.5	6	淡黄色	淡黄色	e	炭焼に転用
686	D264	1次B地区	L-8-1 2-3	包	須恵器	無台坏	12.2	3.9	9.2	4	灰色	灰色	e	
687	特07	1次B地区	L-7-3	包	須恵器	無台坏	—	(1.2)	9.6	底-4	灰白色	オリーブ灰色	a	墨書「上」、C期
688	D754	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	無台坏	12.6	3.7	8.5	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	e	
689	特4	1次A地区	L-6-1	包	須恵器	無台坏	12.0	4.2	8.6	小片	明青灰色	明青灰色	f	ヘラ記号「ノ」、墨書「下家」、C期
690	D258	1次B地区	L-7-3, L-9-1	包	須恵器	無台坏	12.5	3.8	9.3	4	灰色	灰色	f	
691	D243	1次A地区	L-6-2	包	須恵器	無台坏	—	(3.5)	8.7	底-12	明青灰色	明青灰色	e	外面煤付着、B期
692	特49	1次B地区	K-7-1 2	包、排水溝	須恵器	無台坏	—	(1.1)	8.2	底-4	浅黄色	灰黄色	a	墨書「□（乙か）上」、C期
96-693	特26	1次A地区	L-6-4	包	須恵器	無台坏	—	(2.9)	9.5	底-3	青灰色	青灰色	j	ヘラ記号「ノ」、墨書「小風」、B期
694	特18	1次A地区	L-7-1	包	須恵器	無台坏	12.6	3.1	8.6	4	灰色	灰色	e	墨書「十」
695	特27	1次A地区	L-5-3	包	須恵器	無台坏	12.0	3.5	8.4	3	灰色	灰色	e	墨書「上□」、C期
696	特22	1次A地区	L-7-2	包	須恵器	無台坏	12.9	2.8	9.1	1	青灰色	青灰色	c	側面墨書、文字不明、C期
697	D204	1次A地区	L-5-3	包	須恵器	無台坏	12.7	3.4	9.8	6	青灰色	青灰色	f	
698	D257	1次A地区	L-4-3	包	須恵器	無台坏	12.2	3.2	8.5	1	灰白色	青灰色	d	
699	D247	1次A地区	L-6-1	包	須恵器	無台坏	12.5	3.3	8.3	小片	青灰色	青灰色	f	
700	D214	1次A地区	L-6-1	包	須恵器	無台坏	11.8	3.2	8.1	6	明青灰色	明青灰色	e	
701	D256	1次A地区	K-6-4	包	須恵器	無台坏	12.3	3.0	7.8	小片	灰白色	明青灰色	d	
702	D253	1次A地区	L-6-2	包	須恵器	無台坏	12.5	3.0	8.8	3	明青灰色	明青灰色	m	
703	D438	1次B地区	L-8-1 2	包	須恵器	無台坏	12.3	3.4	8.4	2	灰色	灰色	b	
704	特5	1次A地区	L-6-1	包	須恵器	無台坏	11.0	3.0	8.6	2	灰白色	灰白色	c	墨書「上東」、C期
705	特48	1次B地区	L-7-3	包	須恵器	無台坏	—	(1.1)	8.5	底-2	灰色	灰色	e	ヘラ記号「ノ」、墨書・文字不明、D期
706	D401	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	無台坏	10.6	3.3	8.4	6	灰色	灰～灰オリーブ色	e	
707	D276	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	無台坏	11.5	3.3	9.3	6	灰色	灰色	e	焼き歪みあり
708	特85	1次B地区	K-8-4	包	須恵器	無台坏	—	(0.6)	8.2	底-2	灰色	灰色	e	墨書「□上」、D期
709	特46	1次B地区	L-7-2	包	須恵器	無台坏	—	—	—	—	灰色	灰色	h	墨書「屋東」、C期
710	特07	1次B地区	M-7-3	包	須恵器	無台坏	11.8	3.4	9.3	2	灰色	灰色	e	墨書、文字不明、C期
711	特24	1次A地区	L-6-3	包	須恵器	無台坏	—	(1.7)	8.0	底-10	灰白色	灰白色	h	墨書「有」、C期
712	特40	1次B地区	K-10-2	包	須恵器	無台坏	—	(1.2)	9.2	底-2	灰色	灰色	e	墨書、文字不明、D期
713	特56	1次B地区	K-9-4	包	須恵器	無台坏	—	(1.1)	8.2	底-3	灰色	灰色	h	墨書「□（寺か）」、D期
714	D631	1次B地区	K-10-2	包	須恵器	無台坏	—	(1.2)	8.2	底-9	にぶい黄橙色	灰白色	e	焼き甘い
97-715	D351	1次B地区	L-9-3	包	須恵器	有台盤	22.6	(3.8)	—	小片	灰色	灰色	e	無蓋
716	D336	1次B地区	J-9-2	包	須恵器	高坏	—	(6.5)	14.0	7	青灰色	青灰色	e	
717	D345	1次B地区	K-10-4, L-10-3	包	須恵器	高坏	—	(3.0)	—	1	淡黄色	灰白色	e	學校調査
718	D430	1次B地区	K-10-2	包	土師器	高坏	—	(4.5)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	雲、粗砂多量含む	
719	D551	1次B地区	K-8-3	包	須恵器	高坏	—	(4.5)	8.0	脚-6	灰色	灰色	b	脚内面黒褐色漆付着、A期
720	D220	1次A地区	—	包、排水溝	外赤内黒土師器	高坏	—	(6.3)	—	—	黒色	明赤褐色	海綿骨片含む	
721	D230	1次A地区	L-6-4, M-6-3	包	赤彩土師器	高坏	—	(3.6)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	カ	
722	D403	1次B地区	L-7-2, M-6	包、排水溝	赤彩土師器	高坏	—	(3.1)	11.6	底-4	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	カ	内面被熱痕
723	D657	1次B地区	L-9-4	包	赤彩土師器	高坏	13.9	(2.9)	—	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	雲、粗砂含む	
724	D227	1次B地区	L-7-2	包	赤彩土師器	高坏	—	(4.9)	(8.6)	脚6	にぶい黄橙色	灰黄褐色	カ	二次被熱
725	D229	1次B地区	M-7	東壁排水溝	赤彩土師器	平瓦	11.8	3.5	つまみ径2	3	にぶい橙色	橙色	ス	二次被熱
726	D228	1次B地区	K-8-3	包	赤彩土師器	有台坏	11.2	4.5	8.0	—	浅黄橙色	浅黄橙色	キ	
727	D232	1次B地区	L-9-1	包	赤彩土師器	有台坏	—	(1.65)	9.0	底-2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	ス	側面墨書
728	D211	1次A地区	—	北端排水溝	赤彩土師器	無台椀	—	(1.8)	6.8	底-4	橙色	橙色	キ	
729	D241	1次A地区	K-6-2	包	外赤内黒土師器	無台椀	15.1	約5	—	3	黒色	にぶい黄橙色	海綿骨片含む	
730	D217	1次B地区	K-8-2, L-7-3	包	外赤内黒土師器	無台椀	14.4	4.5	8.1	4	黒色	赤褐色	海綿骨片含む	
731	D225	1次B地区	K-7-3	包	外赤内黒土師器	無台椀	14.7	4.1	8.9	底-2	黒色	にぶい赤褐色	海綿骨片含む	
732	D240	1次A地区	L-5-1	包	外赤内黒土師器	無台椀	12.9	5.0	6.0	小片	黒色	赤橙色	キ	
733	D254	1次B地区	K-9-4	包	赤彩土師器	無台椀	16.8	(5.4)	—	2	橙色	浅黄橙色	キ	
734	D280	1次B地区	M-7-3	包	ロクロ土師器	無台椀	17.0	4.1	13.2	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	キ	
735	D735	1次B地区	M-6-3	包	土師器	有台盤	—	—	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	雲、粗砂多量含む	タール状付着物
736	D325	1次B地区	M-7	東壁排水溝	須恵器	無台盤(脚)	—	(4.0)	19.1	底-3	淡黄色	淡黄色	c	外面被熱痕
98-737	D375	1次A地区	L-5-3	包	須恵器	長頸瓶	—	(7.3)	脚部径約20	—	灰色	灰色	a	
738	D352	1次B地区	M-7-9, L-8-1, L-9-1	包	須恵器	長頸瓶	10.5	—	11.0	4	灰色	灰色	e	

第20表　第1次調査　A・B地区下層出土遺物観察表9

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

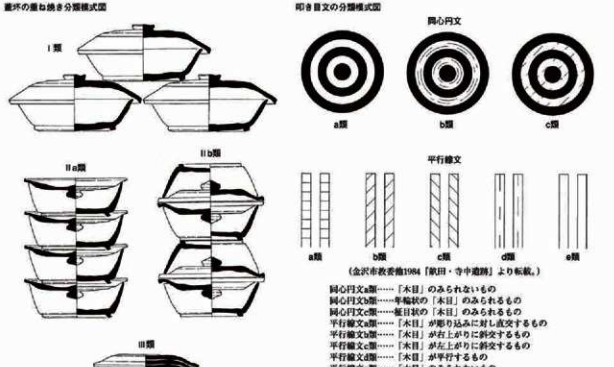
図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(1/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
98-739	D352	1次B地区	M-7-9, L-8-1, L-9-1	包	須恵器	長頸瓶	－	－	－	－	灰色	灰色	e	
740	D330	1次B地区	K-8	包	須恵器	瓶類	径3.3	2.2	孔径0.7	3	灰色	灰色	e	切り取り同離か
741	D358	1次B地区	L-7, L-7-3, L-8-2	包	須恵器	長頸瓶	－	(11.5)	10.6	底-8	灰色	灰色	a	
742	D369	1次B地区	L-9-4	包	須恵器	壺・瓶	－	(2.9)	9.5	底-7	明灰色	灰色	a	ヘラ記号「ノ」
743	D329	1次B地区	K-10-3	包	須恵器	瓶	－	(3.6)	9.2	底-5	明緑灰色	明青灰色	f	無器
744	D341	1次B地区	L-8-4, L-9-1	包	須恵器	壺	－	(7.7)	－	－	灰色	灰色	a	無器
745	D341	1次B地区	L-8-4, L-9-1	包	須恵器	壺	－	(7.7)	－	－	灰色	灰色	a	無器
746	D339	1次B地区	L-9-3	包	須恵器	長頸瓶	－	(14.1)	－	－	灰色	灰色	a	沈線に及ん
747	D328	1次B地区	M-7	南端試掘坑	須恵器	瓶	－	(5.2)	10.0	底-1	灰色	青灰色	e	無器
748	D339	1次B地区	L-7-3	包	須恵器	瓶	径8.7	(6.6)	－	12	灰色	オリーブ灰色	e	焼き歪みあり
749	D370	1次A地区	K-6-4	包	須恵器	横瓶	11.8	(2.6)	－	3	暗オリーブ灰色	灰色	f	
750	D728	1次B地区	L-7-2	包	土師器	土管状土製品	(14.8)	(6.8)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
751	D332	1次B地区	L-9	排水溝	須恵器	盤(蓋)	－	(4.6)	20.4	底-2	灰黄色	灰黄色	e	
99-752	D773	1次A地区	L-5-4	包	土師器	盤	－	－	－	－				
753	D678	1次B地区	L-7-4	包、中層ベース土	土師器(ロクロ)	有台盤	35.0	(12.4)	－	5	淡黄色	淡黄色	粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	チール状付着物
100-754	D355	1次A地区	K-10, M-7	包、東側排水溝	須恵器	壺	45.6	(6.4)	－	1	灰色	灰色	e	
755	D346	1次B地区	K-9-1	包	須恵器	壺	－	－	－	小片	黄灰色	黄灰色	e	
756	D342	1次B地区	L-9	包	須恵器	壺	－	－	－	－	淡灰色	淡灰色	e	
757	D367	1次B地区	K-11-2	包	須恵器	壺	27.4	(4.9)	－	1	黄灰色	灰色	e	
101-758	D344	1次B地区	K-8	包	須恵器	壺	26.3	(11.2)	－	1	緑灰色	緑灰色	e	
759	D197	1次B地区	M-7-3	包	土師器(赤ロクロ)	小甕	18.7	21.5	－	11	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、海綿骨片多く含む	煙による変色域あり
760	D764	1次B地区	L-4-1	包	土師器(赤ロクロ)	小甕	14.7	(6.4)	－	2	褐灰色	にぶい褐色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
761	D717	1次B地区	M-7-3	包	土師器(ロクロ)	長甕	18.0	(10.0)	－	1	にぶい橙色	にぶい黄橙色	微砂、赤色粒含む	
762	D729	1次B地区	L-8-3	包	土師器	壺	19.6	(6.5)	－	1	淡黄色	淡黄色	礫、粗砂、赤色粒、海綿骨片含む	
763	D834	1次B地区	K-10-2	包	土師器(赤ロクロ)	長甕	約21	(8.7)	－	1	にぶい橙色	浅黄橙色	礫、粗砂多量含む	
764	D711	1次B地区	L-10-1	包含層(P115近)	土師器(赤ロクロ)	長甕	23.5	(10.4)	－	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	海綿骨片含む	
765	D659	1次B地区	M-9	包	土師器(ロクロ)	壺	約26	(6.6)	－	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	微砂含む	径不安あり
102-766	D635	1次B地区	L-8-1	包	土師器(ロクロ)	長甕	21.2	(6.8)	－	3	淡黄色	淡黄色	礫、粗砂、赤色粒含む	
767	D722	1次B地区	M-7-1	包	土師器(ロクロ)	長甕	16.9	8.2	－	小片	にぶい黄橙色	灰褐色	赤色粒、微砂含む	
768	D673	1次B地区	M-7	東壁排水溝	土師器(ロクロ)	長甕	19.6	(9.9)	－	小片	浅黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、焼土塊含む	
769	D716	1次B地区	L-9-1	包	土師器(ロクロ)	長甕	19.9	13.0	－	小片	にぶい橙色	にぶい黄橙色	粗砂、海綿骨片含む	外面粘土付着
770	D688	1次B地区	K-6-3	包	土師器(ロクロ)	長甕	23.4	9.1	－	1	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂含む	
771	D676	1次B地区	L-7-2	包	土師器(ロクロ)	長甕	14.5	(8.15)	－	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	
772	D640	1次B地区	K-10-4	包	土師器(ロクロ)	長甕	約22	(8.1)	－	1	灰黄色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
773	D748	1次B地区	K-9-4	包	土師器(赤ロクロ)	小甕	11.4	(4.3)	－	3	橙色	にぶい橙色	礫、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
774	D677	1次B地区	L-7-2	包	土師器(ロクロ)	小甕	11.8	(5.1)	－	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
775	D732	1次B地区	K-9-4	包	土師器(ロクロ)	小甕	11.9	(5.2)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
776	D763	1次B地区	L-7-3	包	土師器(ロクロ)	小甕	12.8	(6.4)	－	3	淡黄色	浅黄色	礫、粗砂、焼土塊含む	
777	D733	1次B地区	L-8	包	土師器(ロクロ)	鉢	34.9	(8.1)	－	1	にぶい橙色	にぶい橙色	微砂含む	
778	D675	1次B地区	K-9-4	包	土師器(ロクロ)	鉢	38.4	(5.2)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
103-779	D642	1次B地区	M-7-3	包	土師器(ロクロ)	鉢	32.0	(5.2)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
780	D672	2次B地区	M-7	南端試掘坑	土師器(ロクロ)	鉢	34.10	(5.2)	－	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂含む	
781	D681	1次A地区	L-5-3	包	土師器(ロクロ)	甑	－	－	－	－				
782	D684	1次B地区	L-6-3-4	包	土師器(ロクロ)	甑	－	(7.1)	11.2	－	にぶい橙色	にぶい橙色		
783	D196	1次B地区	J-9-2	包	土師器(赤ロクロ)	壺	16.8	(25.6)	－	6	褐灰色	橙色	微砂含む	
784	D686	1次A地区	L-5-1	包	土師器(ロクロ)	甑	－	(6.1)	－	－	淡黄橙色	淡黄橙色	粗砂、海綿骨片含む	
785	D655	1次B地区	L-8-2	包	土師器(赤ロクロ)	無台椀	9.6	4.1	5.4	11	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	
786	D727	1次B地区	L-8	包	土師質土器	脚か	長さ(4.8)	径1.8	－	－		にぶい黄橙色	礫、粗砂、赤色粒含む	煤付着
787	D308	1次B地区	L-9	包・東壁排水溝	製塩土器	尖底	－	(2.6)	－	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	微砂少量含む	
788	D709	1次B地区	L-10-1	包	製塩土器	尖底	－	(5.0)	－	－	にぶい橙色	にぶい黄橙色	微砂少量含む	
789	D736	1次B地区	J-8-2	包	製塩土器	尖底	－	(2.5)	－	－	灰色	灰白色	礫、砂粒、焼土塊多く含む	
790	D304	1次B地区	L-8-1	包	製塩土器	尖底	－	(4.6)	－	小片	にぶい橙色	にぶい黄橙色	礫、砂粒、焼土塊多く含む	
791	D302	1次B地区	L-9-2	包	製塩土器	尖底	－	(4.0)	－	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	礫、砂粒、焼土塊多く含む	
792	D301	1次B地区	L-9-3	包	製塩土器	尖底	－	(4.5)	－	小片	浅黄橙色	浅黄橙色	礫、砂粒、焼土塊多く含む	
104-793	E178	1次B地区	L-7-2	包	石製品	紡石	長さ5.8	径5.5	厚2.6	－	乳灰色	乳灰色	紡石	重量13.3g、3面使用
794	E176	1次B地区	K-9-4	包	石製品	紡石	長さ8.4	径4.2	厚4.1	－	乳灰色	乳灰色	紡石	残重量27.6g、側面使用
795	E185	1次B地区	L-9-1	包	石製品	紡石	長さ(5.7)	径7.8	厚3.1	－		灰色	砂岩	残重量23.1g、4面使用

第21表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表10

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度(/12)	色調・内	色調・外	胎土	備考
104-796	E260	1次B地区	K-11-4	包	石製品	砥石	長さ(7.5)	幅3.5	厚2.7		淡黄灰色	淡黄灰色	緻密質の2.2g、微砂混入	残重量32.2g、表面磨滅
797	D311	1次B地区	L-9-3	包	土製品	ツイズ部口	3.0	(3.0)	—	3	に赤い黄橙色	黒褐色	粗砂多く含む	口縁厚白黒触付着
798	D315	1次B地区	K-11-4	包	土製品	ツイズ部口	約7	(4.8)	—	1	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	粗砂含む	
799	D313	1次B地区	L-9-1, M-7-3	包	土製品	ツイズ部口	約9	(5.7)	—	—	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	礫、粗砂含む	
800	D310	1次B地区	L-7-9	包	土製品	ツイズ部口	—	(3.8)	—	—	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	礫、粗砂含む	
801	図版-6	1次B地区	L-10-1	包	鉄製品	鞭口金具	長径4.4	短径1.9	幅1.2					重量5.8g
802	図版-6	1次B地区	L-9-3	包	鉄製品	不明	長さ(2.3)	幅2.0	厚0.2					残重量1.8g
803	E269	1次B地区	M-6-2	包	金属	鉄浮	長軸6.9	短軸7.7	最大厚4.1					重量253.6g、粘土・砂付着、鉄滓浮
804	E272	1次B地区	L-9-4	包	金属	鉄浮	長軸11.7	短軸7.2	最大厚4.9					重量330.6g、粘土・砂付着、鉄滓浮
805	E271	1次A地区	L-6-1	包	金属	鉄浮	長軸5.7	短軸6.9	最大厚3.4					重量221.5g、粘土・砂付着
806	E273	1次B地区	L-8-2	包	金属	鉄浮	長軸9.0	短軸6.0	最大厚3.8					重量91.3g、木炭多量付着、鉄滓浮
807	D297	1次A地区	L-9-4	包	土製品	土錘	長さ7.7	径3.9		12	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	礫、粗砂、赤色粒含む	重量94.3g
808	D295	1次B地区	M-9	包	土製品	土錘	長さ4.0	径3.2		12	灰黄色	灰黄色	礫、粗砂多量含む	残重量54.5g
809	D298	1次B地区	K-11-2	包	土製品	土錘	長さ4.1	径3.5		12	に赤い黄橙色	に赤い黄橙色	粗砂含む	残重量61.9g
810	D324	1次B地区	L-9	包	土師器	ホづくね	約10	2.7	約6	1	浅黄色	浅黄色	ア	
811	E266	1次B地区	M-7-1	包	石器	石錘	長さ2.94	幅2.04	厚0.7			黒色	玉髄質珪質頁岩	重量3.7g
812	D7	1次B地区	L-13-1	包	石器	剥片						黒色	硬石質頁岩	
105-813	D334	1次B地区	K-10-3	包	陶磁器	壺	16.3	(5.5)	—	1	灰色	灰色	粗砂・海綿骨片多く含む	
814	D117	1次B地区	K-10-2	包	陶器	鉢	31.0	14.7	18.1	6	オリーブ灰色		微砂粒含む	
815	D120	1次B地区	K-8-3	包	磁器	徳利	—	(3.6)	7.0	—	黄褐一黄色	淡地一灰白色	微砂粒含む	近代
816	D119	1次B地区	M-9	包	陶器	碗	—	(2.5)	5.4	25-12	暗一に赤い橙色	淡地一浅黄橙色	微粒	近代、見込み部分「刈」
817	D122	1次B地区	—	排土	磁器	皿	13.4	2.9	7.0	3	暗一青白色	淡地一灰白色	緻密	オリーブ黄色、暗色の斑点、鉄色点

第22表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層出土遺物観察表11



同心円文a類……「木目」のみられないもの
同心円文b類……年輪状の「木目」のみられるもの
同心円文c類……柾目状の「木目」のみられるもの
平行線文a類……「木目」が即り込みに対し直交するもの
平行線文b類……「木目」が右上がりに斜交するもの
平行線文c類……「木目」が左上がりに斜交するもの
平行線文d類……「木目」が平行するもの
平行線文e類……「木目」のみられないもの

第107図　重ね焼き、叩き目文の分類

（　）は残存法量を示す。

図版番号	実測番号	地　区	遺構名	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径(cm)	木取り	同定番号	備　考
45-136	276 （特2）	1次Ａ地区	SB1 P2	漆器椀	最大径(17.6)	(5.5)	底径 14.0	横木取り	159	ケヤキ。黒色漆。底部外面ロクロ爪４ヶ所？
52-251	58	1次Ａ地区	SB6 P86	有孔板状木製品	13.4	6.3	2.4	辺材	70	アカガシ亜属。略円形孔１ヶ所。孔径1.4～1.8㎝。
252	139（№53）	1次Ａ地区	SB2 P47	柱根	(37.7)	—	10.0～12.6	芯持ち材	84	クリ。皮付き。
253	202（№22）	1次Ａ地区拡張	SB2 P166	柱根	(23.3)	—	9.9～10.1	芯持ち材	147	スダジイ。皮付き。底面2方向より加工。
254	201（№24）	1次Ａ地区拡張	SB2 P129	柱根	(18.3)	—	6.7～ 8.3	芯持ち材	146	ブナ属。皮付き。一部加工。底面平坦に加工。
255	184 （№1）	1次Ａ地区拡張	SB2 P141	柱根	(20.6)	—	10.8～13.1	芯持ち材	129	イヌシデ節。底面2方向より加工。
256	183（№17）	1次Ａ地区拡張	SB2 P151	柱根	(44.7)	—	10.5～12.2	芯持ち材	128	クリ。側未加工。底面２方向より加工。
257	155（№56）	1次Ａ地区拡張	SB2 P217	柱根	(48.3)	—	11.7～19.3	芯持ち材	100	クリ。断面方形に加工。底面平坦。
258	188 （№7）	1次Ａ地区	SB2 P43	柱根	(47.9)	—	9.1～ 9.7	芯持ち材	133	クリ。皮付き。底面２方向より加工。
259	147（№57）	1次Ａ地区	SB3 P101	柱根	(48.0)	—	9.2～11.5	芯持ち材	92	クリ。皮付き。底面平坦。
260	178（№31）	1次Ａ地区	SB3 P11	柱根	(58.3)	—	6.5×11.3	辺材	123	クリ。割材。断面方形。底面平坦に加工。
53-261	160（№15）	1次Ｂ地区	SB4 P72	柱根	(48.2)	—	14.0×17.2	辺材	105	クリ。断面方形。底面平坦に加工。
262	176（№38）	1次Ａ地区	SB6 P78	柱根	(32.3)	—	6.2×13.0	辺材	121	スダジイ。断面方形。
263	203（№25）	1次Ａ地区拡張	SB10 P122	柱根	(18.2)	—	9.1～ 9.6	芯持ち材	148	スダジイ。皮付き。底面平坦に加工。
264	177（№43）	1次Ａ地区	SB6 P100	柱根	(33.3)	—	16.0×18.4	辺材	122	スダジイ。断面略台形。底面平坦に加工。
265	199（№16）	1次Ａ地区拡張	SB10 P218	柱根	(17.0)	—	8.2～ 9.0	芯持ち材	144	ユズリハ属。皮付き。底面平坦に加工。
266	142（№49）	1次Ａ地区	SB10 P52	柱根	(10.0)	—	7.4～10.0	芯持ち材	82	クリ。皮付き。底面平坦に加工。
267	145（№54）	1次Ａ地区	P36	柱根	(33.5)	—	14.3～16.4	芯持ち材	90	クリ。皮付き。
268	127	1次Ａ地区	P45	棒状木製品	(22.9)	—	1.6～ 1.8	辺材	81	スギ。側面多角形に面取り。
269	189 （№6）	1次Ａ地区	P54	杭か	約48	5.3	5.6	芯持ち材	134	スギ。側背干加工。底面４方向より加工。
270	146（№52）	1次Ａ地区	P55	柱根	(30.2)	(30.2)	10.8～13.1	芯持ち材	91	スダジイ。底面２方向からカット。
271	200 （№3）	1次Ａ地区拡張	P146	柱根	(25.0)	—	8.7×11.2	辺材	145	ユズリハ属。断面略方形。
272	154（№51）	1次Ａ地区拡張	P147	柱根	(37.4)	—	12.2～15.8	芯持ち材	99	スダジイ。皮付き。底面１方向からカット。
273	242(№119)	1次Ａ地区拡張	SB11 P155	柱根	(52.2)	—	13.2～14.5	芯持ち材	187	スダジイ。皮付き。
54-274	197 （№2）	1次Ａ地区拡張	P184	柱根	(28.6)	—	7.1×12.6	辺材	142	スギ。断面長方形。
275	204（№10）	1次Ａ地区拡張	P171	柱根	(15.2)	—	8.4× 9.3	芯持ち材	149	タカノツメ。断面方形。底面平坦に加工。
276	149（№64）	1次Ａ地区拡張	P194	柱根	(38.8)	—	13.0～13.2	芯持ち材	94	ニヨウマツ類。皮付き。底面２方向より加工。
277	198（№21）	1次Ａ地区拡張	P204	柱根	(16.3)	—	7.9～ 8.4	芯持ち材	143	クリ。皮付き。底面１方向より加工。
278	196（№33）	1次Ｂ地区	P24	柱根	(32.8)	—	7.0× 7.7	辺材	141	スダジイ。断面方形。底面平坦に加工。
279	205（№20）	1次Ａ地区拡張	P205	柱根	(36.5)	—	9.2× 9.7	芯持ち材	150	クリ。断面方形。底面２方向より加工。
280	161（№14）	1次Ｂ地区	P55	柱根	(36.2)	—	9.1～11.2	芯持ち材	106	スダジイ。皮付き。底面２方向より加工。
281	194（№35）	1次Ｂ地区	P83	杭か	(26.1)	—	4.3× 6.3	辺材	139	アカマツ。断面方形。転用材。
282	138	1次Ｂ地区	P259	板状木製品	31.5	6.7	2.0	辺材		
283	162（№19）	1次Ｂ地区	P292	柱根	(40.5)	—	11.2～13.6	芯持ち材	107	スダジイ。皮付き。底面２方向より加工。
284	192（№29）	1次Ｂ地区	P294	柱根	(11.9)	—	7.1× 9.1	辺材	137	スダジイ。側３面加工。断面台形。底面平坦に加工。
285	150（№65）	1次Ａ地区	—	柱根	(46.0)	—	10.9～11.3	芯持ち材	95	スダジイ。皮付き。底面平坦に加工。

第23表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層掘立柱建物・柱穴出土木製品観察表

（　）は残存法量を示す。

図版番号	実測番号	地　区	遺構名	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ・径(cm)	木取り	同定番号	備　考
61-309	269（No.80）	１次Ｂ地区	SE1	北西端杭	88.8	－	7.4	辺材		両端削利。ホゾ２ヶ所。
310	116	１次Ｂ地区	SE1	北東端杭	79.4	－	5.5	芯持ち材	35	リョウブ。両端削利。
311	270（No.81）	１次Ｂ地区	SE1	東南端杭	89.0	5.9	8.9	芯持ち材	36	両端削利。ホゾ１ヶ所。
312	118	１次Ｂ地区	SE1	西南端杭	(41.7)	5.7	－	辺材		クリ。先端1/3未加工。つぶれる。側板基準杭。
62-313	223（No.83）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材北②	72.5	23.3	2.3	辺材	168	スギ。楕円形孔２ヶ所。
314	224（No.74）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材北③	71.5	21.4	2.3	辺材	169	スギ。転用材。
315	221（No.82）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材西上部	83.0	6.4	1.9	辺材	166	ケヤキ。
316	220（No.73）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材西②	75.5	25.7	1.9	辺材	165	スギ。
317	219（No.76）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材西③	76.3	15.8	2.4	辺材	164	スギ。
63-318	218（No.77）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材南①	68.7	7.8	1.3	辺材	163	スギ。
319	217（No.75）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材南②	77.5	6.5	1.9	辺材	162	スギ。
320	226（No.78）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材南③	70.7	20.5	2.4	辺材	171	スギ。転用材。ホゾ、円孔、くぼみあり。
321	227（No.72）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材東①	84.0	18.1	1.9	辺材	172	スギ。
322	225（No.71）	１次Ｂ地区	SE1	井戸側材東②	81.4	18.0	2.0	辺材	170	スギ。

第24表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層井戸側材他観察表

（　）は残存法量を示す。

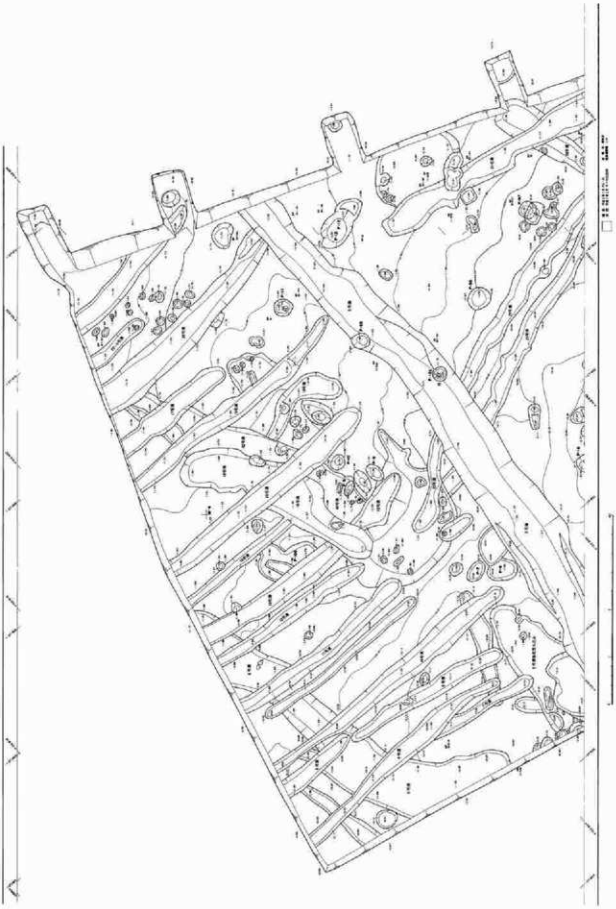
図版番号	実測番号	地　区	遺構名	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	同定番号	備　考
106-818	57	１次Ａ地区	包	円形板	径10.3	－	0.6	柾目どり	69	ヒノキ。腐食顕著。
819	53	１次Ｂ地区	包	円形板	径約15	－	0.8	柾目どり	28	スギ。腐食顕著。
820	43	１次Ｂ地区	包	円形板	径16.7	－	0.7	柾目どり	23	スギ。腐食顕著。
821	49	１次Ｂ地区	包	円形板	径18.4	－	0.8	板目どり	25	サワラ。
822	48	１次Ｂ地区	包	円形板	径17.9	－	0.8	柾目どり	24	スギ。片面刀子痕。
823	35	１次Ａ地区	包	曲物容器底板	(29.6)	－	1.2	板目どり	64	スギ。有段。被熱痕。
824	60	１次Ａ地区	包	板状木製品	10.7	2.7	0.9	板目どり	71	クリ。
825	129	１次Ａ地区	包	板状木製品	11.3	8.1	1.6	柾目取り	83	スギ。一辺は略円形。
826	130	１次Ｂ地区	包	板状木製品	(30.9)	5.4	1.2	辺材	43	スギ。
827	125	１次Ｂ地区	包(礫群集中)	杭状木製品	(24.8)	－	径5.2	芯持ち材	42	アカマツ。先端1/4未加工。つぶれる。
828	62	１次Ｂ地区	包	板状木製品	47.2	3.5	1.2	板目どり	32	スギ。一端先細り。
829	236(No.121)	１次Ｂ地区	包含層　木製品①	部材	104.5	17.6	6.7	辺材	181	スダジイ。割材。
830	235(No.117)	１次Ｂ地区	包含層　木製品②	部材	(94.8)	25.6	8.7	辺材	180	スダジイ。

第25表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層包含層出土木製品観察表

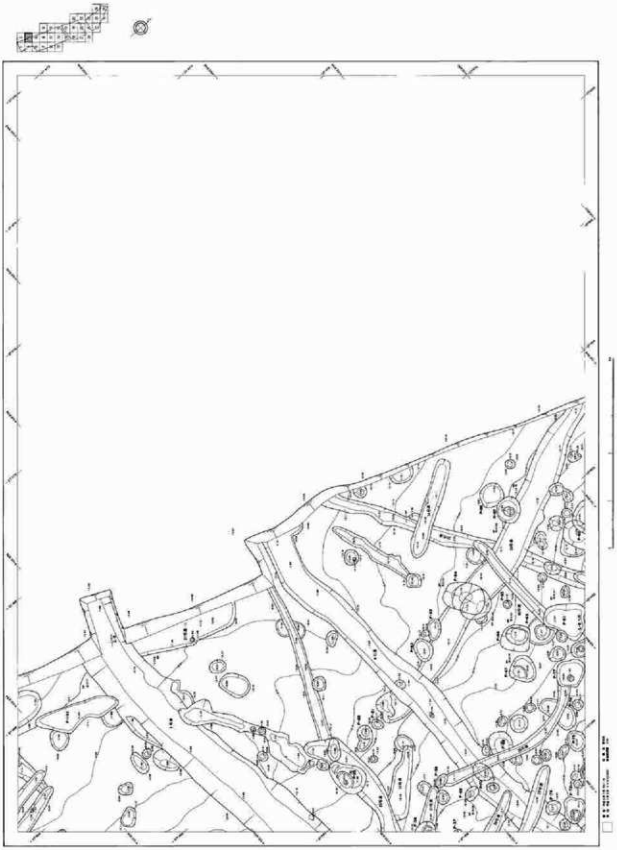
（　）は残存法量を示す。

図版番号	実測番号	地　区	遺構名	器　種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	木取り	同定番号	備　考
86-539	114	１次Ａ地区拡張	SD1	円形板	径16.8		0.5	辺材	78	スギ。
540	46	１次Ａ地区	SD1	円形板	径17.3	－	0.6	柾目とり	67	スギ。木釘。
541	111	１次Ａ地区	SD1 南肩部	棒状木製品	(27.4)	4.3	3.0	辺材	75	スギ。断面薄鉞状。先端先細り。
542	109	１次Ａ地区	SD1	板状木製品	48.3	6.7	0.9	辺材	73	スギ。一部被熱痕。
543	115	１次Ａ地区拡張	SD1 最下層	板状木製品	(51.0)	2.9	0.5	辺材	79	スギ。
544	112	１次Ａ地区	SD1	板状木製品	30.1	16.0	2.5	辺材	76	スギ。片面雑な切断痕。
545	41	１次Ａ地区	SD1 上層	棒状木製品	(12.7)	－	0.7～0.8	辺材	65	スギ。先端親利。
546	108	１次Ａ地区拡張	SD1 上層	板状木製品	(20.7)	－	1.6	辺材	72	スギ。側面多角形状の加工。
547	113	１次Ａ地区	SD1	有孔板状木製品	14.1	4.2	2.4	辺材	77	ニヨウマツ類。方形孔１ヶ所。1.8×1.4cm。
548	126	１次Ａ地区	SD2 上面	有頭棒状木製品	(11.0)	2.5	1.9	辺材	80	スギ。先端部側面肥厚。断面略方形。
87-549	33	１次Ａ地区	SD2	円形曲物容器蓋	(41.5)	－	1.6	板目とり	63	ヒノキ。綴じ孔・把手２ヶ所、側板用木釘。
550	32	１次Ａ地区	SD4	楕円形曲物容器底板	(26.7)	－	1.3	板目とり	62	スギ。有段木釘。
551	34	１次Ａ地区	SD4	曲物容器底板	約39	－	1.8	板目とり		有段。
552	44	１次Ａ地区	SD2	円形板	17.6	－	0.7	柾目とり	66	スギ。刺突痕？
553	36	１次Ａ地区	SD4	曲物容器側板	－	7.2	0.5	板目とり	17	スギ。内面刀子痕。
554	54	１次Ａ地区	SD19 底	円形板	11.0	－	0.9	柾目とり	68	スギ。
555	275　(特1)	１次Ａ地区	SD4	木履	(26.7)	14.2	6.4	板目とり	158	スギ。内面に指痕２ヶ所。
556	128	１次Ａ地区	SD4 上面	棒状木製品	(45.7)	1.9	1.6	辺材	82	スギ。
88-557	56	１次Ｂ地区	SD20	円形板	約16	－	0.7	柾目とり	30	スギ。目釘？
558	119	１次Ｂ地区	SD20	木錘	7.4	12.8	3.5	辺材	37	アカガシ亜属。方形孔１ヶ所。
559	195　(特6)	１次Ｂ地区	SD21	横櫛	(2.5)	(4.0)	0.9	柾目取り	140	スギ。白木、漆32残存。
560	29	１次Ｂ地区	SD23	円形板	径17.6	－	0.9	柾目とり	15	スギ。木釘みえず。
561	55	１次Ｂ地区	SD23（西側集石下）	円形板	径15.0	－	1.0	柾目とり	29	スギ。一面黒褐色漆状皮膜あり。
562	120	１次Ｂ地区	SD23	杭状木製品	(11.6)	－	径2.1	芯持ち材	38	カヤ。先端親利に加工。
563	63	１次Ｂ地区	SD23 底	弓弭	(18.2)	－	径2.6	芯持ち材	33	カヤ。再加工。
564	124-1	１次Ｂ地区	SD23	棒状木製品	(21.0)	2.5	1.1	辺材		先端部被熱痕。
565	124-2	１次Ｂ地区	SD23	棒状木製品	(17.8)	1.4	0.7	辺材		
566	122	１次Ｂ地区	SD23	棒状木製品	(28.4)	－	径0.6	芯持ち材		枝除去。
567	30	１次Ｂ地区	SD23	斧柄	30.0	－	径2.2	芯持ち材	16	コナラ節。把手部分のみ樹皮残る。
568	229（№84）	１次Ｂ地区	SD24	棒状木製品	109.6	5.1	1.3	辺材	174	スギ。
89-569	121	１次Ｂ地区	SD23	加工材	(28.8)	5.1	4.5	辺材	39	スギ。１面乱雑に加工。
570	123	１次Ｂ地区	SD23 屈曲部	板状木製品	(30.2)	5.2	1.3	辺材	40	スギ。

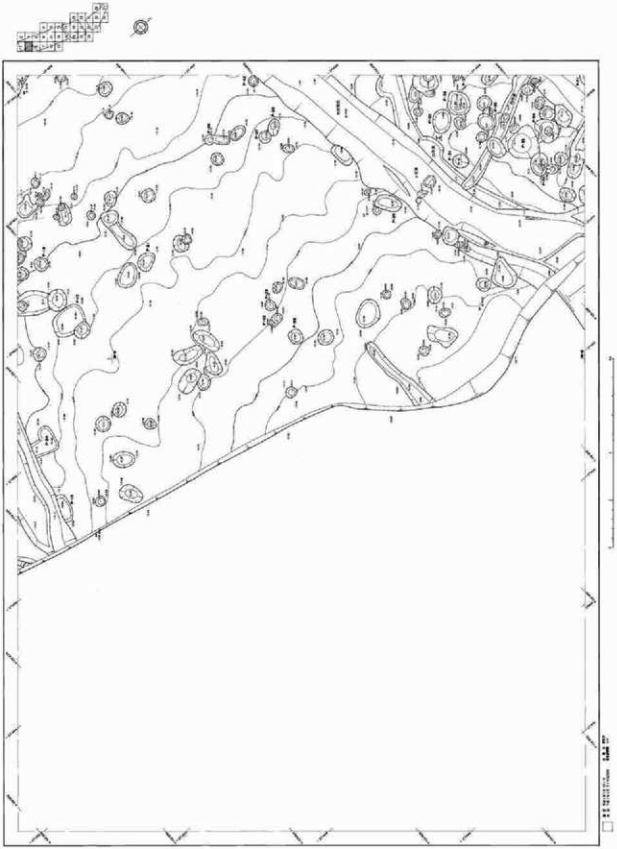
第26表　第１次調査　Ａ・Ｂ地区下層溝出土木製品観察表



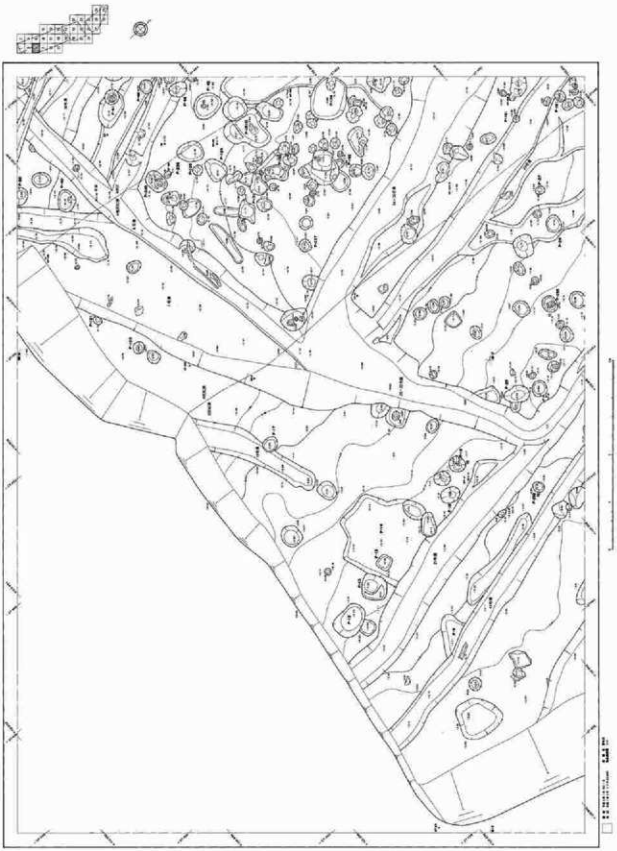
第108図　A・B地区遺構平面図1（S＝1/80）



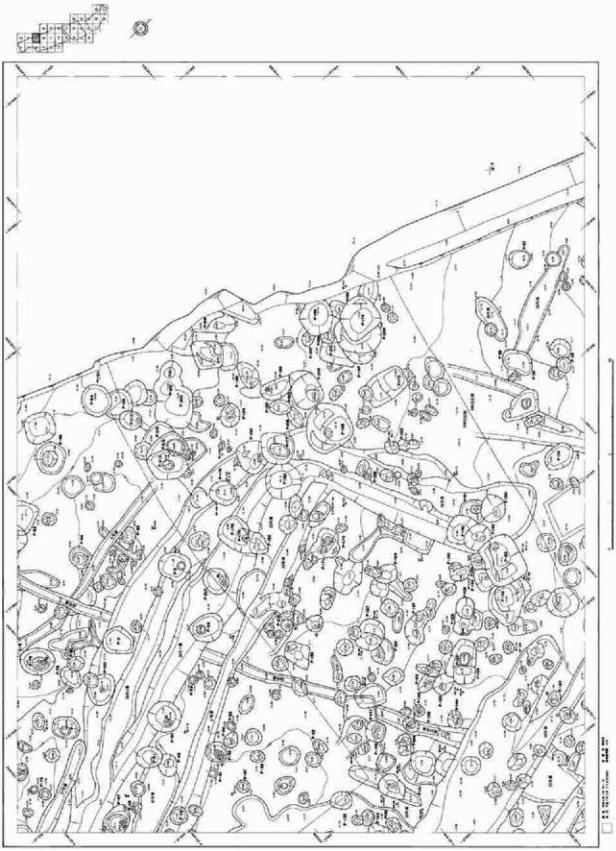
第109図　A・B地区遺構平面図2（S＝1/80）



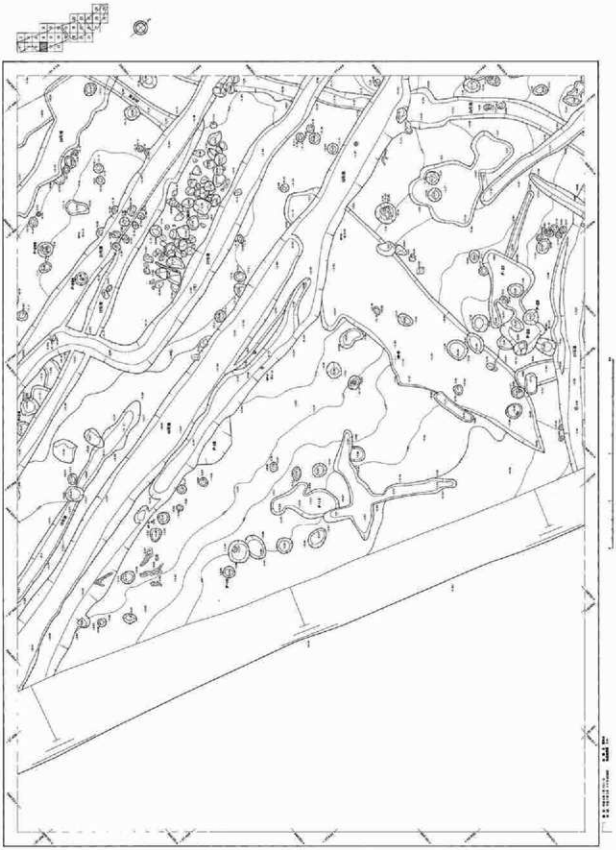
第110図　A・B地区遺構平面図3（S＝1/80）



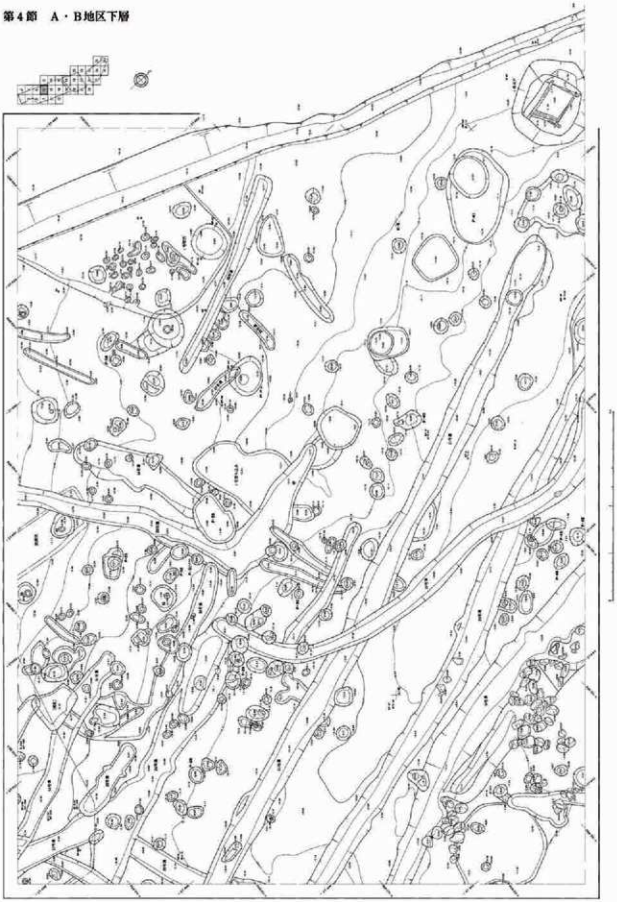
第111図　A・B地区遺構平面図4（S＝1/80）



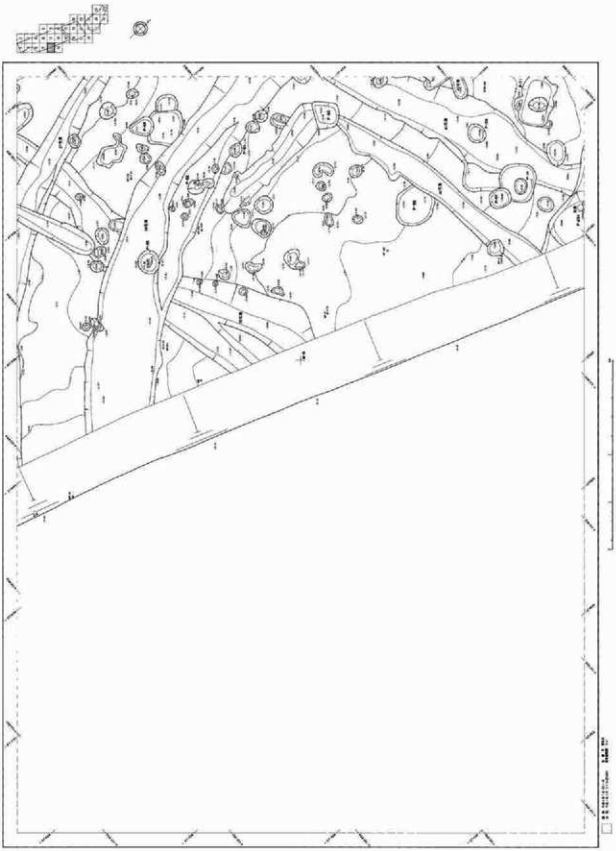
第112図　A・B地区遺構平面図5（S＝1/80）



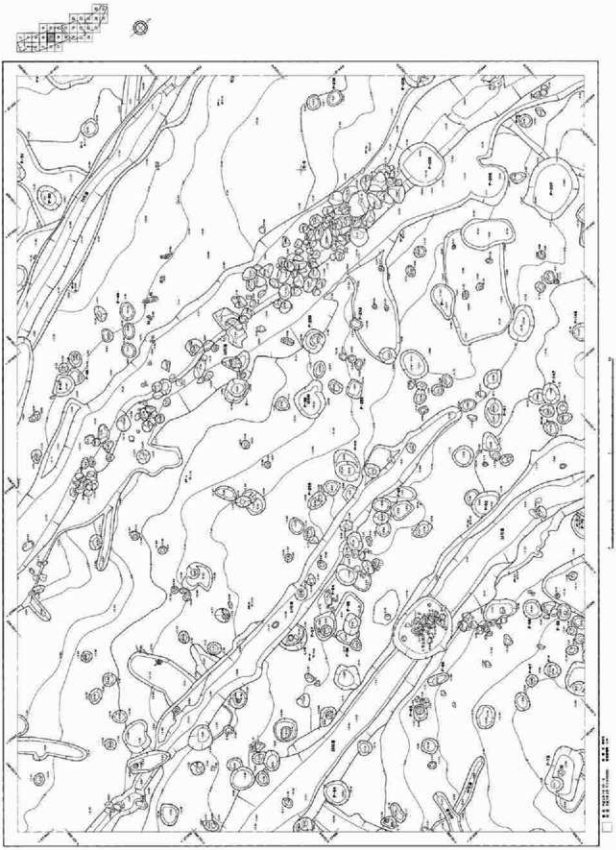
第113図　A・B地区遺構平面図6（S＝1/80）



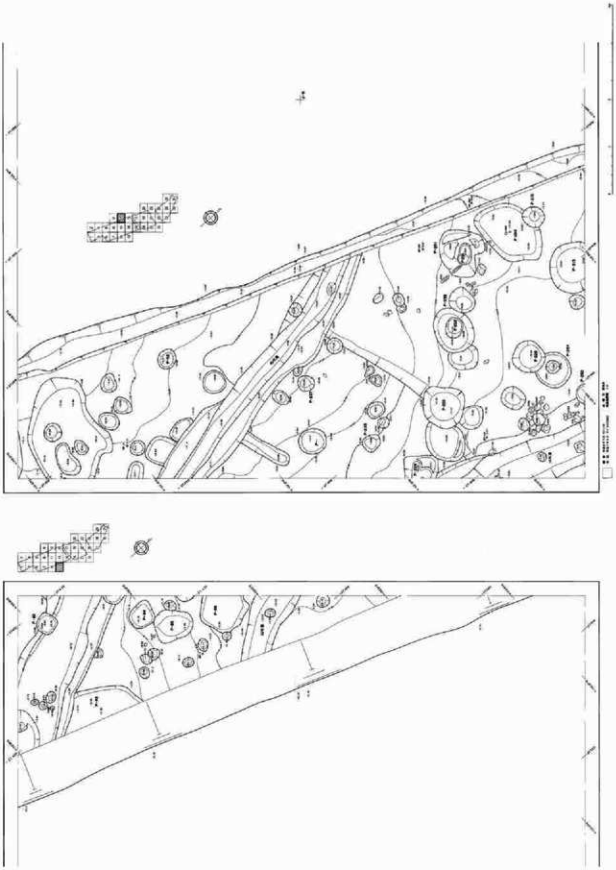
第114図　A・B地区遺構平面図7（S＝1/80）



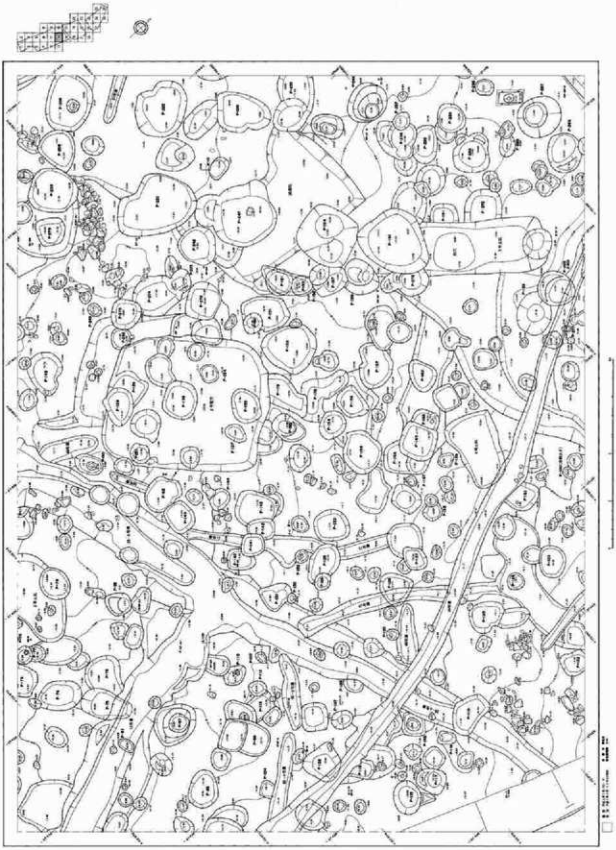
第115図　A・B地区遺構平面図8（S＝1/80）



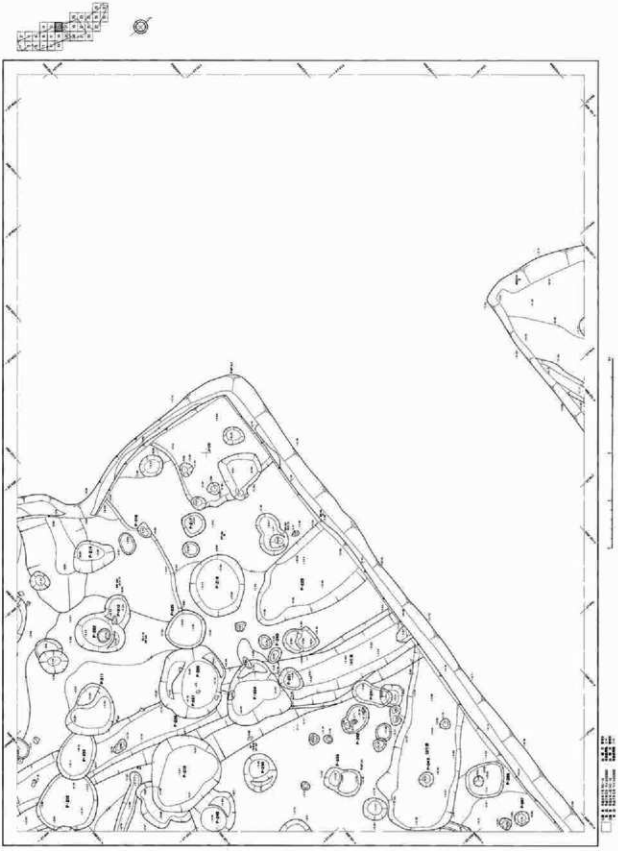
第116図　A・B地区遺構平面図9（S＝1/80）



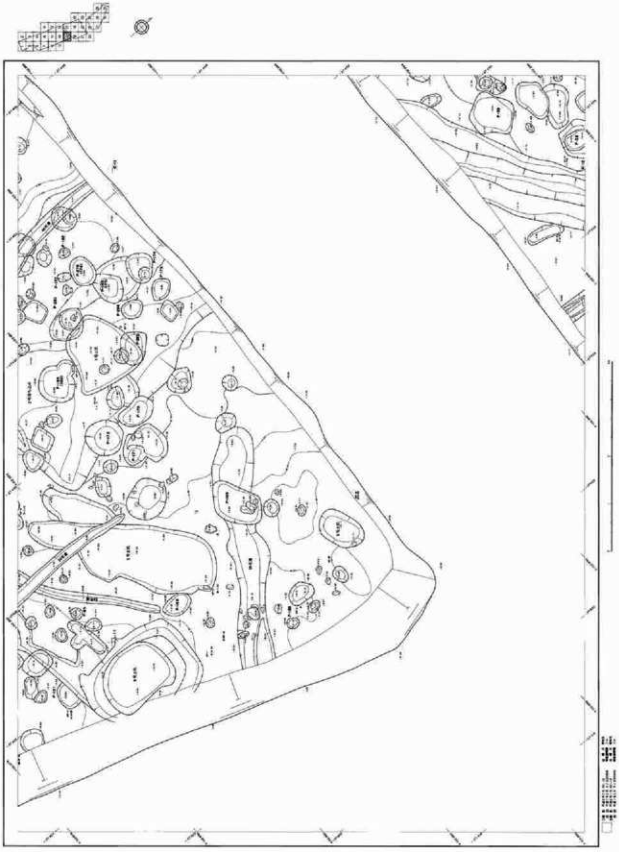
第117図　A・B地区遺構平面図10（S＝1/80）



第118図　A・B地区遺構平面図11（S＝1/80）



第119図　A・B地区遺構平面図12（S＝1/80）



第120図　A・B地区遺構平面図13（S＝1/80）

第5章　Ｃ・Ｄ 地 区

Ｃ地区では弥生時代後期～近世にわたる生活面を計５面（第Ⅴ面～第０・Ⅰ面）確認し、Ｄ地区では縄文時代中期～近世にわたる生活面を計７面（第Ⅶ面～第０・Ⅰ面）確認した。第１次調査では第０面および第Ⅰ面を、第２次調査（Ｄ地区は第２・３次調査）では第Ⅱ面以下の調査を行った。本書では、そのうちの第０面および第Ⅰ面の遺構群を報告する。第Ⅱ面以下については明年度以降に報告を予定している。

第1節　Ｃ　地　区

1．調 査 の 概 要

Ｃ地区第Ⅰ面は、14世紀中頃を下限とする水田域（第Ⅱ面）が土砂流入により埋没した後に形成された集落跡である。Ｄ地区第Ⅰ面に続く生活面であり、14世紀後半～16世紀前半が主体と考えられる。遺物は認められるものの、16世紀後半～耕地整理が実施された昭和23年頃に位置付けられるＤ地区第０面に続く遺構は明確には検出されなかった。ただ、その中で調査区西隅で検出された溝群は井戸（SE４）埋土を切って（第133図　断面Ｔ）設けられており、伴出遺物はないものＣ地区の主体である建物関連遺構群の中では異質なことから、これらを第０面遺構とみなし抽出、別項として取り扱った。Ｃ地区では旧耕作土にいたるまで削平し耕地整理を行っており（第９図、北西壁断面）、この第０面のほか第Ⅰ面遺構群においても、調査区南東端が後世の開削により、調査区北東壁に接する部分や北西隅では現在Ｃ・Ｄ地区間を流下する大谷川の旧流により削られていた。ピットも浅いものが多く全般に削平を被っているようである。

Ｃ地区第Ⅰ面では、掘立柱建物10棟および掘立柱建物の柱穴となるピット多数、井戸４基、土坑、溝などを検出した。遺物は中世土師器、陶磁器、石製品、銅銭、柱根などが出土している。

なお、調査時には、検出平面プランの比較的大きいものをピットと区別し土坑と呼称したが、必ずしも明確な基準によるものではない。ピットと同等規模のものもあり、掘削後に柱根が検出されるなどしたことにより柱穴と分かったものもある。しかし、遺物注記等での混乱を避けるため改称はせず、遺構図版でもそれぞれ分けて掲載している。以下、留意していただきたい。

2．第　０　面

西隅溝群（第133図）

上述のように伴出遺物はなく時期は不明だが、調査区西隅で南北に走るSD６より西側、I-11区周辺で検出された溝群を第０面遺構として報告しておきたい。

主軸方位Ｎ-15°-Ｅを測る南北方向からやや東に振れる溝群と、これにほぼ直行する溝群があり、幅20㎝～40㎝、深さ10㎝～20㎝、間隔は60㎝～80㎝で錯綜気味に重複しており、畠畝溝跡と考える。SE４、SD７を切り、図化しきれていないがSD６上にも伸びていた。覆土は上部が褐色粘砂質土で、底面に褐色粗砂や黄白色細砂（断面Ｔ）あるいは暗灰白色細砂（断面Ｕ）などが堆積しており、帯水のあったことが推測される。

第121図　C・D地区第0・Ⅰ面平面図（S＝1/400）

３．第　Ⅰ　面

掘立柱建物

調査区では柱穴と思われる多数のピットを検出し、中には柱根を遺存するものもあった。その中から、現地での把握を主とし室内での検討を加え、不確実なものもあるが計10棟の掘立柱建物復元案を示した。ピットは錯綜しており、柱穴としなかった中にも柱穴は多いと思われ、棟数はより増えるものと考えている。また、総柱建物となるものも含まれる可能性があるが図示しきらず、大方は側柱建物として示した。

ピットは隅丸方形、不定円形、不定長方形、不定楕円形などがあり、長径で50㎝～130㎝、深さは20㎝から深いもので70㎝と多様である。これらの属性に一定の傾向は抽出できなかった。先述のように、削平を受け、また、遺物の少ない状況では時期差も明確にし難く不確定だが、土石流後の多数の山石を含む砂礫土上の立地にあっては、掘方掘削から柱建て上げに至るまでに穴壁崩落の多々あったことが推測され、端正なピットをなすことは困難だったのではないかと考える。

SB１（第123・131・134図）

J-13・K-13区に位置する。東桁行２間、西桁行３間、梁行２間の側柱建物とするが、桁行中央にP13、P25南等を柱穴とした２本柱が通る可能性もある。桁行630㎝×梁行580㎝、主軸方位N-53°-Wを測る。P16・17・21・23・40・52、SK２等を柱穴とする。柱穴内部に自然石が詰まるものが多く、P40は第138図81に図示した直径約12㎝を測るクリの芯持ち材柱が、P17は78に図示した直径約17㎝を測るイヌシデ属の芯持ち材柱が遺存していた。SE２やSD２と重複し、これらより古い建物とみられる。第135図13～16はP13出土のもので、うち、15・16は15世紀後半～16世紀前半代に位置付けられる京都系土師器皿である。

SB２（第123・134図）

J-13区に位置する。南桁行２間または３間、北桁行２間、梁行２間の側柱建物で、桁行580㎝×梁行400㎝、主軸方位N-63°-Wを測る。P８・25南等を柱穴とし、東桁ラインから少しずれるがP12も柱穴の一つとみた。P25南ピットはマツとみられる柱表皮が遺存した。また、関係は決定できないが、北東辺には小型の石組井戸SE１が接して存在する。

SB３（第124図）

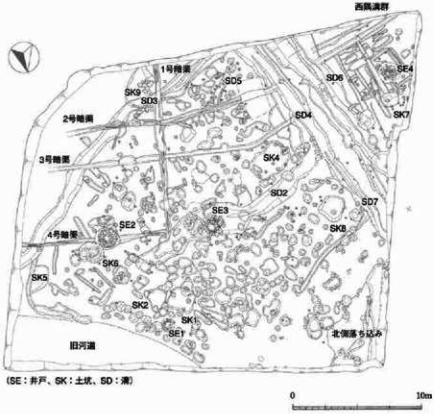
I-13・J-13区に位置する。桁行３間、梁行２間の側柱建物で、桁行730㎝×梁行460㎝、主軸方位N-148°-Wを測る。P９・31・34・49等を柱穴とし、P９・34・49に柱根が遺存し、同定を行った第138図79に図示したP49柱は表皮を伴うニヨウマツ類であり、直径約13㎝。南隅を接するSE３よりも古い建物とみられ、また、西隅のP９との切り合いよりSK１より新しい。P31出土の第135図３は凝灰岩を剝り抜いた行火で、底面隅をわずかに加工し高さ約0.5㎝の足を削り出す。

SB４（第124図）

I-13・J-13区に位置し、東側が旧河道により削平されている。桁行３間（以上）、梁行２あるいは３間の側柱建物で、主軸方位N-48°-E、梁行630㎝を測る。P３・12等を柱穴とし、P10・31も柱穴となるかもしれない。建物内にはSK１・２がかかり、うち隅丸方形のSK１は建物と向きを同じくしており、内部施設の可能性がある。

SB５（第125図）

J-12・13区に位置する。西桁行３間、梁行３間、主軸方位N-130°-W、桁行700㎝×梁行600㎝



第122図　Ｃ地区第Ⅰ面主要遺構配置図（Ｓ＝1/200）

の側柱建物を想定したが、東桁行、北梁行については柱穴を明確に指摘できない。SD２と重複し削平を考慮するものの、柱間寸法も統一がなく想定に問題が残る。P21・36・46・47等を柱穴とし、P46・47に柱根が残り、第138図81のP47柱は直径約11cmを測るイヌシデ属の芯持ち材柱である。

SB６（第125図）

J-11・12区に位置する。桁行３間（以上）、東梁行２間の側柱建物で、西側プランは試掘坑、SD４にかかり不明。主軸方位N-57°-E、桁行480cm（以上）×梁行360cmを測る。P37～39・42・43等を柱穴とする。P43は身のみとなったクリ柱が出土するが７号掘建柱建物に伴う可能性もある。内部に位置するSD５周囲には溝状に細長く鉄分沈着が認められ、付近には20cm×20cmの範囲で厚さ５cmの粘土貼り付けが認められた。溝とともに、SB６の内部施設をなしたものかもしれない。P38からは第135図３の土師器皿、４の北宋銭「皇宋通宝」が、P39からは５～７の中世土師器皿が出土している。６は灯明皿として使用され、口縁部に油煙が付着する。P43からは８の18世紀代の灰釉陶器碗が出土している。

SB７（第126図）

J-11・12区に位置する。東桁行２または３間、西桁行２または３間、南梁行１間、北桁行２間の側柱建物で、柱間隔が不揃いで想定に問題もあろうが、北隅にSK４を内包する建物と考える。主軸方位N-31°-W、桁行580cm×梁行300cmを測る。P42・43等を柱穴とし、北にはずれたP28も関連するかもしれない。

SB８（第126図）

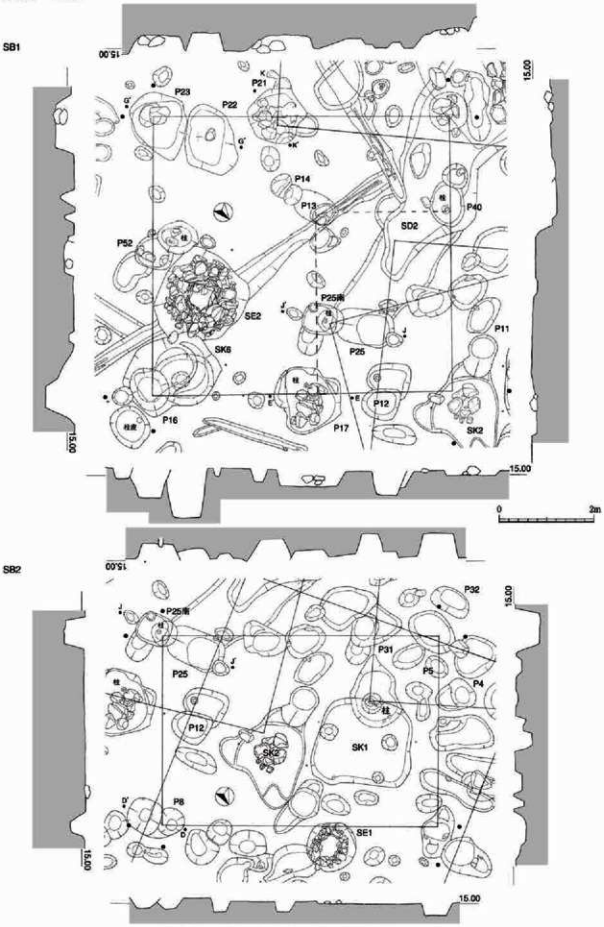
J-12・13区に位置する。西側はSD７にかかり不明だが、南桁行２間以上、北桁行３間（以上）、東梁行２間の側柱建物で、主軸方位N-87°-W、桁行850cm（以上）×梁行380cmを測る。P26・28・29・48、SK８西脇ピット等を柱穴とする。P28からは柱小片が検出され、柱根を遺存したP29からは第135図９の中世土師器皿が出土した。SD２に重複する。

SB９（第127図）

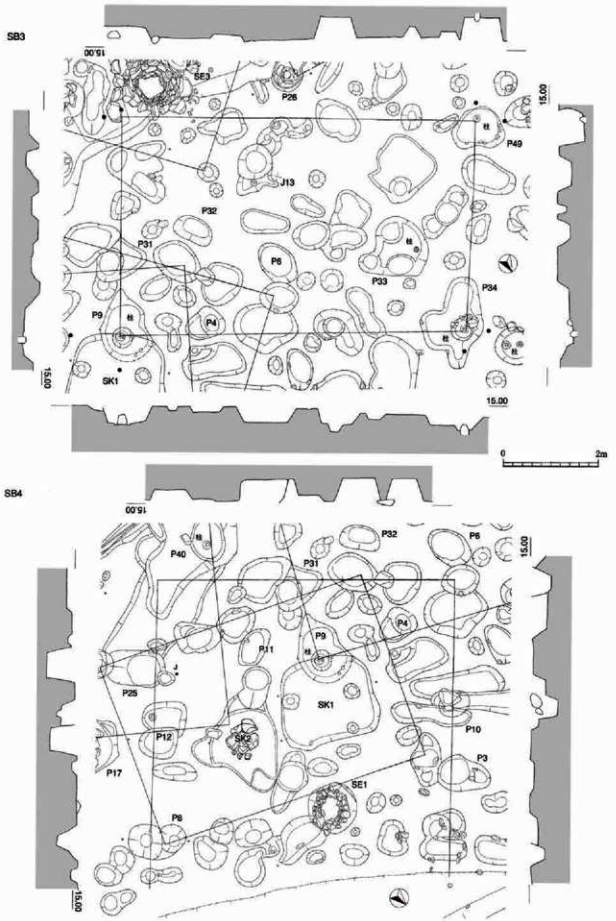
J-12・13区に位置する。西側は河川による削平跡（北側落ち込み）にかかり不明だが、東桁行２あるいは３間（以上）、南梁行２間（以上）の側柱建物を想定する。東桁行はしっかりするものの、梁行の柱穴は浅く問題は残る。N-15°-W、桁行580cm（以上）×梁行420cm（以上）。SK８を取り込んだプランも想定される。

SB10（第127図）

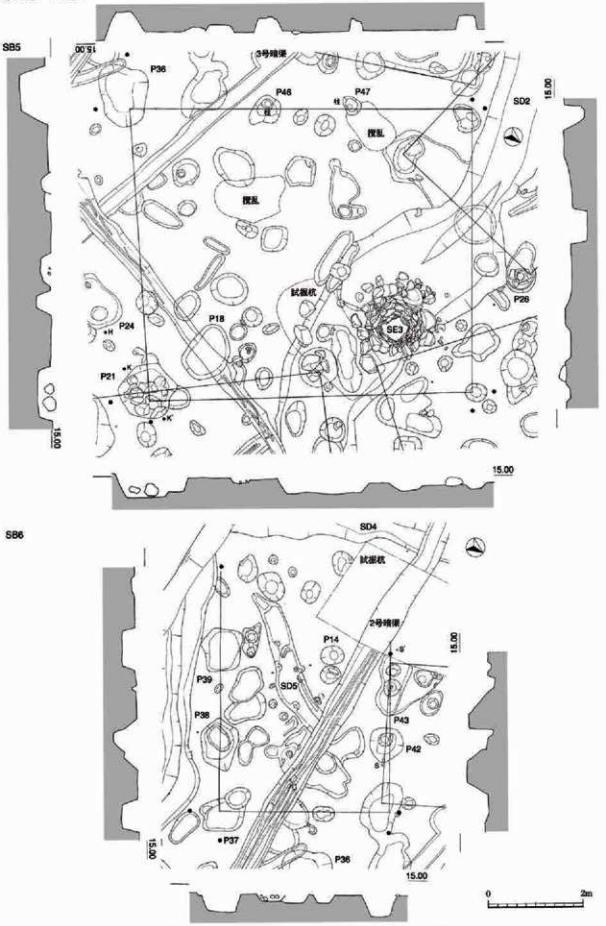
J-12・13区に位置する。径100cm～180cm、深さ50cm～100cmと大柄のP41・45・SK７を結び想定した。調査区北西壁に接した２間（以上）×２間（以上）の建物である。主軸方位N-72°-E、一辺440cm（以上）を測る。P41から第135図10の15世紀前半代の中国製青磁碗、11の16世紀代の瀬戸・　美濃皿が、SK７からは12の中世土師器皿が出土している。



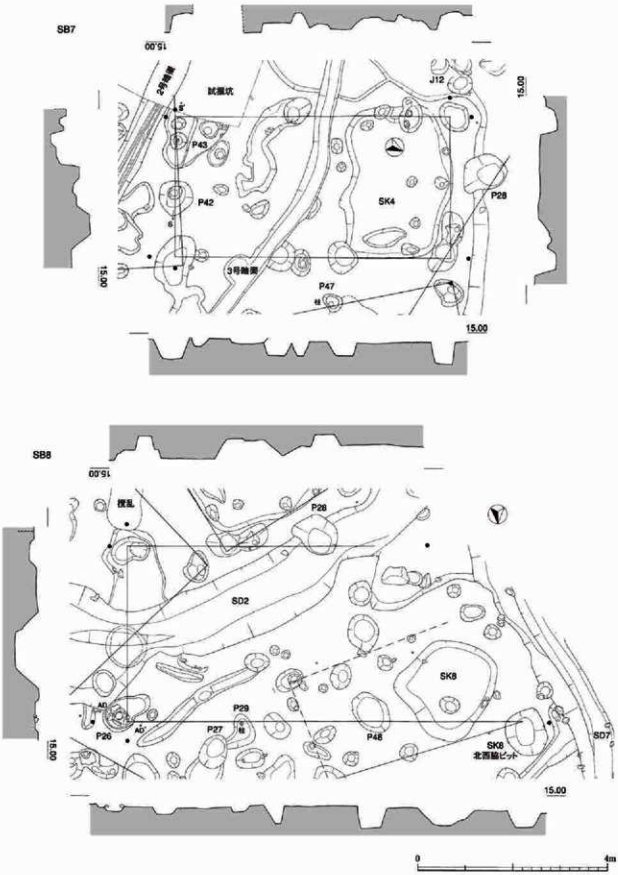
第123図　C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図1（S＝1/80）



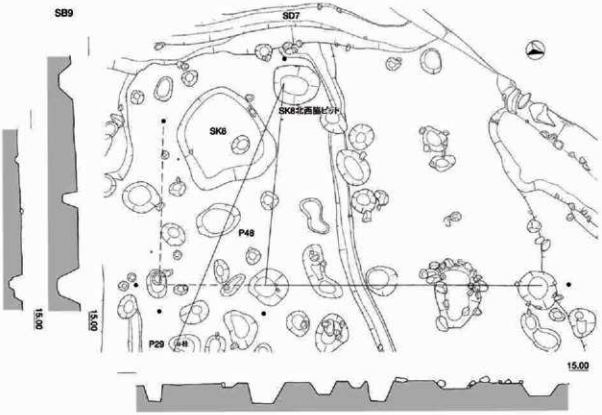
第124図　C地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図２（S＝1/80）

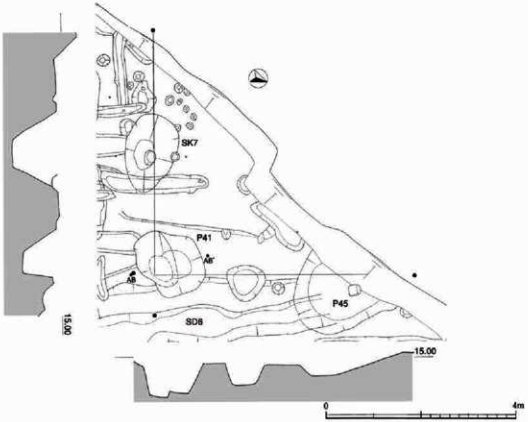


第125図　Ｃ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図３（Ｓ＝1/80）

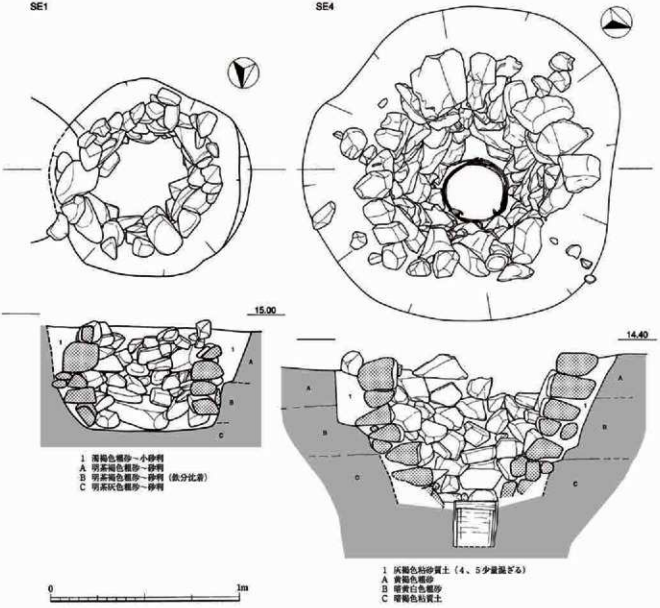


第126図　Ｃ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図４（Ｓ＝1/80）





第127図　Ｃ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図５（Ｓ＝1/80）



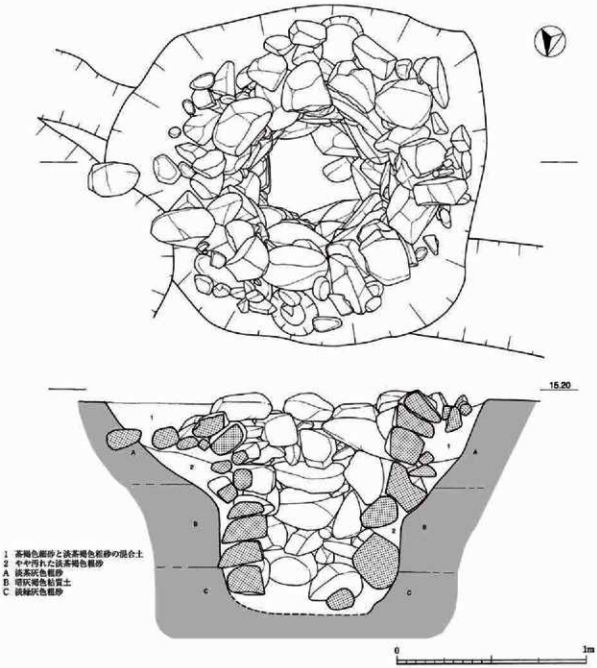
第128図　Ｃ地区第Ⅰ面SE1・4実測図（Ｓ＝1/20）

井　　戸

小型石組井戸１基、大型石組井戸３基を検出した。上記の掘立柱建物群に伴うと考えられ、用材には、土石流後周辺に多数散布していた自然石を用いたものと思われる。

SE１（第128図）

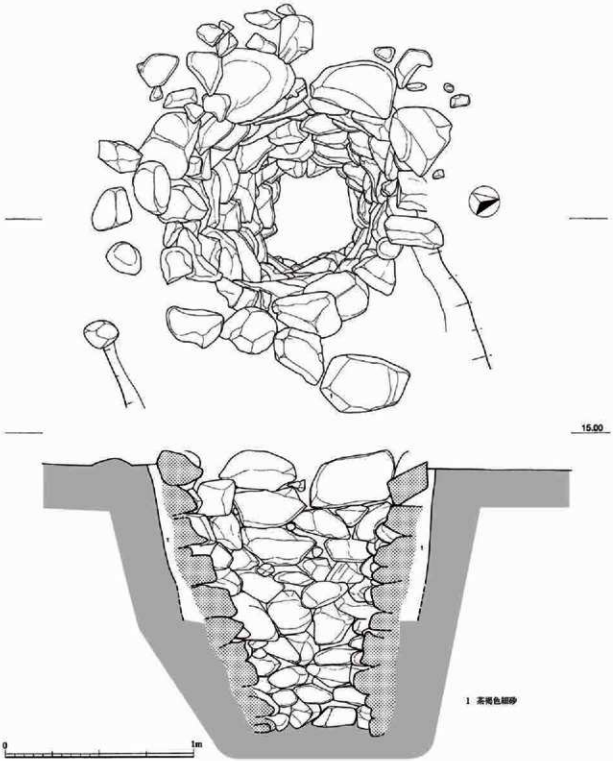
J－13区に位置する小型の石組井戸であり、検出時にはSK３と呼称したが、井戸跡と判明した時点で改称した。東接するピットに切られる。平面不整円形の掘方は検出面で直径104cm、断面逆台形をなし、平坦な底面で直径70cm、深さ55cmを測る。石組み平面形は北東にやや崩れる隅丸方形を呈し、垂直に近く組み上げられた内法は長径約55cm、短径約50cm、深さ55cmを測る。石組み下半は掘方壁に接し、上半は壁から最大で約20cm内側に入る。裏込め土は小砂利を含む濁褐色粗砂で小砂利が混じる。



第129図　C地区第Ⅰ面SE2実測図（S＝1/20）

SE２（第129図）

J-13区とK-13区境に位置する大型の石組井戸である。平面不整方形の掘方は検出面で直径約190㎝、断面逆フラスコ型をなし、底面は幅約70㎝、深さ110㎝を測る。東側は７段、他は６段に積まれる石組みは下半では方形をなし、上半では五角形から円形をなす。東側は垂直に近いが、西側は最下の石がはずれたためかやや崩れる。上縁で内法約80㎝、底で内法約45㎝、深さ約120㎝を測り、最下では古代の遺物包含層（B層）を掘り抜き淡緑灰色粗砂層（C層）に至っている。石組みには、下から４・５段目までは比較的横長で扁平な角礫を用いており、北・西・南面では長軸40㎝ほどの、東面では20㎝大のものが認められる。底辺で方形に組み上げる際には、四隅の礫は幅の狭い小口面を内側に向け、各辺では横長にし扁平面を重ねるものが多く、場所によってはこれらの間に小礫を充填する。



第130図　Ｃ地区第Ⅰ面SE3実測図（Ｓ＝1/20）

上半の２・３段では断面にみるように各礫とも、外側が下がっているが、これについては、掘方を含め、本井戸が他の石組井戸に比べ上半部の端正さを欠いているように見受けられることから、上半部にいたり重ねが乱れてきた石組みが崩落するのを防ぐために工夫したものと考える。

SE３（第130図）

Ｊ-12区に位置するＣ地区で最も大型の石組井戸である。平面不整円形の掘方は検出面で直径約150

cm、下半はプランを確認できなかったが、断面逆台形をなすとみられる。石組みは掘方に接して9段あるいは10段積まれる。底では不整な多角形をなし、底から3・4段上では北側は方形を、南側は丸く、上縁では不整円形をなす。断面形は比較的整った逆台形をなす。北側は垂直に立ち、南側は底から80cmまではやや外膨らみし、これより上は他の面と同様外傾する。上縁で内法約100cm、底で内法約50cm、深さ約150cmを測る。SE2と同じく最下は粗砂層に至るものとみられる。下から2段は長さ20cm前後、厚さ5cmの小振りの扁平礫を、これより上は長さ30cm～40cm、厚さ20cm前後の大角礫を用いる。SE2で認めたような礫を横にし扁平面を重ねるものが多く、場所によってはこれらの間に小礫を充填する。上縁では特に大きい礫が使われており、最大で長さ約45cm、一辺30cmの略立方柱のものがある。裏込め土からは第135図20の珠洲焼片口鉢、21～23の珠洲焼甕、24の越前焼すり鉢が出土している。20は15世紀代に、24は15世紀後半とみられる。

SE4（第128図）

I-11区に位置する大型の石組井戸である。平面不整円形の掘方は検出面で直径約170cm、下半はプランを確認できなかったが、半ばで段を介した断面逆台形を呈するとみられる。石組みはSE1・2と同様下半は掘方に接し、7段積まれる。他の井戸に比べ小型で不整な角礫を用いており、組み方も雑にみえる。平面形は不整円形をなし、断面形は逆台形で南側がやや崩れる。上縁で内法約70cm、底で約35cm。底に第138図87・88の曲物容器側板を重ね設置しており、検出面から曲物底まで約105cmを測る。円形の側板直径はそれぞれ40cm・36cm、高さは11.4cm・18.5cmである。87は底面外周に直径0.4cmの木釘跡が巡り、木釘が残る部位もある。ケビキ幅1cm、幅1.2cmの樹皮で綴じ合わせる。88はタガを3重に回すが、高さ18.5cmの内側のものは一度単品で綴じ、その外側に高さ10.7cmのタガを2重に回す。底外周に木釘跡が残り、ケビキ幅0.7cm～1cm、幅1.2cmの樹皮で内側は2列に、外側のものは1列に綴じ合わせる。第135図25の15世紀後半～16世紀前半の京都系土師器皿、26の行火は14世紀末～15世紀前半代とみられ凝灰岩剤り抜きで底面隅に高さ約0.5cmの足を削り出す。また、第138図85・86の削り出し白木の杓子が出土している。85と86は別個体とみられるが同様の作りをなし、合わせて復元すると全長約48cmとなる。匙部の85は復元長約16cm、幅8.4cm、厚さ1.3cmを測る。柄部の86は断面隅丸方形をなし中央部で幅2.7cm、高さ3cm、柄から匙部へは角をなし、匙部付け根は背面の平坦な断面かまぼこ形を呈する。樹種は85・86ともカキノキ属である。

SE2半截状況（北西から）

土　　坑（第131図）

計８基を報告する。頭初に記したように、規模においてピットとの明確な区分基準はなく同等規模のものも含まれるが、調査時の呼称のまま報告する。また、SK３については掘削後に井戸と判明したためSE１と改称しており、先に記述した。

SK１

J-13区に位置し、重複する柱穴Ｐ９より古い。約200㎝×180㎝の隅丸長方形を呈し、深さ約６㎝。底面は平坦。平面不整円形の掘方は検出面で直径約170㎝、内部に深さ５㎝～10㎝の小穴を３カ所にもつ。SB２およびSB４に重複しており、いずれかに伴う施設の可能性がある。

遺物は第136図27の瓦質の花瓶かとみられるものがある。14世紀後半～15世紀中頃のものであろう。

SK２

J-13区に位置する。約140㎝×160㎝の不定形を呈し、深さ約14㎝。内部に自然礫がつまる。SB１の柱穴の一つに想定した。

SK４

J-12区に位置する。約320㎝×210㎝の隅丸長方形を呈し、深さ約16㎝。内部に小ピットがいくつかある。SB７の一間分の梁間に丁度収まる配置が想定され、その内部施設の可能性がある。第136図28の中世土師器皿が出土している。

SK５

K-13区に位置し、溝に切られる。不整の長方形をなすとみられ、長辺約220㎝、深さ約20㎝、深さ約16㎝を測る。

SK６

J-13区、K-13に位置する。約120㎝×100㎝の不整円形を呈し、深さ約64㎝。P16に切られる。第136図29・30の中世土師器皿が出土している。

SK７

I-10区に位置し、畝溝とみられる溝に切られる。約168㎝×110㎝の偏楕円形を呈し、深さ約96㎝を測る。SB10の柱穴の一つと想定した。他の柱穴より大幅に深いが、同じく構成柱としたP41・45も大柄なピットであることから、発掘では明らかにできなかったが、重複して柱穴が存在した可能性も考慮しみなしたものである。覆土中位より第135図12の中世土師器皿が出土した。検出面に露出する２層には焼土粒が多く含まていた。

SK８

I-12区に位置する。一辺約180㎝の不整方形を呈し、深さ約12㎝を測る。SB８やSB９と重複あるいは外接する。

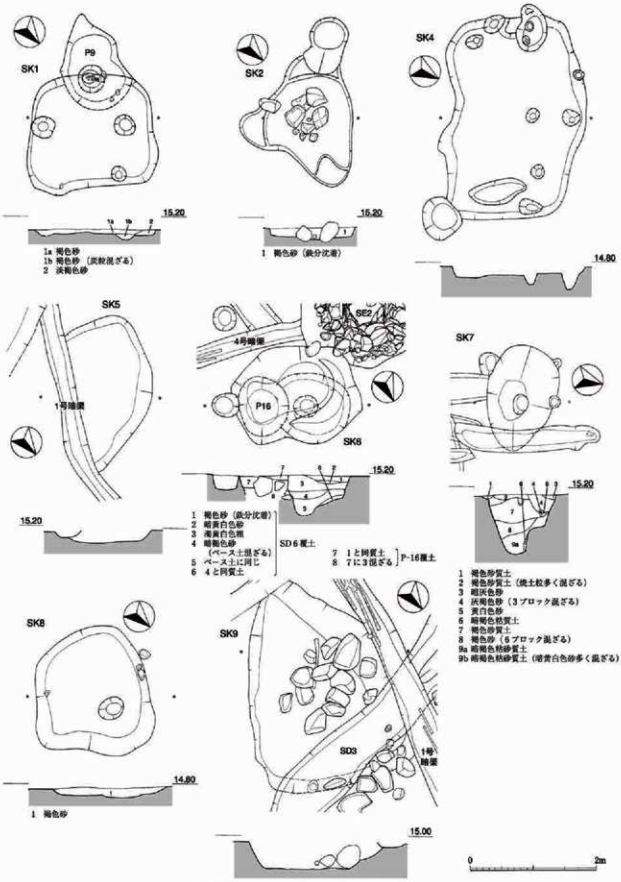
SK９

K-12区に位置し、１号暗渠およびSD３に切られる。長径約350㎝×短径260㎝の不整三角形を呈し、深さ約44㎝と他の土坑に比べ深い。内部に最大約60㎝の自然石が詰まる。第136図31の中世土師器皿、32の15世紀後半代の珠洲焼片口鉢が出土している。

溝

SD２（第132図）

I-12区、J-12・13区に位置する。J-13区のP25付近に始まり、緩やかに蛇行しながら下り、西端



第131図　Ｃ地区第Ｉ面SK実測図（Ｓ＝1/60）

でSD４に接する。比高差約20㎝。断面Ｙの観察からSD７よりも新しい溝である。SE３に重複する部分が最も幅広で約120㎝、深さ約30㎝、断面Ｌ部分では細まり幅約70㎝、深さ約８㎝、SD４に接する部分で再び幅を広げ約200㎝、深さ約10㎝。SE3に重複し、SE3周囲で幅を広げることから、この井戸に関連した排水溝的施設とも考えられる。井戸より西側のＪ-12区で第136図33の中世土師器皿、34の土錘が出土している。

SD３（第132図）

Ｊ-11区、Ｋ-11～13区に位置する。幅約100㎝～160㎝、深さ約５㎝～20㎝、北東から南西に弱く蛇行しながら下り、比高差20㎝～30㎝。南東側は削平を被っており不明確だが、SD４あるいはSD６とともに、本溝北西に配される掘立柱建物群を区画する溝をなす可能性がある。第136図35の土錘、36の中世土師器皿が出土している。

SD４・７（第133図）

Ｉ-11区、Ｊ-11区に位置する。SD２と接する地点より南をSD４、北をSD７と呼称した。関係は特定できなかったが、20㎝～150㎝間隔をおいて西にSD６が並走する。わずかに蛇行しながら南南東から北北西に延びる溝であり、東半部は中途で段をなし、SD４は幅約140㎝～180㎝、深さ約35㎝、SD７は細くなり幅約80㎝～100㎝、深さ約40㎝～50㎝、南南東から北にわずかに下り比高差約10㎝。SD２とともに本溝北東に配される掘立柱建物群を区画する溝をなす可能性がある。第136図37～40の中世土師器皿が出土し、うち、38は15世紀後半～16世紀前半代に位置付けられる京都系土師器皿である。ほか、41の砥石や、SD２との重複部分で42の15世紀後半代の珠洲焼片口鉢が出土している。

SD６（第133図）

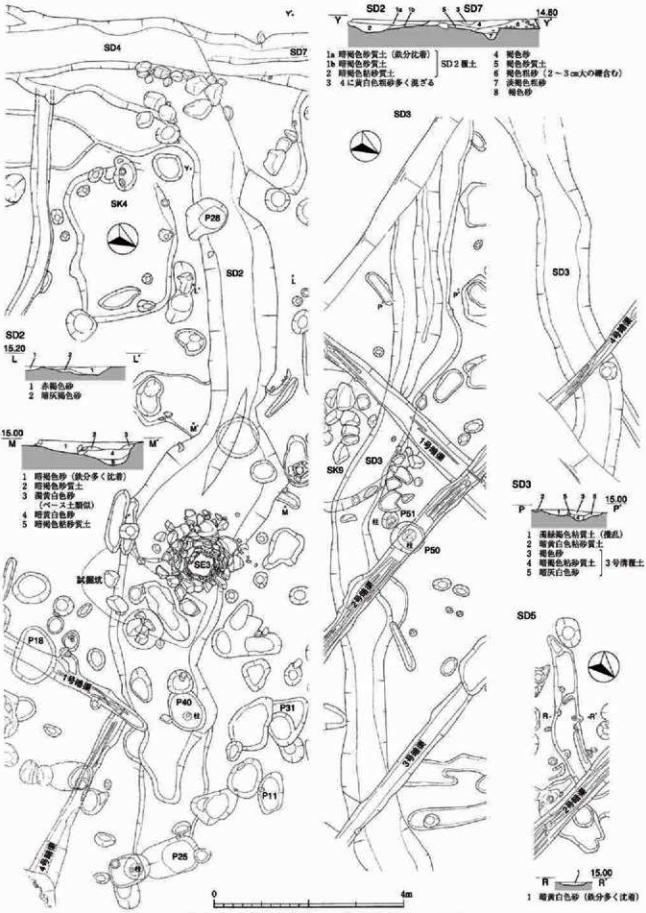
Ｉ-11区、Ｊ-11区に位置する。関係は特定できなかったが、20㎝～150㎝間隔をおいて東にSD４・７が並走する。ごくわずかに蛇行しながら南南東から北北西に伸びる溝で、南端では二股となり、北半は段掘りをなし、北端でP45を切る。幅約220㎝、深さは南端で約90㎝、北端で約45㎝、SD７は細くなり幅約80㎝～100㎝、深さ約40㎝～50㎝。比高差はほとんどなく、中位が両端より約20㎝高まる。SD２とともに本溝北東に配される掘立柱建物群を区画する溝をなす可能性がある。第136図43の越中瀬戸焼の皿は17世紀前葉の、44の白磁碗は近世の所産である。45の施釉陶器皿は19世紀以降のものとみられる。ほか46の鉄釉陶器すり鉢が出土している。

北側落ち込み（第122図）

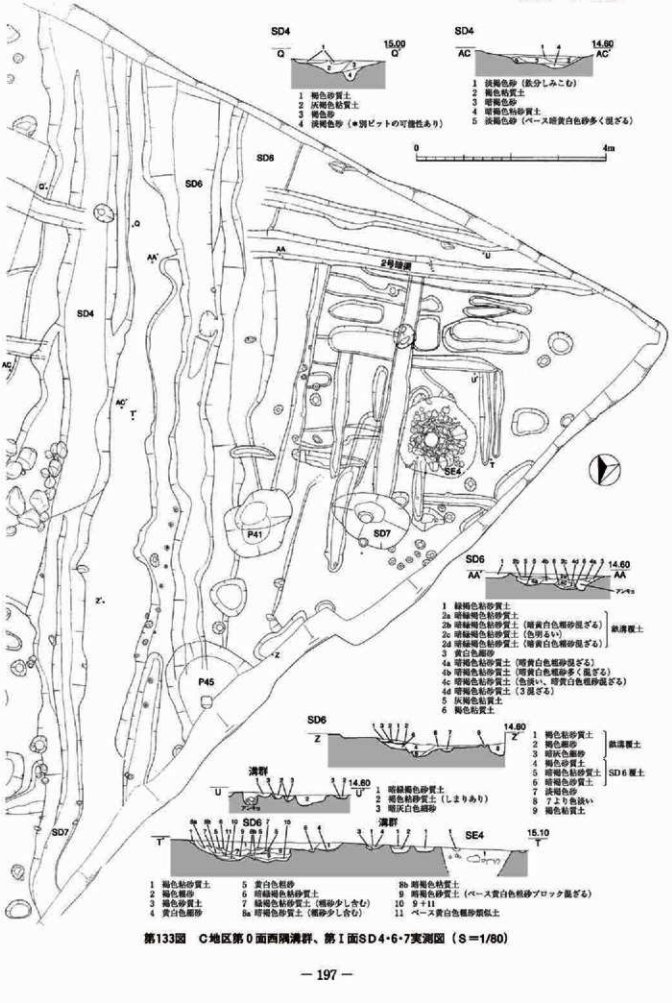
Ｉ-13区杭周辺の調査区北隅に接した東西約８ｍ、南北約４ｍの範囲が北東角に向けて傾斜していた。角で比高差約40㎝を測る。周辺には10㎝～50㎝大の自然礫が多数散乱し、調査区北壁部分でも観察されたが、第Ⅰ面期以降に発生した土石流により削平された跡である。第136図47～50が出土している。47は15世紀後半～16世紀代に位置付けられる京都系土師器皿、48は15世紀中頃の中国製白磁皿である。50は17世紀後半～18世紀代に比定される肥前陶器甕であり、Ｃ地区第Ⅰ面北端を削平した土石流の時期を暗示する遺物であろうか。

ピット（第123図）

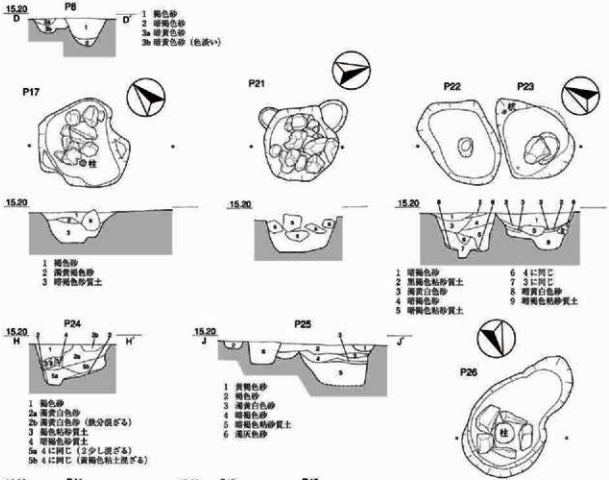
第135図13～18に、想定掘立柱建物柱穴に該当しなかったピット出土遺物を図示した。17はＫ-12区P19出土の陶器壺。19はＪ-11区P44出土の土錘である。



第132図　Ｃ地区第Ｉ面SD２・３・５実測図（Ｓ＝1/80）



第133図　Ｃ地区第０面西隅溝群、第Ｉ面ＳＤ４･６･７実測図（Ｓ＝1/80）

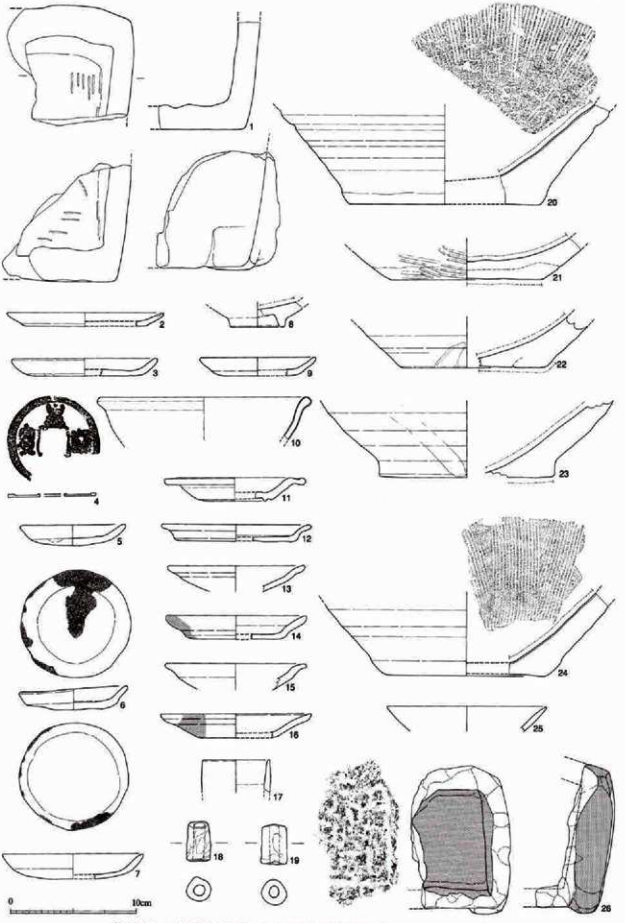


第134図　C地区第Ⅰ面ピット実測図（S＝1/60、P26：S＝1/30）

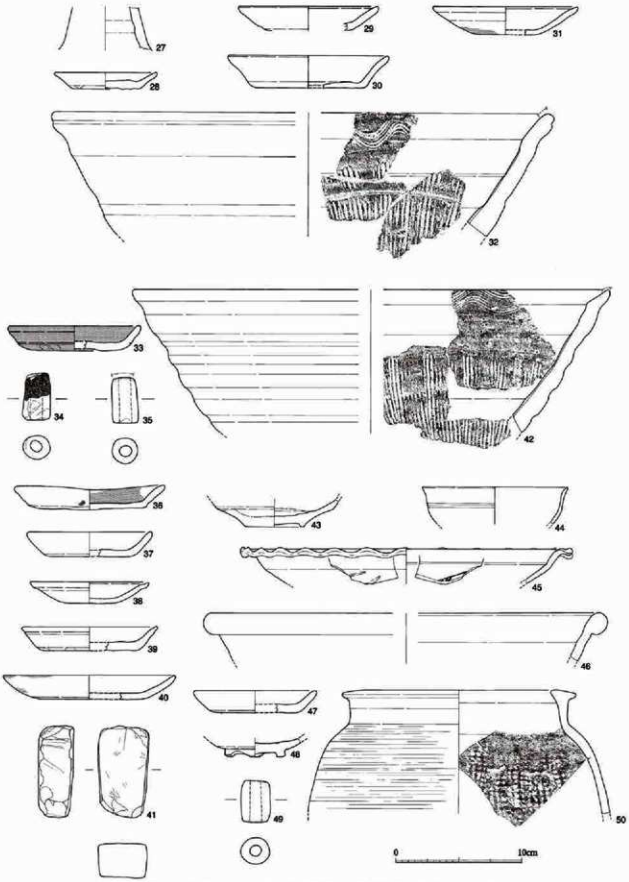
包含層出土遺物（第137図）

第137図に包含層および近代暗渠排水出土遺物を図示した。

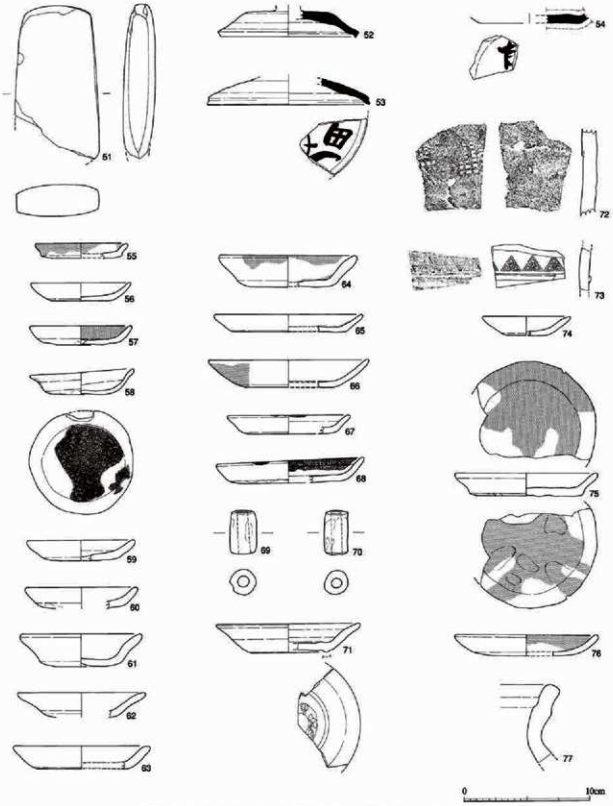
51は半折した短冊形磨製石斧で、側面は面をなす。52～54は下位面からの混入とみられる須恵器であり、52の蓋は天井部外面に「－」のヘラ記号が、53の蓋内面の墨書は「田地」の可能性がある。54の坏底部墨書は判読できない。58は底部外面に煤が、67は内面に、68は口縁部に油煙が残り、灯明皿として使用されている。72は能登産の瓷器系陶器甕、73は浅鉢型をなすとみられる火鉢であり、口縁部に近く、スタンプ文をめぐらす。内面にはススが付着し、胎土には海綿骨片を含む。14世紀後半～15世紀代に位置付けられよう。74・75の中世土師器皿は内面に油煙様のものが、75の外面には煤が付着する。77は越前焼甕である。



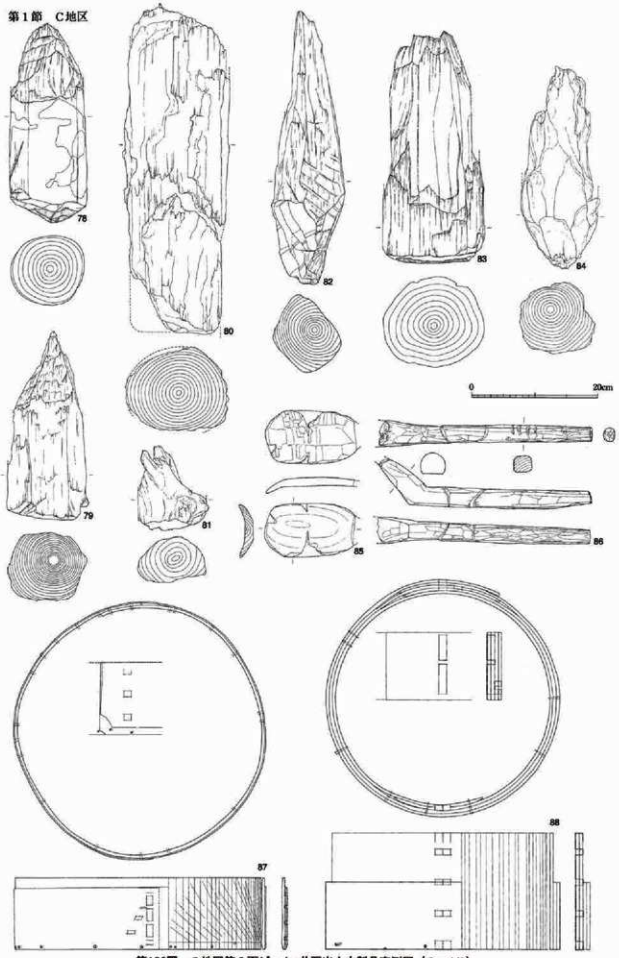
第135図　Ｃ地区第Ｉ面ピット・SE出土遺物実測図（Ｓ＝1/3，4:Ｓ＝1/1）



第136図　C地区第Ⅰ面SK・SD・北側落ち込み出土遺物実測図（S＝1/3）



第137図　C地区第Ⅰ面包含層・暗渠排水出土遺物実測図（S＝1/3）



第138図　Ｃ地区第Ⅰ面ピット・井戸出土木製品実測図（Ｓ＝1/6）

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地　区	グリッド	遺構名	種　類	器　種	口　径(cm)	器　高(cm)	底　径(cm)	遺存度	色調・内	色調・外	胎　土	備　考
135-1	石11	1次C地区	D-13-1	SB3P51	石製品	行火	—	—	—	—	淡黄色	淡黄色	凝灰岩	外面被熱痕
2	D 4	1次C地区	J-11-4	SB4P3	中世土師器	皿	12.4	1.1	10.2	1	浅黄色	浅黄色	細砂少量含む	
3	D 6	1次C地区	J-11-4	SB6P58	中世土師器	皿	11.6	1.4	9.5	2	浅黄色	浅黄色	細砂量、粗砂少量含む	
4	金91	1次C地区	J-11-12	SB6P38	金属製品	銅鈴	径2.4	—	—	—				北宋銭、「皇宋通宝」、残重量1.1ｇ
5	D19	1次C地区	J-11-4	SB6P99	中世土師器	皿	8.3	1.7	6.7	12	淡黄色	淡黄色	粗砂やや多く含む	
6	D18	1次C地区	J-11-4	SB6P99	中世土師器	皿	8.5	1.9	7.3	12	灰黄色	灰黄色	粗砂多く含む	灯明痕
7	D25	1次C地区	J-11-4	SB6P99	中世土師器	皿	11.2	2.0	9.5	2	淡黄色	淡黄色	細砂少量含む	
8	D150	1次C地区	K-12-4	SB6P43	灰釉陶器	碗	—	(1.9)	4.4	底-1	釉—オリーブ灰色	素地—暗灰色	微砂粒含む、気泡あり	摩耗調書
9	D 8	1次C地区	I-11-4	SB8P29	中世土師器	皿	8.1	1.5	6.2	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂をやや多く含む	摩耗調書
10	D147	1次C地区	I-11	SB10P41	青磁	碗	16.2	(3.4)	—	1	釉—オリーブ灰色	素地—淡橙色	微砂粒含む、気泡あり	中国製、二次被熱
11	D151	1次C地区	I-11	SB10P41	瀬戸・美濃	皿	10.8	1.9	5.0	1	釉—オリーブ灰色	素地—淡黄橙色	微砂粒含む、気泡あり	
12	D15	1次C地区	I-11-2	SB10SK7	中世土師器	皿	11.9	1.3	9.8	1	にぶい黄橙色	にぶい赤褐色	粗砂少量含む	
13	D37	1次C地区	J-13-2	SB1P13	中世土師器	皿	10.9	(2.1)	—	1	にぶい橙色	にぶい褐色	粗砂、海綿骨片含む	摩耗調書
14	D24	1次C地区	J-13-2	SB1P13	中世土師器	皿	11.2	1.9	8.0	3	灰黄色	灰黄色	粗砂、細砂少量含む	煤付着
15	D28	1次C地区	J-13-2	SB1P13	中世土師器	皿	11.0	2.1	—	2	橙色	橙色	海綿骨針含む	
16	D35	1次C地区	J-13-2	SB1P13	中世土師器	皿	11.8	1.9	6.2	2	灰黄褐色	黒褐色	粗砂、海綿骨片を含む	煤付着
17	D153	1次C地区	K-12-3	P19	陶器	壺	5.2	(2.6)	—	2	素地—にぶい赤褐色		微砂含む	
18	D181	1次C地区	J-13-2	SB1P13	土製品	土錘	長3.2	径1.9	孔径0.7	12	灰黄色	灰黄色	粗砂、赤色粒含む	重量10.0ｇ
19	D160	1次C地区	I-11-4	P44	土製品	土錘	長3.1	径2.1	孔径0.7	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂少量含む	重量12.3ｇ
20	D142	1次C地区	J-12-3	SE3	珠洲焼	片口鉢	—	(8.0)	15.2	底-2	青灰色	青灰色	気泡含む	摩耗調書
21	D143	1次C地区	J-12-3	SE3	珠洲焼	甕	—	(3.3)	12.0	底-1	灰色	灰色	気泡含む	摩耗調書
22	特5	1次C地区		SE3	珠洲焼	甕			11.4		灰色	灰色	気泡含む	摩耗調書
23	特2	1次C地区		SE3	珠洲焼	甕			13.8		青灰色	灰色	気泡含む	摩耗調書
24	D141	1次C地区	J-12-3	SE3	越前焼	すり鉢	—	(6.6)	12.5	底-3	黄灰色	橙色	気泡少量含む	
25	D20	1次C地区	I-11	SE4	中世土師器	皿	12.6	(2.0)	—	1	灰白色	灰白色	粗砂を少量含む	剥離調書
26	特6	1次C地区		SE4	石製品	行火	幅11.2	(12.0)			灰黄色	灰黄色		凝灰岩
136-27	D146	1次C地区	J-13-1-2	SK1	瓦質土器	花瓶？	—	(3.4)	—	0	灰色	灰色	微砂粒含む	
28	D21	1次C地区	J-12-1	SK4	中世土師器	皿	8.2	1.3	5.4	1	灰黄色	灰白色	礫、粗砂少量含む	
29	D32	1次C地区	K-13-3	SK6	中世土師器	皿	11.0	(1.9)	7.2	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細少量含む	
30	D 1	1次C地区	K-13-3	SK6	中世土師器	皿	12.7	2.6	9.0	2	にぶい黄橙色	灰黄褐色	細微量、粗砂少量含む	煤若干付着
31	D11	1次C地区	J-12-2	SK9	中世土師器	皿	11.5	2.2	5.4	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂微量含む	煤付着
32	D156	1次C地区	J-12-2 J-13-1	SK9	珠洲焼	片口鉢	約38.0	(9.8)	—	小片	灰黄色	灰黄色	粗砂少量含む	
33	D36	1次C地区	J-12-3	SD2	中世土師器	皿	10.4	2.0	8.9	3	黒褐色	暗灰黄色	粗砂少量含む	煤付着
34	D159	1次C地区	J-12-3	SD2	土製品	土錘	長3.7	径2.3	孔径0.8	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、海綿骨片含む	残重量13.3ｇ
35	D90	1次C地区	K-12-3	SD3	土製品	土錘	長3.6	径2.1	孔径0.8	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片、赤色粒含む	重量13.6ｇ
36	D27	1次C地区	K-12-13	SD3	中世土師器	皿	11.7	2	9.4	10	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、礫含む	タール状付着物
37	D 5	1次C地区	I-11-3	SD4	中世土師器	皿	9.9	2.0	7.3	1	浅黄橙色	浅黄橙色	粗砂やや多く含む	
38	D10	1次C地区	I-11-4	SD4	中世土師器	皿	9.5	1.8	4.0	4	灰色	灰色	粗砂微量含む	
39	D 7	1次C地区	I-11-4	SD4	中世土師器	皿	10.8	1.9	7.6	6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂少量含む	
40	D 2	1次C地区	J-11-3	SD4	中世土師器	皿	13.7	1.9	9.2	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂やや多く含む	薄い煤付着
41	石84	1次C地区	I-11-4	SD4	石製品	砥石	長7.2	幅4.0	厚2.8					重量131.2ｇ、全面使用
42	D154	1次C地区	I-11-2-4	SD2,4	珠洲焼	片口鉢	約38.0	(11.3)	—	小片	灰色	灰色	粗砂、海綿骨片含む	
43	D149	1次C地区	I-11-4	SD6	越中瀬戸	皿	—	(2.0)	4.8	底-6	釉—オリーブ灰色、茶色	素地—灰白色	微砂粒含む、気泡あり	
44	D152	1次C地区	I-11-4	SD6	白磁	碗	11.5	(2.0)	—	1		素地—灰白色	微砂含む	国産
45	D148	1次C地区	J-11-1	SD6	施釉陶器	皿	25.8	(2.6)	—	小片	釉—灰緑	素地—灰黄色	砂粒少量含む	
46	D145	1次C地区	I-11-4	SD6	鉄釉陶器	すり鉢	約31.0	—	—	小片	釉—茶褐色	素地—橙色	微砂粒、礫含む	
47	D16	1次C地区	H-13-2	北側落ち込み	中世土師器	皿	9.7	1.8	7.2	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂やや多く含む	
48	D140	1次C地区		北側落ち込み	白磁	碗	—	(2.5)	4.8	底-7	釉—乳白色	素地—灰白色	緻密	中国製
49	D158	1次C地区	H-13-2	北側落ち込み	土製品	土錘	長3.4	径2.3	孔径0.9	12	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂、海綿骨片含む	残重量15.3ｇ
50	D155	1次C地区	H-13-2	北側落ち込み	肥前陶器	壺	15.0	(9.7)	—	小片	褐色	褐色	緻密	内面格子叩き

第27-1表　第１次調査Ｃ地区第Ｉ面出土遺物観察表１

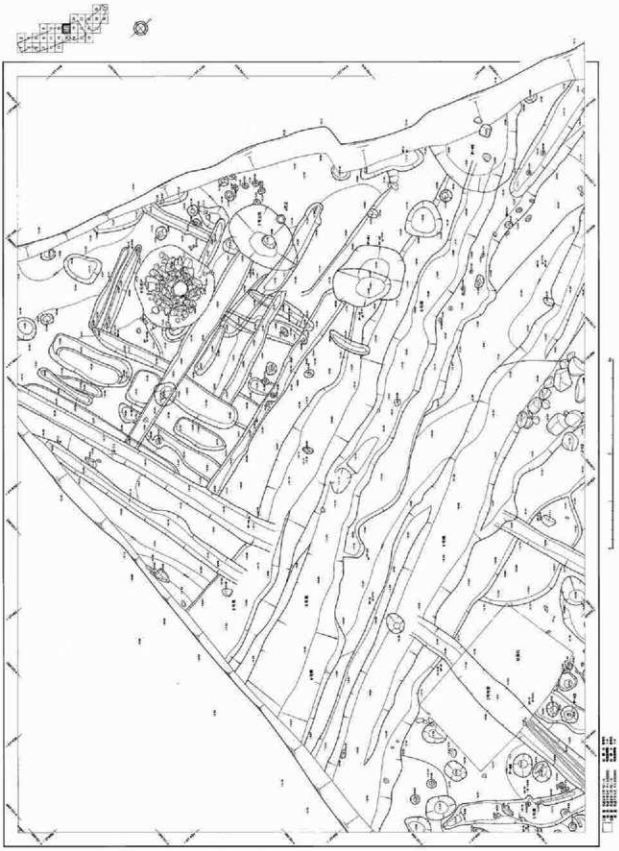
（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地　区	グリッド	遺構名	種　類	器　種	口　径(cm)	器　高(cm)	底　径(cm)	遺存度	色調・内	色調・外	胎　土	備　考
137-51	石13	1次C地区	K-13-3	包含層	石器	磨製石斧	長12.2	幅(6.6)	厚2.5	—				残重量357.0ｇ
52	D164	1次C地区	J-11-3	包含層	須恵器	坏蓋	10.8	(2.0)	—	3	灰色	灰色	粗砂多く含む	1周重ね焼き、天井部外面ヘラ記号
53	特２	1次C地区	J-11-3	包含層	須恵器	坏蓋	12.8	(2.1)	—	2	灰色	灰色		墨書「田地」か
54	特53	1次C地区	K-12-4	包含層	須恵器	無台坏	—	(0.6)	—	底-2	灰色	灰色		墨書、文字不明
55	D33	1次C地区	J-13-4	包含層	中世土師器	皿	7.2	1.2	6.5	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	焼土塊含む	煤付着
56	D13	1次C地区	J-13-1	包含層	中世土師器	皿	7.9	1.5	5.4	1	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂少量含む	
57	D３	1次C地区	J-12-2	包含層	中世土師器	皿	8.1	1.5	6.0	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂少量含む	煤付着
58	D９	1次C地区	J-12-4	包含層	中世土師器	皿	8.2	2.1	6.3	11	にぶい橙色	にぶい橙色	礫、粗砂多く含む	煤付着
59	D29	1次C地区	K-12-1	包含層	中世土師器	皿	8.4	1.7	6.1	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂少量含む	剥離調整
60	D90	1次C地区	K-12-1	包含層	中世土師器	皿	8.6	1.7	6.8	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含む	
61	D26	1次C地区	J-13-1	包含層	中世土師器	皿	9.4	2.6	6.8	1	にぶい橙色	にぶい橙色	海綿骨片、粗砂多量に含む	
62	D22	1次C地区	J-13-1	包含層	中世土師器	皿	10.2	2.0	6.4	1	浅黄色	浅黄色	粗砂やや多く含む	
63	D34	1次C地区	J-13-4	包含層	中世土師器	皿	10.9	1.8	7.8	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂、礫含む	煤付着
64	D38	1次C地区	J-12-4	包含層	中世土師器	皿	10.8	2.5	8	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂少量含む	煤付着
65	D17	1次C地区	J-11-3	包含層	中世土師器	皿	11.9	1.4	9.2	小片	褐灰色	褐灰色	粗砂少量含む	
66	D12	1次C地区	J-12-1	包含層	中世土師器	皿	12.8	2.2	8.2	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂やや多く含む	煤付着
67	D169	1次C地区	K-11-1	包含層	中世土師器	皿	9.7	1.5	7.4	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	砂粒少量含む	灯明皿、内面油痕
68	D168	1次C地区	K-11-1	包含層	中世土師器	皿	11.6	1.6	9.5	6	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含む	灯明皿、口縁部油痕
69	D94	1次C地区	J-12-1	包含層	土製品	土錘	長3.5	径2.1	孔径0.9	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	残重量13.0ｇ
70	D95	1次C地区	K-12-1	包含層	土製品	土錘	長3.5	径1.9	孔径0.8	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂、海綿骨片含む	重量11.0ｇ
71	D166	1次C地区	K-11-1	包含層	瀬戸・美濃	皿	11.3	2.3	6.3	3	釉一淡オリーブ色	褐色	粗い砂粒	二次被熱
72	D167	1次C地区	K-11-1	包含層	瓷器系陶器	甕	—	—	—	0	褐灰色	褐灰色	微砂粒含む	被覆痕
73	D139	1次C地区	K-12-1	1号暗渠排水	瓦質土器	火鉢	—	—	—	0	にぶい黄橙色	灰色	粗砂、海綿骨片含む	
74	D31	1次C地区	K-12-3	2号暗渠排水	中世土師器	皿	6.9	1.5	3.9	4	にぶい橙色	にぶい橙色	海綿骨片、粗砂含む	
75	D23	1次C地区	K-12-1	2号暗渠排水、包含層	中世土師器	皿	11.2	1.8	9.0	6	灰黄褐色	にぶい黄橙色	粗砂を少量含む	煤付着
76	D14	1次C地区	K-12-3	2号暗渠排水	中世土師器	皿	11.3	1.7	8.4	2	灰黄色	黄灰色	粗砂少量含む	煤付着
77	D144	1次C地区	K-12-3	2号暗渠排水	越前焼	甕	—	(6.2)	—	小片	褐灰色	黒褐色	気泡を少量含む	

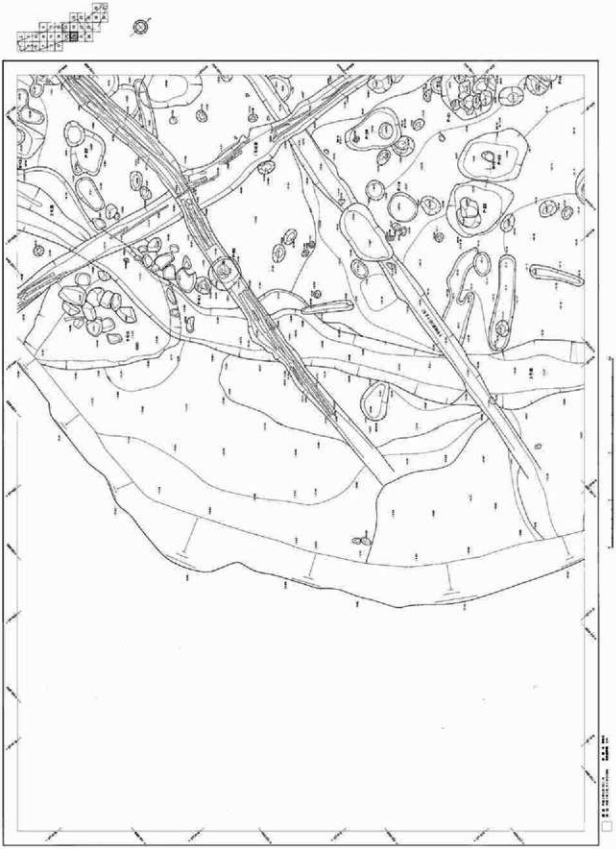
第27-2表　第１次調査Ｃ地区第Ⅰ面出土遺物観察表２

図版番号	実測番号	地　区	面	遺構名	器　種	長(cm)	幅(cm)	厚さ・径(cm)	本取り	樹種同定番号	備　考
138-78	171(№32)	1次C地区	Ⅰ面	SB1P17	柱根	(36.1)	—	11.1～12.1	芯持ち材	116	クリ、皮付き。底面３方向より加工
79	164(№8)	1次C地区	Ⅰ面	SB3P49	柱根	(29.9)	—	10.7～13.0	芯持ち材	109	ニヨウマツ類、断面方形。底面２方向より加工
80	185(№46)	1次C地区	Ⅰ面	SB1P40	柱根	(52.3)	—	13.2～16.8	芯持ち材	130	イヌシデ属、皮付き
81	172(№40)	1次C地区	Ⅰ面	SB5P47	柱根	(14.5)	—	9.4～11.3	芯持ち材	117	イヌシデ属
82	148(№61)	1次C地区	Ⅰ面	SB5P32	柱根	(43.4)	—	11.1～12.3	芯持ち材	93	クリ、断面方形。底面２方向より加工
83	174(№39)	1次C地区	Ⅰ面	P35	柱根	(36.7)	—	14.5～16.0	芯持ち材	119	クリ、皮付き。底面平坦に加工
84	163(№9)	1次C地区	Ⅰ面	P51	柱根	(32.2)	—	11.4×12.4	芯持ち材	108	ニヨウマツ類、側加工による断面方形。底面平坦に加工
85	28	1次C地区	Ⅰ面	SE4	杓子	(14.4)	8.5	厚2.4	辺材	14	カキノキ属
86	67	1次C地区	Ⅰ面	SE4	杓子(柄)	(33.7)	4.2	厚3.9	辺材	21	カキノキ属
87	289(特3)	1次C地区	Ⅰ面	SE4	曲げ物側板	板厚0.7	11.4	約40	辺材	—	針葉樹。目釘、樹皮綴じ
88	290(特4)	1次C地区	Ⅰ面	SE4	曲げ物側板	板厚0.5	18.5	約36	辺材	—	針葉樹。目釘、樹皮綴じ

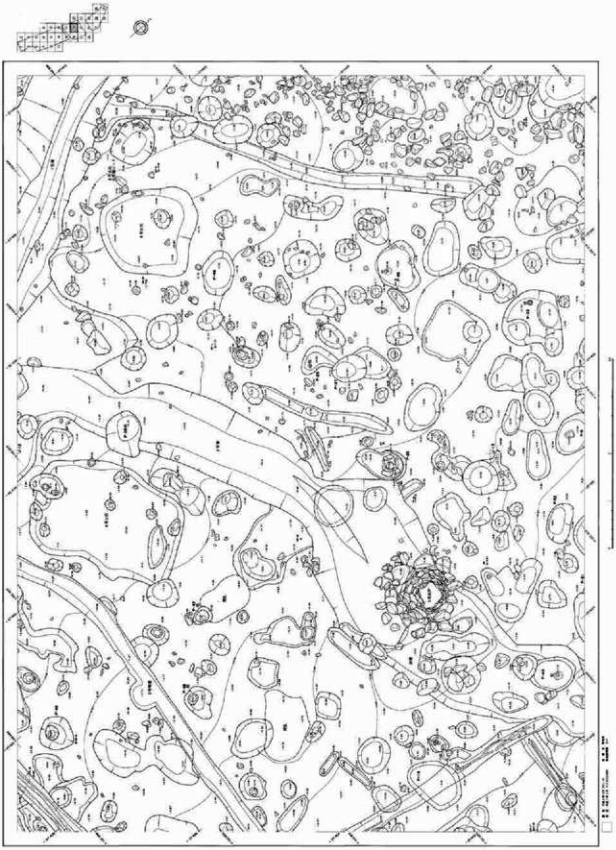
第28表　第１次調査Ｃ地区第Ⅰ面出土木製品観察表



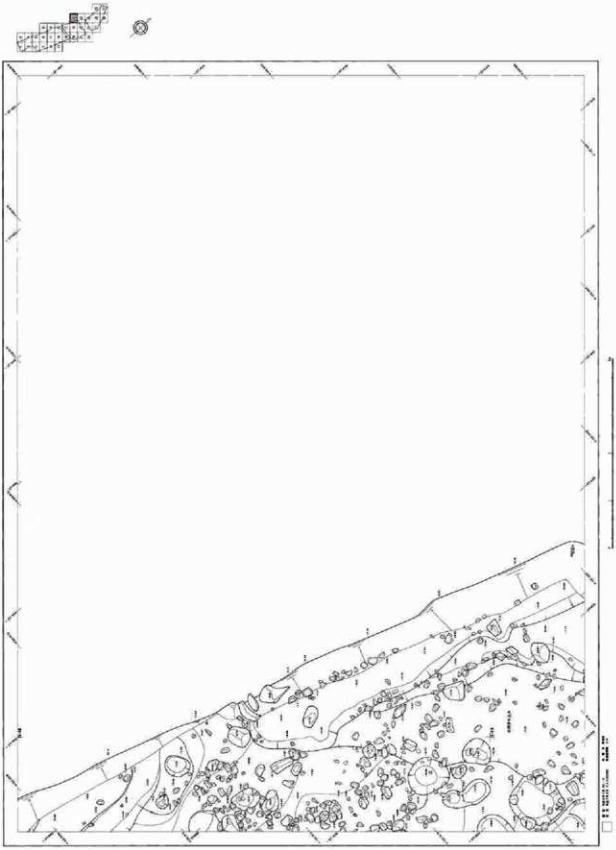
第139図　C地区遺構平面図1（S＝1/80）



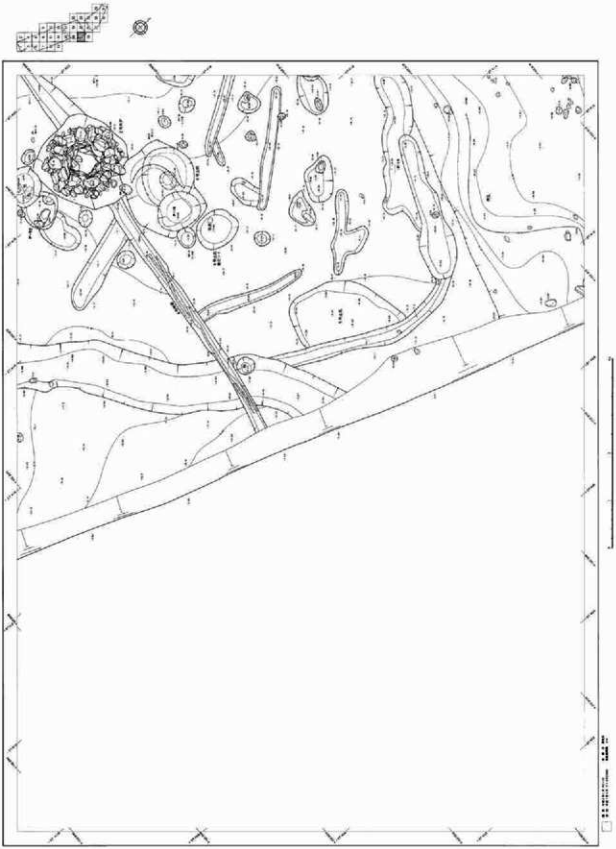
第140図　C地区遺構平面図２（S＝1/80）



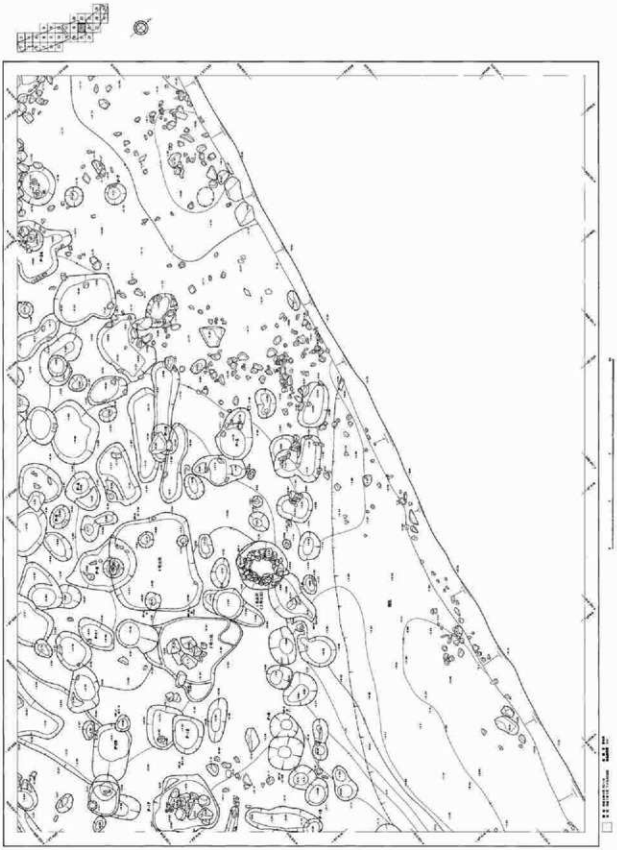
第141図　C地区遺構平面図3（S＝1/80）



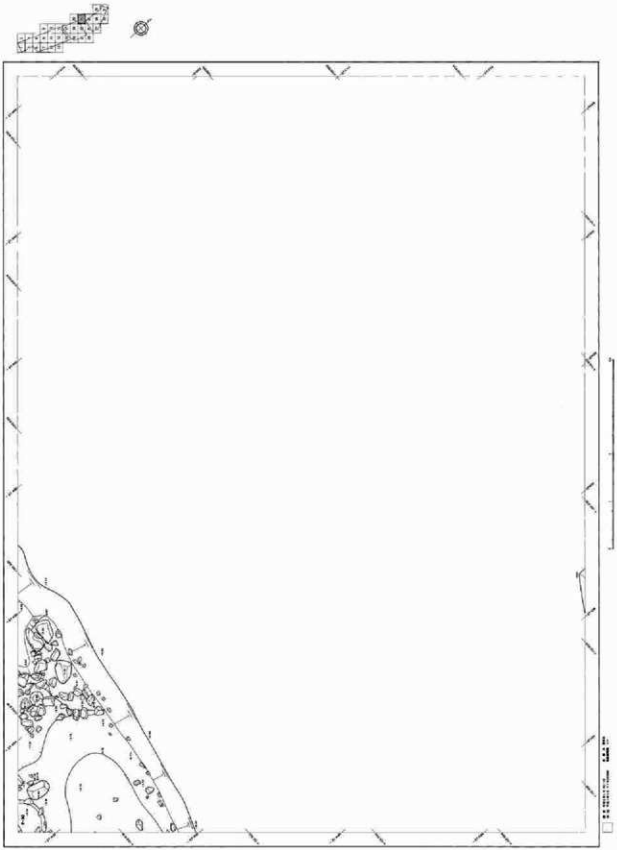
第142図　C地区遺構平面図４（Ｓ＝1/80）



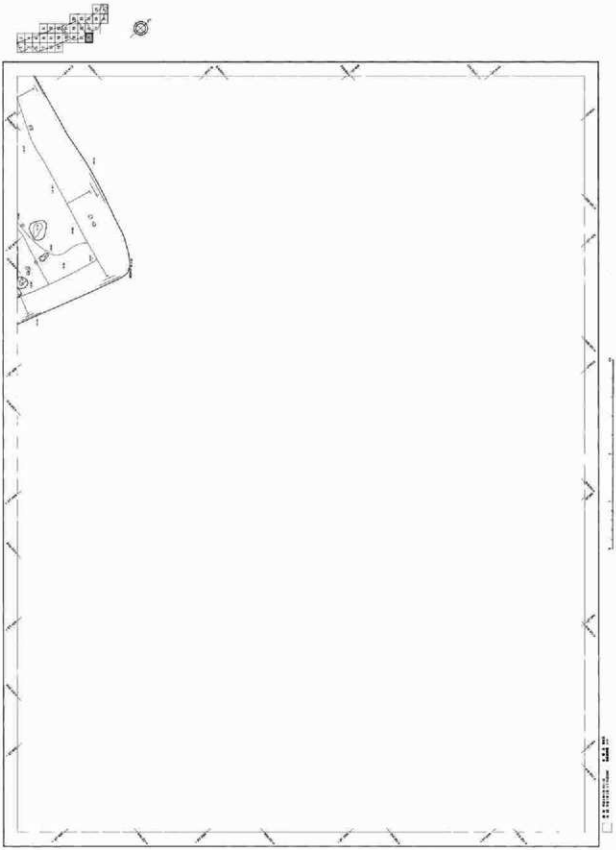
第143図　C地区遺構平面図5（S＝1/80）



第144図　C地区遺構平面図6（S＝1/80）



第145図　Ｃ地区遺構平面図７（Ｓ＝1/80）



第146図　C地区遺構平面図８（S＝1/80）

第２節　Ｄ　地　区

１．調査の概要

Ｄ地区は、第３章で述べたとおり第１次～第３次調査にまたがり、縄文時代中期～近世初頭にいたる生活面を、都合７面（第Ⅶ面～第０・Ⅰ面）調査した。これらの生活面は、数度にわたる多量の土砂流入・堆積に伴い放棄されながら、断続的に営まれる。本節で報告する第０・Ⅰ面は、第１次調査で確認した最も新しい生活面である。14世紀中頃を下限とする水田域（第Ⅱ面）が、土砂流入で埋没した後に形成された集落域（第Ⅰ面）と、集落が廃絶した後の耕作域（第０面）よりなる。第Ⅰ面の存続時期は14世紀後半～16世紀前半、第０面は16世紀前半～昭和23年頃の耕地整理前と考える。

さて、Ｄ地区第０・Ⅰ面の調査は、調査担当者の誤認もあり、平成７・８年度の２ヶ年にわたる調査となった。具体的には、第１次調査では調査区北半（Ｆ～Ⅰ－16・17区）の第０面ベース土：黄色粘土ブロック混ざりの硬く締まる濁暗灰褐色砂質土を、Ａ・Ｂ地区で検出した奈良・平安時代の整地土と誤認、その上面を中世以降の集落域の遺構検出面とした。結果的に北半部は、第０面のみを調査したこととなった。また、第１次調査で屋敷地を囲む区画溝と認識した変色域（第147図 SD１-b･c）は、第Ⅱ面の水田区画の段差に生じた第０・Ⅰ面ベース土の汚れであることが、第２次調査で明らかとなっている。

第０面は、耕作に伴う溝群を確認した。また第Ⅰ面は、掘立柱建物14棟および掘立柱建物の柱穴となるピット多数、竪穴状遺構２基、井戸３基、溝などを検出し、これらは遺構の切り合いなどから４期以上の変遷が考えられる。遺物は、陶磁器、中世土師器、柱根、漆器、木製人形、石製品などが出土した。なお第２次調査は、遺構番号は各面を通じて付している。

２．第　０　面

１次 SD ４～７、16（第147図）

Ⅰ-15区を中心に分布する耕作に伴う小溝群で、SD16は耕地整理前の水田区画を反映すると考える。東西方向の溝は比較的短い傾向をもち、主軸方位Ｎ-６～８°-Ｅ、幅25～40㎝、深さ約５㎝を測る。覆土は淡灰色砂質土～シルトで、若干の遺物が出土した。また第147図で盛土と表記した溝状部分を境に比高約20㎝の段差をもち、水田区画を反映する。

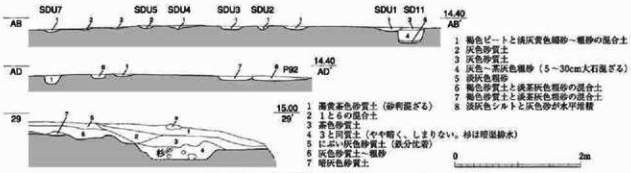
１次 SDU １～７、SD11・12（第147・148図）

Ｆ･Ｇ-16･17区に分布する耕作に伴う小溝群である。基幹となる SD12は東側に平行する杭列を伴い、耕地整理前の水田区画を反映する。主軸方位Ｎ-６°-Ｅ、幅20～80㎝、深さ５～20㎝を測る。覆土は灰色砂質土または褐色腐植土と淡灰黄色細砂～粗砂を基調とする。SD11より第166図１～７が出土した。須恵器高坏脚部１は方形透かしをもち、２条の沈線で加飾する。２～４は肥前系陶磁器、５・６は越前焼である。６が18世紀末～19世紀前半頃の遺物である他は概ね18世紀代の遺物である。緑色凝灰岩製の行火７は、Ⅰ種に分類でき、小松市滝ヶ原産と推測できる。

１次 SD ９・10（第147図）

Ｈ-15・16区に位置し、南側の現代用水と平行する。耕地整理後の水田区画を反映する。主軸方位Ｎ-65°-Ｅを測る。

第147図　Ｄ地区第０面遺構配置図（Ｓ＝1/250）



第148図　Ｄ地区第０面遺構図（Ｓ＝1/60）

第149図　Ｄ地区第Ⅰ面遺構配置図（Ｓ＝1/200）

第150図　D地区第1面掘立柱建物配置図（S＝1/200）

３．第　Ⅰ　面

掘立柱建物（第150図）

調査区では、掘立柱建物の柱穴となる多数のピットを検出した。調査担当者によると、柱穴掘方より径30～40cmを測る平面円形～略円形の柱穴群（ａ群）、長軸１ｍ前後を測る平面楕円形の柱穴群（ｂ群）に大別でき、時代が下るにつれ、ａ群からｂ群に移行するということであったが、傍証する遺物が少なく、検討できなかった。

掘立柱建物は現地調査時に数棟復元されたが、歪みが大きいものが多かったため、それを参考にしつつ報告書作成時に改めて14棟の復元を行った。その手順は以下のようである。

まず確実に柱穴との判断が可能な柱根が遺存するピットを抽出し、その中で復元を試み、次におよそ25cm以上の深さを持つピットを加えて復元を試みた。柱根が遺存するピットの中には深さが25cm未満のものも多く存在するが、柱根の遺存しない浅いピット全てを柱穴と仮定して復元するとピット数があまりに多く復元が困難であったため、一定の深さを有するものは柱穴の可能性も高いだろうとの想定による。それらのピットを用いて矩形となるものを探し、更に相対する柱間寸法にさほどばらつきがないものを掘立柱建物と認定した。柱穴が存在するはずの場所にピットがない場合で、抽出から洩れたピットが柱穴ライン上に存在するならばそれを柱穴と見なして復元した。ピットが多数に上り、切り合いも多いため確信できる復元ではないが、一つの案として提示するものである。本来はより多くの掘立柱建物が存在したものと推定される。

なお、Ｄ地区第Ⅰ面は２ヶ年にわたって調査されたため、それらを合わせた平面図で当初は復元を試みたが、調査区が隣接する箇所で検出面のレベル差が約30cmあり、遺構底面のレベル差も同様であったため検出時の誤差とは考えられず、第１・２次調査区をまたがった状態での建物復元は想定し得ないと判断し、それぞれの調査区に納まる建物として復元した。ただし、掘立柱建物番号は第１・２次を通して付した番号を用いている。

第１次調査区では現代用水や第０面 SD９、10付近を境として南北に掘立柱建物群が存在しており、北部の群には総柱建物や小規模な建物が多いことから、南部の群を主屋、北部を倉庫ととらえることが可能かもしれない。

SB１（第151図）

Ⅰ-15区付近で検出した３間×４間の側柱建物跡（１次 P12・23・25～27・29・40・42・43b・76他３基）である。北側梁列は１次 P42や P76を想定したが、いずれも北側にずれており問題がある。柱間寸法は梁行が220～230cm、桁行は南側柱列が約180cmと短い以外は230～250cm、主軸はＮ-15°-Ｅ。約420cm離れた東方に平行する柱列が存在するが、やや離れすぎているため含めなかった。遺物は第166図８、９、第169図53が出土した。８、９は15世紀後半以降の製品と推定される。

SB２（第152図）

Ⅰ-15区付近で検出した２間×３間の側柱建物跡（１次Ｐ２・25・37・68他６基）である。１次 P25・２はそれぞれ SB１・４と共有する。柱間寸法は西側梁行が310、390cm、東側梁行が360、330cm、桁行が250～320cm、主軸はＮ-69°-Ｅ。遺物は第169図54の柱根のみで時期の判明するものはない。

SB３（第153図）

Ⅰ-15・16区で検出した１間×３間の側柱建物跡（１次Ｐ４・８・40・46・71・76他２基）である。柱間寸法は梁行約520cm、桁行280～330cm、主軸はＮ-59°-Ｅ。図示した遺物はない。１次Ｐ８から18

～19世紀に降る遺物が出土しているが、上面からの混入であろう。

SB４（第154図）

Ｉ-15・16区で検出した１間×２間の側柱建物跡（１次Ｐ２・６・14・35・70・114）である。柱間寸法は梁行約540㎝、桁行240～260㎝、主軸はＮ-20°-Ｗ。１次Ｐ６はSB６と共有するが、１次P70・35のSB６との切り合い関係が矛盾しており、桁行より梁行が長い変則的な形態からも建物としては成り立たない可能性がある。遺物は第169図55を図示した。

SB５（第153図）

Ｉ-16区で検出した１間×２間の側柱建物跡（１次Ｐ６・36・79・112・113他１基）である。柱間寸法は梁行約330㎝、桁行230～280㎝、主軸はＮ-20°-Ｗ。遺物は第166図10、11、第169図56、57を図示した。10は15世紀後半の製品と推定される。

SB６（第155図）

Ｉ-15区付近で検出した１間×３間、或いは２間×３間の側柱建物跡（１次P17・24・42・43・67・115・130他３基）である。北側梁列は１次P17を柱穴と考えたが、南側梁列ではやや北側にずれた位置にピットがくるため、梁行１間の建物かもしれない。柱間寸法は梁行約620（２間の場合270、350）㎝、桁行200～270㎝、主軸はＮ-44°-Ｅ。遺物は第166図12、13を図示した。13は15世紀前半、12は近世の遺物であり、12は上面を走る第０面の溝からの混入であろう。

SB７（第154図）

Ｉ・Ｈ-15区で検出した１間×２間の側柱建物跡（１次P10・66・67他３基）である。柱間寸法は梁行約560㎝、桁行約350㎝、主軸はＮ-54°-Ｅ。

SB８（第151図）

Ｈ-15区で検出した１間×２間の側柱建物跡（１次P100・120他３基）である。柱間寸法は梁行約260㎝、桁行260～270㎝、主軸はＮ-54°-Ｅ。１次P87西のピットがSB９の他のピットとの切り合いと合わないため北東梁行の柱穴２基は別の建物の柱穴かもしれない。遺物は第166図14～16、第169図58を図示した。14～16は14世紀後半頃の製品か。

SB９（第156図）

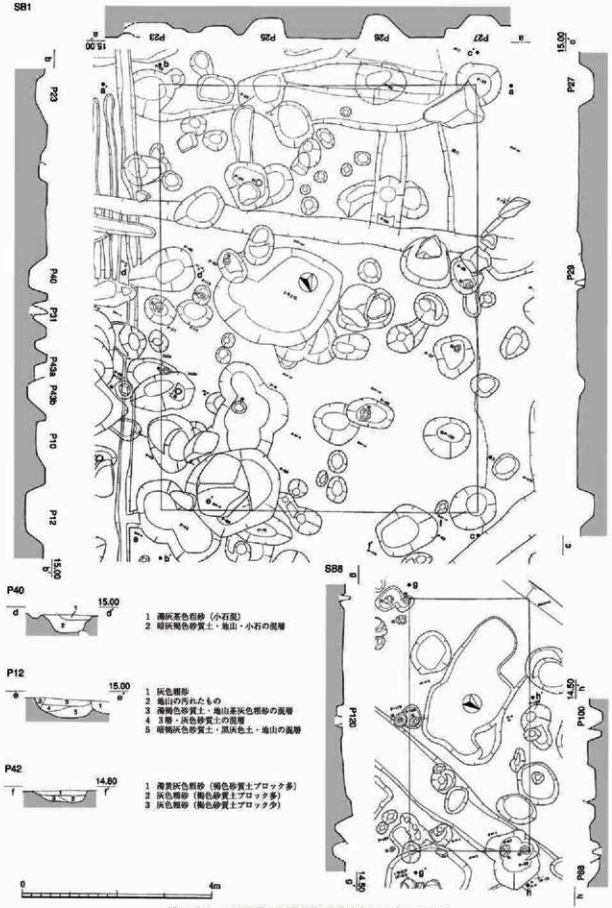
Ｇ・Ｈ-15区付近で検出した２間×２間の総柱建物跡（１次P50・88・103・104東・119他４基）である。１次P104東はSB10と共有する。柱間寸法は南北柱列が260～270㎝、東西柱列が約280㎝、主軸はＮ-60°-Ｅ。遺物は第169図51を図示した。

SB10（第155図）

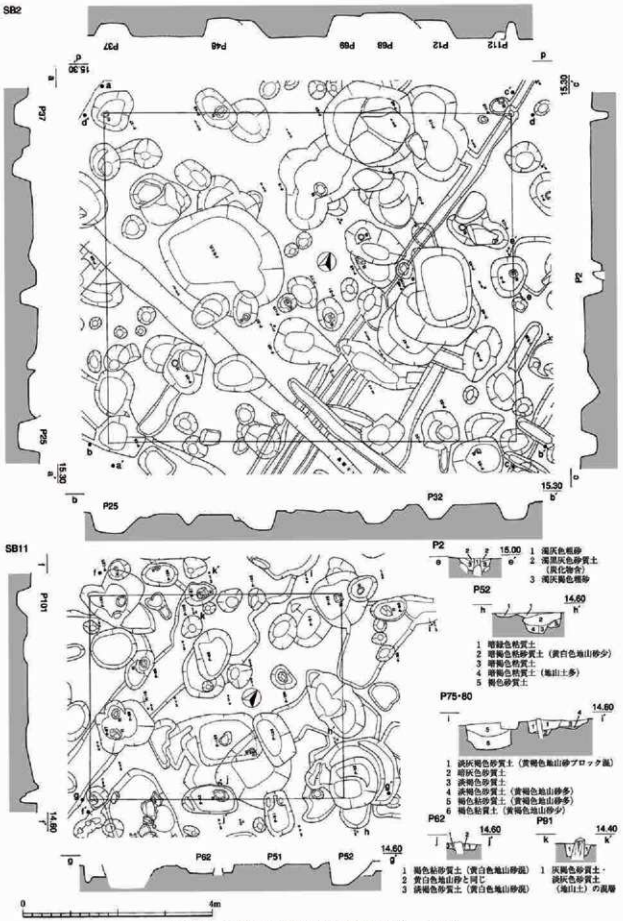
Ｇ・Ｈ-16区付近で検出した２間×２間の総柱建物跡（１次P75・87・101・103・104東・122他２基）である。柱間寸法は南北柱列が250、280㎝、東西柱列が230～240㎝、主軸はＮ-56°-Ｅ。規模、主軸がSB９に類似するため建て替えと想定しているが、東側柱列の中柱が検出されていない。南北柱列南側の柱間寸法がやや短いため、南西部の一画を仕切った側柱建物跡である可能性も考えられる。SB９よりも古い。遺物は第169図59を図示した。

SB11（第152図）

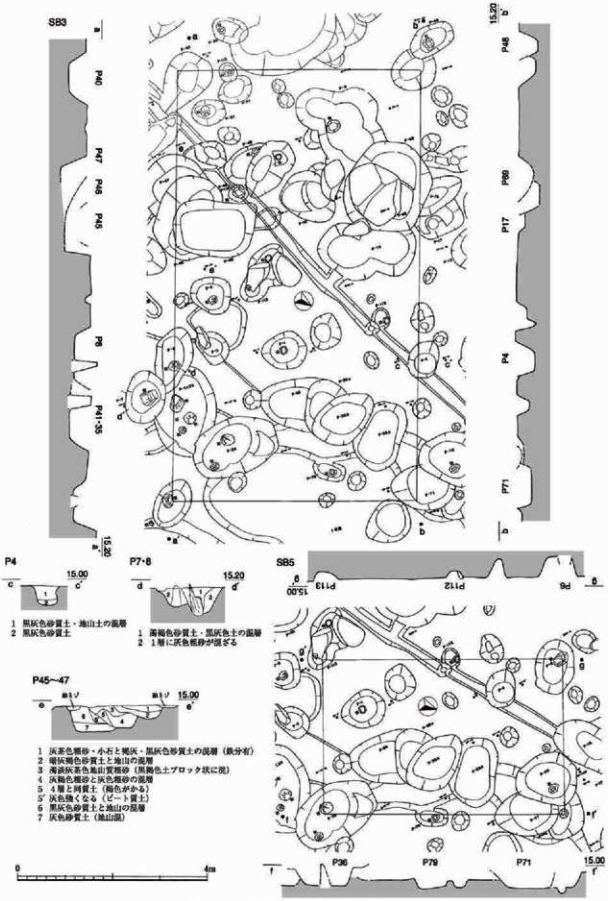
Ｇ・Ｈ-16区付近で検出した１間×２間の側柱建物跡（１次P52・62・75・91・101他１基）である。柱間寸法は梁行約420㎝、桁行250～270㎝、主軸はＮ-52°-Ｅ。切り合いからSB８～11の中では最も新しい。



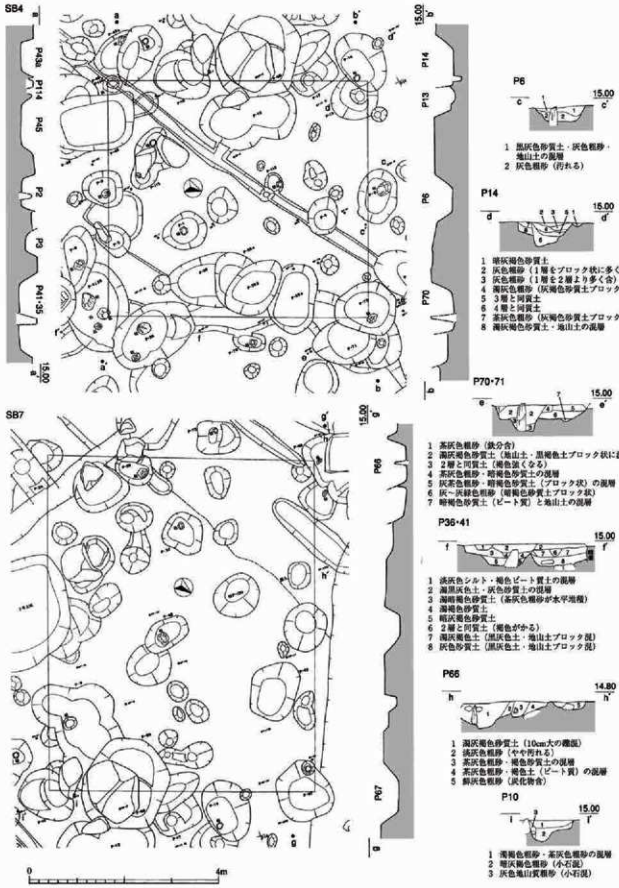
第151図　Ｄ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図１（Ｓ＝1/80）



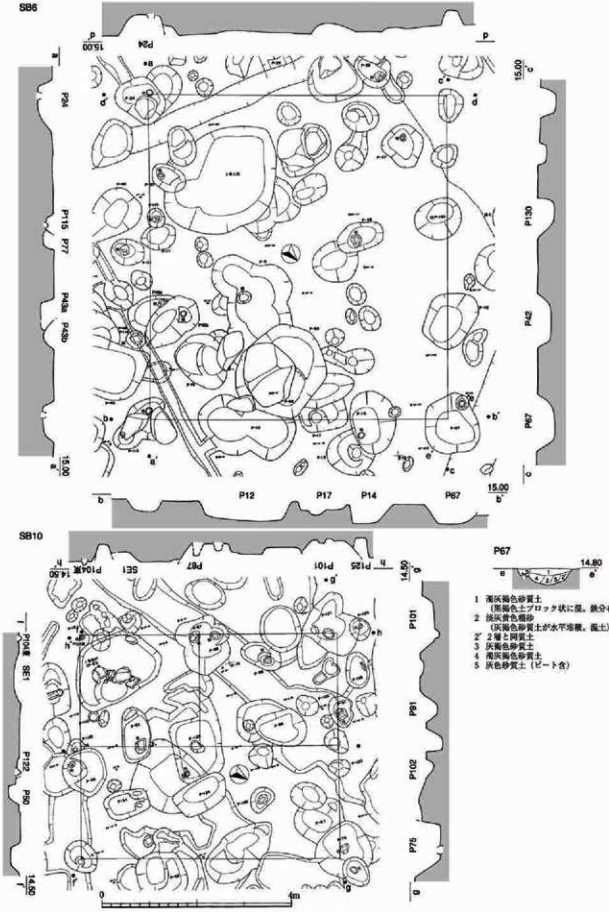
第152図　Ｄ地区第Ｉ面掘立柱建物実測図２（Ｓ＝1/80）



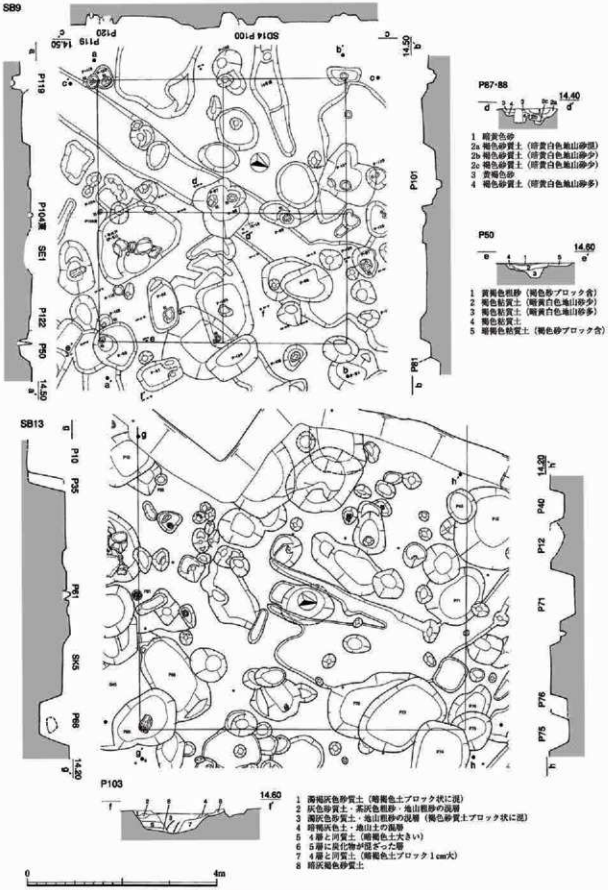
第153図　Ｄ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図３（Ｓ＝1/80）



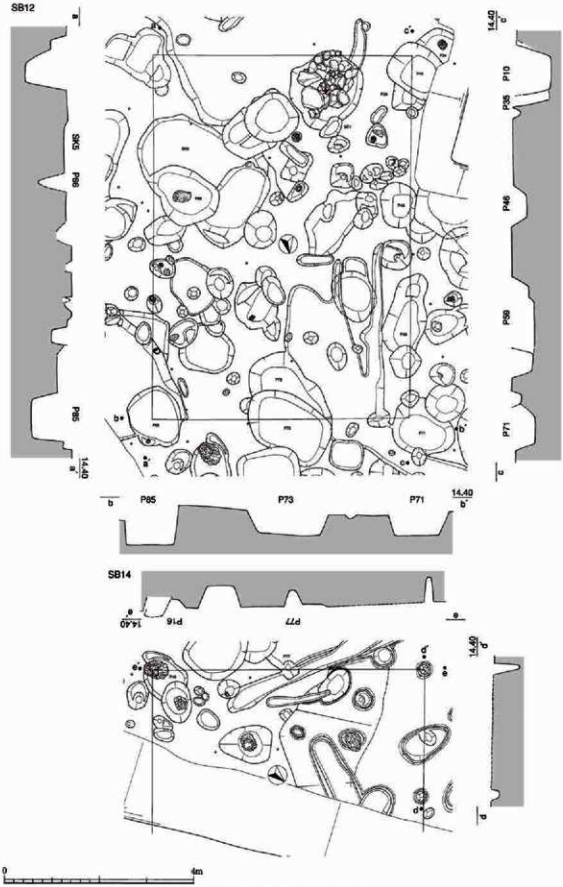
第154図　D地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図4（S＝1/80）



第155図　Ｄ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図５（Ｓ＝1/80）

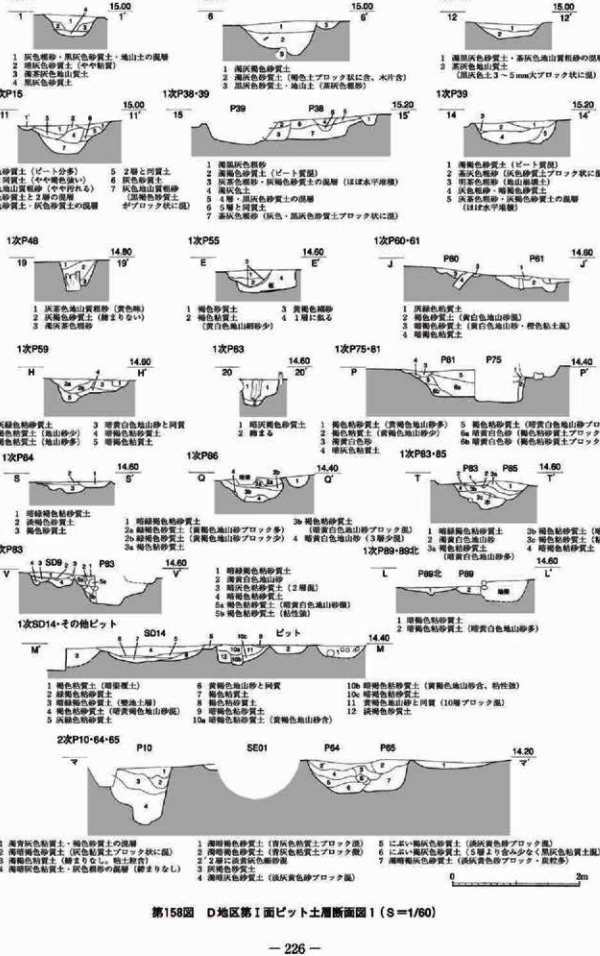


第156図　Ｄ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図６（Ｓ＝1/80）

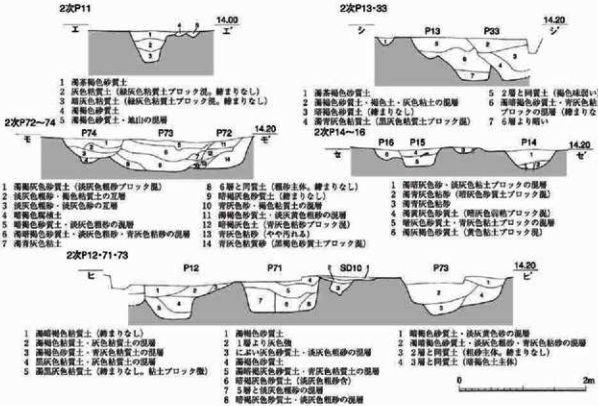


第157図　Ｄ地区第Ⅰ面掘立柱建物実測図７（Ｓ＝1/80）

第２節　Ｄ地区



第158図　Ｄ地区第Ⅰ面ピット土層断面図１（Ｓ＝1/60）



第159図　Ｄ地区第Ｉ面ピット土層断面図２（Ｓ＝1/60）

SB12（第157図）

Ｇ-16・17区で検出した１間×３間の側柱建物跡（２次 P10・46・59・71・85他２基）である。柱間寸法は梁行約550㎝、桁行250～300㎝、主軸はＮ-9°-Ｅ。当初、２次 P60、１次 P127他１基に２次 P73を加えた２間×４間の建物として復元したが先述の理由により第２次調査区に納まる復元に変更した。遺物は第166図17、18を図示した。17は15世紀後半の遺物である。

SB13（第156図）

Ｇ-16・17区で検出した１間×２間以上の側柱建物跡（２次 P35・61・66・71・75）で調査区外に続く。柱間寸法は梁行約690㎝、桁行270、290㎝、主軸はＮ-79°-Ｅ。梁行の中柱が検出されていないため、梁行の柱間寸法が広く、建物としての復元は無理があるかもしれない。遺物は第169図52を図示した。

SB14（第157図）

Ｆ・Ｇ-17区で検出した１間×２間以上の側柱建物跡（２次 P16・77他２基）で調査区外に続く。隣接する第３次調査Ｆ地区では２次 P16に対応する箇所にピットが確認できる程度であり、１間×２間で納まる可能性もある。柱間寸法は梁行約270㎝、桁行約285㎝、主軸はＮ-42°-Ｗ。

その他ピット（第158・159図）

掘立柱建物を構成できなかったピットを図示した。遺存する柱根や覆土の状況から柱穴と判断できるものも多い。

遺物は第166～168図19～49、第170～172図60～95を図示した。第167図29の越前焼すり鉢は第176図187と同一個体である可能性が高い。

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
1次P 1	I-16	略円形	100	80	34	第158図	柱根
1次P 2	I-15	略円形	85	80	30	第152図	柱根
1次P 3	I-16	不定楕円形	75	55	23	褐灰色砂質土	加工材片
1次P 4	I-16	略円形	80	60	38	第153図	—
1次P 5	I-16	楕円形	60	50	43	褐灰黄色砂質土＋地山土	—
1次P 6	I-16	楕円形	115	80	37	第154図	柱根
1次P 7	I-16	楕円形	110	80	47	第153図	柱根
1次P 8	I-16	楕円形	140	80	34	第153図	柱根
1次P 9 a	I-15	楕円形	150	100	47	第158図	選状板
1次P 9 b	I-15	楕円形	80〜	90	50	第158図	板材
1次P10	I-15	不定円形	120	110	50	第154図	加工材片
1次P11	I-15	溝	60	—	42		—
1次P12 a	I-15	楕円形	135	100	38	第151図	—
1次P12 b	I-15	楕円形	130	110	33	第151図	—
1次P13	I-15	略円形	100	90	42		—
1次P14	I-15	楕円形	130	90	56	第154図	加工材片
1次P15	I-16	不定円形	126	60〜	46	第158図	円形板，胸状木製品
1次P16	I-16	楕円形	140	90	40	第158図	—
1次P17	I-15	略方形	100	50〜	24	暗灰色細砂	—
1次P18	J-15	不定楕円形	75	50	14	淡灰色砂質土＋腐植土	杭
1次P19	J-15	略方形	35	30	?	淡灰色砂質土＋腐植土	柱根
1次P20	J-15	略円形	50	40	13	淡灰色砂質土＋腐植土	杭
1次P21	J-15	略円形	40	30	10	淡灰色砂質土＋腐植土	杭
1次P22	J-15	略円形	30	30	9	淡灰色砂質土＋腐植土	杭 柱根
1次P23	I-15	楕円形	100	90	31	灰褐色細砂	—
1次P24	I-15	楕円形	100	80	42	黒灰色細砂＋地山土	柱根樹皮
1次P25	I-15	楕円形	100	80	11	灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P26	I-14	略円形	105	80	48	灰色粗砂	—
1次P27	I-14	略円形	100	90	28	灰色細砂＋焼土	—
1次P28	I-15	楕円形	85	65	32	黒灰色細砂	マツボックリ
1次P29	I-15	楕円形	80	65	20	灰褐色砂質土	柱根
1次P29	H-16	方形	70	70	25		柱根
1次P30	I-15	楕円形	80	50	27	黒灰色砂質土＋地山土	柱根
1次P31	I-15	略円形	70	55	30	黒灰色砂質土＋地山土	柱根
1次P32	I-15	略方形	80	70	26	褐褐色砂質土＋地山土	—
1次P33	I-15	略円形	105	95	29	褐褐色砂質土＋地山土	樹皮
1次P34	欠番						
1次P35	I-16	円形	130？	100	40		柱根
1次P36 a	I-16	楕円形	150	110	40	第154図	柱根
1次P36 b	I-16	楕円形	110	90？	40	第154図	柱根
1次P37	H-15	略方形	90	80	28	灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P38	I-16	楕円形	130	110	20	第158図	棒状木製品
1次P39 a	I-16	楕円形	145	100	38	灰褐色砂質土＋地山土	加工材片
1次P39 b	I-16	略方形	140	90	20	第158図	柱根樹皮（北方）・円形板
1次P39 c	I-16	略方形	110	—	17	第158図	—
1次P40	I-15	楕円形	140	90	46	第151図	—
1次P41	I-16	円形	100？	120	50	第154図	柱根，板状木製品
1次P42	H-15	略方形	125	95	25	第151図	—
1次P43 a	I-15	楕円形	110	70	37	暗灰褐色細砂＋地山土	柱根
1次P43 b	I-15	楕円形	130	75	50	暗灰褐色細砂＋地山土	—
1次P44	I-15	楕円形	120	70	36	黒灰色砂質土＋地山土	柱根
1次P45	I-15	略長方形	170	120	37	第153図	柱根樹皮
1次P46	I-15	楕円形	170	140	55	第153図	—

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
1次P47	I-15	楕円形	140	100〜	68	第153図	—
1次P48	I-15	楕円形	100	60	36	第158図	柱根樹皮
1次P49	欠番						
1次P50	H-16	略円形	95	90	30	第156図	柱根
1次P51	H-16	略長方形	95	60	18	灰緑色粘質土＋暗緑色粘質土	—
1次P52	H-16	略方形	100	100	50	第152図	—
1次P53	H-16	方形	90	55	35		—
1次P54	H-16	略方形	95	75	33		—
1次P55	H-16	方形	115	90	30	第158図	柱根
1次P56	G-16	長方形（古代）	110	60	76		—
1次P57	0 iiiG-17	円形	220	110	9		—
1次P58	H-17	方形（古代）	100	80	40	暗褐色粘質土	—
1次P59	H-16	略方形	135	120	35	第158図	—
1次P60	H-15	楕円形	110	75	38	第158図	柱根
1次P61	1 2KSE1					第158図	柱根樹皮
1次P62	H-16	略長方形	110	60	18	第152図	柱根
1次P63	H-14	略円形	75	60	32	第158図	柱根
1次P64	H-14	不定形	160	100	24	暗灰褐色砂質土	加工材片
1次P65	H-15	略方形	80	70	40		柱根
1次P66	H-15	略方形	110	70	40	第154図	柱根
1次P67	H-15	略方形	120	110	37	第155図	柱根樹皮
1次P68	I-15	円形	200	170	50	灰色砂質土＋地山土	加工材片
1次P69	I-15	不定形	140	50〜	44	灰色砂質土＋黒灰色砂質土	—
1次P70	I-16	略円形	125	110	42	第154図	柱根
1次P71	I-16	略円形	130	95	30	第154図	—
1次P72	I-16	溝	23	—	15	暗灰褐色砂質土	—
1次P73	H-15	略方形	90	70	38	褐褐色砂質土＋地山土	柱根樹皮
1次P74	H-17	方形（古代）	90	80	45	暗褐色粘質土	—
1次P75 a	G-16	略円形	115	110	44	第158図	柱根
1次P75 b	G-16	略円形	65	50	13	第158図	柱根
1次P76	欠番						
1次P77	I-15	楕円形	75	50	30	淡灰黒色粗砂＋褐色砂質土	—
1次P78	欠番						柱根
1次P79	I-16	楕円形	70	35	50	暗褐色砂質土	柱根樹皮
1次P80	G-16	楕円形	80	45	30	第152図	柱根
1次P81	G-16	楕円形	100	80	49	第158図	—
1次P82	H-16	略円形	40	30	?	灰色粘質土	—
1次P83	H-15	略円形	130	110	34	第158図	加工材片
1次P84	H-16	略円形	100	60〜	16	第158図	—
1次P85	H-15	円形	50	50	10	赤褐色砂質土	—
1次P86	G-16	不定楕円形	100	80	41	第158図	加工材片
1次P87	H-15	略方形	90	60	33	第156図	柱根
1次P88	H-15	略円形	100	70	40	第156図	柱根樹皮・円形板
1次P89	G-16	楕円形	90	50	32	第158図	柱根樹皮
1次P90	H-16	楕円形	100〜	85	13		柱根
1次P91	G-16	楕円形	65	50	36	第152図	柱根
1次P92	0 iiiF-12	くぼみ	90〜	80〜	8		—
1次P93	0 iiiG-17	円形	25	25	14	褐灰色粗砂	柱根樹皮
1次P94	0 iiiG-17	略円形	30	30	15	灰褐色砂質土	—
1次P95	0 iiiG-17	略方形	40	40	29	褐色砂質土＋地山土ブロック	柱根樹皮
1次P96	0 iiiG-17	円形	40	40	20	褐褐色細砂	柱根
1次P97	0 iiiG-17	楕円形	85	55	14	褐灰色細砂	漆器皿
1次P98	0 iiiG-17	円形	55	55	29	褐色砂質土	柱根
1次P99	0 iiiG-16	略円形	70	60	15	灰褐色砂質土	杭
1次P100	G-15	楕円形	65	60	31	暗褐色粘質土	—
1次P101	G-15	不定形	110	85	30	暗褐色砂質土＋地山土	—
1次P102	G-16	略円形	40	40	32	灰色砂質土＋地山土	漆器椀
1次P103	H-16	略方形	130	100	40	第156図	柱根
1次P104	H-15	不定形	80	70	30	暗緑褐色粘質砂	—
1次P104東	H-15	掘方なし	—	—	—	—	柱根？
1次P105	G-16	略円形	50	40	44	淡灰色細砂	—

第29表　第１次調査Ｄ地区第０・Ｉ面ピット一覧表１

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
1次P106	H-15	不定形	220	100	38	灰色砂質土	柱根樹皮
1次P106	H-16	不定形	55	40	20	暗褐灰色砂質土	加工材片
1次P107	H-15	略円形	45	30	16	暗灰褐色砂質土	—
1次P108	H-15	略方形	80	60	20	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P109	SD10						
1次P110	H-16	円形	20	20	23	灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P111	欠番						
1次P112	I-16	楕円形	45	35	11	黒灰色砂質土＋地山土	柱根
1次P113	I-15	不定楕円形	135	90	20	暗褐色砂質土	柱根樹皮
1次P114	I-15	円形	40	40	7	褐灰色砂質土	柱根
1次P115	I-15	略円形	40	35	26	黒灰色砂質土＋地山土	柱根樹皮
1次P116	H-15	円形	60	55	9	暗灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P117	H-15	略長方形	75	55	15	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P118ａ	H-15	略長方形	60	40	15	暗灰褐色砂質土	杭
1次P118ｂ	H-15	略方形	40	20	7	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P118ｃ	H-15	脱方なし	—	—	—		柱根
1次P119	H-15	円形	30	20	7	暗灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P120	H-15	略円形	45	45	10	暗灰褐色砂質土	柱根

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
1次P121	H-15	円形	40	35	15	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P122	H-16	略方形	40	30	5	暗灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P123	H-16	不定形	120	110	35	暗灰褐色砂質土	柱根樹皮
1次P124	H-16	略長方形	140	65	42	灰色粘質土	柱根樹皮
1次P125	G-16	円形	45	40	30	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P126	G-16	楕円形	75	50	12	暗灰褐色砂質土	柱根
1次P127	H-16	略円形	30	25	14	灰褐色砂質土	柱根
1次P128	0 面G-17	略円形	35	30	9	褐色砂質土	柱根
1次P129	欠番						
1次P130	H-15	略円形	100	90	34	褐灰色砂質土	柱根
1次P131	I-15	略方形	75	65	30	黒灰褐色砂質土＋地山土	柱根
1次P132	I-15	円形	30	30	10	黒灰色砂質土＋地山土	柱根
1次P133	I-16	脱方なし	—	—	—	1次SD1内	柱根
1次P134	I-16	円形	40	40	33	1次SD1内	柱根
1次P135	I-16	楕円形	70	50	44	1次SD1内	柱根
1次P136	I-16	脱方なし	—	—	—	1次SD1内	柱根
1次P137	I-16	脱方なし	—	—	—	1次SD1内	柱根
1次P138	H-16	楕円形	150	130	43		柱根

第30表　第１次調査Ｄ地区第０・Ｉ面ピット一覧表２

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
2次P10	G-16	略方形	120	100	72	第158図	加工材片
2次P11	G-17	楕円形	85	75	53	第156図	加工材片
2次P12	F-17	略円形	185	160	60	第159図	
2次P13	G-16	略方形	160	130	50	第159図	
2次P14	G-17	略円形	110	80	27	第159図	太柱根樹皮
2次P15	G-17	楕円形	90	65	32	第159図	太柱根樹皮
2次P16	G-17	楕円形	100	80	20	第159図	太柱根
2次P17	F-17	円形	20	20	20	褐灰褐色砂質土	
2次P18	F-17	略円形	25	15	10	褐灰褐色砂質土（軟）	
2次P19	F-17	楕円形	50〜	60	20	褐褐色砂質土	
2次P20	F-17	楕円形	100	50	30	褐褐色粘質土	柱根
2次P21	F-17	窪み	20	20	7	褐灰褐色砂質土	
2次P22	F-17	円形	40	30	21	褐褐色粘質土	太柱根
2次P23	欠番						
2次P24	G-17	窪み	40	30	2	褐灰色砂質土	
2次P25	G-17	窪み	50	40	4		
2次P26	G-17	略円形	45	40	13	褐褐色砂質土＋粘土ブロック	柱根
2次P27	F-17	略円形	80	80	20	褐褐色粘質土＋粘土ブロック＋灰色砂質土	
2次P28	F-17	略方形	65	55	20	褐褐色粘質土＋灰色砂質土	
2次P29	F-17	略方形	80	75	37	褐褐色粘質土＋灰色砂質土	
2次P30	F-17	楕円形	50	40	38	褐褐色粘質土＋灰色砂質土	
2次P31	F-17	略円形	—	—	26	暗褐色砂質土	
2次P32	F-17	略円形	30	25	20	暗褐色砂質土	
2次P33	G-16	略方形	100〜	115	53	第159図	
2次P34	G-16	略方形	70〜	70〜	33	やわらかい暗灰色粘質土＋地山土	太柱根
2次P35	G-16	略方形	70	70	75	褐褐色砂質土	
2次P36	G-17	楕円形	45	35	24	褐暗灰色砂質土	
2次P37	G-17	楕円形	70	50	38	褐褐色砂質土	加工材片
2次P38	G-17	略方形	70	65	60	褐暗灰褐色砂質土＋粘土ブロック	柱根樹皮
2次P39	G-16	略円形	30	25	18	褐褐色砂質土	
2次P40	F-16	円形	70	60	30	褐暗灰色粘質土	
2次P41	欠番						
2次P42	G-17	略方形	35	30	20	褐褐色砂質土＋地山土ブロック	

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
2次P43	G-16	円形	40	40	53	褐灰色粘質土	加工材片？
2次P44	G-16	楕円形	35	25	18	暗灰褐色砂質土	柱根
2次P45	G-16	略円形	40	30	10	暗灰色砂質土	柱根
2次P46	G-16	略長方形	100	70	32	褐灰色砂質土＋地山土ブロック	柱根
2次P47	G-16	略長方形	170	90	45	褐暗灰色粘質土＋粘土ブロック	柱根
2次P48	G-16	略円形	45	35	30	褐褐色砂質土	
2次P49	G-16	略方形	50	50	26	褐褐色砂質土＋焼土	
2次P50	G-16	長楕円形	50	30	?	褐褐色砂質土	柱根
2次P51	欠番						
2次P52	G-16	窪み	50	30	8	暗褐灰色砂質土	
2次P53	G-16	円形	25	25	11	褐灰黄色砂	柱根樹皮
2次P54	G-16	略円形	50	45	16	暗褐灰色粘質土	柱根
2次P55	G-16	窪み	45	20	?	褐褐色砂質土	
2次P56	G-16	円形	25	20	17	褐褐色砂質土	柱根
2次P57	G-16	略円形	125	110	45		柱根樹皮
2次P58	G-16	略円形	70	60	39	暗褐色砂質土＋粘土ブロック	
2次P59	G-16	略円形	120	80	48		
2次P60	G-16	略円形	100〜	85	30	褐暗褐色砂質土	
2次P61	G-16	円形	20	20	?	褐灰色砂質土	柱根
2次P62	G-16	不明	—	—	—	褐暗灰褐色粘質土	柱根樹皮
2次P63	G-16	不明	—	—	—	褐青灰色粘質土	
2次P64	G-16	略円形	115	100	55	第158図	柱根樹皮
2次P65	G-16	楕円形	100	100	65	第158図	加工材片
2次P66	G-16	楕円形	170	110	60		太柱根樹皮
2次P67	G-16	円形	80	70	46		
2次P68	G-16	略長方形	190	100	28		
2次P69	G-17	略円形	100	90	49		太柱根
2次P70	G-17	略円形	110	85	47		
2次P71	G-17	楕円形	130	120	46	第159図	加工材片
2次P71北	G-17	略円形	40	30	21	暗褐色砂質土	加工材片
2次P72	G-17	楕円形	200	170	43	第159図	
2次P73	G-17	略長方形	180	125	43	第159図	
2次P74	G-17	略方形	130	120	43	第159図	柱根
2次P75	G-17	略円形	90	80	38		加工材
2次P76	G-17	略長方形	110	70	35	褐暗褐色砂質土＋地山土ブロック	柱根樹皮
2次P77	G-17	略方形	35	30	36	暗褐色砂質土	柱根樹皮
2次P78	G-17	略方形	40	30	20	褐暗褐色砂質土	

第31表　第２次調査Ｄ地区第Ｉ面ピット一覧表１

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
2次P79	G-17	円形	25	20	18	褐灰色砂質土	
2次P80	G-17	円形	50	50	18	暗褐色砂質土	柱根根痕
2次P81	G-17	楕円	110	45	10	灰青灰色粘質土＋褐色土	
2次P82	G-16	略方形	40	30	13	灰色砂質土(軟)	柱根
2次P83	G-16	楕円形	90	65	40	褐暗褐色砂質土＋粘土ブロック	
2次P84	G-16	略円形	40	30	12	灰褐色砂質土	柱根
2次SE2 西	G-17	略円形	40	30	14	褐褐色砂質土	柱根
2次P85	G-17	略円形	130	110	85		
2次P86	G-17	略方形	120	100	17	褐褐色砂質土	
2次P87	G-17	楕円形	65	50	18	褐褐色砂質土	
2次P88	G-17	略円形	125	90	20	褐茶褐色砂質土＋褐色土ブロック	
2次P89	G-17	略円形	30	30	20	褐褐色砂質土	加工材片
2次P90	G-17	略方形	30	25	16	褐褐色砂質土	
2次P91	G-17	略方形	50	40	25	褐黄灰色粗砂	
2次P92	G-17	略楕円形	35	20	16	褐褐色砂質土	
2次P93	G-17	略円形	40	30	10	褐褐色砂質土	
2次P94	G-17	略方形	50	40	25		
2次P95	H-17	円形	30	30	43		
2次P96	H-17	不定形	90	60〜	23	淡褐灰色砂質土	
2次P97	H-17	略方形(古代)	55	40	30	暗灰色砂質土	
2次P98	H-17	円形(古代)	60	60	32	暗褐灰色砂質土	
2次P99	H-17	略方形(古代)	70	50〜	18	暗灰色砂質土	

遺構名	グリッド	平面形態	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)	土色	備考
2次P100	G-16	略円形	30	20	20	青灰色細砂	
2次P101	G-17	楕円	20	15	9	暗褐色砂質土	
2次P102	G-17	楕円形	50	40	20	褐暗褐色砂質土	柱根
2次P103	H-17	楕円形(古代)	65	50	20	暗褐色砂質土＋粘土ブロック	
2次P104	H-17	略長方形	90	45	33	暗褐灰色砂質土	
2次P105	H-16	円形	30	30	13	褐淡灰色粗砂	
2次P106	H-16	円形(古代)	60	55	26	褐灰色砂質土	
2次P107	H-16	円形	95	95	17	褐暗褐灰色砂質土	
2次P108	H-16	不定形	80	45	16	暗褐灰色砂質土	
2次P109	H-16	円形	65	65	19	褐色砂質土	
2次P110	H-16	円形	40	35	21	暗褐色砂質土＋地山土ブロック	柱根
2次P111	H-16	円形	90	90	43	暗褐色砂質土＋粘土ブロック	
2次P112	H-16	不定楕円形	90	60	26	暗褐色砂質土	
2次P113	H-16	略円形	75	55	22	暗褐色砂質土	
2次P114	H-16	略楕円形	80	60	24		
2次P115	H-16	円形	20	20	10	暗褐色砂質土	
2次P116	H-16	円形	60	55	26	褐褐色砂質土	柱根
2次P117	I-16	略円形	65	60	25	暗褐灰色砂質土	
2次P118	I-16	不定形	40	30	20	暗褐色砂質土	
2次P119	I-16	不定形	20	20	28	暗灰褐色砂質土	

第32表　第２次調査Ｄ地区第Ｉ面ピット一覧表２

井戸・竪穴状遺構

自然石を組み上げた小型の井戸３基を検出した。上記の掘立柱建物に伴うものと考えられる。

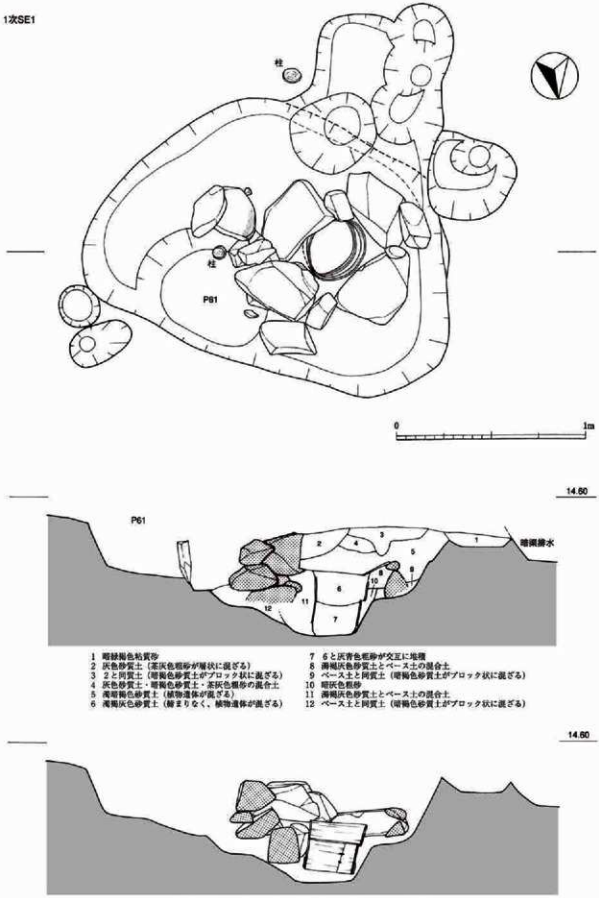
１次 SE１（第160図）

Ｈ-15区で検出した水溜目的の石組井戸で、１次 P61に前出する。平面方形を呈し、内法は東西約30㎝×南北約40㎝、深さ約55㎝を測る。石組は底より１～３段が残存する。第１段目は、長軸約40㎝を測る花崗岩質の自然石を内側に平坦面がくるように四方に配した後に、その間を20㎝前後の自然石で埋める。まなこに曲物容器側板を２段に重ね、東西方向は土圧により内傾する。側板は、底より１段目が径25～33㎝、高さ12㎝、２段目が径30～33㎝、高さ16㎝を測る。石組に近接する掘方は、茶灰色～青灰色粗砂層を掘り込み、２段掘りの上段より石を組み始める。覆土は、しまりのない濁褐灰色砂質土を基調とし、下半分は機能時に埋没した可能性が高い。また西辺を除き、２段目以上の側石を抜き取った後に濁暗褐色砂質土で埋める。遺物はほとんど出土していない。

２次 SE１（第161図）

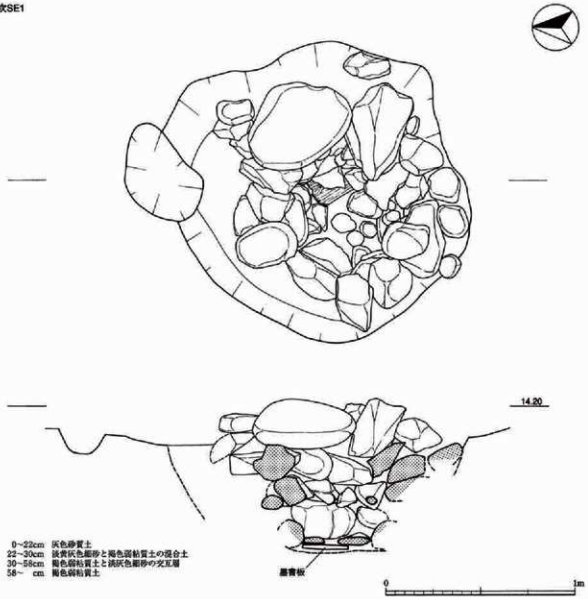
Ｇ-16区で検出した石組井戸である。平面円形を呈し、内法は径約160㎝、深さ約80㎝を測る。石組は、掘方の北側に寄って底より４段程度が残存し、最大55㎝、平均20㎝前後を測る自然石を乱雑にすり鉢状に積み上げる。また井戸底は墨書板（第178図211）を東端に置き、その上に10～20㎝大の平たい自然石を敷き詰める。この墨書板は、埋納もしくは沈下防止が目的と考えられ、本遺跡他井戸との対比から前者の可能性が高い。掘方は、やや崩れた平面略円形を呈し、南北約170㎝×東西約160㎝の規模で茶灰色～青灰色粗砂層を掘り込む。覆土は、機能停止後に一定の開放期間を経て埋め戻される。

遺物は第178図211～213の木製品が出土した。211は両面に墨書された板で、「四柳」「文明十七年」の文字がみえる。文明十七年は西暦1485年にあたる。文字の上方に円孔を穿ち、願文として掲示した可能性がある。墨痕の浮き上がり等は見られないため、掲示されたとしても屋内か、外部としても短



1　暗赤褐色粘質砂
2　灰色砂質土（茶灰色粗砂が層状に混ざる）
3　2と同質土（暗褐色砂質土がブロック状に混ざる）
4　灰色砂質土・暗褐色砂質土・茶灰色粗砂の混合土
5　淡暗褐色砂質土（植物遺体が混ざる）
6　淡褐灰色砂質土（締まりなく、植物遺体が混ざる）
7　6と灰青色粗砂が交互に堆積
8　淡褐灰色砂質土とベース土の混合土
9　ベース土と同質土（暗褐色砂質土がブロック状に混ざる）
10　明灰色粗砂
11　淡褐灰色砂質土とベース土の混合土
12　ベース土と同質土（暗褐色砂質土がブロック状に混ざる）

第160図　Ｄ地区第Ⅰ面井戸実測図１（Ｓ＝1/20）



第161図　Ｄ地区第Ⅰ面井戸実測図２（Ｓ＝1/20）

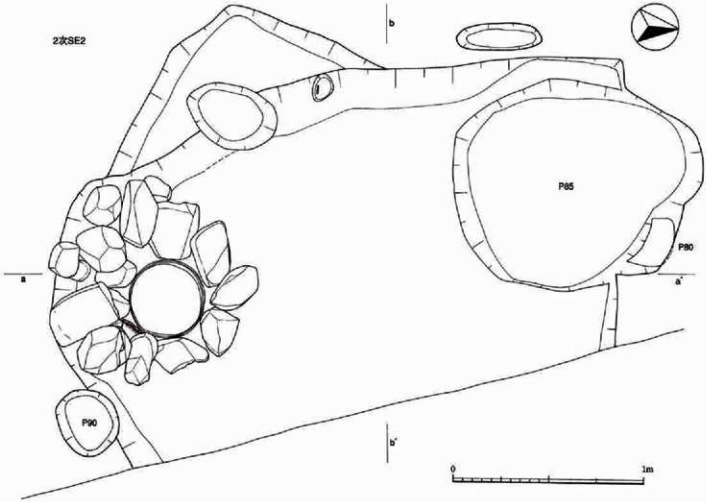
期間であろう。212は覆土より出土した漆器椀で、内外面に朱色の文様を描く。213は、隅丸方形を呈し、長径16.7cmを測る。側部の２孔一対の孔、また中央の長方形孔四隅の孔は、把手を固定するためと考えられる。使用に伴い全面に黒色煤が付着する。鍋蓋であろう。

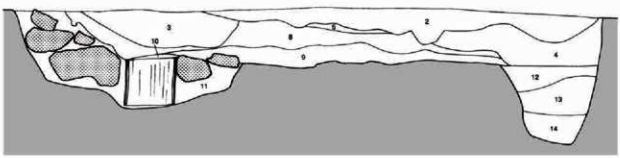
211が石組の下にあることから1485年以降に構築されたことが確実な遺構である。

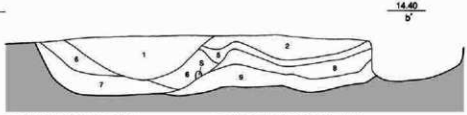
２次ＳＥ２・竪穴状遺構２（第162図）

Ｇ-17区で検出した石組井戸で、竪穴状遺構２内部の水溜と考える。竪穴状遺構２は、やや崩れた略方形の平面プランで、南北約280cm、東西180cm以上、深さ約30cmを測る。壁はゆるやかにたちあがり、生活面と考えられる底面は若干の起伏をもち、顕著な硬化面や生活痕跡は確認できない。

２次ＳＥ２は、竪穴状遺構２の南西隅を若干拡張してつくられる。平面円形を呈し、内法は径約40cm、深さ30cm以上を測る。径38cm、高さ23cmの曲物容器側板を据え置いた後に、25～35cm大の自然石を上面に平坦面がくるような雑な１段積みを基本とする。竪穴状遺構２壁側は、土砂崩落防止のため

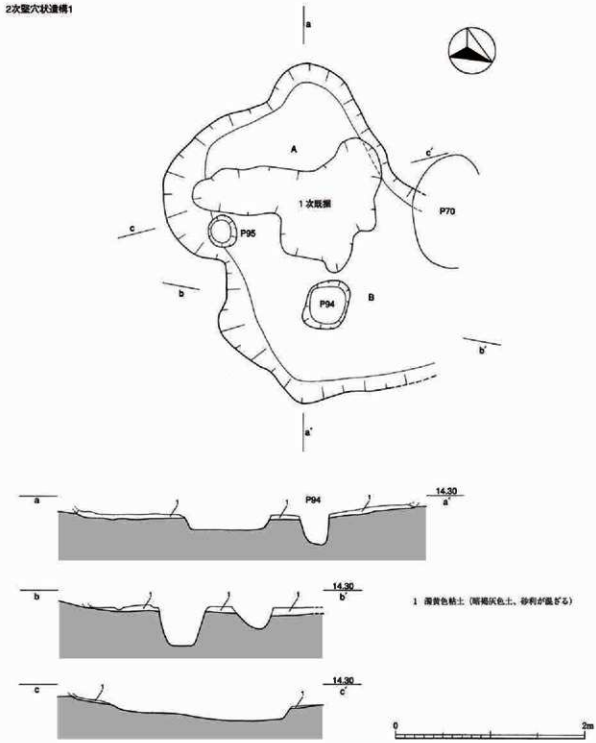






1　褐鳴色砂質土と灰色粗砂の混合土
2　褐茶灰色粗砂（暗灰色土がブロック状に混ざる）
3　褐鳴色砂質土（茶灰色粗砂が混ざる）
4　褐鳴灰色粗砂質土＋暗鳴色粘質土
5　淡黄灰色粗砂
6　暗鳴色粘質土
7　６層・淡黄色礫砂・緑灰色粘質砂の交互層
8　褐淡灰黄色粗砂と鳴色粘質土の交互層
9　暗鳴色弱粘質土（締まりない）
10　暗灰鳴色砂質土
11　褐鳴色粘質砂と淡灰色粗砂の混合土
12　にぶい灰褐色砂質土
13　８層と同質土（黒灰色粗砂、青灰色粘土がブロック状に混ざる）
14　緑灰色弱粘質土（黒灰色粘質土がブロック状に混ざる）

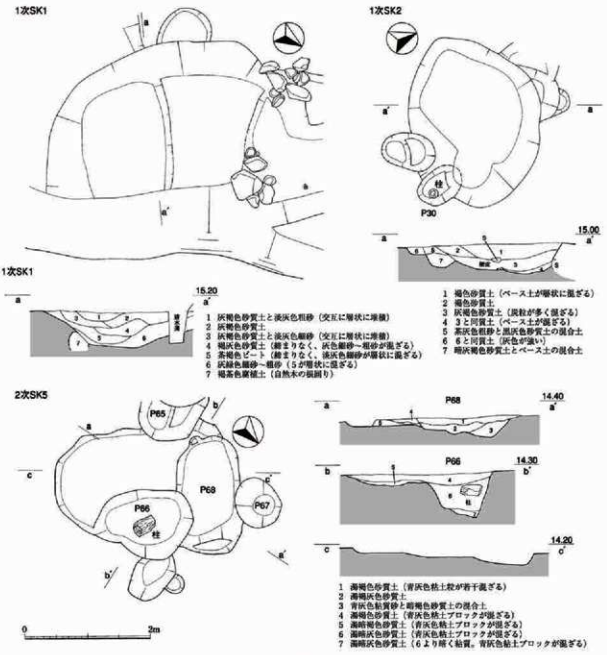
第162図　Ｄ地区第Ｉ面井戸実測図３（Ｓ＝1/20）



第163図　Ｄ地区第Ⅰ面２次竪穴状遺構実測図（Ｓ＝1/40）

に、さらに１、２段外側に積み上げる。底より２段目は放射状の小口積みで、３段目は小振りの石を用いる。掘方は石組に近接し、２段掘りとなる。竪穴状遺構２と一体的に廃絶し、しまりのない暗褐色弱粘質土などが自然堆積した後に、人為的に埋める。切り合い状況より２次 P85に後出する。

遺物は、第173図96～98、第178図214が出土した。中世土師器皿96・97は口径約17㎝、器高2.6㎝を測り、口縁端部は小さく立ち上がる。珠洲焼片口鉢98は内傾する口縁端部に波状文を施し、珠洲焼Ⅵ



第164図　Ｄ地区第Ⅰ面土坑実測図（Ｓ＝1/60）

期に位置づけられる。214は平面台形に加工した木製品である。

２次竪穴状遺構１（第163図）

Ｇ-17区に位置する。確定できなかったが平面隅丸方形を呈した２基の浅い竪穴状遺構の重複と考え、南半分をＡ、北半分をＢと分けて記する。その場合、Ａは南北約150㎝×東西約235㎝、Ｂは南北約200㎝×東西約290㎝となる。いずれも床面直上で検出し、壁は緩やかにたちあがる。またＡが厚さ２～５㎝の濁黄色粘土を貼って床面とするのに対し、Ｂは厚さ約10㎝を測る。床面下は特に地業を行わず、柱穴も確定できない。また床面上に被熱痕は認められず、古代の土器小片が出土した。

土　　坑

１次 SK１（第164図）

Ｉ-16区に位置する大型の土坑である。平面隅丸方形を呈すると考えられ、南東－北西方向で約400㎝、北東－南西方向で230㎝以上、深さ約50㎝を測る。壁は緩やかにたちあがり、砂質土、細砂、ピートが自然堆積する。第173図珠洲焼壺100、越前焼すり鉢101が出土した。100は胴部外面に平行叩きを施す。101は口径32.3㎝を測り、口縁部の摩耗が著しい。

１次 SK２（第164図）

Ｉ-15区に位置し、不定形な平面プランをもつ。約250㎝×210㎝、深さ約30㎝を測り、褐色～灰褐色砂質土が水平に堆積する。底面より樹皮が出土、掘立柱建物の柱穴を含んだ土坑と考えられる。図化可能な遺物はない。

１次 SK３

Ｇ-15区に位置する不定形な落ち込みである。長軸150㎝以上×短軸115㎝、深さ約20㎝を測り、覆土は濁淡灰色砂質土である。第173図珠洲焼片口鉢102が出土した。102は口径約28㎝を測り、口縁端部を外側にのばす。

２次 SK５（第164図）

Ｇ-16区に位置する平面小判形の土坑である。長軸約270㎝×短軸約160㎝、深さ約15㎝を測り、肩部は緩やかにたちあがる。濁褐色～暗褐色砂質土で埋められ、２次 P66に後出し、２次 P68より前出する。図化可能な遺物はない。

２次 SK６

Ｈ-16区に位置する不定形な落ち込みで、深さ約７㎝を測る。暗褐色砂質土を覆土とし、図化可能な遺物は出土していない。

２次 SK７

Ｉ-16区に位置し、平面略円形を呈する。径約150㎝、深さ73㎝を測り、覆土は濁灰褐色砂質土となる。第173図99の珠洲焼甕口縁部が出土した。１次 SK１に前出する。

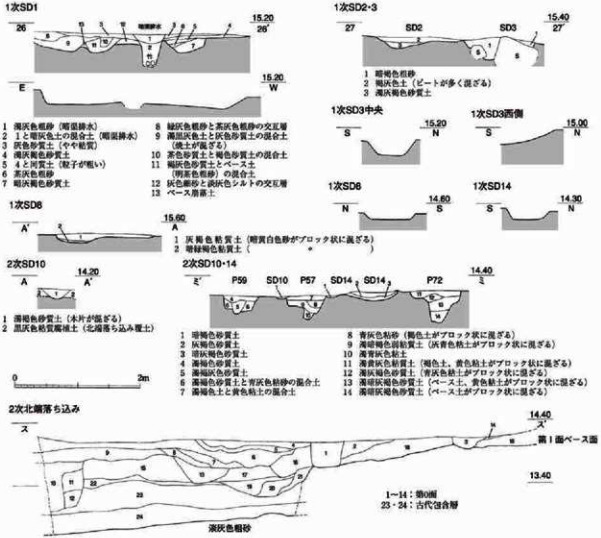
溝

１次 SD１（第165図）

Ｊ・Ｉ-16区で検出した大型の溝で、掘立柱建物群、１次 SK１に前出する。長さ約11ｍ、幅2.8～４ｍ、深さ30～40㎝を測り、調査区外東側にのびる区域を取り囲むと考えられる。底面は起伏をもち、水の流れで形成された砂質土～シルトが複雑に堆積する。第173図103～105、第178・179図216～220が出土した。中世土師器皿103は口径14.8㎝、器高2.1㎝を測り、外傾が著しく口縁端部を丸くおさめる。104は口径16.4㎝を測る京都系の製品である。105は淡黄白色を呈する鎌などの仕上げ砥石で、シルト岩でつくる。漆器椀216は内面見込みに朱色漆で圏線状の文様を施し、また外面に「×」と刻書する。長方形の容器状木製品218は長さ12.1㎝、幅5.8㎝、高さ4.2㎝を測り、一短辺にＶ字状の切れ込みをもつ。楕円形曲物容器219は側面に木釘痕、平面に刀子痕が認められる。

１次 SD２（第165図）

Ｊ-15区に位置し、南北方向に直線的にのびる溝であり、北西で１次 SD３と接続する。幅1.1～２ｍ、深さ10～15㎝を測り、肩部は緩やかにたちあがる。覆土は暗褐色～褐灰色土が自然堆積する。第173



第165図　Ｄ地区第Ⅰ面溝・落ち込み実測図（Ｓ＝1/60）

図106、107が出土した。106は越中瀬戸丸皿で、17世紀代の遺物とみられる。

１次 SD３（第165図）

I－15区に位置し、屈曲しながら西側に流下する。幅70～100㎝、深さ20～25㎝を測り、肩部はしっかりとたちあがる。覆土は濁灰褐色砂質土で、少量の遺物が出土した。

１次 SD８（第165図）

H－16区を東西方向に走る長さ約５ｍ、幅50～100㎝、深さ５～10㎝の区画溝である。灰褐色～暗緑褐色粘質土を覆土とし、少量の遺物が出土した。

１次 SD14（第165図）

G－15区に位置し、長さ約３ｍ、幅50～65㎝、深さ３～７㎝を測る。肩部は緩やかにたちあがり、覆土は褐色砂質土～粘質土を基調とする。第173図108の中世土師器皿が出土した。口径8.2㎝、高さ1.3㎝を測り、器肉はあつい。

２次 SD10（第165図）

Ｆ・Ｇ-16・17区に位置し、Ｌ字に屈曲する区画溝である。幅20～50㎝、深さ５～15㎝を測り、覆土はしまりのない濁褐色～暗褐色砂質土である。遺物は第173図109の須恵器坏蓋が出土した。口径12.4㎝、器高2.6㎝を測り、内面の返しは退化する。

２次 SD11

Ｇ-17区で検出した浅い溝で、幅約60㎝、深さ約10㎝を測る。覆土はしまりのない濁灰褐色粘質土で、少量の遺物が出土した。

２次 SD12

Ｇ・Ｈ-17区を屈曲しながら東より西に流れる。幅25～50㎝、深さ５㎝未満を測り、黄灰色粗砂を覆土とする。少量の遺物が出土した。なお SD13は欠番である。

２次 SD14（第165図）

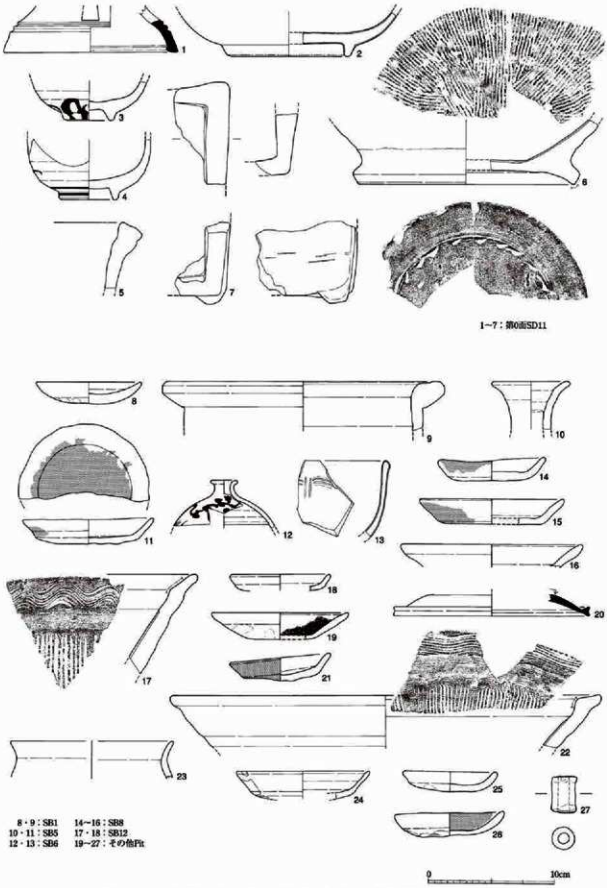
Ｇ-17区に位置する長楕円形の浅い溝で、北側で２次 SD10に接する。深さ10～20㎝を測り、灰褐色～暗灰褐色砂質土が堆積する。遺物は第173図110、111が出土した。中世土師器皿110は体部が先細り、全面に煤が付着する。111は珠洲焼甕胴部片である。

２次北端落ち込み（第165図）

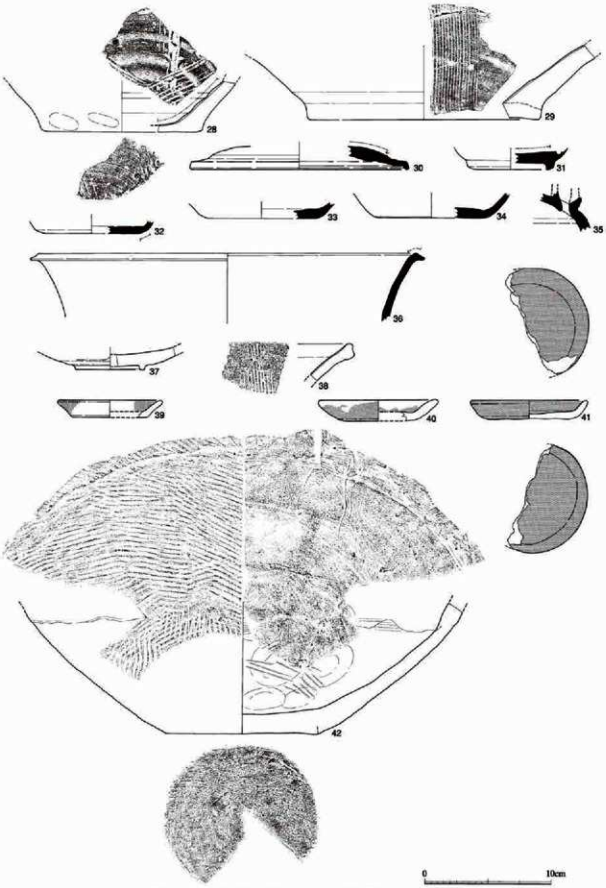
Ｆ-17区に位置し、Ｆ地区第Ｉ面の溝につながる。第165図17、19～21層の緩やかな水の流れで形成された粗砂・シルト・粘質砂・腐植土を遺構覆土とし、幅約160㎝、深さ約50㎝を測る。他の第Ｉ面遺構群に先行し、第174図112～129、第179図221、222が出土した。112～119、121、122は須恵器である。坏蓋112は扁平で内面に退化した返りをもつ。坏蓋113は口径12.9㎝、器高2.2㎝を測り、口縁基部に平坦面をもつ。仏器的要素の強い有台坏114は口径19.8㎝を測り、口縁部は緩やかに外反する。有台坏115は口縁部で先細る。箱形の無台坏116は口径11.6㎝、器高3.0㎝を測る。無台坏117～119は底部外面に墨書を記し、118は「町」の可能性を、119は「福□」と判読できる。鉢121は口径約25㎝を測り、外反する口縁部は端部を上方につまみ上げる。外赤内黒土師器無台埦120は口径10.0㎝を測る。珠洲焼片口鉢126は口径26.4㎝を測り、黒色の付着物が認められる。中世土師器皿124は口径約13㎝を測り、体部は大きく外傾する、125は灯明痕が明瞭に残る。土錘127は43.5ｇ以上の重さをもつ。鎌などの砥石128は全面を研ぎに使用する。椀形滓129は残存重量89ｇを測る。222は木製人形である。２次北端落ち込み上面の２次 P27出土遺物であるが、調査時にピット底部を掘りすぎた際の遺物とみられるためこの項で報告する。横向きで折り鳥帽子を被っており、２箇所に穿孔がみられる。孔に沿って割れており、何かに打ち付けた際にひび割れたものであろう。詳細な時期は不明であるが、古代の人形は一般的に正面向きであり、中世に入ると横向きのものが増加することから、中世の遺物の可能性が高い。

包含層出土遺物（第174～177、179図）

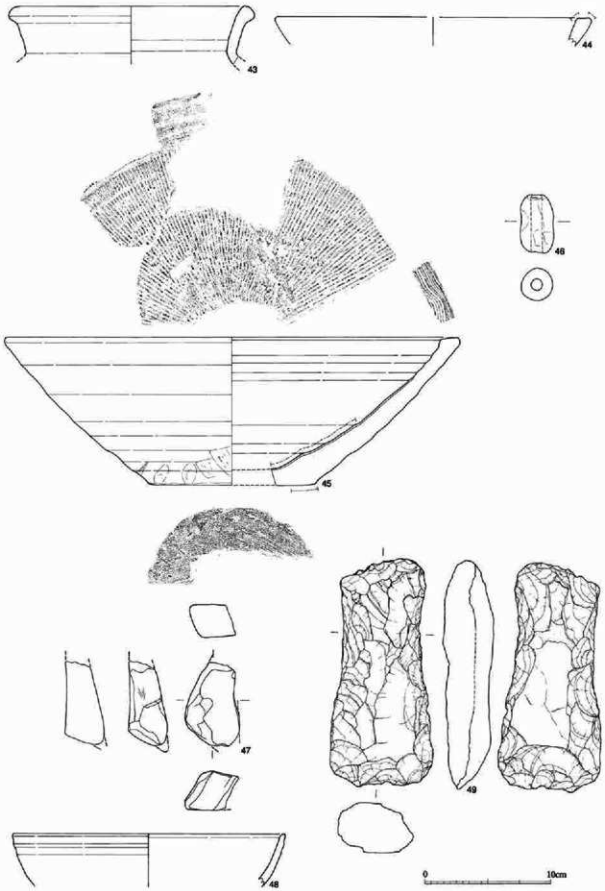
第174～177、179図に第０・Ｉ面包含層出土遺物を図示した。縄文土器から近世陶器まで様々な製品が出土している。149・150は同一個体とみられる口禿げの白磁皿である。瀬戸の入れ子156は内面に漆が付着している。210は調査区外で採集した空風輪である。正面と推定される面に東方発心門「キャ」「カ」とみられる梵字が、背面にも何か彫り込みが確認できるが、梵字の体を為していない。正面及び背面のみに文字彫り込み用の面を作っていることから、彫り損じたために反対面に彫り直した可能性もある。



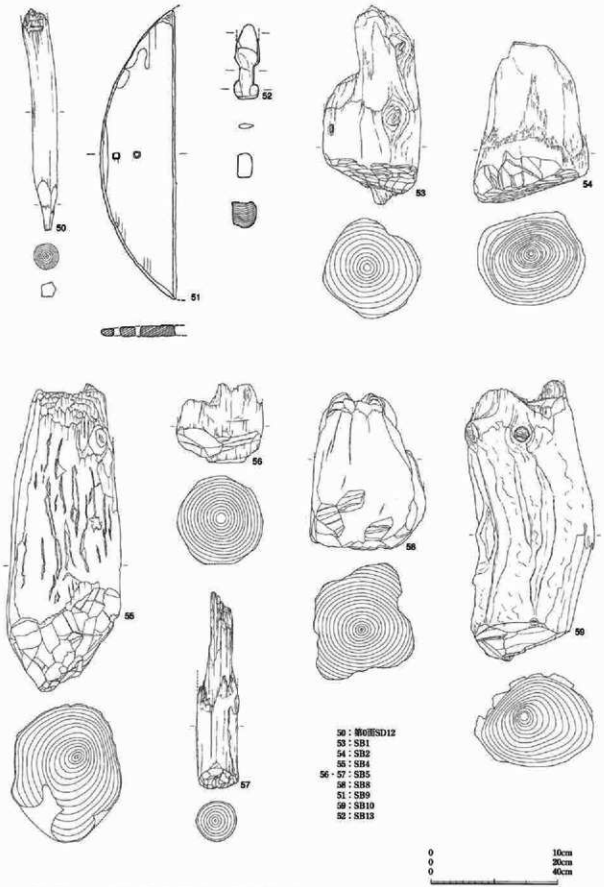
第166図　D地区第0面溝・第Ⅰ面掘立柱建物・ピット出土遺物実測図（S＝1/3）



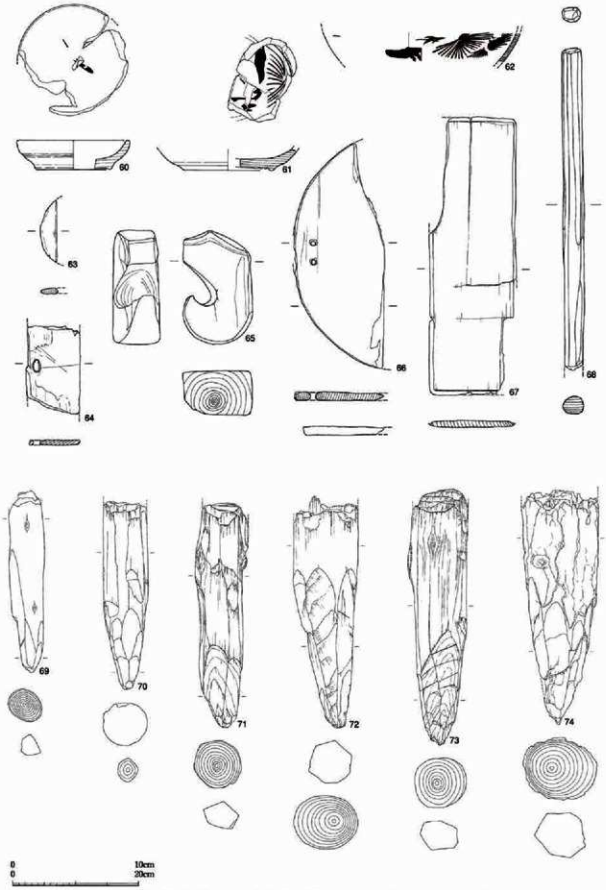
第167図　D地区第Ⅰ面ピット出土遺物実測図1（S＝1/3）



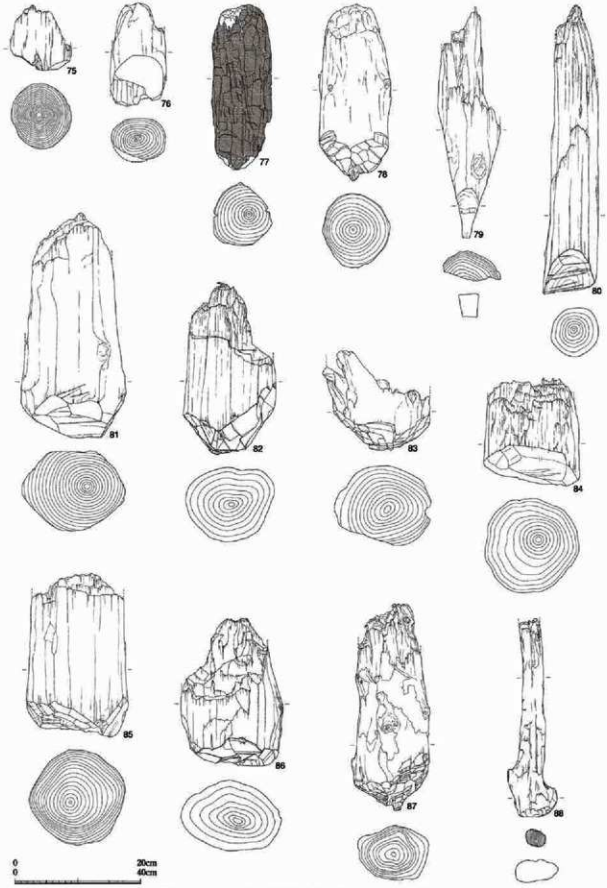
第168図　D地区第Ⅰ面ピット出土遺物実測図2（S＝1/3）



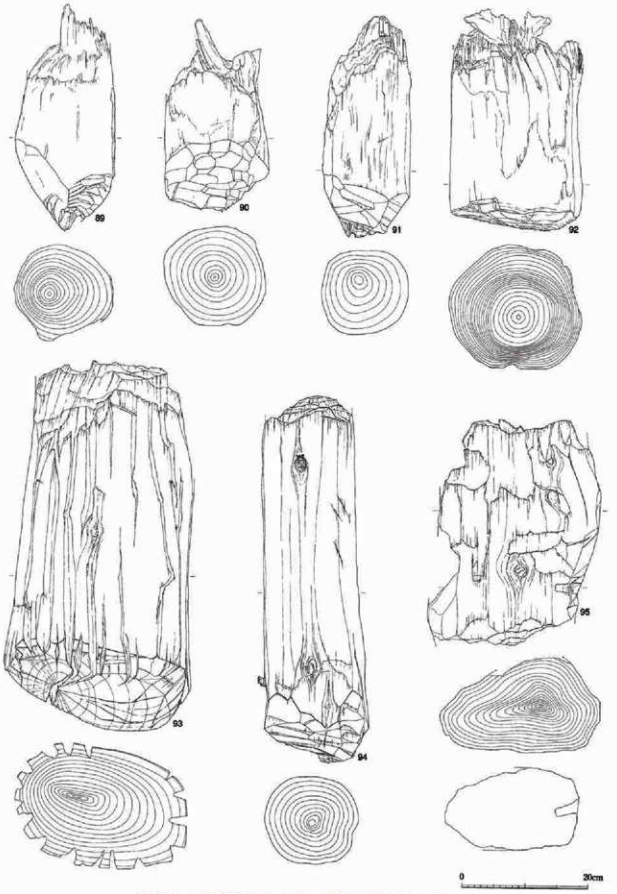
第169図　D地区第0面溝・第Ⅰ面掘立柱建物出土木製品実測図（51・52はS＝1/3，53～56，58・59はS＝1/6，50・57はS＝1/12）



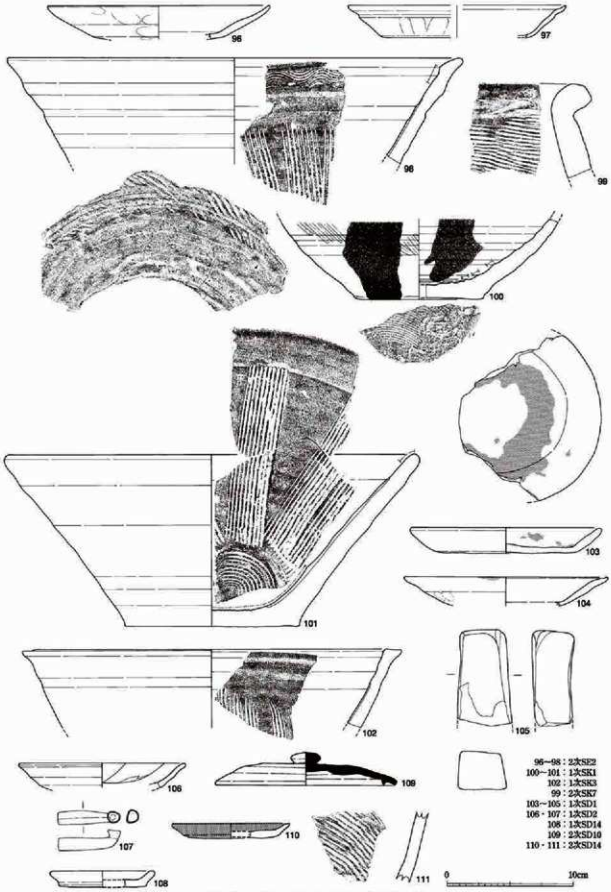
第170図　D地区第Ⅰ面ピット出土木製品実測図1（60～68はS＝1/3，69～74はS＝1/6）



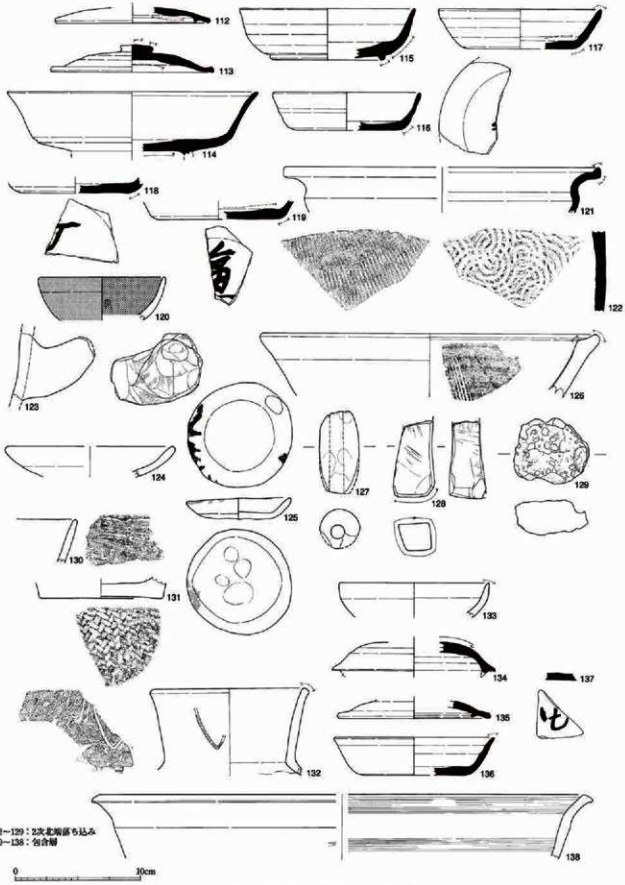
第171図　D地区第Ⅰ面ピット出土木製品実測図2（75～86はS＝1/6，87・88はS＝1/12）



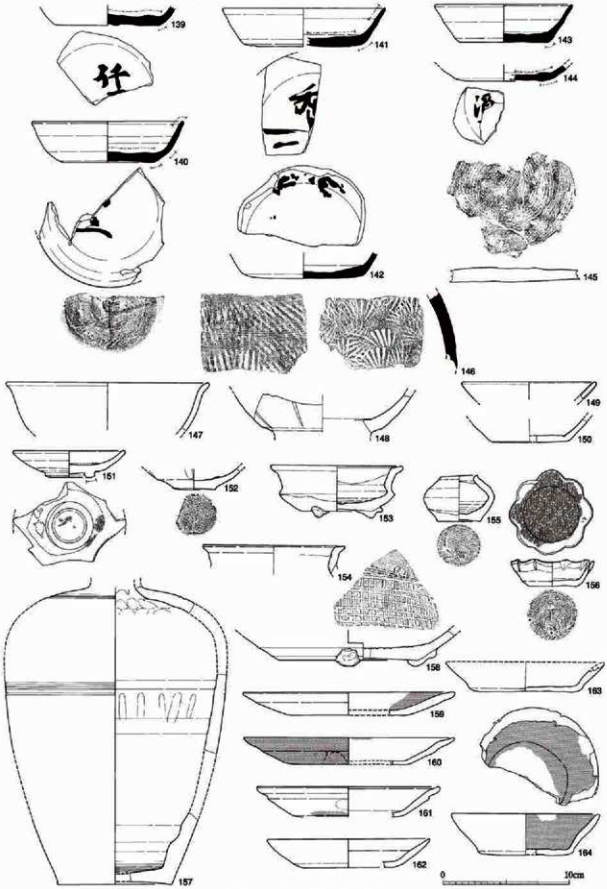
第172図　D地区第Ⅰ面ピット出土木製品実測図3（S＝1/6）



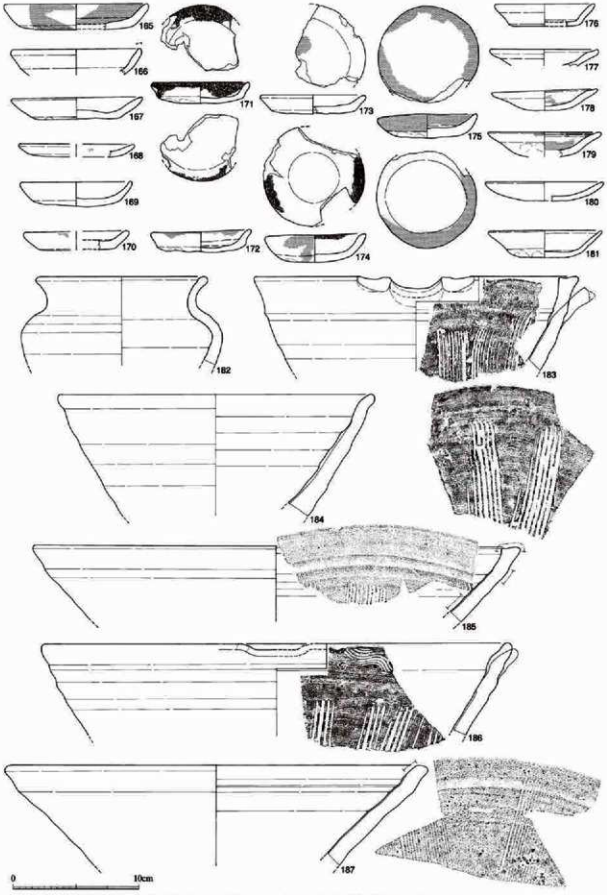
第173図　D地区第Ⅰ面井戸・土坑・溝出土遺物実測図（S＝1/3）



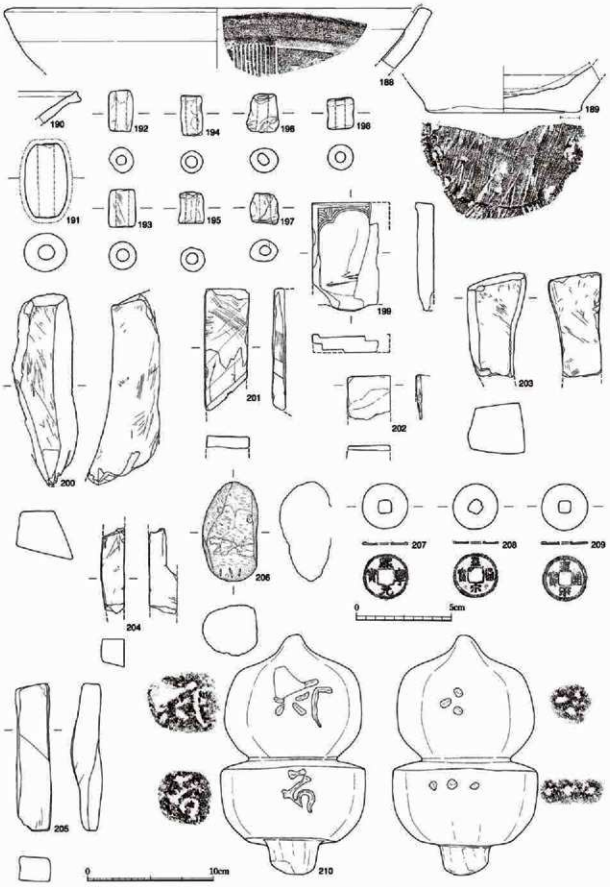
第174図　D地区第Ⅰ面北端落ち込み・包含層出土遺物実測図（S＝1/3）



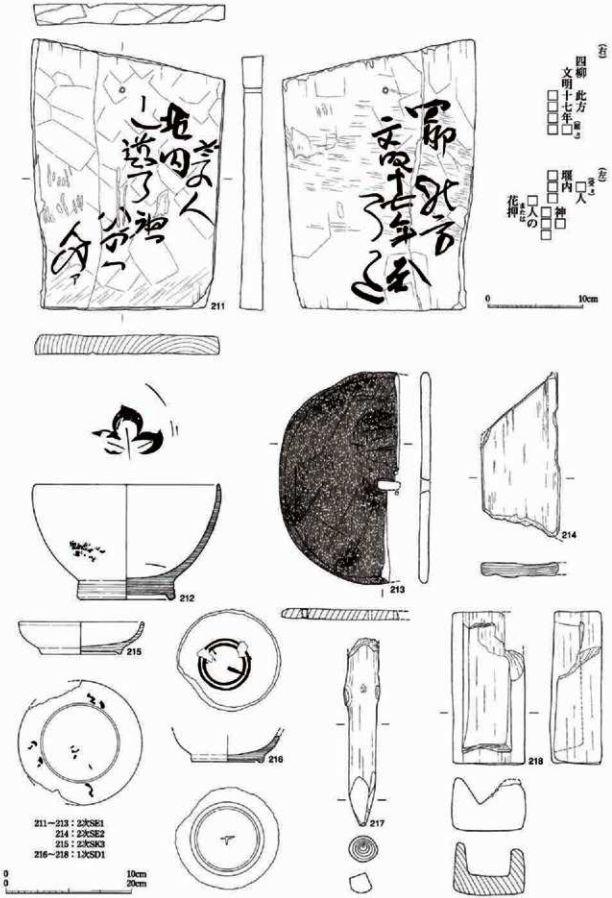
第175図　D地区第0・Ⅰ面包含層出土遺物実測図1（S＝1/3）



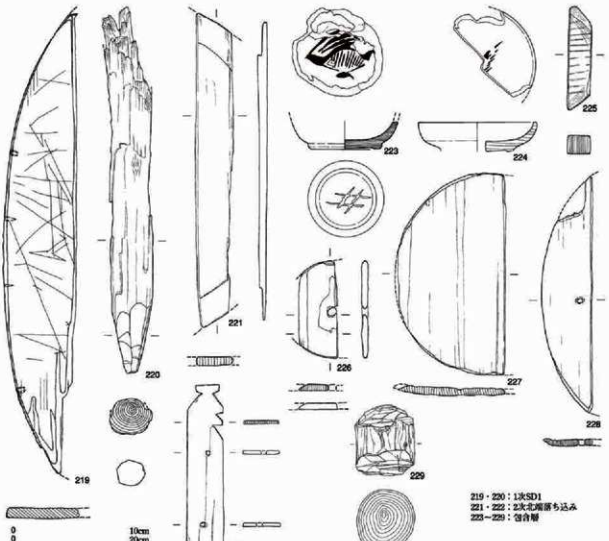
第176図　D地区第0・Ⅰ面包含層出土遺物実測図2（S＝1/3）



第177図　D地区第0・Ⅰ面包含層出土遺物実測図3（S＝1/3，207～209はS＝1/2）



第178図　D地区第1面井戸・溝出土木製品実測図（S＝1/3，211はS＝1/4，217はS＝1/6）



第179図　D地区第Ⅰ面溝・北端落ち込み・包含層出土木製品実測図（S＝1/3，220・229はS＝1/6）

（ ）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	写真番号	地区	グリッド	遺構名	種別	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度	色調・外	色調・内	胎土	備考
166-1	D129	1次D地区	G-16-4	SD11	縄文系	鉢形	—	(3.7)	13.8	1	灰色	灰色	粗砂少	浅かし
2	D116	1次D地区	G-16-4	SD11	把手系縄文	鉢？	—	(5.6)	9.8	底-3	黒味一灰白色	暗一明褐灰色	粗砂	背縁
3	D111	1次D地区	G-16-4	SD11	把手系縄文	鉢	—	(3.1)	4.8	底-4	黒味一にぶい黄色	暗一灰黄色	灰白砂	鉢も同じか？
4	D108	1次D地区	G-16-4	SD11	把手系縄文	鉢	—	(4.6)	4.4	底-3	黒味一灰色	暗一明オリーブ灰色	灰白砂	砂付き，陶器破付
5	D182	1次D地区	G-16-4	SD11	縄紋系	壺	—	(3.2)	—	小片	褐褐色	橙色	微砂粒含	
6	D195	1次D地区	G-16-4	SD11	縄紋系	ミケ台	—	(4.7)	16.8	底-4	橙色	橙色	微砂含	
7	石42	1次D地区	G-16-4	SD11	石製品	石火	—	—	—	—	乳白色		緑色凝灰岩	小松市滝ヶ原産
8	D56	1次D地区	I-14-3	1次P28	中世土師器	鉢	8.4	1.8	6.0	4	にぶい橙色	にぶい橙色	海綿骨片，微土滝少	
9	D129	1次D地区	I-15	1次P12	瓦質土器	火鉢	21.8	(3.9)	—	1	黒色	黒色一にぶい黄橙色	粗砂，雲母少	被熱痕
10	D102	1次D地区	I-16-2	1次P36	瓦器一瓦器	皿底	5.8	(1.6)	—	5	黒味一灰白色	暗一明褐色	微砂	鉢敷
11	D99	1次D地区	I-16-2	1次P36	中世土師器	鉢	10.2	2.1	8.3	6	にぶい黄橙色	にぶい橙色	粗砂微	煤付着
12	D104	1次D地区	I-15-4	1次P43	弥付	鉢	—	2.9	(3.6)	—	12	黒味一黄白色	暗一青味を帯びた白	煤跡	肥跡か
13	D108	1次D地区	H-15-4	1次P67	青磁	鉢	—	(6.0)	—	小片	黒味一灰色	暗一オリーブ灰色	灰白少	
14	D84	1次D地区	G-15-3	1次P100	中世土師器	鉢	8.2	1.9	6.8	9	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含	打痕跡
15	D45	1次D地区	G-15-4	1次P100	中世土師器	鉢	11.5	2.0	8.4	3	灰黄褐色	にぶい黄橙色	粗砂少	煤付着
16	D43	1次D地区	G-15-4	1次P100	中世土師器	鉢	14.4	(1.6)	—	2	灰黄色	淡黄色	粗砂やや多	二次被熱痕
17	D171	1次D地区	G-16	2次P39	陶胎焼	片口鉢	—	—	—	小片	暗灰黄色	明灰黄色	微砂粒含	
18	D059	2次D地区	G-16	2次P46	中世土師器	鉢	7.8	(1.3)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂多	
19	D88	2次D地区	G-16-4	2次P64	中世土師器	鉢	10.8	2.1	5.4	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	海綿骨片含	タール状付着物
20	D057	2次D地区	G-16	2次P84	瓦器足	坏蓋	15.4	(1.7)	—	—	暗灰色	灰色	微砂多	9箇
21	D80	1次D地区	H-15-3	1次P83	中世土師器	鉢	8.9	2.2	6.2	8	暗灰黄色 橙味一黒色	灰色	粗砂少	煤付着
22	D191	1次D地区	H-15-16	1次P83-84	陶胎焼	片口鉢	約14	(4.2)	—	1	褐色	灰色	微砂粒混	

第33表　第1・2次調査D地区第0・Ⅰ面出土遺物観察表1

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

図版番号	実測番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度	色調・外	色調・内	胎土	備考
169-25	D662	2次D地区	G-17-1	3次P11	土師器	小皿	約13	(3.0)	—	—	にぶい橙色	にぶい橙色	粗砂多	非ロクロ
24	D115	2次D地区	F-17-2	2次P12	瓶津焼	甕	10.5	(2.2)	—	3	黄味一明赤褐色	極一黒白色	緻密	二次被熱
25	D83	2次D地区	G-17-1	2次P11-12、後ろ込み	中世土師器	甕	7.2	1.6	6.5	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含	
26	D67	2次D地区	G-17-1	2次P11-12、後ろ込み	中世土師器	甕	8.4	2.1	7.1	5	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含	金属器付着
27	D182	2次D地区	G-17-1	2次P11-12、上面後ろ込み	土製品	土錘	長2.2.9	径2.1		12	灰黄色	灰黄色	赤色粒多	重量8.5ｇ、孔径0.8cm
167-28	D169	1次D地区	F-17-2	1次P57	縄潰焼	片口鉢	—	(3.6)	12.8	底-1	灰色	灰色	粗砂含	
29	D187	1次D地区	F-17-2	1次P57	越前焼	すり鉢	—	(4.6)	18.4	底-1	灰色	灰オリーブ色	粗砂含	第17図187と同一個体か 重石不明、C期
30	D655	2次D地区	G-17-1	2次P97	須恵器	坏蓋	17.1	(1.8)	—	—	灰色	灰色	細砂含	重石不明、C期
31	D663	2次D地区	G-17	2次P97	須恵器	有台坏	—	(1.7)	6.6	—	褐灰色	灰白色	粗砂含	C期
32	D666	2次D地区	G-17-2	2次P97	須恵器	無台坏	—	(1.1)	7.4	—	灰黄色	灰黄色	細砂含	C期
33	D660	2次D地区	G-16	2次P43	須恵器	無台坏	—	(1.3)	8.6	—	黄灰色	黄灰色	海綿骨片混	D期
34	D651	2次D地区	J-16	2次P118	須恵器	無台坏	—	(2.0)	9.0	—	にぶい黄灰色	灰黄褐色	粗砂含	D期
35	D133	1次D地区	J-15-2	1次P19	須恵器	長石風か	—	(2.0)	—	0	暗灰色	暗灰色	粗砂含	孔あり、９ｃｍ？
36	D661	2次D地区	G-17	2次P29	須恵器	甕	30.0	(5.4)	—	小片	黄灰色	灰色	粗砂含	補修に不安あり、D期
37	D112	1次D地区	H-15-2	1次P106	瓦器?	椀	—	(1.8)	5.4	0	黒味一浅黄色	極一灰オリーブ色	緻密	灰釉
38	D131	1次D地区	I-15-3	1次P76	越中瀬戸	すり鉢	—	(2.9)	—	小片	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	気泡含	
39	D44	1次D地区	G-16-2	1次P102	中世土師器	皿	8.3	1.4	6.2	2	浅黄色	黒色	粗砂含	煤付着
40	D76	2次D地区	G-16-3	2次P15-16、後ろ込み	中世土師器	皿	9.3	1.7	6.5	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	海綿骨片含	金属器付着
41	D59	1次D地区	I-15-4	1次P65	中世土師器	皿	9.0	1.5	7.8	5	褐灰色	褐灰色	粗砂含	煤付着
42	D177	1次D地区	I-15-4、H-17	1次P61-36、包含層	縄潰焼	甕	—	(10.4)	12.0	—	灰色	灰色	海綿骨片混	
168-43	D135	1次D地区	J-16-1	1次P5	縄潰焼	壺	18.0	(4.6)	—	1	暗灰色	暗灰色	気泡多	
44	D656	2次D地区	G-17-2	2次P86	縄潰焼	片口鉢	—	(3.3)	—	小片	灰色	灰色	細砂多	
45	D178	1次D地区	I-15-2	1次P53	縄潰焼	片口鉢	35.9	11.7	13.4	—	灰色	灰色		
46	D86	2次D地区	G-17-2	2次P93	土製品	土錘	長2.4.6	幅2.7	—	12	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫、粗砂多	重量20.7ｇ、孔径0.8cm
47	E19	1次D地区	H-16-1	1次P84	石製品	硯石	長8（4.3）	幅6.6	厚3.1	—	黄白色		シルト岩	残重量95.7ｇ、一次被熱、仕上げ痕有
48	D653	2次D地区	H-16-4	2次P113	縄文土器	浅鉢	21.4	(4.2)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	砂粒多	
49	E16	2次D地区	H-16-4	2次P113	石製品	打製石斧	長8.2.7.9	幅5.1	厚2.3.9	完形				一部欠損、重２６０ｇ
172-50	D89	2次D地区	G-18	2次SE2-方形土坑	中世土師器	皿	約17	(2.6)	—	1	橙色	橙色	海綿骨片混	
97	D90	2次D地区	G-18	2次SE2-方形土坑	中世土師器	皿	約17	(2.6)	—	1	橙色	橙色	海綿骨片混	
98	D186	2次D地区	G-18	2次SE2-方形土坑	縄潰焼	片口鉢	36.0	(8.6)	—	小片	灰色	灰黄褐色	粗砂、海綿骨片含	
99	D191	2次D地区	I-16	2次SK7	縄潰焼	壺	—	(4.6)	—	小片	灰色	黒褐色	微砂粒含	内面二次被熱
100	D68	1次D地区	I-16-3	1次SK1	縄潰焼	壺	—	(6.4)	10.2	底-4	灰色	灰色	海綿骨片含	細砂粒含内面二次被熱
101	D176	1次D地区	I-16-3、F-17、G-17-2	1次SK1、整地土層	縄潰焼	すり鉢	32.3	13.6	14.0	1	にぶい褐色	にぶい褐色	1mm以下の砂粒混	
102	D189	1次D地区	G-16-1	1次SK3	縄潰焼	片口鉢	約28	(6.1)	—	1	黄灰色	灰色	微砂含	
103	D46	1次D地区	I-15-2	1次SD1	中世土師器	皿	14.8	2.1	11.2	4	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含	煤付着
104	D51	1次D地区	J-15-2	1次SD1	中世土師器	皿	16.4	(2.3)	—	2	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂含、粗砂含	煤付着
105	E12	1次D地区	J-16	1次SD1	石製品	硯石	長8（7.6）	幅6.3	厚3.3	—	褐灰白色		シルト岩	残重量134.4ｇ、５面使用、仕上げ痕有
106	D106	1次D地区	J-15	1次SD2	越中瀬戸	皿	13.1	(2.0)	—	1	黒味一浅黄褐色	極一にぶい赤褐色		鉄釉
107	金-95	1次D地区	J-15	1次SD2	金属製品	煙管雁首	長2.4.9	高1.1	径1.1	12				重量11.7ｇ
108	D42	1次D地区	G-15-4	1次SD14	中世土師器	皿	8.2	1.3	7.0	3	にぶい黄色	にぶい黄色	粗砂多	
109	D670	2次D地区	G-17-1	2次SD10	須恵器	坏蓋	12.4	3.6	径径2.3	—	灰色	灰色	粗砂多	A期
110	D62	2次D地区	G-17-1	2次SD14	中世土師器	皿	9.3	1.2	7.7	—	黒色	黒色		金属器付着
111	D715	2次D地区	G-17	2次SD14	縄潰焼	壺	—	(5.5)	—	—	灰色	灰色	粗砂多	
174-112	D695	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	坏蓋	12.0	(1.2)	—	—	灰色	灰色	粗砂多	D期
113	D695	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	坏蓋	12.9	3.2	径径2.6	—	灰色	灰色	粗砂多	C期
114	D690	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	有台坏	19.8	(5.0)	—	—	灰色	灰色	粗砂多	A期
115	D697	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	有台坏	13.8	4.1	9.2	—	灰色	灰色	粗砂多	B期
116	D691	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	無台坏	11.6	3.0	9.2	—	青灰色	灰色	粗砂多	C期
117	特46	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	無台坏	12.8	3.2	8.2	—	灰黄色	灰黄色	粗砂多	外底面墨書「□」、C期
118	特48	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	無台坏	—	(1.3)	8.4	—	灰色	灰色		外底面墨書「□」
119	特47	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	無台坏	—	(1.5)	9.6	—	灰色	灰色	粗砂若干	外底面墨書「□（福か）」
120	D696	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	外面内黒土師器	無台椀	10.0	(3.3)	—	—	明褐灰色	黒色		Ｂｃ中頃？
121	D693	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	鉢	約25	(3.6)	—	—	灰色	灰色	粗砂少	Ｂ～Ｃ期
122	D688	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	壺	—	(6.3)	—	—	灰色	灰色	粗砂多	
123	D689	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	土師器	甕	—	(3.0)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂多	７ｃ後半～８ｃ中葉
124	D49	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	須恵器	皿	13.0	(2.4)	—	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂多	
125	D66	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	中世土師器	皿	8.1	1.7	6.7	12	灰黄色	灰黄色	粗砂多	打明跡
126	D694	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	縄潰焼	鉢	26.4	(5.0)	—	—	灰色	灰色	粗砂多	黒色付着物
127	D85	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	土製品	土錘	長2.6.6	幅2.1	—	4	灰黄色	灰黄色	粗砂多	孔径1.1cm、残重量43.5ｇ
128	E17	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	石製品	砥石	長8（6.1）	幅3.9	厚2.3.3	—				全面使用
129	金35	2次D地区	F-17	2次北端落ち込み	金属製品	鋲形浮	長2.6.0	幅5.2	厚2.2.8	—				脚２付浮、残存重量8.0ｇ
130	C39	2次D地区	G-16-4	試掘No.4-包含層（黒灰色粘砂）	縄文土器	深鉢	約30	(3.5)	—	小片	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	細砂、2mm以上の粗砂混	外面煤付着
131	D136	2次D地区	G-16-2	整地土	縄文土器	深鉢	—	—	9.8	3	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	礫混、粗砂多	
132	D137	1次D地区	H-16-5	包含層	弥生土器	壺	11.9	(6.9)	—	1	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	粗砂多	櫛刻あり
133	D615	2次D地区	G-17-3	包含層（Ⅱ・Ⅲ面整地土）	土師器	無台椀	11.8	(3.7)	—	2	灰黄褐色	灰黄褐色	粗砂若干	非ロクロ
134	D698	2次D地区	G-16-4	試掘No.4-包含層（黒灰色粘砂）	須恵器	坏蓋	約11	(2.5)	—	—	灰色	灰色	礫・砂混	A期
135	D695	2次D地区	F-17-2	包含層（Ⅱ・Ⅲ面整地土）	須恵器	坏蓋	11.8	(1.4)	—	1	灰色	灰色	粗砂多	A期
136	D698	2次D地区	G-17-1・3	包含層	須恵器	無台坏	12.6	3.0	9.0	—	灰色	灰色	細砂、2mm以上の粗砂混	B期
137	特8	1次D地区	H-16-3	包含層	須恵器	無台坏	—	(0.6)	—	—	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	海綿骨片混	外底面墨書「屯
138	D682	2次D地区	G-17-1	包含層	土師器	鍋	約38	(4.0)	—	—	にぶい黄橙色	暗灰色	粗砂多	ロクロ、ｂｃ後半以降
175-139	特24	2次D地区	G-16-3・4	包含層	須恵器	無台坏	—	(1.7)	8.4	—	灰色	灰色	礫・砂混	外底面墨書「□」、D期
140	特2	1次D地区	H-17-3	包含層	須恵器	無台坏	11.9	3.3	7.8	—	灰色	灰色	粗砂多	外底面墨書「□」、ヘラ記号（×）、B期

第34表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ｉ面出土遺物観察表２

（　）は残存法量を示す。遺存度は12分割で計算。

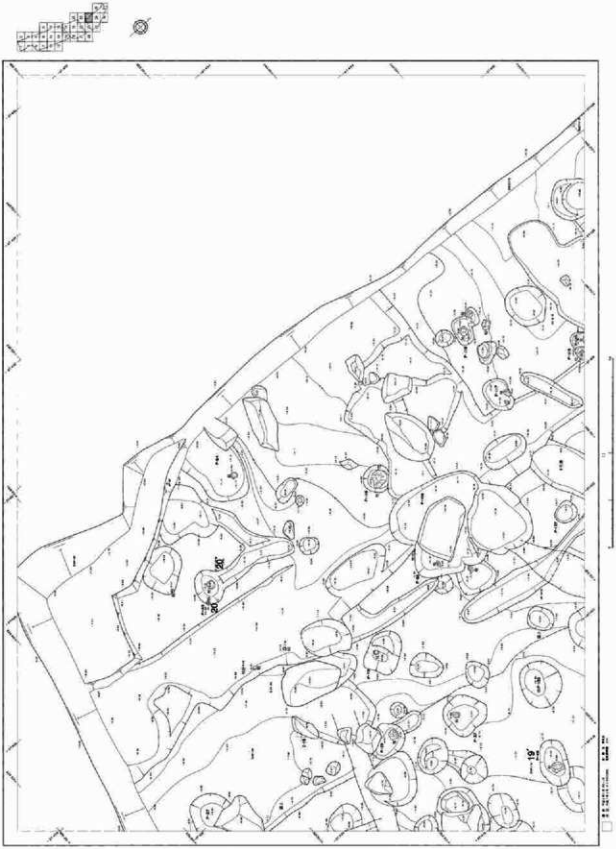
図版番号	遺構番号	地区	グリッド	遺構名	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	遺存度	色調・外	色調・内	胎土	備考
175-141	特4	1次D地区	G-17-2	整地土	須恵器	無台坏	12.8	3.1	9.4	—	灰色	灰色	微砂粒混	外底面墨書「□□」、D期
142	D614	2次D地区	H-16-1	包含層（第一面整地土）	須恵器	無台坏	—	(2.1)	9.6	—	灰白色	灰黄色	粗砂多	赤漆容器転用、漆付着、C期
143	D 1	2次D地区	G-16-3、G-17	包含層	須恵器	無台坏	10.8	3.0	7.0	—	灰黄色	灰黄色	礫・砂混	D期
144	特9	1次D地区	H-15-16	整地土	須恵器	無台坏	—	(1.3)	7.9	—	灰白色	灰黄色	微砂若干混	外底面墨書「□（酒か）」、D期
145	D684	2次D地区	G-17-1-3	包含層	土師器	台付甕	—	(1.1)	—	—	灰黄褐色	灰黄褐色	粗砂混	仏器、9c代
146	D 4	1次D地区	H-15-1	包含層	須恵器	壺	—	(6.1)	—	—	灰色	灰色	微砂粒混	内面放射文印才、9c代
147	D114	1次D地区	G-17	整地土、包含層	青磁	碗	16.0	(3.8)	—	1	素地一灰色	釉一オリーブ灰色	緻密	二次被熱、釉白褐化。
148	D113	2次D地区	H-15-4	ベース整地土	青磁	碗	—	(2.0)	—	0	素地一灰オリーブ色	釉一オリーブ色	緻密	
149	D110	1次D地区	—	包含層	白磁	口兎鉢	10.5	(1.4)	—	6	素地一乳白色	釉一オリーブ白色	気泡含	150と同一個体か
150	D105	1次D地区	—	包含層	白磁	口兎鉢	—	(1.5)	6.2	3	素地一乳白色	釉一オリーブ白色	気泡含	149と同一個体か
151	D138	1次D地区	G-17-1	包含層	白磁	坏	8.8	2.1	3.9	1	素地一淡黄色	釉一乳白色	緻密	釉剥痕あり、漆付着。
152	D124	1次	—	包含層	越中瀬戸	皿	—	(1.6)	3.4	筋-9	素地一に赤い黄褐色	釉一に赤い赤褐色	緻密	内面施釉、鉄釉、底部糸切り
153	D99	2次D地区	G-17-1-3	包含層	瀬戸	香炉	10.4	4.1	5.5	2	釉一黒褐色	素地一淡黄色	気泡少	鉄釉
154	D616	2次D地区	G-17-3	包含層（第一面整地土）	瀬戸	香炉	11.6	(2.5)	—	小片	暗褐色	暗褐色	粗砂若干混	鉄釉
155	D101	2次D地区	G-17	暗褐謀水（モミ中）	瀬戸	合子	2.9	3.7	3.4	12	素地一灰白色	釉一灰オリーブ色	緻密	灰釉、二次被熱
156	D103	2次D地区	I-15-3	ベース整地土	瀬戸	入れ子	6.5	2.1	3.9	12	素地一灰白色	釉一灰オリーブ色	緻密	灰釉、内面線付着
157	D100	2次D地区	H-16-3	包含層・II面ベース土	瀬戸	瓶子	—	—	9.0	筋-1	素地一灰白色	釉一灰オリーブ色	緻密、気泡含	灰釉
158	D132	1次D地区	H-15	整地土	瀬戸	おろし器	—	(2.3)	11.2	筋-3	淡黄色	浅黄橙色	気泡少	台部貼り付け
159	D41	1次D地区	G-16-1	試掘坑	中世土師器	皿	16.8	1.8	9.2	2	灰黄褐色	黄褐色	粗砂多	煤付着
160	D74	2次D地区	G-17-1	整地土	中世土師器	皿	16.7	2.2	9.4	1	黄褐色（黒）	黄褐色	海綿骨片含	煤付着
161	D210	1次D地区	G-17-1	包含層	中世土師器	皿	14.5	(2.4)	—	1	黄褐色	黄褐色	海綿骨片	煤付着
162	D586	2次D地区	F-17-2	包含層（整地土）	中世土師器	皿	12.8	2.3	9.7	2	黄褐色	黄褐色	粗砂多	
163	D167	2次D地区	M-N-7	包含層	中世土師器	皿	—	(2.3)	9.0	1	黄褐色	黄褐色		
164	D48	2次D地区	H-16	ベース整地土、包含層	中世土師器	皿	11.6	3.3	7.6	2	黄褐色	黄褐色	海綿骨片含	二次被熱跡
175-165	D165	1次D地区	—	整地土、包含層	中世土師器	皿	11.3	2.1	9.2	1	黄褐色	黄褐色	粗砂多	灯明皿
166	D679	2次D地区	H-16-4	試掘坑2（上段）	中世土師器	皿	10.2	(2.1)	—	—	灰黄褐色	黄褐色	粗砂混	
167	D163	1次不明	—	包含層	中世土師器	皿	10.5	1.7	7.2	3	黄褐色	黄褐色	粗砂多	
168	D576	2次D地区	G-17	包含層	中世土師器	皿	9.0	1.0	—	2	灰黄色	灰黄色	粗砂混	
169	D57	1次D地区	F-16-2	SD1	中世土師器	皿	8.6	2.0	7.1	5	黄褐色	黄褐色	粗砂、雲母	
170	D47	2次D地区	F-17-2	整地土	中世土師器	皿	約8	1.4	約6	小片	黄褐色	黄褐色	粗砂混	煤付着
171	D211	1次D地区	H-16-4	包含層	中世土師器	皿	7.5	1.6	7.0	3	黄褐色	黄褐色	海綿骨片	灯明皿
172	D162	1次不明	—	包含層	中世土師器	皿	7.7	1.9	7.1	12	黄褐色	黄褐色	粗砂多	灯明皿
173	D213	1次D地区	G-17-2	整地土	中世土師器	皿	8.2	1.5	6.8	2	黄褐色	黄褐色	粗砂多	煤付着
174	D77	1次D地区	H-16	暗褐謀水	中世土師器	皿	7.7	2.3	5.8	5	黄褐色	黄褐色	海綿骨片	灯明皿
175	D64	2次D地区	G-16	整地土	中世土師器	皿	7.7	1.0	5.5	9	黄褐色	黄褐色	粗砂多	二次被熱跡、灯明皿。
176	D164	1次D地区	—	包含層	中世土師器	皿	7.9	1.8	5.7	2	黄褐色	黄褐色	粗砂多	
177	D50	2次D地区	F-17-2	整地土	中世土師器	皿	8.3	(1.4)	—	1	黄褐色	黄褐色	海綿骨片、粗砂含	
178	D161	1次D地区	I-16-4	包含層	中世土師器	皿	8.4	1.7	—	7	黄褐色	黄褐色	海綿骨片含	煤付着
179	D212	1次D地区	F-17	包含層、灰色土	中世土師器	皿	8.8	1.9	—	5	黄褐色	黄褐色	粗砂多	煤付着
180	D507	2次D地区	G-16-1	整地土	中世土師器	皿	8.8	1.5	—	3	黄褐色	黄褐色	粗砂多	
181	D504	2次D地区	H-15	水溜西	中世土師器	皿	8.9	2.3	6.4	12	灰白色	黄褐色	粗砂多	
182	D134	1次D地区	G-16-4	包含層（中世焼出面）	瓶洲焼	壺	11.1	(7.0)	—	2	暗灰色	暗灰色	気泡含	口縁部歪み
183	D173	2次D地区	I-15-3	包含層	瓶洲焼	片口鉢	25.4	(7.5)	—	小片	暗灰色	暗灰色	微砂粒・海綿骨片混	
184	D185	1次D地区	G-17-2	整地土	瓶洲焼	片口鉢	24.8	(9.6)	—	1	灰色	灰色	微砂・海綿骨片含	
185	D362	—	—	—	瓶洲焼	片口鉢	30.6	(6.0)	—	—	—	—	—	
186	D168	1次D地区	J-18	1次SD1	瓶洲焼	片口鉢	36.8	(7.3)	—	小片	灰色	灰色	砂粒混	
187	D97	1次D地区	H-15-16、H-G-10	整地土、SD1-6、2次P72	越前焼	すり鉢	32.4	(8.0)	—	2	灰色	灰黄褐色	気泡含	第187図20と同一個体か
177-188	D98	1次D地区	H-15-16	整地土	越前焼	すり鉢	32.4	(4.6)	—	1	赤褐色	赤褐色	微砂含	
189	D172	2次D地区	H-17	包含層	瓶洲焼	壺	—	(2.5)	12.4	筋-1	灰色	灰色	粗砂、雲母	摩耗調者
190	D617	2次D地区	G-17-3	II・IV面整地土	陶器	鉢	—	(2.5)	—	小片	灰褐色	灰褐色	細砂混	産地不明。
191	D88	1次D地区	H-16-3、H-17-1	包含層（中世焼出面）	土製品	土鈴	長8.5	幅3.4	—	12	浅黄色	浅黄色	雲、粗砂、海綿骨片含	重量350.5g、孔径1.3cm。
192	D685	2次D地区	G-17-1-3	包含層	土製品	土鈴	長8.3.5	幅2.0	—	—	—	—	—	孔径0.8cm
193	D96	2次D地区	I-16-2	包含層、ベース整地土	土製品	土鈴	長8.3.0	幅2.2	—	12	オリーブ黒色	オリーブ黒色	粗砂、海綿骨片含	残重量12.9g、孔径1.8cm。
194	D87	2次D地区	G-16-3	整地土	土製品	土鈴	長8.3.2	幅1.7	—	12	黄灰色	黄灰色	粗砂粒含	残重量8.3g、孔径0.8cm。
195	D91	1次不明	—	—	土製品	土鈴	長8.2.5	幅2.1	—	12	暗灰黄色	暗灰黄色	粗砂多	重量7.5g、孔径0.9cm。
196	D152	1次不明	—	包含層	土製品	土鈴	長8.3.0	幅2.6	—	12	黄褐色	黄褐色	粗砂粒含	重量11.9g、孔径0.8cm。
197	D183	2次D地区	—	包含層	土製品	土鈴	長8.2.4	幅2.3	—	12	浅黄橙色	浅黄橙色	粗砂少	残重7.7g、孔径0.9cm。
198	D92	1次不明	—	—	土製品	土鈴	長8.2.5	幅2.1	—	12	浅黄色	浅黄色	雲、粗砂、海綿骨片含	重量8.8g、孔径0.7cm。
199	G87	2次D地区	H-16-2、I-16-1	ベース土（耕作土）整地土	石製品	硯	長8.(8.6)	幅(5.2)	厚1.4	黒色	黒色	黒色		残重量81.9g、硯石へ転用
200	石1	1次D地区	F-16-2	SD1	石製品	硯石	長8.15.2	幅6.2	厚5.8	淡黄白色		シルト岩		残重量392.1g、仕上げ痕有
201	石4	2次D地区	G-16-3	包含層	石製品	硯石	長8.(9.6)	幅3.3	厚(0.9)	灰緑色		シルト岩		残重量54.9g、全面使用、仕上げ痕有
202	石14	1次	—	—	石製品	硯石	長8.(5.5)	幅3.4	厚(0.5)	淡緑色		シルト岩		残重量5.8g、仕上げ痕有
203	石3	1次D地区	H-15	整地土	石製品	硯石	長8.(8.3)	幅4.7	厚4.2	淡灰色	淡灰色	凝灰岩質安山岩		残重量214.5g、全面使用痕
204	石5	1次D地区	G-15-4	整地土	石製品	硯石	長8.(6.7)	幅(2.0)	厚2.3	淡黄白色		シルト岩		残重量37.5g、側面全て使用、仕上げ痕有
205	石7	1次D地区	H-15	中世ベース土	石製品	硯石	長8.11.6	幅2.7	厚2.3	黒灰色		凝灰岩質安山岩		重量10.8g、全面使用
206	G88	1次	—	—	石製品	砥石	長8.7.8	幅4.4	厚4.2	黒灰色		砥石		重量30.5g、使用痕
207	金-102	2次D地区	I-17-1	II面整地土	金属製品	鋲頭	径2.40							重量2.8g
208	金-105	2次D地区	G-17-1	整地土	金属製品	鋲頭	径2.40							重量2.5g
209	金-90	1次D地区	I-17-2	整地土と古代包含層の境	金属製品	鋲頭	径2.40							重量2.9g
210	石10	調査区外	—	表面採集	石製品	五輪塔	—	19.0	径11.5	12	灰黄色	灰黄色	石英安山岩	笑字あり、空風輪

第35表　第1・2次調査D地区第0・I面出土遺物観察表3

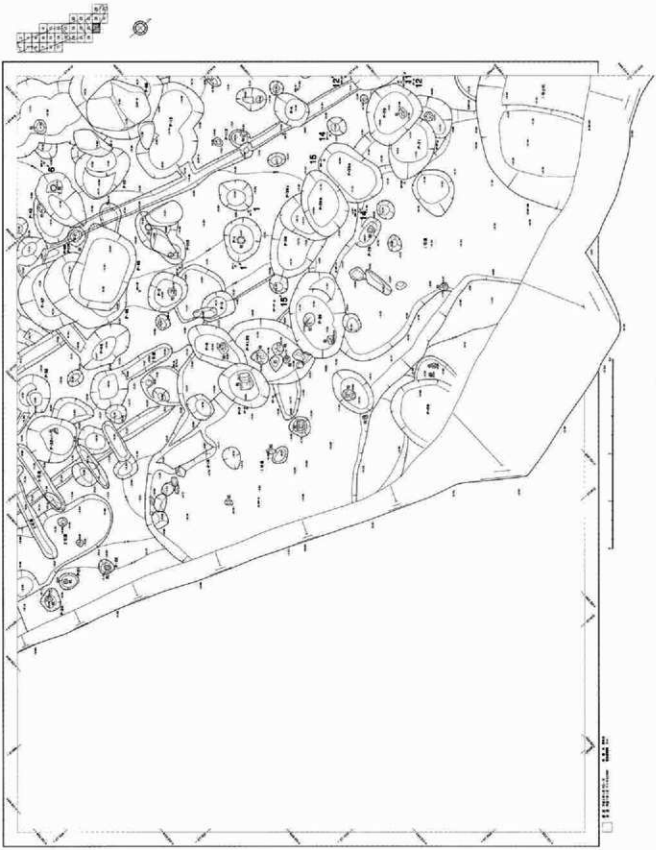
図版番号	実測番号	地区	面	グリッド	遺構名	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ・径 (cm)	木取り	朝鮮時代番号	備考
169-90	240(67)	2次D地区	下面	G-17-1	12次SD12-ウ	梳状木製品	(69.7)	—	径6.0	芯持ち材	185	アカマツ。0.6m、先端金側面加工。
51	45	1次D地区	0.1面	H-15-4	12次P88E	円形板	約30	—	厚0.9	辺材	54	スギ。略方形0.4cm の孔２ヶ所。
52	247(42)	2次D地区	下面	G-17-1	12次P75	加工材	(6.6)	2.0	厚2.1	辺材		先端部欠損。
53	179(Nu27)	1次D地区	0.1面	J-15-1	12次P29	柱根	(31.5)	—	15.6～15.9	芯持ち材	124	ニヨウマツ製。皮付き。底面２方向より加工。
54	156(Nu63)	1次D地区	0.1面	I-15-4	12次P2	柱根	(25.6)	—	14.9～18.1	芯持ち材	101	クヌ。底面平坦な加工。
55	279(Nu94)	1次D地区	0.1面	J-16-1	12次P6	柱根	(48.9)	—	18.1～22.0	芯持ち材		広葉樹か。皮付き。
56	179(Nu37)	1次D地区	0.1面	I-15-3	12次P112	柱根	(12.6)	—	13.7	芯持ち材	115	アカマツ。皮付き。底面３方向より加工。
57	287(Nu90)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P96	柱根	(61.7)	—	7.9～8.5	芯持ち材		皮付き。底面２方向より加工。
58	180(Nu42)	1次D地区	0.1面	H-15-3	12次P120	柱根	(24.8)	—	18.3X18.4	芯持ち材	125	スルデ。断面方形。底面平坦に加工。
59	280(Nu95)	1次D地区	0.1面	H-15-3	12次P87	柱根	(44.6)	—	14.8～18.8	芯持ち材		皮付き。底面３方向より加工。
170-60	22	1次D地区	0.1面	G-17-2	12次P97	漆器椀	口径9.0	器高2.3	底径6.0	横木どり	9	セクレン製。黒色漆、朱色文様。ロクロ目顕著。
61	132	2次D地区	下面(0.1面)	G-17	12次P85	漆器椀	—	器高(1.6)	底径7.2	横木取り		黒漆内面朱文様。
62	23	1次D地区	0.1面	G-16	12次P102	漆器椀	—	器高(2.2)	—	横木どり	10	ブナ製。黒色漆、内外朱色文様。
63	38	1次D地区	0.1面	I-15-2	12次P39(北半分)	円形板	6.2	—	厚0.5	板目どり	51	サワラ。
64	137	1次D地区	0.1面	I-15-4	12次P41	有孔板状木製品	(7.5)	4.4	厚0.9	辺材	61	1.0X0.6cm程円形孔。断面より刀子を入れ、折り割る。
65	59	1次D地区	0.1面	I-16-2	12次P15	曲げ木製品	9.0	3.5	厚5.5	芯持ち材	57	ニヨウマツ製。側面上端盛り上がる
66	52	1次D地区	0.1面	I-16-2	12次P15	円形板	18.4	—	厚0.7	板目どり	56	サワラ。径5.3cm の孔２ヶ所
67	37	1次D地区	0.1面	I-15-3	12次P9	梳状木製品	22.0	6.9	厚0.5	板目どり	50	ヒノキ。縦溝に受け歯
68	135	1次D地区	0.1面	I-15-4	12次P38	棒状木製品	(25.6)	—	径1.4～1.7	辺材	59	スギ。側面多角形状の加工
69	165(Nu12)	1次D地区	0.1面	J-15-3	12次P21	梳状木製品	(28.8)	—	5.1～5.7	芯持ち材	110	サイカチ。底面４方向より加工。先端つぶれる。
70	143(Nu47)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P118(イ)	杭	(39.8)	—	6.7～7.2	芯持ち材	88	スギ。先端つぶれる。
71	182(Nu18)	1次D地区	0.1面	J-15-2	12次P19	杭	(35.5)	—	7.6～8.4	芯持ち材	127	クヌ。
72	141(Nu41)	1次D地区	0.1面	J-15-3	12次P22	杭	(36.7)	—	8.5～10.2	芯持ち材	86	アカマツ。底面全方向より加工。
73	173(Nu36)	1次D地区	0.1面	J-15-3	12次P20	杭	(40.6)	—	8.3～9.4	芯持ち材	118	クヌ。
74	166(Nu26)	1次D地区	0.1面	J-15-1	12次P18	杭	(37.1)	—	9.9～12.1	芯持ち材	111	アカマツ。皮付き。先端つぶれる。
171-75	167(Nu11)	1次D地区	0.1面	G-16-2	12次P126	柱根	(10.4)	—	9.7～10.3	芯持ち材	112	アカマツ。底面２方向より加工。
76	175(Nu30)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P65	柱根	(17.4)	—	6.5～8.9	芯持ち材	120	スルデ。底面１方向より加工。
77	144(Nu59)	1次D地区	0.1面	H-15-3	12次P104東ピット	柱根か？	(25.8)	—	9.2～9.9	芯持ち材	89	アカマツ。側面一部加工。全面炭化。
78	190(Nu4)	1次D地区	0.1面	H-16-3	12次P127	柱根	(27.8)	—	11.4～11.7	芯持ち材	135	アカマツ。皮付き。底面２方向より加工。
79	169(Nu23)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P66	柱根	(36.6)	9.9	厚4.6	辺材	114	スギ。割材。
80	191(Nu26)	1次D地区	0.1面	G-16-2	12次P125	柱根	(45.8)	—	7.7～8.7	芯持ち材	136	アカマツ。皮付き。底面２方向より加工。
81	187(Nu5)	1次D地区	0.1面	H-16-1	12次P80	柱根	(35.7)	—	12.6～16.7	芯持ち材	132	クヌ。側若干加工。底面４方向より加工。
82	152(Nu66)	1次D地区	0.1面	I-15-2	12次P117	柱根	(23.3)	—	11.1～16.0	芯持ち材	97	クヌ。皮付き。底面平坦に加工。
83	168(Nu13)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P35, 41-イ	柱根	(16.0)	—	12.6～17.1	芯持ち材	113	アカマツ。側若干加工。底面３方向より加工。
84	157(Nu55)	1次D地区	0.1面	I-15-1	12次P30	柱根	(17.0)	—	14.8～15.0	芯持ち材	102	ニヨウマツ製。皮付き。底面、平坦。
85	158(Nu56)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P118	柱根	(36.0)	—	15.1～16.5	芯持ち材	103	クヌ。皮付き。底面３方向より加工。
86	159(Nu60)	1次D地区	0.1面	I-16-2	12次P78	柱根	(27.3)	—	11.7～14.7	芯持ち材	104	クヌ。底面２方向より加工。
87	282(Nu92)	1次D地区	0.1面	H-16-2	12次P80	柱根	(65.2)	—	17.4～24.7	芯持ち材		皮付き。底面３方向より加工。
88	193(Nu34)	1次D地区	0.1面	G-17-2	12次P96	柱根	(64.8)	—	7.5～15.7	芯持ち材	138	クヌ。
172-89	186(Nu44)	1次D地区	0.1面	I-15-2	12次P31	柱根	(35.6)	—	15.2～15.8	芯持ち材	131	ニヨウマツ製。皮付き。底面２方向より加工。
90	153(Nu50)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P8	柱根	(30.4)	—	15.6～16.6	芯持ち材	98	アカマツ。皮付き。底面２方向より加工。
91	140(Nu45)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P118(ウ)	柱根	(35.6)	—	13.3～13.8	芯持ち材	85	アカマツ。皮付き。底面３方向より加工。
92	209(Nu115)	1次D地区	0.1面	H-15-2	12次P41,35-イ	柱根	(35.2)	—	19.8～21.0	芯持ち材		皮付き。
93	277(Nu48)	1次D地区	0.1面	H-16-2	12次P90	柱根	(58.6)	—	20.1～30.0	芯持ち材		底面２方向より加工。
94	288(Nu93)	1次D地区	0.1面	G-17-2	12次P98	柱根	(58.3)	—	13.9～17.4	芯持ち材		皮付き。底面２方向より加工。
95	239(Nu79)	1次D地区	0.1面	I-17	12次P22	柱根	(35.8)	—	15.2～27.5	芯持ち材		側加工。
178-211	特１	2次D地区	I面	G-16	23次SE1	漆器椀	28.7	20.6	厚2.4	辺材	1	ニヨウマツ製。両面漆塗。4 mmの方形孔。
212	26	2次D地区	0.1面	G-16	23次SE1	漆器椀	口径14.6	器高9.1	底径7.8	横木どり	34	ブナ製。全面黒色漆、朱色文様。
213	27	2次D地区	0.1面	G-16	23次SE1	有孔鳴円形板	16.7	—	厚0.8	板目どり	13	ヒノキ。黒色漆状付着物、木取孔５ヶ所、中央に長方形孔（1.5～X0.6cm）、縦溝ヤ。
214	243(38)	2次D地区	下面(0.1面)	G-17	2次SE2,方形土坑	板状木製品	(13.1)	(6.2)	厚1.3	辺材		白形。
215	24	1次D地区	0.1面	G-15-4	1次SK3	漆器椀	口径9.8	器高2.6	底径6.2	横木どり	11	ケヤキ。黒色漆、外面朱色文様
216	25	1次D地区	0.1面	I-16-2	1次SD1	漆器椀	—	器高2.1	底径5.6	横木どり	12	ブナ製。全面黒色漆、内面朱色文様。底部外底刻書「×」
217	117-1	1次D地区	0.1面	I-16-3	1次SD1	梳状木製品	(29.6)		径5.7	芯持ち材		先端1/4未加工。つぶれる。
218	65	1次D地区	0.1面	J-16	1次SD1	側ヶもの容器	12.1	5.8	厚4.2	辺材	19	アカマツ。内径5.8X10.2×2.6cm
179-219	31	1次D地区	0.1面	I-16-2	1次SD1	曲げ物容器底板	(36.5)	(6.2)	厚1.0	辺材	49	サワラ。目刺、刀子痕
220	117-2	1次D地区	0.1面	I-16～2	1次SD1	梳状木製品	(57.8)		径6.1	芯持ち材		先端1/4未加工。つぶれる。
221	248(43)	2次D地区	下面	F-17	北端部ちぶ入	柄付刺由か物容器底板	(27.8)	—	厚0.8	辺材		有孔。
222	247B	2次D地区	下面	F-17-1	北端部ちぶ入	人形			板目どり	267		ヒノキ。
223	16	2次D地区	0.1面	G-17-2	有灰色砂一明茶色粗砂	漆器椀	—	器高(2.2)	底径5.4	横木どり		黒色漆、朱色文様、赤部外面刺書「#」
224	20	1次D地区	0.1面	H-17-1	包含層	漆器皿	口径9.3	器高(2.6)	底径5.3	横木どり	7	ブナ製。黒色漆、朱色文様
225	251(26)	2次D地区	下面	G-17	包含層	加工材	8.2	1.9	厚1.5	辺材		ロクロ挽きの材を切断。
226	39	1次D地区	0.1面	F-17-2・4	包含層(中世盛地土)	円形板	7.7	—	厚0.5	板目どり	52	ヒノキ。中央の円孔径0.6cm
227	47	1次D地区	0.1面	G-17-2	整地土	円形板	16.1	—	厚0.7	辺材	55	ヒノキ。縦倉側書
228	136	1次D地区	0.1面	H-16-3	包含層(鳴出面)	円形板	復元径26.4	—	0.6	辺材	60	アカマツ。柄付形孔１ヶ所
229	151(Nu62)	1次D地区	0.1面	I-16-2	にせ12次SD1	加工材	11.1	—	9.4～9.9	芯持ち材		アカマツ。上面は田心円状の丸太加工。底面２方向より割る加工。

第36表　第１・２次調査Ｄ地区第０・Ｉ面出土木製品観察表

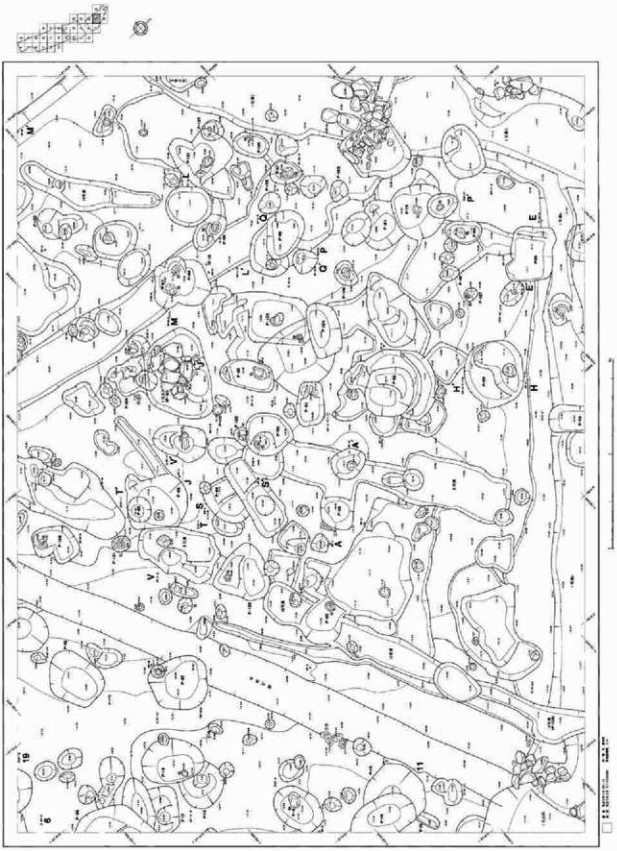
第180図　第１次調査Ｄ地区遺構平面図１（Ｓ＝1/80）



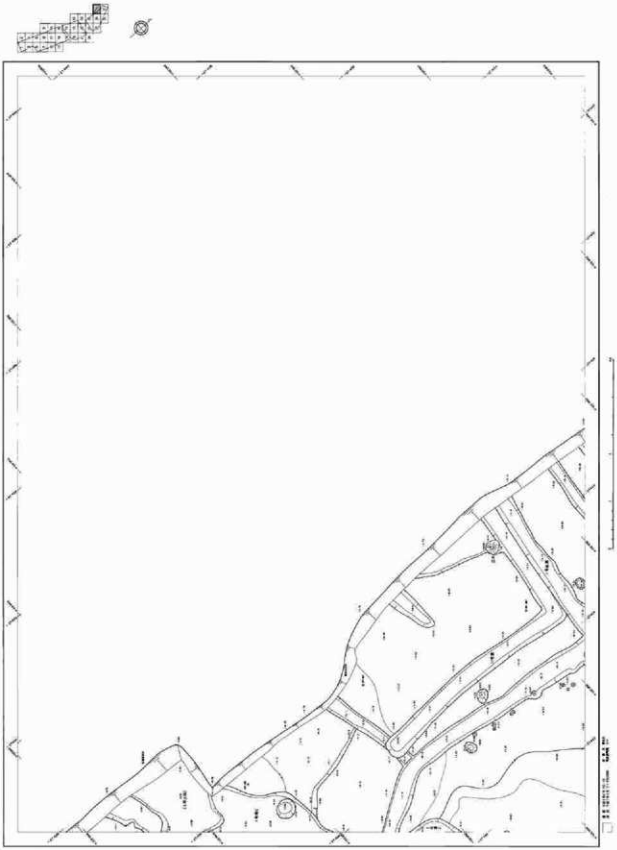
第181図　第１次調査Ｄ地区遺構平面図２（Ｓ＝1/80）



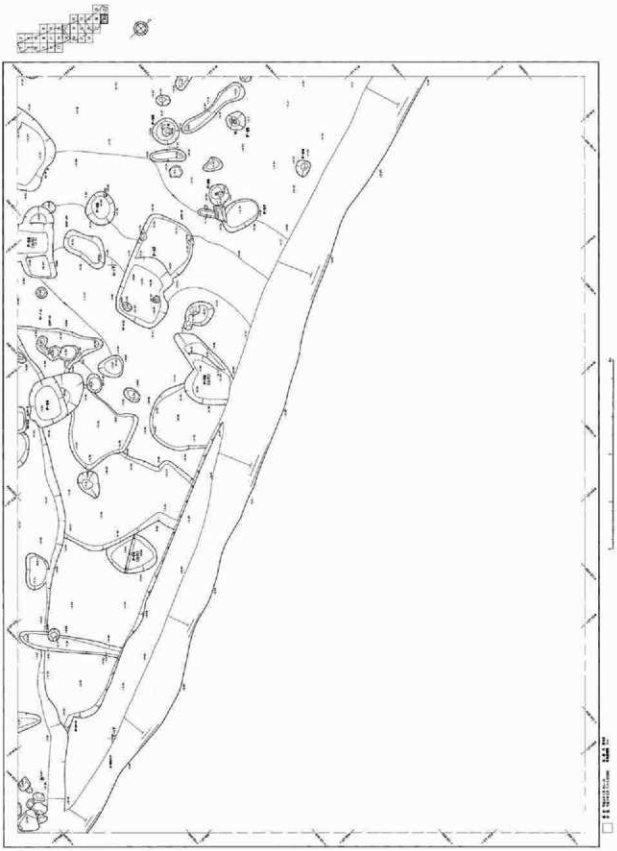
第182図　第1次調査D地区遺構平面図3（S＝1/80）



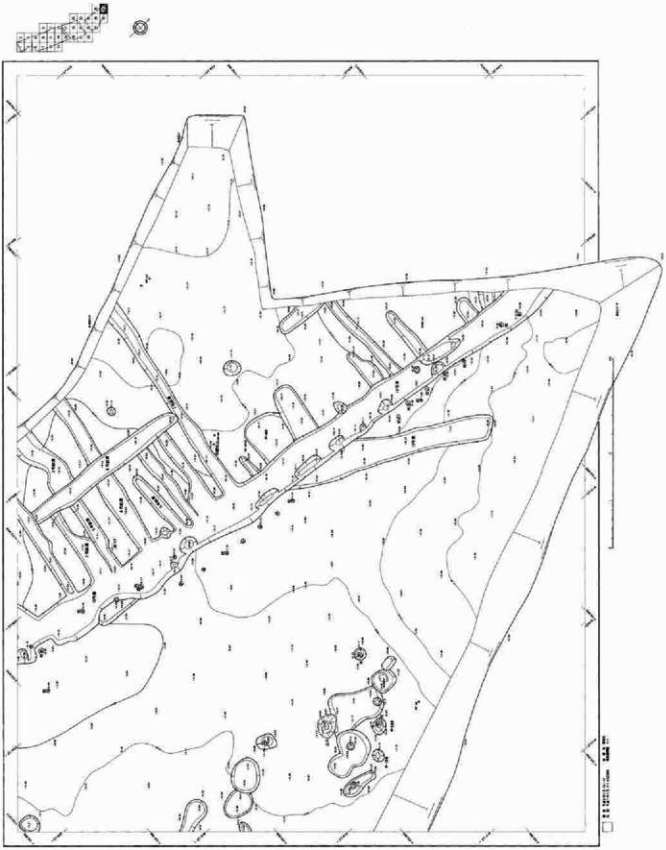
第183図　第１次調査Ｄ地区遺構平面図４（Ｓ＝1/80）



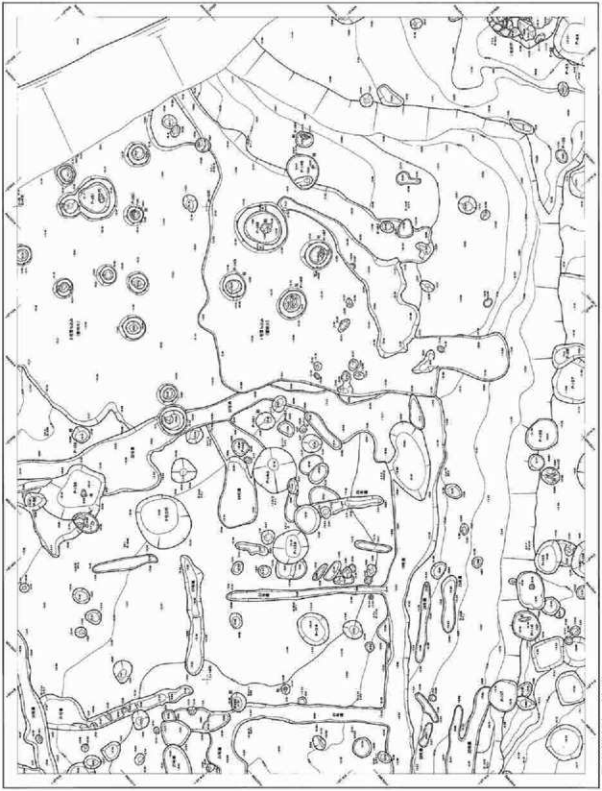
第184図　第１次調査Ｄ地区遺構平面図５（Ｓ＝1/80）



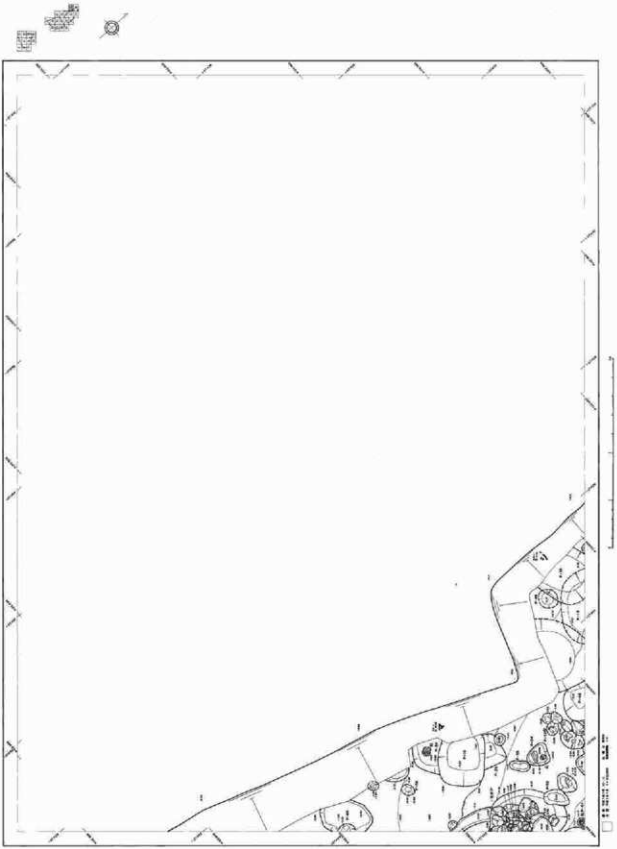
第185図　第１次調査Ｄ地区遺構平面図６（Ｓ＝1/80）



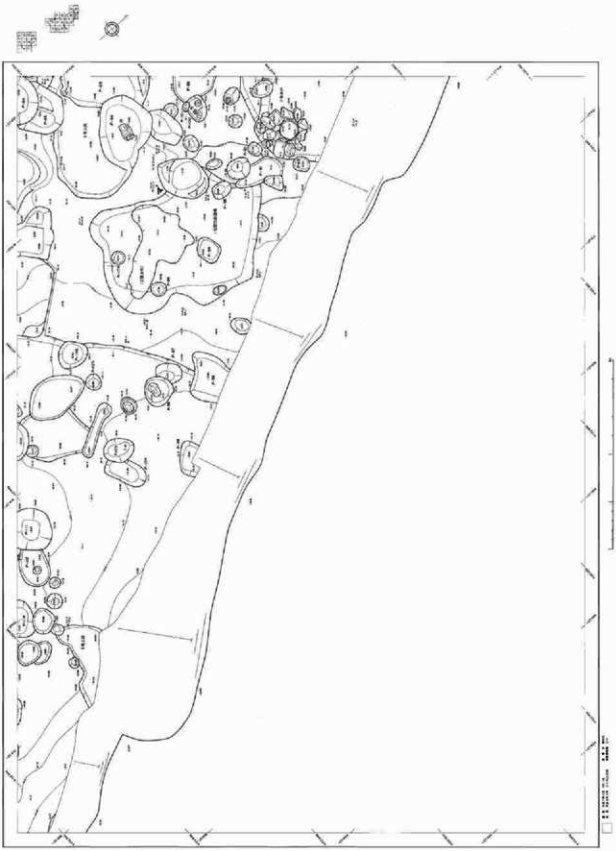
第186図　第1次調査D地区遺構平面図7（S＝1/80）



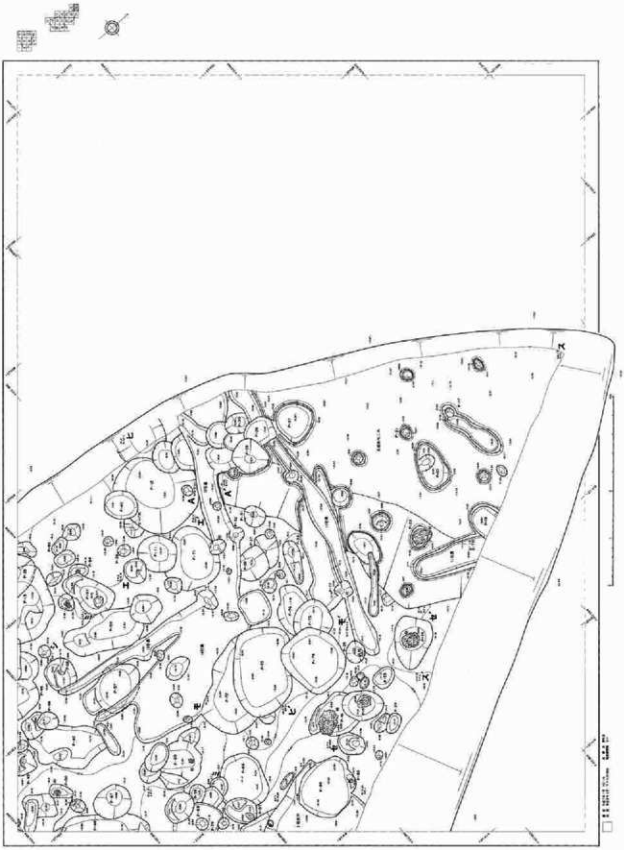
第187図　第２次調査Ｄ地区遺構平面図１（Ｓ＝1/80）



第188図　第2次調査D地区遺構平面図2（S＝1/80）



第189図　第２次調査Ｄ地区遺構平面図３（Ｓ＝1/80）



第190図　第２次調査Ｄ地区遺構平面図４（Ｓ＝1/80）

第6章　ま　と　め

四柳白山下遺跡は、第２章で触れたとおり７ヵ年、延べ45,900㎡が調査されている。本書はその発掘調査報告書第１冊目にあたり、ＡからＫ地区まであるうちのＡ・Ｂ地区と、Ｃ・Ｄ地区の上層部分の報告となる。本章では、Ａ・Ｂ地区の古代集落とＣ・Ｄ地区の中世集落に関して現時点での所見を記し、本書のまとめとしたい。

第１節　古代の土器について

１．時間的な位置付け

第１次調査Ａ・Ｂ地区は、７世紀後半～９世紀中葉に営まれた集落遺跡であり、その盛衰を考える前提として、須恵器供膳具について概観を行う。本遺跡出土の須恵器は、胎土の肉眼観察では、大部分が鳥屋窯跡群に属する特徴をもつ。この鳥屋窯跡群は古代能登地方の須恵器生産の中核的窯跡群であるが、窯跡の把握及び編年的研究は進んでいないのが実状である。そのため、以下では出土土器の特徴から当遺跡出土土器を大きく４期（Ａ～Ｄ期）に時期区分する。

Ａ期　本地区の古代遺物のうち、退化した内面返りをもつ第51図坏蓋231、242、口径約９㎝を測る第85図坏538等を最古とし、扁平で口径約15㎝以上を測る第21図有台坏89までの幅を１時期に設定した。遺物の出土数は、比較的少ないものの、継続的に定量の出土をみることから、本地区の胎動期といえる。最古の一群は鳥屋窯跡群春木黍谷窯Ｇ区平坦面、羽咋窯跡群タンワリ１号窯に、最も新しい一群は鳥屋末坂Ａ地点窯に、それぞれ並行し、田嶋明人氏の北陸地方の須恵器編年（田嶋1988）でいえば、Ⅱ１期～Ⅲ期にあたる。なお、当期のみ海綿骨片を含むことから、羽咋窯跡群産と考えられる須恵器が少量確認できる。

Ｂ期　有蓋有台坏・無台坏とも前時期の後半以来の扁平な１法量を維持しつつ、法量縮小が進んだ段階を設定した。遺物出土量の急増から、本地区の盛期といえる。山笠形の坏蓋は、口径14～15㎝前半台を測り、第13図７のような扁平な大型鈕を特徴とする。有台坏は、口径13～14㎝台を測り、第93図633のように肉厚につくるものが多い。無台坏は、口径13～14㎝台を測り、第95図675のように体下部は丸味をもって仕上げる。鳥屋窯跡群末坂ハセタンＢ地点窯、ハセタンＥ地点窯、高松・押水窯跡群正友ヤチヤマ窯跡出土資料に並行する部分が多く、田嶋明人氏編年Ⅳ１期に位置づけられる。

Ｃ期　有蓋有台坏・無台坏とも主体をなすものは扁平な器形を維持し、Ｂ期より一層の法量の縮小が進むとともに、深身器種が少数定着する段階を想定した。遺物出土量は、Ｂ期に遜色なく、盛期を継続したものと考えられる。坏蓋は山笠形に加え、平笠状を呈する個体があり、口径は12～13㎝台を測る。第13図９のように比較的小振りなボタン状鈕を付す場合が多い。有台坏は、口径12㎝台まで縮小し、器高は３㎝台に加え、４㎝台が定量存在する。無台坏は、口径12㎝台を中心とし、平底を呈する器形が定量見受けられる。鳥屋窯跡群末坂ハセタンＡ２号窯、また古い様相を呈するものは高松・押水窯跡群若緑３号窯資料と並行する部分が多く、田嶋明人氏編年Ⅳ２期に中心をもつ。

Ｄ期　下層遺構群の最終段階と、土石流の後に成立する中層遺構の存続期が主体となる。鳥屋窯跡群池崎窯跡と並行する部分を含み、田嶋明人氏編年Ⅴ期を中心にし、Ⅵ１期を下限とする。

２．墨　書　土　器

墨書土器については、Ｂ期以降に25種類以上の文字が確認できる（第37表）。Ｂ・Ｃ期は施設・人名に関連する文字を中心に多種の文字であるのに対し、Ｄ期は比較的少数の施設に関連する文字及び吉祥句的要素が強い文字に転換する。

「乙上」は、Ｂ・Ｃ期に中心をもち、Ｄ期の古い段階まで継続的に出土する。県内に出土例はなく、本遺跡では羽咋市教育委員会第１次調査区でも出土しており、本遺跡に特徴的な文字の一つである。「田地一」はＣ期に１点のみ確認できる。この「田地」は、昭和23年の耕地整理時に近辺の水田から「田地」「田地八十」が出土した他、羽咋市教委調査区、第２次以降の県調査区でも定量出土することから、本遺跡の特徴的な文字の一つといえる。

施設等に関連する文字は、「上家」「下家」「青家」「屋東」「寺」「左□□」がある。Ｂ期に特定建物を指す「下家」が出現、Ｃ期に「上家」「下家」「屋東」と種類が増加し、Ｄ期には「青家」の他、より大きな施設単位を示す「左□□」「寺」が認められる。Ｂ期に「下家」（及び対となる「上家」？）と呼ばれる施設が成立、Ｃ期に施設が拡充したとも考えられる。Ｄ期の古い段階に属する「左□□」の２文字目は庄と判読可能であり、本地区の性格を考える上で注目したい。「寺」は、調査区に近接して、いわゆる村落内寺院が存在した可能性が高く、体側部に「日」と記する25や752、753等の仏器的器種、灯明痕をもつ618等の出土も関連遺物として理解できる。Ｃ・Ｄ期に出土する「槻野」は、70・103が「一」、19が「二」と墨書されることから、施設に関連する文字の可能性をもつ。Ｃ期を中心に出土する「大海」は羽咋郡に属した「大海郷」ではなく、現在の邑知潟または人名との関連を考えたい。

	A	B	C	D	
「乙上」		35.6.511.596.636	3.4.505.652	611	
「□(乙か)上」			627.692		
「□上」				708	
「田地一」			344		
「上」			695		
「上家」			704		
「下家」		503	689		
「青家」				65	
「青」			711	94	
「□(青か)」			16		
「屋□(東か)」			643		
「屋東」			709		
「寺」				29	
				672	
「左□□」			88		
「槻野」			103	19	
				70	
「大海」			608.609	(658)	
「上」			332.687		
「大」		64			
「日」				25	
「大成」		503			
「万呂」		370			
「若枝」				616	
「忍人」		647			
「小足」			343		
「足女」			327		
「小庭」		693			
「□□(刀自か)」	不明				
「吉祥」				363	
「□(吉か)」				22	
「満」				149	
「十」(道)		576			
「十」				694	
転用硯		140.435.531.574.590	10.58.96.180.182.220.326.340.451.588.600.605.648.659	324.325.366.618.522.625	219.288.519.611.621
灯明痕					618

第37表　Ａ・Ｂ地区出土文字資料一覧

Ｂ期に出土する「大」は、全国で普遍的に出土する文字である。

人名に関連する文字は、Ｂ期に「大成」「万呂」「忍人」「小庭」が、Ｃ期に「小足」「足女」、Ｄ期に「若枝」が確認でき、Ｂ期に偏在する傾向をもつ。うち、「万呂」「忍人」は、羽咋市教委調査区でも確認できる文字である。「吉継」「満」等の吉祥的要素の強い文字は、Ｄ期以降に点在する。また、転用硯はＢ～Ｄ期を通じて定量存在する。

なお、墨書土器の使用復元のために、土器と文字の摩耗具合から、文字記入後の使用頻度の検討が有効と考えるが、今後の課題としたい。

第２節　Ａ・Ｂ地区の古代集落について

１．検　出　層　位

古代の集落跡を構成していた遺構は、掘立柱建物跡25棟、竪穴建物跡３棟、井戸１基、道路状遺構、宅地の区画溝、耕作に伴う小溝群などである。調査区の広さは約1,700㎡を測る。検出層位は、旧土

壌層とベース層にわかれており、旧土壌層は古代遺物包含層である暗灰褐色・濁灰褐色の砂質土で、Ａ地区西壁断面の10層（第７図）や、Ｂ地区北東壁断面の14層（第８図）が相当し、その下位がベース層となる。調査は、中層と下層の２段階で行われ、中層が旧土壌層上部、下層がそのベース層上面を検出面としているが、共に、同一の旧土壌層を生活面としており、連続する遺構群として認識することができる。ただ、本地区では、旧土壌層内において、部分的ではあるがＡ地区とＢ地区の双方に整地土が存在している。そのため層位的に整地前と整地以後の２段階に分離可能であり、整地土上で確認された遺構を中層遺構群、整地土除去後に確認された遺構を下層遺構群として区分することができた。なお、整地土分布地点以外では、旧土壌層の上面を中層遺構群、その下のベース面を下層遺構群と呼称している。

２．掘立柱建物跡の検討

掘立柱建物跡は25棟が検出・復元されている。柱穴は他にも多数存在し、今後の検討により掘立柱建物跡が増加する可能性があるが、以下では、現状における集落跡の検討として、主要な遺構である掘立柱建物跡の分布、形状、面積、主軸方位、建物の廃絶・重複の状況についての整理を行い、その変遷を試案してみたい。

分布　掘立柱建物跡の分布は、SD16やSD21・23など調査区で南北に伸びる溝を挟んで、西側にまとまる群（西群：SB１～SB13）と調査区北東にまとまる群（東群：SB14～SB25）の大きく２群に分かれる。他の遺構との関係では、西群では掘立柱建物跡が区画溝を伴う状況が比較的多く認められるのに対し、東群では掘立柱建物跡が区画溝と対応している状況が認めにくいという特徴を示す。

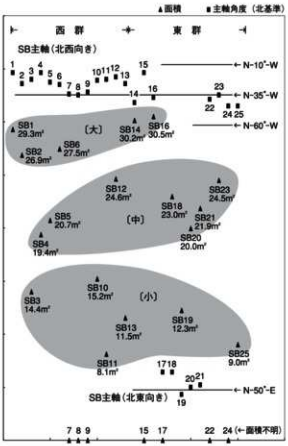
形状　掘立柱建物跡の形状は側柱式の掘立柱建物跡として検出・復元されている。明瞭な総柱建物跡は確認されなかった。柱間数については、推測部分を含めざるを得ないものがあるものの、１間×１間（SB25）、２間×１間（SB11・SB19）、２間×２間（SB３・SB５・SB10・SB13）、３間×１間（SB18）、３間×２間（SB４？・SB12・SB20・SB21・SB23）、３間×３間（SB１・SB６）、４間×３間（SB２・SB14・SB16）となり、かなりバラツキを見せる（第９表）。使用された柱は、遺存していた柱根から、主として径約10㎝前後のものが多用されており、最小で６㎝幅、最大で20㎝幅のものもあった。柱穴底面には柱が地面に沈んだ際に残されたと見られる沈降痕跡が、25棟中８棟で確認されている。

面積　建物の面積は、概ね３つのクラスに分類可能であり、遺跡の中で小・中・大と分けるならば、８㎡から15㎡までの小型、19㎡から25㎡までの中型なもの、26㎡以上31㎡までの大型なものとなる（第38表）。これに、柱間数をあわせると、小型には１間×１間・２間×１間・２間×２間の建物跡、中型には２間×２間・３間×１間・３間×２間、大型には３間×３間・４間×３間のものが対応する。２間×２間のものが小型・中型にそれぞれ分散するものの、その他は概ね柱間数の増加が面積の増加に対応しているものと見てよい。

主軸方位　掘立柱建物跡の主軸方位は、N-45°-W から N-14°-W を向く建物跡（北西向き）と N-43°-E から N-64°-E を向く建物跡（北東向き）の大きく２群に分けられる。棟数では北東向きの群が５棟で、その他の19棟は北西向きであり、圧倒的に北西向きの建物跡が多い。分布群ごとに見てみると、西群は13棟全てが北西向き、東群は北西向きが７棟、北東向きが５棟となり、群により主軸方位の組成に顕著な違いを示す。また、北西向きの建物跡についても、西群では N-10°-W から N-35°-W を向き、東群では N-14°-W を向く SB15を除いて、６棟が N-35°-W から N-45°-W を向いており、西群より東群のほうがやや西に振った方向を向く（第38表）。

主軸方位と規模や面積との相関は、北東向きの建物跡には大規模なものがないと認められるものの、他に目立った相関はないようである。

建物の廃絶　建物廃絶後に柱を抜き取った際の抜取り痕は15棟で確認された。分布群ごとにみると、東群では４棟、西群では11棟で抜取りの痕跡が認められる。西群ではほとんどの掘立柱建物跡で、柱全てではないものの、柱の抜取りが行われていたことを示している。抜取り後の遺物埋納や埋戻しの方法については、西群で、SB１において須恵器短頸壺と礫（Ｐ１）、漆器椀と礫（Ｐ２）の埋納が確認されており、東群には見られない廃絶儀礼を窺わせる。そして抜取り穴の埋戻しに際しても、東群が周辺の土を用いるか（SB15・16・17・18・19）、もしくは粘土（SB14）や粘土を混ぜた土（SB14・20・21・22・23・24）で丁寧に埋戻すのに対して、西群では、粘土と共に礫を用いて埋戻しを行う事例が顕著（SB１・４・６）であり、埋戻しの方法にも分布群ごとに差異を指摘しうる。



第38表　掘立柱建物跡の面積と主軸方向

遺構の重複　西群はSD１とSD21などからなる方形の区画内に掘立柱建物跡が集中して分布し、建物跡同士では最大４回の重複（SB６・SB７・SB８・SB９）が認められることから、少なくとも４期以上の変遷が想定される。一方、東群は、宅地を区画する溝と思われるものとしてSD28やSD27があるものの、その内部に作られる建物跡は少なく、大部分は区画溝を伴わない状態で分布している。建物跡同士の重複数は最大で４回を数えることから（SBT２・SBT３・SB20・SB21）、東群同様西群でも４期以上の変遷が想定されることとなる。

３．集落の変遷案（第39表、第191図）

掘立柱建物跡が主体となって構成される集落跡では、遺構に伴って出土する遺物が少ないことから、その変遷を辿ることが困難である。そしてそのような場合、僅かに出土する出土土器の比定時期を鑑みつつ、主軸方位や規模の組み合わせなどから同時期の遺構群を求める方法が一般的にとられている。

本遺跡のＡ・Ｂ地区の場合、掘立柱建物跡群が比較的まとまりを持って分布し、遺構同士の重複が著しいという特徴を持つ。そして時期的にも連続していることが出土遺物の検討から窺える。また、第４章での記載に基づくならば、西群と東群それぞれには整地土が確認され（Ａ地区整地土、Ｂ地区整地土）、整地土の上下で、掘立柱建物跡を中層と下層に分離することが可能であり、その他の遺構に関しても、重複地点における相対的な前後関係に関する所見が多数記載されている。よって、これらの所見をもとにすれば、ある程度遺跡の形成過程を反映した集落の変遷案が示せるのではないかと考える。

遺構の重複地点においては、直接的な遺構同士の切り合い関係がある場合と、切り合い関係を持たずに重複する場合がある。まずは当然だが、遺構同士で切り合い関係がある場合はその前後関係を遺

構の前後関係として時期的に前後に置かれるものとして取り扱うこととした。また、切り合い関係がないものについては、新旧が不明ながら、時期的な前後関係にはあるものと認識することで、周辺の溝や土坑などの遺構分布と軸、遺物の時期などを合わせて検討し、より適当な時期に位置づけることを試みた。掘立柱建物跡同士があまりにも近接する場合も同様である。以下に各期の内容を記す。

１期　西群にはSB８とSB９、東群にはSB19とSBT２・SBT３があると想定した。西群のSB８とSB９、東群のSBT２とSBT３は重複しており、１期を１a期と１b期の新古に分けている。西群のSB８は下層遺構群に属し、A地区SD33・SD36に前出する。SB８の柱穴からは比較的新しいD期の遺物が出土しており下層でも新しい時期に属する可能性を考えたが、SD36に前出すること、２期のSB６とも重複することから、当期におさめた。SB９は時期を比定する積極的な状況証拠はないが、SB８とほぼ同一地点での建て替えと見られるため当期とした。竪穴建物跡SBT２は比較的古めのB期の須恵器が出土することから下層でも早い時期になると思われることと、SB19主軸方位との共通性から１b期とし、それに切られるSBT３を１a期とした。SB19は、SB18やB地区SD28と重複しつつそれらに前出することにより１期の遺構と理解した。西群と東群の間には両者を結ぶかのような溝B地区SD25とSD26がある。この溝は、当地区で切り合い的にみて最も古いものとなっている。

２期　西群にはSB３とその区画溝と思われるA地区SD22・23・24・42、SB６と区画溝A地区SD25・55の2箇所の宅地があり、東群ではSB18があると想定した。

SB３は下層遺構群の区画溝であるA地区SD５・21よりも前出し、SB６には同じくA地区SD２とSD36に前出することから、整地によって区画溝が埋められる直前の時期（４期）から２時期前に位置づけた。SB18は下層の中ではB地区SD28と重複するものの切り合い関係にはなく、その時期的な位置付けは流動的である。

３期　西群にはSB２と周囲の区画溝A地区SD１・21・36b・54と、その南側にある耕作に伴うと見られる小溝群が分布し、東群にはSB24・25とSD28、その間にB地区SD21が東西両群を画しつつ南北にのびて分布すると想定した。西群の区画溝群は、切り合いでは、同じく下層遺構群に含まれる

第39表　A・B地区古代集落跡遺構群の重複関係と変遷案（↑は調査時の新旧関係）

4期のSD2・4に前出しており当期に位置づけられると思われる。SB2はこの区画溝群によって形成される略長方形の区画内におさまっており、B地区SD21はA地区SD1に接続していることから一体のものとして位置づけられよう。

耕作関連の小溝群は溝の幅や溝同士の間隔から概ね2時期に区分され、また、基幹用水とされるA地区SD5とも前後関係を有している。A地区SD5は4期のA地区SD4と方向を同じくしていることから4期の遺構とし、耕作地関連とみられる小溝群についてはA地区SD5にほぼ直行することから時期的に近接関係にあるものと考えた。A地区SD5と切り合い関係を有して前出する小溝群SD8・10・11・13・15・19・20などを3期、切り合い関係を有しない小溝群SD9・12・17・20bなどを4期に位置づけておきたい。東群では、下層遺構群のSB24・SB25を想定しているが、これらについては下層内での時期比定を行う根拠となる情報が少なく、遺構分布の上からは1期から3期に想定可能である。B地区SD28やB地区SD41などの区画溝は、出土した須恵器にB期・C期のものがあることから当期に位置づけられる可能性がある。

4期　西群には区画溝であるA地区SD2・4とその区画におさまるSB10・SB7があると想定した。面積的に中型・小型のセットとなるSB12・SB13も、SB12が下層遺構群であることや、SB13がB地区SD21に後出することから、当期とするのがもっともおさまりがよい。

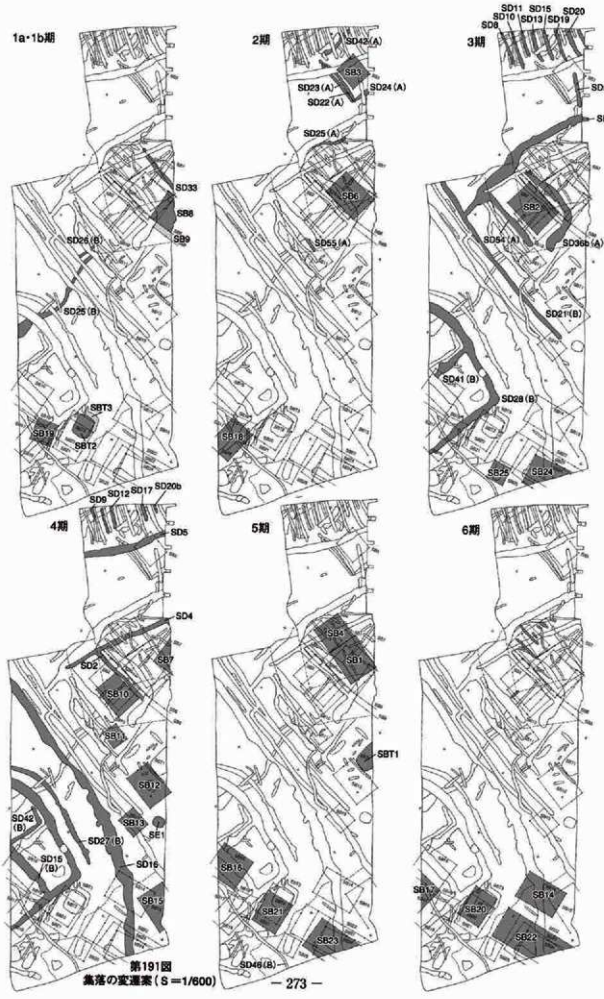
区画溝SD2・4については、切り合いの情報から、下層遺構群のなかで最も新しい段階に位置づけられていることが時期想定の根拠となっている。ただし、SB10はSD2との間に切り合いの前後関係を有しているので、時期差が存在する可能性もあり、SB10と、そのセットになるSB11については、位置付けが流動的とならざるを得ない。他に井戸SE1からは比較的新しいD期の須恵器が出土していることから、当時期に組成される可能性が高い。西群の南側には、SD4と基幹用水溝であるSD5の間に空閑地が広がり、SD5にほぼ直行する上述の耕作関連の小溝群が展開する。

東群の区画溝では、B地区SD15やSD42などからD期に比定される須恵器が出土しており、下層遺構群の中では新しい時期に位置づけられるものと思われる。また、B地区SD28についてはB地区SD15と接続していることから、3期に続き4期でも機能していた可能性を考えておきたい。B地区SD27もB地区SD28に平行していることから一連の遺構と考えられ、幅約1.5mを測る溝の間を道路、溝を道路側溝とすることができよう。B地区SD16は、洪水等による土層で埋没しており、下層遺構群→土砂の堆積→整地→中層遺構群という変遷過程の中では、整地直前の土砂堆積段階であり、下層の最終段階である4期とするのが妥当と思われる。

5期　西群では整地作業が行われ（A地区整地土）、区画溝が整地により埋め戻されて火処が作られる。この火処と重複しない中層遺構群のSB4を5期とし、4期SB12の宅地に作られる中層遺構群の竪穴建物SBT1も当期のものと想定した。ただSB4には一部重複しながらSB1が隣接しており、火処がSB1に付随する施設である可能性も指摘されている（第4章参照）。よってここでは、SB1とSB4を一連のものとして、とりあえず5期のものとして扱っておきたい。

東群でも整地作業（B地区整地土）の後に掘立柱建物SB22・SB23がつくられる。これらは重複しているが切り合い関係は持たないため前後関係が不明であり、その順序は不明とせざるを得ない。その南側には、SB20・SB21とSB16・SB17がある。ともに重複し前後関係が指摘されていることから、前出するSB21、SB16を当期のものと想定したい。

6期　東群にSB22・SB14とSB17、SB20を想定した。西群では5期のSB5の柱穴P32はSB4柱穴P33と切り合い関係にある。SB5が後出するため当期に位置づけられる可能性があるが、一方ではSB5とSD36bとの切り合いでSD36bよりも古いという所見もあるため時期不明としておく。



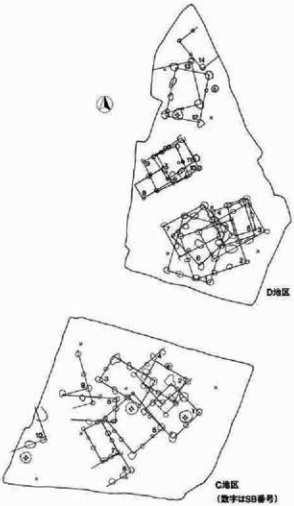
第191図
集落の変遷案（S＝1/600）

SB4やSB5には、小溝群A地区SD27・29・30・39などが重複しているのでこれらが当期に位置づけられる可能性があろう。東群では、5期の掘立柱建物跡と重複しつつ後出するSB17・SB20が分布し、SB20と軸をそろえるSB22にSB14が伴うと考えた。

以上、調査時の所見をもとに遺構群の変遷案を示した。出土遺物から本章第1節の須恵器の時期比定をあてはめるならば、集落1期がA期、集落2期がB期、集落3期がC期、集落4期がC～D期、集落5・6期がD期以降となると思われる。しかし、遺構の時期比定の根拠については少数の土器が存在するのみで、その多くを遺構の重複関係における相対的な前後関係と分布上での御振りに依拠している以上、試案の域を出るものではない。今後周辺地区で同時期集落の検討を進めていく上での叩き台となればと思う。

第2節　中　　世

C・D地区第Ⅰ面では24棟の掘立柱建物跡、7基の井戸などを検出した。掘立柱建物跡の復元案は検討を要するものもあるが、これを前提としてまとめを記す。屋敷地割は不明であるため、掘立柱建物跡を方位軸により分類すると、N-9～15°-Eの1群（D地区SB1・12）、N-69～79°-Eの2群（C地区SB9・10、D地区SB2・4・5・13）、N-27～32°-Eの3群（C地区SB2・3）、N-52～60°-Eの4群（C地区SB6・7、D地区SB3・7・8・9・10・11）、N-37～50°-Eの5群（C地区SB1・4・5、D地区SB6・14）に分かれる。軸が近似する事実は、群内の建物がある程度時期的なまとまりを有する可能性を示唆しており、仮に集落の営続期間が14世紀後半～16世紀前半の200年間とすると、単純計算で1群40年、その中で1、2回の建て替えを行っているため1棟につき10～20年の使用となる。実際には建物として復元し得なかった柱穴が多数あるため、かなり短期間に建て替えが行われたことになる。短絡的であるが主軸と時期を結びつけると、切り合いや柱穴出土遺物から、1群は15世紀後半以降、2群は15世紀後半、3・4群は14世紀後半～15世紀代、5群は15世紀前半という大まかな年代が与えられるものの、その年代観と出土遺物が矛盾する掘立柱建物も一部含まれる問題を残す。井戸については遺跡によるところも大きいが、



第192図　C・D地区第Ⅰ面掘立柱建物・井戸配置図
（S＝1/600）

一般的な傾向としては中世前期の井戸は建物数に比して少数基なのに対し、中世後期になると建物１棟につき１基に近い高比率で検出される遺跡が増加する。こうした傾向と照らし合わせると、本遺跡は建物棟数に比して井戸数は少なく、せいぜい各群に１、２基の比率にすぎない。７基のうち４基が15世紀後半以降に使用されたと推定できることから、15世紀後半以降に井戸数が増加していった可能性もある。近隣の大町ダイジングウ遺跡や谷内ブンガヤチ遺跡では多数の井戸が検出されているが、遺跡の中心時期が本遺跡よりもやや新しいことはそのことを傍証しているかもしれない。

次に出土陶磁器を概観する。Ｃ・Ｄ地区の出土遺物の８～９割は古代の遺物であり、中世陶磁器が第０・Ⅰ面合わせて総破片数800点という数は延べ面積で1,900㎡弱にしては少ない。基本的には中世後期の遺物群であるが、一部に下層に存在する中世前期の遺物が混ざっており、第２次Ｄ地区第Ⅰ面ではそれが顕著である。また、第０面と第Ⅰ面の分離は不可能であったため、第０・Ⅰ面を区別せず数えた。

貿易陶磁では青磁碗が最も多く、白磁坏がそれに次ぐ。青磁は端反り碗など15世紀代の製品が主体であり、白磁坏も同時期の遺物である。線描き蓮弁の青磁碗や白磁端反り皿など16世紀代に盛行するタイプは認められなかった。青花も小片が３点と少ない。

瀬戸・美濃は総破片数では貿易陶磁と拮抗するが、供膳具に限ると貿易陶磁の半数以下であり、非常に少ない。古瀬戸中期に遡る一部の製品を除くと古瀬戸後Ⅳ期の製品が多く、大窯段階の製品はわずかである。貿易陶磁、瀬戸・美濃合わせても供膳具は少なく、漆器椀・皿が主体的に使用されていたと推測される。

種類＼地区	1次C地区 第０・Ⅰ面	1次D地区 第０・Ⅰ面	2次地D区 第Ⅰ面	全体
貿易陶磁	9(3.7)	19(6.1)	10(4.2)	38(4.8)
青磁	5	11	7	23
碗	3	11	4	18
皿	0	0	0	0
盤	0	0	3	3
その他	2	0	0	2
白磁	2	6	3	11
碗	0	0	1	1
皿	0	2	0	2
坏	2	4	2	8
青白磁	1	0	0	1
碗	1	0	0	1
青花	1	2	0	3
碗	1	0	0	1
坏	0	2	0	2
瀬戸・美濃焼	3(1.2)	6(1.9)	25(10.4)	34(4.2)
古瀬戸	0	4	25	29
平碗	0	0	1	1
天目碗	0	1	3	4
皿	0	0	1	1
卸皿	0	1	1	2
折縁深皿	0	0	1	1
香炉	0	0	5	5
瓶子	0	0	11	11
花瓶	0	2	0	2
その他	0	0	2	2
大窯	3	2	0	5
皿	2	1	0	3
その他	1	1	0	2
無釉陶器	88(35.6)	120(38.4)	79(32.9)	287(35.9)
珠洲焼	67	109	72	248
甕	22	43	30	95
壺	10	21	9	40
鉢	35	45	33	113
越前焼	20	11	6	37
甕	19	0	2	21
鉢	1	11	4	16
愛器系(能登産)	1	0	1	2
甕	1	0	1	2
土師器	145(58.7)	166(53.0)	126(52.5)	437(54.6)
在地皿	98	82	96	276
京都系皿	47	84	30	161
瓦質土器	2(0.8)	2(0.6)	0	4(0.5)
火鉢	1	2	0	3
花瓶	1	0	0	1
各地区計	247	313	240	800

縦破片数、（ ）内は%

第40表　Ｃ・Ｄ地区中世陶磁器集計表

主に貯蔵・調理具を担う無釉陶器は珠洲焼が大半を占め、中でも片口鉢が多い。片口鉢はⅣ～Ⅵ期に位置づけられる製品を確認しており、Ⅴ・Ⅵ期の製品が主体を成す。越前焼は37点を数えたが、甕の大半は同一個体とみられる破片であり、個体数としては少ない。甕・鉢ともに一部16世紀に降る可能性をもつものがあるが15世紀後半の製品が多い。

土師器皿は胎土、作りから在地と京都系に分類した。在地は強いナデにより腰部が屈曲するタイプと丸底タイプが主体を成し、主に前者が14世紀後半、後者が15世紀代の製品と考えている。後者には器壁、特に底部の厚い個体が少数見受けられ、それらが16世紀に降る可能性を持ってはいるものの、多くは15世紀代に収まるものであろう。京都系は内面の凹線や凸圏線が明瞭でないものが多く、時期を決定する決め手に欠ける。貿易陶磁、瀬戸・美濃、無釉陶器、いずれをとっても中心は15世紀代であり、16世紀代の遺物が激減している状況を鑑みると、京都系は最も新しい共伴遺物である珠洲焼Ⅵ期の片口鉢の使用期間を考えても16世紀第１四半期を下限とする製品の可能性が高い。なお、在地と京都系の比率が第１次Ｄ地区で１：１、第２次Ｄ地区で３：１と大きく異なるのは、第２次Ｄ地区は

	谷内ブンガヤチ遺跡	永光寺遺跡	三引遺跡	小川新遺跡	木越光琳寺遺跡
貿易陶磁	111(5.0)	58(5.3)	93(1.4)	99(11.9)	365(6.6)
瀬戸・美濃	92(4.2)	81(7.4)	49(0.7)	30(3.6)	328(6.0)
無釉陶器	1,086(49.4)	391(35.9)	1,864(27.6)	416(49.8)	1,591(29.0)
土師器	898(40.9)	553(50.8)	4,727(69.9)	286(34.3)	3,147(57.3)
瓦質土器	11(0.5)	6(0.6)	29(0.4)	3(0.4)	62(1.1)
合計	2,198	1,089	6,762	834	5,493

点数(%)

第41表　主要遺跡陶磁器組成

第０面を第１次で調査したため、その分が第１次Ｄ地区に上乗せされた結果である。

組成比率を15～16世紀代を中心とする能登の他遺跡と比較すると、谷内ブンガヤチ遺跡とは貿易陶磁、瀬戸・美濃、瓦質土器の比率が類似するが、無釉陶器と土師器皿の比率が異なる。これは谷内ブンガヤチ遺跡では数個体の越前焼大甕が破片となって多く出土していることが一因とみられる。永光寺遺跡と比較すると今度は瀬戸・美濃の比率を除いてよく似ている。瀬戸・美濃は総数の三分の一以上を占める天目茶碗の多さが比率を押し上げており、曹洞宗系寺院の僧坊施設付近という遺跡の性格を反映している。生活の必需品である他の項目については非常によく似ていること、中世前期を中心とする三引遺跡の組成とは大きく異なることから、中能登地域の15・16世紀の傾向が示されているのではないかと考える。第41表には15～16世紀代を中心とする加賀地域の２遺跡も参考として掲載した。小川新遺跡の組成比は県内でも特異な事例であり、異なるのは当然とも言えるが、一方、標準的な組成と言える木越光琳寺遺跡とは比較的類似している。

以上、組成としては県内の中世後期に一般的な比率を逸脱するものではなく、近接する寺院関連の永光寺遺跡に類似するが、出土点数の僅少さ、高級陶磁器の不所持、嗜好用品の少なさ等の点からＣ・Ｄ地区の中世後期は、一般的な農村集落であったと推定する。

引用参考文献

石川県教育委員会　1992 『石川県遺跡地図』

今井淳一　1988 『永光寺遺跡』永光寺川荒廃砂防工事に伴う緊急発掘調査報告書　羽咋市教育委員会

今井淳一ほか　1990・91・93 『四柳白山下遺跡』Ⅰ～Ⅲ　羽咋市教育委員会

岩瀬由美　1998 「第７章第３節　出土陶磁器類の組成について」『石川県金沢市木越光琳寺遺跡』一般県道向粟崎安江町線道路改良工事に係る埋蔵文化財発掘調査報告書　石川県立埋蔵文化財センター　140-142頁

岡本恭一　1995 『曽祢Ｃ遺跡』 ㈶石川県埋蔵文化財保存協会

垣内光次郎　1990 「中世北陸の暖房文化」『石川考古学研究会々誌』第33号　石川考古学研究会

角川日本地名大辞典編纂委員会　1981 『角川　日本地名大辞典17 石川県』 角川書店

川畑　誠　1992 「第５章第１節１．中世陶磁器類についての若干の検討」『小川』県営ほ場整備事業宮保地区に係る発掘調査報告書　石川県立埋蔵文化財センター　101-104頁

川畑　誠・安　英樹　1994 『正友ヤチヤマ窯跡』 石川県立埋蔵文化財センター

木立雅朗ほか　1995 『末坂ハセタンＡ・Ｂ遺跡』 鳥屋町教育委員会

㈶石川県埋蔵文化財センター　1999～2001 『石川県埋蔵文化財情報』第１～６号

㈶石川県埋蔵文化財保存協会　1995～1998 『社団法人石川県埋蔵文化財保存協会年報』６(平成６年度)～９(平成９年度)

田嶋明人　1988 「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム　北陸の古代土器研究の現状と課題』 石川考古学研究会・北陸古代土器研究会

土屋宣雄・安　英樹　1999 『鹿島町御祖遺跡群』 ㈶石川県埋蔵文化財センター

栃木英道・滝川重徳　1995 『谷内・杉谷遺跡群』 石川県立埋蔵文化財センター

中島俊一　1995 『大町遺跡　小金森ヘイナイメ遺跡』 石川県立埋蔵文化財センター

羽　咋　市　1973 『羽咋市史』原始・古代編

林　大智　2000 「大町ダイジングウ遺跡」『石川県埋蔵文化財情報　第４号』 財団法人石川県埋蔵文化財センター

福島正実・宮下栄仁　1982 『柳田タンワリ１号窯跡』 石川県立埋蔵文化財センター

藤澤良祐　1996 「中世瀬戸窯の動態」『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界～その生産と流通』財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター設立５周年記念シンポジウム資料集　㈶瀬戸市埋蔵文化財センター

北陸古代土器研究会　1993 『北陸古代土器研究』第３号

北陸古代土器研究会　1994 『北陸古代土器研究』第４号

安中玲美　2003 「第13章　まとめ」『田鶴浜町三引遺跡(上層編２)』 一般国道470号線(能越自動車道)改良工事及び主要地方道氷見田鶴浜線建設工事に係る埋蔵文化財緊急発掘調査報告書(Ⅴ)石川県教育委員会・㈶石川県埋蔵文化財センター　166-168頁

吉岡康暢　1994 『中世須恵器の研究』 吉川弘文館

若林喜三郎監修　1991 「石川県の地名」『日本歴史地名大系』第17巻　平凡社